
陛下と私

桂木翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陛下と私

【Nコード】

N7539R

【作者名】

桂木翠

【あらすじ】

『陛下』と異世界トリップした『私』の攻防のお話。元気な女の子が妄想を武器に頑張ります。【R15】 うさんがーでん
<http://usanko.com/> 桂木翠本人による投稿
です。

【必読】 『陛下と私』 を初めてご覧になる方へ（前書き）

『陛下と私』 (R15) をご覧になる前に、以下の注意書きをご覧ください。

【必読】 『陛下と私』 を初めてご覧になる方へ

あまり煩わしい事を申し上げたくはないのですが、苦情・要望等々の件数がある為、

『陛下と私』をご覧下さる前に、以下の注意書きを一一読下さるようお願い申し上げます。

ご注意点

『陛下と私』には以下の内容が含まれますので、以下について苦手な方はご注意ください。

また『陛下と私』をご覧下さった時点で、ご了解頂けたものと判断させて頂きます。

以下についての苦情等々は受け付けませんのでご了承下さい。

- 1) 下ネタ
- 2) 下品ネタ
- 3) エロネタ
- 4) 排泄ネタ
- 5) ポーイズラブネタ（『陛下と私』は男女の恋愛が主軸であり、あるひとつの話にネタとして発生するだけです。以下にこの件の詳細が有ります）
- 6) 残酷・残虐描写

1～5に關しましては、ネタの域を出ていないと思っております。

5は今後予定するあるひとつの話にBLネタが発生する予定です

す。

話の本筋に影響する話として組んでしまいましたので、申し訳ございませんが外せません。

B1ネタ自体は、上記に申し上げました通り、あくまでネタの域を出ませんし、直接的な描写もしないつもりです。

ですが少しでも匂わせる事に御不快に感じる方は必ずおられると思いますので、この話の冒頭には注意書きと、

また回避ページを作成致します。

回避ページには、この話をご覧くださいさらなくても大丈夫なように抑えて頂きたい要点を必ず記載致します。

冒頭の注意書き、回避ページの作成、以上2点を必ずお約束するという事でご了承下さい。

尚、『陛下と私』は男女の恋愛が主軸の話であり、

『陛下』の設定には一切関係のないものですので、その点はお安心頂ければと存じます。

6に關しましてですが、『陛下と私』は前半の雰囲気とは一転、

あくまで当サイト基準ではないのですが、

後半にシリアス展開を予定しております。

その際、ご覧下さる方によっては『残酷』『残虐』と感ぜられる描写があるかもしれません。

その点も予めご了承下さい。

また、シリアス展開部分の話では、回避ページの作成は申し訳ございませんが長すぎて出来ません。

ご要望について

『陛下と私』に關しまして基本的にご要望は受け付けておりませんのでご理解下さい。

現時点で主に以下のようなご要望が定期的に寄せられておりますが全てお断りしております。

- ・下ネタを外して書き直しして欲しい
- ・主人公の人物設定を変えて書き直しして欲しい
- ・話をこつという展開にして欲しい

最後に

以上になりますが、『陛下と私』は様々な方面に些か耐性が必要とされる話になるかもしれません。

上記の点をご理解ご了承頂けるようでございましたら、頑張りますので、『陛下と私』をどうぞ宜しくお願い致します。

2009/10

桂木翠

【必読】 『陛下と私』 を初めてご覧になる方へ（後書き）

注意書きをご覧ください、ありがとうございました。

人物紹介

1. 陛下と私の異世界もの談義 時点

… 私

半年後に卒業を控えている日本の女子高生

… 陛下

トリエス王国 国王陛下

… ヘロルドさん

陛下に仕えるロマンスグレー

(ヘロルド＝ブロンザルト)

… パーシヴァル様

乙女に絶賛大人気中のゲーム『愛と絶望の黒薔薇魔帝国物語』の魔
皇帝パーシヴァル

『私』の心の中の唯一絶対神

2・陛下と私と珍獣保護法 時点

… バルツアーさん

トリエス王国 法務長官・子爵

(アルノルト＝バルツアー)

… リーザ

『私』付き侍女

(リーザ＝ブランド)

… ラードルフさん

トリエス王国 第三騎士団 団長

(ラードルフ＝ベッケラート)

… 加藤

『私』が日本で通っていた学校の生徒会長で貧乳判定を下した人物。

話の本筋にはどうでもよい人。

6・陛下と私と秘密の小部屋・前編 時点

∴ 千夏ちゃん

『私』の日本での親友

エカップの爆乳美乳娘

∴ ヘルミーネ

『私』付き侍女

花の妖精その一

∴ ルイーゼ

『私』付き侍女

花の妖精その二

：： アニ

城の針子

男悩殺系美女・爆乳・姐さん

7・陛下と私と秘密の小部屋・後編 時点

：： ウオちゃん

珍獣三号

日本の特別天然記念物オオサンショウウオに似ていて、シヨッキン
グピンク地にライトグリーンの斑紋という派手な蛍光色の色彩を持
つ。

：： デイルクさん

『私』付き護衛

(デイルク＝ブランド)

…… ガイードさん

陛下付き護衛

(ガイード＝バルテル)

…… ルドルフさん

トリエス王国 宰相閣下

(ルドルフ＝エーヴァハルト)

…… コーエンさん

トリエス王国 第二衛兵隊衛兵 後に解雇 チワワ

(コーエン＝バーレ)

…… 一葉ちゃん

五千円日本銀行券の樋口一葉

五千円札の一葉ちゃんとしてキャラクター化しております。実際の人物とは勿論一切関係はございません。

… 諭吉・英世

一万円日本銀行券の福沢諭吉・千円日本銀行券の野口英世
各々キャラクター化しております。実際の人物とは一切関係はご
ざいませぬ。

8・陛下と私の奇妙な生活 時点

… ヴィルフリートさん

トリエス王国 第一騎士団 団長・アツヒエンヴァル公爵家嫡男・
カーティス伯爵

(ヴィルフリート＝アツヒエンヴァル)

… フェルテンさん

トリエス王国 第一騎士団 副団長
(フェルテン＝ビシヨフ)

∴ ローラ & ロツテ
王城ヴィネリンス使用人 双子
貧乳同盟メンバー

∴ 花依 はなこ

『私』の妹

未来の日本格闘技界女王が夢。

∴ 滋岳 しげおが さん

ママの昔からのお友達（女性）

『私』にマツサージを教えてくれた人で、お中元・お歳暮でゼリーを贈ってくれる人

∴ 蘆屋 あしや さん

ママの昔からのお友達（男性）

パパに出会うまで結婚を約束していた人で、お中元・お歳暮で高級フルーツを贈ってくれる人

9・陛下と私と愛の儀式 時点

… ゼルマさん

陛下付きだか『私』付きだかイマイチよく判らない侍女
(ゼルマ⇨ボーム)

… イエルクさん

トリエス王国 王室専属細工師
(イエルク⇨ボイムラー)

… 妖子ちゃん

『私』の日本の学校の友達
周囲が不思議と黒く見える女の子

「……………」

一瞬自分が置かれたこの状況が把握出来なかったとしても、それは私のせいでは絶対ない……と思う。

私の右手には、数分前にコンビニで買った生温かいアメリカンドック。

ケチャップ、マスタード付き。

左手には、これまた数分前に購入した物品が幾つか入っているコンビニ袋と学校の鞆。

私は何とも煌びやかな部屋の中央の、我が家のキッチン、ダイニング、リビングを繋げて入らなそうな長い食卓用テーブルの上の端に居て、足はワイングラスを薙ぎ倒し、尻にはどうやら肉の乗った皿を敷いている。

肉の汁だかソースだかはパンツの布地を通過して肌に何とも言えない温もりと不快感を伝えるし、短めの制服のスカートは盛大に捲り上がり、そこから見える開いた大腿の間からは、太めの美味しそうなソーセージらしきものが。

なんとなく笑えない。

そして目の前には、今までテレビでも映画でも肉眼でもお目にかかった事のない見事な黄金の髪に、アメジストをそのまま嵌め込んだような混じり気のない澄んだ紫色の瞳の男。

二十代半ばと予想。

つーか、誰、何処、そういった当たり前の疑問が頭を過るけど、

私の口から出た無意識下の第一声は全く違うものだった。

「うわ、CGで完璧なものを作ってみました、っていう感じの人だね。すごいや」

「……しーじー？」

目の前の男は私の言葉に眉をひそめる。

それさえも絵になるような彼は、両手にナイフとフォークを持っていた。

「あ、うんと、なんか説明が面倒臭いから省くんだけど、まあ、あれよ、あれ。肩に届く届かないかの髪が二十四金で作った糸みたいだし、サラサラストレートだし？ 瞳がね、宝石みたいっていうか。ある意味、理想の色彩っていうの？ んでもって、睫毛長いしさあ。顔の造作も『これぞ理想の超美形モデル』っつーくらい整っているっていうか。そういう意味なんだけど……。あ、お食事中だった？

「ごめんね……？」

とりあえず私は謝ってみる。

いや、謝った方がいいと、尻の下の肉が言っていた。

あと、ソーセージも。

「……いや」

「しかし本当すごいね。私の心の中の“リア友には絶対秘密のラヴラヴランキング”で現在最上位の、今、乙女に絶賛大人気中のゲーム『愛と絶望の黒薔薇魔帝国物語』の魔皇帝パーシヴァル様と争えるんじゃないかなあ？」

「……」

「彼、もうホントいいのよ。元はね、すごくい人だったの。生まれてすぐに戦争孤児になっちゃって。餓えと理不尽な暴力に耐えつつも、がんばって生きてまっすぐに育って。生きるために、剣の腕を磨いて強くなっていつて、その腕で弱い立場の人たちを助けていたの。もう聖人君子。それでもって、貴方どんな血を引いたのよ?! っていうくらいサラサラの長い銀髪に、動脈切って噴き出した血のような真紅の瞳が印象的な超絶美形でね。その超絶美形で柔

らしく微笑んじゃって、乙女の理想を体現したかのような王子様ばりの人だったの。もう一発で恋に堕ちそうな。っーか私は堕ちた！
がっつり堕ちただけどね！ でも、運命の悪戯ね。彼、血を吐く思いで辛い試練を乗り越えて、とある国を助けたんだけど、結局事が終わったら、手酷い裏切りにあってね。しかも大切な人を残虐で不名誉で屈辱的な方法で殺されたの。それも目の前で。だから全てに絶望して人間を呪ってね。だんだん狂っていったの。そんな時自分の出生の真実を知ったの。彼、母親は人間だったんだけど、父親が魔族だったの。後は、狂気の中で人と世界に復讐する為に、もう暴走。魔族の頂点に立って、世界征服ならぬ世界滅亡の為に全力を注いだんだけど、これがさー、もう最高にかっこよくてね。いい人の時も素敵だったんだけど、狂気に染まった彼なんて、存在自体が危うくて、ヤバくて、放っておけないの。狂気に逝っちゃった瞳も最高に魅力的で、いい人だった頃と逝っちゃった頃のギャップもまた萌えるっつーか。乙女のハートをきゅんきゅんに掴んじゃうっつていうか……で、まあそれはいいとして、すみません。お聞きしたいんですが、質問しても宜しいでしょうか？」

私は初対面の人に相対する常識として敬語を使うことにした。
突然の出来事に混乱して思わず妄想を垂れ流してしまったとはいえ、そろそろ無理矢理にでも収束させて礼儀を取り戻さないと失礼にも程がある。

私はパパとママにそういう躰らしきものを受けている……と一応は思っていた。

既にいろいろと遅いかもしれないが。
目の前の素晴らしきイケメンの彼は、先ほど眉をひそめたまま、その表情を全く変えていないので何となく聞きにくい雰囲気だった
が仕方ない。

部屋には彼の他にも男女数人ほど人が居たが、誰も彼も口と目を全開に開いたまま硬直しているし、何より、誰よりも近い彼を無視して遠くの人に話しかけるのも不自然だ、……と私的に思うし。

そんなことをつらつら考えながら彼を見ていたら、そのイケメン君はやはり表情を変えないまま「なんだ」と言った。

「あのー……、私、塾帰りにコンビニ寄って、アメリカンドック食べながら家に帰る途中だったと認識しているんですが、……ここは何処でしょうか？」

私は首を傾げながら質問を投げた。

手にしていたアメリカンドックからケチャップが垂れそうだったので、ペロリと舐めてみる。

ああ、オナカ空いていたんだっけ。

ケチャップが妙に美味い。

「……トリエス王国の王城内だ」

一発目の短い彼の声を聞いてもしかやと思ったが、淡々と教えてくれるイケメン君の声は、予想を裏切らない美声だった。

全く不快にならない低めの声が彼に色気をふんだんに与えているが、彼はきつと意識してもいないだろうし、気づいてもいないだろう。

眉間にある皺がそう語っている。

「とりえすおうこく、おうじょうない？」

「ああ」

「とりえすというのは、国名ですか？」

「王国だと称しているのだから、少なくとも国名だろうよ。たぶんな」

イケメン君の声に投げやり気味な感じが少し出てくる。

彼は手にしていたナイフとフォークをテーブルの上に放り投げるように置くと、なんともゴージャスな細工のある背もたれに体を深く預けた。

「おうじょうないって？」

イケメン君は溜息をついた。

ちよつと感じが悪い気がするの、私の気のせいではないはずだ。何だ、コイツ。

イケメンだからって、調子に乗るとは何事だ。

お前なんか説教部屋に連行だ！ と超強気な事を思っているのは
小心な私の心の中だけです、はい。

「トリエス国王の居城だと思っぞ。王国の中心のはずだ」

「お。それはすごいですね」

「そうか？」

「なんかだんだん異世界トリップものの王道を踏襲してきているよ
うな気がしてきました」

「異世界とりっぷもの？」

「はい。私が生まれ育った国の小説やマンガという読み物にですね、
異世界トリップものというのがあるんです。ああ、似たようなもの
では異世界召喚ものですね。日本という国、ご存じですか？」

「にほん？ 知らんな」

「じゃあ、アメリカやロシアや中国、うーん……、ローマやフラン
ク王国あたりとか……」

イケメン君は軽く息を吐いた。

「知らん」

「失礼ですが、貴方の頭の中の世界地図知識や世界情勢的知識、歴
史的知識は、如何ほどのものですか？ それなりにありますか？」

「……あると思うが？」

「あー…じゃあもうこの時点で私にとって此処は異世界確定です。

私の世界では、私が生まれ育った日本の存在を知らない人って、あ
んまり居ないと思うんですよね。領土は小さめなんですけど、経済
力や技術力が結構あって、それなりの大国なんですよ。確か今現在
の人口は、一億二千万だか三千万人くらいで、皇紀でいうなら二千
六百年を超えているような古い国なんです。この間、神社にオミク
ジ引きに行ったら、その建物にポスターみたいなのが貼ってあっ
て偶然知ったんですけど……。それに万が一、日本を知らない人が
居たとしても、アメリカやロシアあたりを知らない人は居ないと思
うんですよね。他の可能性を考えて、タイムトリップだとしても、

ローマを知らないとかもなあ。此処、部屋や貴方の服装を見る限り、王侯貴族時代の昔のヨーロッパっぽいし。私も世界史詳しくはないので大雑把で勝手な判断なんですけどね。私自身もトリエス王国とか聞いたことありませんし。……あ、もしトリエス王国が小国なら私の世界知識レベルでは知らない可能性は大なんですけど。

まあそんな訳で、異世界トリップものってというのは、自分の世界から他の世界に何らか原因か偶然で突然行ってしまつて、『きゃーどろしよう！ 元の世界に帰りたいけど帰る術を知らない。判らないつか帰れないかもしれない！ 私、どうしたらいいの?!』って感じで右往左往する物語の事なんです」

「……ほう」

「ちなみに念の為お尋ねしておきたいんですが、私を何らかの必要に迫られた避けられない緊急的理由により召喚したとかは……ないですよ？」

ここにきてイケメン君は少し表情を変えた。
不可解といった表情だ。

「召喚？ こちらが何らかの方法で招き寄せたという事か？」

「はい、そうです」

答えながらも私は少し赤面する。

これはちよつと恥ずかしい質問なのだ。

なんていったつて、自分が“特別な存在だから呼ばれたのでは”と聞いているのだ。

私はこれを平然と質問できる程、心臓に毛が生えている訳でもないし、自分自身の身の程というのも良く知っている。

なんとなく身の置き所を失って私がモジモジしていると、彼は色気むんむんの美声で質問をしてきた。

彼が耳元で囁いたら、きつと大抵の女性は墮ちるんじゃないだろうか。

まったく罪人である、なんて私は恥ずかしい気持ちを隠すために、勝手なことを考えて心の上書きをしていた。

「どのような理由により召喚などするんだ？」

イケメン君は最もな疑問を口にした。

私はそれに答えようと殆どが機能停止していそうな記憶力の悪い脳内を漁りだす。

「うーん…。例えばですね、異世界召喚ものだと大抵、いくつかのパターンがあるんですよ」

「ほう。そのパターンとは、どういった？」

「実は伝説の巫女だった。異世界の王族の姫君だった。勇者だった、魔王だった、女神だったとか、あとはうーん……。ああ、異世界の女を妻に迎えなければならぬ決まりがあるとか、誤召喚だったというのもありますね。とりあえず無難なのを召喚してみた、っていうのもあったかな」

「多いな。ではまず伝説の巫女というのは、どういった話だ」

「え、解説するんですか？」

私は驚いた。

この人、なに長々とこの会話をしようとしているんだろう。ものすごく疑問だ。

そんな私の反応を特に気にする風でもなく　　確実に気づいているようなのに　　彼は顎をくいと動かして私に先を促す。

なんだかもう超偉そう。

「うーん…。そうですねー、巫女話っていつでもいろいろあるんですけど、例えばだいたい召喚をしようとする世界って、何かしらの危機に直面しているんですよ。魔王や魔族が襲ってきているとか、邪神が復活するとか、世界そのものが滅ぼうとしているとか」

「国が存亡の危機に直面しているとかか？」

「そうです。貴方も妄想数値が高そうですね。こういった話にはその数値、結構重要なんですよ」

「……妄想数値、か。はじめて言われたな」

イケメン君は、ふうん、といった感じで椅子の肘掛け部分に肘を乗せ、頬杖をつく。

それだけの動作ですら絵になつてしまふイケメン度に、なんだか意味もなくイラついてきたが、それは彼のせいでは決してない。単なる私の外見的コンプレックスからくる一方的嫉妬だけである。

私の場合は見苦しく見える事はあつても絵になる事は絶対ないからだ。

ああ悲しいつたらない。

「で?」

「え?」

「話の続きだ」

「ああ……それですね、その危機的状況に陥っている国家が集団か個人の王族やら魔術師やら神官やらに召喚されるんです、伝説の救世主的巫女として。勇者召喚の場合も、こんな感じですかね」

「どうやって?」

「え、それは魔法陣かなにか書いて魔法で召喚が一般的なんじゃないですか? 私もよく判らないけど……」

「魔法は一般的なのか?」

「私がいた世界では物語の中でしか存在していませんよ……っついていうか、この世界はどうなんです? 魔法かなにかあつて、私を元の世界に帰すような手段は貴方の脳裏に掠めませんか?」

「全く掠めないな。この世界でも魔法は物語の中でしか存在しないと余は思っているが、どうかな。おい、ヘロルド」

「よ?」

私の疑問形を華麗に無視し、イケメン君は彼の右後方の部屋の壁近くに控えていたロマンスグレーを高圧的ともいえる声音で呼びつけた。

ロマンスグレーはその声にびくりと肩を震わせ、どうやら先程から続いていたと思われる硬直は解けたようだ。

目を数度瞬いて、優雅ともいえる静かな動作でイケメン君の近くに歩み寄る。

私の方には何もいえないといったような視線をちらりと寄こしてきたが、それは一瞬だけだった。
「何でございましょう、陛下」

あいたたたたたた……。

痛い。

痛すぎる。

ヤバイ、陛下と来たよ。

益々、王道を踏襲してしまっている。

せめて殿下くらいにしておいて欲しかった。

私の心臓の為に！

私は手にしていたアメリカンドックを、被害を免れたパンが鎮座している小皿の上に乗せ、コンビニ袋と鞆を脇に置いて、蟀谷（こめかみ）に手をあてた。

この際、視界もシャットダウンだ。

あー…どうしようかな。

全く人生って悩みが尽きない。

少なくとも私の現況の悩みは、数時間前、塾の前に寄った家電量販店で、『愛と絶望の黒薔薇魔帝国物語2（魔皇帝復活愛憎編）』の初回特典スペシャルドラマCD付き本体同梱版予約を断られたところから始まっているのだ。

同梱の本体がパーシヴァル様仕様だったのにである！

あ、はい。

基本的にオタ属性、且つ、引き籠り属性です、私。

リア友には必死に隠してますけれども。

そんな現状にはどうでもよいことを薄っすら現実逃避気味に考え

ていた私を余所に、イケメン君、もとい、陛下とへロルドさんは会話を始めた。

「へロルド、この世界に魔法があると聞いた事はあるか？」

「……いえ、私は耳にした事はございません」

「では、世界が滅亡の危機に瀕している、この国が亡国の危険に晒されている、邪神復活、魔王、魔族が攻めてきている、といった事は？」

「いえ、それもございません。各国、争う事は多々ありましても世界滅亡までとは……。この国も同様です。それに、邪神、魔王、魔族も神話や物語の域を出た存在ではないと認識しております」

「成程。それでは、この異世界人らしき者を召喚したという話は聞いた事があるか？ 余のところには話は上がってきていないし、指示も出した記憶も無いが」

「私も聞いた記憶がございません。そもそも陛下がご存じでいらっしやらない異世界人召喚という大事を、私めが知っているはずがございません」

「……だそうだ。これでお前の先程の『緊急的理由で召喚したとかは』の疑問に答えられたか？ ああ、そうそう、我が国には異世界人の女を妻にしなければならぬという決まりも今まで耳にした事が無いし、王族に行方不明の姫も居ないと一応追加で言っておく。

おい、異世界人。お前、何をしている？ 話を聞いているのか？」

両蟀谷（こめかみ）にぐりぐり中指を押し当てて現実逃避の為に目を閉じていた私に、陛下が怪訝そうな声を出した。

目を開くと、アメジストな瞳に不愉快そうな光が過る。

あ、ごめんなさい。

怒らないでください。

私は慌てて陛下に日本人特有の、とりあえず笑みを浮かべてみる、を実行する。

もつとりあえず笑っておけ。

少なくとも空気はこれ以上悪くならない……と思うが、どうだろうか。

「聞いていますよ、陛下？であつてますか？　へロルドさんとおっしゃるそちらの方が陛下と呼んでいるという事は、国王なんですよ、やっぱり」

「そうだな。一応、国王という地位にはついていてみたいだな」
なんか答え方が捻くれていると思うのは気のせいだろうか。

「というか、小馬鹿にされている感じがな。
くそう。」

「そこへなおれ！！」

「この私が小一時間懇々と懇切丁寧に説法してやる。」

土下座だ、腿にコンクリのブロック五個乗せてやるから覚悟しろ、それとも有刺鉄線で亀甲縛りか？　ん？　……なんて勿論言えませんよ？

とりあえず私、怖いもの知らずでは無いんです。

長いモノには張り切つて巻かれちゃいます。

もう巻き巻きです。

「簀巻き状態どんと来いです。」

「そうですかー……」

「声に力が無くなったな」

「えー…そうですか？　うーん、そうかもしれないね。だって、もう異世界トリップ確定の、トリップ先が一国の国王の元で面倒臭いルートだし、帰還方法皆無フラグ立ったら力も抜けますって。流石に泣きそうですよ」

「余の元は面倒臭いルートなのか」

陛下は少し面白そうな顔をした。

面白そうっていつても、意地悪そうな雰囲気の面白そうね。

「いやーな感じの。」

「ああ……不幸フラグも立ちそうだな。」

「厄年って何時だっけ？」

女は確か、十九で一度来るな。

あ……来年？

あれ、数え年だったけ？

どちらにせよ、前厄か本厄じゃないか。

しまったなあ。

この間、オミクジ引きに行った時、厄被いしてもらった。

もう最大級の厄が発動しちゃったじゃないか。

私は溜息をつきながら、陛下に教えてあげた。

「面倒も面倒ですよ。異世界トリップものの国王ルートは、無理矢理正妃コース、拒否不可側室コース、何らかの身勝手な理由による拉致監禁コース、メイドコース人格無視強制労働編、メイドコースいびられ性処理用凌辱強姦編か、無一文で城外放り出し放置プレイコース野垂れ死に編、無一文で城外放り出し放置プレイコース売春宿行き編、奴隷降格家畜以下扱い通告コースに、最悪、牢獄ぶち込まれ処刑コースギロチン編、牢獄ぶち込まれ処刑コース獄吏による輪姦獄死編ですもん。ちなみに理想は、城に客人待遇コースです。衣食住保障の放り出し放置プレイ無し、無理強い投獄無し、基本的人権保障有りなやつです。あーでも何よりせめて陛下じゃなくて殿下クラスだったらまだマシだったんですけどね……。しかも第一王子じゃなくて、第三以降の。王位継承権から遠ければ遠いほど理想的です。あ、ちなみに王弟殿下ルートはダメです。面倒度は下手すると国王ルート以上かもしれません。必ずとわかっていい程、王位継承権がらみの王子殺害編か、王位篡奪の陰謀暗躍政争内紛国王暗殺編に巻き込まれますからね、あれは」

陛下が小さく噴き出した。

あれ、この人、笑うんだね。

とりあえず不機嫌よりマシだから良しとしよう。

私の今後の為にも、彼の機嫌を損ねる訳にはいかない。

別にウケ狙いで言った訳じゃ全然ないんだけどね。

まあいいや。

つか、へロルドさん。

なんですか、その未確認生命体Xを前にしたような信じられないモノを見るような目は。

止めてください。

ロマンズグレーにそんな風に見られたら流石に傷つきます。

一応、私、傷つきやすいお年頃なんですよね、これでも。

まだギリ十代学生ですから。

高校卒業はまだ半年後ですから！

「幾多のルートがあつて素晴らしい限りではないか、余の元は。そうだな、余も王弟殿下ルートとやらは避けたいものだ。隣の小国がこのほど見事にそれを実行して今や内戦にまで発展しそうな醜態を演じていてな？ 我が国としては黙って見て見ぬふりをしておれば良いのか、向こうは侵略して欲しいのか判別がつかず余としても悩んでいるところだ。異世界人、その辺りどう思う？ お前が余ならどう動く？」

「陛下」

へロルドさんが静かな声で明らかに陛下を諫める。

おお、出来た臣下だね。

そうそう、国王が突然現れたアヤシイ 自分でいつててめげ
そうだが 異世界人の私のような者に聞くような内容ではない
もんね。

間違つた言動行動をした主君に勇氣を持って諫める事ができるなんて、なんて良い臣下なんだろう。

幸せ者だね、陛下。

ところでへロルドさんは、どういう立場の人なんだろう？

なんとなく執事っぽいんだよね。

爺的雰囲気というか。

へロルドというよりセバスチャンという名前が似合いそう……なんて、すごく偏った私の思い込みです、ごめんなさい、へロルドさん。

心の中で謝ります。

そんなヘロルドさんの諫めも、壮絶に偉そうな　　偉いんだけど
ど　　陛下の前ではやはりというか何というか、あまり意味を成
さなかったようだ。

陛下は片手を少し上げてヘロルドさんを制する。

コンプレックス持ちの私には、嫌味にしかみえない宝石みたいな
紫の瞳に、挑発の色を滲ませているのを私は見た。

見たぞ！！

見たんだからな！！

よし、その挑発買った。

買い申した。

受けて立ってやる。

後で吠え面かくなよ、陛下め。

けけけ……なんて、何の挑発を買ったんだか自分でもよく判らな
い。

陛下は私の意見なんて聞いて面白いんだろうか。

……面白いんだろうな、小馬鹿にしてるみたいだし。

私の考えなんて参考にすらならないもんね。

完全なる部外者だしね。

「ただ聞いてみたいだけだ、ヘロルド。異世界人は、どう考えるも
のなのかな。……まあ、この小娘が異世界人の平均的思考を保有
しているかどうかは甚だ疑問だが。で、どう動く、異世界の小娘。
お前に責任は皆無なのだから自由に申してよいぞ」

陛下、異世界人に小娘オプシオンを付けたな。

くそう………はじめに名乗らなかった私も大概だけど、陛下も名前
を聞こうともしないところを見ると私は人外扱いかもしれないな。

まあ陛下の世界の人ではないけどな。

うん、私が陛下の世界の人ではないように、もちろん私はこの世
界の人には全く関係がない。

今のところね。

だから陛下の言う通り、責任は皆無のはずだ。

日本の事だったら、いち国民として例え実行力も影響力も無くとも無責任な事は口にしたくはないけれど、ここは異世界。

私にとつて、今のところ所詮異世界なのだ。

正直、知人の一人も居ないこの世界では、かなりの上から目線の神様目線で非情な事も言えてしまう。

それこそゲームの攻略法のように。

この世界の命の重さがイマイチ感じられてないしね、今の私には、無責任にも正直に言つて本当にいいんでしょうか？」

「そう言っている」

「うーん、じゃあ、遠慮なく」

私は腕を組んで陛下と目を合わせる。

何事もお話する時は目線を合わせないとね、なんて。

まあ、どんな姿勢であれ態度であれ、私の尻は相変わらず肉を敷いていて、大腿の間からソーセージを出している時点で、全くもつて様にはならないんだけど。

私は深呼吸をした。

自分の意見を言うのは少々勇気が必要なのだ。

小心者だけに。

「その対象小国の領土的価値にも寄るんですけど、基本的にはやっぱり侵略の方向じゃないですかね」

「ほう？ 理由は」

陛下、目がなんだか楽しそうです。

うん、まるで珍獣の小躍りを見ているかのよう。

小馬鹿にしている小娘の考えは、そんなに笑えるんでしょうか。

あー… やつてらんないっつー話ですよ、全く。

私は鼻をふんと鳴らした。

「だって。自国を豊かにするんだったら、やはり他からの搾取が手取り早いじゃないですか、どうしたって。後々まで尾を引く差別意識や民族的紛争を考えるなら緩い植民地支配程度とかにした方が

いいかもしれないですけど、領土、隣りなんですよ。しかも陛下の国から見ても小国でしょ？ 国土を広げすぎると、それはそれで治めきれない不都合が生じてきますけど、小国なら属国にするより国土として広げて、更にその先の近隣国にまで触手を広げて、日々植民地候補の物色をして、虎視眈々と狙った方がいいですよ。ハンターですよ、陛下。気分はもう狩人の如くです。海賊の如くですよ！ その際は非情ですけど、後顧の憂いを完膚無きまで無くすため小国の王族は殲滅です。反抗的そうな貴族も勿論粛清ですね。反乱刺客暗殺ウザイですから。適度に原住民に人望のある長いものには巻かれる系の穏健派地元貴族だけを少数残して、現地を管理させればいいです。何でも自国から賄おうとすると、必ずといっていいほど反発が起きて反乱の火種になりますしね。面倒です。侵略する為の必要経費と、その後の見込める利益を天秤にかけて利益の方が大きければ、悩むことなんてあまり無いんじゃないですかね。だって、自国が潤えば、陛下の支持率も上がりますし、地盤が固まりますよ。国民って景気良くなって自分がウハウハなら、多少の暴君でも若干恐怖政治敷いても、寧ろ陛下が変態でも、ハーレム作って美女千人くらい置いて国庫を多少無駄遣いしても見て見ないふりをするもんです。臭い物には蓋しますよ、国民も。みんな自分がカワイイんです！ 自己愛最高です！ 逆に不景気だと政権打倒の革命とか起こしかねないですからね。舐めちゃいけません。ひとりひとりだと指で簡単にぶちぶち捻り潰せるただのアリソンコですが、集団になると軍隊蟻ですよ。あの凶暴で威力ありまくりな軍隊蟻化するんですよ、陛下。ある意味、為政者からすればタチ悪いんです。庶民って。陛下、支持率アップ狙って下さい。それが政権維持には大切です。血筋に胡坐かいていたら、いつか寝首を搔かれますよ。ウチの国なんか、景気対策で失策したり、愛人ひとり発覚したくらいで大臣の座から簡単に追われちゃうんですからね。愛人ひとりですよ？ 当人同士とその家族が納得してるなら、政治家としての仕事をきちんとしていれば、そいつのプライベートなんていち国民としてはどう

でもいつつーの、と思う私は変わってますかっ?!」

なんとなく私語りの内容が逸れた気がしなくても無かったが、最後の方では拳を固めてテーブルをどどん叩きながら力説したのに、私的には大変満足した。

ふう。

ストレス発散万歳。

すごく語ったような気がする。

まあ、全体的になんともお粗末な内容だったりしたんだけど、それでも良かった。

だって陛下はどうせ、ろくに聞いていないはずなんだから……と
思ってたのに、なんでそんな真剣な目でこっち見てるんですか。

怖いよ、陛下。

ごめんなさい。

大変申し訳ありませんでした。

なんか気に障ることを言いましたか？

あ、やっぱり無責任な事を言いまくったのがいけなかったのかな。
だって陛下、いって言ったじゃない。

本気じゃないです、侵略しちやえとか本気で言った訳じゃないですから！

異世界にトリップしたことよりも、その目に私は泣きそうです。
もう泣いちゃっていいですか。

「……異世界の小娘。お前、よく判らんヤツだな。長々と力説していると思ったら、何故、今になって悲愴感漂わせているんだ？」

「え、だって陛下、怒ってそうなんですもん」

まだ涙は出ていなかったが、女の涙は卑怯な涙。

ということ、私はちよっぴり鼻をすすって、目元を拭うフリを
した。

「あー…陛下、私の女の涙に免じて怒りをおさめてくれませんか？」
陛下は片眉をあげた。

おお、器用ですね。

そんな些細な表情筋の動きも素敵です。

イケメンって何しても絵になるんですね。
いいな。

「涙など出ていないではないか。それに、そのあられもない下半身の惨状に今なお平然とそのままにしているような者が、女などおこがましいとは思わないか？　そもそも怒っていないしな、別に」
その言葉に私はムツとした。

当たり前だ。

「いや、陛下は怒ってます！　目がそう言ってます！　それなのに怒ってないなんて、そんな嘘ツキ人間に、おこがましいとか言われたくないです！　陛下は酷いです。非人道的性格の冷酷人間です！　もしかしたら、ううん、もしかしなくても変態属性確定です！」
「ほう？」

もう言っちゃる。

例え、陛下の横でへロルドさんが顔を青ざめさせていたって言うてやるんだ。

私は我慢してたんだ。

私のパンツだって言えつて、ずっと叫んでたんだ。

肉汁ソース吸いまくりなんだぞ。

もうきつとシミになって落ちやしない。

今日はお気に入りのを履いていたのに！

それを……それを、それをつ！！

パンツの恨み、知るべし、陛下！

私は日本人なんだぞ。

つてことはだ。

一滴くらい希代の陰陽師、安倍晴明の血が流れている可能性だつてあるんだからね！

なんとたつて彼は平安時代の人。

枝分かれに枝分かれした血が、先祖はずっと農民だったと言われている私の家系にだつて間違つて潜り込んでいる可能性は、例え極

小でもあるんだ！

ふふふ……思い知れ、陰陽師の呪！

「そもそも陛下は、私のこの状態にすぐ何らかの対処をしてくれなかつたという時点で非人道的冷酷変態人間だつて証明しているようなもんなんですよ！」

悟れ、そのくらい。

お前の頭は飾りモノかつてんだ。

長所はそのイケメン面だけかつてんだ。

私は鼻息を荒くして続ける。

ふんがふんがだ。

「私の目の前に、えつらそうに座っていてパンツの惨状がバツチシ見えているくせに、少しは心が痛まないんですか?! 肉汁シミシミで可哀相とか、ソーセージが変な場所から見えているから避けてあげようねとか、スカート捲れているから上着をかけてあげようとか、思わないんですか?! 思いますよね、普通! 羞恥に震える傷つきやすそうな年頃の、繊細なガラスのハートを持っている麗しき乙女が目の前に居るのに!」

「思わんな、全く。……小娘、お前、よく自分をそう言いあらわせるな。逆に感心する」

陛下は呆れの含んだ視線を私に向けた。

何?!

生意気にも私に向かって呆れ視線を向けるなんて、百億年早い!

お前は何様だ?!

異世界の日本国民たる私には、陛下の地位は全く効力が無いんだ

からね！

日本万歳だ！

万歳三唱だ！

……とまあ、私は事後になってから必ず深い後悔をする種の暴走を、この時は止められなかった。

基本、小心者属性なのである。

私は陛下に掴みかからんばかりに姿勢を前のめりにする。

顔対顔の距離が近づいてしまったが、私はイケメン面には負けな
い。

負けない自信は満々なのだ。

なんていったって私には耐性があるのだ。

そう、言うまでもない。

某乙女ゲーの魔皇帝パーシヴァル様のお陰である！

もう銀髪の彼は、この時点で、私の唯一絶対神に昇格決定だ！

「思わないなんて！ しかもこの私に向かって乙女否定発言とも取れる言い方をするなんて！ そんな不適切生意気発言が出るのは、その口ですか?!」

私は陛下のイケメン面に絶妙な位置で配置されている理想的な形の唇に向かって、思いつき指さした。

「随分、偉そうだな」

「陛下なんて……陛下なんて……」

「なんだ」

「陛下なんて騎士失格です！ 騎士にたいする大いなる侮辱ですよ！ 騎士道精神を、もう一度学び直してきなさい！ 騎士道とは何だったですか？ 思いだして下さい！ 騎士道には『女性への奉仕などの徳を理想とした』とありませんでしたか?! そんな基本中の基本を忘れていなような陛下は、もう騎士道精神の書トリエス王国版の清書百回宿題ですよ!」

「先程言った気もするが、余は国王でな？ 理解できているのか、その頭は」

それに騎士道精神の書トリエス王国版なぞ見た事も聞いた事も無い、と陛下は頭の弱い子を相手にしてやっているといった感じで鼻を鳴らした。

「馬鹿にしないでください！」

私は指さした手を下ろして、どんとテーブルを叩いた。

こうなれば音による威圧効果を狙うしかない。

「馬鹿だろう、普通に」

「陛下なんて変態なくせに！」

「どの辺が」

「判りませんか？ 判らないんですか、その頭は？！ そんな事も判らない頭なんて、外堀にでも捨てたらいいんです！ 金色の藻が浮いているみたいで寧ろ観光名所になるかもしれないですね！

国の観光課が観光収入アップで泣いて喜ぶんじゃないですか？！」

「小娘……」

「判らないんなら、この私が教えてあげましょう！」

「もうよい」

陛下は、うんざりした様子で手を振った。

しかし！！

そんな中途半端、この私が許す訳がない。

あるはずがないではないか！

相手が誰だろうが、もうこの際、一切関係ない。

そう、例え、ヘロルドさんが恐怖に慄いた表情をしていてもである！

「なんにも良くないですよ！ なに言ってるんですか！ いいですか、陛下。その耳の穴かっぼじってよく聞いて下さいよ？！」

陛下の変態確定の理由はですね、繊細且つ麗しき乙女であるこの私の肉汁シミシミパンツを至近距離で見続けた事です！ 会話しつつも時間かけてバッチリじっくりシツカリその両眼で見てたでしょう？！ 日本の花の女子高生のシミシミパンツですよ？！ ウチの国なんか、女子高生のパンツは高値で売れるんですからね！ 洗った

らダメなんです。脱ぎたてはやはやシミシミパンツが価値有り有りなんです。マニア垂涎モノなんだから！ その私のパンツをタダ見した挙句、さも自分は『興味ありません』みたいな態度取って、真つ当な人格者のフリするなんて！ イヤラシイ上に盗人猛々しいとはこのことです！ 陛下のむつつり助平！」

大興奮中の私は、所々に日本の恥晒し発言があるのに気づかない。陛下は眉間どころか鼻の頭にまで皺を寄せんばかりの、思いつきり嫌そうな顔をした。

「何故、余がお前の下着如きを見た程度で、そのように言われなければならん？ 全くくだらん。そもそも異世界の小娘、お前、祖国でそれこそ真つ当な女扱いをされていたのか？ 余にはお前が女には全く見えん。そんなお前の下着なぞ視界に入ったところで何とも思わんし、寧ろ目障りで不快だ。お前の下着に価値が付くなぞ余には想像もつかん話。お前の祖国、にほんやらは、変わった国なのだとなしかりいようがない」

「ひどい！ やっぱり陛下は変態なだけでなく冷酷な人なんだ！ よくもいたいけな女の子に向かってそんな酷い事が言えますね！ だいたい私が女じゃなかったら、じゃあいつたい何だって言うんですか？！ 陛下から見て、私は何に見えるんですか？！ 女じゃないんですか？ 乙女じゃないんですか？ 淑女じゃないんですか？！」

「淑女？ よく言っ」

陛下は明らかに小馬鹿にしたように、ふんと鼻で笑った。

「珍獣だ」

「は？」

私は思わず聞き返した。

今、理解不能な単語が飛び出した。

不適切生意気発言を發したこのある前科持ちの陛下のあの口から！！

「珍獣だと言った。余にはお前は珍獣にしか見えん。女どころか人

にも見えんな。　そうは思わんか、へロルド？」

「……そう、でございますね……私もそのように」
「私はやっぱり人外扱いだっただのか！」

どおりで名前をいつまで経っても聞かれないと思ったよ！
突然、話をふられてへロルドさんが盛大に困っている。

「……っていつか、今、肯定した？」

「ねえ、へロルドさん、今、肯定したんですか！」

「ひどい、へロルドさんも！」

「ううん、いや、酷いのはやっぱり陛下だ。」

「つか、陛下がそんな風に聞いたら忠臣へロルドさんは否定できないですか？！　パワーハラだ！　威力業務妨害だ！　職権濫用反対！　訴えてやる！」

「何処に？　というツツコミはこの際不要である。」

「五月蠅い、珍獣」

「ムカつく！　言うに事書いて私を珍獣と呼びましたね？！」

「言ったが、それがどうした」

陛下は肩を竦める。

もう陛下の全ての動作が私を小馬鹿にしていた。

「あー腹立つ！」

私は目をきつと吊り上げて、陛下を睨みつけた。

「陛下は異世界トリップものの男役失格！」

断言だ。

「はつきりきつぱり断言してやる！」

私の唯一絶対神に誓ってもいい。

「逆ハーメンバーには絶対に入れない。意地でも入れない。陛下が泣いて頼んで土下座して悶え苦しんでいたって死んでも入れてなんてあげないんですからね！」

「逆はーめんばー？」

陛下はちらりとへロルドさんの方を見遣る。

へロルドさんは控えめに首を横に振った。

二人とも意味が判らないのだろう。
けっ、無知め。

小学生からやり直してこいって話だ。

「逆ハー。それは乙女の永遠なる憧れであり夢のことですよ！」

私は両腕を天　　厳密には異様に豪華なシャンデリアや黄金彫
刻や天井画がワキワキな天井だけど　　に向けて広げて見せる。

ああ、うっとりだ。

その単語にうっとりだよ！

「夢？」

陛下は不可解そうに眉をひそめて、よく判らないという意思表示
をする。

「この世に男が理想とする美女美少女で構成されるハーレムがある
ように、逆ハー、つまり逆ハーレムとは読んで字の如く、女ひとり
に対して、老若の美男美青年美少年の様々なタイプ、様々な身分、
様々な境遇のイイオトコ達が女、つまり今回は異世界トリップを果
たしたこの私に対して先を争い歡心を得るために鋭意努力すること
ですよ！　イイオトコ達が死ぬ気で努力するんです！　この私に少
しでも好意を抱いてもらう、ただそれだけを目標として！　ちなみ
にヘロルドさん、あなたはロマンスグレー部門に入ってますからね
！　メンバーです、逆ハー構成員のひとりですよ！」

「え、私ですか？」

ヘロルドさんは狼狽えた。

心底、狼狽えているのが判る。

くく、ロマンスグレーの狼狽っぷりって、なんてかわいいんだろ
う。

「お前は真正の阿呆だな……」

失礼な！

馬鹿に続いて阿呆が追加か！

私は憤然たる面持ちを陛下に向ける。

もう、こいつには己の置かれた立場というものをきっちり理解

させないといけない。

そう、つまり貴様は逆ハーメンバーからは完全に外れているという事を！！

「ふんっ！ 何と言おうと異世界トリップものの王道設定である逆ハー、その私の栄えある薔薇の逆ハー構成団、通称『ブルーヘヴン』に陛下は入れませんからね。ご愁傷様！」

ブルーヘヴン。

数年前に日本に登場した薄く淡いブルーがはいる綺麗な薔薇だ。私の逆ハー構成団名になんて相応しいんだろう。

そんな魅力的な名称を持つ私のブルーヘヴンに陛下の名前は無い！

一切無い！

断じて無いのだ！

「誰が入るか。馬鹿馬鹿しい」

陛下は吐き捨てるように言った。

その言い様に私が口を開こうとすると、控え目に、だがしっかりと重厚で品の良い装飾が施されている扉を叩く音が聞こえた。扉越しに少々くぐもった声がかげられる。

「お食事中失礼いたします。陛下、宰相閣下から使いの者が来ていますが如何しますか」

「入れ」

陛下は扉に視線を向けることもなく、命令しなれた者独特の声音で応じた。

扉付近で固まっていた従僕Aといった純朴そうな亜麻色の髪の色が若干慌てて扉に手をかける。

今の今まで存在感が全く無かったメイドらしき女性たちが優雅な動作で体の向きを変えた。

入ってきたのは何とも貴族然とした若者だった。

年の頃は私より若干下くらいに見える。

陛下のように“黄金！”と強烈な主張を放ったような金髪ではな

く、淡い優しい色味の金色の髪をしていた。

髪は陛下より少し長く、緩くひとつに纏めて背中に流している。

瞳は目を伏せているのでまだ色は判らない。

「失礼いたします、陛下。エーヴァハルト宰相閣下からの伝言がございます」

「許す」

少年は陛下の許しに視線を上げた。

おお、瞳は碧眼か。

というか、予想を裏切らない美少年ぶりに私は妙に感心する。

やっぱり異世界トリップには美少年は必須だよね！

美少年と叫びたらずややはり儂げ系かな、うわ、気になる。

すごく気になるよ！

まあ美少年儂げ系と叫びたらずや一歩間違えるとボーイズラブの世界に突入してしまう危険性はあるけれど、今回は私にとって異世界トリップ王道路線で進行中のはず、きつとね！

そうならないことを私は祈っているからね、切に祈っているからね、少年！

視線をあげた少年は、陛下を見ようとしたのだろう、……が、その碧眼は陛下の目の前で止まる。思わず視線がいつてしまったという感じだ。

あ、目が合った。

彼は、少しだけその碧眼が納まっている目を見開いて、そして固まった。

「……」

「……」

彼は固まり、私は今この場で声を発しては流石に拙かろうと無言を通す。

そんな私たちに陛下が促した。

厳密には少年をだけどね。

「……どうした？」

「あ、いえ。失礼致しました」

陛下の促しの声に、少年はハツとしたように私から視線を逸らす。まるで何も見ませんでしたかの如くその表情を素早く無表情に変え、彼は陛下に浅く頭を下げた。

その素晴らしき切り替えに私は思わず唖る。

すごいね！

まだ私より若いのに！

ウチの学校の超優秀と言われている生徒会長でも、そういった切り替えはなかなか出来ないのではなからうか。

だって陛下って国王でしょ？

謂わば一国の頂点。

絶対的権力者。

ウチの生徒会長は少女漫画を地でいく感じの、そこその容姿と運動能力、何故ウチの学校に貴様は入学したんだ、っつーくらいの優秀な頭脳を持ち、そして嫌味なくらいの素晴らしい外面を持つヤツだけど、そんな流石の生徒会長も、天皇陛下とか内閣総理大臣とかを目の前にして『どうしたのか』と問われれば、まず間違いなく凝固するだろうと容易に想像できる。

あいつはあの外面で周囲を騙している詐欺師類鬼畜科な生物だけど、内面には私と同様、気の小さいところを隠し持っているんだよね。

武装に武装で誤魔化してはいるんだけど。

ああ、何故、生徒会長が鬼畜科だって判るのだった？

あいつ、同類センサーでそれを見抜いた私への口止めとして、乳揉みやがったんだよね。

しかもブラの中に手を入れて！

それで揉んだ拳句に『貧乳にも程があるだろ！』って、大ウケしやがってさ！

あーイヤなこと思い出しちゃったよ！

くそっ、加藤め！

いつか目にモノみせてくれるわっ、……って私、元の世界に戻れないフラグ立ったんじゃない？

え、やだ、マジ？！

仕返しする前に敗走なの、私？！

そんな衝撃的事実に気づき、私は思わず声に出してしまっていたようだ。

「五月蠅い！ 少しは黙ってられないのか、お前は！」

陛下は背もたれから身を起こし、すらりと長い指を持つ綺麗な御手で私の頭を鷲掴みして力を込める。

痛い痛い痛い痛い痛い！

陛下、痛い！

暴力反対！

「陛下、痛いですよ！」

私は涙目で抗議する。

鷲掴みする陛下の手を外そうと試みるが外れないどころかびくともしない。

つか、本当に痛くてほろりと一粒涙がこぼれた。

突然の異世界トリップを果たし、帰還不可フラグが立つても出なかった私の涙である！

「当たり前だ！ 痛くしているんだからな」

「乙女に暴力なんて最低！ 冷酷変態極悪鬼畜陛下！」

「極悪と鬼畜が増えたな」

私が若干涙声なら、陛下はもうこれ以上無いというくらいのうんざり声だ。

「極悪で鬼畜なんだから仕方無いじゃないですか！ 極悪鬼畜ド鬼畜ド変態DS陛下！」

「どうです？ ……いや、いい。何でもない」

陛下がまた私の言う意味不明の単語に不可解そうに眉をひそめるが、それも一瞬で、うんざりした表情を取り戻すと、軽く振りまわすようにして私の頭から手を放した。

まるで気を取り直すかのように陛下は浅く息をつく。

「おい、エーヴァハルトの元へ戻る前に法務長官の元へ寄って、至急、こちらへ来るよう伝える。用件を済ませ次第、そちらへ行く」
「御意」

少年は陛下の命にそつなく返し、ちらりと私に綺麗な碧眼を向けた。

その瞳に驚愕の色が浮かんでいるのに私は首を傾げる。

ああ、それより本当に頭が痛かった。

陛下、容赦しなかつたな！

私は、一粒だけこぼれた涙の跡を拭いながら、少年に声をかけた。もう陛下同様、彼に対しても遠慮はいらぬ気がする。

なんとなくだけど。

「あれ、少年、陛下への伝言はもう伝えたの？」

私は今にも去りそうな気配を漂わせている少年に思い切つて疑問をぶつめた。

くどいようだが私は何においても小心者なのだ。

「えっ、僕ですか？」

「あ、うん」

「はい。たつた今、申し上げましたが……」

少年は私から声をかけられるとは思つていなかったのだらう。

碧眼を見開いて、瞳を戸惑いに揺らした。私はそれに更に首を傾げる。

「え、言った？」

「聞いた。お前が聞いていなかったただけだろうが」

「えー」

聞きたかつた！

全然関係ないけどね！

だって、ねえ？

やっぱり、国王への伝言って何だが気になるじゃない。

今まで一般庶民中の底辺小市民だった私なだけに、国の中枢の片

鱗が見てみたいというか。

野次馬根性というか、ネタ的というか。

そして出来るならブログにでも晒してみたいというか。

その時はきつと陛下に殺されるような気がするけれど。

「なにがだ。お前にはそもそも関係のないことだろう？ 少し黙れ。」

ユーリウス、こいつの相手をする必要はない。行け」

お、少年の名前はユーリウスというのか。

うんうん、なんか合ってる。

いいね、益々貴族様って感じで。

ユーリウス少年は陛下の言に一度腰を折って頭を下げると、物音も立てずに部屋から立ち去った。

なんともあっけない立ち去り方に、私は少し物足りないというか残念に思うが、まあ私はどうせ元の世界には帰れそうにないのだ。

またいつか会う事もあるだろう、……と思うんだけど、どうだろう。

そういえば私って、この先、どうなるんだろうか。

客観的に考えなくても私って、相当アヤシイような気がする。

そもそも異世界人とか言っているし。

まあでも、陛下やヘロルドさん、その他数人のたぶん侍従、従僕、メイドが突如として現れた私を目撃している訳だし、異世界人であることは完全に信じてはくれないにしても、頭から否定はしないだろうとは思っただけど……。

私はなんとなく、いや、かなり不安になって顔を青ざめさせた。

そういえば、私は、自分の今後の為に陛下の機嫌を損なってはイケないのではなかったか。

ああ、しまった！

後悔先に立たずとはこのことだ。

おもねるように私はテーブル上を陛下の方へと擦り寄った。

擦り寄ったから、尻の下の肉も、大腿の間のソーセージも勿論一緒だ。

こうなれば無い色気をどうにかして捻り出して、加藤めに貧乳判

定の下った胸をも動員して、この嫌味なくらいの美形美声を持つ陛下を色仕掛けでおとすしかない……なんて、無理です。

どうしたって無理です。

例え天地が逆さになっただって無理です。

海を割れ、って言われた方が簡単なような気がします。

私は溜息をついた。

もうすごく深い深い溜息である。

「ねね、陛下」

「近い。もう少し下がれ」

くう、やはり色仕掛けは通じないか。

距離を縮めただけで、陛下が嫌そうな顔をするくらいだ。

なんか微妙に傷ついたぞ、陛下！

乙女のガラスのハートを傷つけた責任を取ってもらおうぞ！

……というか取って下さい、ぜひ、好待遇を用意する、という形で。

お願いします。

城に客人待遇が私的に希望です、はい。

「あの、陛下」

「……なんだ」

おずおずと話しかける私に、陛下はもう億劫そうに対応する。

視線なんか私を見てすらいない。

遠い窓の外。

つまり木々らしきものが夕闇に隠れ、黒々としている闇を見ているんだよね！

私より木々の闇の方がいいと、そういうことなんだね陛下！

いいけどね！

別に！

その態度に本気でムカつくが、私は陛下に足元が丸見えなのだ。

如何せん異世界に知り合いも居なければ、生活基盤もない無一文人間なのである。

陛下に放置プレイされるだけでも、野たれ死ぬこと請け合いなのだ。

下手に出なければならぬのがツライところだ。

今は応じてくれるだけ良しとしなければ……くそう。

私は日本人特有の“とにかく面白くもなんともないが無難に笑っておけ”を、また陛下に向け実行した。

もちろん陛下は見えていないけど。

「陛下、私、この先、どうなるんでしょう？」

「どうとは？」

「いえね、私つては異世界人じゃないですか。つということはですよ、ほら、この世界に知り合いが一人も居ないでしょう？」

「そうだな」

「無一文ですし？」

「……………」

「まあ異世界トリップのお約束というかなんなのか、言葉は通じるみたいなんですけど、きつとそのお約束の法則でいくと、“言葉は通じるけど文字は読めず”つて流れなんじゃないかなと思うんですよ、たぶん」

「……………だからなんだ」

「だからですねー、つて陛下。そんな私を流石に放置はしないでくださいね？ ね？ だってほら、か弱き乙女な私ですから、無一文だったらホテル……じゃなくて、宿も取れないし、文字すら読めなかったら、飲食店で注文すら取れないでしょ？ 契約とかで騙されちゃいますよ、私！！ いいんですか、陛下はそれで！！」

「なにか問題が？ 余には全くないが」

陛下はこちらにようやく視線を戻し、呆れたようにアメジストな瞳で私を見据えた。

「っ酷すぎる！ はあ…判ってはいたけど、陛下はやっぱり非人道的冷酷人間なんですわ……。ほんと判ってはいたけど」

私はかくりと肩を落とした。

仕方ない、ちゃんと説明しないと判らないだろう、陛下は。

なんてつたつて陛下は王族。

きつとなに不自由なく大切に育てられて、庶民の事情など知りはないのだろう。

「いいですか、陛下。宿が取れなかったら、野宿ですよ、私。そうしたらどうなると思いますか。か弱き乙女が野宿。それ即ち、強姦の末、絞殺決定ですよ！ 衣服びりびりで半裸のまま山野に放置か、海、湖、沼あたりに重しつけて沈められるんです！ 文字が読めなかったら、不平等な契約を知らずに結んじゃって、借りてもない借金背負わされちゃったりして、売春宿に売られちゃって。んで、脂のノリまくったプヨンプヨンでデブンデブンのオヤジ達に、この乙女の柔肌が好き勝手に弄られ、体の中を蹂躪されまくり、口内までヤツラの何かに犯されるんですよ！ それで私は精神を病んでいくんです。もうこの後は転落への一途ですよ！」

私は両手で顔を覆ってみた。演技は大切なのだ。

「ここですね、陛下。こういったシチュエーションの場合は何が登場すると思います？」

「判らん」

「うーん、陛下、妄想数値をもっと上げる訓練をしないとダメですよ？ 正解はですね、どうしようもないクズ男が登場するんです」「ほう？」

「大抵、そういう場合に登場するクズ男は、太ってはいません。病的に痩せているか、中肉中背です。で、顔は素晴らしい感じではないんですけど、傷つき折れた心の私は、よく見えちゃうんですよ、きつと。ただニタリとその男が笑っただけだとしても、優しい包容力がある微笑みに見えちゃったりして、甘い胡散臭い言葉にも、コロりと騙されちゃうんです、寂しさゆえに。ああ、可哀相、私！でもその男が良く見えたのも最初だけなんです。男は私の体を思いのままに味わった後、お金をせびるようになるんですよ。よくあるパターンに突入です。男は頻繁に、そしてどんどん高額のお金を私

から雀り取っていくようになるんです。私が少しでも拒否をすれば、顔を殴り、お腹を蹴って、髪を掴み壁に叩きつけるんです！ 私は部屋の隅で唇の端が切れて血を滲ませながら、ごほごほ咳きこみます。男はそんな私を尻目に箆笥を漁ってこう言っんです。『けつ、やっぱり隠してやがったじゃねえか、このアマ！ 素直に出せば痛い思いをせずにすんだのにな！ クソがつ』。で、またそこで一発蹴りが入るんです。私はあまりの衝撃に気を失います」

「なかなか壮絶だな」

「でしょう？ その後どうなると思います？ もう涙無しには語れませんよ？ 私が気づくと、枕元には同じ職業を持つ悲しくも優しい女性が、額に冷たい手拭いを乗せてくれているんです。『馬鹿だねえ、お前さん。あんな男に騙されちゃってさ』って言いながら。私は『彼は？！』っていいながら飛び起きて、蹴られた腹の痛みを屈めます。女性が『ほらほら無理するんじゃないよ』って支えてくれるんです。その時です。スパーンと子気味のよい音を立てて、障子が開くんです。あ、障子って扉の事なんですけどね。開いた障子から、その売春宿の女将さんが現れるんです。そして『馬鹿な子だよ。お前、あの男に金を持ち逃げされた拳句、お前名義でたらふく借金こさえられやがって！ これからは休む暇はないよ。どんな客でも嫌がらず、どんどん取らせるから覚悟しな！』って言われるんです。同僚の女性は、同情の視線を向けてくれながらも溜息をついて部屋から立ち去ります。どうしようもありません、彼女には何もできないのですから仕方ないんです。それから私の更なる地獄の日々が始まります」

「地獄の日々？」

「そうです。どんどん仕事を取らされた私は、日に日に痩せていきます。そしてある時、血を吐いちゃったりするんです」

「何故？」

「当然病気ですよ」

「肺の病か何かか？」

「その場合もあります。けど今回の話では違う設定です」

「……設定な」

「次第に性器部分に膿が出てきたり、いろんな箇所が腫れたり、体に発疹ができたりしちゃうんです。性病ですよ！ 性病をうつされるんです！ 性病をうつされた事は、そのうち女将の知るところとなります」

「どうなるんだ？」

「追放ですよ、追放。病気持ちの女は店には置いておけないですもん。場末のあばら家に放りこまれるんです。絶望に身を浸しながらも、それでも生きていくために、格安の値段で自分で客を取るんです。足下にされて、疎まれ、蔑まれながらも！ そして人知れず死んでいくんです、私！ 陛下、少しなりとも会話を交わした私が、そんな運命を辿っても平気なんですか？！」

「平気なのかと言われてもな。全くといってよい程、余とお前は関係ないだろう？」

「こんなに物語を聞かせても、まだそんな冷酷発言が出るのか、陛下！」

私はキツと陛下を睨め付けた。

「陛下あああ」

「五月蠅い。もう少し待て。そろそろお前の処遇を手配する者が来る」

「え、処遇？ え、え、え、誰が来るんですか？」

「法務長官だ」

「そういえば、さっきユーリウス少年に陛下は至急来るように言っていたっけ。」

あれって、私に関係することだったんだ。

「私の処遇って、もう陛下の中で決まっているんですか？」

「一応な」

「え、何?! 私の処遇、どうなのなんですか、陛下?!」

「だからもう少し待て。何度も言う手間すら面倒だ」

「面倒って！ 陛下、そんなイケズなこと言わないで、教えて下さいよ！ 教えて、教えて、教えてー！ 知りーたいー！」

「……………」
くそう、陛下め、その法務長官が来るまで、無言で通すつもりだな。

そつちがその気なら、こちらにも考えがある！

なにせ、私の今後が関わってくる重要事項なのだ。私は必死だ！

「陛下、覚悟！」

「っ！」

私は陛下に飛びかかった。

我ながら、もう思い切り良すぎな飛びっぷりである。

尻の下の肉を置き去りに、大腿の間のソーセージは床に落ちた。

さらば、シミシミパンツの原因の肉たち！

私は両手を熊手のようにし、陛下の膝に乗り移った。

陛下が驚きに目を見張る。

ふふ。

私はその表情に満足した。

私はニヤリとした笑みを浮かべて見せてから、陛下の装飾がたくさんついた長い上着を力任せに左右に開き、腰元から一気に中のシヤツらしきものをズボンから引き抜いた。

熊手な両手を寸分の躊躇いも見せずに突っ込む。

お、陛下のお腹、温かいね。

世界は違えど同じ人間なんだね！

いいね！

人類みな兄弟だ！

「必殺！ くすぐりの刑！ 手加減なしバージョン！」

こちよこちよこちよこちよ。

私はしきりに休まず手を動かす。

このくすぐりの刑は、休まずに絶えず刺激を与え続ける事がポイントだ。

しかも私の場合、小遣いアップの為に、常にパパで実践済みなの

である！

「お、お前は何をするっ！ 小娘！」

やだ、陛下つたら、結構、くすぐったかったりするのかしら？

超絶美形なその玉顔が強張ってるんだけど？

頬も少し赤いというか。

もしかしなくても、我慢してる？

「笑いたかったら、笑ってもいいですよ？ 我慢しないで！ へ・

い・か！」

「ふざけるな！」

「さー白状するのです！ 私の処遇は何なのかを！ いち早くの情

報開示を要求する！」

せわしなく手を動かしている私を陛下は睨みつける。

突き放すのではなく、左腕で私の腰を引き寄せ、右手で顎を捕え

た。

その行動は想定外だ！

「ちよっ……ちよっと待って、陛下！ 痛い痛い痛い！ 腰痛い！

顎痛い！ この場合、普通、突き放すでしょ？ なんで引き寄せ

てホールドするんですか！ いやっ、痛い！」

私は走る痛みに思わず動かす手を止める。

それを見越したように陛下がますます腕に力を加えた。

陛下の瞳に残忍そうな光がちらつき、口角が上がる。

「うわ、その表情、極悪非道の魔王様って感じですよ、陛下！ 放

して下さい！ マジで痛い！ 内臓、破裂しちゃいますよ！ もう、

放してっ！」

「素直に余が放すと思うか？ 己の行動に責任を持って、小娘」

陛下は私の腰を益々絞めつけながら、捕らえた顎を彼の目線に合

うように強引に角度を変える。

ヤバイ、マジで痛い。

締めつけられ続ける腰に胸も圧迫されて苦しい。

貧血とか起きちゃいそうな勢いだ。

というかさ、それよりも。

「陛下、本気で放して下さい！ 痛いし苦しいけど、そんなことよ
り陛下、気づきませんか?!」

「なにがだ」

見つめあう形になった陛下と私の顔が近すぎる。

互いの吐く息がかかる程に近い。

「互いの顔は近いし、私は陛下の膝に馬乗り。陛下は締め上げてい
るつもりかもしれないけど、客観的に見ればどうしたって抱きしめ
ているようにしか見えないでしょう?! つまり、エロイ! エロ
イんですよ、この体勢が!! エロエロなんです! 気づいて、陛
下!」

「……お前な」

「陛下、誤解されたくないでしょ?」

「何にだ」

「お妃さまとか、恋人にですよ!」

「どうでもよい」

「あ……もう、とにかく放して下さい! ヘロルドさん! 法務長
官はまだですか?! ほーむちよーかーん!!」

私は声を出るだけ張り上げる。

締め上げられて苦しいから本来出せる大声は出ないけれど仕方な
い。

法務長官はまだか!

この私が呼んでいるんだ!

ええい、この際、いたしかたない。

一滴すら流れているのかアヤシイ希代の陰陽師安倍晴明の血を信
じて――

「私の名において召喚する! 出でよ! 式神、法務長官!」

「何を言っているんだ、お前は。やはり頭がおかしいのではないの
か」

「……陛下、それ以上は、その方の骨が折れてしまいます」

呆れた声を出しつつも締め上げの力を緩めない陛下に、ヘロルドさんが救いの手を差し伸べてくれた。

流石ヘロルドさんだ！

ロマンズグレー最高！

陛下は片眉を上げてそれに応じた。

「平気そうだが？」

「確かにそうはお見えにはなりますが、女性の骨はとかく細いものでございますので。筋肉もありませんし。……それにしても確かに遅うございますね、長官殿は」

「催促を出すか……、仕方ない、余も時間があまりない」

そう言つて陛下が扉の方へ向いた時、ユーリウス少年の時と同じように、くぐもつた声が重厚な扉の向こうから聞こえた。

「陛下、バルツァー卿が参られましたが無如何いたしますか」

「通せ。ようやく来たか」

陛下は冷静で無機質な雰囲気で応じるが、一向に私への戒めの力は緩める気配がない。

陛下、ヘロルドさんの言った事、きちんと理解してます？！

骨、折れちゃいそうに痛いんですけど！

私は陛下の腕の中で精一杯もがいてみる。

「じつとしている、小娘」

「い・や・で・すーだ！」

「……………」

「貴女も、もう少し陛下に対して……何と云えばお判り頂けるでしょうか、その、敬意をですな……………」

「敬意？ ヘロルドさんの言っていることをちっとも理解できない陛下に対してですか！もしかして……！」

「い、いえ、私が陛下に申し上げていることは、この際、もうどうでも……………」

何故かヘロルドさんはタジタジだ。

「どうでも？！ 私の骨が折れてもいって言うているんですか？

！へロルドさん！」

「五月蠅い！ いい加減にしろ、お前は！」

「じゃあ、陛下こそいい加減放して下さいよ！ 痛いってさっきから言ってるじゃないですか！」

「あの……、陛下？ お呼びとのことでしたので参りましたが？」

おずおずと聞こえた声に陛下の右手は瞬間外れ、彼と私はキツと顔を扉口に同時に向けた。

視界に入るのは、黒眼黒髪中肉中背、銀縁眼鏡をかけた何処にでも居そうな平凡で細面の真面目そうな男である。

「遅い！」

「余は至急来いと伝えなかったか！」

陛下と私の怒声に、法務長官とおぼしき男はぎよっとしたように目を大きくしながら一歩後ずさる。

へロルドさんがそれに疲れたように目を伏せ、目頭を軽く揉んだ。

「……バルツァー殿、少々遅かったようですね」

「も、申し訳ありません。急ぎ馳せ参じたつもりでございましたが

……」

「つもりじゃだめなんです、つもりじゃ！」

謝って済むなら警察はいらない、そんなことは向こうの世界じゃ常識だ！

それに顎は解放されたが、お陰で未だに私は陛下の戒め中なのだ。というか外された右手は、いつの間にか左腕の補強として使用されている。

つまり、腰の拘束が強化されたということだ！

この責は重いぞ、バルツァー法務長官！

「お前は、何故そう根拠なく偉そうなんだ！」

「無駄に偉そうな陛下に言われたくないですよ！」

「小娘！」

「なんですか、陛下！」

陛下と私は睨みあう。

火花もバチバチ散ってるよ！

もう小物に用はない。

やはり私は眼前の敵をまずはじめになんとかしないとイケないよ
うだ。

「そもそも陛下は無駄に偉そうで、無駄に美形なんですよ！ この
国王の殻を被った結婚詐欺師！」

「っ！」

ふはは。

声も出ないか、陛下め。

しかしそれが真実だ！

真実はいつもひとつなのだ！

「だいたい陛下みたいに顔が無駄に良くて、且つ地位も財産もある
ような男って、大抵の場合、『人を愛することが出来ない』とかい
う贅沢極まりないことほざいてるんですよね。人間不信気味だから
仕方無い？ はっ、笑っちゃいますよ。何を甘ったれたこと言っ
てるんですかつつうんです！ 人間関係的に最悪環境でも、少なく
とも陛下みたいな男は物理的には恵まれていたでしょう？ 世の中
にはですね、食うにも困る貧困と飢えと一方的な暴力に虐待、理不
尽な戦争、密告、裏切り、拷問に不治の病！ こういった自分では
どうしようもない環境に身を置かざるをえない、けれどそれでも一
生懸命前向きに生きていこうとしている人だっただけです。そう
いう劣悪環境に居る存在を無視して人間不信気味で人を愛すること
が出来ないなんて、よく言えると常々私は思ってるんですよね。ん
で、そういう男って、表面的には当たり障りなく女性とかに接して、
その女性たちが自分が原因で争うように暇つぶしに仕向けてみたり
もして、さも自分は関係ないっていうふりしながら、影でほくそ笑
んでいるんですよ！ 娯楽的思考のもとに！ もう最低！ 陛下に
照らし合わせて例を述べるなら、周辺国の王女や自国の貴族令嬢を
外交的にとか、内政的にとかいう理由を並べ立てて、たくさん側室
にしたてあげて後宮に押し込めて見向きもしないって感じなんです

よね。それでも彼女たちは、自分の存在意義のために、寵を競い争って、醜く傷ついていくんです！ 陛下はそれを知っているのに、見てみないふりをする。そう、人を愛する事が出来ないという言い訳を掲げているから、そんなことはどうでもいいんですよ！ このいかにもありがちな話、陛下、片鱗もかすっていませんか？！」

少々言い過ぎたかな、とは思ったが、痛みで腹が立っていたのは事実だから、仕上げに輪をかけるようにふんと鼻で笑ってやった。瞬間、ひっという息を飲んだ悲鳴が周囲から幾つか聞こえる。ふと気づくと、部屋中がしんと静寂に包まれている。

陛下の傍近く控えているヘルルドさんの顔は真っ青で、近くに歩み寄り立っていたバルツァーさんは顔をこれ以上なく強張らせていた。

「……小娘、言いたい事はそれだけか？」

陛下の私を拘束する力が更に強くなる。

私は眉をしかめた。

本気でこれ以上は耐えられそうにない。

ぎりっという音が聞こえないのが不思議なくらいの戒め具合だ。

「痛い！」

「バルツァー法務長官」

加え続ける腕の力とは裏腹に、陛下の声は至って静かだった。

怖いくらいに。

「はっ、陛下」

呼ばれた彼は背筋をぴんと伸ばしてから、浅い角度で腰を綺麗に折った。

「幾つかこの者の処遇について考えていた」

そこまで言うてから、陛下は私を拘束し抱えながら立ち上がった。そしてゆっくりとした優雅な動作でバルツァーさんの元へ歩を進める。

「つい今し方、牢にでも放りこんで……そうだな、小娘、お前が言っていた牢獄ぶち込まれ処刑コースだったか？ それにしようかと

も思ったが」

「そこまで言われた時、私の顔はさつと青ざめた。まずい、逆鱗に触れてしまったかもしれない！」

「ああ、口は災いの元だつて知っていたのに！」

「言いすぎたんだ、私！」

「つていつか、もしかして凶星な事にかすつたの?!」

「マジで?!」

「その事実には私としては驚きなんです！」

「陛下は私の顔を息のかかる至近距離で見たまま、澄んだ紫色の瞳を細めた。」

「しかしそれでは面白くない。やはり最初に考えついた案でいく。」

「バルツアー、珍獣保護法をこの者に適用する手続きを急ぎ取れ」

「陛下の命にバルツアーさんは驚きに目を張った。」

「なんだか信じられないものを耳にしました、といった様子である。」

「バルツアーさんは陛下を見て、私を見てから、陛下に視線を戻した。」

「彼は小さく喉を鳴らして調子を整え、次ぐ言葉を口にする。」

「陛下、その法は形骸化したような法です」

「それが?」

「数代前の王が、取り締まった悪質な闇市場に流れていた異国の珍しい獣をご自身の手元に置いておく為だけに、謂わば戯れに作られた法だと伝え聞いています」

「だからどうした」

「陛下……」

「そこまで言つて、バルツアーさんは神経質そうな指先を額にあてた。」

「その方がどういった方なのか私は未だ存じあげませんが、少なくとも人のように見えませんか?」

「珍獣だ」

「陛下つてば、まだ私を珍獣扱いしてるんですか?!」

「お前は黙っている。 へロルド、先ほども問うたがお前もこの小娘が珍獣に見えるだろうか？」

陛下が変わらず私に視線を合わせたまま、愉悦に口端を上げた。私はそれに思わず背筋に震えが走るが、身じろぎすら陛下は許してくれなかった。

抱えられながらも私を束縛する力を全く緩めない。

救いは更なる圧力を加えられなくなったということだけだ。

へロルドさんは几帳面に整えられた前髪の生え際あたりに汗を滲ませる。

きつと冷や汗だろう。

「はい、……先程も申し上げました通り、私もそのように」

「という訳だ、バルツァー」

「しかし陛下！ あれは法の名の通り、獣に、珍獣に適用するための法です。過去、一例しか施行されておりませんし、それを人に適用など論外」

「くだい！」

陛下の一喝でバルツァーさんは口をつぐむ。

バルツァーさんを黙らせてから、陛下は私の額に自分のを合わせた。

陛下の体温が額を通して私に伝わる。

その温もりは人を安心させるものではなくて、なにやら先行きの不穏さを伝えていた。

あとほんの少しで唇が触れ合いそうになる距離で陛下は私に言った。

「楽しみだな？ 珍獣」

「……………」

「バルツァー」

陛下はバルツァーさんの名を口にすると、私から額を放し、拘束の手を緩めた。

陛下と私の密着していた体の隙間に入る空気に私はほっとし、息

をつく。

瞬間、彼はバルツアーさんに向かって私を荷物のように放り投げた。

バルツアーさんは、慌てて私を抱きかかえる。

「珍獣部屋に放りこんでおけ」

「珍獣、部屋ですか？」

バルツアーさんは不思議そうな表情を見せる。

「余の部屋の横に物置のような空間がある。それだ。詳しくはヘロルドに聞け。ヘロルド」

「はい」

「この珍獣に幾人かの専属の使用人をつけることを許す。ひとりは一リーザをつけ、残りはあれに推薦させる」

「畏まりました」

「陛下、法を施行するのにこの方のお名前が必要です。如何記しますか」

陛下はバルツアーさんの腕の中で話の展開が早すぎて訳が判らさずぼけっとしている私をちらりと見ると、ふと鼻で笑った。

「珍獣は珍獣でしかない」

「は？」

「珍獣、とそのまま記しておけ。これに名を聞く必要はない。珍獣に名は不要だからな。さしずめこの法の施行二例目だ。珍獣二号とでもしておけばよいのではないか？」

「……御意」

「小娘」

陛下は私の顎をくいと持ち上げた。

「少し痣になるか」

そう言いながら微塵も悪いとは思っていない面持ちで私を見据える。

「今からお前は珍獣二号だ。せいぜい珍獣らしく振る舞え」

陛下は私の顎から手を放すと、全ては終わったとばかりに身を翻

した。

扉の方へ向って早い速度で歩いていく。

陛下の動きに合わせ、控えていたメイドらしき女性たちが一斉に腰を落とし、侍従、従僕らしき人たちも腰を折り曲げた。

先程、ユーリウス少年を部屋へ入れるために扉を開いた亜麻色の髪に従僕Aが畏まった感じで扉を開け、陛下を待つ。

私はほっとした。

もう心底。

とりあえず牢獄ぶち込まれ処刑コースは回避されたようだしね。

だからかな。

バルツァーさんの腕の中でだらんと全身の力を抜き、

思わず言っちゃったんだよね。

なんていうか安心したが故の余計な一言を、部屋を出ていこうとする陛下の背に向けて。

「陛下、どこかに行く前に衣服改めた方がいいですよ！ 服は乱れてるし、私のシミシミパンツからズボンに移り染みた肉汁のシミシミが、なんかヤローの集団に襲われて、やられまくったみたいなの霧困気醸し出してますから！」

瞬間、部屋全体がびしつと異音が聞こえる勢いで凍りつき、その場にいる陛下と私以外の全生命体が凍結したのが判った。

私を抱きかかえるバルツァーさんの腕の筋肉も酷く硬直したのが判る程だ。

あれ、もしかして失言？と薄っすら背中に汗が一筋垂れたところで、陛下が歩みを止め、顔だけをこちらに向けた。

アメジストな陛下の瞳が凶悪な色を発している。

「余計な世話だ、珍獣。お前は早く檻に入り、餌でも食って寝ろ」

「え、珍獣部屋って檻なんですかっ、陛下！ 文字通り珍獣専用家畜部屋だったたり?!」

「さてな。へロルド」

「っ、なんでございましょう、陛下」

「追加で申しつける。王室専属の細工師を明日の早いうちに呼んでおけ」

「細工師ですか？ 畏まりました」

ヘロルドさんは不思議そうにしながらも陛下の命を受ける。

それに彼は満足そうに薄ら寒い笑みを浮かべ、再度、部屋を出るために歩きだした。

部屋を出る間際、「楽しみにしておけ」と意味不明な言葉を残し、私たちの視界から消える。

「んー、楽しみにしておけて、どういう意味なんでしょうね、ヘロルドさん」

そう首を傾げる私に、ヘロルドさんよりも早くバルツアーさんが反応した。

「そんなことより、貴女いったい何者なんですか……」

バルツアーさんの疲れ果てたような声と私の首筋にあたる彼の吐息と共に、この場にいる生きとし生ける物の安堵の気配が部屋中いっぱいに満ち溢れた。

こうして私は異世界トリップをし、陛下と私の攻防生活が始まったのだ。

… 5 (後書き)

騎士道『女性への奉仕などの徳を理想とした』 …… 「株式会社
社岩波書店 広辞苑第五版」より引用

陛下と私の異世界もの談義 …… 四百字詰原稿用紙 約91枚

珍獣保護法

第一条 希少性の高い珍しい獣を発見、捕獲、又は保護した者は速やかにトリエス官府に届け出なければならない

第二条 トリエス国王が之に本法を適用すべしと判断した場合のみ之は珍獣と見なされ本法による保護を受けることができる

第三条 本法の適用を指定された獣はトリエス国王の下で保護され例外は認めない

第四条 本法の適用を指定された獣（以下珍獣）に対し以下の行為は禁止される

珍獣の殺傷、虐待、屠殺、捕獲、狩猟、誘拐、故意による給餌・給水の停止、又それによる衰弱

第五条 やむを得ない理由により珍獣を殺す必要が生じた場合トリエス国王の認可の下でできる限り珍獣に不要な苦痛を与えない方法によって速やかに行われなければならない

第六条 本法の規定に違反した団体又は個人は団体の殲滅又は死刑に処する

附則

本法の施行に関し必要なる事項はトリエス国王の命令を以って之を定める

本法の施行の期日はトリエス国王の命令を以って定める

本令はトリエス暦八十七年より施行する

朝の柔らかな陽光が大きく取られた窓から差し込んでいる中、私の手の中には厚手の紙が渡されていた。

珍獣保護法と書いてある。

ああ、私はこの世界の字が読めたのか。

異世界トリップ王道設定お約束『言葉は通じてても文字は読めない』は、どうやら外したようだ。

これで誰かに契約詐欺に会う事もないね、なんて喜んでいる場合では当然ない。

しばらくは陛下には隠しておかなければいけないのだ。

それはもう必死でね！

だってバレたら最後、『では、余が保護することもないな？』とか言つて、城外に放り出されたら堪らない。

陛下、嘲笑とかしながら絶対言つて実行しそうだし。

私はまだこの異世界で労働に勤しむ気はさらさらなのだ。

せっかくの異世界トリップ、王道路線を踏襲しているのなら波に乗りたい。

その際、その逆ハーメンバーには貴族は必須。

もちろん色恋に身分は気にしてはいないけれど、私の栄えあるブルーヘヴンには、様々な身分のイイオトコで構成されなければならぬのだ。

城から放り出されたら貴族と出会い、お友達になる可能性が絶望的になるんだろくらいは私にだって予想がつく。

ならば暫くはこの城にしがみつくなきゃいけないか。

少なくともブルーヘヴンに貴族のイイオトコ数人がメンバーにな

るくらいまではね！

あ、打算はもちろんあつたりします、はい。

陛下に城外放りだしプレイをくらつたら、その貴族の屋敷にお世話になるつもりです。

私が城外放りだしくらつて、城下で庶民の生活を営むとします。すると、住込みでウエイトレスや店の売り子、少々裕福な商人のメイドの仕事がせいぜいだってことぐらい想像がつきます。

すみません、現代日本人職歴無しな私には、昔のヨーロッパ時代の庶民の生活をする自信が全くありません。

やはり水汲みとかするんでしょうか、お風呂とかどうなっているんでしょうか、トイレは、衛生面はどうなんですか、……ってな訳です。

自活なんて言葉は私の辞書にはありません。

目を凝らしたつて片鱗も見えてきません。

私は寄生虫生活を送りたいんです。

ヒモ人生万歳ってなもんですよ！

プライド？

そんな腹の足しにもならないものなんて微塵もありませんから！

そんな事を考えながら、私は欠伸を噛み殺すこともせず盛大に口を開け、目を擦った。

それより眠い。

いったい今は何時なんだろう。

私は擦りすぎて霞む目で時計を探してみたが、ある訳がなかった。

なにせ今現在この部屋は、私がつい今まで寝ていたシングルサイズの、部屋に全くそぐわないシンプルなベッド以外は、バルツァーさんとリーザと私しか居ないのだ。

そう、つまりベッド以外、家具らしきものは一切ないのだ、この珍獣部屋は！

せめてサイドテーブルくらい置いておけ！

……と思わなくもないけれど、今のところは仕方がないとは私も判っていた。

私が今いる珍獣部屋。

これからの居住空間は、本当に珍獣用の部屋だった。

少なくとも私はそう思っている。

なにせ鉄格子が、黄金で出来た格子があるのだ。

そう思わざるをえないとしか言いようがない。

珍獣部屋は昨日陛下が言っていたように、陛下の部屋の横にあった。

広さは二十畳くらい。

部屋の様子自体はバロック様式っぽくて、なにやら豪華なんだけれど、格子部分が一ヶ所あった。

陛下の部屋と珍獣部屋を繋ぐ扉としてだ。

扉は二ヶ所。

陛下の部屋への格子の扉と、廊下への装飾のある木製扉。

だからいちいち陛下の部屋を通らなければ部屋への入出は出来なという恐ろしい不便さはないのだけれど、如何せん、扉が小さすぎた。

明らかに人サイズではないのだ。

私ですら身を屈めないと通れない。

それが私がこの部屋に不似合いでシンプルなシングルサイズのベッドで寝ている原因ともなっている。

昨日はあれから本当に大変だった。

厳密にはヘロルドさんや、私付きに決定したということと急遽呼び出された亜麻色髪清楚系美女のリーザ、バルツァーさんに数人の男女の使用人、近くを通りがかった時に不幸にも巻き込まれたという第三騎士団長ラードルフ・ベツケラートさんという茶金の短髪、薄い緑の瞳の、爽やかイケメンいい兄貴系青年、といった人たちがであるが。

陛下はあの時、『余の部屋の横に物置のような空間がある』と言

っていた。

で、本当に文字通り、物置として使ってたんだよね、あの人。掃除係にも『動かされたくない資料もあるから、そう頻繁にしなくてよい』とか言っていたらしくて、王の部屋の横とは思えないほど埃は溜まっているは、紙や本は散乱しているは、そう使用頻度がないらしい剣が何本も積んであるは、な状態だったのだ。

中には国宝クラスの壺や、大粒の宝石などが無造作、且つ、むき出しに放置されていて、それを知ったヘロルドさんは蒼白になり丹念に確認していた。

ちなみに壺は無事だったが、宝石は破損しているものが幾つあった。

ラードルフさん曰く『剣で叩き割ったのでは』という破損具合らしい。

ヘロルドさんがその瞬間気絶した。

ヘロルドさんが使用人のひとりに運び出された後、とにかく荷物を動かして一晩寝れる程度には掃除をしようという事になった。

そこでラードルフさんが『今日のところは城の客室に通しては』と言ってくれたが、バルツァーさんが陛下のご命令だからと譲らなかつた。

まあ、私としても客室が良かったけれど、これに関してはバルツァーさんの意見に賛成だった。

あの様子の陛下の命令内容と違う事はしない方がいいような気がしたからだ。

臨機応変も時と場合を選ばなければならぬ。

ああ、権力ってなんて理不尽なんだ。

掃除をするにしても、とにかく荷物を動かさない事にはという事になったんだけど、ヘロルドさんは気絶退場中だし、何が重要で機密なのか、その場に居る人間には判断がつかなかった。

バルツァーさん曰く『見ればだいたい予測はつくが、私は判断する権限はないし、したくもない』だった。この部屋の中身の所有者

である陛下は、宰相のもとに行つて帰つてくる気配はないし、ラードルフさんも夜半過ぎまで戻つてはこないだろうと言つて、とりあえず不敬も甚だしく陛下の部屋を挟んで珍獣部屋の反対側、王妃の部屋にそのまま運ぶことに決められた。

王妃の部屋にこの一見ガラクタにも粗大ゴミにも見える荷物を運ぶ事に私は驚いたが、王妃は今現在空位だという事をリーザが教えてくれた。

なんでも陛下は側室こそ何人も居るが、王妃を迎えたことがないとのことだった。

まだ王子王女もひとりも居なくて、お世継ぎ問題で周囲はやきもきしているらしい。

いろんな意味で陛下は贅沢で罰当りな人間だった。

荷物運びは私も最初手伝っていたんだけど　自分がこれから使う部屋だしね　バルツアーさんは『これに触らないで下さい、あれに触らないで下さい』と繰り返し言い、ラードルフさんは『重いからこれは俺が運びます』と私の手から荷物を奪い取り、その他の使用人は苦笑いで私をスルーし、リーザが『陛下の寝台は、座り心地、寝心地がいいですよ』と私を陛下の部屋へ連れていって、いや、追いやつた。

つまり私は邪魔らしかったので、私はリーザの助言通り、陛下のベッドで飛び跳ね、寝転がり、最終的にはそのベッドの上で持ってきてくれた夜食を食べてみた。

うん、そういつた場合のお約束通り、私、陛下のベッドの上にカシスジュースつばいの溢したよ！

中敷きシーツの真ん中あたりに盛大に！

めくつてたんだ、上掛けをね！

だけどオカシイの。

誰もその事についてつつこんだり、怒つたり、困つたりといった反応を返してくれなかつたんだよね。

相手にされていないというか。

とにかく忙しそうに荷物運びと掃除をしていたから、私、その事実を抹消すべく、上掛けをキレイにベッドメーカーキングしておいたよ。陛下、これで明日の朝は、血尿診断下るよね！

ビバ中年への道！

中間管理職はツライよの巻……って、陛下は中間管理職じゃないけどね。

どちらかというところ、バルツァーさんあたり血尿が似合いそう、なんて。

そんな感じで陛下のベッドの上で大人しくしていたら、リーザが少々ほつれた髪を色っぽく耳にかけながら、まだ作業が終わりそうもないから私に入浴してくるように言ってきた。

浴場は王の部屋からそう離れたところではないらしく、珍獣保護法適用生物なら、所謂、王専用を使用してきてよい、とのことだった。

シミシミパンツもいい加減気持ち悪くて仕方なかったから

陛下のベッドの上に躊躇いなく座ったけどね　お風呂は大歓迎だったんだけど、あれ、オカシイ。

私はここで疑問に思った。

だってね？

普通、異世界トリップ王道設定お約束には、“メイドに集団でよってたかって裸にされて、隅々まで洗われちゃって恥ずかしい思いをする”があるはずなのだ。

なのにリーザときたら、浴場への道筋を私に教えて、着替えはそこに控えている使用人に言えば用意してくれる手はずだからと、私ひとりで行かせようとす。

バルツァーさんを見ても、ラードルフさんを見ても、『気にせずどうぞ行ってきていいですよ』という感じだった。

だもんだから、私は首を傾げつつも浴場に行っただけで、やはり浴場内でもひとりきりで誰も私を裸にしたり、洗ってくれたり、服を着せてくれる事はなかった。

浴場は無駄に広くて豪華で良かったんだけど、正直、この対応にはガツカリした。

だって私、『あ、やめてください！ 異世界の日本人にはそういう習慣はないんです！』とか、『きゃーやめてー！ くすぐったい！ 恥ずかしいですよ！ 大丈夫、ひとりで私、出来ますから！』とか言ってみたかったのだ、とつても。

微妙に寂しくなりながらも与えられたシンプルなナイトドレスに薄手の上着を羽織った私が陛下の部屋に戻ると、作業はまだ続けられていた。

つか陛下、あの二十畳しかない空間に、いったいどれだけ溜めこんでたんだよ、ジャンガリアンハムスターが貴様は、の世界である。私は仕方ないので、また陛下のベッドの上でゴロゴロと寝ころんでいた。

そして何とはなしに窓の外を見やると、日本の都心ではまず見られない満点の星が無数に輝いていた。

それを見て、異世界トリップものの主人公が必ず思い出し涙する家族や友達の事を私もふと思い出すが、もの悲しさは感じて、涙まで出る事はなかった。

私つてもしかして薄情?! とか、親不孝娘なの?! とか一瞬脳裏を過ったけれど、それはたぶん違くて、私には心配する要素が無いからなのだろうと思われた。

私が突然消えたら、パパもママもきつと軽く数年は悲嘆にくれて過ごすくらいには愛されていたと思うけれど、パパにもママにも、子供は私だけではなくて、頼りになる兄と、シッカリものな妹がいるから私は安心できた。

あの二人はきつと、私が居なくなっても最終的には残りの家族四人で平穩に過ごす手段を必ず見つけてくれる。

そう信じる事が出来るくらい、互いに信頼し、仲の良い兄妹関係だった。

だから日本に残してきた家族を心配していないし、涙がでるほど

悲しくもない。

友達にしたってそうだ。

私が突然いなくなれば、結構心配して探してくれる友達くらい何人かいた。

友人関係に比較的恵まれていた私は、友達も大切に思っていたが、それでも家族と違って友達は友達でしかないのだ。

彼、彼女らは、これから受験して、進学や就職をして、結婚して家庭を持って、という過程で、学生時代の仲の良いいち友人に過ぎなかった私なんて、同窓会のタイミングで思い出しこそすれ、普段は記憶の彼方へと追いやられることだろう。

それは悲しい事でも酷い事でも何でもない、当然のことだと私は思っている。

だって私だって、これからこの世界で生きていく上で、きっと向こうの世界の友達の事を思い出す事はなくなっていくだろうし、私は私で、この異世界で生きていかなければならない訳だから、新しい友人、知人も、もしかしたら結婚して家族も出来ていくはずなのだから。

そういう意味で私はとても向こうの世界では幸せ者だったと言えた。

深い悲しみは与えるかもしれないが、それをフォローしてくれる信頼できる人たちがいる。

それだけで、私は私の今後を、この世界での自分の事だけを考えていけばいいだけなのだ。

自分のことだけを考えていけばいい、これほど気が楽なことはないだろう。

だから私は、異世界トリップしてしまったこと自体には、それほど深刻には捉えていなかった。

自分の身の振り方次第でどうにでもなるのだから。

……まあ、いきなり珍獣指定をくらうとは思わなかったけど。

… 6 (後書き)

珍獣保護法 … 文化財、天然記念物、動物愛護法などを参考。

ジャンガリアンハムスター … 頬袋に食べ物を詰め込んで寝床などへ運び、食糧を備蓄する習性を持つ。

そんな風に若干感傷に浸っていると、物の移動と清掃作業はとりあえずの収束を得たようだった。

私ができるぶしまでの長さがある少々透過率がよろしいナイトドレスを膝上まで上げて、ふくらはぎをマッサージしながら作業者たちを見ると、バルツァーさんは疲れた様子で眼鏡を小さい布で拭いていて、ラードルフさんは若いのに腰を叩いていた。

数人の使用人たちも疲労で冴えない表情を見せながら清掃用具を片していたし、リーザに至っては、私を見ると急いで飛んできた。

リーザは私に飛びつくように近寄ってくると、ナイトドレスの裾をいきなり下げて、上に羽織っていたガウンのような上着の前をきつちり閉めた。

ああ、もしかして、足を見せるのははしたないとかそういう文化なのかな、やっぱり。

ありがちだよね、そういうの。

とはいえ、私は日本の女子高生。

制服の短いスカートを常日頃はいたり、夏がくれば水着も着て海でもプールでも練り歩いている訳だから、今更、バルツァーさんやラードルフさん他に生足を見られても、ナイトドレスの透過率がよろしくても、正直、あまり気にはならない。

彼らだって、年齢的にも女性経験が全くナイってことはないだろうしね。

彼らは少しの休憩の後、とりあえず今夜の寢床を拵えるために、

今度はベッドを運び込もうとした。

しかし、これが最大の難関だった。

なんせ出入り口の扉サイズが普通じゃないのだ。

廊下側の扉は私が腰を屈めないと入れないくらいだし、陛下の部屋側の格子扉は、縦幅は廊下側ほどは低くはなかったが、横幅が異様に狭かった。

成人男性一人通るのがやっとの幅しかない。

だから廊下側がダメなら陛下の部屋を通して、という手段も使えない。

バルツアーさんとラードルフさんが廊下に運ばれてきたキングサイズで装飾がいろいろついたベッドを見て唸っていた。

そりゃ唸りたくもなるだろう。

私が見たって部屋に入りやしないのが判る。

バラせるだけバラしたって、二つの扉からは絶対に無理だろう。

バルツアーさんが考えながら眉間を揉んでいると、リーザが困ったように『いますぐ用意できるベッドで、この扉から入るサイズのものにはないですね』と言った。

なんでも、なまじ王城だけに、しょぼいサイズのベッドは置いていないというのだ。

使用人棟まで行けばあると思うが、王の部屋の横の空間に入れていいものではない、と困り果てていた。

夜が明ければバルコニーから釣り上げて窓から入れられるかもしれないが、とバルツアーさんとリーザが意見交換をしていると、ラードルフさんが救いの意見を言ってくれた。

『騎士棟の上官用の部屋にある簡易ベッドはどうか』と。

上官用の簡易ベッドは、サイズこそ小さくてシンプルな作りだが、質は悪くはないらしい。

騎士棟は王の居住区域から使用人棟よりは近いし、とりあえず今日だけでもそれで手を打った方が良さだろう、と打開策を提案してくれたのだ。

私はなんだかもう流石に申し訳なくなつたので、今夜くらい毛布に包まつて寝ますよ？　と言つただけ、それは即座に却下された。

バルツアーさん曰く『陛下の貴女への扱いがいまいち把握できない以上、そんな危険を冒したくはない』とのことだった。

私はバルツアーさんの言っていることが判らなかつた。

陛下は私を珍獣として扱おうとしているからである。

『珍獣として振る舞え』と言つたではないか。

私なんて珍獣の鳴き声まで考えているくらいだ。

メーがいいか、ニヤーがいいか、ワンがいいか、ウサギみたいにプフとかブウブウがいいかとか。

だから毛布に包まつて床で寝るくらい陛下は気にしないと思うんだけどなとか考えている内に、ラードルフさんが再度珍獣部屋へ入つて中から両方の扉の長さを紐のようなもので測つてから、騎士棟に行くために部屋を出て行つた。

出る時、頭をぶつけて『イテツ』と言つていたのは彼なりのご愛敬だろう。

そんなこんなで上官騎士用のシングルサイズのベッドが運ばれてきて、廊下でまずバラせるだけバラし、陛下の部屋から様々な角度を試しながら部屋に入れられた。

この時、ラードルフさん同様、不幸にも巻き込まれた騎士棟に居た騎士が三人ほど居て、彼らは珍獣指定をされた私が珍しいからか、興味津津で私を観察していた。

観察されていたんだからその期待に応えないと申し訳ない気持ちになつて　　ベッド運んでくれたしね　　私は鳳凰のポーズをとつてみた。

両腕を上へ上げ手首を曲げて、膝を曲げて片足を上げる一般的なポーズである。

最後の仕上げにピーロロロくらい言つてみようかと思つていたら、騎士三人は何やら見てはいけないものを見てしまったかの如く、一

齊にさつと目を逸らしてしまった。

それを一部始終見ていたのだろう。

ラードルフさんがかつかつかと彼らに歩み寄り、何やら言っただけに頭を下げさせ部屋から退場させた。

その際、こちらに向けるラードルフさんの表情が何故か複雑そうだったのが印象的だった。

それに私が首を傾げようとした時、バルツアーさんとリーザが、ひと仕事を終えた満足そうな様子で私のもとへとやってきた。

二人揃って『就寝する準備が整いましたので、今日のところはもうお休みになってください』と言った。

まるで追いついて立てるように珍獣部屋へと私を連れていくと、彼らは妙に晴れがましい笑顔で私に挨拶をし、早々に出て行くこととする。

去り際、リーザだけが『珍獣様、明日、時間になりましたら参りますので、ゆっくりお休みください』と付け加えた。

それで今である。

あれから異世界トリップをした慌ただしい一日を終え、ベッドへ向かう途中で一度盛大にすっ転んだ後、疲れていたのかすぐに爆睡した。

夢も見なかった。

軽く揺り動かされて目を覚ますと、朝の陽が昇っていて窓から差し込み、ベッドすぐ傍にはきっちり支度した亜麻色髪清楚系美女のリーザと、これまた昨夜の疲れ具合はどこへやらなピシッと決めているバルツアーさんが居たのだ。

バルツアーさんは『今日は時間が取れないので、早朝の訪問、失礼します』と言って、私に何か言う前に、厚手の、高級紙と判る手触りの紙を一枚渡してきたのだ。

「おはようございます、バルツアーさん、リーザ」

とりあえず私は朝の挨拶をする。

挨拶って大事だね！

一日は『おはよう』から始まらないとなんとなく居心地が悪いも

のだ。

学校でも教室に入る時『おはよう！』と大声で挨拶すれば、皆がそれにかえしてくれていた。

爽やかな朝が毎日営まれていたのだ。

「おはようございます、珍獣様」

「おはようございます」

二人はすぐさま私の挨拶に応えてくれた。

しかし、珍獣様って。

昨日、リーザがそう呼ぶのに少々疑問を抱いたけれど、やはりその呼び名はもう固定なのかな。

まあいいけど。

珍獣様でも。

でもどうして様づけなんだろう？

そういえば法務長官であるバルツアーさんも、昨夜の第三騎士団長ラードルフさんもそれなりな地位の人だろうと思うんだけど、妙に丁寧な態度で私に接するんだよね。

不思議だ。

ま、珍獣は珍しいとか、珍獣保護法の適用生物は日本でいう天然記念物クラスだったりするとか、そんな理由だろうと私は踏んだ。

所詮、そんな事に大した意味はないのだ。

異世界トリップ王道設定お約束のひとつにも抵触しているしね。

「昨夜はよくお休みになられましたか、珍獣様」

リーザが柔らかな微笑み、私にガウンみたいな上着を着せ、相変わらずきつちり全てのボタンを閉めた。

それに少し窮屈さを感じながら、私は、どうせバルツアーさんしか居ないじゃん、なんてバルツアーさんへの男性意識否定思想を抱きながら、懸命にもそれを口にはしなかった。

なにせ私は、バルツアーさんもブルーヘヴンへの勧誘を考えているからだ。

彼はきつと便利な人材に違いない。

私の口元は自然に緩む。

「うん、よく寝れた。もうぐっすり」

「それはようございました。アルノルト様が珍獣様にどうしてもお見せしたい物があるとのことでしたので、まだお支度が出来ておりませんでしたがお通ししております。申し訳ございません」

「え、アルノルト様って誰？」

私は周囲を見回した。

部屋には私とバルツアーさんとリーザの三人しか見当たらない。

私のその反応に、バルツアーさんは軽く咳払いをして、頭を下げた。

「改めて自己紹介を。アルノルトはバルツアーと申します、珍獣様。法務長官をしております、爵位は子爵位を与えられております」
耳にした瞬間、私が心の中でガッツポーズをしたのは言うまでもない。

よっしゃ、貴族。

ナイス、バルツアーさん！

これでバルツアーさんもブルーヘヴン強制入会だよ！

拒否権は無いからね！

なにせ私の今後がかかっているから！

陛下に追い出されたらバルツアーさんちにお世話になるから！

私は幸先の良い展開にうきうきしながら、ベッドの中で足をもぞもぞ動かして喜びを表す。

すると足の小指に鈍痛が走り、思わず顔をしかめてしまった。

それにリーザが気づく。

「どうされました？」

「あ、うん。なんか昨夜ね、皆が帰った後、つまずいちゃって。その時、足の小指を思いつきりぶつけたんだよね」

私はベッドの中で小指を擦りながら言った。

リーザは『失礼いたします』と私に声をかけてから、バルツアーさんに見えないように上掛けを捲り、私の小指を確認する。

「内出血しておりますね……。後で医者を呼んで参りますわ」

「え、いいよ、わざわざ。ただ、つまずいただけだし」
リーザが顔を上げた。

「どこでつまずかれたのですか？」

そのリーザの疑問にバルツァーさんも反応した。

「確かに。この部屋につまずくようなところは無いと思いますが」
まあそれはそうだ。

なにせこの部屋にはベッドひとつしかないのだから。

しかし、私がつまずいたのは。

「床で」

「床？」

「床ですか？」

二人は怪訝そうに私の言葉を繰り返す。

床につまずいたのも言い訳はしっかりあるのだが、私はなんとなく恥ずかしくなって俯いた。

これじゃあ、どんだけドジなんだよ、って感じた。

そんな私にリーザが励ますように髪をすいてくれる。

リーザって美人で優しくて気がきいて完璧なんだよね。

うちのお兄ちゃんの嫁に来てもらいたいくらいだ。

きつとパパは泣いて喜び、ママはサンバを踊るだろう。

「どちらにしてもやはり医者を呼んで参りますわ。御御足の具合も心配ですし、顎の痣も見ていただいた方がよろしそうですもの」

「顎の痣？」

私は何を言っているのだろうと首を傾げかけて、思い出した。

もちろん昨日の出来事である！

「陛下かつー！」

あいつか！

あいつが昨日ぎりぎり力任せに掴み倒した私の顎か！

くそう、あの男、いつか目に物をみせてくれるわ！

私の美乳を直接掴んで貧乳判定して嘲笑しやがった加藤めの恨み

の分も倍掛けにして上乘せしてやる！

その怒りの声に瞬時に反応し、リーザを押しつけるようにして私の口を誘拐犯の如く塞いだのはバルツァーさんだった。

「sdhfどhappyいrヴえいうあhりめrぼ@t?????」

「お静かに！ 大きな声だけは出さないで下さい」

「nnnde?」

「判りませんか。隣の部屋には陛下がいらっしやいます」

自分でも何を言っているか聞き取れないのに、それを的確に理解するバルツァーさんの凄さを私は感じた。

さすが法務長官だ。

一国の法務長官ともなると、聖徳太子のような特技を持っていないといけないのかもしれない。

これはやはり是が非でもバルツァーさんにはブルーヘヴンに入会してもらわないといけない。

将来有望株大歓迎！

私のユトリのある生活の為にね！

私、苦勞だけはしたくないの！

貧・乏・撲・滅！

「よいですか？ 手を離しますので大きな声だけは出さないで下さいね。あと、陛下への暴言も。まる聞こえですから」

頼むからやめてください、な感じで私に言い聞かせるように言うてから、バルツァーさんはゆっくりと手を離れた。

そうしてちらりと背後に視線を送る。

正確には黄金の格子扉を。

黄金の格子扉は閉じられていて、陛下の部屋の側だけについている鈍重そうなビロード地っぽいカーテンが引かれていた。

ちなみにあの格子扉、鍵が破壊されている。

大方、陛下が面倒だからとかいうしょうもない理由で、ヘロルドさんの気絶の原因となった大粒の宝石と同様、叩き壊したんだろうと私は推測している。

暴力男め。

そのうちドメスティックバイオレンスあたりで訴えられてしまえ
ってんだ！

バルツアーさんは気を取り直す為か、小さく息をついてから改めて私に向き直った。

「非礼にも早朝にお支度の整っていない貴女のもとを訪ねたのは、先程お渡ししたものの件を簡単に説明したくて参りました」

私は無理矢理気味に話の流れを修正したバルツアーさんの言葉に、先程渡された紙に視線を落とした。

リーザも気になるような素振りを少し見せたので、彼女にも見えるように紙の角度をかえてあげる。

彼女は『よいのですか?』といった様子で目を瞬かせたので、私が頷いてみたら、リーザは嬉しそうに微笑んだ。

美人の笑顔はいいもんだ。
心が洗われる。

私は彼女に少しでもあやかりたいので、リーザの腕に頼ずりしてみた。

柔らかい良い匂いがする。

くらりときた!

よし! この美人ウィルスがどうか感染しますよーに!

そんな私の行動にまるで不審者を見るような目を向けながら、バルツアーさんは続けた。

「珍獣保護法について書かれています。貴女はこの法の適用者ですので、ご存じでいた方が良好だろうと持って参りました。……読めますか?」

「あ、読めるみたいです。……うーんと」

私は半分以上まだ寝ぼけている脳ミソを強制的に覚醒させながら、珍獣保護法に目を通した。

しかし読めるな！。

すごいね、異世界トリップマジック！

英語の成績が底辺を彷徨っていたとは思えないくらいに能力上昇度だ。

おいしい！

実においしい！

これが元の世界で遺憾なく発揮されていれば、私は今頃、東大を目指していた！

そして官僚とかになったりして、影で日本を動かし、世襲議員か何処かの企業の御曹司でもゲットして玉の輿に乗るコースが出現していたのに！

セレブ生活力モンだったのに！

人生つてうまく回らないものだよね！

「うわ、なんか私の生殺与奪って陛下次第じゃないですか、これ！ めっちゃめっちゃ恐ろしいんですけど！」

恐ろしいなんてもんじゃないよ！

恐怖だよ、これ！

生かすも殺すも陛下次第って、その権限が与えられているのがあの陛下だよ？！

私の顎をぎりぎり痣が出来るまで掴み、宝石や格子扉の鍵の破壊活動をしている非人道冷酷変態極悪鬼畜ドS破壊魔暴力男のあの陛下だよ？！

私は驚愕の事実バルツァーさんをマジマジと見た。

なんとかしてよ！ 法務長官！

「だから戯れに作られた法だと昨日言ったでしょう？ 施行当時、審議すらしていないと思いますよ。しかもあくまで獣用でしかありません。私はこの法自体を覚えていらした陛下に吃驚でしたよ」

バルツアーさんは肩を竦めた。

「いや、まあ、それは自分の部屋の横に格子扉のついた珍獣部屋なんてあったら、忘れたくても忘れられないんじゃないですか、流石に陛下も」

私の言葉にバルツアーさんは眩暈を覚えたようだ。

神経質そうな細い指を額に当てた。

「ああ、そうでしたね、珍獣部屋……」

私は再び紙に目を落とした。

「うーん、なんかこの法、珍獣の権利については何も記されていないんですね」

「ですから獣用だと」

「まあでも、異世界人を珍獣扱いする陛下の考えも判らないでもないですけどね。アメリカだって、宇宙人を捕獲したら実験体くらいにはしてるだろうし」

きっと何処か内陸あたりの秘密基地に連れて行って、体を開いて臓物を取り出してみたり、頭蓋骨を割って脳ミソ覗いて分析してみたり、皮膚を切り取り新種のウイルスでも打ちこんで喜々としながら生体実験とかしていそうだ。

むしろ生殺与奪を陛下に握られていたとしても、とりあえず珍獣として保護され、いきなり闇の魔石とか妖しいアイテムを体に埋め込まれてゾンビ紛いの存在にされなかつただけマシと言えるのかもしない。

「異世界人ですか……」

バルツアーさんは複雑な表情を見せた。

「あれ、信じてないんですか、私が異世界人って」

「私は貴女が現れた現場を直接見てはいないですからね。なんとも」
「でもでも、私ってば黒髪黒瞳ですよ？」

私は見て見てーとばかりにバルツアーさんに自分の髪を掴んで差し出すように見せた。

「異世界トリップものの王道設定の中には、黒髪黒瞳がその世界で

は、ものすごく希少で、その色彩故に、いろいろと特別な存在になって重宝されたりするんですよ！」

巫女になったり、王の花嫁になったり、女神になったり、勇者になったり、魔王になったり、生贄になったりね！

「黒髪黒瞳ですか？ それなら貴女と同じ色彩を持つ私も珍獣保護法適用者ですね」

バルツアーさんは呆れたように溜息をついて、中指で眼鏡を押し上げた。

「あ、そうですね！ 同士じゃないですか、バルツアーさん！」

「……………」
私はベッドから身を乗り出してバルツアーさんの腕をがしっと掴んだ。

バルツアーさんが身を強張らせる。

何故？

「一緒にこの珍獣部屋で過ごしましょう！」

そして陛下に追い出されたら一緒に行きましょう！

もちろんバルツアーさんちにね！

バルツアーさんは顔を盛大に引き攣らせて、腕を思いつきり引いた。

「っ、嫌ですよ！」

「またまたあ、照れちゃって、バルツアーさんったら！ この愛いや・ツ・め！」

「何者なんですか、貴女は！」

うん、私も極たまにそう思う時があります、はい。

「とにかく慎んで遠慮させていただきます」

「なんでなんで？ どこがそんなに気にいららないんですか？ おかしいなあ」

私は腕を組んで考えるポーズをとる。

果たして彼の気に入らないポイントはどこか。

あ、そうか。

「やだなあ、バルツアーさん。警沢者なんだから！」

私はバルツアーさんの腕をバシッと叩いた。

バルツアーさんはもう引きまくりな様相を呈していたが全く気にはならなかった。

良い思いつきにつきつきしていた、というのもある。

「リーザが足りなかったんですね！」

「は？」

「ねね、リーザ」

私は我儘警沢者バルツアーさんの為に、一肌脱ごうとリーザの方を向いた。

リーザは品よく首を傾けて私の言葉を待っている。

「はい、なんでございましょう？」

「バルツアーさん、リーザが足りないんだって。我儘警沢者だよね！　リーザ、これから私と一緒にこの部屋に住んで、バルツアーさんに一緒にご奉仕を手伝って！」

リーザが長い睫毛が鎮座しているキレイな目をぱちぱちと瞬かせた。

「ご奉仕ですか？」

「うん！　3Pだよ！　あ、3Pって言うのはね、私とリーザとバルツアーさんと三人で同時に性交をする事なんだけ

「貴女はいつたい何をおっしゃってるんですか！」

バルツアーさんは私の言葉を大きな声で遮った。

あれ、バルツアーさん。

さっき、大声は出すなって自分で言っただけだったっけ？

ま、私は別にいいんだけどね？

「え、何をおっしゃってるって、バルツアーさんへのご奉仕の事ですけど？」

「そんな事、誰が頼みました？！」

「やだなあ、頼まれなかったってバルツアーさんの願望欲望妄想くらい判りますよ、私。美女二人に上からも下からも後ろからもご奉仕さ

れて出しまくって、極楽天国に行きまくりたいでしょ？ ね、リーザ」

もちろん美女二人のうちのひとりは私だよ！

「え、はい」

「同意しないで下さい！ リーザ殿まで！」

「だから照れなくなつていいですつてば」

「照れてなんていませんよ！」

「じゃあ何ですか？ これ程、男の欲望を刺激されるシチュエーションつてなくないですか？」

私はバルツァーさんの目の前に人差し指を一本立てて、名探偵が動機と証拠を並べ立てて犯人を追いつめるように言う。

この場合、追いつめられる犯人はもちろんバルツァーさんね！

「だつてね？ 狭い部屋、美女二人。隣室は最高権力者の部屋、音はダダ漏れ。喘ぐ声、籠る空気。汗のにおい、精液のにおい。肌が擦りあう音、体がぶつかりあう音。何度も襲いくる快感、肌伝わる美女の震え。仄暗い室内、淫靡な空間。自分が何度も美女と共にイキまくるのを隣室で自分の上司である最高権力者が聞いているんですよ？ もうイキまくりの燃えまくり興奮しまくりじゃないですか、このシチュ！ 萌えの原点ココにありかもしれませんよ！」

「燃える訳がないでしょう?! なに言っているんですか！ どこ地獄ですか、それは！ 燃えるどころか恐怖に震えて自我を失い息絶えますよ！ 私にそんな悪趣味はありません！」

「悪趣味つて」

「もうこの話は止めましょう。くだらない！」

「えー」

「『えー』じゃありませんよ。いい加減にしてください！ 話を戻しますよ?!」

「はい」

仕方ないなあ。

私は大人だからバルツァーさんの子供じみた羞恥による逆上を寛

容に許してあげることにした。

その証として、彼の腕をぼんぼんと宥めるように軽く叩く。

「……」

「リーザ、残念だね。せつかくの私とリーザとのコラボだったのに」

「はい、残念です」

「……………。話、戻させてください。もう本当にお願ひします」

バルツアーさんは二度ほど深呼吸をすると眼鏡の位置を直し、いつものまにかベッドの上に落ちていた珍獣保護法が書かれている紙を拾って、私に再度手渡した。

「この珍獣保護法をご覧になって、何か思う事はありませんか」

「え？」

「先程おっしゃっていた生殺与奪や珍獣の権利に関すること以外です」

つい今しがたまでとは打って変わったバルツアーさんの真剣な面持ちに私は眉をひそめつつも、真面目に珍獣保護法に目を通した。

「うーん……、あえて言うなら罰が重いかなあ」

日本にも死刑はあるけれど、これに書かれているのを素直に解釈すると、故意に給餌や給水を停止してしまっただけで、死刑になってしまうってことだろうか。

それに殲滅っていうのも穏やかではない。

「正解です。貴女はこの保護法の適用者です。それを肝に命じて頂きたいと申し上げたいのです」

「は？」

「くれぐれも貴女には、この法を他人に触れさせるような軽率な行為だけは気をつけていただきたい」

少々きつい物言いになってきたバルツアーさんに、私は訝しげな視線を向けた。

バルツアーさんはどこまでも真剣な顔をしている。

「どういう意味ですか？」

「不幸な第三者が巻き添え、いえ、法に触れてしまうようなことが

あれば、こんなろくに審議もされていない法、瞬時に悪法に早変わりですよ」

「珍獣の保護が？」

「違います、規定されている罰則がです」

「……まあ、確かに死刑は行き過ぎかもしれないですけど、でもなあ。例えばの話ですけど、珍獣を保護するのに死刑くらい規定されていけば、逆に何にもされないんじゃないですか？ 触らぬ神に祟りなしというか」

それにだ！

私はバルツアーさんをきつと見上げた。

私は私で言いたい事がある。

異世界に突然やってきてしまった脆弱可憐で繊細な年頃の乙女としてね！

もの凄く自己中心的発想であることは私だって重々承知な事だけども！

心が全く痛まない訳ではないけれど！

でも少なくとも自分だけは、自分を精一杯守ってあげたい、自分だけは世界が自分を中心に回っている事を信じてやりたいのだ！

自己中上等！

自己愛最高だよ！

「それに珍獣に何もしなければ、特に害のない法律じゃないですか。もしも私が殺されたら、相手が死刑にされて何かいけないんですか。私、異世界人だけど、私にだって生きる権利ありませんか。私、身寄りも知り合いもひとりも居ないこの異世界で絶対的な庇護が欲しいです！ それが例えどんなに極悪非道で悪辣な方法であったとしても、私、少しでも安全である手段が欲しいです！ 自分のために！ 自己中の考えが含まれている事は理解してます。けど、私、別にだからって、望んで誰かが酷い目にあえって言っている訳じゃなくて」

だんだんと興奮してきた私の言葉を、バルツアーさんは片手をあ

げて制した。

癖なのだろうか、少々黙りこんでから眼鏡を外し、懐から取り出した小さな布でそれを拭き、再度かけた。

「貴女のおっしゃりたいことは少しは判るつもりです。ですが、もしもです。仮に貴女の命が奪われたとして、貴女の命と奪った者の命、それはいいとしましょう。ひとつの命対ひとつの命です。それに珍獣は王の所有物。それに手を出した者には王の威信の為に相応の報いが必要ですから。……しかし、貴女一人の命と団体の殲滅、これには慎重にならざるをえませんね。団体が何であるかにもよりますが、殲滅するにしても此方側の戦力にも命の代償があるんです。団体の戦力が大きかったらどうしますか？ 王の威信の為にしても、その大義名分が貴女ひとりの命では足りないと思いませんか。貴女はあくまで珍獣にすぎなく、我が国の王妃という訳ではないのです。私は、貴女一人の命と多数の命が等しいとはとてもではありませんが言えません」

「……………」

そんな事は言われなくたって判っているけど！

私はただ保護が欲しかっただけで。

それには少しでも確かなものが付随していればいいな、と思っただけで！

そうは思っただけで、バルツァーさんの正論に私は何も言い返せなくて唇を噛み締めるしかなかった。

その時だった。

鈍重そうなカーテンを引く衣擦れの音と、格子扉を開ける微かな金属音が聞こえた。

「そうか？」

「陛下！」

「おはようございます、陛下」

バルツアーさんとリーザがそれぞれ声を上げる。

私は喉が張り付いたみたいにくまく機能しなくて、声を出そうと思っただがやめた。

朝の挨拶は誰に対しても欠かしたくは無かったのに。

それが私の信条だったんだけど。

突然、場に登場した陛下は朝から澄んだアメジストのような瞳を細めて私を見ながら、ゆっくりと優雅な足取りで私の方へ近づいてきた。

傍らにいるリーザを数歩下がらせ、彼女の居た位置に立つ。

頭上に陛下の手が置かれた。

まるで店に陳列された大きな縫いぐるみに、とりえず手を置いてみたといった感じで。

陛下は一連の動作を完了すると、バルツアーさんの方へと向いた。「この世界の者は、この世界に履いて捨てるほど存在するが、異世界人はそう居るものでもないだろう？ 少なくともトリエスが把握している異世界の者は、この珍獣一匹だけだ。希少性言えば、断然この珍獣だろう」

「匹……」

私の呟きに頭上の陛下の手が、ぽんぽんと弾んだ。

「しかし、」

「とはいえ、余もこれがろくでもない法であることは認識している。そうお前が心配する事もなかるうよ。流石に闇雲に殲滅戦に繰り出す愚は、余も全力で阻止するが？　そもそもバルツァー、お前はこの小娘にそこまで無意味に事を大きくしたことを言いたかった訳ではないのだろう？　この無価値な異世界の小娘に一体なにが起こるといふんだ。ここに在る限り、せいぜい水を与え忘れたくらいの事しか起きぬだろうに」

陛下は呆れたように息を吐いてから、バルツァーさんを少し窘めるような音を出した。

「あまり小娘に過ぎた脅しをかけてやるな。異世界の者といつても、所詮、ただの小娘に過ぎんのだからな。判っているとは思うが」

「……は。申し訳ございません、陛下」
バルツァーさんは穴があいたら入りたいといった様相で、恐縮しまくっていた。

その様子に私もなんだか居たたまれなくなる。

陛下はそんなバルツァーさんを見やったあと、私の方へと向いて、頭上に乗せていた手を頬へと滑らせ、顎を捉えた。

昨日とは違って、軽く触れたような捉え方だった。

「小娘、お前も無闇矢鱈に雑ぜ返すから話が不要に大きくなる。お前も悪い。言われたくなければ、少しは考えて言動することだ。バルツァーは、お前に軽率な行動を慎むようにと言いたかっただけなのだからな」

私は陛下の目が見れなくて伏せてしまった。

本当にその通りだからだ。

自分にそういうつもりがなかったとはいえ、私は家族によく注意されていた事を陛下に言われてしまったのだ。

「返事は」

「はい、気をつけます」

私はちよつとだけ勇気を出してバルツアーさんの方を見た。

「バルツアーさん、ごめんなさい」

「いえ、私こそ申し訳ございませんでした。大人気無い限りです」
バルツアーさんは苦笑して私に小さく頭を下げる。

陛下は私の顎を捉えていた手を外し、私が手にしていた珍獣保護法について書かれた紙を取り上げた。

陛下の目が紙面を走る。

「どのみち余次第だろう、このような法は」

言つて陛下は私に『附則を見る』とベッドの上に放り投げた。

「ところでバルツアー、お前はここに長居しているようだが、暇なのか？」

「い、いえ、そういう訳では決して」

バルツアーさんは、はつとしたように慌てて姿勢を正し直した。

それに陛下は、わざとらしく『ふむ』と言つてから、バルツアーさんに向かつて意地の悪い笑みを浮かべる。

……ああ、魔王様の笑みだ。

私はバルツアーさんに心の中で合掌した。

「そうか？ 余はてつきりお前がこの珍獣部屋に住み、夜な夜なお前の“声”を余に聞かせたいのかと思つたのだがな？」

「……は？」

陛下の言葉に、一瞬、脳内で処理しきれなかつた様子で呆けたバルツアーさんは、それを咀嚼するように理解すると、顔が瞬時に蒼白になり、次いで茹でダコのように真っ赤になった。

もう全身の血という血が顔に集まつてしまいました、といったような真っ赤さだ。

ごめん、バルツアーさん、本気で！

私はバルツアーさんに向かって両手を合わせて南無南無と声には出さずに謝つた。

「お前がそういう趣向の持ち主だとは知らなかつた。余ももう少し

人への観察眼の鍛錬に力を注がないとならんようだな？」

「いえ、あの……」

「まあ余としては、流石に男の“声”は遠慮願いたいところだがな。お前とは趣向が合わぬようで済まんが」

明らかにからかいがふんだんに含まれた陛下の言葉に、バルツァーさんはどう対応してよいか判らず恐縮し困惑しまくっているようだった。

そんな彼に私は謝罪の意も込めて、不幸なバルツァーさんへの救済策を必死で考える。

少しでも話の方向を逸らせることが出来ればいい。

何かないか……あ、あった。

「陛下、陛下」

私はすぐ傍に立っている陛下の装飾がついて高そうな服の端を引っ張った。

陛下の紫の瞳がそれに応じ、私を捉える。

「なんだ」

「陛下、今朝はお医者様に診てもらわないんですか？」

それとももう診てもらいました？ と首を傾げてみせた私に、陛下が話の脈略が掴めないといったような怪訝そうな顔をした。

「医者？ なぜ余が医者に診てもらわねばならん。根拠は？」

「え、だって血尿？」

その私の言葉に、すっと部屋の温度が下がったのが判った。

バルツァーさんとリーザの息を飲む音が聞こえる。

「……ほう？ なぜ医者に診てもらわねばならんほど、余に血尿が出ているとお前が判る？」

「だって、陛下。今朝、ベッドの上に血尿が出ていませんでした？

結構、いっぱい」

それはもうオネシヨのようにね！

よっ、オコチャマ陛下！

「やはりお前か！」

陛下は声を荒げると、私の頭をがしつと鷲掴みして自分の方へと引き寄せた。

痛い、痛いよ、陛下！

私はベッドから落ちそうになるのをシーツを掴んで必死に抵抗する。

「痛いです！ 陛下！」

もう何なの、この暴力男！

DV反対！

DV撲滅！

「小娘、お前、余の寝台の上でいったい何をしていた？ 飲み物を溢しただけではないだろうが！」

「え、飲み物しか溢してないですよ、私！」

罪の捏造だ、冤罪だ、濡れ衣だとの思いで叫んだ私に、リーザが悲鳴のような声音で陛下に平身低頭の勢いで謝罪する。

「もっ申し訳ございません！ 陛下、気づきませんでしたわたくしの手落ちでございます！」

「え、なんでリーザが謝るの?!」

そんなリーザに驚いて目を見開いた私に、彼女は構わず重ねて謝罪し続けた。

「珍獣様に陛下の寝台で時間を潰すよう勧めたのはわたくしでございます！ どうぞお咎めはわたくしに！」

リーザの必死な様相に私はもう吃驚だ。

何故、私のした事で彼女がこんな親の減刑を嘆願するかのようにならなければならぬのだろうか？

私は自分の理解できない事象に、陛下に鷲掴みされた頭の痛みも忘れ、シーツを掴んでいた両手で陛下の上着を縋りつくように掴み、抱きついた。

なんだか怖い、とつても。

「……陛下」

「……」

「陛下つてば」

陛下が溜息をついた。

驚掴みする手を外し、ベッドから落ちそうになりながら自分の身に縋りつく私を抱きかかえるようにして支える。

「なんだ、小娘」

「どうして……どうしてリーザは私がした事でこんなに必死に陛下に謝るんですか？」

「判らんのか？」

「はい、判らないです」

陛下は私の重心をベッドの方へとやりながら、私の背を軽く叩いた。

「少々意味合いが違うが、これが先程、バルツァーが言いたかったことだ」

「え、バルツァーさん？」

陛下の言葉に私は彼を見上げ、次いでバルツァーさんを見た。バルツァーさんは何とも言えないといった表情で私に頷く。

そしてリーザに近づくと、彼女の身を支えるようにして起こした。「望む望まないに関わらず、珍獣として保護されたお前の行動如何で、周囲はこのように振り回され、場合によっては処罰されるといふ事だ。珍獣保護法をなぞるのなら死刑と殲滅か」

陛下の言葉に私は慄然とした。だって、私は。

「陛下、私、そんなこと望んでいません！　だって私、殺された訳じゃないじゃないですか！」

「お前の被害の程度の問題ではない。これが珍獣保護法だと言っているんだ」

陛下は私の前髪を掻き上げて額を出すと、特に意味もない風に親指で押し、擦った。

「小娘、お前は絶対的な庇護が欲しいのだろうか？」

「庇護……」

「異世界人であるお前が庇護や保護を欲しがるのは、それを今まで

特に意識する必要のなかった余でも理解できる。当然だな？ だが小娘、お前の世界、国にもあるだろう？ 受ける権利、安全に対し、己に課せられる義務や責任というものが。どうだ」

私は陛下を見上げ、喉がからからに乾いて掠れるのを叱咤して声を捻り出した。

「……あり、ます」

「ほう？ 例えばなんだ。得る権利や安全に対し、お前やお前の家族が国へ差し出す代償は」

私は目を泳がせながらも必死で陛下の問いに対する答えを探す。

「私は、……最近まで教育の義務がありました。まだ引き続き学生をしています」

「親は？」

「国に、税金を払っています。パパは働いていて、所得税とか住民税とか、あと消費税とかも。あ、ウチ、パパが三十五年ローン組んで買った持ち家があって、固定資産税も払ってます。自動車税とかも……」

「成程。お前もお前なりの義務を国に果たし、お前の親はお前たち家族の為に、少なくともそれだけの税を国に納めている訳だ」

「……はい」

「なれば小娘。お前にとって例え此処が異世界であっても、お前は今ここに存在している訳だな？」

「はい」

「お前は今、この国の法で保護されている身だ。珍獣としてな。しかした。如何に珍獣としてであってもお前は完全なる獣という訳ではない」

「……はい」

「その場合はだ。お前に何かしらの責任が生じるとは思わんか？」

「……」
「当然、生じるはずだ。無論、お前に税を払えと言っている訳ではない。お前は珍獣として余の名の下に保護している。もしお前に税

を納める義務が生じるのであれば、珍獣の所有者である余がお前の分も税を納めるべきなのだろう。……ここまでは判るな？」

「……はい」

そこまで言うてから、陛下は私の顎をつと持ちあげて、まるで瞳を奥まで覗き込むようにその紫の瞳を合わせてきた。

私はもうどうしてよいのか判らなくて、自分の気持ちも全く判らなくて、陛下の服をただ掴んでいるしかなかった。

「今のところはお前に何ら義務はない。ただ、庇護と保護を求めるお前に、そして珍獣として保護されながらも獣になりきれないお前にはどうしても責任は生じる。それが先程、バルツァーが言っていた軽率な行動を慎むという責任だ」

「軽率な、行動……」

「そうだ。珍獣として保護されているお前がだ。深く考えずに軽率な行動をした結果、今回のリーザのように、お前が意図しなくとも、望んでなくとも、お前に何かあれば、罰せられるのは、本来なら罰せられるべきお前ではなく、お前の軽率な行動に巻き込まれたリーザのような第三者だということだ。何も故意にお前に害を成そうとする者だけが保護法の違反者という訳ではないのを、その頭に叩き込んでおけ」

「……へい……か」

「泣くくらいなら初めから考えて行動しろ」

陛下は呆れたように言うてから、私の目元をぐいと親指で乱暴に拭った。

「……まあ、そもそも大事にするような話では全くなかったんだがな。お前がいまいちよく判っていないようだったから噛み砕いて言っただが」

「う……」

「ああ泣くな、鬱陶しい！」

陛下は面倒臭そうに言うて私の頭をぐしゃぐしゃに掻き回してから、今度はリーザに視線を向けた。

「リーザ」

「……はい、陛下」

「この度の事、お前には何ら責はない」

「しかし」

「確かにこの城に出入りする普通の令嬢相手ならお前は何かしらの責を問われるだろう。しかしだ。相手はこの珍獣だ。この小娘の珍妙、且つ奇怪な行動言動は誰にも予測は不可能だ。少なくとも余には出来ん。その責をお前に問うのは流石に酷だろうよ」

「陛下……」

リーザは先程のバルツァーさんのように恐縮しきつた様子で腰を落とし、頭を下げ続けていた。

陛下はその彼女の亜麻色の頭上を静かに見据える。

「お前も事を重く取りすぎだ。お前の目には、余はそれほどの暴君にでも映るか」

「いいえ、そういう訳では！」

リーザは、はっとしたように顔を上げ、陛下の言葉を否定しにかかる。

「リーザ、お前は余の意図を正確に把握し、理解して、的確かつ迅速に行動してもらわねば困る。余の言っている意味、判るな？」

言われた瞬間、リーザの目が見開く。

一瞬、彼女は言葉を詰まらし、息を飲んでから、目を伏せ再び頭を下げた。

「御意に、陛下」

陛下はリーザのその様子に満足そうに目を細めて見据えていたが、私はなんだかリーザが訳も判らなく可哀相に思えてきて、陛下の服から手を離し、ベッドからよろけるように出て、彼女のもとへ近づいた。

近づいてから、私はリーザより姿勢を低くする。

下げられた顔を覗き込むようにしながら、彼女の手を握った。

「リーザ、ごめんなさい」

「珍獣様……」

「本当にごめんなさい。私、よく判ってなくて」

「そこまで言ってから、私は陛下を見上げるように向き直った。」

「陛下も、ごめんなさい」

「ほう?」

陛下は私をからかうように片眉を上げた。

私はそれに少しむっとしながらも、涙の後をガウンのような上着の袖でごしごしと擦った。

「もう軽率な行動は取りません」

「その頭で、どこまで判ったものかな」

「判りました!」

「しっかりバツチリ判りましたとも!

私だつてリーザに迷惑なんて掛けたくないし!

陛下は肩を竦めた。

「それは良かったことだ」

「だから」

「だから?」

「陛下、リーザを苛めないで下さい!」

「……………」

「ち、珍獣様、それは違いますから」

「違くないよ、リーザ! 全然違くない! リーザ、ちつとも、これっぽっちも少しも悪くないのに、明らかに今、陛下に苛められてたじゃない! 陛下! ジューズを溢された恨みがあるのなら、犯人の私に晴らしてください! 犯人は私で確定なんですから! 受けて立ちます、私! 張り切つて!」

「……………もうよい」

私が張り切りの固い意志を見せようとファイティングポーズを取ると、陛下は面倒そうに、うんざりしたように手を振ってからサララストレートの黄金の髪を掻き上げた。

そして格子扉の方へと歩きだす。

「この話は終いだ。馬鹿馬鹿しくてこれ以上付き合つてられん。リ
ーザ、珍獣を着替えさせ、余の部屋へ連れてこい。朝の餌の時間だ。
バルツアー、お前もいい加減、仕事に戻れ。そんなに暇ならいくら
でも雑用をくれてやる」

陛下は最後の最後でバルツアーさんを地獄の底へ叩き落とすよう
な事を言いながら格子扉の向こうへ消えた。

バルツアーさんはすっと息を一瞬止めてから、慌てて廊下への扉
の方へ向かう。

そしてそういった場合のお約束通り、彼は盛大に頭をぶつけて、
よろめいた。

： 9（後書き）

陛下と私と珍獣保護法
： 四百字詰原稿用紙 約68枚

トリエス王国の王都ヴィネヴァルデは、今現在、大陸屈指の規模を誇っていた。

豊かで、治安も比較的によく、そこに住まい行きかう人々の活気も目を見張るものがあった。

物は溢れ、人が集う。

王国は未だ繁栄の限りを知ることのない、春を謳歌する国であった。

トリエスは大陸にある国の中では若い部類に入る国であったが、その勢いは他の追従を許さないものがあった。

故に、その王都の中心に確固たる存在感で示し在る王の居城ヴィネリンス。

大陸古語で『純白の乙女』という意味を持つこの王城は、王国の盛栄を体現するかの様な規模と威容、そして艶麗、絢爛さであり、王都を訪れる者は必ず、その姿に息を飲むという　　なんて事は、勿論、今の私の知るところではない。

当然ね。

そんな私的にはどうでもよい事よりもである！

純真可憐で繊細な麗しの乙女である私の柔肌、美肌に重大なる危機が襲来中なのだ！

陛下が自分の部屋に戻り、バルツァーさんが頭をぶつけてよろめきながらも珍獣部屋を去った後、まるで憑き物が落ちたかのようにスッキリとした表情のリーザに言われるがまま、指示されるがまま

に私は朝の支度をしていた。

顔を洗って、リーザに髪を梳いてもらって。

その後、リーザの髪型みたいにキレイに結い上げてくれるのかな、と思っていたけれど、何故か後ろ一本に束ねてそのまま背中に流したのに疑問を持ちつつも、ガウンのような薄手の上着を脱ぎ、ナイトドレスを脱いだのだ。

その瞬間、私の柔肌美肌の重大なる危機が判明したのである！

開いた口が塞がらないとはこのことだ！

私は脱いだナイトドレスを床に叩き付け、前に立っていたリーザを思わず押しつけて、脱兎の如く突撃したのだ。

当然、隣の陛下の部屋にだよ！

あまりの怒り、あまりの腹立たしさに私は黄金の格子扉を蹴り開けた。

その勢いに格子扉は盛大な金属音を響かせる。

「陛下っ！」

「喧しい！」

陛下は突然部屋に乱入してきた私を素早く目で捉え、紫の瞳を凶悪に光らせて、魔王様の如く私を睨みつけた。

そして私を見るなり、嫌味なくらい整っている眉をこれ以上ないくらいに寄せる。

「お前はその舌の根の乾かないうちに何をしている！」

「何って何ですかっ！ 舌の根の乾かないって何ですか！」

ふざけるな！

なんで陛下が怒鳴り、怒る権利がある？！

怒りに身を任せて陛下をタコ殴りの刑にする権利があるは、この私の方だ！

よくある応接セットの超豪華版みたいなソファーに座り、優雅にティーカップに口をつけて手に書類らしきものを持っていた陛下に、私は、ずんずかずんずかと足音荒く近づいた。

それはもう、集合住宅なら下の居住者に大迷惑だから決してやっ

てはいけない歩き方、踵を床に叩きつけ歩きである！

「お前はつい今し方、軽率な行動をとらないと余に言わなかったか！ 泣きながらな！」

「言いましたよ！ だけど、そのことと今と何の関係があるんですか！」

言いながら私は陛下の座っている眼前に立った。

波止場にあるビットに片足を乗せるかの如く、彼が腰を下ろしているすぐ脇に右足を勢いよく乗せる。

絹張りゴージャスソファーがその反動で揺れた。

陛下の額に青筋が走る。

「それが軽率な行動だと言っているんだ、馬鹿者が！」

陛下は持っていた書類を私に投げつけ、ティーカップを乱暴にソーサーに置いた。

その陛下の腹立たしげな挙動に、勿論、私が更に大切にしたのは言うまでもない。

というか、今、純真可憐で繊細な麗しの乙女である私に物を投げましたか、陛下！

この暴力男め！

調教してやるから、そこに正座だ！

誰か鞭を持ってこい！

勿論、バラ鞭じゃないよ！

一本鞭ね！

バリバリ上級者向けだよ！

容赦なくビシバシいくからね！

「これのどこが軽率な行動だと言うんですか！ そう思う理由を四百字詰め原稿用紙百枚にまとめて提出して下さいよ！ 今すぐ！」

「小娘！」

「何かというと小娘小娘小娘小娘って！ 私は珍獣二号なんでしょ、陛下！」

自分で言ったんだぞ！

その不適切生意気発言前科二犯のその口からね！

「屁理屈を言うな！」

陛下が苛立たしげに立ちあがった。

それと同時に、私は右足をかけていたソファーに飛び乗った。

当たり前である。

私より遙かに背が高い陛下に見下ろされるのは、この状況で我慢ならないからだ！

高さでもって威圧するなんて手には乗らないぞ、陛下！

私はソファーの上に仁王立ちになり、腕を組んで陛下のイケメン面を睨みつける。

くそ、朝っぱらからキラキラしい顔しやがって！

そんな私に対し陛下は眉を寄せるどころか、眉間にも鼻頭にも皺を寄せんがばかりに顔をしかめた。

そしてブリザードが吹きすさぶかのような視線でこちらを睨み、頭の前から爪先まで心底嫌そうに私を見遣る。

部屋中が絶対零度の亜空間に放り込まれたかのような痛すぎる空気を発していて、部屋に控えていた陛下付きの全ての使用人が恐怖に震えて逃げ出さたくて仕方が無かったなんて、勿論、言い争い当事者同士である陛下も私も気付くはずがない。

「そもそもお前のその格好は何だ！」

「何って！ ブラにカボチャパンツ姿ですが、それが何か?!」

そう！

陛下の前で金剛力士阿形像の如く、上半身裸に近い状態で怒りの表情を顕わにしている今現在の私の格好は、近所のスーパー購入価格二十パーセント引き二千九百八十円の、寄せて上げて寄せて上げて寄せて寄せて寄せて寄せて更に寄せてとにかく寄せまくる分厚いパッド入り貧乳御用達、超優れ物メイドインジャパンの白地に水色レース付きAカップブラと、布地とそれに使われている装飾布こそ質の良いシルクと木綿とレースを惜しみなく使用しているけれど、前から見ても後ろから見ても逆さにして見ても、どこをどう見ても

野暮つたいカボチャパンツにしか見えないトリエス王国製純白カボチャパンツ姿だ！

「それが何かでは無いだろうか！」

五月蠅いよ、陛下！

この格好で何が悪い！

現代日本では絶滅危惧種認定をくらっているブルマーよりも布地をふんだんに使っているこんなパンツ如きを人前に晒したって私は屁でもないのだ！

昨夜の事だ。

ひとりで浴場に行つて、入つて、出された衣服を身にまとう時、このトリエス王国製純白カボチャパンツと私は遭遇したのだ。

目にした時はもうびっくりなんてもんじゃない。

何これ?? な心境だった。

ブラに関してはトリエス製のものは着け方がイマイチ不明で、聞ける人も周囲に居なかつたから、ちよつと汚いかなとは思いつつも日本から身に着けてきたマイブラをそのまま再び着けた。

しかしである。

いくら私がトリエス王国製純白カボチャパンツに驚き慄いたといつても、既に私のお気に入りパンツは、陛下の夕飯のお陰で肉汁シミシミパンツと化していたし、例えばシミシミ化していなかつたとしても、流石にパンツは同じのを履きたくはない。

トリエス王国製純白カボチャパンツは、そう、言うなれば“ちようちんブルマー” に似ていなくもなかつた。

ちようちんブルマーを白いシルクにして、木綿を使い少し膨らませ、腰の部分をヘソ付近で同色のリボンで止め、両足を出す部分は付け根より八センチくらい下のところで、やはり同色のリボンで結び止める。

で、そのリボンで止められた付近は、もうワシヤワシヤな感じでレースを使いまくるデザインだ。

ぶつちやけ、もっさりしている。

向こうの世界にもズロースがあるが、ああいうものじゃない。

いや、確かにこのトリエス王国製純白カボチャパンツは、デザイナー的にはカワイイと言っているのかもしれないが、それはあくまで上から下までロリータファッションでバッチリ決めていければの話だ！

普段、ノーマルな格好をしている女が、脱いだらその下はロリータ仕様トリエス王国製純白カボチャパンツを履いていました、なんて事だったら！

私が男で、これから性行為に至ろうとしている時にそれを見たら。

「萎える！」

絶対に萎える！ 断言していいよ！

パーシヴァル様に宣誓してもいい！

「何？」

陛下は話の流れが掴めなかつたみたいだ。

これ以上ないってくらいに嫌そうにしかめていた顔を少し元の位置に戻して、疑問符を浮かべた。

「萎えるって言うてるんですよ！ 陛下、何ですか、このトリエス王国製純白カボチャパンツは！ これ、トリエスでは標準仕様なんですか、もしかして?!」

私は履いているカボチャパンツの膨らみ部分を両手でそれぞれ左右に引っ張り、陛下によく見えるようにピンと張った。

陛下はその私の動きにつられてカボチャパンツに視線を移動する。目にした途端、彼は嫌そうな表情に加え、何とも言えないというか苦虫を噛み潰したような顔をした。

「かぼちゃぱんつ？ …… お前が何を言いたいのか余にはさっぱり判らんが、普通の下着ではないのか？ 人に見せるものではないがな」

私は陛下のその言葉に呆気にとられた表情で返した。
全く信じられない。

この男は何も理解していないし、判っていない。

こんな人物に権力の頂点に居座られているトリエス王国全国民の
何たる不幸なことか！

同情するよ、トリエスの民たちよ！

この私が責任をもって、萌えとエロ必須グッズを陛下に教えてお
くからね！

異世界日本文化の伝道師の役、買って出るから、私！

「陛下は何も判っていません！」

「何をだ？」

彼は先程の私と同様、腕を組んで、寄せていた眉を更に寄せた。なんだかジツクリ腹を据えて私に対応しようとする雰囲気を見せだす。

身構えた、という感じかもしれない。

どちらにせよ、良い心掛けだ、陛下！

私はこれから陛下に、トリエスの民の為にも日本の萌えとエロ必須グッズを教授するんだからね！

「陛下、下着は見せるものなんですよ！」

「何？」

「下着は見・せ・る・も・の・な・ん・で・す！ あのですね、陛下」

私は彼の注意を更にトリエス王国製純白カボチャパンツに向くよう、右の骨盤あたりをパシパシ叩きながら、先を続けた。

「陛下はさ、これからエッチ、じゃなくて、性交しようとする相手が、こんなもつさりロリロリカボチャパンツを履いていて、萎えないんですか？」

萎えないと言われたら、私的には激しく驚きだけだね！

陛下が唸るように声を絞り出した。

「先程の萎えるとはそういう意味か」

「え、勿論そうですね。『萎える』に他にどんな意味があるんですか？」

私は陛下にモノを教授する側として、眼前に立つ陛下の左肩にぽんと手を乗せた。

ありがたく教えを乞いたまえ、だ！

無料講習だよ、感謝してね！

出血大サービスだよ！

「だってね？ 陛下。普通、こんなもつさりロリロリカボチャパンツじゃ、起つものも起ちませんって。下手すると、ロリコンに思われちゃいますよ？ 少なくとも私だったら起ちません！」

「……起つとか萎えるとか、お前な」

陛下の私に向ける視線が、怒りと嫌そうなものを見るものから、だんだん未知の生物を見るそれへとシフトしていく。

が、私は全く気にならなかった。

なぜなら、私は日本文化伝道師という重要な使命を帯びているからだ！

「陛下、下着というものはですね、布地をたくさん使えばいいってもんじゃないんです。しかもこんなスケスケ度皆無のカボチャパンツなんて却下です。もう大却下ですよ！ 論外です！ 下着はね、微妙に透けているのがいいんです。しかも体のラインを出したものですよ！ お尻の形とか、前方下部分に寄る皺具合がすっごくすっごく重要なんです、下着って！ 体のラインを出し、且つ、微妙に透ける。チリ毛が透けるんですよ！ ……あ、陛下、チリ毛って判りますか？」

「ちりげ？ ……いや判らん」

「あーもう、本当におキレイな桐箱入りお坊ちゃまなんだから！ 仕方ないなあ。陛下、チリ毛はね、陰毛の事ですからね！」

「……………」

「チラリズムがいいんですよ！ 陛下、見え隠れする淡い色気の方が最高のエロ度なんです！ モザイク無し全開オープン御開帳なんて全く萌えません！ エロ度皆無ですよ！ そんなもので起つ男の子しか居ません！ 見せつつも微妙に隠しているくらいが丁度いいんです。判りますか？ この上級者向けの色気！ ね、へ・い・か！」

私の言っていることを理解しているのか確かめたくて、彼の宝石

のような紫の瞳を覗き込もうとすると、陛下は部屋に敷かれた毛足の長い絨毯の一点をただじっと見つめていた。

その態度に、聞いているのかわからないのか少々不安を覚えた私は、彼の注意をこちらに引くべく、まるで上司が部下に『次のプレゼン、頑張りたまえよ、君。なにせ社の命運がかかっているんだからな。はっはっは！』な如く、左肩同様、右肩にもぽんと叩くように手を乗せた。

それに合わせ、陛下の瞳がこちらに向けられる。

「ねえ、陛下」

私は彼の瞳にひたと自分のを合わせた。

実は今回、このトリエス王国製純白力ボチャパンツの存在を知ってから、私にはとある構想が頭にあった。

このもっさりロリロリで正直ダサダサな純白力ボチャパンツ。

これがトリエス王国標準仕様であるのなら、これはもしかして、いや、もしかしなくても、ものすごい商機なのではないだろうか。そんな私の輝かしい女実業家への道が、後光が差すかのように私の目の前に出現したのではないかとね！

「陛下、私と一緒にランジェリーショップ開きませんか？」

「何？」

「ランジェリーショップ。下着屋ですよ、下着屋」

「下着屋？ 何故？」

「え、判らないんですか、陛下」

私は物分かりの悪い教え子に、知らず溜息をついてしまった。

「私、トリエス製の下着がここまでもっさりロリロリダサダサとは知りませんでした。これはね、もうトリエス、いえ、この世界に居る全女性への冒涇に近いですよ、陛下」

「冒涇？」

陛下は不可解そうに眉をひそめる。

「そうです。この世界の女性は、本意にも、こんなもっさりパンツを履くことを強要されているんですよ。本来なら彼女たちの持つ

魅力や色気を最大限に引き出してあげられるはずの下着なのに、きつとくだらない道徳心とか貞操観念とか、男の視点からの一方的押し付けで、こんなにも失笑もののもつさりパンツを履かされているんです。異世界の日本にはね、紐だけで構成されている下着だって水着だってあるんですよ。だから、ね、陛下、一緒に下着屋さん開店しましょうよ！」

私は無一文だから、勿論、軍資金は陛下の懐からだよ！

「陛下は何もしなくてもいいんです。お金を出してくれるだけでいいです。デザインは私がしますし、縫製はトリエスにも職人さんがいるでしょう？ それで、トリエス王室御用達とかにしてブランド化して、ひと財産築きましょうよ、一緒に！ 陛下、これはもう国王としての義務ですよ！ 考えてもみてください！ 女性がチラリズムの色気を身につける。それに男共が反応する。いろいろな事が起こる。あんな事やこんな事やそんな事も起こる。するとどういう結果になると思いますか、陛下。子供がね、少子化担当大臣とか設けなくても、わんさか誕生するんですよ、ぼこぼこぼこぼここと、このトリエスに！」

本当、なんて素晴らしい構想なんだろう！

お金儲けも出来て、社会問題も解決だ！

子供が生まれまくって、人口統計図がキレイな三角形に戻れば、もしかすると巡り巡って年金問題だって解決かもしれないよ！

もう厚生労働大臣が頭を悩ませる事もなくなるよね！

「トリエス王室御用達、色気むんむんランジェリーショップ『いち・ご』のオープン記念には、私プレゼンツ、トリエス王室専属細工師作『貞操帯・陛下もメモメモ』をランジェリーご購入者先着百名様に付けちゃいましょうよ！ もう出血大放出です！」

私の脳内には既に万札乱舞が先程から展開されている。

自然、鼻息だって荒くなるよ！

私は興奮のあまり陛下の肩を両手でバンバン叩いた。

陛下はその肩を叩く私の手を器用に避けて、自分の額に左手をあ

てる。

「ていそつたい？ めろめろ？」

「あれ、陛下、貞操帯って知りませんか。この世界にはまだ無いのかな？ おお、だとしたら、そつち方面にも開拓の余地ありですね！ 素晴らしい！ もうなんとという商機！ ついに私にも運が向いてきたということですよ！ それも強運です！」

嬉しさのあまり、私は思わず陛下に抱きついてしまった。

流石にブラ姿のまま陛下の頭を抱えるように抱きついたのはどうかと、後になってから少し思ったけれど、この時は万札の強力な魔力に私は完全にノックアウトされていた。

福沢諭吉万歳だ！

ゆ・き・ち！ ゆ・き・ち！

「……………」

「陛下、貞操帯っていうのはですね、装着する人の性交や自慰を防ぐ施錠付きの下着で、主に」

「いや、その説明はいい。聞きたくない」

陛下の声私の腕の中からくぐもって聞こえた。

あれ、なんか声に力が無いような？

「えー何ですか？ せつかく異世界の世界史である十字軍から説明してあげようと思ったのに。まあ、いいですけど」

そこまで言ってから私は、抱えていた陛下の頭から体を離れた。

乱れてしまった彼の髪を元のサラサラストレートに戻すべく、両手を手櫛モードにして、陛下の額から後ろへ向かって梳いてやりながら、言葉を続ける。

「陛下、天下の大号令をかけましょう」

「天下の大号令？」

「そうです。天下の大号令と銘打ってはいませんが、内容は、トリエス国王の名の下に、もっさりロリロリダサダサ純白力ボチャパンツの全面撤廃と、ランジェリーショップ『い・ち・ご』の強制推奨です。ここで一発、強権体制を敷きましょう、陛下。せつかく持って

いる国王としての権力、思いつきり私的に利用しない手はありません。もつたいたいですよ！ 陛下の持つ全権で以ってカボチャパンツ狩りをし、尚且つ、『い・ち・ご』のランジェリーを強制的に全国民に購入させるんです！ 国民ひとりあたり年収の八割を使わせて！ そう、増税の如くですよ！」

持っている力を使わないなんて、宝の持ち腐れだしね！

有効活用だよ！

増税。

立ち位置が変われば、なんて魅力的な言葉なんだろう！

国王権力万歳！

権力最高！

特権階級最高だよ！

私のその言葉に、少し大人しくなっていた陛下が、突然切れ出した。

髪を梳いていた私の手を振り払うようにして外し、流石国王陛下と言いたくなるような強烈な眼力でもって威圧するように私を睨み据える。

「お前は、そんなくだらん事で国を混沌へと導けとでも言うのか！

国王を何だと思ってる！」

「くだらないって。下着って結構重要ポイントなんですけどね。：

国王を何だ、かぁ。そうですね、なんだか定番な回答をするのも、ものすつごく不本意なんです、やっぱ国王の役目って言ったら、セーブポイント？ もしくは資金源ですかね、旅の

「何？」

「だからセーブポイントと資金源ですってば。私の国、日本ではですね、国王って言ったら、旅の記録係的役割を担うだけか、これから剣を振り回してひと仕事しようっていう猛者たちに旅の資金をあげる他力本願な人たちの事を言うんです。景気のいい国だと、城の宝箱を漁らせてくれたりするんですよ？ 王女様の部屋もスルーで出入りできたり、防犯対策が致命的だったりする城もあるんですけ

どね。便利なもんで、大陸共通の鍵とかあったりして、それを手に入れれば何処の城も漁り放題なんです！ あ、そういえば陛下、この城って、やっぱり宝箱とかあるんですか？ 開けると呪われるトランプ付きのとか」

「あるかそんなもの！」

言つて陛下は目を閉じ、眉間をぐりぐりと揉みだした。

深い溜息もついたりしている。

陛下、そんなに強く揉むと、肌が赤くなっちゃうよ？

折角の唯一の美点であるイケメン面なのに。

「……もうよい。お前と話をしていると、こちらの頭がおかしくなりそうだ」

「あれ、陛下、なんか弱ってます？ え、なんで？」

「………」

「陛下？」

「………」

「へーいーかー」

「………」

「ねえ、陛下ってば！」

なかなか返事を返してくれない陛下に、私は彼の額をぺちんと軽く叩いた。

おい返事しろ、返事。

幼稚園で習うでしょ？！

呼ばれたら、きちんとお返事をしなさいって！

なんだか保母さんになった気分で腰に手を当てて、ソファの上で仁王立ちしていたら、陛下は疲れたような目を私に向けてきた。

「お前……本当にいい加減に……。……。いや、いい。なんでもない。餌の時間にするぞ。おい、用意しろ」

陛下はやっぱり少し赤くなってしまうた眉間から手を離し、部屋に控えている彼付きの使用人に偉そうに命令した。

その声に、使用人達はびくりと肩を震わせ、慌ててワラワラと動

きだす。

「餌って、朝ご飯ですよ、陛下」

「そうだ」

「あ、じゃあ、その前に私、陛下に言っておかないといけない事があるんですよ！」

いけない、いけない。

甘美なる万札乱舞に気を取られ、危うく私にとっての重大なる乙女の柔肌美肌の危機襲来を忘れるところだった！

私はフンと鼻息を一度荒くしてから、トリエス製純白カボチャパンツの腰のリボンあたりを指さした。

「ちよつとコレ、見てくださいよ、陛下！」

私は憤懣やる方ないといった様子を見せながら、カボチャパンツの腰のリボンに手を掛ける。

「昨日、陛下にギリギリとドSモードでホールドされた場所が、思いつきり痣になっているんですけど！」

そうなのだ！

昨夜、陛下に息が詰まるほどホールドされ、顎をギリギリと掴まれた時の痣が、顎どころか、私の腹部にまであったのだ！

痣は、ヘソの高さのラインを背中に向けて蛇が巻き付いているみたいになっている。

どれだけ力を加えたんだよ、って感じの痣だ。

私は陛下の暴行の結果を、当人にじっくり見せ大反省してもらおう為に、手を掛けていたカボチャパンツの腰のリボンを一気に引っ張った。

絹製のリボンは、しゅるんとなめらかに滑る。

その時だった。

今まで全く存在を感じなかった珍獣部屋に置き去りにしたはずのリーザが、私のカボチャパンツに突進してきたのだ。

しかも、かなり必死な形相で。

彼女は私の手とリボンを強く握り締めると、懇願するような目を

皆の者、太鼓を鳴らせ！

御神酒を振舞え！

神輿だワツシヨイ！

「脱ぐか、阿呆！」

陛下の渾身の怒声が部屋中を震わせる。

「もう、そんなに怒鳴る事ないじゃないですか。ギャランドウネタ如き。ラードルフさんあたりだって生えてますよ、きっと。彼、顔は爽やかイケメン系ですけど、体育会系っぽいし、胸毛から陰毛まで、もじやもじやアマゾンなんじゃないですか？」

「ラードルフ……」

陛下は黄金の髪の中に指を差し入れるようにして頭を押さえた。

「……………お前と話をしていると疲れる。とりあえず、いい加減に着替えてこい。いつまでその格好でいるつもりだ」

「え、別に陛下が望むなら、ずっとこのままでも私はいいですよ？」

珍獣だし、言うこと聞きます！

基本、忠犬属性ですから、私！

「誰が望むか！ いいから着替えてこい！ リーザ、早く着替えさせろ！」

「はい、陛下」

「あ、じゃあ、リーザ、着替え持ってきて。さくさく着替えちゃうよ。陛下が五月蠅いから」

「ここで着替えるなっ！」

陛下は腹の底から怒声を発すると、やり場のない憤りを近くの一口テーブルに一発蹴りを入れる事で発散したようだった。

… 11 (後書き)

貞操帯 … Wikipediaより一部引用

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%B2%9E%E6%93%8D%E5%B8%AF>

陛下と私とパンツの事情 … 四百字詰原稿用紙 約31枚

「ぶひ」

「……………」

「……………」

「……………」

「ぶす……………ずう……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

昨夜の夕飯時とは違う、王が使用するものにしては小振りとも思える一般家庭用レベルの大きさの食卓で、私の対面には悠然と陛下が座っていた。

そしてその彼の傍らには、『お前が居ると、あれらの戸惑い具合が煩わしい』といった理由で、陛下付きの使用人、通称ワラワラ部隊を全て下げてしまった為に、急遽給仕として駆り出された気の毒なヘロルドさんと、私の傍らには私付きの侍女リーザが居て、それが現在、広い王の部屋に居る全ての人だった。

今の私には、その彼らの沈黙具合が此の上なく嫌で堪りません。ごめんなさい、誰かつっこんでくれませんか。

心の底から頼みます。

スルーされる方がこの場合、本気で辛いです。

いま私、これまで生きてきた人生の中で、自分でも初めて聞いた音を出しました。

あまりの衝撃に、思わず鼻からも液体が……っというか、初めて口から飲んだ飲み物が鼻から出ました。

ぶび、とか言いましたよ！

ママ、どうしよう！

貴女の娘は、お笑い芸人がよくやる『鼻から牛乳』ばりの芸を人生初めてやってしまいました！

異世界とはいえ王宮内の、国王の部屋の、それも国の最高権力者である国王陛下の目の前で盛大に、両方の鼻の穴から出ましたよ！
クリーム色の液体を、痣の残る顎に到達させるくらいまで勢いよくね！

……あ、やばい。鼻の中の残液が逆流しそう。

流石に一度鼻腔に入った液体を飲みこみたくはないな……。

私、慢性アレルギー性鼻炎持ちだから、鼻水は微妙にいつも残っているんだよね……。

寝る時もよく詰まるし。

ティッシュ、じゃなくて、ナプキン……欲しいな。

でも、いま顔を少しでも動かすとズボンに垂れそう。

どうしようかな……。

何かないかな……鼻、かみたいな………あ、いいところに、布が！

ナイス、布！

大好きだよ、布！

愛してるよ、布！

布力モン！

ぬ・の！ ぬ・の！

「まさかとは思うが、お前は今、テーブルクロスで鼻をかもうとし

「ているのか？」

「……………」

「どうなんだ」

「……………」

「小娘、聞いているんだが？ お前は今、テールクロスで鼻をかもうとしているのかと。まさかとは、思っただがな」

「……………」だつて、陛下、鼻から鼻水が混入した生キャラメル百倍濃縮並みの鬼のような超激甘ドリンクが逆流しそうですね。陛下は飲めつて言いますか？！ この超激甘な中に鼻水塩分が微量に含まれた液体を、喉を通し、食道を通して、胃の中に入れるって言うんですか？！ 酷い！ やっぱり陛下は非人道冷酷変
「リーザ、早く拭いてやれ。不愉快だ」

陛下の嫌そうな声と冷え冷えとしたアメジストな瞳が、私をドラアイスで出来た槍で、容赦なくツクツクと陰湿的に攻撃する。

私はそれに力チンと来たが、食事中に鼻から飲み物を噴射しちゃったからね、やっぱりマナー的にも、ここは王宮内の国王の部屋だし、仕方な……………くはないよ！

全然仕方なくないよ！

というか当然の事だよ！

避けるのは不可能だつたと思う、今の私の鼻から牛乳芸はね！

パーシヴァル様だつて、そう言うに決まってるよ！

パーシヴァル様はきつと、

「そつだよ、君の言う通りさ。君は悪くないよ、私のかわいいカピバラちゃん。ほら元気を出して。私が君の望む事をしてあげよう。

何が欲しい？ ん？ お姫様抱っこかな？ そんな些細な事でも喜んでくれるなんて、君は本当にかわいいね。私はもう、そんな君しか見えないよ。たとえ世界に人や魔族がたくさん居たとしても、私は君しか要らない。君だけだよ…………君だけを愛している、心から愛しているんだ。全身全霊をかけて愛している。だから君も私だけを見て、愛して
『

甘いのだ！

激甘だよ！

私の怒りはこんなものじゃないからね！

次いつてみよう！

私は、額に青筋が浮かびつつある陛下に見えるよう、超激甘ドリ
ンクの残骸と、慢性アレルギー性鼻炎持ちならではの利点である『
鼻をかもうと思えば常に幾らでも出るよ！』なネバネバ鼻水のミツ
クス、ナプキンに付着した物体Cを、びろーんと嫌な粘り糸が出る
ようにしてナプキンを広げてやった。

陛下の紫の瞳が瞬時に細まり、眉間に皺が寄る。

室内にびりびりとした殺気が漂った。

傍に控えていたヘロルドさんが、給仕の為に手にしていた食器を
カチャリと鳴らし、リーザは更び用意していた予備のテーブルナプ
キンをパサリと下に落とす。

「小娘……、余は、初めて食事中にそういったものを見せられたの
だが、その事についてお前の見解を聞いてみたいものだな」

「見解？ 聞きたいんですか、陛下」

「ああ、聞いてみたい」

陛下のその言葉に「ふむう」と頷いた私は、ナプキンを食卓の右
端に置き、もったいつけたように顎に手を当てた。

陛下の澄んだ瞳が、自然、私の置いたナプキンを追っている。

相当気になるようだ。

飛び回っていた虫が止まったのを見張るかのように、じっと見て
いる。

「どうしようかなあ。うーん、……まあ、お願いされれば言ってあ
げなくもないですけどねえ」

陛下の額に青筋が一本浮いた。

彼は静かに息を吸い込むと、気持ちを落ち着ける為か、繊細で優
美なグラスに入ったクリーム色の液体を手にし、口にする。

「……ほう？ では、願おうか。どういう見解なのか聞かせて欲し

い。……小娘」

私は溜息をついた。

仕方ない、教えてやるか……というか、教えてあげなくてはイケないかもね。

私にとつては既にバルツァーさんが居るとはいえ、昨日今日……どころか昨夜今朝の付き合いでしかないけれど、陛下に何かあっても寝覚めが悪いしね。

私ってなんて善人なんだろう。

素晴らしすぎて涙が出そう。

「じゃあ、言いますけどね」

「申せ」

「今、その陛下が口に行っているクリーム色の謎の液体の事なんですけどね、陛下はさ、それを飲んでも全然平気なんですかね。むしろその辺の見解を逆に私としては陛下に聞きたいですけどね」

陛下の動きが止まった。

彼はゆっくりとグラスから口を離し、私に視線を向ける。

ようやく陛下は鼻水ミックス物体C付きナプキンの呪縛から解き放たれたようだった。

鼻水の威力って凄かったんだね。

一国の国王の視線をずいぶんと長い事ひとりじめしていたよ！

流石、いつ行っても耳鼻咽喉科は二時間近く患者を待たせるだけあるね！

先生、尊敬します！

貴方は毎日、そんな鼻水と格闘していたんだもの！

「これがどうした」

「ねえ、陛下、それ、本気で美味しいと思って飲んでます？　しかも朝っぱらから、こんなにへビーなものを？」

「……へびい？　なにかおかしいのか、これが」

陛下は不機嫌そうな中にも、若干の戸惑いの色を含ませて私に返した。

彼の瞳が今度はクリーム色の液体に注がれている。
そうなのだ。

私が先程、思わず人生初の鼻から牛乳芸をしてしまった原因は、
陛下が今、手にしているあのクリーム色の液体にあった。

ここで着替える着替えないで陛下がローテーブルに一発蹴りを入
れた後の話である。

それが気持ちの良い程にスライドし、上に置かれていた高そうな
ティーカップとソーサーが乾いた音を立てて割れた後、陛下がヘロ
ルドさん呼びつけた。

ヘロルドさんが来て、私の格好に仰天して額を押さえながら体を
ふらつかせた後、彼は瞑目して呼吸を繰り返す事で気を取り直し、
ときばきと他の使用人ワラワラ部隊に指示を出した。

その凜々しい仕事っぷりに思わず私はときめいたが、まあ、それ
は別の話として、私がリーザに引きずられるようにして珍獣部屋に
連れ戻されて着替えている間に、朝食の準備、陛下の言う餌の用意
が完了していた。

ざっとみた感じでは、トリエスの朝食内容は、向こうの世界のそ
れとそう変わったところはなかった。

謎の動物の卵を使用した不思議なキノコ入りチーズオムレツみた
いなもの、ジャーマンポテトもどきなもの、厚めのベーコンもどきを
焼いたもの、生前の姿はもしかしたら見ない方がいいかもしれない
魚のソテーと、なんちゃって伊勢海老を使用したサラダマリネみ
たいなもの、様々な新鮮野菜らしきものを見栄え良く飾った生野菜
サラダに、向こうの世界でのブルーベリーとラズベリーの位置づけ
なんだろうなと思われるフルーツが入ったもしかしてケフィア？な
ものや、数種の飲み物と、とりあえず出来あがったもの並べてみた
よ！というくらい小山盛りないろいろな種類、且つ、糖質が凄そう
なパンたち、そういったメニュー内容だった。

朝から多すぎ……と思いつつも席についた私に、ヘロルドさんが
『デザートは後で来ますから楽しみになさって下さい』と爽やかな

ロマンスグレーの微笑みを見せたのに、私は内心を隠す為に愛想笑いで返すしかなかった。

そうして陛下のいう給餌の時間が始まった訳なんだけど、私が何から飲もうか食べようかと目移りしつつ考えていると、まず手始めに糖質小山盛りなパンたちの中から、たっぷりと何かの蜜がかかった向こうの世界でいう甘そうなチェリーデインツシュみたいなものを陛下は手に取り、もくもくと食べた。

チェリーデインツシュかぁ、と、それを私も手に取るうかと悩んでいると、意外と食べるのが早い陛下は早々にそれを食べ終え、更にチョコレートの欠片が乗せられた向こうの世界よりもグラニュー糖層の厚そうなクイニアマンらしきものを手に取り、それもあつという間に食べ終えてしまったのだ。

そしてその後、問題のクリーム色の謎の液体を手にしたのである。陛下は実に美味しそうに、まるで環境省選定名水百選の中でも水マニア投票第一位に輝いた名水を飲むかの如く、ごくごくと勢いよく飲みだした。もうそれは、テレビCMに起用してもいいってくらい飲みっぷりだった。

すぐに中は空になって、陛下はグラスを食卓に一度置いた。へロルドさんが透かさず追加して、陛下はそれをどこか満足そうに眺めていたから。

だから私は、手を出した。出してしまった！ 軽率にも出してしまったのだ！

どうして、もう少し深く考えなかったのか、私！
でも見た感じ、ただの乳酸菌飲料っぽかったんだよね！

口に入れた直後に、私の味覚もさることながら、体中の感覚という感覚、細胞という細胞、神経という神経がこれ以上ないっていく

らしい拒絶反応を起こす危険水域を遙かに超えた劇毒物的飲み物だったのに！

そうして私は、人生初の鼻から牛乳芸を三人の前で披露したのである。

『ぶび』ってね。

「まずその前に、ヘロルドさんにちよつとお聞きしたいんですけどね？」

私がかけたのに、ヘロルドさんは礼儀正しく手にしていた食器を一度、洗練された美麗な装飾が施されているキッチンワゴンに置いて、私の方へと体の向きを変えた。

「何でございましょう、珍獣様」

「あの陛下が手にしているクリーム色の謎の液体、あれってトリエスでは一般的な飲み物なんですか？　なんていうか、皆、陛下みたいに飲めるのかっていう意味で」

「……………」

「ヘロルド？」

陛下の忠臣ヘロルドさんが口を噤んだのに、その主君である彼は、不思議そうに臣下を見遣った。

ああ、やつぱり。

つか、ヘロルドさんが私から微妙に目を逸らしたよ！

次いでリーザを見たら、彼女も直ぐに目を伏せちゃったし！

リーザ、今、私と目が合うのを思いつきり避けたでしょ？！

私は、予想通りといえば予想通りなヘロルドさんの無言の回答に、陛下の部屋の大きくとられた窓から見える爽やかな朝の空を見てから、陛下に視線を戻した。

「正直に言いますよ、陛下。たぶん、陛下の立場的に誰も言ってくれないと思いますからね。あのですね、何ですか、この臍臓が一発で頓死して、即糖尿病直結コースのような劇毒物的超激甘ドリンクは」

「何？　どういう意味だ」

陛下は、私が何を言っているのか判らないといったような表情をした。

それに私は、同情目線で返してやる。

可哀相に。権力者や人気スターが孤独だとはよく言ったものだよ、ほんと。

「どういう事も何も言葉通りですけど？　へロルドさんが今、立場的に言い難いから無言の回答を私に返したじゃありませんか」

「ち、珍獣様！」

へロルドさんが焦った様子で声を発した。

私はそれに、まあまあと手を振ってから、陛下の疑問に答えてやる。

「陛下、甘党すぎ。今日びのスイーツ大好き日本女性たちだって、余裕でどん引き出来る飲み物ですよ、これ。日本の首都、東京にある銀座や渋谷、青山、六本木、新宿あたりの集客率がありそうな駅前一等地に店を構えたとしても、この飲み物を出した日には速攻で潰れます。それなのに、こんな蜂蜜みたいなのがデロデロかかったチエリーディニツシュとグラニュー糖層の厚いチョコレート付きクイニーアマンもどきなパンを食べた後に、この生キヤラメル百倍濃縮並みな飲み物を一気に飲むって、どんだけキングオブ甘党なんですかって話ですよ。陛下はトリエス国王という立場だけじゃなかったんだね！　甘党の国の王様でもあったんだ！　すごいや！　って、きつと厨房で言われてますよ。ほら、この糖質小山盛りなパンたちを見て下さいよ。厨房では恐らく、

『あー今朝の国王陛下のパンメニュー、どうしたらいいと思う？』

『そうだなあ、後でアレが無かった、甘いのが足りない、とか言われるのも面倒だしな。とりあえず甘っこいのしこたま出しとけば満足なんじゃね？』

『ちげーねえや。おい、コックH、砂糖と蜜を通常の百倍くらい練り込んだパンを量産しておけ。陛下仕様だ』

『了解っす！　俺、張り切って作っちゃいますよ！　だって、こ

んな激甘なパン、陛下向けにしか作れないっすからね！ ある意味、役得、役得！』

『頼んだぞ！ …… おお、そうだ、肝心なのを忘れていた。いけない、いけない。最近、物忘れが激しくってイケけねえや。おい、コックM、例の飲み物を作っておけよ。あれが無いと、陛下、ウゼエほど五月蠅いからな。苦情なんざ来た日には、俺らの残業確定だしよお』

『了解です。もう俺も慣れたもんだから、ちよちよいのちよいで作っちゃいますよ。なんせ調理法なんて、ミルクにひたすら砂糖と蜜ぶち込んで、焦げないように火にかけて、後はただひたすら捏ねくり回してりゃいいだけですからね。ガキでも作れますよ。まあ、ガキですら飲まないですけどね、この例の飲み物は』

『ちげーねえ、ちげーねえ！ ぐはははははっ！ ああ、それと、コックZ、お前はデザート作っておけよ！』

『りよーかーい！ 合点承知の助！ ごりごり作るときですよ！ おーい、見習いコックJ、砂糖五袋持ってこい！』

『はい、只今！ あ、砂糖は大きいサイズが五袋ですか？』

『あたりまえだ！ 陛下用のデザートだぞ！』

『もつ、申し訳ありません！ 今、持ってきます！ 見習いコックJ、倉庫行ってきまーす！』

『おお、行ってこい！ 急ぎだぞ！』

『はい』

『さて、こんなもんかな？』

『だな。今日の朝食はこんなもんじゃね？ おお、後あれだ、見習いコックP、砂糖と蜜の追加注文しておけよ！ 業者はいつものところだからな！』

『ああ、大丈夫ですよ！ 俺、昨日、追加発注しておきました！ 陛下用に砂糖大四十五袋、蜜五十五大瓶でいつとききました！』

『お、それでいいぞ！ 見習いコックP、お前、このトリエス王城の厨房、慣れてきたじゃねえか！ 偉い偉い！』

『そうですか、えへへ。あ、そうそう、注文した業者が、“いつも大量の御注文ありがとうございます”って言って、厨房の皆さまに、って隣国の酒を人数分置いていきましたよ!』

『マジか! やりい!』

『よおし! それじゃ皆のもんよ、さくさく甘っこいの量産して、今夜は酒盛りだ!』

『よっしやあ!』

『ひゃっほう!』

っていう会話がですね、陛下、絶対絶対絶対繰り広げられてますって! そう思うでしょ、陛下も。よくよく考えると、この飲み物に、糖質小山盛りなパンたちを見て!」

「……………」
言い終わった私が、陛下に、ほら良くみるとビシッとパンに指をさしながら彼を見やると、彼は複雑そうな表情を見せ、じっとしていた。

あ、絶対傷ついた。確実に今、心に傷を負ったよ!

ま、そりゃあ、そうだろう。今まで歯牙にもかけていなかった陛下から見て虫ケラ同然の身分の者に、実は半分失笑されながら食事を作られていた可能性があるかもしれない、なんて知ったらね。

まあでも、真実は今後の自分の健康の為に知った方がいいよ、陛下。このまま突き進むと確実に糖尿になるからね。昨今の日本は、若くても糖尿病患者が多いんだから。

その時、フォローの達人ヘロルドさんが、私の方を『お願いですから、もう言わないであげて下さい』な目線を向けながら、「陛下、何かお飲みになりますか」と声をかけていた。

そんなヘロルドさんが手にしていたのは、冷えてそうな普通の水なんだから、彼も常々、陛下の甘党っぷりにはいろいろ思うところがあったのだろう。

まあ、しかし、そこで言うのを止める私ではない。

ごめんね? ヘロルドさん。真実というものはね、知らないとい

けないのだよ。特に為政者はね。

「そんな飲み物なんだもの、私が鼻から噴射したのは、もう事故でしよ、陛下。まあ、それはそれとして、ところで陛下」

「……………」

「へーいーかー、戻ってきてー」

私の呼びかけにあえて反応を返さないかのように、陛下は力の無い視線を手元のオムレツに注いでいた。

彼は気のない風にフォークとナイフを握ると、切り刻むという言葉に相応しい感じで、チーズオムレツもどきを細切れにしていく。

「なんだ」

「陛下さあ、その飲み物なんですけど」

「その話はもういい」

「そう言わないで。飲み物自体の話じゃなくてですね。この飲み物、すごく今、異世界の日本で大ブーム中の生キャラメルに味が似ているんですよ」

「それが？」

「陛下、この世界って、生キャラメルってありますか？ なんて言えばいいかな、うーん……………口に含んだだけでとろける柔らかくて風味のある上品な甘さのキャラメルなんですけど、想像つきます？」

陛下は細切れオムレツのから顔を上げた。動かしていた手も止める。

「想像はあまりつかないな。……………食べた事があるのか？」

「それは勿論。私、昨日まで日本に居たんですから。いろんな味があるんですよ。材料に生クリームをふんだんに使っている食べ物ですよ」

「ほっ」

「食べてみたいですか、陛下」

「……………」

私は行儀悪いのを重々承知で

今更だしね

食卓に身を

乗り出した。

今、目が合っている陛下の紫の瞳の奥を覗き込むようにして見つめてみる。

「商談です。もし私が生キヤラメル専門店を王都に開くって言うたら、陛下、私に出資します？」

「……………」

「その時は株主優待として、陛下には生キヤラメル全商品を好きな時、好きなだけ食べ放題にしますし、新商品が開発されたら、一番に試食させてあげます。どうです、この話、乗りますか？」

私は営業成績グラフが一番長いよ！的営業マンの如く、にこやかな笑顔を陛下に向けた。

あとひと押し。

「生キヤラメルってですね、陛下。向こうの世界には二百カ国近く国があるんですけど、その世界の国々の中でも良質な品物作り、良質な農産物を育て上げる日本の、更に牛乳などで有名な産地で作られる事が多いスイーツなんです。勿論、いま私はトリエスに居る訳ですから、材料はトリエス産ですけど、私から言わせれば、トリエスで作られたものは完全無農薬、添加物無しな理想的な素材だし、その中でも材料を厳選して生キヤラメルを作ろうと思うんですよ。陛下、口にしてみましたくはありませんか。ちょっと陛下の懐から投資すればそれが実現するんですよ？」

私は陛下の表情を見て、勝った、と思った。これは勝ち。完全なる勝利を私は掴んだようだ。

自然、顔が緩む。

楽勝すぎ！ 詰んだよ、陛下！

陛下はフォークとナイフから手を離し、考え込むように顎に手をあてた。

たとえ腐っても根っこから権力者気質なんだろう、その姿は威厳に満ちていて様になっている。

「そうか…………、採算が取れるものが出来あがるのであれば、考えないでも」

「なーんてね！　へ・い・か！　残念、私、生キャラメルの作り方なんて知りませんよ！」

「っ！」

あーウケる！

私は無礼ながらもケラケラと笑い、乗り出していた身を下げ、椅子の背凭れに体を預けた。

「だって、私、食べる専門でしたもん！　生キャラメル、メーカー、じゃなくて、店の看板に拘らなければ、普通にその辺の店にたくさん売っていたし、わざわざ作り方調べて作るよりも、買った方が楽だし、美味しいでしょう？　だから作り方なんて知りませんよ！」

「……小娘」

「陛下、甘いものに目が無さ過ぎ！　もしこの世界とあっちの世界が繋がっていたら、私、日本政府に『とりあえず日本のスイーツ全種贈って懐柔して、日本に有利な条約結んじゃえ！』って助言しちゃいますよ？　日本のスイーツ、マジ美味しいですからね」

そこまで言うてから、今の話にさぞ不愉快な境地を味わっているのだろう青筋を浮かべ出した陛下に、私は腕を組んで彼をじっと見つめた。

見れば見る程、本当にキレイな顔をしている。

が、それは今は関係のないことだ。

それより話はここからが本題なのである。

「陛下さ、」

「お前とは今、話をする気分ではない」

陛下は出会ってから初めて聞く、むすりとした声を出した。

「まあまあ、そんなに怒らないで下さいよ、陛下。ねえ、陛下。こちらの世界では、どの程度、医学が進んでいるか判らないですけど、糖尿って怖い病気なんですよ？　陛下、糖尿病って聞いた事ありません？？」

「……いや」

私が真面目に話出したのを察してか、陛下も私同様、椅子の背凭

れに深く身を預け、話を聞く体勢を取った。

この人は破壊魔だし暴力男だけど、人の話はちゃんと聞ける人なんだよね。

それが例え、どんなに立腹していても、相手が話す姿勢を見せていれば、とりあえず耳を傾ける、そんな人のように感じる。

そこは評価していいかなと私的には思う。

まあ、とにかくにも、どんな権利があってそんなに上から目線で評価してるんだ、って自分でも思うんだけどね。

… 13 (後書き)

この部分を書いていた時、生キャラメルが流行っておりまして

「もともとの遺伝的疾患な人も居るんですけど、たいていは一般的に、過剰に甘い物を食べ続けたり、太りすぎ、向こうではメタボリックって言うんですけど、お腹がガツツリ出て、内臓に脂肪が溜まるとなる病気なんですよね。陛下は太ってないし、その点は昨日、お腹を触った感じで無駄肉無しの、つくべき筋肉が理想的についていたから心配ないと思うんですけど、その甘党がね、致命的」

「……………」

「糖尿病になると、膵臓っていう臓器がうまく機能しなくなって、血管を傷つけていくんですよ。んで、いつか、脳梗塞……頭の血管が切れる病気とか、足を切断しなくてはならなくなるとか、失明するとか、そういう病気を併発していくんです。あと、現れる症状もいろいろあるんですけど、性的不能というのものもあるですよ。陛下、後継ぎまだ居ないでしょ？ 気をつけないと。日本にも患者がたくさん居て、最近は糖の吸収を穏やかにするものとかが売れているんですよ。陛下、甘いもの食べすぎとか、今まで言われた事ないんですか？」

「……………ないな」

彼はどこか観念したように深く息をついた。

出会った時のように、椅子の肘かけに肘を置き、頬杖をつきながら、こちらに目を向けている。

「まあ、今から気をつけていれば大丈夫ですよ、陛下。とにかく甘いものを過剰に摂取しない。今日の朝ごはんだったら、パンは食べ

過ぎなきやいいとしても、この飲み物はもう飲んじゃダメですよ。

へロルドさん、下げて下さい」

私の言葉に、へロルドさんは戸惑い気味に陛下に視線を送り、彼が頷いたのを見て、あのクリーム色の鬼のような超激甘ドリンクをワゴンに戻した。

「あと、パンを食べる時には、甘かろうが甘くなくろうが繊維物、サラダをちゃんと食べて下さいね。それだけで糖の吸収を多少なりとも抑えられますから。なるべく野菜を多く摂るように心掛けて、後は規則正しいバランスの良い食事が一番の健康維持の方法ですからね。それと仕上げに適度な運動かな。体を動かすと糖が早く消費されるんです。病気予防にもなりますよ。陛下の場合、国王陛下だから労働とかで体を動かす事がないし、食事を摂った後、城の中でも歩き回っていればいいんですよ、少なくとも半刻？くらいは。お城って広そうだから、半刻くらい余裕で歩けるでしょう？」

「ずいぶんと詳しいな。お前は考えなしの珍妙な行動言動をするだけの小娘と思っていたが」

陛下は、ほんの少しだけ見直した的な色を瞳に滲ませた。

それに私は、なんとも言えない表情で返す。詳しいのには勿論理由があるからだ。

私はふうと息を吐くと、腕を解き、まだ空のグラスを手にし、リザーに水を入れてくれるよう頼む。

「すぐさま注がれた水を二口ほど飲んで、私は言葉を続けた。

「うちのパパがね……、ああ、父親の事なんですけどね」

私の脳裏に呆れた姿のパパが浮かぶ。

あの出来事は酷かった。きっと我が家のワーストスリーに入る出来事だろう。よくママは離婚しなかったと思うくらいだ。

「父親？」

「はい。うちのパパ、陛下みたいに甘いのが好きでね、」

「……………」

「それでもって、お肉とお酒も大好きだったんですよ。そうになると

どうなると思います、陛下」

「お前が先程言っていた、めたぼりっくか」

「あたり！ お腹がね、もう痛いんですよ！ 貴様は男なのに臨月迎えてるのか、ってくらいに！」

「それは凄いな。しかし、こちらの世界でもそういう貴族どもは結構たくさん居るぞ？」

「ああ、じゃあその人たちもきつとウチのパパと同じような病気かも」

「どうでしょうか？」

「そう、糖尿。それに加えて、ウチのパパは肝臓という臓器もやられて肝硬変三步手前治療中の、高脂血症、痛風持ちですよ。もう最悪。痛風で関節痛がるわ、制限多すぎて好きな物を食べれないって泣きまくるわ……」

あれは本当に酷い出来事だった。

私は遣る瀬無くなって、とりあえず折角用意された朝食を食べる事にした。

まずは、なんちゃって伊勢海老マリネから手をつける。

「陛下も折角の食事、ちゃんと食べましょうよ。残したらお百姓さんに悪いですよ」

「……そうだな」

そう言うと、彼は暫し逡巡した後、やはりパンに手を伸ばした。きつと基本的に炭水化物が好きなんだろう。

しかし先程と違って、砂糖ではなく、バターらしきものが塗られたミニフランスパンもどきを手にしていた。

もそもそと仕方なく口に行っているといった感じで、ゆっくりと口を動かしている。

「陛下のお父様って、どんな人ですか？」

「なんだ、突然」

「いや、陛下のお父様は、やっぱり前の国王陛下だったんだから、ダンディー系ってどうか、素敵で立派で尊敬できる人なのかな、っ

て思っ

私の言葉に陛下は、小さく千切ったパンを右手の親指と人差し指で軽く遊びながら、少し黙り込んでしまった。遠くの何かを思い出して、考えているといった風だ。

「陛下？」

「ああ、すまない。そうだな、少なくとも、尊敬の出来る人物ではなかったな」

「あ、過去形？」

私は思わず気まずい顔をしてしまった。

そうだった。彼の父親が生前譲位をしていなければ、陛下はまだ王子様のはずだからだ。

失念していたよ、私！

「気にするな。王族の常なのか、あまり親子としての情はない。あれが崩御して、むしろせいせいしたくらいだからな」

「……………」

なんか複雑そうな家庭環境みたいだ。

これはあまりつつこんで聞かない方が良さそうだ。

聞いたところで、私はこの手の話のフォローは苦手だ、というか本気で向いていない。

私は気まずいのを誤魔化すかのように、今度は、もしかしてケフイア？にスプーンを入れた。

ブルーベリーっぽいフルーツが美味しそうだ。

「それより、お前の父親はどんな人物だ。お前のような娘を育てた父親がどんな人間なのか興味がある」

「え、それどういう意味ですか」

「深い意味はないが？ つっかかるな」

そんな言葉を吐く陛下に私は怪訝に思いながらも、もしかしてケフイア？をひとくち口に入れた。

それを喉に通した後、私は向こうの世界に居るパパを思い浮かべる。

メタボだけど、家族思いで優しかったパパ。
でも。

「ウチのパパは、トイレに籠城して泣き叫びまくるような父親です、陛下」

陛下は美味しくなさそうに続けていた咀嚼を一瞬止めて、無理に飲み込んだ後、不可解そうに少し眉を寄せた。

「トイレに籠城？」

「そうです。陛下の住んでいるこのお城には、お城全体にたくさん用を足すところがあるんでしょうけど、ウチみたいな一般庶民の家だと、トイレがひとつしかない場合が多々あるんですよ。なのに、あの馬鹿パパ、糖尿と肝硬変三步手前と高脂血症と痛風が会社

パパが働いているところなんです、そこでやった人間ドックで一気に発覚して」

「それで籠城か？」

「違いますよ！ パパはお医者様に診てもらって、治療の為に大好きなお酒であるビールを禁止されて、あれもだめ、これもだめ、それもだめな厳しい食事制限に激しいショックを受けてトイレに籠城したんです！ それも週末二日間も！ ウチにはトイレひとつしか無いのにですよ?!」

「……………」

「聞いて下さいよ、陛下！」

私はその時の事を思い出して、だんだん興奮してきたのか、もしかしてケフィア？をスプーンで掻き混ぜまくった。

びちゃつとシミひとつ無いテーブルクロスに跳ねたが、そんな事は気にしない！

だってテーブルクロスとは、汚れる為にこの世に存在しているものなんだしね！

むしろテーブルクロス的には本望のはずだ！

こなくそ、こなくそ、こなくそ！

あの馬鹿パパめ！

思い出すだけでも未だに腹が立つ！

「土曜日の午前中に病院に行ったパパが戻ってきて、気づいたらその日の昼にはもうトイレに籠城してたんですよ！ 病院帰りにコンビニで、お店なんですけど、そこで医者に禁止されたビールとフライドチキンとお菓子とパンとか米系の炭水化物を山ほど買ってきてね！ パパにしてみたら食糧備蓄は万端、引き籠り先はトイレなんですもん、そりゃさぞ籠城には打って付けだったでしょうよ！ だけでもですね、陛下！」

私はその時の事を思い出すだけでも頭にきて、手にしていたスプーンをガンとグラニュー糖層の厚いクイニーアマンもどきに刺した。予想通り、厚い砂糖層はぱりんと小気味よい音を立てながら、スプーンを余裕で受け入れ支えてくれる。

スプーンはきれいな垂直を保った。

「落ち着け、小娘」

「落ち着いていられますか、これが！ あの時は本当に悲惨だったんですから！ 情けなくって！」

私はあの悪夢な出来事が脳裏に鮮明に蘇り、行儀悪くも食卓の上に肘をつき、頭を抱えた。

「あの悪夢な出来事が起こった日はですね、陛下。もしかして十数年ぶり？ ってな感じの超大型台風が関東に接近してたんですよ！

しかも鈍足で！ 鈍足で来るって事は上陸したが最後、いつまでも上空に留まってるってことですよ！ 陛下、台風は暴風暴雨が激しい嵐な天気のことなんですけどね、その日は天気予報のお姉さんが、『非情に強い大型台風が関東に上陸します。最大瞬間風速は、ここ十数年観測のなかった数値で』とかって、笑顔で言っちゃった最っ高に最悪な天候だったんですよ！ よりにもよってそんな天候の時に、己の不摂生が原因で病気になったくせに、まるでこの世の全てを恨みます！ って感じでトイレに籠城しやがったあの自分勝手最低男が我が家に居たんですよ！ どう思いますか、陛下！ この悲惨な状況を！」

陛下は少しだけ困った顔をした。

「……いや、どう思うと言われてもな」

「そこは同情して下さいよ、思いつきり！ 陛下！」

「……ああ、そうだな。同情する」

陛下の全く気持ちの籠っていない言い様に、私は抱えていた頭を上げ、彼をきつと睨みつけた。

陛下は千切ったパンに視線を落とし、先程同様、気の進まなそうな様子でパンの欠片を口へ運ぼうとしている。

そのあくまでも人ごとに過ぎないかの如くの彼の態度に、私のいつの間にか治まっていた怒りの炎が再び勢いよく燃え上がった。

くそう、完全に人ごとだな？！

許すまじ、陛下！

この私の味わったあの悪夢の日の屈辱を、あやつの嫌味どころかこの世の全ての男に、いや女にすら完全に喧嘩を売っている超絶美形顔が鎮座している頭の中の脳ミソに、すっかりと、それはもうサバイバルナイフでギリギリと傷をつけるかの如く刻みこんでやる！
勿論、生涯消えないようにだよ！

覚悟しろだ、陛下め！

「あれは、超大型台風と言われる嵐の日の事でございました」
「……なんだ、語りだしたのか？」

「トリエス王国から見て異世界の、日本という小さな小さな島国の片隅で起こったとある悲劇の話でございます」

「……あくまでも続ける気なんだな、お前は」

「そこには、とある家族がおりました。家族構成は父、母、息子に娘二人の五人家族でございます。父親はつい最近、なけなしの貯蓄を振り絞り、頭金にして、三十五年ローンを組んで、半ば無理をして新築一戸建てを購入したのでございます。坪数は三十五坪。最寄駅から徒歩五十分。近くにバス停無し。最寄駅的には辛うじて都心への通勤圏内ではございましたが、正直言って、あまり賢い買い物ではございませんでした。あまりの交通の不便さからか、左隣りは空き地、右隣は大声を張り上げないと意思疎通が困難な年金暮らしの一風変わった御老人が一人で暮らし、前方は誰の所有か不明な畑と、後方には人の手が全く入っていない雑木林があるだけでした」

「……………」

「その日は、昼過ぎから十数年ぶりという威力をもつ、超大型台風と呼ばれる嵐が上陸すると予言された日でございます。大型台風がくるという事もあって、母親と息子、娘二人は、外出もせず、家で大人しく過ごしていたのでございます。しかしそれが……それが、このなんの罪もない善良な者たちを、悲劇と惨劇の舞台へと容赦なく誘う事となったのでございます」

「……このまま先を聞き続けると、なにやら後悔しそうな予感がするのだが、語るのを止めてみないか、小娘」

「その日、父親は働き先の健康診断の結果で『病院に行くべし』と書かれた項目を診てもらったので、早朝から車、トリエスで言う馬車で病院へと向かったのでございます。この一家唯一所有の車は、国産メーカー十年選手の白色のワンボックスでございました。父親が病院へと行っている間、残りの家族は実に平和に過ごしておりました。これから超大型台風が鈍足な速度で来るとはいえ、家に籠っていていれば、特に被害はないだろうと思われたからでございます。この家の裏には林はあれど山は無く、暴雨にありがちな土砂崩れの心配はございませんでしたし、増水決壊洪水コースの危険性がある川も近くにはございません。また、立地も低地ではありませんでしたので、家への浸水の危険性もございませんでした。つまり、地図上の直線距離が微妙に都心に近いだけという、ただの辺鄙な田舎にある平凡極まりないつまらない家でございました。しかし、悲劇と惨劇の舞台へと誘う危険は、自然の猛威でも、辺鄙な田舎という立地でもなかったのでございます。危険は、善良な者たちを地獄の底へと突き落とす憎むべき悪は、家の中に潜んでいたのでございます。父親、という皮を被り、昼を過ぎた頃にはこの家唯一のトイレという聖域に籠り潜んでいたのでございます。ところでこの家には、年頃の私という娘がおりました」

「……お前がここで登場するのか」

「私という娘は、前日、学校の友人たちと寿司、小さく握った米の上に、生魚を乗せただけの食べ物物事なんです、」

「……気味が悪い食べ物だな」

「その寿司の食べ放題に行っていたのでございます。その寿司屋は安いだけ取り柄の、さして美味しくもなく、衛生的にも少し疑問が残る店ではございました。しかし、小遣いの少ない学生の身分である私という娘は、元来の寿司好きと、安さと食べ放題という文句に負け、友人を引き連れ、その寿司屋へ行ってしまったのでござい

ました。つまり、私という娘は、その悲劇と惨劇の悪夢の日、お腹の調子が頗る悪かったのでございます。疑うべくもなく、その安さと食べ放題が売りなだけの、衛生概念欠如の寿司に思いっきり中っていたのでございます」

「……………」

「私という娘は、父親の皮を被った疫病神が病院へ行っている午前中、この家の聖域であるトイレの住人と化しておりました。しかし、トイレに座り続け、ぶりぶりと緩いウンコ、つまり下痢ですが、」

「一応、今は食事中だと言ってよいか、小娘」

「下痢を続けているうちに、お尻の穴の周辺が、ひりひりと痛くなってきたのでございます」

「……………」

「これ以上座り続け、下痢をし続けるのは痔持ちの兄を持つ私という娘は危険と判断し、昼の少し前に一度、トイレから出たのでございました」

「……………お前と出会ってからのごく短い間に何回か思ったのだが、お前、少し年頃の娘としての恥じらいというものを持った方がいいぞ」

……………たぶん、言っても理解できないのだろうな、とは思っがな」

「花も恥じらうお年頃の私という娘は、」

「……………無駄か、やはり」

「下痢止め常備薬を飲み、自室で様子をみようと考えたのでございます。しかし、この家は丁度、下痢止めの薬を切らしていたのでございます。悩んだ私という娘は、とりあえず、風邪薬を飲んでみたのでございました」

「効能が全く違わないか？」

「私という娘は、自室の煎餅布団、トリエスで言うベッドと同意でございますが、その布団の上で暫く寝転がっていたのでございます。この部屋は、私という娘にとって、とても癒される空間でございます。天井にはパーシヴァル様のポスター、トリエスという天井画が貼ってあり、壁にもパーシヴァル様のトリエスという壁画が四方

に、そして私という娘の枕にも娘自身の手によるプリント、トリエスでいう写し絵が施されており、枕に顔をつければ、私という娘はいつでも愛しのパーシヴァル様と愛のチューが出来る仕様となっております

「……写し絵とか？」

「私という娘は、お腹の痛みと便意の定期的な襲来に耐えつつ、パーシヴァル様枕にチューチューしまくっていたのでございます」

「……お前、それではただの変態だろう。己の事を棚に上げてよくお前は余に変態と言えな」

「しかし、痛みと便意に耐えつつではありましたが、私という娘にとつてのパーシヴァル様との幸福なる甘い愛のひと時も、そう長くは続かなかつたのでございます。耐えるのにも限界がきたのでございます。便意が、強烈なる便意が来たのでございますよ！ 下痢が、下痢がひりひりと痛んでいるお尻の穴の直前にまで顔を覗かせようと押し寄せてきたのでございます！」

「……やはり、この先を聞きたくないな。本当に後悔しそうだ」

「私という娘は自室を急いで出たのでございます。なるべくお腹に力を入れないように、お尻の入り口だけに力を入れて、必死でトイレという聖域に向かったのでございます。しかし、しかしです！

私という娘がこの家唯一の聖域であるトイレに到着した時には、既に、父親という皮を被った疫病神が占拠していたのでございます！

私という娘が茫然とトイレのドアの前で立ちすくみ、早く出てくるよう扉を叩いた時、家の窓ガラスという窓ガラスが、一斉にガタガタと大きな異音を立て始めたのでございます。 超大型台風が完全に上陸してしまった瞬間でございました」

「……………」

「私という娘は悲鳴をあげました。心の底からの絶叫でございます。なぜなら、ゆるゆるウンコ通称下痢下痢ちゃんは、既に私という娘の肛門からちょびつと顔を出してきてしまったからでございます。加え、外は酷い嵐でございます。近所のスーパーのトイレを利用し

ようにも天候が悪すぎ、また、辺鄙な田舎の家でございます。近所とはいっても、スーパーまでは徒歩で五十分、つまり駅前にはか店がないのでございます。下痢下痢ちゃんは当然、待つてくれるはずがございません。その時です」

「……まだ続くのか、この話は、小娘」

「私という娘の絶叫を聞きつけ、リビングで寛いでいた兄がやってきたのでございます。兄は私という娘の惨状を知り、まずは聖域トイレのドアを叩きまくってくれたのでございます。途中からは扉を壊さんばかりの蹴りも入れておりましたが、彼は必死でカワイイ妹の為に、力を尽くしてくれたのでございます。しかし扉は開かなかったのでございます。中からは、父親の皮を被った疫病神のすすり泣きが聞こえてくるだけでございます。そこで兄は考えたのでございます。私という娘をこの危機から救う手段を必死で考えてくれたのでございます！」

「……どうしたんだ、その兄は」

「彼の身分は三流大学の二回生でございました。つまり車、馬車の運転免許を取得済みだったのでございます。彼は私という娘を近所のスーパーに連れていく為に、スペアキーをリビングまで取りに行きました。しかし、ここである事実が発覚したのでございます。父親の皮を被った疫病神は、この家唯一所有の車を、駅前のコンビニの駐車場に放置して、とぼとぼと徒歩でこの家まで帰ってきていたのでございます！」

「……………」

「外は十数年ぶりの最大瞬間風速を叩きだすと予言された超大型台風、左隣は空き地、右隣は、とてもトイレを貸して下さいとは言えない一風変わった意思疎通が難しい御老人の家、前方は畑、後方は荒れた雑木林でございます。加えて一家は、引越してきたばかりで、ご近所付き合いは全くといってよいほど無かったのでございます。その家は、災害らしい災害が起こっていないのにも関わらず、完全なる陸の孤島と化してしまつたのでございます」

「……悪条件もそこまで重なるともう奇跡だな。それでお前はとうしたんだ」

「対策を考えたくても、私という娘は既に下痢下痢ちゃんの攻撃を抑える限界がとうに過ぎていたのでございます。一刻の猶予もなかったのでございます！ もうどうしたらよいのか判らず、右手で下痢下痢ちゃんがこれ以上出てこないように押さえているのが精一杯でございました。その時でございます。騒ぎを聞き付けた母親と妹がやってきたのでございます。しっかり者だけれど少々過激なところがある妹は、私という娘の惨状を知ると、すぐさまりビングへ取って返し、新聞紙とライターを手に、トリエスで言う紙の束と松明を持って戻ってきたのでございます。妹は言ったのでございます。

『中の豚を焼きはらえ。焼豚にして、未だ親しくないご近所に、トイレを貸してもらおう為の挨拶品にしよう』と」

「……………」
「母親はそれを止めたのでございます。『焼豚はいいけれど、家まで燃えたら私たち、ローンも殆ど返済してないし、路頭に迷っちゃうわ』と」

「つまり、父親は焼かれても構わないと言っているのか、お前の母親は……………」

「私という娘は、もう一度、絶叫を上げたのでございます。下痢下痢ちゃんを抑える事が出来ないからでございます。もうこの場でやるしかない、肛門を押さえていた右手を外し、パンツを脱ごうとしたのでございます」

「そこで脱ぐのか、お前は！」

「いえ、陛下、そこは『そこでやるつもりなのか、お前は！』が適切な指摘だと思われれます」

「……………聞いていたのか、へロルド」

「……………はい、つい」

「脱ごうとした瞬間、私という娘は兄に担ぎあげられたのでございます。彼は、私という娘に振動が伝わらないように足早に歩き、私

という娘をパーシヴァル様の待つ自室まで連れて行ったのでございます」

「……連れていったところで、なんの解決もしないだろう?」

「彼は私を静かに部屋の真ん中へ下ろした後、一度、部屋を出ていき、すぐに戻ってきたのでございます。手に、ビニール袋を持って「びににいるぶくろ?」

「透明で水漏れのしない優れものの袋の事でございます、陛下。彼は、その中にやれと。花も恥じらうお年頃の私という娘に向かって排泄したものがまる分かりな透明なビニール袋の中に出せと無情にも言ったのでございます」

「……それで、したのか、お前は」

「しました」

「……」

「私という娘はそのビニール袋の中に排泄するしかもう手段は無かったのでございます。上からも四方からも、そして先程まで愛のチユを繰り返していたパーシヴァル様枕の前で、ぶりぶりと下痢下痢ちゃんを勢いよく排泄するしか手段が無かったのでございますよ! この恥辱、この屈辱! 私という娘は、あまりの事に排泄しながら涙を流したのでございます!」

「……判った。お前の恥辱屈辱は心から同情する。だから、もうこの話は勿論ここで終わるのだろうか?」

「しかし、悲劇惨劇の舞台はまだ幕を下ろした訳ではなかったのでございます」

「っ続くのか!」

「一度は下痢下痢ちゃんを放出したものの、勿論まだ完全に出きった訳ではございませんでした。しかし私という娘は、もうこれ以上愛しのパーシヴァル様の前で排出をするのは耐えられなかったのでございます。父親という皮の被った疫病神は、相変わらず聖域であるトイレから出て来る気配がございません。近所にトイレを借りる事もできず、四面楚歌な状況は何も変わってはいなかったのでござ

います。しかしそう遠くないうちにまた下痢下痢ちゃんが再攻撃してくるのを私という娘は判っていたのでございます。だから私という娘は考えたのでございます。この変わらぬ状況で、且つ、パーシヴァル様の前で排泄をしなくて済む方法を！」

「……何を考えたんだ、お前は」

「野糞、いえ野下痢でございます」

「何？ のぐそ？ のげり？ ヘロルド、どういう意味だ？」

「……野外で用を足される事でございます。陛下におかれましては一生涯縁のないことかと」

「お前、野外でしたのか？！ 年頃の娘がか？！」

「都合の良い事に、家の裏は雑木林でございました」

「……そうだったな、雑木林だった。確かにお前は初めにそう言っていた」

「暫くして、やはり私という娘の予想通り、下痢下痢ちゃんの再攻撃が始まったのでございます。しかも今度は先程よりも激しい痛みが伴って襲ってきたのでございます。私という娘は愛しのパーシヴアル様が居る自室から勢いよく飛び出し、家の勝手口からサンダルを引っかけて、裏の雑木林まで一心不乱に走っていったのでございます。雑木林を少し入ったところで、下痢下痢ちゃんの再攻撃に我慢の限界が来て、周囲も確認せず、超大型台風の暴風暴雨がピーク時を迎えている最中、雨に濡れ、風に髪を乱されながらも、一気に下痢下痢ちゃんを母なる大地に放出したのでございます」

「……………」

「私という娘は、あまりの解放感、あまりの充足感に笑みを浮かべたのでございます。しかし、そこである事に気づいたのでございます。あまりに急いで家を飛び出してきてしまったので、トイレット

ペーパーを、お尻を拭くものを持ってくるのを忘れてしまったので
ございます」

「……余には想像もつかないが、その場合、どうするんだ」

「私という娘は焦ったのでございます。流石に下痢下痢ちゃんの後
は拭かないと、家まで歩行するのも困難でございましたから。そし
て、そんな私という娘の前に、ある最大の悲劇が訪れたのでござい
ます」

「……これ以上、なんの悲劇がお前に訪れるというんだ。もう相当
なお前のいう悲劇惨劇だろうよ」

「困っていた私という娘の目の前に、ぬっと差し出されたのでござ
います」

「……何が、と聞いてよいか？」

「ポケットティッシュ、お尻を拭くものでございます」

「……誰が差し出した？」

「隣の御老人が！」

「……」
「隣の一風変わった普段は意思疎通が困難な年金暮らしのジジイが
私の前にお尻を拭くものを差し出しましたんですよ、陛下！ 拳句、あ
のクソジジイ、なんて言ったと思います?!」

「……いや、余には判らん。……へロルドなら」

「……私にも判りません、陛下」

「では、リーザはどうだ？」

「……いえ、わたくしにもさっぱりでございます」

「こう言ったんですよ、陛下、へロルドさん、リーザ！ 『おおう、
久しぶりに娘っ子の尻を見たのう。嬢ちゃんの尻はむちむちしてて
顔の埋めがいがありそうじゃ』って……」

「……」

「……」

「……」

三人が閉口している中、私は、あの悲劇惨劇の恥辱屈辱の数々が

鮮やかに脳裏で再生され続けているのに、食卓に置いてあったナイフを思わず掴み握りしめた。

あのジジイ、いま私の目の前に現れるものなら、絶対にこのナイフで刺してやるのに！

陛下が少しだけ減ったミニフランスパンもどきを左手に持ったまま、空いている右手で額を抑えた。

「……でもまあ、拭けるものを貰えて良かったではないか。……その老人に言われたのもその程度であったのだし」

「もしかして陛下、ジジイに言われたのがその程度だったとでも本気で思っているんですか?!」

私は、につつきジジイを目に捉えたかの如く、陛下をきつと睨みつけた。

「違うのか?」

「まさか! あのジジイ、更にこう言ったんですよ! 『じゃが、ちーっただけ尻が大きすぎるかのう。むちむちの範囲から少しはみ出しているかもしれん。ま、つまり尻がデカイという事じゃが』」

「……………」

「……………」

「……………」

「更に!」

私はガンツとナイフを持った手を食卓に叩き付けた。

「『隣の嬢ちゃんが、スカト口好きだとは思わなかったのう。わたしと一緒にじゃな』」

「すかとり?」

「……陛下、あまり詳しくお聞きになられない方が宜しいかと」

「……わたくしもそう思います、陛下」

「厳密に言えばいろいろと分類があるんですが、ジジイが言っているスカト口好きとは、糞尿愛好者の事ですよ! 放尿プレイとか、おもらしプレイとか、人間便器とかそういうのが好きな人の事を言っているんです!」

「……きつと聞かない方がいいとは本気で思っているんだが、あえて聞く。人間便器とは何だ？」

「……陛下」

「……」

「人間便器ですか？ 知りたいですか、陛下！ 知りたいんですね？！」

私の確認の言葉に、額を抑えた手の下の陛下の紫の瞳が戸惑いに揺れた。

「いや、……やはりいい」

「最高権力者の発言の取り消しは一切認めません！ いいですか、陛下！ 人間便器とは、仰向けになって口を開けているモノ好きのその口の中に向かって排泄することですよ！ 場合によっては食べる事もあります！ その場合は、飲尿プレイ、食糞プレイとも言いますから！ 陛下が望むのであれば、やってあげますよ、私！ その時は遠慮なく言っして下さいね！」

なんてったって私は、陛下所有の珍獣二号だからね！

言う事は聞きますよ！

ワンワンワン！

「誰が望むか！ 余とその老人を一緒にするな！」

「同じですよ！」

「どこがだ！」

陛下が声を荒げ、右手側に置いてあったテーブルナプキンを私の方へ向って投げつけた。

それは私の顔の横を掠めて後方で落ちる。

こやつ、相変わらずの暴力男だな！

よし、私自ら調教してやる！ 感謝しろ！ 歯あ食いしばれ！

行くぞ！ 覚悟しやがれよ、陛下！

当然仕返しとばかりに、私も右手側にあった使用済みテーブルナプキンを陛下に向かって思いっきり投げつけた。

その投げつけたテーブルナプキンは、陛下の超絶美系顔に当たっ

て、ぼとりと食卓の上に乗る。

陛下の眦がつり上がった。

「……小娘、お前、今投げたのは先程のっ！」

「先程？ あーはいはいはい、勿論そうですよ？ さ・き・ほ・どの、超激甘ドリンクとネバネバ鼻水のミックス物体C付きテーブルナプキンでございます。陛下御所望のね！」

「誰が所望した、誰が！ いい加減にしろ、小娘！」

「あれ、だって、陛下、さっきずーっと見てたじゃないですか、物体C付きテーブルナプキン！ だ・か・ら私つてば、陛下が、すごく欲しいのかと思つてたんですけど？」

私は鼻でふふんと笑つてやった。

瞬間、陛下の額に青筋が盛大に浮かぶ。

「小娘、お前は本当に……」

「なんですか、陛下。 あ、そうそう、そんなことより、ウンコとトイレ話で思い出しました！ 私、陛下に聞こうかなーと思つてたことがあつたんですよえ、忘れてた忘れてた」

私はこの給餌の時間が始まる前に疑問に思つた事をふと思い出し、握り締めていたナイフを食卓に放り投げ、手をぼんと胸の前で合わせ叩いた。

本気で忘れるところだった。

それもこれも、陛下がああ悲劇惨劇の悪夢を思い出させる事を言うからいけないんだ！

あのジジイだけは一生思い出したくなかつたのに！

「お前とはもう話をする気は毛頭ない！」

「陛下、なんでそんなに怒っているんですか。怒りつばいなあ。カールシウム不足ですか？」

「お前が怒らせているんだろうが！ どの口でそんな事が言えるんだ！」

「まあまあ、怒りを静めて下さいよ、へ・い・か！」

言つて、私は既に完全に冷めてしまった謎の動物の卵を使用した

不思議なキノコ入りチーズオムレツみたいなものに手をつけた。

勿論、お食事の再開である。

腹が減っては戦は出来ぬと先人も言っていたではないか。

「ほら、陛下もちゃんと食べないと。お百姓さんが汗水鼻水垂らし
て」

「判った。食べるから、その先は決して言っな」

「え、なんで？」

「……………」

「まあ、いいですけどね？ で、陛下」

「なんだ」

陛下は私の方へ目を向けてはいなかったが、一応、話を聞いてくれる気になったようだ。

彼は左手にずっと持っていたミニフランスパンを再び小さく千切り出した。

あれだけ美味しくなさそうに口へ運んでいたのに、まだ食べる気でいるようだ。

「さつき着替える為に、一度珍獣部屋に戻ったじゃないですか、私」

「ああ」

「でね、その時、ウンコしたかったから、トイレに行っただですよ
私の言葉を聞いて、陛下の眉が嫌そうにひそめられた。

「……………また、その手の話か」

「まあ聞いて下さいよ、下痢下痢ちゃんの話ではないですから」

「……………続ける」

「リーザから聞いたんですけど、珍獣部屋と陛下の部屋って、トイレ
共通なんですか？」

陛下は相変わらず小さく千切ったパンをもそもそと口へと運んでいたが、私への返事をするために、口の中のものをきちんと飲みこ
んだ。

その辺はやはり育ちがいいのだろう。

なんといったって陛下は誰も文句のつけようのない漆塗り箱入り

お坊ちやまなのである。

「そうだ。それがどうかしたか？」

「いえね、陛下、ウンコ出ますか、あのトイレで」

「……どういう意味だ」

「あんまり快適じゃないですよね、座り心地。なんて言ったらいいんだろ……そうだなあ、なんか落ち着かないし、便座もフカフカしすぎというか座りが悪いというか。やたら豪華なのは分かるんですけどね」

そうなのだ。

陛下と共通で使うのだとリーザに教えられたトイレは、妙に広い空間の真ん中にぼつんと便座らしき椅子が置いてあった。

他には何も置いていなくて、トイレ部屋の広さは日本の基準で三十畳ほど。

その真ん中に便座と思われる椅子が置いてあって、それがまた日本のトイレに慣れている私的には問題というかなんというか、なのである。

「便座の椅子、なんであんなに座れば沈んじゃう程、ふかふかソファー仕様なんですか？ ソファーの真ん中に穴が開いてあって、下は水洗じゃなくて空の陶器が置いてあったんです。つまりポットンですよね？」

「ぼつとん？」

「うーん、なんて説明するのが適切なのかよく判らないんですけど、つまり、陶器に排泄したら、そのままブツは残って、きつと使用人が使用後、そのブツを片づけるという事なんですよね？ それがポットンの意味です」

ちよつと違うけどね。

まあ、だいたいが伝われば、私的には全く問題ない。

というか、異世界便利翻訳機能、微妙に中途半端なんだよね。

製作者誰だよ、出てこーい！

陛下は溜息をつくように息を吐いた。

どうもこの手の話はあまり好きではないらしい。
そんな雰囲気だった。

「そつだ。それがどうかしたのか？ 普通だろつ？」

「まあ、普通といえば普通なんですが……。ボットンはともかくあのふかふかソファー仕様は何かならないですかね。なんかウンコしている最中に転げ落ちそうで落ち着かないんですよえ。最悪、穴に落ちそうで」

「知るか。そこまで面倒は見きれん」

陛下は面倒臭そうに言った。

相変わらず美味しくなさそうに食べるミニフランスパンもどきを小さく千切りだし、もそもそと口へ運び出す。

「しかもソファー、布仕様なんですよね。それ問題なんじゃ？」

陛下は私の言った事に不可解そうな視線を向けてきた。

「布仕様の何が問題なんだ」

「え、だって。もし、陛下が立ツションでもした日には、布仕様ふかふかソファー便器に尿の飛沫飛びまくりじゃないですか！ 布じや染み込みますよね？！ 拭けないですよ？！ 私はその上に座れとでも言うんですか？！ 嫌ですよ、私、流石に！ こればっかりは相手がパーシヴァル様でも絶対嫌です！ 譲れません！」

陛下の左手にあるミニフランスパンもどきが微妙にへしやげた。彼は見えない何かと戦っているかのように、ぐつと何かを堪え、呼吸を数回繰り返す。

その一連の動作を終えると、澄んだアメジストの瞳を細めて、私を睨みつけた。

「……立ってはいない」

「嘘！」

「そこで嘘をついてどうする?!」

「じゃあ、証拠を見せて下さいよ！」

「証拠？」

「私の前でしてください、放尿を！ さあ、トリエス王国兼甘党の国の国王陛下！ 解放される爽快感を私の前で、ドピュドピュッと！ 違う意味での快感も得られるかもしれませんよ！」

豪快にね！

勿論、証拠として見せるんだから、ズボンもパンツも完全に脱ぎ去るのは常識だよ！

裸族推奨だから！

ら・ぞ・く！ ほ・う・によう！

「阿呆か、お前は！ するわけがないだろうが！ 頭がおかしいおかしいとは思っていたが、本気でおかしいだろう、小娘！」

「失礼な！ てか、何でそんなに怒っているんですか？ やっぱカルシウム不足なんじゃ？ 小魚食べた方がいいですよ、小魚。小女子なんかいいかもしれません。小女子のかりかりサラダ美味しいですよ？ 醤油とゴマ油あたりを使ってかりかりに炒めたものをサラダにトッピングするんです。ああ、醤油は黒インクに塩分を入れたいようなもので、ゴマ油はゴマの絞り汁のことですよ。ガマの油に近いです。ちなみにガマは蛙ですからね。茨城県にある筑波山の麓で売っています」

「つくばさん？ ……お前の世界は気味が悪そうな食べ物ばかりだな。先程のすしといい……」

「まあ、それはどうでもいいとしてですね、ウンコの話に戻るんですが、」

「……戻るのか」

「私、結構毎朝快便派なんですけど、今朝はイマイチだったんですよ。いつもはコレくらいなサイズ？」

そういつて私は、先程から陛下が小さく千切りながらも美味しく美味しくなさそうに口に運んでいるのと同じ、ミニフランスパンもどきを手に持って説明した。

「……………」

陛下は一瞬喉が詰まったように沈黙すると、無言でミニフランスパンもどきを糖質小山盛りパンたちの近くに置き、他のパン物色しだした。

彼はその中から比較的糖質が少なそうな小さめのイカスミパンもどきを手に取る。

先程の糖尿話は、どうやら彼の脳ミソにきちんと刻まれたようだった。

「なんですけど、今日はコレくらいだったんですよー」

言って私は、やはり陛下がいま手に取っているのと同じ小さめなイカスミパンもどきを手に取った。

実際はチョコレートか黒糖かイカスミかは判らないが、太めの黒糖カリントウサイサイズのパンだ。

陛下の眉が跳ねあがった。

「小娘、それは嫌がらせか何かか？！ 何か余に恨みでもあるのか、お前は！」

「え、なにがですか？ つか、本当にさっきから何で怒っているんですか、陛下。マジでカルシウム不足してるんじゃない？ やはり小女子ですよ、小女子！ カリカリサラダにして食べた方がいいではないですよ、本気で！ 私、今度、厨房に言っておいてあげますね！」

もう本当になんて私って親切な善人なんだろう！

感謝してよね、へ・い・か！

「というか、陛下、野菜も食べた方がいいですよ？ さっきから炭水化物ばかりじゃないですか。へロルドさん、そこにある赤いドロツとした感じの飲み物って野菜ジュースですか？」

「ええ、そうでございます。いくつかの新鮮な野菜を絞った飲み物でございますよ。赤いのは、入れてある野菜のひとつの赤みが強い

からでございます。お飲みになられますか、珍獣様」

ヘロルドさんはワインクーラーで冷やされていたガラス製のピッチャーを、水滴が垂れないようにナプキンで丁寧に拭きとりながら、私の方のグラスへと注ごうとした。

しかし、ヘロルドさんは本当、セバスチャンだよね！ もう大好き！ 執事カフェとか開きたいよ！ あ、王都に執事カフェもいいかもね！ 勿論、資金は陛下の懐からだよ！ 豪華に行くよ！

装飾は城にある物を盛大にパクツてね！ 本物志向最高！ 盗・品・万・歳！

「あ、違いますよ。飲ませるのは陛下の方です。ほら、陛下、サラダ食べないのなら、少なくとも野菜ジュースくらいは飲まないと！ さ、ヘロルドさん、その我儘坊やに野菜ジュースを与えてやって下さい。というか、だめですよ、ヘロルドさんも。いくらヘロルドさんが優しいからって、陛下の偏食を許しちゃ」

ヘロルドさんのロマンスグレーな上品な微笑みが、ほんの少し引き攣った。

彼は気を取り直すかのようにピッチャーを再度丁寧に拭くと、陛下の方へと伺いを立てる。

「陛下、お飲みになられますか？」

「陛下、飲まないよ、偏食児認定くださいますからね」

その時は覚悟しろよ？ な目線で私が陛下を見遣ると、彼は額に本日何本目か判らない青筋を浮かべながら、無言で野菜ジュースを受け取り、グラスに口をつけた。

飲みながらも陛下の視線は赤いドロドロとした液体を捉え、実に不味そうにそれを飲んでいく。

一時前の青汁のCMのようだった。

「ただ偏食なんだよ、という感じである。」

全く手のかかる子供だ。

「そういえばあのふかふかソファートイレだと、生理の時どうするんだろう？ うまくナプキン着けなくて、手に血とか付きそう。」

私、トータル的に結構な量が出るんですよ。あ、ほら、今、陛下が飲んでいる野菜ジュースくらいの量」

「……ッゴフツッ！」

陛下が嘔き出した。

陛下は咄嗟に椅子を引き、顔を俯け、どうやら床に向かって嘔き出したようだ。

俯いたまま彼はおもむろに手を伸ばし、近くにあったテーブルナプキンを鷲掴みにして、口元に当てる。

苦しそつに咳こんでいた。

ああ、あれは気管に入ったな、確実に。

「……………」

「へ……陛下、大丈夫でございますか……………」

「汚いなー。どこのオコチャマなんですか、陛下」

言った瞬間、陛下は咳込みながらもギツと擬音が聞こえてきそうな勢いで私を睨みつけた。

薄っすらその紫の瞳に涙を浮かべている。

「お前が原因だろうがっ！」

「なんで私が原因なんですか？ 何にもしてないじゃないですか、私。人の上に立つ者として、責任転嫁は褒められたもんじゃないですよ？ もう、本当、陛下って怒りっぱいなあ。完全にカルシウム不足ですよ、それ。カリカリサラダ食べた方がいいですよ。カリカリサラダ。カリカリサラダをカリカリ食べて、カリカリを治さない」と

「……………ゴホッ……………」

「で、陛下、聞いておかないとイケない重要事項なんですけど、トリエスでは生理の時、こういう風に処理してるんですか？ どんなナプキン着けてます？」

「知るか！ それを余が知っているとしても本当に思いつのか、お前は！ リーザに聞け！」

陛下は西洋系人種の特徴をそのまま踏襲して、顔を赤くしながら

怒鳴った。

驚掴みにしたテーブルナプキンで口元を押さえつつ、野菜ジュースを拭っているのか擦っている。

「だからカリカリサラダを食べな」

「しつこい！」

「ちなみに陛下、その口元のテーブルナプキンね？」

「なんだ！」

「わ・た・し・のネバネバ鼻水ミックス物体C付きテーブルナプキンです！ いえーい！」

復・讐・完・了！

なんの？とかツツコまないでね！

とりあえず今回は、ジジイへの恨みの一割未満程度の復讐でしかないから！

これからガンガンいくよ！

あっちの世界での怨みつらみは、全て陛下で晴らす気なの、わ・た・し！

「っ！」

陛下が声にならない悲鳴を上げ、口にあてていた鼻水テーブルナプキンを私に向かって全力で投げつけた。

全く、芸がないよね？

私は鼻でふんと笑ってやると、その鼻水ナプキンをアタックし返してやった。

うん、勿論、陛下の超絶美系顔にちゃんと向かったよ！ ナイス
コントロール、わ・た・し！

∴ 17 (後書き)

ガマの油 ∴ 軟膏剤

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AC%E3%83%9E%E6%B2%B9>

陛下と私の給餌の時間・前編 ∴ 四百字詰原稿用紙 約81枚

何の花の匂いなのかは異世界人の私にとって当然分かる訳はないが、食卓の上を彩る料理の魅力を決して損なう事のない程度に、その新しいテーブルクロスはふわりとした優しい良い香りを纏っていた。

先程から食卓の椅子に座り続け、ぼけっとしている私の前で、ヘロルドさんとリーザがちゃきちゃきと働いている。

ヘロルドさんは食卓上から料理や食器などの全てを下げ、仄かに花の香りのする新しいテーブルクロスを皺ひとつないように几帳面に掛けていて、リーザはつい今し方に陛下が嘔き出した残骸の後始末をしていた。

で、肝心な陛下はというと、彼は中座していた。

なんでも、避けきれなかった嘔き出した野菜ジュースが付いてしまったとかで着替えるのだそうだ。ついでに顔も洗ってきたらしい。

けっ、お坊ちゃまめ。

あの程度でいちいち着替えるなんて、どんだけ無菌室で育てられたんだっつーの！

全く、トリエス王城の人々は　　まだ、ヘロルドさんとリーザ、バルツアーさん、ユーリウス少年、ラードルフさん、他ワラワラ部隊くらいしか知らないけれど　　彼を大事に大切に甘やかすすぎなのだ、私から言わせれば！

人間、少しくらいサバイバルな生活をした方がいいのだ。

だって人生って、寿命をまっとうするのなら、基本的に長いじゃない？

人生一寸先は闇なんだもの、いつ何時、何が起きるのか分かったものじゃないじゃない。

それを想定して、多少は不便で野生エッセンスの含まれた生活を送っていた方がいいのだ。

陛下だって今は平穩に玉座に治まっているかもしれないけれど、例えば革命でも起きたりして、国を追われたりして、いつ物乞いまで身を落とすか分かったもんじゃない。

下手すると陛下の美貌だもん。

彼は絶対、国王という地位を追われでもしたら、変態ジジイにでも買われて、ベロベロ体中を舐められた拳句、後ろからガツガツ突っ込まれるに決まっているんだ！

その決定事項に耐性をつけることって大事だと思うんだよね、私！

パーシヴァル様だって、魔皇帝の地位に登極するまでは散々な辛酸を嘗めなければならなかったのだ！

登極しても彼の場合、勇者とかが登場しちゃったんだけどね！

ああ、パーシヴァル様！ 私は『愛と絶望の黒薔薇魔帝国物語2（魔皇帝復活愛憎編）』で、貴方を復活させたかった！ また相性度百パーセントにして、貴方とのラブラブエンディングを迎えたかったのに！ なんて私、異世界のトリエス王国になんて居るんだろう！ トリエスじゃ例え陛下の権力をもってしても、ソフトが手に入らないよ！

私はどんなに望んでも決して手に入ることのないソフトに悲嘆の溜息をつきつつ、行儀悪くも靴を脱ぎ、片足の膝を曲げて椅子に乗せ、先程、鼻水ミックス物体Cが垂れそうになった軽く二十センチは長いズボンの裾を折り直した。

つか、このズボン、ウエストが些かキツイ。

それにリーザが気づいた。

彼女は手にしていた雑巾らしき、でも綺麗な布を四つ折りにして床に置き、私の傍へとやってくる。

近くまでできてから静かに跪き、ズボンの裾を私の変わりに丁寧に折り曲げてくれた。

「リーザ、やっぱりこれ長すぎるよ」

「そうでございませぬ……、申し訳ございません、御指示がございましたのが何分早朝の事で、裾上げが間に合いませんでした。今、急ぎ城の針子が手直しておりますわ。そろそろ持ってくると思うのですけれど……」

「御指示？」

「ええ、陛下の」

リーザの当然のように返してくる言葉に私は驚いた。

え、なんで。

なんで陛下がこの服装を指示してくるんだろう。

着替える時にリーザが用意した服に疑問に思ったのは確かだけど、私は、それは彼女の判断だと思ってあえて何も聞かなかったのだ。

トリエスにはトリエスなりの仕来りでもあるのかと思って。

「なんで陛下が指示をするの？　つか、なんであえてこの服？」

私の当然の疑問に、リーザは申し訳なさそうな表情で「それは……」と言つて、高価そうで、上品で控えめな装飾が施されている上着の乱れを手早く直してくれた。

「私、リーザがこの男物の服、私には判らないトリエスの仕来りかなにかあつて用意したのかと思つた」

そう、私が今着ている服は完全な男物の服だった。

珍獣だからドレスとまでいかなかったも、少なくとも城内をふらついても問題のない程度のシンプルワンピースでも用意してくれるのかと思つていた。

けれど今朝、着替える時分になつて私の前に出されたのは、白地に金糸の刺繍が施されている　　そう、白馬の王子様が着れば似合いそうな服で、………あ、今、凄く嫌な予感がしたんだけど、

気のせいかな。

「仕来りがあつて御用意した訳ではございません。トリエスの一般的慣習にならつて珍獣様にお召し物を御用意するのであれば、貴族の御令嬢が召されますようなドレスが順当でございますし。わたくし、珍獣様には今朝、先日レネヴィア王国国王陛下より陛下の側室様方にと贈られてきましたレネヴィアで有名な仕立屋の新作の薄緑色のドレスを御用意しておりました」

「え、そうなの？」

「はい。ですが、それを持って珍獣様の部屋の中へ入りましたところ、まだアルノルト様がいらっしゃる少し前でございます。陛下が既にお部屋にいらっしゃられまして、」

「え。陛下つてば、私がまだ寝ている時に部屋に居たの?! 珍獣部屋に?!」

私は仰天して、目を見開いてリーザを見遣つた。

だつて、私つてばその時は、まだぐーすか寝てたはずなんです
!

バルツアーさんとリーザに起こされるまで、私の記憶は昨夜、部屋の床に躓いて盛大にすつ転んで、うんうん唸りながらベッドに入つた記憶までしかありませんが!

「陛下、一体、何の用でまだ寝ている私の部屋に? 何してたの、陛下は?!」

リーザは困つた顔をした。

首を少し傾げて、その時の事を思い出しているのか目線をじつと固定している。

「それが……わたくしにも判らないのでございます。ただ、寝ておられる珍獣様をご覧になつて何か考えておられたご様子ではございませんが」

「うわ、キモイ! なにそれ?! さつき人に『年頃の娘としての恥じらいを持って』とかなんとかほざいてたけど、よく言えるよね! 年頃の娘の部屋に無断で入っているのは自分じゃん! やっぱり

さー、昨日の夜から思ってたんだけど、珍獣部屋の鍵が壊れてるの
って問題じゃない？ しかもあの重そうなカーテンも陛下の部屋側
にしかついてないし。乙女の危機と人権侵害だと思っただよね、私
！」

トリエスでは人じゃなくて珍獣だけだね！

ニヤーン！

「それに関しましては、わたくしにはどうしようも……申し訳ござ
いません」

リーザがあまりにも恐縮して謝るのに、私は焦った。

いや、彼女は全く悪くないし！

「ううん、リーザのせいじゃないのは勿論判っているし、どうも出
来ないのも理解しているから、そんなに気にしないで！ っつかし、
陛下、マジで何していたんだろう。新車のストーカーか何か？ う
わ……国王だけにタチ悪そうなんですけど！」

「すとおかあ、ですか？」

リーザは疑問に思ったからか、お人形みたいに長い亜麻色の睫毛
をぱちぱちと瞬いた。

「あー…粘着質な人の事、かなあ………意味的に」

「粘着質ですか……。よくわたくしには判りませんが、陛下におか
れましては、それとはたぶん違うと思うのでございますが……」

「そう？ まあ、いいや。陛下の性格や性癖、趣向に全く興味ない
しね、私」

「……………」

「で、なんでリーザが折角用意してくれた、そのなんとか王国の国
王陛下が贈ってくれたドレスじゃなくなって、この王子様仕様の男
物の服なの？ しかもズボン長いし、腰回りキツイし、サイズ全く
あってないんだけど」

「腰回り、きつくございませんか？ どういたしましょう、本日お召
しいただく予定の服は、裾上げしか依頼しておりませんでした」

言って、リーザが上着を少し上げ、私のウエスト部分に手を入れ

て隙間を測った。

「あ、いいよ、今日は別に。きつめだけど入るから、とりあえずで、なんでこれ？」

「わたくしが部屋に入ったところで、すぐに陛下がおっしゃったのでございますわ。……あの、」

そこまで言うてから、リーザはなにやら言い難そうに口を噤んでしまった。

その様子には溜息をつく。

あやつ的事だ、さぞ酷い事を言ったに違いない。

くそ、陛下め。

ヤツは一度、性格矯正施設にでもぶち込まないとだめだと私は思うよ！

そう思うでしょ？！ トリエス王国全国民の皆さん、加え、近隣諸国の王侯貴族の皆さん！

「リーザ、私は全く気にしないから言うて、ズバツとね！」

「……はい。陛下は『これにドレスほど似合わんものはないだろう。そのような物を着せたところで、どうせ昨夜のように中が見えても気にせずに裾を捲り上げ足を開いているだろうし、そしてせいぜいその裾に躓いて至るところで転びまわるのがオチだ。余の少

年だった頃の服がまだとってあるだろう。すぐに用意できるはずだ。それでも着せておけ。それであれば珍獣らしく城内を走り回り転げまわって、足を開こうが何をしようが問題はないだろう？ 昨夜のような奇行は周囲に迷惑だ』とおっしゃられましたので、そのように」

あの男！ ヤベー、マジでムカつく！ もう本当に何なの、あいつ！ 変態だし、破壊魔だし、暴力男だし、甘党だし！ 加えて、性格も最悪だよ！ いいのは本気で顔と地位だけじゃん！

「じゃあ、この服、陛下の、つーか陛下が王子様だった頃の服なんだ」

王子様仕様なの当然じゃん！ というか、ズボンが二十センチ長

いとか、腰回りがキツイとかさ、何、私に喧嘩売ってるって事かな、やっぱり！ あーもう、存在自体が腹立つよ！ なんとかして下さい、パーシヴァル様！ 貴方の闇の波動でズバンとやっちゃってくださいよ！ 私、貴方のマジックポイントの為に、魔力回復アイテム探ってきましたから！ 魔界の煉獄洞窟だって何の其のですから！ 私は着ている服を手の平で擦るように触ってみました。

確かに肌触りは極上だし、別に陛下のお古だったとしても、痛んでいる訳でもなく、古さも全く感じさせないものだった。

むしろ新品だって通じると思う。

たぶん数回しか袖を通してないんじゃないかと思われる代物だ。

あの我儘贅沢レアメタル箱入り偏食お坊ちやまにはありがちな話だ。

そんな風に私がムカつきながら服を触っていると、ヘロルドさんがどこか感慨深げに私を見て優しげに目を細めた。

何故？

「やはり陛下のお召し物でございましたか。少し前まであの方がよくお召しになられていた形でございましたので、もしかやと思っておりました。お懐かしい。珍獣様、それは陛下が王子殿下でいらした頃のお召し物ではございませんよ」

ヘロルドさんの言葉に私は首を傾げた。

どういう事だろう。

彼はデザートの準備をしていた手を止めて、私の方へ礼儀正しく体の向きを変えた。

ロマンスグレーの魅惑の微笑みを私に向ける。

ああ、まじステキ、ヘロルドさん！ 本気で執事カフェ開こうね！ もう少しトリエスの生活に慣れたら絶対企画するからね！ 待ってて！ 店の名前は『セバスチャンの花園』そして魅惑の楽園へ、『コレしかないでしょ！ 勿論、お客様のお金の支払い具合によっては、体のサービスもあるよ！ 当然だよ！ そして私はとりあえずこれから、トリエス版ドンピン探すから！ ぼったくるよ

！ 違法客引きも思いつきりするからね！ 新宿歌舞伎町なんて目じゃないから！ 治・安・悪・化・万・歳！ 王都の裏ボスになるのが、これからの私の夢だから！

「陛下が御即位されたのは八歳にお成りの年でしたから、それをお召しになっておられたのは既に国王の時でございます」

「は？ 八歳？」

え、それは日本でいう小学二年生か三年生ということですか、へロルドさん？！ それは何ですか、私が夏になればスクール水着を着て、学校のプールで皆で鼻垂らしながら遊んでいたと思われる頃の、あの八歳ですか？！ 夏休みの宿題の計算ドリルの解答を、休みの終わりにお兄ちゃんに泣きながら聞いていた頃の八歳ですか？！
へロルドさんは頷いた。

「ええ、そうでございます。陛下が八歳にお成りになられて半年後、先代の王が崩御されまして、そのまま御即位に。陛下は再来年、在位二十年にお成りになられます。きっと再来年は華やかな式典が催されますよ」

「二十年?!」

長つ！ 陛下が陛下である年数は、私の人生の年数を超えてるじゃないか！ いや違うか。え、じゃあ何、この世界と向こうの世界の時間の流れが同じなら、私が生まれた年に、陛下はトリエス国王になつたって事?! なげーよ！ どんだけ国王でいるっつーの！ それじゃあもう筋金入りの国王陛下じゃない！ どうりで芯から偉そうだと思つたよ！ 半端なく偉そうだと思つたよ！ 勿論、彼は偉いんだけどね！ 十八年も国の頂点にいるしね！

私はなぜだか力が抜けてしまって、ふうと息をつきながら椅子の背凭れに全体重をかけるように体をだらんとさせた。

なんだかなあ。

「ずいぶん長いことトリエスの王様なんですね、陛下って」

「そうでございますね」

「そういえばさつき陛下ってば、先代の王様、陛下のお父様が亡くなって、むしろせいせいしたって言っていたんですけど、それって八歳の時の話だったんですか？ 私、てっきり最近……なんていうか二十歳すぎたからのことだと思っていました」

私のその言葉にヘロルドさんが顔を固くした。

「……あの時はいろいろとございましたからね」

「いろいろ？」

「ええ、いろいろでございます」

ヘロルドさんの言葉の濁し様と、顔どころか声まで固くなっているのに、私はこれ以上聞くのをやめた。

世の中には知らない方がいいって事はたくさんあるんだよね。

知ったが最後、命の危険が伴うとかね。

加えてここは日本じゃない。

日本だって、地位や権力、財産を持っている人種とそれに関わっている人たちなら、誰にも気づかれないように東京湾あたりに沈められちゃった人だって、ひとりやふたりじゃないと思うんだよね。

ましてや此処は異世界トリエス王国。

その頂点に立つ国王にまつわる話で、もし耳にはいけない事

だったのなら、私なんて一溜りもないよ。

それこそ珍獣保護法云々以前の話題で、陛下があのアメジストみたいな澄んだ瞳で、『始末しろ』とか目で語っただけで、声に出して命じなくても私なんてきつと彼の手先に瞬殺されるに違いない。

あーいやだ。

権力って持つていれば便利で私的には大好きだけど、そういう使い方は嫌いだね。

血生臭いのは大嫌い。

私は話を変えることにした。

「そういえば私、これからここで暫くお世話になるつもりなんですけどね？」

「はい、そのように伺っております」

「まだ私って、陛下とヘロルドさん、リーザにバルツアーさんにラードルフさん、あと頑張ってユーリウス少年と、他使用人数人しか会っていないんですけど、陛下の側室さんたちは、なんか筋違いな気もするからともかくとして、陛下のお母様や御兄弟には一応居候的にお世話になるってご挨拶した方がいいんじゃないでしょうか？ お城っていつても、結局、その方たちを試してみたら、おうちでしよう？」

ヘロルドさんは何処か言い難そうに少しだけ目を伏せた。

「陛下のお母君、先の王妃様は先代の国王陛下が崩御される前年にお亡くなりになりました」

「え」

「陛下には異腹を含め、御兄弟に王子が三人、王女が二人おられました。その方々も先代陛下が崩御された同年と翌年、翌々年に全とお亡くなり」

「は？ 原因はなんですか？」

「皆様、御病気を患われたり、事故に遇われたりと原因は様々でございます」

いやー、それって、どう考えてもキナ臭過ぎるでしょ！ 普通に

！ 何人亡くなってるだよって！ ヤバイ伝染病が流行った訳じゃないんでしょ？ ってか、ヘロルドさんだって、勿論、心の中では思っているんでしょ？ ねえ！

「陛下って第何王子ですか？」

「第一王子でございますよ。歴とした王妃様のお子様でございます。私は腕を組んで考える。」

「うーん、順当にいけば何もなくても国王になれるよね、陛下って。」

「じゃあ、何故。」

「どうしたって、このキナ臭い話には陛下にとっての利点があるはずだ。」

「私はさも陛下が犯人であるかのような扱いで、推理小説を読み解くかの如く、通常は一割すら覚醒しているかもアヤシイ脳ミソを働かせた。」

「陛下のお母様の身分が低いか、没落気味か、弱小国の王女かなんかで、彼の後ろ盾が弱かったとかは？」

「いえ、先の王妃様は力の強い公爵家の御令嬢で後ろ盾は盤石でございます。先の公爵様も当時王子でいらした陛下を精力的に盛りたてておられましたし」

「先の公爵様？」

「ええ、その公爵様も、先代の国王陛下が崩御された翌年にお亡くなりになりました」

「もしかして、その先代の王様が亡くなった前後数年って、結構、貴族も亡くなっていたりしてます？」

「……結構な数という訳ではございませんが、まあ、幾人かはお亡くなりになっておられますね」

「幾人？」

「ええ、幾人でございます」

「……………」

「ねえ、それってさ、肅清なんじゃ？ あーやばい、これは深入り

してはダメだ。絶対に！ 一步間違えたら私も消されそうじゃん！
でもなあ……、陛下、当時八歳前後なんだよねー。彼がつていう
より、裏で暗躍していた貴族や、近隣の王族あたりが居るんだろう
な、きつと。

よく判らないね、やっぱり。私はなんていったって、日本の片隅
で細々と生きてきた一般庶民の底辺小市民だしね。

この話は本気でやめよう。二度としたくないし、真実を知りたい
とも思わない。私、早々にバルツァーさんちに行こうかな。ちよつ
と真剣に検討した方がいいかもしれない。

そんな事を考えていると、ヘロルドさんが妙に真面目な顔を私に
向けていた。

「珍獣様」

「はい」

「珍獣様に申し上げたい事がございます。昨夜と今朝の貴女を拝見
して、申し上げなければと思っていたのでございますが、」

「え、なんですか？」

「珍獣様、陛下はと」

「余がなんだ、ヘロルド」

突然、聞こえてきた陛下の声に、私も、ヘロルドさんも、勿論、
私たちの話に耳を傾けながらデザートの準備をしながらいたリーザ
も、心底驚いて隣室への扉付近の壁に背を預けて立っていた陛下を
勢いよく振り返った。

き……気付かなかつたよ、全く！ いつから其処に居たんだよ、
陛下！ 思わず驚いちゃったじゃない！ ヘロルドさんなんて固ま
っちゃったよ、さつきよりね！ 責任を持って、責任を！ 気付くと
居るなんて、忍者か貴様は！

「陛下、いつ着替え終わつたんですか？」

「さあ？」

うわ、取り付く島もないね、その態度。っていうか、微妙に冷気
纏ってます？ もしかして。怖すぎ、陛下。流石、十八年も玉座を

守っていただけのことはあるよ！ 私が『よくできました』の判子を押し上げるね！ よく小学校の時に押ししてもらっていた、花丸枠のやつだよ！ ぽこんぽこん十八個は押し上げるから！

「で、へロルド、余がなんだと？」

「……いえ」

「もう、陛下！ あまりへロルドさんを困らせないであげて下さいよ。たいした話じゃないですから」

「ほう？」

陛下が壁から預けていた背を離した。

ゆつくりと静かに私たちの方へと向かってくる。

紫の瞳はへロルドさんを捉え、次いで私を捉えて、彼は椅子の横に立った。

へロルドさんが固い動きながらも椅子を引く。

陛下が優雅な動作で座った。

「陛下さ、なんかさつき着ていた服よりも、感じが私が今着ている服に近くなってませんか？」

やめてくださいよ！ ペアルックみたいになっちゃうから！

私はぶんぶんと首を数回横に振った。

理由は特になく、単にシャギーが入りまくっている横髪が頬にかかっていたからだ。

私は一本に縛られた髪を一度解き、手櫛で二度ほどざっくりと髪を梳いてから、もう一度縛り直した。

縛ったといっても、日本でいうゴムではなく、絹製のリボンなんだけだね。

だからすぐほつれちゃうんだよね、横髪が短くて。

私は息をついた。

ドレスやシンプルワンピースじゃないんだもん。

そりゃありーザが今朝、髪を結い上げてくれない訳だよ。

男装にアップ髪はないからね。

「用意されたのがこれだったただけだ。意味はない」

「そうですね。……ねえ、陛下」

「なんだ」

「私、言ってみたかったんですよ……」

「なにをだ」

「異世界トリップ王道設定のうちのひとつですよ」

「王道設定な。そういえば昨夜もいろいろと申していたな。ぎゃくは」だったか

「そうですね！ もちろんそれは今も稼働中の王道設定ですからね」！

「稼働中な」

「今回の王道設定は、ドレスの事です！」

「ドレスがどうした。それとお前の言う王道設定とどう関係する？」

「判りませんか」

「判らんな」

「例えばこうです」

なんだか淡々とした様子の陛下に私は恨みがましい目を向けた。

当然だよな？

だって。

「わわわ、私にはドレスなんて似合わないですよ！ そんなことないって言われても！ どのドレスを着たいかって？ うーん、桃色は似合わないかなあ。あまり派手な色のじゃなく、大人しめの色で、そうですね、この紺色のとか。え、地味だから鮮やかな真紅のドレスを着ろって？ 似合っつて、そんなことないですよ！ やだなあ、なに言っているんですか。ちよつと、きゃっ！ 何するんですか！ 大丈夫です、私、自分で脱げますから！ え、ちよつと待って、待って下さいってば！ 恥ずかしいです、私！ 日本じゃ誰かに着替えを手伝ってもらっつてないんです！ あ、いたたたたた！ コルセットちよつとキツイですよ！ きゃー！ え、鏡を見てくださいって？ はい、見てみます。きつと似合わないんですよ、私……。あれ、鏡の中の私、いつもと違う。やだ、お姫様みた

いだよ！ 嘘……。すごいよ！ はい、なんですか？ え、さつそく王子様にお見せするようになって？ え、でも……。王子様が心待ちにしているって？ 何故ですか？ それは王子様にお会いしてからのお楽しみ？ やだ、なんか不安、私。はいはい、行きますよ！ 勇気を出して、王子様の部屋に私、行きます！ きゃっ、裾が長くて歩きにくいー。日本じゃこんなドレス、普段、着ないから歩きなれてないんだよね。あ、転ぶ！ あれ、倒れない……。？ お、王子様！ すみません！ 支えて下さって！ 今、私、王子様の部屋に行こうと！ え、待ちきれなくて来てしまったつですって？ そんな……。！ どうしたんですか、王子様？ なんか頬が赤いですよ？ 熱でもあるんですか、大変！ ……違う？ 私に見とれていたって、何を言っているんですか！ 冗談は……。きゃ、王子様突然抱きつかないで下さい！ やだ、何だろっ、この胸のドキドキ！ 私……。もしかして王子様の事……。、あれ、王子様、どうして私の顎を取るんですか？ え……。王子様の形の良い唇が私の唇に近づいて……。初めて感じる柔らかい感触が。キャー！ 私、今、王子様とキスしてるよ！ は、恥ずかしい！ あ……。あれ？ 王子様、なにやら息が荒くなってきましたせん？ え、王子様、どこへ行くんですか？ なに？ 待てない？ きゃ、王子様、いきなり抱きあげないでください！ 恥ずかしいです！ 私、自分で歩けますから！ 王子様、この部屋は？ 王子様の部屋？ きゃっ、王子様、どうして私をベッドの上に？ やっ、王子様、どこ触っているんですか！ あ……。んっ……。ああん、だめっ、ひゃう……。お、王子様……。はう

「妄想は終わったか？」

「はい、終わりました」

陛下のこれ以上続けたら殺す並みな冷たく、そして呆れ果てた視線を私は全身に浴びた。

なによ、その目はさ、陛下め。生意気だぞ！ 何度も言うようだけど、異世界の日本出身の私には、陛下の地位は全く効力ないんだ

からね！ 例え在位十八年でもね！ ふんだ！

「お前のその脳内の妄想は想像を絶するものがあるな」

「え、どういう意味ですか」

「言葉通りだ。それに、その妄想を外に向かって垂れ流すのも信じられん非常識さだ。きつと羞恥という感情を母親の胎内にでも忘れてきたのだろう」

ひー！ なに言ってるのよ、この男！ ねえ、陛下、それマジで言っているのかな？！ 純真可憐で繊細な麗しの乙女に対する冒瀆としかとれない発言を、そんな淡々と言っちゃ陛下の方が非常識男だよ！ どこをどう見たら、私に羞恥心が無いふうに見えるのよ？！ どう見たって些細な事にも羞恥を感じてしまう内気な純真可憐で繊細な麗しの乙女にしか見えないよね？！

「陛下って、失礼極まりないスーパー無礼男ですよな」

「そうか？ お前に関しては真実を素直に述べているが」

「……素直につて。もうマジでムカつくんですが」

「まじ？ むかつく？」

「マジは本当。ムカつくは……腹が立つ、という意味ですかね？ ちょっと適切か自信ないですけど。っていうか陛下、私、この言葉、陛下に対してはじめて使った訳じゃないんですけどね。もしかして陛下つてば、結構、私の言っていること聞き流しています？」

私は陛下に胡乱な目を向けた。

陛下はそれに片眉を上げて応じる。

「よく判ったな。お前の言う事にいちいち全てを理解し努めようものなら日が暮れそうだからな。なにせ思考回路が他の者と違つだろう、お前は」

「どこがですか！」

「全てだ」

陛下は相変わらず淡々とした様子で言った。

私はそれを怪訝に思う。

なんだか陛下の纏う空気がおかしい。

「や、陛下、どうしたんですか？」

「なにがだ」

「なんか、性格の悪さに拍車がかかってませんか？ 明らかにさっきよりも！」

「お前な、王に向かって性格が悪いなどとよく面と向かって言えるな。これからは、あまりに非礼な発言はそれ相応の対処をする故、心しておけ」

「きゃー！ 権力にモノを言わせた発言でたよ！ 最悪、陛下！」

「五月蠅い。お前がいう折角持っている権力なのだろう？ 持っているものだ、利用して何が悪い。先程、申ししていたよな？ あられもない姿の時に」

「え、私、なんか言いましたっけ？」

「お前の記憶能力は二ワトリ並みか？」

「珍獣です！」

クルツクウー！

「……………お前は、こう言った。『せつかく持っている国王としての権力、思いつき私的に利用しない手はありません。もったいないですよ。陛下の持つ全権で以ってかぼちゃぱんつ狩りをし、尚且つ、『いちご』のらんじえりを強制的に国民に購入させるんです』とな。一言一句違えていないと思うぞ？ ものを記憶するのは自信があつてな、余は」

「……………え」

確かに言った、言ったよ、それは！ 思い出しました！ けどさ、そんな話よりもさ、今、さらりと凄いことしたよね、陛下！

「あの……」

「なんだ」

「じゃあですよ？ いまさつき私が言った陛下の言う妄想も一言一句間違えないで言えちゃったりするんですか？ ……なんて、まさかね？ へへ」

私は自然、背中に流れる汗を陛下のお古に吸い込ませる為に、左手を後ろに回して背中を三回ほど擦った。

やばい、なんか知らないけど嫌な汗が止まりませんが！

陛下が興味なさそうに、というより簡単すぎてつまらないとでもいったような顔をして、肘掛に肘をつき、頬杖をついて、私に細めた紫の瞳を向けながら、驚愕なる言葉の数々を口にしました。

実に淡々とね！

「わわわ、私にはドレスは似合わないですよ。そんなことないって言われても。どのドレスを着たいかって？ うーん、桃色は似合わないかな。あまり派手な色のじゃなく、大人しめの色で、そうです、この紺色のとか。え、地味だから鮮やかな真紅のドレスを着るって？ 似合うって、そんなことないですよ。やだな、なに言っているんですか。ちょっと、きやつ。何するんですか。大丈夫です、自分で脱げますから。え、ちょっと待って、待って下さいってば。恥ずかしいです、私。にほんじゃ誰かに着替えを手伝ってもらう事ってないんです。あ、いたたた。コルセットちょっとキツイですよ。きゃ。え、鏡を見てくださいって？ はい、見てみます。きつと似合わないんですよ、私。あれ、鏡の中の私、いつもと違うやだ、お姫様みたいだよ」

「陛下、もう結構でございます。私の完敗でございます。申し訳ございませんでした。心の底から大反省いたします……」

私はあくまで淡々と続ける陛下を無理矢理遮った。

もうとてもではありませんが聞いていられません。そもそも言っ

た本人がここまでではつきり記憶していませんしね……。土下座しますので、なんかもう許して下さい。怖いです。

っていうか、初めて遭遇したよ、天才に！ なに、この異能力者！ 天は陛下に何物与えてるんだよ！ 依怙鼻屑しすぎ、史上最高に！ 他の人間はやってらんないって話だよ！ 本気でグレていいと思うよ、私！ だよね？！ この世界の全人類よ！ 己らの神を恨むべしだよ！ よし、反乱だ！ 神に弓引き、剣を持って！ 目にした全ての首を跳ね、心の臓を貫くのだ！ 血の雨を大地に流せ！ 邪悪なる闇の魔王に血の杯を捧げる！ 皆の者よ！ さあ、私に続け！ 血塗られた剣を打ち鳴らし、魔王に祝いの調べを捧げるのだ！ 乙女は居ぬか？ 乙女の純潔も魔王に捧げるべし！ 乙女が貫かれた痛みによる悲鳴と恐怖こそが、彼の君を甘美なる狂気と恍惚へと誘うだろう。そしてそれこそが、この世を暗黒へと導き、破滅への序曲となるのだ！ 全てがただひとりの人間を愛した神に対する報復となる！ さあ、皆の者！ 私に続くのだ！ 今、この目の前に居る神に愛された男に一矢報いる為に！

「大反省な。……反省といえば、余もいろいろと反省した」

陛下は頬杖をついたまま、へロルドさんの方へデザートを運ぶように合図を送った。

へロルドさんとリーザがそれに素早く反応して、リーザが外の人に指示を出す為か、一度腰を落として陛下に礼をとると、扉の方へと少しの足音も立てずに向かった。

「反省？ 陛下がですか？」

私は疑いの目を向けた。

「ああ。お前への対応方法についてな。飼い方とも言うが」

「え」
「普通でない者に通常の接し方では問題があったのだ、とな。小娘、お前にだけは、他の者には決してしないという程の強権を発動してやるっ」

「や、なに言ってるんですか、陛下?!」

私は啞然茫然の呈で、口をぽかんと開けてしまった。

え、マジでこの男なにを言い出しているの？ 私の思考回路が他の人と違うとか言っただけど、思考回路が他と違うのは陛下の方なんじゃ？ あれ、なんかこの流れはおかしいよ、……というかヤバくない？！ 私、いち早くバルツアーさんちに逃亡するべきでは？

私は嫌な予感が身体全体に押し寄せてきて、服の胸の部分を抱もうとした。が、陛下のお古は装飾とすっかりとした生地でのきつちりとした作りだった為、うまく掴むことは出来なかった。それが益々の不安感を増幅させる。

陛下が口角を上げて笑みを浮かべた。笑みといっても爽やか系な笑みでは勿論ない。こう、ニヤリといった愉悦に満ちた嫌な笑みだ。

ま……魔王が居るよ！ ママ、魔王が居ます！ 貴女の娘の眼前に今、闇の帝王たる魔王様が居て、邪悪な笑みを浮かべているんですが！ 私、どうしたらいいですか？！ ママー！！

「お前は余の珍獣。何をしようと、誰も何も文句は言うまいよ」

「ちよちよちよっと！ 本気で何を言ってるんですか！ 私に無体な真似したら苦情を言う人がいますよ！」

「ほう？ 誰だ？」

陛下がアメジストな瞳を更に細めた。

「バ……バルツアーさん、とか……」

やべえ、言っている私自身がすごく自信がないよ！ バルツアーさん、言ってくれるかな？！ 言ってくれるよね？！ 当然、言ってくれるんだよね、バルツアーさん！ おーい！ 返事してー、バルツアーさん！

「バルツアー？ あの男が余に何か言えるとも思うのか？ それも己の本分以外の事でだぞ？」

「う……」

「強権の発動か。いろいろと楽しみだな？ 小娘」

陛下は言葉に詰まった私を視界におさめて、実に愉快そうな声音を出した。

それはもう家庭環境のせいで性格が破綻してしまった残酷なクソガキが、珍しい玩具を手に入れて、とりあえず腕でももいでみようか、それとも足か、と他人には決して理解できない価値観で楽しむような言い方だった。

その陛下の様子に、私は全力で逃げ出したくなる。

これはヤバイ！ いやもうマジで！ 私に内蔵された危険信号が、がんがん鳴っているんですが！ これなら私、バルツァーさんちがダメでも、王都で労働に勤しんでいた方が安全確実かもしれないよ！ この際、お風呂とかトイレとかの衛生状況は目を瞑るから！

私はあまりの事にどん引きし、思わず感情につられて椅子を引いた。

それに陛下が眉をひそめる。

いや、ひそめたいのは私の方だから、陛下！

「楽しみなんかじゃ全然ないですよ！ なんですか、陛下！ なに突然、無かった学習能力身につけてるんですか！」

やめてくださいよ、変な方向に学習の成果を出すの！ 心臓に悪いし、他人に大迷惑だから！

「学習能力？ そういった台詞はお前にだけは言われたくないものだ。余はもともと持っていたつもりだが？ むしろ無いのはお前の方であろう、小娘」

「持ってますよ！」

「己というものが判っていないようだな、お前は」

「判ってないって何ですか？！ っていうか、陛下は一体、どんな反省をして学習したら強権発動なんて物騒な発想に辿りつくんですか？！ 私にはさっぱり判らないんですけどね！ 理解できません！」

陛下が危なすぎてね！ どんなドSなんだよ！ もう貴様はドドSだ！ ドドドSの国の国王陛下だよ！ 王の称号を得ている国が三国もあって良かったね！ この世界でも三つの国の王でいる人は陛下だけだよ、きつとね！

「判らんのか？」

陛下が首を少しだけ傾げた。その仕草に私はぞわぞわつと鳥肌が立つ。

いや、陛下は腐っても逆立ちしても超絶美形で、どんな仕草でも絵にはなるから見た目が気持ち悪いというのでは当然なく、ただ怖くてだ！ ものすつごく怖くてだよ！ なんか綺麗な微笑みを浮かべながら目玉でも抉りだしそんな雰囲気醸し出しているんだよね！ 今の陛下は！

「判りませんよ！」

私つてば当然のことながら常人だからね！

「そうか。ではその軽そうな頭に同情して教えてやろう」

「っ！」

この男！

「余はこれまで数多くの汚いものを目にし、経験もしてきたつもりだ。だが、その“汚い”は昨夜今朝とお前が余に見せた“汚い”とは意味合いが全く異なる。ああ、お前の場合は加えて、品位の無い発想と行動もか？ 言っている意味が判るか、小娘」

「……………」

「判るよな？ 余はこの国の第一王子として生を受け、お前は先程へロルドから聞いていたから知っていると思うが、」

さっきそこから会話を聞いていたのか！ この忍者ヤロウめ！

どんな優秀な忍びだよ！ 日光江戸村にでも就職しやがれ！ 外人忍者としてきつと人気を博すと思うよ！ 金髪紫瞳の超絶美形忍者としてね！ 絶対、おかつけが出来て、きつと同人誌になるから！ ヤオイの世界の主役を張れると思うよ、陛下なら！ 貴様なんて腐女子の餌となってしまうえ！

「生まれながらに王位継承権を持ち育てられ、八つの頃に王となつた余には、お前の見せるものに耐性が全く無かった。周囲は当然、そういったものを見せることも、会話に乗せることもなかったからな。余の命を狙い、策謀で陥れようとした者どもですら、それら見

せることは無論なかつた。まあ、当然なのだが」

そこまで言つて、陛下はヘロルドさんに一瞬だけ視線を向けた。ヘロルドさんとリーザが、食卓にデザートを用意したからだ。新たに来たキッチンワゴンには、多種のフルーツの盛り合わせと、ブラウニーのようなもの、スコーンのようなものにジャムらしきものが添えられているもの、見るからにフルーツタルトとチョコレートケーキ、そして甘酸っぱそうなシャーベットらしきものがあつた。デザートたちは実に甘そうで華やかで、本来なら場を和やかにしてくれるものなのだろうけど、運ばれてきた先の空気が悪過ぎて、残念ながらそれらの魅力は半減以下だつた。

勿論、半減以下にしているのは、この目の前の危険極まりない理解不能な男のせいだよ！

「お前には常識がない。そして、思考回路がおかしい、この二点だけを理解しておけば、もうそう余は驚かんだろう。お前の妄想の種類もまだなんとなくだが把握できつつあるしな。先程のような醜態を、今後、余が演じることもない」

「醜態？」

「ああ、醜態だ」

陛下は嫌そうに眉を寄せた。

「それで？」

「何？」

「そこまでは判りましたよ。私の思考回路がおかしいというのには全く納得できませんけどね！でも、たとえそうであつたとして、それと陛下の強権発動となんの繋がりか？」

陛下は肘掛から肘を下ろし、腕を自由にすると肩を竦めた。

少しだけ重くなつた空気を軽くしようとしたのか、ふつと笑う。

それは先程の愉悦に満ちた笑みではなく、周囲の全ての者を魅了するかのようなものだつた。

「馬には手綱が必要だろう？」

「は？」

「何も難しい事ではないぞ。目の前に野生馬が居て、それを御さなければならぬのなら、強制的に手綱をつけ、鞭を振るえばいい。それだけだ」

「馬？ 手綱？ 鞭？！」

私は開いた口が塞がらなかつた。

やばい、マジでこの男の思考回路が理解できない！ どうして陛下が醜態を演じたからって きつとさつき噴き出した事なのかなどと思うけど、それで手綱と鞭が出てくるの？ この場合の野生馬つてのが私で、手綱と鞭は強権つて事でしょ？！ なんでよ。なんで陛下が醜態を演じたら、私が手綱で縛られ、鞭を振るわれなければならぬのよ！ どうして？！

私は溜息をついた。

ああ、いやだ。……やっぱりさ、天才つて凡人には理解できない人種なんだよね。人と違うから天才なんだよね。陛下つてさ、あんなダラダラと妄想垂れ流した私の言葉を一言一句間違えないで口にできるくらいの記憶能力を持つ異能力者なんだもん。もうさ、この時点で普通の人間とは全く違うんだよね。根本的な考え方がさ！

「まあお前が理解できないのならそれでもよい。構わん。余は余のやり方で、お前の飼い主の役を演じよう」

「や、演じなくていいですよ、へ・い・か！」

なにやる気になつてるんだよ！ もう勘弁してよ！ お願いしませうから！

「さて、珍獣。用意が出来たようだぞ」

「え」

「食べる。余は、お前を餓死させるつもりはないからな」

私が陛下の理解不能発言の数々に呆気に取られている間に、どうやら食後のデザートを用意は完了したようだった。

ヘロルドさんとリーザが、それぞれに紅茶らしきものを繊細な装飾が施されたティーカップに注いでいる。

私の内心の戸惑いを余所に、注がれた温かい飲み物は良い香りを

漂わせていた。

「珍獣様、お砂糖はお幾つお入れいたしましたしょう?」

リーザが侍女の鏡と喋っていきくらいの素晴らしい所作で私の前にカップを置きながら聞いてきた。

私はそんな彼女の顔を見る。

リーザはこの陛下の明らかに理解不能な発言の数々をどう思っているのだろうと、私は彼女を見たのだ。が、私にはリーザの感情が読めなかった。

あれ、表情がない?

次いで私はヘロルドさんの顔も見る。

しかし彼もリーザ同様無表情で、感情を綺麗に消し去った顔をしていた。

あ……あれ? え、皆どうしたのよ? え、え、え、おかしくない、ちよつと! やだ、なんで?!

「珍獣様?」

「あ、えつと、いらないよ、私、砂糖は」

「畏まりました」

「珍獣、食べんのか?」

陛下は、先程のチェリーディニッシュやクイニーアマンもどきの食いつきとは違う、気のない様子でブラウニーもどきをフォークでつついていた。つつきながらも、嫌味なくらい澄んでいる紫の瞳は私をしつかりと捉らえている。

「……………」

「珍獣?」

「私、今あまり食欲が……………」

「そのような事は許さん。食べ」

「え?」

「自分で決められないようなのなら、余が決めよう。リーザ、珍獣にまずタルトから食わせろ」

「はい、陛下」

「……え、ちよつと、リーザ?!」

私があまりの展開に現状把握に時間を取られている間に、リーザは陛下の命令を即座に遂行するために、私の顎を持ち、優しい手つきではありながらも確実に口を強制的に開けさせるポイントに指を差し込んだ。

そして自然に開いてしまった私の口内に、素早く一口サイズにしたタルトを入れ込む。

口の中に強制的にタルトを入れられてしまった私は、もうただ咀嚼するしかない。

「……………」

「美味しいか、珍獣?」

「……………」

「この世界でトリエスは美食の国と言われている。その中でもこの王城は腕の確かな料理人を雇い入れている故、味は保証できるが、異世界人のお前の口に合うか?」

「……………」

「珍獣、どうなんだ」

「……………」

「珍獣、余の問いに答えよ。拒否は許さん」

「……………」

私は呆気にとられ過ぎて陛下への返答にまごついていると、彼は、とんでもない事を言い出した。どこか愉悦と狂気を滲ませながらである。

「お前が余の問いに答えるのにあくまでも拒否をするつもりなら、バルツァーの首でも刎ねるか」

「は? え、なんで?」

「何故?」

驚きと疑問でいっぱい私の顔を見て、陛下は何故判らないのかといった感じで嘲笑した。くつくつといった背筋が凍えるような笑い方だった。

やだ、この人おかしい……。怖い。え、マジで一体全体どうしちゃったのよ……？

私は、この世界に来てから初めて湧き上がる激しい恐怖に手先が震えてきた。

その震えを抑えたくて、震える右手で左手の震えを止めようと握ってみるが無駄だった。

「お前は先程バルツァーの名前を出していただろう？ それでだ」

「それ、だけの理由ですか？」

「そうだ。それだけの理由があれば十分だろう？ 珍獣。そうは思わんか」

「お……… 思いませんよ。だって、バルツァーさん、なんにも関係ないじゃないですか」

「関係なくとも何ら問題はない。ただお前への見せしめの為だからな？」

「……………」

もうこの人、なに言っているのか本当に理解できないよ、私。

いったい本当にどうしたっていうんだろう。いきなりだよ。破壊魔だし暴力男だし超偉そうなヤツだったけど、こんな感じでは無かったのに。本当にさっきまでは！

やだな……… なんかもう帰りたい、私、日本に今ものすごく。

私の対面に座る陛下はいつまでも嘲笑し続けていて、ヘロルドさんとリーザの表情を完全に消し去った様子に、私はもうどうしていいのか判らず、震える指先でズボンを精一杯握りしめた。

突然押し寄せた不安と恐怖の感情に涙が出そうになって、俯いて目を瞬かせる。それでも間に合わなくて、ほろりと一粒の涙が頬を滑った。

その時、ヘロルドさんの咎めるような響きを含んだ声が私の耳に入った。

∴ 20(後書き)

and.net / 日光江戸村 ∴ http://www.edowonderl

「……陛下、お戯れもここまでになさりませ。まだ年若い娘さんを泣かせてどうするのです？ 私はここでこの茶番は降ろさせていただきます」

茶番？

私がそろりと顔を上げると、目元にそつと柔らかい布が当てられる。

リーザだった。

「申し訳ございません、珍獣様。お泣かせするまでおやりになるとは思わなかったのです」

そういう彼女はとても済まなそうに、既に止まらなくなってしまった私の涙を柔らかい布で抑え続ける。

リーザの優しい手つきと声に私はほつと安心して、止まらない涙に加え、嗚咽まで漏れだした。

それに呆れと、どこかバツの悪そうなものを含んだ陛下の声音が聞こえた。

「小娘、なにも泣く事はないだろう」

「……………」

「おい、小娘」

「……茶番、つていつ……からですか、陛下」

ちゃんと声を発したくても嗚咽が邪魔をして出来なかった。

ああ、もう本当に涙が止まらない。今回の事が茶番だろうがなんだろうが、私って、実に頼りなくて不確かな場所に身を置いている

のだと認識してしまった。異世界の日本人の私は、一步その安寧の場所から飛び出してしまったら、居場所なんてきつと無いんだ。だって私はこの世界の人間ではないのだから。

いくら珍獣保護法という保護を取りつけたって、本当に陛下の気持ちひとつでどうにでもなってしまう存在なんだ。今回のように陛下が訳の判らない事を言い出しただけで、私の足元は簡単に崩れ去る。頭では判っていたつもりだけど、それを身をもって疑似体験し、再認識させられてしまった。

あー…だめだ、ちよつと今すぐには立ち直れそうにない、流石の私も。早く浮上しなきゃいけないとは判っているんだけど……。こうついた負の感情は何も良いものを生まないからね。引きずられてしまから、全てが。

私はあまりの精神的打撃に目元に当てられていた柔らかい布を手に取り、差し伸べられていたリーザの手をそれとなく外して、食卓の上に乗っ伏した。

だってもう本気で涙が止まらないんだもん！ 嗚咽も止めたくたって止まる気配が全くないよ！

止めようと思えば思う程、不思議と漏れる嗚咽が大きくなってしまふ。

もうね、ここまでになってしまつと、一度思いつきり泣くしか止める手段はないよ。

そう思い、私は泣いた。

もう盛大にね！

「……………」

「……………」小娘、余はお前が本当に理解できん」

陛下の声に少しの困惑が含まれた。

突っ伏している私には今、陛下の表情は判らない。

しかし声は、どうも私を持って余しているようだった。

「余が中座する前はあれ程の態度と言動を王たる余にしてのけたのに、何故、今はこの程度でそこまで泣くんか？ ……泣き止め、小

娘。これでは余が一方的にお前を苛めたよつで気分が悪い」

「……………」

「小娘……………」

「っ……………陛下、下……………」

「……………なんだ」

「だか、ら茶番つて……………いつ、からです……………か？」

「……………余が中座し戻つてすぐだ」

「それ、は……………壁に……………寄り掛か……………て立って、

いた……………時です、か？」

陛下は溜息をついた。

深い深い溜息だった。

「そうだ。余が立っていたのを気付かなかつたのはお前だけだ。へ
ロルドもリーザも余に仕えるのが長くてな？ 特に指示を出さずと
も余の意を汲み取り動くことが出来る」

「酷……………いで、す」

「……………」

「じゃ……………あ、陛下のお母様……………っ……………や、御兄弟がお亡く
なり……………っ……………になっているの……………っ……………は嘘、です……………っ……………か
？」

「それは本当だ。あれらは先代の王が崩御した前後数年で全員死ん
でいる。余が八つの年で即位したのも本当だ」

「……………っ……………」

「他に聞きたい事は？」

「……………っ……………記憶……………っ……………力の、事は？」

「それも本当だ。余は昔から一度耳にした事、目にした事、あとそ
うだな、書物なども一度目を通した内容は忘れる事はない。まあ、
単に記憶力が他の者よりも少し優れているというだけだが」

何が少し優れているだけだ！ それを世間では天才っていうんだ
よ！ この異能力者め！ ………………つて本来ならツツコミを入れるとこ
ろなんだけど、もうとにかく嗚咽が止まらなくて私は何も言えな

った。

あー…早く止まらないかな、嗚咽。もう泣きたくないんだよね、私も。抑える事をやめて思いっきり泣いたせいかな、気持ちも落ち着いてきたしね。私、こういう場合の回復は自己防衛が働くのか、その場での浮上は結構早いんだよね。後で少しまた落ち込むことがあるけれど。

だけど一度乱れた呼吸はなかなか戻らなくて、私は未だ突っ伏したまま泣いているしかなかった。

そしてそれが思わぬ副産物を生んだ。

「小娘、いい加減に泣きやんでくれないか。……判った。少々、いやかなり釈然としないものがあるが、泣かせた詫びとして何かお前の望みを聞こう」

「の……っ……ぞみ？」

「ああ。勿論、望みの内容によっては聞けるものと聞けないものがあるが、まあ、なるべくお前の意に沿うようにしよう」

陛下のその言葉に、突っ伏し彼らに見えない私の顔に自然笑みが浮かんだ。

私も現金なものである。

陛下の今の言葉に、つい今し方の精神的打撃は急速に薄れ、沈んだ気持ちは勢いよく再浮上していく。

後は単に呼吸が戻らないだけだった。

やや、何を望もうかな。なんでもいいのかな。やっばい、マジでウキウキしてきたよ！ えーどうしよう！ 陛下、どこまで聞いてくれるかな？ とりあえず無難なところから攻めてみる？ ねえ、攻めてみちゃう？ うふふのふ。

私は顔がにやけ出していた事もあって、食卓に突っ伏したまま陛下に聞いた。

「っ……望みって……っ……何個までです、か？」

「何個？ お前は複数の望みを言うつもりなのか？ ……まあよい。そうだな、では……ふたつまで聞くか」

「ふ……たつ……」

「ああ」

ふたつかあー。もうちょっと多くてもいい気もするけど、まあいいか。聞いてくれるだけマシかもだしね。

何にしよう！ …… ああ、そうだ。望みを言う前に陛下には聞きたい事があった！ リーザからも聞いたけど、やっぱり本人の口から聞きたいからね！

「陛下……」

「決まったのか？」

「その前に、聞いた……っ……い事があります」

「なんだ」

「どう、して私、陛下のお古着で男装しない……っ……といけないんですか？ これって王道設定外して……っ……るんですけ、ど！」

「またその話に戻るのか、お前は。へロルド、入れてくれ」

突っ伏した私の前方から、陛下のうんざり気味の声と、ティーカップとソーサーが出すかちりとした小さな音が聞こえた。

どうやら陛下は何かを飲みながら私の相手をするらしい。

「お前にドレスは似合わんだろう？ 理由はそれだけだ」

「……っ……え？ それってどうい、う意味ですか？」

え、なになに、マジどういう意味でいつてんの、陛下?! ああ、やっぱりこの男の思考回路だけは判んないよ、私！

「ひとつはお前のその挙動。動きが不審で乱暴すぎて、あのような服は適していない」

「は？」

「ふたつめ。お前は己の体つきをどう認識しているのか知らないが、余が見たところ、その無い胸と腰回りの太さ、それに、その腰から地面までの距離の短さではドレスは映えんだろう？ この二点だ」

「……ふ……」

「ふ？」

「ふざけるよっ?! 陛下ああっ!」

私は陛下のあまりの無礼千万失礼無神経発言に、般若のような表情になって突つ伏していた顔を勢いよく上げた。

そして手にしていた涙を拭いていた柔らかい布を彼に向かって全力投球する。

全力すぎて肩の関節がゴキツとか鳴ったよ!

陛下がそれを素早く察知して、ぱしっという感じでキャッチする。ヤツめ、これも学習しやがったな?!

「なんなんだ、お前は」

陛下はキャッチした布をへろルドさんへ投げ渡すように、ぽいっとならした。

どうやらイレギュラーなアイテムは早々に脇へ退避させる方針にしたらしい。

「なんなんだじゃないですよね?! その甘党の国とドドドSの国の国王陛下!」

「なんだ、そのどどえすというのは?」

「そんな事はどうでもよろしい! そ・れ・よ・り・も! 何ですか、今、陛下はこう言ったんですか?! 私が、品性下劣の、加え! 貧乳、寸胴、ケツデカ、胴長の短足だって、そう言ったんですか、今!」

陛下は呆れた顔をした。

「そこまでは流石に言っていないだろう? それに余は相当婉曲な表現でお前に言ったつもりだが? 何故お前はその意を自ら無駄にする」

もうなに言っただよ、この男は!

私はあまりの腹立たしさに、手近にあったブラウニーを手で鷲掴みにして、再度陛下に向かって全力投球した。

勿論、肩の関節は再び鳴ったよ! 今度は肘の関節も鳴ったからね!

一方、陛下はというと、その剛速球の如く飛んできたブラウニー

を、やはり手近にあった空いた予備の皿を使って、華麗な手捌きでスパンと払った。

払われたブラウニーは、ヘロルドさんが控えている側とは反対側、陛下の部屋の大きくとられた窓側に向かって、ぽてんてんと床の上を虚しく転がっていく。

「お前な」

「婉曲な表現を使おうが使わまいが結局のところ、言っている事は同じじゃないですか！」

しかも貴様、相当婉曲とかよく言えるよ！　あまり婉曲な表現を使ってなかったよね？！　結構ズバリとダイレクトに言ってたよね？！　私の気のせいじゃないはずだ！

「まあ、そうとも言うな」

「っ！」

「だが事実だろう？　お前のその体形の悪さは」

うぎゃあー！　やばいよ、超ムカつきすぎるよ！　もうはつきり言って殺したいくらい腹立つよ！　陛下、首絞めていいかな？！　その忌々しい超絶美顔の眉間の上に油性ペンで肉とか書いていい？！　中とか書いていいよね？！　私には当然その権利が発生したよね、今！

「もういいです！」

「なにがだ」

「そこまで言われたのなら、私は今後二度とドレスなんて着ません！」

っていつか、生まれてからまだ一度も着た事がないけどね！　当然ね！　でも悔しいから、そんな事は口が裂けても言わないけどね！　「もう絶対絶対何があってもドレスなんて着ません！　もし私が今後、この世界でまだ見ぬ誰かと結婚する事になっても、ウエディングドレスだつて絶対に着ないんですからね！　そしてそうだった原因は陛下のせいだつて、その未来の旦那様に言いつけてやるんだから！　陛下なんて、その私の未来の旦那様に恨まれて呪われてしま

えばいいんです！」

そして私の一滴すら流れているのかアヤシイ希代の陰陽師安倍晴明の血からも呪いを受ければいいんだ！

私の怒りの大興奮を余所に、陛下は何とでもないと風を肩を竦めた。

「お前の未来に、その余を呪える夫が現れるよう祈る」

「とりあえず聞いておきますけどね！ 今の陛下のその言葉はどういう意味で言いました？！ いち、トリエス国王を呪えるくらいの男が夫となるよう祈るという意味。に、そもそも呪える云々以前の問題で、夫すら現れそうにないから、現れるよう祈る。どっちですか？！」

「に、だな」

うあああああああ！！ もうどうしてくれよう、この男！

どうしようもなくムカつくんですけど！ 私のこれまでの人生の中で、これ程ムカついた男は、ついぞ出会ったことがありませんが！ 私に貧乳判定を下したあの加藤めですら、ここまでムカついた事はないし、スカトロジジイは人外だからこの際論外だ！

「よく判りました！」

「ほう？ なにが判ったんだ、お前のその軽そうな頭で」

「陛下が私に男装でいけというのなら、いいでしょう、男装で突き進みますよ、私はね！」

そこで私は、ふふふふと不気味に笑ってみる。

だってね？ これからトリエスで男装で過ごす事が決定した私が、この無礼千万失礼無神経男に一矢報いるとしたら、するべき事は、やるべき行動は、もうひとつしかないでしょうよ！

私は、食卓をドンと右手拳で一度叩き、その後、その右手を胸の上に、左手を天に向けて伸ばす。

そう、このポーズといえば。

「宝塚です！」

「何？」

陛下は不可解そうに形のよい眉を寄せた。

「た・か・ら・づ・か！ 私の愛する母国日本にある未婚の女性のみからなる男不要な歌劇団のことですよ！ 花組、月組、雪組、星組、宙組の五つの組みと専科があつて、公演を行っている歌劇団です！」

「……それが？」

「私が何を言いたいのかわかりませんか？！」

「判る訳がないだろう？ お前のその普通とは違う思考回路が導き出す発想が」

くそう、ああ言えばこう言うのか、この男は！ 覚えてろ、陛下！
すぐに貴様は吠え面をかく事になるんだからね！

「私はこのトリエスでブルーヘヴンを結成します！」

「ブルーヘヴン？ お前のぎゃくは「構成団の事か？」

「それとは違いますよ！ 私の栄えある薔薇の逆八「構成団は全てイイオコトで構成されるんですから！ ちなみに現在のメンバーは、会員番号一番にヘロルドさん、二番にバルツァーさん、三番にユリウス少年で、四番にラードルフさんの計四人です！ これからどんどん増員していく予定ですからね！ このトリエスいちの大組織になりますから！ 法人税は払いませんよ！」

陛下が心底呆れた視線を私に向けた。

彼はふと息を吐くと、今度はチョコレートケーキをつつき出した。その態度は、もう私の相手をしたくないというのが、ありありと分かるものだった。

「阿呆か。その四人はお前がこの世界に来てから、たんに用があつて偶々お前の前に現れただけの者だろうが」

「違いますよ！」

何を言っているんだ、この男は！

私はギツと陛下を睨みつけた。

「ああそうか。それは良かったな」

「陛下は私の栄えある薔薇の逆ハー構成団ブルーヘヴンには絶対に入団できないんですからね！」

陛下がケーキを食べながら肩を竦めた。

「それは残念だ」

この男！ もうコヤツの全ての言動に腹が立つ！ 見てろ！ 貴様への逆襲はこれからだ！

「私がこれから結成しようとしているのは、ブルーヘヴンと同じ名称ですが逆ハー構成団の事ではありません！ 宝塚になぞらえる呼び方をするなら青薔薇組です！」

私は胸に添えていた右手も左手同様、天井画と黄金装飾と豪華で高そうなシャンデリアがある天井に向かって伸ばした。

ああ、私の前途を祝福する光輝が見えるよ！

「青薔薇？」

陛下のチョコレートケーキをつついていたフォークの動きが止まった。

「そうです！ 異世界ではブルーヘヴンは青薔薇の名称なんですよ！ 薄く淡い青色、水色といった方がいかもしれませんが、向こうの世界には元々青薔薇って無くて、各国が品種の改良に改良を重ねて競い合つて、ようやく最近、七年くらい前かな？ 日本でブルーヘヴンという名前の青薔薇が誕生したんです！ ちなみに花言葉は不可能、有り得ない、新たに設けられたものでは、奇跡、神の祝

福です！」

「ほう？」

陛下がフォークを完全に食卓の上に置き、澄んだ紫の瞳を細めて、まるで見つめるような感じで私に目を向けた。

「で、その青薔薇組とやらでお前はこのトリエスで何をするんだ？」

「ふふふふ」

「……………」

「私は男装の麗人になる。そして、そしてですね！」

「ああ」

「陛下の後宮に乗り込みます！」

「何？」

「こ・う・きゅ・う・に・乗・り・込・む・ん・で・す！」

「乗り込んでどうする？」

「ここまで言ってもまだ判りませんか？！」

「お前の発想の行きつく先だけはな」

「失礼な！ いいですか、陛下！ 私が青薔薇組を結成して男装の麗人になって、陛下の後宮に乗り込む。そして数多くいる陛下の側室さん達を私の男装の色気でメロメロの腰砕けにするんですよ！」

「で？」

「それですね、男装の麗人の私にメロメロの腰砕けになった側室さん達は、もう陛下なんて要らなくなるんですよ！ 陛下が後宮に訪れるだけで、眉をひそめ、嫌悪を顔に表すんです！ そして陛下は誰からも相手にされなくなつて、ひとり寂しく自室に引き籠ることになるんですよ！」

さあ、一人男の寂しさを貴様も味わうがいい！ そしてクリスマスではドーナツ屋で一人用ケーキを買って、テレビをBGMにひとり寂しくつつついてるってんだ！

「やってみる」

「は？」

あれ、動揺どころか、ツッコミも無しなの、陛下？ 少なくとも

ツッコミくらいは入れてくると思ったのに。私を鼻で笑って馬鹿にするとかさ。

私は陛下のその反応に首を傾げた。なんだか拍子抜けしてしまって、怒りモードがシューッと下降してしまう。

「え、陛下、やってみろって、それは私には到底無理だから、という意味で？」

「そのような意味合いというより、むしろやれ」

「え？」

「最近、あれらは目に余る。いつそ解散してやるうかと思うほど辟易しているのが本音だ。お前が今言った事を実現できるのなら、余は全力で手を貸そう」

おいおいおいおい！ 貴様は何を言い出しているんだよ?! 私は想定外の陛下の反応に開いた口が塞がらなかった。

ああ、やばい。やっぱりコヤツの頭の中身だけは理解できない。天才ってもう害悪だね。環境破壊ものだよ！ エ・コ・推・奨！ トリエス王国もISOを取得してみる？

「ただ、やる場合は気をつける」

「え、どういう事ですか？」

「あそこは魑魅魍魎が跋扈している。お前がふらりと入りこんでまして、命を取られないよう気をつける、と言っている」

「な……なに物騒なこと言っているんですか、陛下！ それって私に対する脅しで言ってます？」

「脅し？ 何故、余が無意味にお前を脅さねばならん？ お前に言っているのは全て言葉通りだ。お前が言葉の裏を読み取れるとは、それこそ到底思っていない」

「陛下って、本当に失礼な男ですよね」

「そうか？」

私はもうあんまりな陛下の言い様に呆れてしまって、シャーベツトは既に溶けてしまったから、フルーツ盛り合わせの中から苺らしき果物をひとつ手に取って口に運んだ。

あ、すごく甘い、この苳。きつとこれは一粒六百円くらいするんじゃないの？ 流石、王様向けだよね！

「そんなに嫌なら、陛下の権力で解散しちゃえばいいじゃないですか、とつとつ」

後宮を維持するお金も無駄だしね。出所は税金だし。無くなれば少しは納税額が軽減して国民も喜ぶかもしれないよ。

「出来るものなら余もとうにやっている」

「なんで出来ないんですか？」

「いろいろとあるのだ、いろいろと。お前には判らないだろうがな」

「まあ、判らないですね、私には」

「なにか切っ掛けが作ればな。お前にそれをやって欲しいところだが、やはり止めておけ。本気で殺される」

「あー…やりません。怖いです、私。殺されたくはありません。ただ若いですからね。十代ですし。……でも何で、私が入りこむだけで殺されるんですか？ 私、別に害ないじゃないですか。陛下の寵を争うメンバーに入っていないませんし」

側室じゃくて珍獣だしね？ 私。

私は陛下に問いかけながらも、今度は、サクランボらしきフルーツを手を取った。

佐藤錦並みに甘いといいな！ 我が家では佐藤錦は高級サクランボ認定されていたから、私、食べたかったけど食べれなかったんだよね！ だってウチ、パパの稼ぎが少ないのにも関わらず、パパが深く考えないで辺鄙な場所に一戸建て買っちゃったからさ！

「判らんか？」

陛下が何処かニヤリとした感じがする笑みを私に向けた。

うわ……相変わらず嫌な笑みだよ！ 魔王認定していいかな、陛下！

「わ……判りません。なんか聞きたくない感じですね、その陛下の表情を見ていると」

「そうか？ 理由を教えてやろう」

「え、いいですよ、もう。知りたくは」

「お前が今、此処に居る、それが理由だ」

「は？ 意味が判りません。なんで、私が此処にいると殺される理由に？」

私がポカンとした顔で返したのがおかしかったのだろうか、私の顔を見て、陛下が笑った。

それも心底おかしそつにである。

何故？

「ここまで言つて意味が判らんのなら、やはりお前は後宮に乗り込むべきではないな。いいか、小娘。余はお前を珍獣として保護をした。余は勿論お前を珍獣として扱っているし、お前を珍獣だと本気で思っている。お前のその頭の中身も理解できないしな？ だがな、小娘。世の中にはそう考えない者は当然居るものだ。その筆頭が後宮の女たちだ」

う……うわぁ、判った、判っちゃったよ、私！ そこまで言われて判りました！ 後宮の側室さんたちから見た、今、自分が置かれている立ち位置を！

私は甘かったサクラランボの種をふつと近くの小皿に乗せて、陛下を恨みがましい目で睨みつけた。

私の眼力で人が殺せるのなら、きっと陛下を殺せてるってくらいの睨みつけだよ！

くそう、この男！ もうパパ以上の疫病神に認定してやる！

「陛下のせいじゃないですか！」

「なぜ余のせいになるんだ、小娘」

「だってそうでしょう？ 陛下が私を珍獣部屋に保護したからいけないんじゃないですか！ どうして城の客室で飼ってくれなかったんすか！」

私のその言葉に、陛下が小さく噴き出した。

「自分で飼うと言うか、小娘。どちらにしろ一緒だ。お前を客室で飼おうが珍獣部屋で飼おうが、余が年頃の娘を保護すればな。むし

ろ容易く手を出しにくい余の部屋の横にある珍獣部屋の方がお前に
とっては安全だと思うが？」

私はあんまりな新事実の発覚に、食卓に肘をつき、頭をかかえた。
私ってなんて酷い厄が発動しちゃってるんだろう！ 厄払いつて、
行くのを忘れただけで、こんなに酷い目にあわないといけないもの
なのかな？！

ねえ、教えて下さい、パーシヴァル様！

∴ 22 (後書き)

/wiki/ISO14000
ISO ∴ http://ja.wikipedia.org

「まあ、今それを話続けたところで何も変わらんし、余とお前の二人で話し合ったところで不毛以外の何物でもない。それより小娘、」
陛下は、話こめば何だか暗黒の深みに嵌ってしまうような後宮の話が無理矢理気味に断ち切った。

そして彼は、中身が冷めてしまっただろう紅茶らしき飲み物が入ったティーカップを優雅に持ち、喉を湿らせる程度に口にする。

「みつつにしよう」

私は今の陛下の言葉に会話の流れを掴み損ね、抱えていた頭を上げた。

みつつって何だろう？ もう天才との会話は疲れて仕方がないですよ、私は！ 話が飛んでね！ 私って凡人だからその飛び具合についていけないんだよね！

「みつつって何の事ですか？」

「お前の頭は本当ニワトリ並みだな」

陛下がどこか諦めた様子で息を吐いた。

「望みを聞くという話だ」

「あ、その話ですか」

「そうだ。先程、ふたつ聞くと言ったが、みつつに増やしてやる。言え、何が望みだ」

言って、陛下はカップをソーサーの上に置き、椅子の背凭れに深く身を預けた。

そして私に向ける良質なアメジストを嵌め込んだかのような紫の

瞳が、私の目の奥を覗こうとするかのようにひたりと合わせられる。心なしか彼は機嫌が良さそうだった。

「つか、やっぱり話の流れが掴めませんが、陛下。」

まず、何故いきなり望みを増やしたのがひとつめの疑問。

次に何故、いきなり機嫌が良さそうになったのがふたつめの疑問。

マジで何故？ 凡人な私には、天才の考える事が本気で判りません。

どこか天才を理解するための講座にでも通った方がいいですか。

「いきなりどうしたんですか、陛下」

「なにがだ」

「何で望みを聞くのを増やしてくれたんですか？ え、なにか罠でも……」

そうかもしれない！ 望みを聞くという馬の目の前に人參でもぶらさげるようにして私を喜ばせてから、もしかしたら外国に売り飛ばすとか！ トリエスが実は財政破たん危機に瀕していたとかでね！ 酷いよ、陛下！ 私、まだこの国に来たばかりなのに！

鬼！ 悪魔！ 魔王！ 変態！

「あるかそんなもの。余がお前を罠にかけるなどという無意味な事をしてどうする？」

「え、じゃあ、何ですか？ 陛下が解散したいと思っている後宮へ私を乗り込ませたいがための先行投資？」

「余は殺されるだけだから後宮には行かない方がいいと言わなかったか？ 理解出来ないのか、その頭は」

「……言いました」

「青薔薇だ」

「は？ 青薔薇？」

「そうだ。まあ、お前の世界にもこの世界同様、青薔薇という共通のものがあつた、その記念に、という程度の理由だ。他に他意はない」

言ってから、陛下はふつと見る者を引き付け毒牙にでも掛けてしまいたい感じが、陛下の魅惑的な笑みを口元に浮かべた。今回は嫌な笑みではない。

きつと無意識にやっている系の自然な笑みだった。

私はそれがどうにも不可解で、腕を組んで首を傾げる。

やっぱり判らないよ、陛下。まあ、いいか。なんだか知らないけど望みを聞いてくれる個数が増えたしね。ラッキーって感じで深くつつこまず素直に受けとっておけばいいのかな、この場合。

「よく判らないけど、良かったです？」

「そうだ。お前は素直に望みを言えばそれでいい」

「そうですかー」

えーじゃあ、なに言おうかな！

よくよく考えなくても、たなぼた式に望みを聞いてくれる事になって、尚且つ、その個数が増えたこの世界に来てからの初めての幸運に、私はだんだんとウキウキ度合いが増幅していった。

やっばい、マジで何を言おう！

私は考えた。

それはもう、普段は一割以下の活動しかしてない脳ミソが、八割稼働するくらいの勢いでだよ！

私は教室で先生に指名してもらいたい生徒が手を上げるかのような感じで右手を上げた。

「はい、陛下、まずひとつめ決まりました！」

「なんだ」

「陛下の部屋と珍獣部屋を繋ぐ格子に鍵をつけて下さい！」

乙女の危機だからね！ プライバシーの侵害だからね！ というか人権主張させて下さいよ、少しはさ！ 珍獣だけどね！

私はウキウキな気持ちからか、椅子に座って床につかない足を食卓の下で行儀悪くプラプラとさせた。

一方、私のひとつめの望みを聞いた陛下はというと、少しだけ考えるような感じで食卓の上のフルーツ盛り合わせに視線を向けてい

た。

待つこと暫し。

「鍵は却下だな」

そして出された回答に私は抗議の声を上げた。

「当然だよな?！」

「え、何ですか?! 乙女の危機ですよ、乙女の危機! ややつ、もしや陛下つてば、私を襲う気で?!」

夜中に突然珍獣部屋へ忍び込んで、私をあんんうんん言わせたい為の却下なの?! ややや、犯罪者がいますよ! 誰か捕まえろ! ここに強姦魔が居ますよ! トリエス版おまわりさん! ここに国王の皮を被った変質者が居ます! つ・か・ま・え・て! 禁固十年希望ね!

「誰が襲うか!」

陛下が少し声を荒げた。

「お前な、少しは己という者をきちんと把握してからさういった事を言え」

「え、それはどういう意味ですか」

「何度も言うが、お前に言うのは全て言葉通りの意味だ」

この男は!

私は瞬時に陛下に腹が立って、彼をぎりぎりと睨みつけていると、陛下がその理由を語り出した。

「先程言った事に関係しているんだがな? 余とお前の部屋を繋ぐ格子に鍵をつけるのは容易いが、それをするとお前の命の危険は増すぞ?」

「は?」

え、なに言ってるの? 陛下、もうヤだよ、私! なんかさ、だんだん物騒度が増しているだよな! まださ、異世界のトリエスに来てから、二十四時間経ってないってのにだよ?! 昨日の今の時間には私、日本で平和に暮らしていたはずなんです! 昨日の朝ゴハンだって思い出せるよ! 卵かけゴハンと、ワカメの味噌汁ね

！ 以上だよ！ 我が家の家計は逼迫していたからね！

「あの格子に鍵をつければ、お前に刺客でも放たれた時、余と余を護衛する者が入るのが遅れる。その遅れる時間的にはきつとたいした事はないだろうが、しかし暗殺される側にとつて、その一瞬が命の有無を決めるぞ？ 小娘、お前、剣を扱えるのか？ 扱えるのであれば、お前にあつたものを渡すが」

「扱える訳がありませんよ！」

日本には銃砲刀剣類所持等取締法というのがありますからね！

刃渡り五・五センチ以上のタガーナイフ類だつて所持が禁止されている平和安全国家ですからね！ 日本万歳！ 私つてば、日本から離れてどんどんあの国の素晴らしさを身にしみて実感してきてるよ！

「なれば鍵は諦める。お前にも近いうちに専属の護衛の者をつけるが、それでも余の護衛の者と二重で護られていた方がお前も安心だろう？ なに、そう不安になる事はない。余の護衛の者とお前に付けようと考えている者は優秀だ。余もそうそう剣を手にする事はないからな」

「ねえ、陛下」

「なんだ」

「なんで、そんなに物騒なんですか？ トリエスつて治安悪いんですか、もしかして！」

「だつたら私、他の国に行つてもいいかな？！ 安全で平和に暮らしたいんだよね！ ラブアンドピースだよ！ 人種の壁を乗り越えて、皆で手を繋いで平和の歌を歌っちゃうよ！ 人生十八年目にしんだつたら、地雷撤去の活動家になろうと思います！」

「この国は周辺国に比べ、格段に治安は良いが？」

「え、じゃあなんで？」

「お前の頭は本当に飾りだな。……飾りにもなっていないが」

「っ！」

「余が保護したからだ。何度も言っているがな」

やっぱり貴様は疫病神だよ！　パパなんて比べものにならないくらいいのね！

「じゃあ、私は陛下の保護を外れる事を希望します！　珍獣保護法適用は解除の方向で！」

「ほう？　それでどうするんだ、お前は」

陛下がどこか小馬鹿にしたように眉を上げた。

「バルツアーさんちに行きます！」

「残念だな。バルツアーではお前を護りきれないぞ。あれの家は子爵家だな？　今はあいつが法務長官の職についているから勢いはあるが、それだけだ。差し向けられる暗殺者どもを捌き切る能力はない」

「ぎゃあー！　なんなのよ、もうマジなんなの？！　私、本当に何かしたの？！　ねえ、本当に厄払い忘れただけの理由で、こんな状況に陥っているのかな？！　じゃあ、日本人で厄払い忘れた人は、みんな異世界トリップ経験するの？！　んな馬鹿な事あってたまるか！　ふざけんな！　責任者出てこい！　もちろん店長クラスだよ！」

「それに、お前が今さら余の保護から外れても既に遅い。一晚ここで過ごしてしまったからな？　一度でも目をつけられれば不安の芽を消そうとするのを止められん。この城を出て、余の保護無しに半刻息をする事ができるかすら保障できんぞ」

「陛下の疫病神！」

「否定はせん」

「開き直りましたね？！」

「余は相当魅力的な存在らしくてな？　後宮で争いは絶えんし、余自身も頻繁に刺客を向けられているから、まあ、許せ」

「許せると思いますか、この疫病神め！　極悪魔王！　純真可憐で繊細な麗しの乙女である私を巻き込んだ分際のくせに！」

しかも貴様、もしかして意図的じゃないだろうな？！　だったら殺す！　私が貴様を暗殺してやるから首を洗って待っている！　アサシン私の誕生だ！　今この瞬間にね！

私はあまりの怒りと腹立たしさにアサシン私モードの発動カウントダウンが開始されかけていたが、ふと早朝の出来事が思い出され、眉をひそめた。

「あれ、でもそう言えば、」

「なんだ」

「陛下下つてば、さつき、バルツアーさんに『無価値な異世界の小娘に一体何が起こるのか』とか『ここにいる限り、せいぜい水を与え忘れたくらいのことしか起きない』とか言ってますでしたっけ？え、それってバルツアーさんに嘘をついたってことですか？！」

本当にもう、なんなんだよ、貴様は！疫病神に大嘘つきの称号も加えないといけないのか？！ トリエス王国全国民のみなさーん！大嘘つき警報が発令されますよー！ここに大嘘つきが居ます！国王の皮の被った嘘つき狼がね！

「嘘ではない」

陛下が軽く肩を竦めた。

「ただ言葉が足りなかっただけだ」

「は？ どういう意味ですか？」

「少しは自分のその頭で考えてみたらどうだ、小娘。あんな、お前が無価値な小娘であるのも本当だし、ここに居る限り水を与え忘れたくらいのことしか起きないのも本当だろう？ただその言葉の前に、余が護衛の者をお前に付け、お前が不用意に珍獣部屋を出なければ、という言葉が不足してただけだ。あの場ではバルツアーをひとことで黙らせたかったからな。まあ、物は言い様というのかな」「うわっ！最悪ですよ、陛下、もう本当最低！やっぱり純真可憐で繊細な麗しの乙女である私を、意図的に巻き込みましたね？！」「別に意図的ではないぞ？お前が庇護と保護を余に求めたのではないか。考えなしたったな？」

陛下が笑った。

やべえ、マジでムカツク！殺す！私が貴様の息の根を確実に止めてやる！さあ、首を出せ！その超絶美形顔と胴体をザック

り切り離してやるから今すぐ首を出せ！ 誰か出刃包丁を持ってこい！ 勿論、山姥に研がせた切れ味抜群の出刃包丁だよ！ 刃渡り二十センチ以上ね！ 私の全体重をかけて、陛下の首を胴体から切り離すから！ 私、一昨日、日本で最後に測った体重で三キロ増えてたからね！ 重いよ！ 本来の体重をそれにプラスしたら、本当に重いよ！ 重量級だからね！

「そんな訳だ。鍵は諦める。その変わり目隠しの仕切りはお前の部屋側にもつけてやる。多少は妥協しろ、小娘」

「……陛下め」

私は呪わしげな音を出して、陛下を一滴すら流れているのかアヤシイ希代の陰陽師安倍晴明の血で呪をかけた。

けけけ、呪われる！ 呪われてしまえ、貴様なんか！ 日本のホラーは世界一怖いんだからね！

「それでひとつめの望みは聞いた。ふたつめはなんだ、小娘」

「ふたつめ……」

ああ、頭を切り替えないと！ もうこうなったら私は自分の身は自分で護るくらいのもりで頭を働かせないとね！

なんていったって、これ以上ないってくらい厄の発動と、疫病神に何でか知らないけど憑つかれているからさ、私！ もうなんなの！ どうしたらいいの？！ 滝にでも行って修行すれば状況は少しでも良くなるのかな？！ 誰か教えてよ！ 比叡山にでも行くべきだったの？！ 教えて、パーシヴァル様！

「はい、陛下、ふたつめ決まりました！」

私はやっぱり先程と同様、教室で先生に指名してもらいたい生徒のように右手を挙手した。

陛下がそれに頷き、促す。

「なんだ」

「バルツァーさんちに行きたいです！」

陛下がこの日最大級の溜息をついた。

心なしか頬が少し引き攣っている。

彼は苛ついたように眉間を揉みだし、紫の瞳に険呑な光をちらつかせ出した。

「余はな、小娘。たった今、バルツァーではお前を護りきれないと言わなかったか？ 言ったよな？ 言ったと思うのだがな？ 余の気のせいかな？ 小娘！」

陛下が腹の底からの怒声を発した。

彼はもう我慢がならぬ如く、私を強い眼光で睨みつけてくる。

「もう、なんで陛下つて突然怒りだすんですか?!」

「お前だ、お前が訳の判らない事を言い出すからだろう?! 話が通じないんだ、お前は! 噛み合わないんだ! どんなに判り易く言ってもな!」

私は陛下の言葉に目を吊り上げた。

この無礼千万失礼無神経の疫病神男め! 貴様はどの口でそんな事を言うんだ、異能力者が!

「話を通じないのは陛下の方でしょう?!」

「どこがだ! 余のどこに話を通じない原因がある?! 申してみよ、小娘!」

「天才なところがですよ!」

「何?」

「て・ん・さ・い・な・と・こ・ろ・が・で・す! いいですか、陛下! 私はですね、幼稚園の二年間、小学校の六年間、中学校の三年間、高校の二年間半、加えて学校外で塾に行っているのにも関わらず、成績はいつも学年で下から二番目なんですよ! ちなみに一番下は、私の親友の千夏ちゃんです!」

「……………」

「そんな私が、一度目にした事や聞いた事、書物も一度目を通せば忘れないなんていう天才の話す事についていけると思えますか?! 私なんてですね、陛下! 漢字テスト、ああ、漢字とは日本で使われている特殊文字みたいなものなんですけどね? その漢字テストがあるつてんで、愛しのパーシヴァル様との愛の語らいを泣く泣く諦めて、前日に二時間もかけてテスト範囲である五十個の漢字を覚える勉強をしたんです! それにも関わらず、翌日、その範囲の中から二十問出題された漢字テストで四問しか正解できなかったんですよ! どうです、判る訳がないでしょう?! 陛下みたいな異能力者が言うことなんて! 私って凡人ですもん!」

陛下が額に手をあてた。

「……それは自慢気に話す事なのか？ 小娘」

「え、私がいつ自慢なんてしました？ もう、陛下って本当、言っている事が判りません。思考回路、おかしいんじゃないですか？ さつきから思ってたんですけどね？」

陛下の額に青筋が浮いた。

「もうよい。余とお前の間には決して越えられない歴然とした壁が立ちはだかつているのがよく判った。おそらく永遠にその壁が消える事はないだろう」

「あ、それは私も思います！ だって、陛下つてば、脳づくりが普通とは違いますもんね！ あーいやだいやだ！ 凡人である私は疲れちゃいますよ、陛下の話あ・い・て！」

「小娘っ……………、…………へロルド、入れ直せ」

陛下はじつと何かを耐えるように目を伏せてから、へロルドさんに偉そうにまだ中身が残っているティーカップを乱暴な仕草で渡した。

そんな陛下をへロルドさんが同情と諦めを含んだ視線で見ている。

え、なんで？

「で、お前はバルツアーがお前を刺客から護りきれないのを判っていて、あれの家に行きたいというのだな？」

「はい！ 私、バルツアーさんちに遊びに行きたいですから！」

「何？」

陛下の目が少し見開いた。

「だから、私、バルツアーさんちに遊びに行きたいんです！ ほら、バルツアーさん、私の栄えある薔薇の逆ハ―構成団ブルーへヴンの会員番号二番ですしね？ 遊びに行かないと、やっぱり」

それに、なにかあった時の避難経路くらいは確保しておかないとね！ 常日頃からの避難訓練は大切だよ！ 防災頭巾をリーザに用意してもらおうと言わないと！ カンパンも厨房に行って貰ってこないとね！

陛下が拍子抜けした顔をした。

どうも怒りのゲージが一気に下がったようだった。

「ああ、そういう意味か。……判り難いな、お前との会話は」

「え、どういう意味ですか？」

「いや、なんでもない。気にするな」

陛下は言つて、顎に手をあてた。

「そつだな……まあ、バルツァーには迷惑極まりない話になると思
うが、判った。あれにはそう遠くないうちに話を通しておこう。護
衛つきなら問題はないと思うからな。……たぶんだが」

お前に関してはどうも自信が持てない、と小さく呟いてから、陛
下はヘロルドさんが新たに入れた良い香りを放つ紅茶らしき飲み物
を口に運んだ。

二口ほど飲んでから、彼は一息ついたように肩の力を抜いて、再
度、私の方へと視線を向ける。

「ふたつめの望みも聞いたな？ では、みつめは何にするんだ」

「あ、それはもう決まっていますよ！」

そう！ これはね、もう絶対言いたいんだよね！ 今回みたいに
棚から牡丹餅的に陛下が望み云々を言わなかったとしても、きつと
数日以内に絶対言っていたと思う事なんだよね！ だってもう本当、
すつごくすつごく大切な事なんだよね、私にとって！ これからの
私の異世界ライフに必要な不可欠だから！ 私の栄えある薔薇の逆八
一構成団ブルーヘヴンの増員活動にも必要不可欠なんだよ！ 特に
王都在住庶民のイイオトコの勧誘にはね！

「陛下、お小遣いが欲しいです、私！」

「きゃー、言っちゃった！ 言っちゃったよ！ お・こ・づ・か・
い！ いやーん、なんて魅惑的な響きなんだろう、お小遣いって！
やっぱりさ、多少はお金がないと不便でしょ？ バルツァーさん
ちに遊びに行くにしても、王都見学するにしても、お金がないと買
い食いも出来ないじゃない？ 本来なら私は、たとえ異世界であつ
ても働いて収入を得ないといけないのかもしれないけどさ、でもさ

「今、私の目の前には、超金持ちだと思われる陛下が居る訳でしょ？ そんな金蔓が近くに居るのに、思いつきり利用しない手はないでしょ！ 何もわざわざ大変な思いや嫌な思いをしてまで労働力を提供してお金稼ぐ必要ってなくない？ 私には手の届くところにATMがあるんだよ？ A・T・Mが！ それも無尽蔵に引き出し可能なATMがね！ だって資金源はトリエス王国国民の税金だから！ きゃっ！ もう最っ高！ トリエス王国国民って何人くらいいるんだろう！ ねえ、皆、頑張つて労働に勤しんでね！ 私のため・に！ 税金を納めまくるのよ！ 奴隷の如くね！ よ・る・し・く・ね！

「小遣い？」

「はい、お小遣いです！ だって私、トリエスのお金、全然持ってないんですもん！」

まあ、この世界に持ってきたお財布の中にだって日本のお金はちよぴっとしか入ってなかったけどね！ なにせ諭吉が居ないんだよ、諭吉が！ 私は彼を心の底から愛していたんだけどね！ ああ、ゆきちー！

陛下は少し考えるように眉を寄せて、不可解そうな声音を出した。

「それは構わんが、なぜ金が必要になるんだ、お前が」

「え、どういう意味ですか？」

「どこで金を使う場所が出てくる？ 必要な物が出てくれば、リーザかその辺の者でも捕まえて言えばいいだけだろう？ 余は別に前に対する予算的制限をかけるつもりは無いが？ 珍獣だしな？」

「そうなんですか？」

「ああ」

「……でもお」

「なんだ」

「やっぱり現金持ってないと、買い食いとかが出来ないし……」

「買い食い？」

「はい！ 王都に遊びに行った時、私、屋台とかで買い食いしたい

んですよ！ はっふはっふに熱い串焼きとか！」

焼き鳥みたいの想像してるよ、私！ 肉汁垂れているやつね！

大きいお肉が希望だから！ あー美味しそう！ トリエスって七味あるかな？ あれ焼き鳥には重要だよね！

「……………」

「陛下？」

「……………判った。もう好きにすればいい。幾らが希望だ。許容の範囲内なら言い値でよい」

いや、何、このステキな台詞！ 流石、引き出し無尽蔵なATMだよ！ 陛下最高！ お金持ち大好き！ 勿論、陛下自身がじゃないよ！ 陛下が握っている金脈がね！ 金蔓万歳！ 私、人生十八年目にして、お金が出まくる打出の小槌をどうやら手にいれたみたいだよ！ いっぱい振ってみちゃおうかな！ さあ、トリエス王国国民よ！ 私の打出の小槌に税金という名の栄養を注ぎまくりなさい！ お前たちの年収の九割は納税ね！ そしてお前たちは、残りの一割で細々と生活をしていけばいいのよ！ パンが無ければケーキを食べればいいじゃない、の如くな発言を私は平気でするような人間だよ！ うふふのふ！ だって私、このトリエスにフランス革命もどきが起こったって、痛くも痒くもないからね！ 革命が起こったら他国に逃げるから！ もうね、逃げるのは得意なの、わ・た・し！

私は陛下の言葉にそれはもうウツキウキになって、口元に両手で簡易メガホンの輪を作った。

「きゃっ！ 陛下太っ腹ですね！ 流石国王陛下！ よっ二枚目！

トリエス屋！ いいよいいよ！」

「……………不思議だな、お前に何か言われると、一度発言した事も即刻取り消したくなる」

「や、なに言ってるんですか！ 綸言汗の如しですよ、へ・い・か！」

「まあよい。それで幾ら欲しい」

「うーん、そうですね。こちらの貨幣価値が判らないから何とも判断できないんですけど、向こう基準で考えてー……」

金貨は十万円、銀貨は一万円かなあ？ 銅貨は千円？ いや百円くらいかな？ 疫病神第二位に降格したパパは、しがない中小企業の課長代理という中途半端且つあまり意味のない立場で、そのパパに貰っていたお小遣いは五千円。陛下の職業は国王だから、この際、超強気に倍額を要求して。

「銀貨一枚？」

私のその言葉に、陛下は呆気に取られたような顔をした。

「……小娘」

「はい」

「それでよいのか？」

「あ、多いですか？」

私は焦った。

やばい！ ちょっと強気すぎちゃったかな？！ あまり高額を要求しちゃうと、逆にくれなくなっちゃう可能性は大だからね！ まずかったかなあ？ そういえば、私ってば、トリエスでは珍獣だったんだ！ 人外だったの忘れてたよ！ 珍獣は人並みに要求しなきゃいけなかったのかも！ どうしよう！ 銅貨五枚くらいにした方が良かったのかな？！ 今からでも訂正していいのかな？！

「……いや、お前がそれでよいのなら、その額を支給するよう申しつけておこう」

陛下は何故か疲れたような目を私に向けて、ぼつりと言った。

「え、いいんですか？！」

銀貨一枚もだよ？！ 一万円だよ？！ 諭吉ひとり分だよ？！

私の心配を余所にあっさりとして陛下が了承してくれたのに、私は小躍り状態で椅子に座りながら万歳三唱をした。

陛下の金脈最高！ トリエス王国全国民の納税万歳！ 私の幸運に乾杯！ 誰かシャンパン持ってきて！ 添え物にフルーツは必須

だよ！ オレンジヤストロベリーがいいかな！

「もうすつごくウキウキですよ、陛下！ ありがとうございます！」

「……ああ」

「私、なに買おうかな！ なに買ったらいいと思えますか?!」

「さあ？」

「諭吉ひとり分かあ」

ああ、もううつとり！ これが日本でのことだったら、私、パーシヴァル様の限定版等身大抱き枕を絶対買ってたのに！ あれ、高いんだよね！ 布と綿しか使ってないくせに、諭吉ひとりじゃ足りないくらいの値段するんだよ！ 欲しくて欲しくて仕方なかったのに、私のお財布の中身といったら、パパにお小遣いを貰ったばかりこそ一葉ちゃんがひとり居るけれど、彼女、私の財布があまり好きじゃないみたいで、すぐに英世とバトンタッチしちゃうんだよね！
もう一葉ちゃんと私の相性は最悪なんだよ！

「やっぱりまずは買い食いですよね！ 王都の屋台でオナカいっぱい食べたいです！」

「……そうか、良かったな？」

「はい！ 陛下、王都の屋台でお勧めなところあります？」

「……さあ？ 余は殆ど城から出ないからな。よく判らん」

「え、陛下つてもしかして引き籠り？ ダメですよ、へ・い・か！ ちゃんと世間は知っておかないと！ そういう世間知らずのお坊ちやまが政権握ると、ろくな事にならないですよ。あっちの世界の某フランスという国では、パンが無ければケーキを食べればいじゃないと言ったと流布されちゃった王妃様が居て、国民の反感かっちゃったんですよ？ そんな彼女は断頭台へとおくられちゃったんです！ 革命ですよ、陛下！ この革命で某フランスは王政が崩壊しちゃったんですから！」

まあ、実際はその王妃様が言った訳ではなかったみたいなんだけどね？

陛下の口角がひくりと引き攣った。

「お前にまず聞きたい事があるんだがな？」

「はい、なんですか？」

「余は一度でもお前の前で、パンが無ければケーキをなどといったような世間を知らないと言わせた発言をしたか？」

私は陛下のその言葉に、ぷつと噴き出してしまった。

だってさー、今さら何いってんの、こいつ？ の世界でしょ！

「なに言っているんですか、陛下。陛下が世間知らずなのはもう周知の事実じゃないですか」

「何？」

「何も糞もへチマもありませんよ！ 王国の第一王子として生まれて、王位継承者として何不自由なく暮らし、八歳で国の頂点の国王陛下になったんでしょ？ そんなダイヤモンド付きプラチナ箱入りお坊ちゃまが世間知らずでないはずがないじゃないですか！」

ダイヤモンドにも負けない陛下の紫の瞳に、大量殺戮中です！
といったような殺気が漲った。

「偏見だろう、それは！ 小娘！」

「偏見なんかじゃ全然ありませんよ！ トリエス王国全国民全員一致の意見です！」

「いつそんな国民の意見をお前が聞いた？！ 昨夜この世界に来て、お前は城の中どころか、数部屋のみの範囲でしか行動していないんだぞ！」

「お城を出てなくなつて、国民に会ってなくなつたつて判りますよ、そんなの！ だって私は希代の陰陽師安倍晴明の血を引いてますからね！」

たぶんだけどね！ 一滴の一万分の一かもしれないけどね！

「何？ 希代のおんみょうじあべのせいめいの血？」

陛下は殺気を瞳に漲らせながらも、不可解そうに眉を寄せた。

「そうです！ 私は彼の血を一滴でも引いているかもしれないから、その受け継がれたかもしれない能力で判るんです、国民の気持ちですね！ 陛下は世間知らずだよー、世間知らずだよーって国民は

私にずっと脳波を送っていますから！　ちなみに希代の陰陽師安倍晴明はですね、異世界日本の平安時代の人で、ああ、平安時代は今から約千二百年前の、三百九十年間続いたひとつの時代区分の事なんですけどね、その平安時代に呪術や陰陽道という技術に関して卓越した知識を持っていた陰陽師という職業だった人のことですよ！　安倍晴明は物凄く有名な人で、すごい力の持ち主だったんですから！」

映画で観たよ、彼の実力をね！　式神だって操っちゃうんだよ！　ちなみにトリエス王国で私が持っている式の第一号はバルツァーさんだから！

「……もうよい。お前の話を真面目にとるだけ馬鹿を見るのを失念していた」

陛下はどうしようもなく苛立ったように、黄金のサラサラストリートな髪をガシガシと国王らしくない振る舞いで掻き乱した。

そして何度か深呼吸すると、彼はヘロルドさんの方を見遣る。

「ヘロルド、そろそろ昨日呼ぶよう申しつけた者は来るか？」

「細工師でございますか？」

「ああ」

「はい、あと半刻ほどで陛下の執務室の方へ直接くるよう手配しております」

「そうか。……行くか、もう」

これと話すくらいなら細工師を待っていた方がマシだ、と陛下はぼそりと呟き、席を立った。

それに私はちよつと焦る。

「あ、ちよつと陛下！」

「暫くお前とは会話を交わしたくない」

もううんざりだ、といった感じで彼は吐き捨てた。

「いや、すぐ済みますからちよつとだけ聞いて下さいよ」

「……………」

「短気男認定しますよ？」

ついでに短小男認定も下してあ・げ・よ・う・か？

「……申せ」

陛下は今まで座っていた椅子に再び座る事はせず、その傍らに立ち、背凭れに右手を置いた。

「昨日の夜の事なんですけどね？」

「ああ」

「バルツアーさんやリーザ、ラードルフさんたちが帰った後、珍獣部屋で変なレバー見つけたんですよ。それってば床に予告なく出ばってて、私、それに躓いて、思いつきり足の小指ぶっつけちゃって痛い何のつて！」

「ればー？」

「あー…なんて言えばいいんだろう？ 一点の軸に棒がついてて、それを回転させようと思えば回転できそうなやつです」

陛下は私の言いたい事を考えているのか、空気を見るように視線を横に逸らした。

「梃子、槓桿のようなものかな。……あつたか、そんなものがあの部屋に？」

「ありましたよ！ ね、リーザ！」

話を突然振られたリーザは目をぱちくりと瞬かせて、少しだけ首を傾げた。

「……いえ、わたくしは存じあげませんが。今朝もそれらしきものを目にはおりません」

「え？」

いや、なに言ってるの？ リーザってば！ あつたじゃん、部屋の真ん中にでんと！ 陛下だってさっき珍獣部屋に居たのに、何を見たの？ もしかして近視？

「お前の気のせいではないのか？ 頭もおかしいし、目も悪いんだろっ、きつと」

ああ、この男、いつか絶対に絞める！ 捻りも入れて、首を捻じり切るからね！ 覚悟しろ、陛下め！ ぶっちぶっちにするからね！

「あ・り・ま・し・た！　じゃあ、今、見に行きましょうよ！」
そう言って、私が陛下の腕を引っ張ろうと、立ち上がった時である。

陛下の部屋の廊下側の重厚な扉の向こう側から、ノック音が聞こえた。

『陛下、お食事中失礼いたします。お呼びの者が執務室の方へ参りました』

陛下は扉の向こうへ辛うじて聞こえるくらいの声を出した。

「判った。すぐに行く」

『御意』

「という訳だ、小娘」

そう言っていると陛下は、全ての意識を切り替えたように椅子から手を離した。

「え、ちよつと待って下さいよ、陛下！」

「待つ理由がない」

「すぐ済みますから！」

「くだい！」

「ちよつと！」

「……………」

「え、陛下、なんで無視して部屋を出ていこうとするんですか？　ちよつと、そのヒヨク系男子！　私ってば草食男子派じゃないんですけど、仕方ないしホッペにチューしてあげますから、待っててば！　ねえ、へ・い・か！　ちよつとその短小真性包茎男！」

陛下の額にビシツと青筋が走った。

彼はギツと擬音が聞こえるような勢いで私を振り返る。

「小娘！」

「あ、振り向いた！　さ、珍獣部屋のレバー見にいきましょうよ！　絶対ありますから！　私、昨日そのレバー回そうと思ったんですけど、なんだかすごく固くて回らなかつたんですね。陛下、国王だから肉体労働とかしたことなさそうですけど、レバーくらいはま

わせるでしょ？ 仮にも男なんだし。短小真性包茎かもしれないですけど！」

「……小娘、お前」

「さ、そうと決まったら、レッツラゴーですよ！ ほら、陛下、なに下口ト口してるんですか。意外とドンクサイですね、いやだなあ、もう草食系男子って！ このひ弱っこ！」

「……余は少なくとも国王でな？」

「知ってますよ、そんなの」

「ということはだ。これから執務やら謁見やらがあることくらい想像がつくだろう！ お前の頭はやはりニワトリか何かなのか？！」

「珍獣です！」

何回も言ってるじゃん、私珍獣だって！ つか自分で私を珍獣認定したくせに！

「っ！ ……もうよい。リーザ、部屋から一步も出さな」

「え。いやだ、陛下！ 私はこれから銀貨握り締めて王都見学するんですから！ なに言っているんですか！ それで屋台でおいしいもの食べて、で、ステキな出会いを探すんですよ！ 私の栄えある薔薇の逆ハ―構成団ブルーヘヴンの構成員のスカウトをしに行かなければならないんです！ 名付けて、まずは物色してみよう、王都在住庶民のイイオトコ探索大作戦です！」

「阿呆か！ 誰が城を出る事を許可した！ しかもつい今し方、言ったよな？！ お前には護衛の者をつけなければならぬと！ まだ付いていないだろう？！ どこにもな！」

「横暴！ 陛下の非人道冷酷変態極悪鬼畜ドS破壊魔暴力男天上天下唯我独尊超俺様甘党独裁者！」

「長い！ まずはそのお前の非常識を少しでも改善するべく、リーザに教育でもしてもらえ！ リーザ！」

「はい、陛下」

「縛り付けてでも、あの軽そつな頭にこの世界の常識を叩き込め！ 場合によっては殴る事も許可する！ いや、殴って黙しろ！」

「畏まりました」

「ひどい！ 虐待反対！ 珍獣保護法第四条の順守を要求する！」
「言ってる！」

陛下は主張する私を殺さんばかりの眼光で睨みつけてから、足音荒く部屋を出て行った。

陛下が部屋を出て行って、ヘロルドさんがその後を急いで追って。リーザが私に『あまり食べておられませんからデザートだけでもきちんとお召し上がり下さい』と行って、私を再度食卓の前に座らせた。

そんな優しいリーザなただけだ。
「縛ったり殴ったり、勿論いたしませんからご安心なさってください、珍獣様。さあ、この果物など如何でございますか？ 甘くて美味しいですよ？」

そういつて彼女は、メロンに似た果物をフォークで一口サイズにして刺し、私の口元へと近づけた。

そして口を開かせる為なのか、私の顎下を猫にやるみたいに指で撫で続けるリーザに、私は絶句する。

まるで愛玩動物にでも食べさせようとするかの如くの彼女が、一番私を珍獣扱いしているような気がするのは気のせいでしょうか？

ねえ、教えて！ 私の心の中の唯一絶対神パーシヴァル様！

日本時間で言ったら、たぶん夜中の一時半くらいなんだと思う。

異世界トリエス王国王都の夜はしんと静まりかえっていて、夜空を見れば満天の星と、要所要所に置かれた篝火が照らし出す王城の姿が幻想的な、異世界日本人である私にはちよつと感動してしまう、そんなファンタジーが入った夜だった。

なんて、それは私起きていたら感じるんだろうけど、というのが大前提の話なんだけどね。

昨夜の事を入れなければ、異世界トリエス王国に来て初日。

これまでの人生で体験した事のなかった出来事のせいで、この夜、私は大いに疲れ果てていた。

例えるのなら、遊園地で絶叫系の乗り物を五十回連続で乗ったとか、元日に明治神宮へ初詣に行ってもみくちやにされまくったとか、軽い気持ちで東京マラソンに参加して途中で雨が降って散々な目にあつたとか、そんな疲れ具合だ。

勿論私の場合体が疲れていたというよりも、むしろ精神的な事であつたんだけど。

なにせ私は、珍獣部屋と王の部屋以外は廊下ですら一步も外へ出る事を許されていなかったからね、今日は。

そんな訳で夢も見ずにぐーぐー寝ていたのに、こんな夜中に機嫌が頗る悪そうな声が無慈悲にも私の耳朵を打つたのだ。

「……お前が何故、自分の部屋で寝ないのか聞きたいんだがな、余は」

そう問われ深い溜息が聞こえると、ぬくぬくと包まっていた上掛けを強引に奪われ、私の肩の後ろと膝の後ろに腕が差し入れられた。「……う……………」

「お前の部屋は珍獣部屋だ。いいか、出入りの自由は許すが、ここはあくまで余の部屋で、余の寝台であることを理解しろ」

「……………あ、へい……………か？」

「持ちあげるぞ？ 今日には疲れているんだ。手間をかけさせるな、小娘」

言つて、陛下の腕に力が入ったのが判った。

持ちあげられる時、陛下と私との距離がぐんと縮まり、空気が流れて、私の鼻に陛下の纏う微かな匂いが入る。

その匂いは私がこれまで嗅いだ事のない匂いで、なにか高貴さを感じさせる香水かなにかの匂いだった。

「あ、」

「なんだ」

「いい匂い。陛下、後宮帰りですか？ いいですね、楽しみがいっぱいあつて」

本当にうらやましい。私はね、私はですね、陛下。今日はもう散々だったんですよ！

私はだんだんと覚醒してくると、この男に文句のひとつでも言いたかつたのを思います。

ああ、もう今日は本当に酷い日だった。

顎とオナカの痣を発見して、鼻から牛乳芸をも披露し、朝っぱらから陛下に泣かされ、部屋に閉じ込められて、拳句、これまでの人生には全く無縁であった出来事が私に押し寄せたのだ。

そう、全て貴様のせいだ！ 陛下め！ この厄病神！

「今の今まで執務室でルドルフ……………この国の宰相だが、あれとこの時間まで額を突き合わせて仕事をしていた余に、よくもそんな台詞が言えるとお前のその軽い頭の中身に聞いてみたいものだな。……………とにかく部屋に戻れ」

「ああ、だめです。部屋には戻れません」

ちなみに頭は軽くないからね！ 失礼な！

「何？」

陛下の腕の中から脱する為に、私は彼の胸に手を置いて支えにして、勢いよく飛び降りた。

「おい」

「私の部屋、異臭がしますよ、今」

「異臭？」

陛下が形の良い眉をひそめた。

疲れているとは言っていたが、彼の容貌は相変わらず女にも喧嘩を売っている程の美貌で、少しも損なっているようには私には見えなかった。

「何故？ 異臭とは何の臭いだ」

「なんの臭いだかは知りませんよ。けど、原因は小瓶の中身のせいです」

私は相変わらず透過率がよろしいナイトドレスが、トリエス王国製もっさりカボチャパンツのせいで少々持ちあがってしまったので、ささつと直す。

ああ、このカボチャパンツ、マジでなんとかしたいよ、私。

やっぱりさ、ランジェリーショップ『い・ち・ご』は開店するべきだと思っただよね。売れると思うんだけどな、私。陛下、本気で出資してくれないかな。株主配当は良心的にするからさ。陛下にはよりを付けてあげるからさ。損は絶対させないよ、私。

勿論、『貞操帯・陛下もメモメロ』はオープン記念に付けるし、リピータを確保する為にポイントカードも作ろうと思っただよね。必須だよな、ポイントカード！ やっぱりさ、お得感は出さないと！ それは日本でもトリエスでも、共通のお客心だと思っただよね。トリエスだと家電量販店のようなポイントの付け方は機材がないから出来ないとして、スタンプくらいは押せると思うんだよ。偽造防止の加工は、まだ見ぬ王室専用の細工師にでもやってもらって、

スタンプ十個で日本の貨幣価値でいう五百円引き、スタンプ三十個でトリエス王室印のお好きなコスメ千円分、スタンプ五十個で二十分のフェイシャルエステ、百個で三十分のフェイシャルにデコルテまでプラスして、二百五十個で城のサロンでドレス貸し出しティータイム体験、五百個ではドレス貸し出しのアクセも貸し出し、プラスメイクと髪の毛のアップ付きで舞踏会ご招待、して千個で陛下と握手、肩抱き付きで決まりだと思っただよ！ 一万個を集めたツワモノには陛下によるお姫様抱っこもいいよね！

陛下って性格は最悪の魔王様だけど見た目だけは物凄くいいから！ 乙女の夢を体現した理想的な白馬の王子様だからさ！ いけると思っただよ、本気でね！ 私、コスメとエステ分野にも手を出そうとしているから！ いくよ、私は！ トリエスでは未開拓と思われる分野に片っ端から手を出していくからね！ 目指せ、諭吉ウチワの諭吉風呂だよ！ 札束で頬を叩くからね！ 私は諭吉を本当に心の底から愛しているから！ 世の中、お金だからね！ だから陛下、私にと・う・し・し・て！

陛下が私の言葉に、黄金の格子扉の方へと視線を向けた。

格子扉は今直接は見えない。

異臭が陛下の部屋に入らないように鈍重な仕切りのカーテンを私がきつちりと引いたからだ。

「多少嗅いじやったんですけど、とりあえず死んでないから即死系の毒ガス発生物では無かったみたいです」

首を傾げて私がそう言うと、陛下が少し呆れ気味な声を出した。

「死んでいたら問題だろう？ なにを呑気な分析をしているんだ、

お前は。詳細を言え」

言っただ、陛下は何故か私の頭を鷲掴みにすると、出会ってからの僅かな間に二回経験済みの、言っただアイアンクローを私に思いっきり噛ましてきた。

アイアンクロー。

それは、正面に居る相手に対し、その頭を包みこむようにして手

で掴み、相手の両米神を挟み込むようにして締め上げる完全なるプロレス技である。

つか何故、私にプロレス技を?! しかも何故いま?! それも三度目だよ、三度目! まだ陛下と出会ってから、ようやく一日弱経っただけなのにね!

「い……痛い痛い痛いっ! 痛いですよ、このドS陛下っ!」

「どえす、か。そういえば、その意味をまだ聞いていなかったな?」

「んな事はどうでもいいんです! つか何で突然プロレス技を私に?!」

「ぶろれすわざ?」

陛下の手に更なる力が加わった。

痛いよ、本気で! 本当になんなんだよ、貴様は! このドドS変態極悪魔王め!

私はあまりの痛みで涙目になりながら、持つ力の全てを目力にして陛下を睨み上げた。

「この今やっている行為の事ですよ! なんで私の頭をぎりぎりとか掴みあげるんですか?!」

陛下が底意地の悪い笑みを薄っすらと浮かべた。

それはもう、性格の悪さを如実に表したような笑みである。

つか、貴様、何故だか知らないけど相当ストレス溜まってるだろう?! それを私にぶつけてないか、もしかしなくても!

「掴みやすそうだからか? お前のその中身の無い軽そうな頭がな!」

当然、私は怒り心頭だよ! 当たり前だよな?! 今、この時点で、私は何にも悪い事してないよね?! この世界の全人類にアンケートを取ったって、絶対、私が悪くないって結果が出るはずだ! 百パーセントの確立でね!

私は息を深く吸い込んだ。

それはこれからの私の行為に勢いをつけるためだよ! 勿論ね!

私は涙が出そうな　　というか既に一粒出たよ！　　陛下の
アイアンクローを精一杯耐えつつ、吸い込んだ息を止め、空いてい
る右手を一度、肘を曲げて後ろに引き、歯をぎりぎり音がせんばか
りに噛みしめながら勢いよく前に突き出した。

私、何したと思う？

「っ！」

「くらえ！　プロレス界の破廉恥技、その名を“玉砕”！」

「っ……小娘っ！」

陛下が吃驚と苦痛の声を出した。

私はその声音に先程陛下が浮かべたものに負けなくらいの底意
地の悪い笑みをニヤリと浮かべて見せてから、とあるモノを鷲掴み
した手に更なる力を入れる。

それは私が持ちうる渾身の力と言っているよ！　スポーツテスト
の握力測定でもここまで真剣に出した事はないっぺくらいの力だか
らね！

陛下の私の頭を掴む力が、ふと緩んだ。

私はその隙に彼の手から姿勢を低くする事で頭を引っっこ抜き、と
あるモノを掴んでいた手を外して、陛下の両大腿を掴み持つ。

そして　　。

「更にくらえ！　“急所二スタンプ”！」

そう叫ぶと、陛下の急所めがけて私は思いつきり膝を叩きつけた。
所謂、金的攻撃二連発というやつだった。

とんとんとんとんとんとん。

更に、とんとんとんとん、とんとんとん。

私が陛下の急所を握り、膝を叩きつけてから約三分が経過した。

突然夜中にプロレス技の応酬をした陛下と私のその後といえば、陛下はベッドの淵に両手をつけて前屈みになって無言でじっとして、私は彼の後ろから左手で軽く腰を叩いてあげていた。

「……………」

「……………」

とんとんとんとん、とんとんとん、とんとんとんとん、とんとんとん。

陛下の額には、先程から脂汗みたいなものが薄っすらと滲んでいく。

私つてば陛下が額に汗するのを初めて見ました。

初めて見たんだけど、やっぱり陛下ほどの超絶美形ともなると、原因が急所攻撃による脂汗とはいえ、なんとも色っぽく見えるのに神の不公平を感じる。

私は溜息をついた。

本当に神様つて不公平。私が汗なんてかいた日には暑苦しさしか感じないのに。デオドラントシートつて必須だよな。トリエスにもあるといいけれど、無理だな、こればかりはね。ああ、ドラッグストアが欲しい……………。

「陛下、大丈夫ですか？」

先程から無言で微動だにしない陛下に私は声をかける。

大人しく腰を叩かれ続けているという事は、きつと相当辛いんだろつと予想する。

まあ、当然かな。なんていったつて私の金的攻撃は筋金入りだからね。ゲーム風に言えば、レベル四十五は堅いよ？

「……………」

「下りてきましたか？」

「……………」

「ねえ、へ・い・か！ もしまだ元の位置に戻っていないんだつたら、その場で軽くジャンプした方がいいですよ？」

野球選手とかよくやってるよね？

相変わらず無言のままじっとしている陛下に私は再度溜息をつくと、彼の腰を軽く叩き続けつつ、時折、擦ってあげる動きも追加してやる。

とんとんとんと、何処か虚しい音が陛下の部屋に響き渡る中、それ以外、城の中も外の王都も本当に静かで、今夜は実に穏やかな夜だった。

一体、私たちって何をしているんだろう、真夜中に。

そう思ったのはきつと私だけじゃないと思う。私に腰を叩かれ続けている陛下だって、心の中では思っていると思うんだよね。つか思っていないかつたらおかしいよ！

「……………」

私は無言状態な陛下の俯いた顔の前に右手をもっていき、にぎりにぎと動かした。

「……………」

「陛下、安心して下さい」

「……………なにをだ」

「あ、声、出るようになりました？」

「……………ああ」

「陛下、うちのパパとお兄ちゃんよりも大きかったです。今朝は短小とか言ってごめんなさい？」

「……………」

「パパはともかく、うちのお兄ちゃん、常々『俺の息子は大きいんだぞお！』って自慢してたんですけど、陛下に比べたら全然でした。お兄ちゃん、相当自信持っていて、いっつもお風呂上がりに素っ裸で歩く露出狂だったんですよね」

「……………」

「んで、『ぞーおさん、ぞーおさん』って歌いながらリビングのソファーに座っている私と妹の頭の上に、『ほら氷嚢だぞお！』とか『ちよんまげ！』とか言って乗せるんですよ、その息子を。ママがそれに一度切れて、お兄ちゃんの事、大根で後頭部を思いっきり殴

った事があるんです。お兄ちゃん、全裸で気絶しちゃって意識が戻らなくて、救急車まで呼んだ事があつたんですよ。ああ、ちなみに『ぞーさん』は向こうの世界の鼻の長いゾウという動物の事で、その長い鼻の部分が息子に例えられる事があります。で、『氷嚢』は氷や水を袋に入れて患部を冷やすもので、『ちよんまげ』は、古代日本の男の人の髪型で、頭の上にその息子を乗せた形に似ている髪型の事です。『救急車』はトリエスで言うとなんだらう？ とにかくお医者様のところに連れて行ってくれる馬車みたいなものですかね」

「…………お前の兄は、妹にそんな事をするのか」
理解出来んと呟いてから、陛下は一度深呼吸をすると、腰を叩いていた私の手を避けてベッドに腰を下ろした。

「もうよい」

「上がったの、元の位置に戻りました？」

「……………ああ」

「陛下、今朝、刺客によく狙われるって言ってたじゃないですか」
「なんだ、いきなり」

「だから、私が今したような金的攻撃の対処方法、ちょっと身につけた方がいいですよ？」

痛がつている間に殺されちゃうからね？ 少なくとも私、今の陛下なら殺せたと思うよ。背後からナイフでぶすりよね？

陛下は大腿に肘を寄せ、左右の指を交互に組んで、疲れたように額を乗せた。

「…………お前だけだ。余にこのような事をするのは」

「え、マジですか？ またまたあ」

「……………他に誰が居ると思うんだ、お前は」

「うーん、とりあえず陛下の側室さんたちとか？」

「…………あれらほだいたい互いに潰しあっているだけだ。余に危害を加える意思を持っていても、毒殺か、行為の最中か事後に刺殺くらいがせいぜいだらうよ」

「うわ……おちおち一緒の寝床で寝てもいられないですね、それじゃ」

「だろっ?」

「でもでも、」

「なんだ」

「向こうの世界に比べたら、男としてはマシなんじゃ?」

「どっついうことだ?」

「向こうの世界ではですね、ああ、日本という範囲じゃなくて世界規模での話なんですけど、怒った女の人による男性器切除とか、男性器爆破とか、そんな話定期的に出てきますよ? 切除したモノをゴミとして出された事もあるんですから! お兄ちゃんなんてそういう話題が出て来ると、身を震わせてましたもん。『恐ろしい……』って」

お兄ちゃん、ただでさえ自分の息子に自信満々だったしね?

「……余もお前の兄にその点は同感だ。……お前の世界には行きたくないな」

「え、いい世界ですよ? お金さえあれば私の愛する母国日本なんて、これ以上ないってくらい快適で娯楽に満ちてますもん」

「そうか、良かったな」

陛下は気の無い風に言うと、組んだ手の上に乗せていた顔を上げ、腰に手を当てながら背筋を少し伸ばした。

どっつやら復活してきたらしい。

「もうこの件はここで終いにしよう。それより先程の異臭の話だが、詳しく話せ」

「あ……もうね、この事では陛下に言いたいこと山盛りてんこ盛りなんですよ!」

私は目を鋭くして陛下を睨め付けると、彼の横にドスンと勢いよく腰を下ろした。

その反動で陛下のベッドがたわむ。

「……もう少し静かに座れ」

「あ、もしかして響きました？」

「……………」

「ごめんなさい？ まあそれはそれとして、」

私は後ろ手で体を支えて、今は薄暗くてよく見えない陛下の部屋の豪勢な天井に顔を向けた。

陛下の視線を横から感じながら、私は今朝、彼が部屋から去った後の事を思い出しながら、陛下に今日一日の出来事を話した。

リーザに珍獣扱いされながらもフルーツを粗方胃の中におさめて暫く経つてからの事である。

陛下の部屋側の格子扉の方ではなく、縦幅が異様に低い廊下側の扉が控えめにノックされた。

『珍獣様、リーザさん、ヘルミーネでございます。珍獣様の本日のお召し物を持って参りました』

『ヘルミーネ？』

『珍獣様に今日からわたくし同様お仕えする者でございます。ご紹介させて頂きますね。少しお待ち下さいませ』

私の疑問の声にリーザは美しい微笑みを顔に乗せて答えた後、彼女は楚々とした動きで扉の方へと向かい、開けた。

そして私の視界に入ったのは。

『うわっ！』

『珍獣様？』

『？』

『あ、あの？』

『どうされたのでしょうか、珍獣様は？』

私の後続く声は四つ。

ひとつはリーザで、後は新規に増えた三人である。

『なにになになに?! この花の妖精の双子みたいな二人は! して、もうひとりもヤバイよね? そのセクシーっぷりは男脳殺系だよね』

『?!』

私の驚きは当然だよ！

リーザが清楚系美女だったら、他の新規三人は、艶のあるふわふわした金髪に優しい色合いの青い瞳を持つ年齢は私より少し下、もうユーリウス少年と同年と思われる双子らしき美少女二人組と、もうひとり胸元がはちきれんばかりのダイナマイトな胸を持つボンキュボンな赤髪巻き毛に琥珀の瞳の悩殺系美女なのだ！

やっぱり、あの胸にあやかりたい！　つーか顔埋めていい？！

柏手打っちゃうよ、私！　二拝二拍手一拝だよ！

「かしわで？」

「もう陛下つてば、話の腰を折らないで下さいよ。柏手つていうのは、神社や神道の祭祀とか、日本で大昔から信仰されてきた神道という宗教で、それに拝する際に行う行為の事です」

「ほう？　それで、何故お前はそのかしわでを打とうとしたんだ？」

「え、羨ましい限りの豊満な超特大級の爆乳にあやかりたいから以外に何の意味があるっていうんですか？」

「……気にしているのか、お前は」

「当然じゃないですか！　貧乳判定下っているんですよ、私は！　加藤と陛下にね！」

「かとう？」

「向こうの世界で、同じ学校で机並べて勉強していた同級の男子学生ですよ。あいつ、下着の中に手を入れて私の美乳を直接揉みやり、拳句に貧乳判定下しやがったんです！」

「手を入れられた？　直接？」

「はい」

「小娘、お前、未婚だよな？　今朝、まだ見ぬ未来の旦那と申して

いたし」

「そうですね。彼氏も居ませんでした。パーシヴァル様が居たから別に構わなかったんですけどね？」

「妄想の住人パーシヴァルか。……お前の世界は余にはついていけそうもないな」

「え、パーシヴァル様は妄想の住人なんかじゃありませんよ！失礼な！それにですね、私の方がこの世界についていけそうもないですよ！っていうか陛下さ！」

「なんだ」

「この世界って何でこんなに美男美女率が高いんですか？まだこの世界の人間の数人にしか会っていないのに、陛下といい、リーザといい、新規三人組といい！へロルドさんだって、若かりし頃は相当な美青年だったのがありありと判るロマンスグレーっぷりですよね?!」

「……さあ？」

「あーやってらんない！私の同類はバルツァーさんだけです！彼なら私の気持ち、判ってくれると思いますもん！」

「お前、それはバルツァーに対して失礼以外の何物でもないだろう？」

「そうですね？ まあいいです。それより話を続けますよ？」

「いいのか？ ……まあよい、続ける」

私が部屋に入ってきた三人の美女美少女っぷりに驚き慄いていると、三人はそれぞれ私に向かって礼の形を取った。

『珍獣様、本日より珍獣様付きになりましたヘルミーネと申します』

『同じく、珍獣様付きとなりましたルイーゼと申します。侍女とな

りまだ日が浅く、不慣れな点で珍獣様にご不便をおかけしてしまう
かもしれませんが、ヘルミーネ共々宜しくお願い致します』

そう言って妖精たちは、花がバババツと咲き誇るかのような微笑
みを見せた。

私はもうただただあまりの美少女っぷりに絶句するしかない。

そんな私を置いて、もうひとりの惱殺系美女も私に礼を取りなが
ら、自己紹介をしだした。

『ア二と申します。私は城の針子をしておりまして、本日、珍獣様
のお召し物の裾上げをさせて頂きました。他にもお直しの必要がお
ありになるとお伺いしましたので、参りました次第でございます』
言って彼女、ア二と名乗る惱殺系美女は艶然と微笑んだ。

ひー！ もうなんて事だろう！ 私が男だったら絶対にア二に貢
物してるよ！ 給料の全てを使って、彼女の好みそうなブランドの
新作を用意して、予約がなかなか取れない店を頑張って予約して、
ちよつと酔わせちゃったりして、んで、一流ホテルのスイートに連
れ込んで、気分良くなった彼女を即ベッドに連れ込むよ！ 押し倒
すからね！ それしかないでしょ！ ア二という惱殺系美女を前に
したらさ！

して、そこまでうまく事が運んだら、あとはやりまくる！ ひた
すらやりまくるよ！ 空砲になるまでね！ 当たり前だよ？！
投資はきちんと全回収、それ基本でしょ！

ベッドまで彼女を連れ込む事に成功したのなら、ア二が泣き叫ぼ
うが何しようが、既にそこは完全なる密室。

嫌がる彼女の手首をベッドの端に括りつけて目隠しし、そして

「……小娘、話が脱線している」

「もう、陛下！ 話の腰を折らないで、ってさっき言いましたよね？」

「このまま大人しく聞いていたら、お前の妄想は、そのアニとやらを犯罪紛いの方法でどうにかしようとするのだから？ それを延々と聞かされるのだけは勘弁してくれ」

「犯罪紛いつて失礼な！ 投資の回収行為は当たり前じゃないですか！ ここまでお膳立てした女をやりまくって、犯しまくって何がいけないんです？ のこの畏にかかってついてきたアニに問題有りなだけじゃないですか！ 軽率な考えなしの行動は、己の体で責任を持って支・払・え・で・す・よ！」

「……お前な、今のような言葉はお前のような年頃の娘が言う事ではないだろう？ それに軽率で考えなしな行動とは、お前にこそ言えるのでは？」

「なに言っているんですか！ 私の何処が軽率で考えなしだと?!」
「全てだ、全て。お前の上をいく軽率な者などそうそう居ないと余は思っ」

「あー…本当に陛下ってムカツク！ 陛下だってアニを目の前にしたら発情するくせに！」

「誰がするか！」

「しますよ！ 絶対！ 涎とか垂らしちゃったりしてカクカクしまくりなんじゃないですか?!」

「お前な……。もうよい、とにかく早く異臭の話までいってくれ」

新規三人組が珍獣部屋に訪れてから半刻くらい経った頃、私がこれまでの十八年の人生において全く無縁であった出来事の第一段が

起きた。

私とリーザ、ヘルミーネ・ルイーゼの双子の妖精とアニの五人で、私たちは結構和気あいあいと過ごしていた。

裾上げが完了している陛下のお古に着替え、アニに腰回りを測ってもらって、そしてそれらの作業が終了すると、椅子とテーブルの手頃なのを急遽陛下の部屋から拝借して、五人でお茶をしていたのだ。

はじめこそ新規三人組は遠慮していたのだが、そんな遠慮は勿論無用で、珍獣部屋と陛下の部屋以外には一步も出る事の出来ない私の暇つぶしに付き合ってもらった。

五人で最近トリエスで流行している歌や役者、王都に店を構えている人気の仕立屋のドレスや宝石の話、そんな他愛もない事をただダラダラと話していた。

もちろん私にとっては何も知らないトリエスでの話だ。どんな話題であれ、有用な情報として私は一生懸命聞いていた。

で、話の先は私の事になって、アニが『珍獣様は異世界の方だと聞いております』と言いだした。

私の事は昨夜今日の話である。

それなのに既に城の針子のアニが、私が異世界人であるという事まで知っているのに私は心底驚いた。

その私の反応を目にしたアニは、艶っぽい微笑みを私に向けた。

『既に王城内で知らない者はありませんわ。あの陛下が年頃の娘を保護されたと知って、皆、驚愕しておりますもの』

『あの陛下？』

『ええ、珍獣様。陛下は』

アニがその先を続けようとした時、私の十八年の人生において全く無縁であった出来事が開始されたのだ。

「そうそう、陛下」

「なんだ」

「アニが言おうとしていた“あの陛下”ってどういう意味ですか？」

「知るか。本人に聞け」

「陛下ってさ、」

「なんだ」

「城中に極悪非道の変態魔王って言われまくってるんですね」

「なぜそうなる？ お前しかいないだろう、王である余にそのような戯言を言うのは！」

「戯言じゃありませんよ！ 真実を述べてますよ、私は！」

「いいから先を続ける！ この進み具合でいったら終わらないだろう！ 夜が明けてもな！」

私の問いかけにアニが陛下の事を話だそうとした時、珍獣部屋の廊下側の扉がまた叩かれた。

今度もヘルミーネ達が来た時と同様に何処か控えめな叩き方だったが、五人して扉の方を向いた時、リーザだけが怪訝そうに眉をひそめた。

『誰でしょう』

『わたくしが出てまいりますわ』

妖精その二のルイーゼが、品がありながらも可愛らしい動作で立ち上がった。

しかしリーザはそれを止めた。

『いえ、わたくしが出ます。予定にない訪問ですし、今の時点で珍

獣様に用向きのある者は居ないはずですよ。陛下からでしたら、へロルド様を通して陛下の部屋からいらっしゃる手筈になっていきますし』

『え、そんなこと決めてるの?』

私が驚いてリーザを見ると、彼女は『ええ』と言って、更に『他にもいろいろ決め事がございますよ?』と言って微笑んだ。

そんな事実には私がぼかんと口を開いている間に、リーザは廊下側の扉へと向かい、扉を開ける前に外側の人間へと問いかけた。

『どなたです?』

『王の間付き第二衛兵隊のコーエン』バーレです。珍獣様に茶菓子の贈り物が届いているのですが如何しますか』

『誰からです?』

『ルドルフ』エーヴァハルト宰相閣下からだと伺っています』

『ルドルフ様から?』

リーザは不信感ありありな声音を出した。それは私が初めて見る彼女の不信を表したものだ。それは私が初めて見る

『使いの者はまだ居ますか?』

『いえ、品物だけを置いてすぐに帰りました』

リーザは溜息をついた。これまた私が初めて見るリーザの姿だ。

『貴方、王の間に配置されてどれくらい、いえ、衛兵になってどのくらいお経ちになって?』

『……王の間へ配置されたのは三日前、衛兵になったのは先週です』

『なんてこと……』

「本当に『なんてこと』だな」

「え、そうなんですか？」

「判らんか？ 王たる余の部屋の警護に先週衛兵になったばかりの新人が配置されているんだぞ？」

「それに何か問題が？ 別にいいじゃないですか。新人でも。どうせ衛兵つて入口に立っているだけでしょ？」

「阿呆か。何も無い時はいいが、あつた時はどうする？ 経験が無ければ咄嗟の対処が出来んだろうが。今回の事も通常ならそのルドルフの使いとやらが去るのを許すべきではなかっただろう？ それにそのコーエンという者自身も日が浅すぎて信用も何もないしな」

「へえ。難しいんですね、いろいろと。私がつっていた学校の門の前に居た警備員のおじさんなんて、年季が入っていたけど弱そうでしたけどね。私でも倒せちゃうくらい！」

「お前な。お前が通っていた学校とやらの警備と一国の王のとを一緒にするな」

「まあ、そうなんですけどね？」

「第二衛兵隊の責任者は誰だったかな」

「あれ、陛下、一度見聞きした事は忘れないんじゃない？」

「意識していればな。余の立場からいち部隊に過ぎない衛兵隊の責任者など覚える価値もないだろう？」

「うわ……酷過ぎる。どうするんですか、その責任者」

「然るべき処分をするつもりだが？」

「可哀相に……。こうやって一家の大黒柱が職を失って、その家族が路頭に迷うんですね……。ああ、パパがこれまで会社を解雇されなくて本当に良かった！」

「良かったな。小娘、その話は既に余のところまで上がっている。毒が混入された物だったとな」

「あ、そうなんですか？」

「ああ」

「私、驚きましたよ。結局、リーザが一度そのお茶菓子を受け取って、美味しそうなクッキーだったんですけど、それをね、リーザってば金魚みたいな小魚が入った水槽を用意させて、その中にぼちゃんと入れたんですよ！　んで、入れた瞬間、小魚ちゃんがオナ力を見せてぶかりと浮いたんですよ！」

「まあ、毒が入っていたのだから当然ではないのか？」

「え、陛下もそんな反応なんですか？！」

「そんな反応とは、どういう意味だ」

「みんな、みんな、そういう反応なんですよ！　リーザも花の妖精たちもアニモ！　小魚ちゃんが、クッキーさえ入れられなければ死ぬ事の無かった小魚ちゃんの命がひとつ消えたのにですよ？！　おかしくないですか？！」

「たかが小魚だろう？　お前の言っている事の方がおかしい」

「ああ、だめだ……。私、やっぱりこの世界の人と感覚が違うんだ！　判りあえないです！」

「お前とは判りあえなくて結構だ。とにかくその件は把握している。名を騙られたルドルフが怒り狂っていたから、そう遠くないうちに犯人は見つかるだろう。で、その話はもういい。異臭の話に」

「異臭の前にもっといっぱいあったんですよ、陛下！　聞いて下さいよ、もう！」

誰も共感してくれない小魚ちゃん散華の悲しみを、私はどうにも昇華出来ずに暫く打ちひしがれていた。

リーザも妖精たちもアニも、オナ力を見せて水面を漂い続ける小魚ちゃんの事など少しも気にせず、毒入りクッキーの話に夢中である。

誰が寄こしたと思うかとか、きっと側室たちの誰かだろうとか、その側室たち付きの者の先走りかもしれないとか、彼女たちの後ろ盾の貴族の警告ではないかとかそんな話だ。

確かに私もその辺りは気になるところではあったけれど、明らかに私を狙ったのだらうからね。勿論言うまでもなく陛下のせいだよ！　しかしそれよりもなによりも、リーザたちはこの小魚ちゃんの遺体をどうするのか、ちゃんとお墓を作ってあげるのか、その時の私はそんな事ばかりが気になっていた。

ああ、私がこの部屋を出る事ができるのなら、今すぐにでも城の庭園の隅にこんもりと土を盛って立派なお墓を作ってあげるのに！　だって小魚ちゃん、ようは私の身の安全の尊い犠牲だからね！

当然の行為だよね？！

私は遣る瀬ない溜息をひとつつくと、毒談義に花を咲かせている彼女たちに聞いた。

『ねえ、リーザ』

リーザは私の呼びかけに話を中断し、ふと綺麗な微笑みを顔に乗せた。

『なんでございましょう、珍獣様』

『小魚ちゃん、いつまでこのまま？』

『ああ、申し訳ございません、わたくしとしたことが。お目汚しでございました。いまずぐ片づけます』

リーザがそう言うと、アニを覗いた侍女ズが皆一斉にすっと立ち上がる。

私はそれに驚きを持って彼女たちを見遣った。

私は大いに焦る。

『え、ちよつとリーザ？ 聞きたいんだけど、片付けるってどういう意味で言ったの？』

お墓だよな？ ちよつと言い間違えちゃっただけで、お墓を作るんでしょ？ だってこの小魚ちゃん、生前、うつん、遺体となった今でも明らかにプリティな感じの魚だよ？ 金魚とメダカを足して二で割ったよう可愛らしい魚だったよ？！

リーザが私の言葉に首を少し傾げた。

どうも意味を把握しかねているかのような動作である。

『勿論、水槽の中身を然るべき方法にて処理いたします』

『処理？ 然るべき方法って？』

『どうやら即毒性のものだったようですし、水が汚染されておりますから、専用の場所がございますので其処に流し捨てるのでございます』

言って、彼女は水槽を持ち上げた。

水槽とは言っても、日本でいう金魚鉢を少しだけ大きくしたようなサイズだったから、さして労することなく持ちあげられる代物だ。『え、あの、リーザ、私ね、そういう意味じゃなかったの。あの…』

私がさて彼女にどうお墓の事を言おうかと、とりあえず口を開いて思いついた言葉を発しようとした時、本日三度目の、珍獣部屋の廊下側の扉が叩かれたのである。

その音に水槽を持ったリーザが先程同様、眉をひそめた。

『また何かしら』

『私が出てみますわ』

そう言ったのは、男悩殺系美女のアニだった。

彼女は羨ましすぎる爆乳な胸を重そうに揺らしながら椅子から立ち上がり、リーザとは違うキビキビとした動きで扉へと向かった。

『何の御用でしょう？』

『王の間付き第二衛兵隊のコーエン＝バーレです』

『また彼なの……』

リーザの小さい咳きが私の耳に入った。

『珍獣様にまた贈り物が届いております』

『誰からですか？』

アニもリーザ同様に眉をひそめながら、コーエンさんという彼に淡々と問いかけている。

アニの声が微妙に冷たい響きを含んでいるのは私の気のせいだろうか。

『アツヒエンヴァル卿からだと伺っています』

『アツヒエンヴァル？ アツヒエンヴァル誰？』

アニの言い方に丁重さがだんだんと消え出した。

ああ、きつとこれが彼女の素なんだろうな。少しずつ彼女の素が現れてきているんだろうな、私はそんな事を思っていた。

怖いですよ！ 姐さんのようですよ！ アニ、それでは極道の姐さんが似合ってしまったですよ！

『そこまでは使いの者は言っていなかったです』

コーエンさんが扉の向こうでその言葉を発した時、珍獣部屋全体の室温が確実に五度は下がった。

私はそれに震えあがる。

怖い、怖いよ！ 本気で怖いよ！ に、逃げ出しているのかな？！
とりあえず陛下の部屋に避難してもいいかな、私！

アニが苛立ったように勢いよく扉を開けた。

廊下側のは縦幅が低い扉だから、開けられてまず私の視界に入ったのは、コーエンさんのものと思われる下半身だ。

あ、彼、いま一歩引いた。絶対に一歩引いたよ！ 判るよ、その気持ち、私は判るからね！ コーエンさん！ 私も貴方の立場なら引くから！ っていうか、既に引いているから！

『コーエン＝バーレだったかしら？ 貴方いったい何なの？』

『えっ。』

『仕事が出来ないにも程があるんじゃない？』

『……そ、それはどういう？』

コーエンさんの声は恐れ慄いている感じた。

『どうもこうもないわよね？ コーエン＝バーレ。貴方、もしかして先程と同じ対応をしているんじゃないの？』

『同じ対応とは……？』

『そのアツヒエンヴァル卿からの使いの者とやらを、贈り物だけを受け取って帰ってしまったんじゃないの、と言ってるのよ！』

アニが完全に素になった瞬間だった。

その迫力に、私もコーエンさんも竦み上がる。

『は……はい、あの、帰して……』

『馬鹿なんじゃないの？ コーエン＝バーレ！ アツヒエンヴァル公爵家に関係する人間が、この王城にどれだけ出入りしていると思ってるの？！ 衛兵辞めたら？』

きやー！ キツイ、今の最後の一言はキツイ！ 私、アニにこんなこと言われたら、三か月は立ち直れないと思うよ！

『貴方みたいな不出来な男を相手にしていても時間の無駄ね。そのアツヒエンヴァル卿からの贈り物とやらを渡して。こっちで確認するから。で、コーエン＝バーレ、貴方はこれから辞表でも書くべきね。目障りよ、とつとと消えて』

キツイ！ 本当にキツすぎるよ！ 私がコーエンさんなら、もう永遠に立ち直れない！ コーエンさん、辞表はともかく異動願いだけは書いた方がいいよ？ そしてもう少し穏やかな場所に配置された方がいいと思う！ そうしないと現代日本で雇っている人の多い鬱病になっちゃうからね！ 気をつけてね！ 私、今のトリエスに抗鬱剤があるとは思えないからさ！

不出来男認定をされてしまったコーエンさんにアニが冷たく死刑宣告まがいの言葉を言い放った後、彼女は彼からアツヒエンヴァル卿の贈り物とやらを強奪した。

もの凄い音を立てて扉を閉めたアニは、憤慨しているのか足音荒

く私たちが居るところまで来ると、お茶をしていたテーブルの上にそれをドンと置く。

私を含めた五人の視線がその贈り物に向けられた。

贈り物は、日本基準でいうとショートケーキが六個くらい入りそうなサイズの白い箱に入っていて、四つ角のうち二つの角に幾つかの可愛らしい花とリボンがついていた。

『アツヒエンヴァル卿からでしょうか、本当に』

妖精その一が怪訝そうな声を出した。

『まず間違いなく違うでしょう。今の時点でアツヒエンヴァル公爵家が珍獣様に贈り物をする理由がありませんし、珍獣様を害する意味も今のところありません』

『でも、』

リーザの否定の言葉に、アニが顎に手を当てて考えるように言った。

『ヴィルフリートはアツヒエンヴァルなら利益や害意云々ではなく、単に贈り物をするというのはしそじゃない？ あの男、王城内の女という女を片っ端から口説きまくっているような男だし』

アニはもう猫を被る気は無いようだった。

まあ、彼女はその方が似合うと私も思うんだけどね。脱ぐのがちよっと早すぎなような気がしないでもないけどね？ ああでも姐さん、私は姐さんについていきます！一緒に極道の道を極めましょう！そして王都の影のドンとして、一緒に裏の世界を牛耳ってみませんか？！

リーザは考えるように少し目を細めた。

『いえ、ヴィルフリート様はそのような事はなさらないでしょう』
『何故？』

『普段はどうぞであれ、彼は陛下にだけは忠実な方ですから。陛下が保護された珍獣様ですもの。なにかしらの接触を勝手に持つ事で、あの方の御不興を買うことだけはなさらないはずですよ』

アニは納得のいかない顔をした。

『そうかしら？ あの男はどうしようもないクズよ？』

あ、まだ見ぬヴィルフリートさん、貴方、ア二の恨みを買ってますね？ それもかなり。皆の話からすると公爵家縁の方らしいですが、やはりあの爆乳の魅力には逆らえませんでしたか？ 本能の赴くままに突入してしまいましたか？ 同士です！ 私もそうですよ！ あの爆乳は堪りませんよね？！ 顔、埋めたくありませんよ！ 私もです！ 自分とは程遠い大きさなだけに、私も揉んでみたくて仕方ありませんよ！ ああ、あの胸、いったいどのくらいの弾力と重さがあるんだろう！ 私、言ってみたいんだよね！

『まったく困っちゃうわ、胸が重くて肩が凝っちゃうのよねえ。あら、貴女いいわね？ その可愛らしい胸。私みたいに肩とか凝らないでしょう？ 羨ましいわあ』
とか、

『あーブラ選びもつまらないわ。私の胸って爆乳巨乳じゃない？ だから可愛いブラって売ってなくて、種類が少ないのよねえ。それに比べて、貴女って何でも入りそうだから羨ましいわ。あら？ このスポーツブラなんて貴女にちょうどいいんじゃない？ だって貴女、重力に逆らうもなにも逆らう胸が無いんだもの。スポーツブラで十分よね？』

ってさ、言ってみたいんだよね、とってもね！

「ちなみに何でこんな発想が出てくると思います、陛下」

私が薄暗くてよく見えない陛下の部屋の天井から彼に視線を移すと、陛下は話の間中ずっとこちらを見ていたようで、私と目が合うとすっと逸らした。

そんな陛下は今、両肘を膝付近に置き、姿勢を若干前屈みにするようにして寝台に座っている。

「なんの話の事を聞いているんだ？」

「胸の話ですよ、胸のは・な・し！」

「……お前は先程から胸に拘るな」

陛下が呆れ気味の声を出した。

「当たり前です！ 私の最大のコンプレックスですからね！ で、

何でこんな発想が出ると思えますか、陛下！ なんて私、爆乳巨乳視点の考えが判ると思います？！」

「知るか。そんなこと」

「私の身近に居るからですよ！ 彼女に悪気は全く無くって、あくまで天然な感じなんですけど、でも結局のところ言われている事は『爆乳はツライ、貧乳は楽でいいよね？ いいな、その地球の重力に全く影響を受けない可愛らしい胸。垂れる心配無用だよね？』なんですよ！ ねえ、誰だと思えます？ 私の身近な爆乳は！」

陛下の逸らされていた紫の瞳が私にきつと向けられた。

その瞳は『お前、もういい加減にしろよ？』と語っている。

目ってその人の感情をよく表すよね。どんなに笑顔で接せられて

も、目が笑っていない店員さんとか引くもんね。

陛下に至っては、いつも物騒な内面を表しているところがポイントだよ！ 怖いよね！ 私ってば、人の感情の機微に敏感な純真可憐な麗しの乙女だからね！ もう怖くって怖くって震えてるってのに、この男、気づかないんだよね！ 意図的かもしれないけどね！ 勿論、ヤツがドS属性だからだよ！

「判ると思うか？ 余がお前の交友関係を。立場も違うが世界も違ったんだぞ、昨夜までな！」

陛下がだんだんと苛ついてきたようだ。

全く短気な男は困りものである。

「千夏ちゃんです！ 千夏ちゃんなんですよ！」

そう！ 私の身近な爆乳ちゃんは親友の千夏ちゃんだよ！

彼女、私がAカップですら余り気味だったのに、Eカップもあるんだよ！ 信じられないって話だよ！ しかもデカイだけじゃなくって、千夏ちゃんの場合、超美乳なの！ 形も色も最高の乳をしてるんだよね！ 涎モノなんだよ！

加藤がね！ あの加藤めは、千夏ちゃんの爆乳にいつもヤラシイ視線を向けていたことを私は知っているんだ！ 男ってさ、……男ってこういう生き物はやはり……！

「ちなつ？ ああ、お前より頭の出来が悪いというちなつか」

「そうです！ でも頭の出来はこの際関係ありません！ 千夏ちゃんは千夏ちゃんの優れたところが山盛りですから！ そんなことよりですよ、陛下！」

「なんだ。……お前、本当に異臭の話はどうしたんだ。いい加減に

私は彼の言葉を遮った。

「ああ！ 男ってやっぱり爆乳が好きなんですネ！ パーシヴァル様もそうだったら私、青木ヶ原樹海コーズ決定ですよ！」

「あおきがはら樹海？」

「異世界日本で有名な自殺の名所のうちのひとつです！」

「自殺ってお前な。たかが胸が無い程度の原因で何を
「たかがって何ですか！ 私にとってはこれ以上ないってくらいな
最大の理由ですよ！ 深刻なんです！ なんですですか？！ なんて
私ってばこんなに胸が無いんですか、陛下！」

私は長年のコンプレックスとあまりの不幸な現実には陛下の寝台の
上に座りながら頭を抱えた。

本当にもう何でだろう！ 胸が大きくなるっていうサプリメント
をお兄ちゃんに買ってもらって飲んでたし、カタログ通販で『これ
塗ると大きくなるよ？』ってクリームも買ってもらって毎晩塗って
たのに！ 一所懸命大きくなるように努力してたのに！ 掃除機で
吸ってみたこともあるよ！ サイクロン式掃除機ね！ 別に爆乳じ
やなくていいんだよ？ せめてBカップくらい、……ううん、Aカ
ップが余らなくなるくらいになりたかったのに！ 何で努力が報わ
れないのよ！

私は頭を抱えていた両手を、自分の悲しいくらいに無い胸へ持つ
て行って驚掴みした。

驚掴みっていつても、掴める程も無いんだけどね！

「……やっぱり、異性に揉んでもらってないからですかね」
「何？」

陛下が怪訝そうに眉をひそめたした。

「トリエスでどう言われているかは知りませんが、異世界日本では
ですね、陛下、」

私は薄暗い室内ながらも陛下の瞳の奥を見ようと、じっと目を凝
らした。

その私の危機迫る視線に、陛下は少し身を引く。

この男は！ その行動の全てにおいてムカツクんだよね！ 純真
可憐な麗しの乙女と目が合って、身を引くってどうなのよ！ 無礼
者め！ 其処へ直れ！ 手打ちにしてくれるわ！

「異性に胸を揉まれ続けると大きくなるって言われているんですよ
ね」

「は？」

「異性に胸を揉まれ続けると大きくなるって言われているんですよ！ 信憑性の程は判りません！ でもですね！ 異性に胸を揉まれ続けると揉まれる事によって血行が良くなって胸に養分が運ばれやすくなるとか、揉まれる幸福感で女性ホルモンの分泌が良くなって胸が大きくなるって言われているんです！ ねえ、陛下、」

「……なんだ」

私は眉をひそめつづける陛下の両手首をガシツと掴んだ。

に・が・さ・な・い・よ？ うふふ……。

「揉んでくれませんか？」

「何？」

「も・ん・で・く・れ・ま・せ・ん・か・ね？ と言っているんです」

陛下が眉をひそめ引きまくりな様相ながらも、驚いたような視線を私に向けた。

「阿呆か？ お前は。とうとう頭が逝ったか？」

「失礼な！ 私は至って正常ですよ！ 揉んで下さい陛下！ 私の爆乳巨乳化計画の為に！」

私は陛下の両手首を掴んでいる手に力を入れた。

貴様、拒否でもしようものなら、強制執行だからな！ さあ、純真可憐な麗しの乙女の美乳を感謝しながら揉むといい！ 嬉しさに涙しながらね！

「馬鹿か、お前はっ！」

「馬鹿じゃありませんよ！ 私は必死なんです！ せめてAカップが余らないようにしたいんですよ！ 異性に揉まれれば大きくなるっていう有用情報があるつてのに、それを試さない手はないでしょう？！ 丁度近くに異性が居るんです！ その両手を利用しないなんて馬鹿げてます！ この際、異性であれば誰だっでもいいんですよ！ 手があればね！」

「利用つてなんだ！ 余をなんだと思っっているんだ、お前は！ 放

せっ！」

陛下が手を引き抜こうと力を入れた。

放すと思うか、貴様っ！

私は当然、陛下の両手首を掴む手に、持つ全ての力を動員して引きとめる。

そしてその勢いのまま陛下の両手を私の悲しき貧乳に思いっきり押しつけた。

「さあ、揉んで下さい！ 私、アニになりたいんです！」

「なれるか、阿呆！ 放せ、小娘！ 余がお前の胸をどうこうしたところで、お前のその無い胸が大きくなるとも本気で思っているのか？！ 幻想を抱くのは止める！ それに余を巻き込むな！」

「幻想つてなんですか！ 有用な情報を元にした有効な行為ですよ！ いいじゃないですか、揉むくらい！ 減るもんじゃあるまいし！」

陛下のドケチ！

「お前がそういう事を言うな！ 先程も言ったが年頃の娘の言う事ではないだろう！ 少しは恥じらいを持って、小娘！」

「五月蠅いですよ！ 陛下、ほら、揉んで下さいよ！ 触ってるだけじゃ効果は無いに等しいんですから！」

「ふざけるな！ 手を放せ！」

陛下の手を引く力が増した。

流石に男の力で引かれると私にはどうする事もできない。

しかしこのままでは折角の異性の手が私の胸から消えてしまう！ それはどうにかして阻止しなければならぬのだ！

だって、だって、この異性の手は私を爆乳巨乳にするための有効な道具なんだから！ 私はア・ニ・に・な・り・た・い・の！ 千・夏・ちや・ん・に・な・り・た・い・の！

長年のコンプレックスを払拭したいんだよ！ 本当に長年の悲願なんだよ！ だから陛下、ちょっとは協力してよ！ いじわる！

鬼！ 悪魔！ 魔王！ 変態！ ケチんぼ！

私は爆乳への手段である陛下の手を失う訳にはいなくて、脳ミソを必死にフル活動させた。

陛下の手を引く力は益々強くなる。

向こうはもう本気で引き抜くつもりだ。

そうはさせるか！ 陛下め！

私は飛んだ。

「小娘っ?!」

陛下は目を全開に見開いて吃驚の声を上げた。

「陛下が揉んでくれないのなら仕方ありません。 襲います」

そう！ 陛下が私の貧乳を揉んでくれないのなら、もう私から襲うしかないじゃない！ これまでの人生で初めて男の人を押し倒したよ！ 大丈夫！ 私、彼氏居なかったから経験は無いけど、その手の知識だけは豊富だから！ 千夏ちゃんがいるいろ知識だけは私に叩き込んでくれたからね！ イケるよ、私！

「小娘っ、お前正気か?!」

私の下の陛下は、ただただ驚きすぎて行動が起こせないでいるみたいだった。

そんな陛下に私はニヤリとした笑みを向ける。

よし、この隙にいろいろとやるしかない！

「正気ですよ？ 陛下」

両手首を拘束しながら飛んで、私は陛下を下に敷いて彼の腹の上に跨っていたが、その位置を陛下の下半身にまでずらした。

陛下のものと私のものが布越しに合わせられる。

「まだ勃つてないですね？ まあそれもそうか。陛下、いきますよ？ これから私が陛下を快楽の世界に連れて行ってあげます。大丈夫、千夏ちゃんが私にいろいろとアダルトビデオで講習会を開いてくれましたからね？」

そうだよ！ 私の知識のもととは種類豊富と言われる日本のアダルトビデオだからね！ 陛下、期待していいよ！ いろんなシチュ、さまざまなバリエーションを用意してるよ！ 用法用量を守ってき

ちん対応出来るからね！

エロ属性アンドどじっ子属性の爆乳美乳の千夏ちゃん直伝だからね！ 一子相伝だよ！

「さあ、陛下、めくるめく官能の世界へよ・う・こ・そ！」

言って私は陛下の手首の拘束を外し、跨っていた自分の身を少し上げて、彼のまだ勃っていない下半身に手を這わせた。

陛下のお兄ちゃんよりも大きなものを私の右の手の平の全体を使って優しく擦る。

その先端に指が到達し、そこを人差し指で擦るようにして軽く押しながら親指と中指を中心に全体を包み込むようにして本格的に擦り上げ始めた。

ほんの少しだけ熱を帯びたのを確認しながら、私が左手で彼が履いている邪魔なものを一気に脱がしにかかろうとした、その途端である。

「っ、いい加減にしろっ！ 小娘っ！」

陛下が私を押しつけるようにして勢いよく身を起こした。が、それがあまりに勢いが良すぎたのと、私の姿勢が不安定で、咄嗟に陛下の襟首を掴んだ事もあって、陛下と私は勢いよくベッドの下、つまり床の上に折り重なるようにして落ちた。

「いったあ……」

「……っ……」

「陛下、痛いですよ！ 思いつきり後頭部、床にぶつけたじゃないですか！ っていうか、早くどいてください！ 重いです！」

私は自分の上に乗っかるような形で落下してきた陛下の胸を渾身の力を込めて押した。

一方陛下も、全体重で私を押し潰さないように咄嗟ではあったが多少は考慮したのか、肘を床について身を支えたようで、その痛みを眉をしかめていた。

「……痛いのはお互い様だ、小娘」

「早くどいてくださいってば！」

陛下がゆっくりと身を起して床の上に座った。

彼はそのまま自分の寝台に背を預けると、溜息をつき髪を乱暴にかきあげる。

「なんなんだ、本当にお前は」

私も陛下が上からどいてすぐに身を起こし床の上に座った。

髪が乱れたので手櫛で何度か梳いてみる。

「なんなんだって言われても、単に貧乳を大きくしたかっただけじゃないですか。んで、たまたま目の前に居たのが陛下っただけですよ」

「……お前のその発想はおかしすぎる。普通じゃない」

陛下は疲れ果てたように言った。

「もういい。とにかく胸の話は終わりにしてくれ」

「え、私の死活問題なのに！」

「いやだよ！ 折角、活路を見出した矢先だっていうのに！」

「その胸に関してはお前のまだ見ぬ未来の夫にでも対応してもらえ。余をそれに頼むから巻き込むな」

「……陛下だって、私を後宮問題に巻き込んだくせに」

「……………」

「あ、そうだ、後宮問題で思い出した！ 私ってば、なんとか公爵家から贈られてきたっていう贈り物の話をしていたんじゃないですか！」

「そうだ、そうだ忘れてた！ あれ、なんで胸の話になったんだろう？」

私が首を傾げてそう言うと、陛下が何とも言えない表情をこちらに向けた。

「ようやくそこに話が戻ったか。……長かった」

「長かったって！ なんにも長い話してないじゃない！ ったく短気男はこれだからイヤだよ！ もう少し心にユトリを持った方がいいよ？ へ・い・か！」

「先に言っておくが、アツヒエンヴァル家からとされている贈り物の件も余のところの話があがっているからな。動物の首が贈られてきたんだらう？」

陛下の言葉に私はその時の事が鮮明に思い出されて、顔を蒼白にした。

その記憶のあまりのおぞましさには私は背筋が震え、自分で自分を抱きしめた。

「そっそうなんですよ、陛下！ なんとか公爵家から贈られてきたっていうその贈り物、箱を開けたら、向こうの世界でいう猫とライオンを足して二で割ったような顔つきの猫サイズの頭だけがあったんです！ 血だらけで！ しかもです！ 目に……目に、マチ針らしきものがブスリと刺してあったんです！ 両眼にですよ、陛下！」

それでもって猫ちゃんの舌もダラリと垂れさがって……」

ああ、思い出しちゃったよ！ 毒入りクッキーよりも、アニが姐さんだったことよりも、貧乳の事実よりも、私の本日のヒットポイントを限りなくゼロにした贈り物の事を！

私は怖すぎて、首を切られ目を針で刺されて贈り物にされてしまった猫ちゃんが可哀相すぎて、ぎゅうつと自分自身を更にきつく抱きしめる。

陛下がそんな私を見て、どこか諦めたように息を吐いた。

「趣味の悪い嫌がらせにすぎん。後宮あたりで考えつきそうな贈り物だな」

「そ………そうなんですか?!」

いやー！ 私、こういつた嫌がらせはちょっと………どころか思いつきり耐えられそうにありません！ この時点で私の中では後宮は鬼門に決定です！ 私にとって丑寅の方向ですよ、もうね！ 寺を建てるべきではありませんか、陛下！ 玄武………玄武の召喚をするべきですか?! あれ、玄武で良かったんだっけ?! っていうかこの際、朱雀でも白虎でも青龍でも麒麟でも何でもいいよ！ 助けてよ、五神！ そして私を日本に連れ帰ってよ！ 帰還先は家から離れた京都でも構わないからさ！ 平安京万歳だよ！

「………リーザ達が小魚ちゃんの時と同じような反応だったのも私的にショックだったんです、陛下」

「同じような反応?」

「そうです………」

私はもう小魚ちゃんと猫ちゃんの強制終了されてしまった命が悲しくて仕方なくて、慢性アレルギー性鼻炎の鼻を嚙りながら陛下に言った。

「みんな、首を切られて目に針を刺されて血みどろの猫ちゃんに同情のドの字もなかったんです。ただ総じて『まあ、これペルシーじゃない。もつたいたい』なんです、陛下………」

それに加え妖精その二が、その猫ちゃんの頭を摘んで、リーザの

持っていた水槽にゴミのようにポチャンと入れたんだよね……。

私は自分を抱きしめていた手を解いて、顔を覆った。

遣る瀬なさすぎだよ……。

陛下は溜息をついた。疲れたようにも呆れたようにもとれるようなものだった。

「ペルシーという動物はトリエスから少々離れたところに位置するダルスアードという国の、そのまた一地方のみにしか存在しない動物でな。希少性が高い上に扱いや人工的繁殖も難しく、この国ではかなりの高値で取引されている動物なんだ。だからだろう」

「でも……命に値段つて無くないですか？ どんな命あれ、強制的に奪われてしまった命なんですよ？ 小魚ちゃんも、そのペルシーも……」

少しでいいから悼んで欲しかったよ、私。

「そうだが……。だがな、小娘。トリエスでも庶民であればお前のような反応をするかもしれないが、この王城では皆リーザ達のような反応をかえすだろう。あれらが例外ではない。むしろ例外がお前だと理解しろ。諦める、その辺りは。割り切らないと精神を病むぞ」

「……………」

「そのペルシーの件は話に出ていたヴィルフリート・アツヒエンヴァルに伝えておいた。あれは公爵家の嫡男だが些が変わった男でな？ 普通ならやらないものなんだが、第一騎士団の団長の職に就いていて、よく王城に詰めている。伝えた瞬間、余には笑みを浮かべていたが、どう見ても目が笑っていなかったから、そう遠くないうちにルドルフと同様、犯人を捜しあてるだろう。あれの場合は血祭りにも上げるかもしれないが」

「血祭り……………」

「まあ、お前が気にする事ではない。しかし早いな、後宮の反応がこれからはそれ以外からも来るかもしれない。ああ、ちなみに、お前が申した二件以外にも、臓物と人間の頭皮、毒花に大量の蟲の贈り物の件も余のところの話が既に伝わっている。お前からの説明は不

要だ。これ以外に他に何かあるか？　これから聞こうとしている異臭以外に」

陛下の反応も実に淡々としていて、彼にとってこれが日常であると判ってしまう事実が痛い。

私はこれ以上落ち込んでいても状況が変わる訳でもないのに、遣る瀬ない気持ち無理矢理にでも昇華する為に、顔を覆っていた手を外して、三度ほど深呼吸を繰り返した。

「いえ、後は異臭だけです、陛下」

「そうか」

私は陛下の顔を見た。

室内が本当に薄暗いから　光源は幾つかの燭台に差さっている蠟燭の明かりしかないからね　本来ならよくは見えないものなんだろうけど、陛下と私は現在、床に座り込んで互いの距離がとにかく近かったから、陛下の紫の瞳の色こそ普段よりもずいぶんと暗く見えただけで、顔の表情も目の動きも実によく私には判った。

「で、異臭の原因は小瓶とか申ししていたな。その小瓶はどうして珍獣部屋にある」

「私の就寝の準備が出来て、リーザと花の妖精たちが去った後の事です。今日いろいろあったから、私、疲れてて、すぐにうとうと出ししたんですよ。そしたら……」

「そしたら？」

「扉がノックされて、」

「廊下側か？」

「はい。誰かと聞いたたら、昼間何度も来たコーエンさんだったんで開けたんです」

「夜に扉をか？　不注意だな、小娘」

「え、そうなんですか？」

「ああ。で？」

「私、コーエンさんに、昼間も仕事していたのに、こんなに遅くな

つてもまだ仕事しているんですか、って聞いたら、コーエンさん、夜勤の人間が急遽来れなくなったので通しになってしまいました、って疲れた顔で言っで、で、私にまた贈り物が届いたって渡してきただんです」

陛下が心の底からの呆れ声を出した。

「受け取るお前もお前だが、そのコーエンという男、もう解雇だな、本当に。衛兵を統括している総責任者と第二衛兵隊の責任者、それを補佐する者共も全員辞めさせよう。知らなかった。そのような状態だったとは」

「よく判らないですけど、別に辞めさせるまでしなくても……？」

「お前には関係のない話だ。明日、ルドルフに誰か適任者を充てさせ榎入れをさせる。その話はいい。それでお前はその受け取った小瓶をどうしたんだ。異臭がするという事は開けたんだな、お前は。考えなしにも」

「考えなしって！ 考えましたよ、私！」

むっとして訴えた私に、陛下が目を細めた。

そして彼も懲りずに私の頭をがしつと掴んで、アイアンクローの構えをとる。

「つか、力を入れたら完全にアイアンクローだよ！ まだそこまで力が全く入ってないけどね！ 入れたらどうなるか判っているんだよね、陛下！ また玉砕やるからね、私！」

「どう考えた、小娘。中身も判らない物を誰も呼ばず、聞かずにただ開けたんだらうが」

「……だつて」

「だつて、なんだ」

「もう夜遅いし、呼んだら悪いかなと思って。最初、陛下を待ってたんですけど、陛下、なかなか帰ってこないし、私も眠かったから、いいや開けちゃえって、……思っで。中身も気になつたし」

アイアンクローに少しだけ力が入った。

「やはり何も考えてないよな、お前は」

「……………」

「夜が遅いなどと一切気にする必要はない。誰でも呼べ。今回は当番の衛兵が使えなさすぎたが近々に改善させる。それと、珍獣部屋には侍女が控える部屋がない。故に現状、夜はリーザ以下全員下がつているが、これもどうにかしよう。本来なら部屋が隣の余の部屋付きの使用人がお前にも充てられればいいんだが、あれらはお前に適していない」

「陛下、別にそこまでしなくてもいいですよ。私、もう夜に扉開けませんから。反省しました」

お陰で珍獣部屋が臭すぎて、今晚、寝れなくなっちゃったしね？

「信用できない」

「え」

「お前の頭は中身が無さ過ぎて軽いし、おかしいし、普通じゃない。お前の口から反省などという言葉が出ようが出なかるうが関係ない。余のする事になんら影響は受けんよ」

私は陛下の言い様に眉をひそめた。

なんかおかしくないかな？ 相変わらず私を馬鹿扱いしているのには、勿論、文句を言いたいところだけれど、そもそもさ、例え陛下の後宮問題に巻き込まれて嫌がらせの、プラス命の危険があったとしても、侍女の部屋をわざわざ用意する程の事なの？ 部屋の入口にそれこそそれなりに使える衛兵を二、三人配置しておけばいいだけの話なんじゃないの？ 珍獣保護法適用生物ってそこまで天然記念物？ 本当に？ 私って、珍獣保護法は適用されているし、確かに異世界人ではあるけれど、陛下から見たってただの人間の小娘でしょ？ 陛下、私の事、『珍獣』って呼ぶよりも『小娘』って呼ぶ方が断然多いしね？

「陛下さ、」

「なんだ」

「なんでそこまでしてくれるんですか？ ただの異世界人でしかない私に。私、別にこの世界の亡国の王女でも、どこかの国の価値のある人質でも、特殊能力を持った伝説の乙女でも巫女でもないんですけど」

「そのような事は判っているが？」

そう言った陛下の超絶美形顔に少しだけ笑みが浮かんだ。

けれどその笑みは何処かがおかしい、何かがおかしいのだ、やっぱり。

まず瞳に、そう、感情が無い。

笑っていない、怒ってもいない、憤ってもいないし、悲しんでもいない。

心配もしていないし、好かれても嫌ってもいない、まるで存在自体がどうでもいい、そんな　冷たい瞳だ。

本物のアメジストを嵌め込んだ、鉱石の冷たさを思わせる綺麗な綺麗な澄んだ瞳。

訝しむ私を無視するように、というか、例え私にどんな意思や意見があつたとしても、それは彼にとつてはなんら気に留める必要も価値も無いかのように、彼は冷たい瞳のまま私を暫く見遣つて、頭を掴んでいた手を外した。

そしておもむろに立ちあがる。

「陛下？」

「来い、小娘。珍獣部屋へ行く」

「え、だつて異臭が」

「即死系のものでは無かつたのだろうか　なれば何の臭いか確認するべきだ。余の部屋の隣でもあるしな？　つべこべ言わずに来い」

言つて陛下は私を立たせる為に腕を掴んで強引に引き上げた。

その力の強さに私は悲鳴を上げる。

「痛いっ、陛下！」

「ああ、すまん？」

気持ちの全く込もっていない御座なりな謝罪を口に乘せ、彼は私を引きずるようにして珍獣部屋へと引つ張つていく。

「ねえ、陛下、確認は明日でいいんじゃないですか？　もう夜も遅いし。私、陛下の部屋のゴージャスソファで寝ますから」

「馬鹿な事を抜かすな。こういつた事は対処が早ければ早いほど良

い。逆に時間が経ち過ぎると、判るものも判らないままになる可能性がある。小娘、今後は何かあったら、すぐさまリーザか、お前の言う妖精二人、ヘロルドに言え。あれらが近くに居なければそうだな……なるべくはそうならないよう申しつけておくが、その場合は、ルドルフ、宰相か、第一騎士団長のヴィルフリート、それと第一騎士団副団長にフェルテン、ビシヨフという男が居る。そのあたりを捕まえる。まあ、明日明後日にはお前に護衛を付けるつもりだから、何もルドルフやヴィルフリートを無理して捕まえる必要は出てこないとは思うがな」

あれらも忙しいから捕まえるのは難儀だろう、と陛下は付け加えて、陛下の部屋と珍獣部屋を仕切る鈍重そうなカーテンを躊躇う素振りも少しも見せずに開けた。

開けた瞬間、珍獣部屋に籠っていた空気が一気に陛下の部屋に流れ込む。

その強烈な異臭に陛下は盛大に顔をしかめた。

「成程、ふざけた真似を」

陛下はそう言うと、格子扉を勢いよく開けた。

そしてあまりの異臭に怯んでいる私をまたも強引に引っ張って、珍獣部屋へと入っていく。

私は戸惑った。

「え、陛下、もしかして私に、この異臭が酷い珍獣部屋で今晚寝ろって言うんですか？」

陛下は私を振り返りもせず腕を掴んだまま腰を屈めて、部屋の床に転がっていた小瓶を空いている方の手で拾った。

「寝たいのか、お前は」

「嫌ですよ、流石に！これはちょっと耐えられません！」

「だろうな。小娘、これは毒ではない」

「そうなんですか？」

「ああ。言うなれば害獣除けかな。人間にもキツイが獣は更にキツイらしくてな。人を襲う獣や畑を荒らす獣除けによく使われるもの

だ。原料は森の奥深くに群生している花の根だ」

「花の根……」

トリカブトみたいな感じ？ ああでもトリカブトの根は本物の毒か。

私は陛下に掴まれていない方の手で鼻を塞いだ。

ああ、慢性アレルギー性鼻炎つてさ、いい匂いには鈍感だったりするんだけど、臭いのは判るんだよね、どんなに鼻が詰まっている時でもさ！

「これを寄こした者はお前を害獣だとも言いたかつたのではないか？ 珍獣だし」

「失礼な！」

陛下は角度を変えながら瓶を暫く眺めていたが、やがて興味を失ったように再度床へ放り投げた。

「これも誰が寄こしたのか調べさせよう。全くふざけた真似をするものだ。珍獣部屋は余の部屋の隣にある事をその者は失念しているようだ。そうは思わんか、小娘」

瓶を捨てて、私の方へ振り向いた陛下の目に剣呑な光が宿る。

私は陛下から一步離れた。

怖すぎ！ さっきの無感情な瞳も怖かったけど、その剣呑なものも物凄く怖いよ！ このドドS陛下め！ 大魔王！ 地獄の霸王が！
「それより早くこの部屋出ましようよ。もう臭くて……」

「そうだな。明日、この部屋の絨毯と寝台、カーテンに至る全てを取り替えさせよう。場合によっては壁もだ」

「え、壁も剥がないといけないほど臭い残るんですか、これって」
でもこの壁って剥げるの？ そういう壁じゃなくない？ 我が家の壁紙を剥いたらベニヤっていう世界じゃないよね？

「ああ。だからふざけた真似をと言った。 ああ、そうだ、小娘」

「はい」

「そういえば今朝、お前が言っていた“ねばー”は何処にある？

ついでだ、それも確認しよう」

あ、そうだ、忘れてた！

そうそうレバー、レバー！ 私の足の小指を内出血させたレバー
ね！

あれってさ、昼間、リーザと妖精二人、アニにも見せたんだけど、
なんでか皆、見えないって言うんだよね。なんで？ ものすごく
不思議なんだよ。私にはあんなにハッキリと見えるのにさ。それに
『ここだよ？』って彼女たちの手を取って触らせてみたんだけど、
触れないんだよね。スカツて感じで通り抜けするの、マジで。変な
んだよ、本気で！ 私は見えるし触れるのにだよ?! お陰で皆に、
もう可哀相な子を見るような目で見られたんだよね、私！

「何処と言われても、あそこですよ、陛下」

私は部屋の床の中央を指さした。

陛下と私が立っているとところから二メートルも離れていない場所だ。

リーザたちには見えず触れなかったレバーは、私の目には淡く発光しているようにすら見えるのだ。

だからこの薄暗い中でも、それはもう姿形、模様まではつきりと捉える事ができる。

「どこだ？」

ああ、陛下も見えないんだ。なんでだ。何で私だけ見えるんだ。

もしかして異世界トリップした事と関係が？ あれ、それなら私って、何か特別な力が働いていたりして、それさえ解決すれば日本に帰れるフラグ立っちゃったりするのかな？

……んな馬鹿な。

私の予想ではたぶん帰れない。不思議な力も働いていない。この異世界トリップはもつと現実的なもので進行しているような予感があるんだよね。ファンタジー要素は入っていないよ、きつとね。

私は溜息をついた。

疲れているのかな。皆が見えない物が見えるなんて。そりゃ疲れるよね？ 昨夜異世界に来て、今日一日私的に有り得ない事がいろいろ起こって、夜中の今だもん。疲労で目もおかしくなるっつーの！ 目薬さしたいよ！ 疲れ目用のね！ クールが希望ね！ スカ

ツと爽快なやつだよ！ 来たーっとか言っちゃうよ？！

「リーザも妖精もアニも見えなかったんですよねえ」

「では今朝言ったように、お前の目が悪いんだろっ。行くぞ」

「あ、でもちよっと待って、陛下！」

「なんだ。余は今日は本当に疲れているんだ。早く寝たいんだが」

「とりあえず触ってみて？ 私、本当に見えるんですよね。……疲れ目が原因かもしれないですけど」

そんな自信無げに言う私を陛下は溜息と共に面倒そうな視線を寄こして、掴んでいた私の腕を放した。

「どこだ」

「ここです！」

今度は反対に私が陛下の腕を掴んで、レバーの前まで引っ張っていき、彼をしゃがませる。

そして、両手で陛下の右手を掴んでレバーを触らせた。

私が陛下にレバーを触らせたと思って暫し。

私には陛下がレバーの感触を得ているのかどうなのか判らないから、ただ彼の様子を黙って見守るしかない。

陛下が無言になった。

「……………」

「……………」

「……陛下？」

「……………」

「ね、陛下、どうしたんですか、何かしゃべって下さいよ。やっぱり私の気のせい？ 疲れ目かなあ。明日、リーザにトリエス版ブルーベリーをお願いしようかな。向こうの世界ではですね、ブルーベリーっていうフルーツは目にいいって言われているんですよ。ブルーベリーに含まれるアントシアニンが目の網膜にいいって言われてて

「小娘」

陛下が私のブルーベリー講釈を遮った。

彼は目を凝らすように右手のあたりをじつと見ている。

「ある」

「え？」

「あるぞ、小娘」

陛下はレバーを握る右手をそのままに、夜になってもサラサラストリートな黄金の髪の中に左手を突っ込んだ。

そして、信じられんと小さく咳く。

「目を凝らしても見えないのに、手に感触がある。余が手にしているのは、お前の言う“レバー”か？」

陛下の瞳はそのままずっとレバーへと向けられ続けている。

私は陛下の返答に思わず茫然としてしまった。

だって私ってば、陛下があるって言うとは全く思わなかったんだよね。見えないって言うてたし。もう私の気のせい、疲れ目のせいだって既に結論づけてたしね？

「……はい、そうです。陛下が触っているのはレバーの棒部分です。形的にたぶん回せます」

「お前にはいつから……いや、バルツアーらが帰った後だったか、見つけのは」

「そうですよ、寝る前です。皆がベッドを用意してくれて居なくなつた後、躓いて気づきました」

「……そうか。で、今朝、お前は固くて回せなかったと言っていたな？」

「はい。すごく固いんですよ、それ。見た感じは本当に回せそうなんですけどね？ 陛下、回せそうです？」

陛下はひとつ息をついた。

一旦、気持ちを落ち着けさせたようだった。

「……やってみるか」

「あ、じゃあ、ここに左手添えた方がいいかも。軸の部分です、この辺りが」

「判った」

私の指示通りに陛下は手を添えると、すつと息を吸い込んだ。そして彼の体に力が入るのが傍に居る私にも判る。

「……固いな」

「やっぱり肉体労働をしたことのない陛下には無理ですかね？ でも、リーザ達には触れなかったから、マッチョな騎士の人が来ても触れなくてダメかも」

「……お前な。余も多少は体を鍛えているが？」

「え、どうして？」

「剣くらい振るえなくてどうする？ 刺客が来て近くに護衛が居なければ大人しく殺されるとでも？」

「あ、そうか」

「……………」

私は陛下とそんな話をしながらも、どうしたら回るのか考えていた。

それはきつと陛下も同様だろう。が、実際、レバーが見えるのは私なのだ。

やはり私が考えるしかない。

「ねえ、陛下」

「なんだ」

「今度はここに左手添えてみて？」

「どこだ」

私は陛下の左手を添えて欲しいところへ導き、その後、左手を陛下の左手の上に添えたまま、右手は陛下の右手の上からレバーを握った。

「こういう方向で力を加えてください」

「判った」

そうして陛下と私は一緒にレバーを回そうと力を加えていく。すると。

「……回るな」

「回りますね……………」

「……………」
「……………」
今まで固かったのが嘘のようにレバーはクルクルと簡単に回りだした。

そして時間にしてたぶん二分くらいだろう。

ひたすら陛下と私はレバーを一緒に回し続けていたが、ようやく終わりが来たようだった。

「これ以上動かなそうだが、お前にはどう見える？」

「そうですね……軸の部分を見ても、もう回らなそうなんですが……」

「何も起こらんか」
「ね」

「……………」

「……………」

「……………」

「え、これだけ？ 本当に何も起こらないんですか？ 期待外れ？」

「期待外れ？」

「ああ、ええつともしかししたら元の世界に帰れるかも、とかですね？」

「それはどうなんだろうな。お前がこの世界に来ることとなった原因は余には判らないが、帰る事の出来る手段がこの珍獣部屋にあるとも思えんのだが……」

「あ、やっぱり陛下もそう思います？」

「ああ」

そんな感じで二人してレバーに手を添えたまま、どこかダラダラと会話をし続けていた、その時である。

事が起こった。

「……………ガコツ？」

「……………今、変な音が聞こえたよな？ 小娘」

「はい、聞こえ うわっ！」

私が陛下に返事をしていた時、視界が一段、日本基準で五センチくらい下がった。

え、なんで？

そんな疑問が浮かんだ矢先、更に段階的に視界がどんどんと下がって。

「床が下がってきている！ 飛び移るぞ！」

言って陛下が私の腰を強引に引き寄せた。

そして加速度的に下がる床から飛び移る為に不安定な足場から陛下が蹴り飛ばうとした時、床が、部屋に絨毯が敷かれていたから状態は直接視認できなかったけれど、三、四メートル四方の大きさの穴がぼつかりと一気に開いたようだった。

絨毯の衣擦れの音が大きく響き、私の腰を引き寄せている陛下の腕に痛い程の力が加わる。

そしてある瞬間を境に、目にする風景がハッキリと捉えられなくなる。

「きつつ」

「っー！」

「きゃあああああああ！！！」

珍獣部屋にろくに調度品が無かったのが災いした。

私が昨夜一度だけ使用したベッドでは絨毯と私たち二人を支えきれず、陛下と私は珍獣部屋に敷かれていた絨毯と共に 落ちた。

… 32 (後書き)

陛下と私と秘密の小部屋・前編 … 四百字詰原稿用紙 約93枚

私の意識を浮上させたのは、陛下の苦しそうな呻き声だった。

「……退け小娘、苦しい」

「……あ、れ、へい、か？」

「……っ……人の上で考えなしに動くな。早く退いてくれ」

狭くて身動きがうまくとれないんだ、と言葉を続けた陛下は、私の太股あたりを手で押した。

「いつ、いたたた……。なんか、首が痛いです、陛下。……っー
か、陛下つてばさ、」

「なんだ、とにかく少しずれろ」

「私の太股触らないでくれますかね？ このエロオヤジ！」

「っ！ 小娘……お前っ！」

陛下が私の下で一瞬身を震わせたのが判った。

それには特に気にも止めず、私はとにかく身を起そうと腹筋に力を入れる。

いま居る場所が物凄く狭すぎて手のつきどころが判らなかつたら、腹筋運動のように身を起こすしかないと思ったのだ。

私は勢いをつけて身を起こす。

「……っ」

「あー…本当に首が痛いです。寝違えちゃったみたいな痛さですよ。参った、参った。というか此処、何処ですかね、陛下」

周囲に目を向けると、いま居る場所はとにかく狭かった。

人ひとりが体育座りするだけの広さしかなく、しかも一緒に落ち

てきた絨毯が周囲を覆っているので壁面が見えない。
見上げると、珍獣部屋の床に開いた穴なのだろう。

四角く切り取られた弱過ぎる光が気持ち程度に今いる場所まで入っていた。

「……………」

「陛下？ え、陛下、何で私の腰を持ち上げようとしているんですか？ なになにに、本気でエロオヤジ認定しないとダメな感じ?!」

「……………との顔の上に、す……………わるなっ!」

陛下の声を荒げながらもくぐもった声が下から聞こえた。

腰を持ち上げようとしていた陛下の右手が、今度は私の腹に置かれる。

置いた瞬間、後ろの方向へとかなり強い力が加わった。

が、私はびくともしなかった。

陛下の体勢が不安定な事もあったし、私のデカケツはその程度の力ではビクともしないんだよね、勿論ね！ 私ってば、尻で人を窒息死アンド圧死させる事が出来るくらいに大きいからね！ ここまでくると特技だよ！ というか凶器と言っていていいかも！ 必殺！ つ・け・も・の・い・し・特大サイズだよ！ ホームセンターで三千円くらいで売っているやつね！

「くはっ！ 陛下、いきなりオナ力押さないで下さいよ!」

「……………にかく退け！ 苦しい!」

陛下が声を発する度に、私の下半身に息がかかる。

お尻というより丁度下半身の中心部分んだけど、それが妙に生温かくて、変な感じがした。

だから私は言った。

「陛下、銀貨三枚ね」

「な……………に？ ……とにか、く早く退いてくれっ!」

私は溜息をつくと、仕方ないなあ、と言いながら後ろにずれた。それに合わせて陛下が身を起こしていく。

彼は身を起こし終わると、絨毯越しの壁面に背をあずけた。

で、私はというと、陛下の膝を立てた大腿を背凭れにして彼の上に跨る形で座っている。

陛下は深く深呼吸をすると、向き合う形で顔を見合わせる事になった私をぎつと睨んだ。

私たちが居る狭い空間は、薄暗いながらも距離が近ければ互いの顔が分かる程度の明るさはあった。

「早く退けと言っただろう、小娘！」

「だから退いたじゃないですか、エ・ロ・オ・ヤ・ジ」

「っ！ 余に向かつてよくもそのような事をつ」

「あれ、エロオヤジは通じるんですか？ ほんとこの異世界便利翻訳機能、よく判らない基準で適当に翻訳してますよね？ 製作者、誰なんでしょうね、陛下」

「知るかつ！ そのような事よりも王たる余に向かつてエロオヤジとは何だ！ そう思う理由を言え！」

「ちよつとそこ拘りますね、陛下。え、何で？」

「理由を述べよと言っている！」

陛下が何でか知らないけど物凄く怒っているようなので、私は彼の形の良い顎に右手を伸ばした。

例えば男が女の顎を捉えて顔を上に向かせるかのような感じである。

当然、嫌がらせだよ？

私は陛下の顎をくいと上に持ち上げた。

同時に陛下の整った黄金の眉が盛大に中央に寄る。

きつとこんな事をされたのは初めてなのだろう。

薄暗くても彼の蟋谷（こめかみ）が波を打ったのが判った。

「エロオヤジにエロオヤジって言って何が悪いんですか？」

「何?!」

「理由も何もありませんよ。で、陛下、何歳？」

今朝、ヘロルドさんに彼の在位期間と王となった年齢を聞いて、流石の私も計算出来たが、嫌味の為に聞いてやる。

陛下は怒り苛つきながらも、怪訝そうな顔をした。

「二十六だが？」

それがどうした、といった感じで言った陛下を私は鼻で笑ってやった。

顎を捉えた手の親指で私は彼の頬を撫でる。

撫でた頬は女性が羨ましがらうような滑らかな肌触りだった。

少なくとも二十代半ばの男の肌質じゃない。

髭のジャリツとする感触がしなかった。

くそ、この男！ 今は真夜中のはずなのに髭の感触がしないなんて！ どこまでキレイ系なんだよ！ この御伽の国のメルヘン王子めが！ 貴様なぞ、嵐の夜に訪れた魔女によつて獣にでもされてしまえ！ 一生涯元に戻ることはないよ！ 当然ね！ 毛むくじやら万歳だ！

「二十六。二十六ですよ、へ・い・か！」

私は頬を撫でていた親指を、今度は彼の理想的な形の唇に這わせた。

くそつ、唇も荒れてないよ！

私は陛下の完璧なまでのビューティーっぷりに頭にきて、八つ当たりのように彼の唇の間を割って親指を突っ込んだ。

私の指と陛下の歯が当たる。

「何をする！」

陛下が顔を強引に横に逸らせた。

同時に私の右手も払う。

「十八の女子高生からしたら、二十六なんてオヤジでしょう？ どう考えたって」

「じょしこうせい？」

「日本の女の子の学生の事ですよ、陛下。というか、この言葉も前に使った事あるんですけどね。……聞き流してましたね？」

私はふうと息をついた。

この男、私の言った事をかなり右から左にスルーしているんじゃない

ないだろうか。貴様の頭はトンネルか?! トンネルを抜けたら雪国だったりするのかわ?!

私は陛下を胡乱気に見た。

「陛下と私は八歳差。十分、私から見たらオヤジですよ、お・や・じ!」

「……………」

「し・か・も! その日本の花の女子高生の秘密の花園に顔を埋めたんですよ? エロオヤジ決定じゃないですか!」

陛下の私を睨む紫の瞳に力が増した。

「お前が人の顔の上に座ったんだろっが!」

「事の起こりはどうであれ、感触を味わい、匂いとか嗅いだんじゃないですか! 私の秘密の花園を堪能したのは事実でしょう?!」

「誰が堪能など」

「という事で、はい、陛下」

私は彼の目の前に右の手の平を上にして差し出した。

ほれほれ出せ出せ。出・し・や・が・れ!

「……………何だ、この手は」

「だから銀貨三枚」

「何?」

「だ・か・ら、銀貨三枚。諭吉三人分。相場ですよ、相場。日本のね」

陛下が不可解そうな表情をした。

今、この場面が漫画に描き表されるのなら、クエスチョンマークが彼の頭上を無数に飛び交っているだろう。

「相場? 何の?」

「え、判らないんですか?」

「お前の言っている事だけは、本当にさっぱり判らん」

「私が言っている事っていうより、陛下の理解力が無いだけなんじゃない?」

「小娘……………」

「相場つていうのは、私の秘密の花園に顔を埋めた代金ですよ。だ・
い・き・ん！」

「は？」

「ちよつと陛下、もしかして落下した時に頭でもぶつけたんですか
？ 大丈夫ですか？」

「五月蠅い！ 代金というのは何だ！ どういうつもりで申してい
るんだ、小娘！」

「どういうつもりも何も。パンを買えば代金を支払う。宿に泊まれ
ば代金を支払う、つていうのと同じだと思えますけど？」

「……………」

「陛下、私の秘密の花園に顔を埋めたんです。日本の相場で三万円、
私的レートで換算してトリエス銀貨三枚を陛下に支払ってもらわな
いと。ただじゃないですよ、私。はい、陛下」

「安い女ではないんだよね？ 取るものはシツカリ取るよ！」

ほれほれ、といった感じで私が手をひらひらとさせると、陛下の額に青筋が浮いた。

ああ、私ってこの短期間に彼の額の青筋何回見たんだろう、なんて事をのんびりと思っていた。

その隙がいけなかったのだろう、陛下の右手が私の頭をがしつと捉える。

くそっ、またか、貴様！

「痛いですよっ、陛下！ ドS魔王！ ド変態の帝王陛下！」

「小娘、お前、余に娼婦を買うような真似をせよと申しているのか？」

「娼婦？ 私、別に娼婦じゃないですけど？ っていうか、イヤだ、

陛下！ キモすぎっ！」

陛下のアメジストな瞳が益々の険悪さを増していった。

眼力で人を殺せるのなら、きっと私は八木の巣だ。

そんな感じの凶悪さである。

「きもすぎ？ どういう意味だ、小娘」

陛下御得意のプロレス技アイアンクローにどんどん力が入っている。

陛下は意味が判らなくても、不快極まりない事を言われているのを感じているのだろう。

異世界便利翻訳機能の能力不足な点を全力で補うかのように、すぐさま意味を聞いてくる。

「キモすぎとは、キモイすぎるのイとルを抜いただけですよ！ ちなみにキモイの意味は、気持ち悪いの略ですからね！ 生理的、見た目的に気持ちが悪く場合に使われたりするんですが、今回の場合は生理的に気持ち悪いという意味で使ってますから！」

陛下方面からプチツという音が聞こえたような気がした。

え、今の何の音?! めちゃめちゃ不吉な音だったような気がするんだけど！

私はこの世に存在する全生命体が保有する生存本能、自己防衛本能が発する警告に従って、陛下のアイアンクローの手を剥がそうと試みる。が、相当力が入っているのか、びくともしなかった。

仕方がないので、私はこれ以上陛下との距離が縮まらないように、右足で陛下の胸元に足をつけて彼の身を壁に抑えつけ、陛下の顔の真横の壁に左足をつけて体勢を維持する軸とする。

「寄らないで下さいよ！ 変態工口キモオヤジ！」

「小娘……お前……」

陛下の左手が私の右足首をがっつりと掴んだ。

そしてその掴んだ右足を彼は物凄い力で上の方向へ、半ば持ち上げるようにして私の足を押し開く。

押し開いた後、陛下は私が背凭れとしていた彼自身の足を自分の方へ寄せる事によって、私を彼自身に近づけた。

それによって陛下と私はかなり間近な距離となり、互いの顔の距離は十センチもない。

そして寄せられた行為によって私は不安定な体勢となってしまう、彼に半ばしなだれかかるような不本意な形となる。

壁についていた左足と陛下に持ち上げられた右足が、許容する限界を超えた開脚度合いとなってしまう、私はしぶしぶ左足を下ろした。

同時に半ば持ち上げられていた右足が解放される。

「ちよつと陛下！ 私の股が裂けたらどう責任をとってくれるんですか?! 私の場合、賠償金は金貨千枚じゃ足りませんよ?!」

「金貨千枚？ お前にその価値があるとも思っつか？」

「うわ、何それ！ あるに決まっているでしょう？！ 私、処女なんですからね！ 処女膜裂けたらどうするんですか！ 向こうの世界じゃ、処女がネットオークション、えっと……えっと、そう！ 世界的規模な競売にかけられて、数百万、私的レート換算でトリエス金貨三十枚くらい？ で、ツワモノクラスになると、一億円で競売にける女性だって居るんですよ！ ちなみに一億円はトリエス金貨千枚ね！」

陛下の片眉が意地悪そうに上がった。

「ほう？ ではお前は自分自身をそのツワモノクラスだとも言うのか？ お前が？」

その言い方に私は瞬時に憤怒モード突入だ！ 形相と叫びたらもう人面魚のように恐ろしいよ！

私は陛下の胸倉を掴んだ。

陛下が思いつき顔をしかめる。

「小娘。王の胸倉を掴むとはよい度胸だな？」

「度胸も糞も尿もこの際関係ないですよ！ ふざけんな、陛下！ 私の処女膜は価値ありありに決まってるでしょ？！ パーシヴァル様に捧げる大切なものなんですからね！」

伊勢神宮への奉納ものクラスなんだから！ 荒御魂だって和御魂に変化させちゃうくらいに凄まじい威力なんだからね！ 強烈だよ！ オファーだってくるかもしれない代物なんだから！ 勿論、伊勢神宮からだよ！

「パーシヴァルな。お前は妄想の住人に相手をしてもらわねばならん程、相手に困っているという訳だ。悲惨だな？」

貴様、言ってはならない事を言ったな、今！ それは禁句だろうよ？！ 禁句だよな？！ 二つの世界共通の決して侵してはいけない最大の禁句、アダムとイブも手を出せない禁断の果実の中に固く封印されている禁止ワードだよな？！

私は陛下の胸元の留め金とボタンをもくもくと外しました。

国王である事を示す為なのか何なのか判らないが、品良く飾られている宝飾品もむしり取って横に放る。

放った宝飾品は、私たち二人を中心に包むようにして壁に沿ってある珍獣部屋の害獣対策用の臭いが染みついた絨毯にあたって、ぱすつと間抜けな音を立てた。

「何をする、小娘」

陛下は眉をひそめ、手際良く留め金とボタンを外していく私の手を押さえる。

この時点で私の頭を掴み上げていたアイアンクローは消失した。

頭がふと軽くなって、私は小さく息をつく。

私、日本に帰ったらCT検査しようつと。絶対、脳内出血とかしてそうだよ！ ついでにお値段お高めだけどPET検査を加えてもいいかもね！ ガンとかも発見されるかもしれないしね！ 誰?!

マンモグラフィー検査は要らないよね、とか思ったの！ 要るよ、私にだってマンモグラフィー検査は！ 我が家の唯一所有の車にはピンクリボンのシールがちゃんと貼ってあるからね！ 挟む肉くらいあるから！ 心配されなくてもね！ ちょっとだけかもしれないけど、私だって女なんだから！

「邪魔な衣服を脱がそうとしているんですが？」

「脱がす？ 何故」

「何故？ あ、もしかして陛下つてば、私が陛下を襲うとか凌辱しようとしてるとか思ってます？」

「……思っていないが、お前のやる事は予測がつかない」

「ぎ・ん・ね・ん・で・し・た！ そのご期待には応えられませんが！ なんで私がパーシヴァル様献上用の初エッチを陛下に捧げないといけないんですか！ 私の処女膜は高値なんです、た・か・ね！ 冗談も休み休み言えって感じですよ。このハゲツ！」

陛下が今、信じられない言葉を耳にしたといった感じで目を見開いた。

「ハゲ？」

「ええ、ハゲですよ、は・げ！ 今は黄金のサラサラストレートな髪が豊富に生えているように見えるかもしれませんが、私が診断したところ、その髪、毛根、ずいぶん痩せ細ってますよ？」

「痩せ細る？」

「そう！ 毛根が痩せ細るとですね、薄毛になって、気づいた時には髪の毛がその頭上からキレイに消え失せているんですよ！ 陛下、みっともないからってっぺんがハゲても、横の毛を伸ばして頭上に乗せたりなんてしないで下さいね！ そんな黄金バーコード、うーん、トリエスで言うと、黄金鍬ですか。そんな髪型にはしないで下さい！ 国王が黄金鍬！ いやっ、笑えな過ぎ！ きもーい、きもーい！ 超サイテー！ 鳥肌モノですよ！ きゃっ、マジで鳥肌立ってきた！」

ちなみに陛下の毛根が痩せ細っているなんて嘘ね！ 私、そこまです陛下の頭皮をじっくり見てないから！ つか、いつ見る暇があったっていうのよ！ そこに気づくべきだよ、へ・い・か！ 天才なんでしょ?! 変なところで抜けてるよね、陛下って！

「この世界には向こうの世界の砂漠に生えた雑草程度の髪の毛具合の人たち御用達、ミノキシジル五パーセント製剤が入った優れものの発毛の薬が無いんですからね！ 薄毛とハゲになったら終了ですよ、へ・い・か！ 陛下の周囲の貴族にも居るでしょう？ 髪の毛が悲惨な事になっている人！ 若ハゲだつてあるんですからね！ 若いからつて油断は出来ませんから！ 喉から手が出るほど欲しいでしょう？ その薬！ ちなみに結構値段は高いですよ！ 量にもよりますが、一本銀貨一枚はしますからね！ でも残念でした！ 陛下の権力、財力を持ってしても、異世界日本の物は手に入りません！ 日本の優れた化学技術の物は何ひとつ手に入らないんですから！ 所詮、陛下はトリエスの王でしかないんですよ！」

ハゲと言われてショックを受けたのか、私の手を掴む陛下の力が緩んだ事をいいことに、私はせつせと陛下の胸元のボタンを外しにかかった。

「陛下みたいにもストレス、常に仕事とかで苛ついている人はハゲるのが早いですからね！ 毛根はそういうのに弱いですから！ 陛下、かわいそう！ 国の為に心血を注いで仕事をしているのに、それが原因で陛下がハゲちゃって見栄えが悪くなれば、貴族も庶民も、それに周辺国の王侯貴族にも言われちゃうんですよ！ 影でこういう風に！」

『知ってるか？ 国王の髪の話』

『あー…知ってる、知ってる。なんだかもう致命的に毛根が死滅していつてるって話だろ？』

『そうそう！ 既に復活の見込みが無いくらいに、ツルツピカらしいぜ？』

『マジで？ ピカピカになっちゃったのか。それはもう御臨終だな。その頭皮に毛が生える事は一生涯ねえな。南無……』

『なんでもよ、その死滅した頭皮を復活させたいが為に、大枚はたいて他国のアヤシイ薬に手を出しているらしいぜ？』

『え、マジ?! おいおい止めてくれよおー。そのアヤシイ薬に使われる金つて、もとを正せば俺達の血税だろ?!』

『そうなんだよなあー。まあ、なまじ顔がいいだけに、気持ちは判らないでもねーんだけどさ。だけど迷惑だよなあー』

『だな。顔かぁ。あんな女にも喧嘩を売っている程の美貌だもんな。あの顔でハゲはねえや。お笑いにしかならねえよな。悲惨すぎる……』

『他国の王侯貴族はよ、これを機に、トリエス国王にぼったくり価格でアヤシ気な薬を売りつけて、この国の財政を破綻させる気らしいぜ？』

『うわ、マジ?! やべえ、王のハゲが原因で、この国、滅んじやうの?! うひょー！ 歴史に残る恥ずかしい滅亡だな！ なになに、俺、その瞬間に立ち会っちゃう訳?! 後世の人間に腹かかえて笑われるぜ、そんな滅亡!』

『それよりよお……』

『なんだよ』

『逃げる?』

『くそつ、難民コースか！ ったくいい迷惑だよ、本当！ 難民になったらよ、難民先の原住民低能ヤロウ共に、虫ケラのようにコキ使われて、女は娼婦になるしかねえんだぜ？ あー…この時代にトリエス国民に生まれた悲運を呪ってやる!』

『何処の国に逃げる？ 俺、少しでも家族は平穩に暮らせるとこ

るに行きたいなあ』

『だな。よし、村の知恵袋の妖怪バーサンにでも聞くか』

『そうだな。ほいじゃ行くか。たぶん、そんな猶予も無さそうだしな』

『ってね、言われるんですからね、へ・い・か！　そんでもって近隣諸国の王侯貴族たちにはですね！』

『おお、宰相Bよ。どうだ、トリエスの胸糞悪い若造王の頭の具合は？』

『はつ。忍ばせております間者によりますと、相当キテいるそうでございます』

『そうか、そうか。フォッフオッフオッフ。して、トリエス侵略計画の方はどうだ』

『はい、それも順調に。間者によりますと、トリエスの国庫はもうカラも同然。この程、王都の金融業者に借入を申し入れたとか。』

『十一を超える高利の利息をふっかける街でも評判の悪徳業者だそうでございます』

『終わつたな、トリエスも。まさか国民も王のハゲが原因で国が滅亡するとは夢にも思ってたんだろうよ。それにしても、腐った沼の水に砂糖とレモン汁を加えただけのものに金貨百億枚を払うとはな。馬鹿すぎる。まあ、朕の懐は今までになく潤ったが』

『そうでございますね。正妃様も、余った予算で普段は手を出されない程の高価な宝飾品をお買い求めになられておられましたし』

『あれに宝石は似合うからな』

『はい。傾国の美女と言われる美姫でございますれば』

『ふつ、朕と若造の出来の違いぞ。おい、侍従J、將軍Gと將軍K、軍師Wを呼べ』

『御意』

『王、ではとうとう進められますので？』

『ふむ。のんびりしてはおられندろうよ。他の国に先を越されるだけは我慢がならん。どうもトリエスの馬鹿王の噂はかなり広

範囲に広まっているようだからな』

『そうでございますね』

『王、将軍G、K、軍師W、呼びとの事で参上いたしました』

『おお、もう少し近こう寄れ。お前達にこれからやってもらいたい事がある』

『はっ』

『王、やってもらいたい事とは？』

『ふむ。薄々気づいている事とは思うが、近日中にトリエスへ出陣してもらいたい。速やかにだ。準備はどのくらいで完了する？』

『各騎士団の方は、二日で完了いたします、王よ。前々から準備をしておりましたので』

『おお、流石は我が国の騎士団だ。素晴らしいな。軍師の方はどうだ』

『わたくしの方も大丈夫でございます。既に何通りもの策を用意しております』

『軍師W、此度の出兵、成功率はいくらと見る？』

『は、王よ。必ずや成功すると。我が国が敗軍になる可能性は微塵もございません』

『ふっ、素晴らしいぞ！ よし、今すぐ準備に取り掛かれ！ そして朕に更なる高みを見せよ！ トリエスの若造は斬首！ 国民は

総奴隷にせよ！ 行け！』

『はっ！』

『御意！』

『必ずや、我が君！』

『宰相B、祝勝会と凱旋パレードの準備はしておけよ？』

『おまかせを、王よ』

『つてな感じですよ、陛下！ ねえ、どう思います？ …… つて陛下、あれ？ へ・い・か！ なになに、なに弱ってるんですか？

ねえ！』

私が物語を聞かせているうちに、気づくと目の前の陛下は額に手

をあて、目を伏せていた。

私は思わず陛下の胸元のボタンを外す作業を止める。

というか腹部のあたりまで既に外しちゃっているんだけどね。あ、陛下下つてば、ひ弱っ子のはずなのに、オナカの筋肉ちよつと割れてるんだね、おおっ。

「もうよい」

「え、何が？」

「もうよいと言っている」

「だから何がって聞いているんですよ」

「……疲れた」

「あれ？ どうしちゃったんですか、陛下！ ちよつと元気出して！ そんな感じじゃ今から私がしようとしている渾身の力を込めた絞殺計画が台無しじゃないですか！」

私、弱っている動物を一方的に虐待するような趣味は持ち合わせないからね！ ドS属性の陛下じゃないから！

「絞殺な。やればよいだろう？」

「ひえー！ なにその投げ遣りな反応！ え、ちよつと陛下！」

陛下は服を掴んでいた私の手をどけた。

彼はふと息をつくくと、黙々と自分の服のボタンや留め金を手際よく順番通りに留めていく。

「ちよつと、折角、外したのに」

「さつさと絞殺でも何でもしないのが悪い。で、小娘、話をかなり元に戻すが、」

「え、どこまで戻すんですか？ 覚えてるかなあ……私」

「……はじめの“きもすぎ”のところだ。どういう意味で言った？ 生理的に気持ち悪いとは？」

「あ、そこまで戻すんですか？ えつと会話の流れ……ああ、娼婦云々のあたりですね。だって、陛下、『余に娼婦を買うような真似をせよと申しているのか』とかなんとか言ったじゃないですか」

「……言ったが。それが何だ？」

「判りませんか？ ってことはですよ、トリエスでは娼婦を容認しているって事ですよね？」

「容認……まあ、積極的には取り締まっではないが？ そういう法も無いしな」

「それがキモスギって言ってるんですよ」

「意味が判らない」

「男視点の男中心社会だからキモイって言ってるんです！ 当然それを黙認している陛下もね！ 陛下さあ、確かに国として取り締まっても売春とか買春は無くならないと思いますよ？ でもさ、例えばイタチゴッコになってしまったとしても、陛下は国王なんだから法を整備して売春、買春は取り締まらないと。娼婦という職業をトリエスから無くさないかね。ああ、その時は、ちゃんと彼女たちの今後を面倒見てあげて下さいね。職業教育、職業斡旋は大切ですから彼女たちからしてみたら、私の今言った事なんて余計な御世話なのかもしれないんですけどね。でも、売春買春が横行している国なんて恥かしいですよ。少なくとも向こうの世界ではそういう価値観です。そういうのを認めるとキリが無いし、どんどんエスカレートして娼婦の低年齢化、誘拐、人身売買とかの犯罪の温床にもなりますしね。日本ではですね、陛下、」

陛下は溜息をついた。

心底疲れたような様子だが「なんだ」と聞く姿勢はみせている。

「ちゃんと売春防止法という法律があるんですから。まあ、他国から売春をしにくる人たちが入国したり、日本女性だつて遊ぶお金欲しさにする人も居ますけどね。でも、国としては認めてないですよ、売春も買春も娼婦という存在も。まあ、確かに日本も昔は公娼制度はありましたけど」

どこかうんざりしたように陛下は眉間を揉みだした。

「お前の世界とこの世界は違う」

「違くても！」

「お前は今、にほんにも昔は公娼制度があつたと言つた」

「言いましたけど？　それが？」

「小娘、お前は、そのにほんトリエスが同じ時を歩んでいると思うか？」

「え？」

陛下が私の髪を掻きまぜた。

「急ぎ過ぎる改革は血をみるし、弱者は野たれ死ぬしかないが、お前はそれでも良いと？」

「誰も一言もそんなこと言っていないじゃないですか！　それに私、ちゃんと娼婦の人たちに仕事を斡旋して下さいっていいましたよね？！」

「そうそうつまくはいかない、そういうものは。国が出来る事には限界がある。まずはそれらとそれらを取り巻く者たちの意識改革から始めないとどうにもならない。そう思わんか？」

「……………」

「言うのは簡単だ。お前はあまりにこの世界を知らない。そんなお前に無責任に言われたくはない。判ったか」

「……………」

「まあ、今後の検討材料のひとつに入れてもいいかもしれんが。

さて、疑問も解決したことだし、いい加減、この場の検証でもするか」

言って陛下は、少し落ち込んでしまった私の前のめりになってしまっている体勢を、脇の下に手を入れるような形で起こして、彼自身も座り直し姿勢を正した。

∴ 35 (後書き)

ミノキシジル五パーセント製剤 ∴ RiUP X5 の事

大正製薬 [http://www.taisho.co](http://www.taisho.co.jp/)

o.jp/

「処、女なんで、す」

「……………それが？」

「その銀、貨三枚に、は、その代、金が含まれ……………ていま、せん」
「何？」

「だが、ら含まれ、てませ……………ん」

本当は衣食住の面倒を見てもらっているから差っ引いたんだけどね！ でも今日は本当に何度もこのドS男に泣かされたんだもん！
もうこうなったら、かなり強気で上乘せしてやるんだから！ け
け……………。

私のデカケツに悪魔の尻尾が生えた瞬間だった。

私は涙が止まらなくて仕方ないといった感じで、陛下の前で大袈裟に顔を覆った。

勿論、嗚咽も漏らすオプション付きでだよ！

「言いま、したよ……………ね？ 向こ、うの世、界では世界的規……………模
で競売にかけ、られる程、処女に、は価値があ……………ると」
「……………」

「なの……………に銀貨三、枚は安……………すぎま、す。それって、私の価
値がその程度だって……………う証で、向こ、うの世界……………では屈辱を
意、味します。親……………が知った、ら憤死もので、す。本、当に一家
心中……………を図る程で、すよ？」

陛下が溜息をついた。

「……………幾らだ」

来たあああ！ よっしやああ！ やつべえ、超ちよるい！ 私、
この世界で詐欺師にな・れ・る・か・も！ しかも身近に詐欺りが
いがある超金持ちが居るしね！ んでもって、良心も全く痛まない
人間がだよ！ ひゃっほう！ いえーい！ なんつー幸運！

くそーこれが日本で手に入れた金蔓だったら、私、アニメグッズ
専門店を買収して、大好き出版社と大手本屋の株を買って占めるのに！

んで、『愛と絶望の黒薔薇魔帝国物語』を出しているソフト会社
の株も買い占めちゃったりして、社長に就任するよ、私！ んでん

で、『パーシヴァル様と私の熱く甘い愛の物語』無人島七日間遭難編』っていう私脚本のソフトを発売するからね！ 他の忌々しいパーシヴァル様ファンに、私と彼との熱々で甘々な愛を見せつけるんだから！

私は陛下の気を更に滅入らせる為に嗚咽のグレードを上げた。

「……………言ったら……………くれ、るんです、か？」

「ああ。幾らだ。早く申せ」

「……………金貨五十枚」

くすっ！ この際、ダメもとで超強気にいつてみようっ！ おいっす！

「何？」

「金貨五十枚です」

「……………強気に出たな、小娘」

「……………ふふ。私の処女の秘密の花園に顔を埋めた第一号ですからね、陛下は。愛しのパーシヴァル様献上前の、ですよ？ このくらい当たり前だと思いませんか？」

私は顔を覆っていた手を外し、にやりとした嫌な笑みを陛下に向けた。

一方陛下は、なにやら苦虫を噛み潰したような顔をしている。

どうも、してやられた、といった感じだ。

「ほう？ ではその金額を支払えばお前はもう今回の事を二度と口には乗せないな？」

陛下は吐き捨てるように言った。

「ええ、それは約束しますよ、御代官様」

「おだいかん？ いや、いい。なんでもない。……………判った。では支払おう。だが、金貨五十枚ではない」

「え」

えー！ なんだよ陛下！ ケチケチケチンボ！ いいじゃん、お金持ちなんだから、金貨五十枚くらい！ ……あれ、ノリで言ってみただけ、金貨五十枚って日本円で幾らだっけ？ ……えっと、私

的レートで金貨一枚が十万円だから、……………お、五百万だ！

あ、それはナイナイ！ 流石に私も思うよ、たかが秘密の花園に顔をつけただけで五百万はナイってさ！ ごめん、陛下、ちよっと間違えた！

「あ、陛下、金貨五十枚じゃな」

「金貨五千枚を支払おう」

「は？」

「金貨五千だ。その代わりに余の前で二度と今回の事は話題にするな。不愉快だ」

「え、ちよ、ちよつとまつて、陛下！」

き、金貨五千枚ってあんた！ 金貨五千っていったら、私的レートで五億円だよ？！

パパが三十五年ローン組んで手に入れた日本の我が家の購入額なんか比較にならないくらいに高額だよ？！ 金利分を含めてもね！ しかもお釣りがたくさん返ってきちゃうんだから！ というか何軒買えるんだよの世界だよ？！ パパが東京タワーのてっぺんで逆立ちしてもロープ無しでバンジージャンプしても一生稼げない金額だから！

「ややつ、陛下の金銭感覚に私ついていけないかも！

「なんだ、足りないか？」

陛下の紫の瞳が細まった。

「……………いえ、滅相もございません」

「なれば、この件はここで終わりにしてくれ。うんざりだ。金は明日……………いや、もう今日になるのか、早いうちにお前の手元に届くように命じておく。それで暫く適当に遊んでいればいい」

え、五億円で？

う……………うわあ、すげー！ こういう世界ってあるんだ！ 私、はじめて知ったよ！ 一葉ちゃんひとりに泣かされ続けてきた私のこれまでの人生ってなんだったの？！ いやつ、なんかバイ方向に価値観が変わりそう！ 日本にももしも戻る事ができた時、私、この

金銭感覚もとに戻るかな？！ 一度上昇した感覚は、なかなか戻せないってよく言うよね？！ やばいなあ。しまったなあ。パパの給料、支給で三十五万円なんだけどなあ。あ、賞与はいつも基本給ひと月分ね！ 景気とか関係ないよ！ パパの年収、五百万いってないから！ 部下も居ないくせに中途半端に課長代理なんて役職就いちやったから残業代が出ないんだよね！ パパ、家で泣いてたんだから！ 背中丸めてね！

「……諭吉、五億人かあ」

うひゃ！ 何その人数！ 日本の人口よりも全然多いよ！ いやーん、ゆきちー！ もうそんな大勢の諭吉に愛のチューしたいよ！ つか一緒に寝たい！

「ゆきち？ そういえば先程も言っていたな」

「ああ、諭吉とは日本のお金に描かれている福沢諭吉っていう男の人の事です。そのお金はトリエスという銀貨一枚分ですかね。金貨だと諭吉十人分」

「ほう？ そのゆきちの上の貨幣は何が描かれているんだ？」

「え、いや諭吉が日本の最高紙幣ですよ？ その上はありません」

「紙幣？ 紙なのか、金が」

「はい。いつの頃からか」

「そうか」

そこで陛下も私も一旦言葉を切った。

なんだか疲れた、妙に。

まあ、陛下もさつきから疲れた、疲れた言っているから、かなりの疲労度なんだろうけどね。

「ねえ、陛下」

「なんだ」

「ここ何処ですか？ 珍獣部屋の真下？」

陛下が少し身じろぎした。

彼の下腹部の上に座っている私の位置を少しだけずらすように座りなおしている。

たぶん一ヶ所に重さが加わり続けているのが辛いんだろう。
私って重いからね！

「落下したんだから真下なんだろうな。……しかし、おかしいんだ」
陛下は考えるように眉根を寄せた。

「何がですか？」

「珍獣部屋の下に、このような空間はありえない」

「え、だって現にあるじゃないですか」

「珍獣部屋の下は余の執務室や会議室、応接室など、まあ、外……
といっても本当の外ではないぞ？ あの区域の外に出る必要のない
執務の際に使う部屋があるんだが、それらの部屋と部屋の間、こ
の空間に落下できる程の隙間があったかな。 無いと思うんだ
が……。いや無かった」

「……でも落ちたし」

「そうなんだ。それが判らん、余には」

うーんと考え続けている陛下の髪が乱れていたので、私は彼の髪
をちょいちょいと整えてあげた。

陛下も大人しく髪を弄られている。

彼はそんな事よりも思考の淵に沈んでいるのを選んだようだった。

「でもでも、」

「なんだ」

「珍獣部屋から落ちる時、床に開いた穴って三、四メートルくらい
ありませんでした？」

「めーとる？」

「ああ、そうか。向こうの長さの単位なんですけど、えっと、少な
くとも今私たちが居る空間よりも広かったっていう意味です」

「そうだな。蹴り飛ばぼーと思うくらいに長さは確かにあった。だが
上を見る限り、あの穴は相当遠いよな？」

私は陛下の言葉に、上を見上げた。

見上げた落下開始地点らしき穴は一辺三、四メートルにしてはか
なり小さい。

「遠いですね……。薄っすら明かりは見えますけど、小さいなあ。

……私達、よくこの距離を落下して無事でいられたね？」

「だろっ？　いくら絨毯が緩衝材になったとしてもだ」

「陛下、珍獣部屋って何階ですか？」

「三階だ」

「そうですか。これって三階分の高さですかね？」

「……まだあるな」

「やっぱり？」

「ああ」

「じゃ、お城の地下って事？」

「……地下な。城の地下……確かにありはするぞ？　地下通路は。

いろいろな理由でな？　だが余の記憶ではこの位置には無いはずなんだが……」

「陛下の天才的頭脳でも記憶にないんですか……。じゃあ、伝わっていない秘密の地下空間だったり？」

「……この狭い空間がか？　何のために？」

「え、ゴミ捨て場とか」

「阿呆か」

「じゃあ、この空間の壁面にでも地下通路に通じている穴が開いているかもしれないですよ！」

絨毯で半ば包まれているから全く見えないけどね、壁面が！

「まさか」

「もう！　調べもしないのに、なに決めつけてるんですか！」

「よい、小娘。このままこの場に居れば、そのうち助けがくるだろうよ。落ちる時、お前は大きな悲鳴をあげていたしな？」

私は陛下のその言葉に疑問の視線を投げた。

「でもさ、確かに朝になればリーザ達が気づいて助けを呼んでくれるかもしれないですけど、少なくとも今は来る気配がくないですか？」

「……………」

「陛下だつて、本当は気づいているんでしょう？ 私達、結構な時間をご無駄話してますよね？」

「……しかしだな、部屋の外には衛兵が控えているはずで、その他にも余の護衛もな？」

「それにしても遅いですよね？」

「……………」

「へ・い・か！ 面倒がらずにちよつとは調べましょうよ！ とりあえず私がこの絨毯をちよつとずらして壁面をみてみます！」

陛下が疲れたように目を伏せて、絨毯越しの後ろの壁面に頭をコツリとつけた。

「……今日は散々な日だな」

「ちよつと、若いのに何を萎れているんですか！」

「お前にとつて余はオヤジなんだろう？ もうよい、それで」

おいおいおい、貴様、マジでなに投げ遣りになっているんだよ！
本気でオ・ヤ・ジ認定下すからな？！ 一度下した認定はちよつとやそつとでは覆せないんだからね！

私は陛下の肩をぽんと叩いた。

勿論、気合いを入れる為にだよ！

「陛下、壁面を調べて何もなければ此処で大人しく朝まで助けを待ちましょう！ でもですね、絨毯を捲つてもしも穴があつて通路かなにかに繋がっているのなら進んでみましょうよ！ もしかしたらお城の牢獄にでも繋がつていて脱出できるかもしれないじゃないですか！」

「牢獄に？ まさか。そんな事がある訳ないだろう」

それにこの区域の近くに牢獄は無いぞ、と陛下は面倒臭そうに付け足す。

「じゃあ、王都への脱出通路でも後宮でもどつちでもいいですよ！ とにかくこの狭い空間から出られればいいじゃないですか！ だって、陛下、この臭い絨毯と朝まで一緒に居るつもりですか？！ 私は嫌ですよ！ 今までのつごく我慢してましたけどね！」

「ちよつと！ …… もういいです！ 私が調べますから、そこで大人しく萎れていて下さい！」

ふんだ、ばーか！ お・と・し・よ・り！ 貴様にオヤジなんて生温い！ もう百寿を迎えたジーサン認定してやる！

私は頭にきながらも何とか足を踏ん張る場所を見つけて半ば爪先立ちになりながら、その狭い空間の中で立ち上がった。

両手を絨毯越しの壁につき、なんとか体勢を保ってみる。

とりあえず絨毯を捲らなければ何も判らなそうだ。

絨毯は私達を真ん中に、半ば包むようにして壁に沿ってあった。珍獣部屋は二十畳くらいあったから、その分の大きさが今は仇となっている。

絨毯の端を捕まえたくてジャンプしたが、してしまったら足元で萎れている年寄り陛下を踏みつぶす事になるし、そもそも狭すぎて不可能だ。

どうするべきか、ちょっと考えだした私の足元の方から陛下の声が聞こえた。

「この狭い空間でこの大きさのものをどうこうするのは無理だ。切るぞ、小娘」

私は下を向いた。

陛下は私の方へ顔を向けながら上着の留め金の下の方を幾つか外しだしている。

「何しているんですか、陛下？ え、ストリップ？ ここで？」
脱いでも観客は私しか居ないよ？ 別に私、陛下のヌードは見たくないんだけど……。

「すとりっぷ？ ……意味を聞かない方がよい言葉なんだろうな」
陛下はやはり疲れたように息をつくとき、高価そうな上着の中の下の方に手を入れた。

そして二本の細身の短剣をおもむろに取り出す。

短剣といってもそれひとつで人を殺傷するだけが目的のような剣ではなく、日本でいうタガールのようなものを、とにかくスレンダーにしたような感じのものだった。

二本の短剣はそれぞれ長さが違っていた。

ひとつは三十センチくらいで、もうひとつは二十センチくらいだ。柄や鞘こそ金と銀を使用してそんな色合いだったが、余計な装飾は一切無く、実用的な事だけを考えられて作られた剣なのが判る物騒な代物だ。

陛下はその短剣の短い方を私に渡してきた。

「持っている、小娘」

「陛下、この短剣、どこから出したんですか？」

え、別次元のポケット？

受け取った私は軽く驚いた。剣は見た目に反し、ズシリとした重さを手に伝える。

「見ていなかったのか？」

「……だって、私ってば、今日は散々陛下の事を触りまくっていたような気が？」

上も下も急所もね！

「……そうだな」

「なのに気づきませんでしたよ?! 陛下が短剣を二本も隠し持っていたの!」

「隠し持っていた訳ではないがな。お前が単に馬鹿なだけだろう？」

「馬鹿ってまた言った!」

「馬鹿に馬鹿と言って何が悪い? それより、壁面を見るんだろう? 絨毯を切るぞ。小娘はそちらの方から切れ」

「了解!」

私は折角陛下がやる気になってくれたので、馬鹿とか言われたけど、細かい事は水に流す事にした。

偉いね、私! 大人だよ!

陛下に渡された短剣の鞘を取る。

現れた刀身は少しの明かりしかない薄暗い空間であっても、触れば皮膚が簡単に切れそうなのが判る程の鋭い輝きを見せていた。

「うわ……切れそうだなあ」

「切れなければ役に立たんだろう?」

「そうですけど……」

「早くそちら側を切れ。こちらは何も無いな。ただの壁だ。」

……前の方も切ってみるか」

私は陛下のその言葉を聞いて、怖いくらいに切れそうな短剣を頭の高さから下に向かって動かした。

するとたいして力を入れていないのにも関わらず、絨毯が面白いくらいによく切れる。

こえーよ、この短剣！ やや、私ってば、あまり陛下を怒らせない方がもしかしていいのかな？！ ある時、彼の逆鱗に触れてざっくり切られる可能性あり？！ うわっ、怖すぎ！ 理不尽すぎ！ 凶器を持ち歩いている極悪魔王に逆らわない方がいいね！ 気をつけようっ！

「あ」

「どうした？」

陛下が私の足元で身動きするのが判った。

ナイトドレスがその動きに合わせて変な方向へ捻じれる。

「……あります、陛下」

「本当か？」

そんな馬鹿なことが、と呟きながら陛下が絨毯越しに壁に手を付き、私が見す方向へ無理矢理姿勢を変えた。

「陛下、ナイトドレスが捲れますって！」

「今更だ。それにお前はかぼちゃぱんつを見られても平気なのだろう？ 気にするな」

この男！ ああ、記憶力のいい人間って本当にタチ悪すぎだよ！ 私は憤慨しながらも、陛下の視界を遮らないようにナイトドレスを腰まで上げた。

確かにカボチャパンツは私にとって短パンクラスな代物なのだ。

「……あるな」

「でしよう？」

切り裂いた絨毯を捲りながら見遣った陛下と私の目の前には、一メートル四方の穴がぽっかりと開いていた。

穴こそ一メートル四方であつたが、その先の縦幅は低くは無さそうで、少なくとも陛下が立って歩いてもまだ余裕があるように見え

た。

「……通路のようだが奥が深そうだ。中はここまで狭くは無さそう

だが、見える範囲では一本道のようだな」

「行ってみましようよ、とりあえず」

「……どうするかな」

「え、なに迷っているんですか？ 道に迷いそうとか？ でもでも陛下なら例え複雑に右左折しても大丈夫でしょう？」

素晴らしい記憶力をお持ちだしね？

「それは大丈夫なんだが、」

あ、否定はしない訳ね。

「何故、通路全体が仄かに明るいんだ？ 光源は何だ」

「蛍光塗料でも塗っているんじゃないですか？」

「けいこう塗料？」

「ああ、うーん……光る虫を原料とするような液体を塗っていると」

「何の為に？」

「え、それは通る人間に通路が見えるようにする為に決まっているじゃないですか」

「目的は？」

「知りませんよ、そんな事！ とにかく行ってみましょうよ！」

「……あやしくないか？」

「陛下のお城の地下の事でしよう？ 不明点を解決しておかなくて

どうするんですか！ ささ、陛下！ 行きましようよ！ ほらほら

！ 私が先に行きますから、陛下は後からついてきて下さい！ 危ないですからね！」

「いや、行くのなら余が先に行こう」

陛下が私の足元をくぐるような形で前に踏み出した。

「え、だって陛下、国王だし、危険な目にあったらダメでしょう？」

「それでお前の背に隠れていると？ どちらにせよ前方から何かあった場合、お前では瞬殺だ。結局、対処する順番が余にまわってくるのなら、はじめから余が対応した方がよいだろう？ 効率の問題だな」

「あーそうですか」

「……行くか」

「はいはい」

言って私は邪魔なナイトドレスを胸下まで引き上げて、団子にして結んだ。

よし、完璧！ これで這いつくばっても大丈夫だよ！ 陸上自衛隊の採用試験にも余裕で通りそう！

匍匐（ほふく）前進準備よ し！ 金髪紫瞳陸士長、準備ヨシであります！ いつでも進軍可能であります！ 昼食は海軍カレーでありますか！ え、所属が違う？！ そんな！ 私三等陸士は海軍カレーが食べたくて入隊したのであります！ トリエス王国国王陛下鬼畜陸士長に質問であります！ 日本国の自衛隊に陛下陸士長は入隊出来るのでありますか！ え、採用条件として日本国籍を有する者という一文がありますか？！ ス……パイ発見であります！ 防衛大臣殿！ いや、最高指揮監督権を有する内閣総理大臣殿に報告した方がよいでありますか？！ ここに金髪紫瞳のスパイが日本国自衛隊に潜り込んでいるでありますよ！ トリエス王国という異世界の国王陛下が紛れ込んでいるでありますよ！

そんな私の行動を、通路に踏み込もうとしていた陛下が後ろを振り返って見ていた。

どうやら私がちゃんとしてくるのか確認の為に振り返ったようだった。

「……小娘、先程から気になっていたんだが、上の下着はどうした？」

「え、上の下着？ ああ、ブラの事ですか？」

「ぶら？」

「陛下のいう上の下着の事です。付けてませんよ、あんなの」

「何故？」

「だってさあ、陛下。日本から付けてきたブラ、いい加減洗濯しないと流石に汚いし、かといってトリエス王国製のブラさ、リーザに

付け方聞きましたけど、付ける気全く起きませんよ。あんなの！」

「……そうだとしても、お前、ずっと透けているんだがな。いつ言おうかと思っていたが」

「陛下のエッチ！ ドスケベ！ エロオヤジ！」

「……っ」

「でもまあいいです」

「何？ いいのか、お前は?!」

「はい。だって私、陛下基準的には貧乳なんですよ？」

「……ああ」

「だったらいいです。私だったら貧乳に欲情なんてしませんし」

「………そういう問題か？」

「はい。他になんの問題か？」

「いや、もうよい。お前とはやはり感覚が違うようだ」

「そうですね、私もそう思います」

「……行くぞ」

「はい！ ではではレッツラゴーですよ！ きゃーなんかドキドキしますね！ 昔ね、日本のテレビというもので放送されていた番組で、ジャングルを探検するのがあったんですよ！ 川に指を突っ込めば不自然にピラニアっていう肉を食べる魚が食いついてきたり、ジャングルを歩けばタランチュラっていう大きな蜘蛛がやつぱり不自然に降ってきたり！ いま思えば超ヤラセ番組以外の何物でもなかったんですけどね？ でもその馬鹿馬鹿しさが妙に面白かったですよねー！」

「お前の世界の話はいい。少し黙れ。音も貴重な危険予測だという事を、その軽い頭でも理解してくれ」

「そんな会話をしながら、陛下と私はアヤシイ地下通路に足を踏み入れた。」

「トリエス国王探険隊発足の瞬間だった。」

「まあ、メンバーは陛下と私の二名だけなんだけどね。」

陛下と私が足を踏み入れた謎の通路は、縦幅は陛下の背丈より三十センチほど高く、横幅は私が両手を伸ばして指先が辛うじて届くといった程度にはあるものだった。

壁と床の材質は石のようだ。

なんの石だかは異世界人の私には判らないが、ざらつく肌触りの石が適当な大きさに組まれている。

床は石畳のようになっていて、私は石のひやりとする温度を素足に感じながら、ひたひたと陛下の後を躡が行き届いた飼い犬のように大人しくついていった。

この穴に落ちる前まで陛下のベッドで寝ていた私は、当然靴など履いてなく、歩く石畳が学校の校庭のように細かい石だらけでない事に安堵の息をつく。

私は歩きながら陛下から渡された細身の短剣を、胸下でナイトドレスを団子にした結び目部分に差した。

周囲をよく観察してみると地下通路は、異世界日本人の私的には黄緑色の蛍光塗料をちよつと塗ってみたよ、といった感じの色合いに仄かに光っていた。

最近どこかで見た事がある光り方だなと思って、あまり活発的に働いてくれない脳ミソ内を検索すると、ひとつだけ思い当たる。

「あ、」

私の小さい声に二歩前に行く陛下が素早く反応した。

「どうした」

「この黄緑色の光り方、どこかで見た事があると思ったら、ありません！　すごい最近！」

「どこだ？」

「レバーです！」

「ねばー？　お前には光って見えたのか？」

「はい」

「そういう事は早く言え」

やっていられないといった様子でそう言うと、陛下は立ち止り、私の方へ振り返った。

「戻るか」

「え、なんでですか？」

「あやしすぎるだろう、やはり。戻って朝まで先程の場所で救助を待つべきだ」

言って陛下は左手に持っていた鞘をしたままの短剣を、危険極まりない事に曲芸師のようにくるくると手の内で回す。

それはまるで手持無沙汰だから授業中にシャーペンで指で回しているよ！　といった感じのお手軽さだった。

当然、私はつつこんだよ！

「危ないですよ！　陛下！」

「何がだ」

「それです！　その左手！　刃物をシャーペンみたいに回さないで下さいよ！」

「しゃーペン？」

「字を書く羽ペンみたいな用途のものですよ！　なんで回すんですか？！　短剣を！　それが手から抜けて、その勢いで後ろにいる私に刺さったら、どう責任を取ってくれるんです！」

陛下の左手の短剣の回る速度が増した。

この男！　嫌がらせか？！　嫌がらせなんだな？！　今、私が指摘してから明らかに回転速度と回転幅が大きくなったよね？！

お前は何か！　嫌だと言われたり、注意された事をワザとやっち

やったりする小学生のクソガキ男子と同レベルなのか！

二十代半ばの国王陛下のくせに！

トリエス王国国民よ！ もうね、やっちゃっていよ！ 革命をね！ 政治体制がガラリと変わっちゃうくらい思いつきりやっちゃっていいから！ この私が許す！ この目の前のクソガキ男を恥辱屈辱が渦巻く性に飢えた猛者達が捕えられている牢獄に送っちゃってよ！

「余がそのようなへまをすることも思うか？」

「へまをすとかしないとかそういう問題じゃないじゃないですか！ この世の中に絶対って事はないでしょう？！ どんな人でも失敗する確率はあるじゃないですか！」

「そうか？」

貴様！ どんだけ自信過剰なんだよ！ その自信はどこから来るんだ？！ 国王だからか？！ いや、もしかして、その顔に自信があるからか？！ だったら許さん！ そんな理由なら、この私がその高すぎる鼻っ柱を叩き折ってくれる！ そう！ 貴様の両頬に渦巻きでも書いてね！

「まあ、万が一失敗したとしても、責任は取れるから心配はするな」「どういう事ですか？」

私は意味が判らなくて眉をひそめる。

陛下が短剣を回すのをふと止めて、目にも留まらぬといった素早い動きで鞘から短剣を引き抜き、私の首元に突きつけた。

「え……？」

私は心臓を跳ねあげる。

剣なんてこれまでの人生で突きつけられた事が無かったから、驚きすぎて体が竦んでしまった。

自分の意思に反して体の全ての動きが止まる。

目を見開いて陛下の顔を見ると、彼は何が楽しいのか、アメジストのような瞳を細めて、超絶美形顔に薄い笑みを浮かべていた。

「お前が体のどこかを損なったら、不自由なく生活できるよう十分

な金と人をつけよう」

突きつけられた短剣の研ぎ澄まされた刃の腹の部分で、彼は私の顎を上げた。

「そしてもし、お前がその命を落とす事となったら、そうだな、この世界にお前の身内は居ないから賠償金は渡せないが、立派な墓を建ててやる。お前が望むなら王族並みのものでもよいぞ？」その陛下のあんまりな言い様に、もともとあまり容量の無い私の堪忍袋の緒が切れた。

ぶちぶちっとした音がしましたよ！ 刃を向けられる恐怖よりも、怒りの方が勝りました、今ね！

私は、すつと息を吸った。

突きつけられた刃なんて、もう怖くない！

私が顔と首を刃を突きつけている陛下に向かって勢いよく近づけると、彼は慌ててそれを引っ込めた。

「危ないだろう？！ 小娘！」

そう思うなら突きつけるなっ！ アホタレが！

私は左の手の平を、陛下の鳩尾に添えた。

陛下の腹に力が入る。

どうやら身構えた模様だ。

「疾きこと風の如く、」

「何？」

陛下が怪訝そうな表情を見せ、危ないと思ったのか短剣を鞘に納めた。

鳩尾に添えた私の左手を警戒してか、彼の腹にはまだ力が入ったままだ。

「徐（しず）かなること林の如く、」

私は左手を動かし、陛下の鳩尾を意味深に円を描くように撫でた。

陛下は私の左手を物凄く警戒している。

彼は短剣を持っていない方の手で、私の左手首を掴んだ。

「何をするつもりだ、小娘」

そんな彼の言葉を勿論無視し、私は淡々と続きの言葉を紡いだ。

「侵し掠めること火の如く、」

そこまで言ってから、私は左手を力任せに下の方へ、つまり陛下の急所の方へ動かしてみせた。

「止める、小娘！」

陛下が思いつきり嫌そうな顔をして声を荒げた。

まあ、当然であると言えよう。

落下する少し前に彼は私に金的攻撃二連発をくらっているのだからね！ 私が手を下に持つていけば当然警戒するよね！ 馬鹿でもね！

でもね、へ・い・か！ 甘いよ！ 甘々だよ！ 激甘だからね！ 私は陛下のような、極上の真綿で包まれたエメラルド箱入りお坊ちゃまじゃないからね！

覚悟だ、陛下め！

私は陛下に掴まれている左手を渾身の力を込めて彼の急所に向かわせる。

陛下が注意をそれに向け、手を掴む力が増して腰が引き気味になる。

それによつて彼は若干前屈みになり、姿勢が低くなった。

そう！ もちろんコレはフェイントだよ！ 当然ね！

「動かざること山の如しっ！」

口にした言葉とは正反対の攻撃を、左手に陛下の注意を向けさせたまま、彼の超絶美形顔の中央に形よくおさまっている二つの穴へ、つまり鼻の穴に私は思いつきり右手の人差し指と中指を突っ込んだ。突っ込んだ時に、少々突き刺さったような感触がする。

あれ？

「っ！」

陛下が持つていた短剣を取り落とした。

落ちた短剣は石畳に跳ね、金属音を地下通路に盛大に響かせる。

彼は私の右手を力任せ振り払い、掴んでいた手を放して、半ばよ

るめく様に数歩後ろに下がった。

「な……何を、小娘！」

陛下は片手で鼻を押さえ、射殺さんがばかりに私を睨みつけた。その睨み攻撃に私は肩を竦めてみせるしかない。

「何って、風林火山？」

「何？」

「ふ・う・り・ん・か・ざ・ん！」

言っ私は右手をピースの形にして、人差し指と中指をにぎにぎさせながら、見せつけるように陛下の美形顔の前に出した。

「風林火山。南北朝時代の北畠顕家や戦国大名の武田信玄の軍旗に記されたものの通称ですよ。元は孫子から引用しているみたいです。ちなみに、それって日本の隣国中国の古い兵法書で意味は」
「それはいい。聞けば言いたい事は判る」

おお、流石天才だね！

そんな隙のない陛下の天才っぷりに関心しながらも私は、折角、武田信玄に一時期嵌って覚えた蘊蓄を披露出来ない事を非常に残念に思いながら、彼が落とした短剣を拾いあげた。

「意味、言いたかったなあ」

「それよりお前はまず余の質問に答えるべきだろう！」

「え？」

「余は今、何を、と聞いたんだが?!」

「だから風林火山だって言っただじやないですか！」

しつこいな！ 粘着男め！

私は陛下の短剣をバトンのようにくると回した。

「危ないだろう！」

「陛下だつてさっきやってたじやないですか！」

「余はいいが、お前はやるな！」

「どんな俺様男ですか！ 自己中も大概にしないと、陛下の尻穴に何かを突っ込みますよ?!」

「品の無い事を言っな！」

陛下が通路に響き渡るような怒鳴り声を上げた時である。

「……………」

「あ、陛下、鼻血？」

手で鼻を押さえていた陛下の顎下から、つと血が流れ落ちた。

ぼたりと一滴二滴石畳に垂れ落ちた時点で、私が初めて聞く陛下のそれこそ品の無い言葉が耳に入った。

「……………」

王国の第一王子として生まれ、大事に大切に育てられ、八歳で国王になった彼でもそんな品の無い言葉を使っただなあ、と妙に感心してから、私は陛下の短剣を鞘から抜いた。

それを目に留め、陛下が紫の瞳を細める。

少し警戒したようだった。

「陛下、下、あまり汚れてないようだから座って下さい。で、少し俯いて」

「……………」

「ほら、早く」

彼はやはり私に向かって若干の警戒の色を見せながらも、垂れ落ちた血を避け、通路の壁際に静かに腰を下ろした。

それを確認してから、私は胸下でナイトドレスを団子にした結び目の端を陛下の短剣で切り取る。

「小娘？」

私は陛下の傍にしゃがんだ。

「手、退けてください、陛下。血を拭くから」

「……………」

「そのままにしておけないでしょう？ ほら早く！」

「拭くものを持っていくからよい」

「もうナイトドレス切っちゃいましたよ、私」

言って私は短剣を下に置き、なかなか退かさない陛下の手を無理矢理顔から引きはがして、顎下の方から拭うようにして鼻を押さえ
た。

切り取ったナイトドレスを陛下の鼻の穴に突っ込むようにして左
手で押さえ、右手で彼の小鼻の少し上を指で摘んで圧迫する。

「少し静かにしていれば血が止まると思いますから、このままでい
てください。あ、鼻血は飲んだらだめですよ？ 気分が悪くなるか
もしれませんからね」

「……………」

「陛下、鼻血を出した経験は？」

「……………」

彼は鼻を私に任せたまま、疲れたように髪を掻きあげた。

小さい溜息までついている。

「でしょうね」

陛下つてば、過去は王子様で今は王様だしね。しかも御伽の国の
メルヘン王子だしね。メルヘン王子に鼻血はナイよね。私が許して
もメルヘン所属の妖精たちが許さないとと思うよ。絶対にね！

「安心していいですよ？ 鼻血の処置方法としてはあってますから」
私はしゃがんでいるのも疲れたので、手を動かさないようにして
陛下の傍に座った。

「うちの妹、小さい頃は鼻血が出やすい体質だったんですよ。今
は平気になったんですけど。だから私、鼻血の処置は御手の物なん
です」

私は突っ込んだ布を一回取って、汚れた方を手の内側にもってい
き、綺麗な方を陛下の鼻にまた入れた。

「まあ、今回の鼻血の原因は、私がさつき突き刺しちゃったからで

すから、きちんと責任を持って処置させて頂きます」

「……………」

「爪、ちよっと伸びてたの忘れてました」

「……………」

「ねえ、陛下」

「……………なんだ」

「引き返そうなんて言わないで先に進みましょうよ」

「何故？」

「何故って……………言われても」

「元の世界に帰る手段があるかもしれないからか？」

「……………」

「あると思うのか、お前は。この城の大抵の事を知っている余が知らないのに？」

「でも、少しの可能性にかけた方がいいじゃないですか。それに陛下、レバーやこの通路のこと説明できるんですか？」

私は陛下の鼻に押さえ入っていた布を取って、彼の鼻の具合を見た。

血はどうやら止まったようだった。が、顔に少し跡が残ってしまっている。

布を水で湿らせて拭ってやりたいところだが肝心の水が無い。

だがしかし。

……………陛下の超絶美形顔に血の跡は似合わないなあ。うーん、やっちゃっていいかな？ 陛下、嫌がりそうだけど仕方ないよね？ だって、本気で陛下の顔に鼻血の跡は似合わないだもん！ なんかね、私の美意識が拒絶するんだよね！ 私ってばさ、基本的に乙女ゲー崇拜者なだけに、美しいものが汚れていたり傷ついているのが許せないんだよね！ 美しいものには薔薇を、の世界なんだよ！

パーシヴァル様にこの世の美しい物の全てを捧げたいくらいにね！

勿論パーシヴァル様には私の初エッチも贈呈予定だよ！ 当然ね！ 返品不可だよ！

私は石畳の上に置いておいた陛下の短剣を再度手に取り、ナイトドレスの団子をそのままに、左脇側を掴んでハンカチサイズに切り取った。

陛下は私の手元をじっと見ている。

ナイトドレスを切り刻む事には特にコメントは無いようだった。

既にいるいろと諦めているのかもしれない。

「陛下、ごめんね？」

私は一応そう断ってから、彼の顔を両手で挟み、血痕の残る場所へと口をつけた。

「……………」

「……………」

陛下の顔に残る血の跡を辿るように私は舌を這わせた。

小動物が主人の顔を舐めるように、まずは鼻の下から上唇に届くまで。

布に唾をつけて拭おうかとも一瞬考えたが、流石に一国の国王にそれはないだろうと私なりに判断し、だったらと舐め取る事にしたのだ。

まあ、AとBがあって、どちらかというとなBの方がマシといった程度の差ではあっただけだね。

私は一旦口を離すと、手にしているナイトドレスの新しい切れ端で彼の鼻下を丁寧に拭いた。

いい具合に血の跡が落ちたのを確認し、今度は陛下の上唇から下唇を辿り、顎の下まで舌を這わせる。

顎下まで舐めて、私がまた切れ端で拭っている間、陛下は一言も発しなかった。

ただ大人しく、そして眉を少しだけ寄せて、拭っている私の顔をただ見ている。

今の彼の感情は読み取れない。

私はこの短期間で少しずつ気づいてきた事があって、そのひとつが彼のそんな表情だった。

陛下は偶に、ふとした時に感情を全く表さない顔をする。

表情が、というより陛下の澄んだ紫の瞳が本物の紫水晶になってしまったかのような目をするのだ。

私は溜息をつく。

「陛下、そんなに感情を無くすような顔をしないで下さいよ。私に顔を舐められて怒りたい気持ちは判りますけどね？ でも、血の跡、無くなりましたよ？ キレイになりました！」

見た感じはね！

私は彼の顔に血の跡が無くなったのを確認して、汚れてしまった切れ端を通路の隅に置いた。

「へ・い・か！ 何か言って下さいよ！ 文句は受け付けますよ？」

「……怒ってはいないが。ただ、」

「ただ何ですか？」

陛下はふと息をついた。

「お前の行動だけは予測がつかないな、と思っただけだな」

「そうですか？」

「ああ」

そう言って、陛下は立ち上がった。

途端、彼は左足が気になるのか、何度かとんとんと爪先を石畳に軽く叩く。

「……陛下、足、気になるんですか？」

「……………」

「ねえ、へ・い・か！」

「別に」

あ……この男は本当にさ。

私はなんだか面倒になってきてしまったが、気づいた事を無視するのは私の信条に反する事だったので、今度は先程手渡された短剣をナイトドレスの団子から引き抜いて鞘を抜いた。

そして団子を根元から切り取る。

これによって私の服装と云ったら、ノーブラすけすけミニミニキ

ヤミソールとカボチャパンツといったような出立ちになってしまったけれど、一緒に居るのは陛下だけだし、なんだかもうどうでも良くなっていた。

「ほら、陛下、もう一度座って下さいよ」

陛下が面倒そうな顔を見せ、私を見下ろした。

「何故？」

「痛いんですよ、足」

「余は別にと言ったが？」

「あまりウザイこと言っていると、殴りますよ、マジで」

疲れてるし、だんだん苛ついてきてるしね、私。

私は陛下の反応を無視して、がつつり切り取ったナイトドレスを、今度は縦に長く切り裂いていく。

「とにかく座って下さいよ。別に取って食う訳じゃないんですから」

言いながら切り取った布を縦に引き裂く作業を私が続けていると、先程の場所に陛下が腰を下ろした。

「いつから痛いんですか、足」

「落ちた時に痛めたようだ」

「何で早く言わないんですか。落ちた場所から二十分くらい、うーん、トリエスで言う……いいやもう、結構歩いてますよね？」

「言う程の事でもないだろう？ 歩けるのだしな」

それにお前に言ったところで、どうにもならないだろう、と彼は肩を竦めた。

私は縦に裂いた布の強度を確かめる為に、二、三度ビンと張ってから、陛下の靴と靴下らしきものを脱がし、左のズボンの裾を少しずつ捲くっていった。

「ところで陛下って落ちた時の記憶ってあるんですか？」

「いや。少し気を失っていたようだ。苦しくて気づいたらお前が上に乗っていた」

「そうですか。 あれ、陛下、」

「なんだ」

私は陛下の左足の脛のあたりまでズボンを捲くつていき、彼の足が少し顕わになると、ちよつと感動して陛下の脛を撫でてしまった。

「……小娘？」

「やや、ちよつと陛下！ 何ですか、この足！」

私の反応に、当然と言えば当然なのかもしれないが、陛下は怪訝そうな視線を向けてきた。

「何とは？」

「無いです！ いやっ、素晴らしい！」

「……無い？」

「脛毛ですよ、す・ね・げ！」

「……………」

「これ、剃っている訳じゃないですよ？！ ザラついてないし！
きゃあー！」

陛下の身が気持ち私から遠ざかったようだ。

彼は地下通路の壁面に背をぺったりと添わせている。

私は更に陛下の脛を撫でまわす。

「凄いなあ。流石、御伽の国のメルヘン王子！ 女々しくはないのに、嫌な男臭さが全く無いですよ、陛下って！」

「御伽の国のめるへん王子？」

陛下が疑問形を投げてきたが、感動中の私は当然全く聞いちゃいなかった。

脛を一通り撫でると、今度はアキレス腱から脹脛にかけて私は少し揉むような感じで撫で上げる。

「私的には多少ワイルド入っていた方が好みっちゃあ好みなんですけど、陛下の場合は、あれですね。剥製にして部屋に飾りたいって感じ？ フィギュア感覚ってどうか」

「……剥製の？」

「お、」

「……どうした」

「陛下ってば、足、ちょっと浮腫んでますね」

「そうか？」

「ええ。今日とか立ちっぱなしだったり、同じ姿勢ですっと居ました？」

「そうだな、謁見が長引いて同じ姿勢で座り続けてはいた」

「それですね」

私は言って、陛下の脹脛を軽く揉む。

「痛いですか？」

「少し」

「んー…、これ、明日にでもマッサージしてあげますよ。上手いんですよ、私！ よくママにやってあげてたから上達したんです！」
「まっさーじ？」

「はい。揉んだり、押したりする事なんですけど、足裏ツボ押しから、頭まで出来ますよ、私！ ま、期待してて下さい」

「……………」

私は更に陛下のズボンを捲くっていった。

「……………小娘、痛いのは足首なんだが」

「ま、ま、そう堅い事を言わずに！ おおう、陛下、膝も綺麗ですねー！ やっぱいい、この足、ウツトリだなあ」

「……………」

既に私は変態と化していた。が、そんな変態モードで感動中の私の目に、かなり不快なものが目に入る。

「……………あれ、何ですか、これ、陛下」

「なんだ」

「これです、これ！」

私はズボンを最大限に捲くりあげられる大腿の半ばまで上げ、陛下にその場所を指し示した。

私が彼に指をさした場所は、彼の膝後ろの少し上からズボンを捲り上げられない大腿後ろの上部にまで続いていと思われる醜い引き攣れた傷痕だった。

その傷痕は、陛下の綺麗な足には全くもって不似合い極まりないものだった。

引き攣れた傷痕は薄黒く変色し、彼の持つ本来の白い肌に不吉な影を落としている。

「ああ、それが」

陛下は特に気にしていないといった風に言葉を紡いだ。

「昔、まだ幼かった頃に刺客にやられた傷痕だ」

「は？ 刺客？ 幼かったって何歳の時ですか？」

「王になって直ぐだったから、八歳か」

「八歳児に向けて刺客を放った外道のアホタレが居るんですか！」
私の突然の怒りの叫びに、陛下が呆れた目を向けてきた。

「お前な。八歳児といっても王だぞ、トリエスの」

「何を言っているんですか！」

私の中で今までにないつてくらいな怒りの感情が瞬時に沸き上がり、陛下の足をつり掴んで、外道の鬼畜が八歳児につけた醜い傷痕の先を見ようと、ズボンを無理矢理にでも捲り上げようとした。

「小娘」

「許せない！」

「何？」

「ゆ・る・せ・な・いって言ってるんですよ！ 何処までですか、陛下！ この傷痕、何処まで続いているんですか？！」

ズボンを捲り上げ、顔を下から覗かせているのに、傷痕の終点が見えない。

「背中の中程までだ。逃げ切れなくて、背中から足まで切られたただけだ」

「だけって！」

「仕方ないだろう？ 己が未熟だっただけだ。避ける技量も、追いつ返す技量も、その時、護衛を近くに置いておかなかつた判断も、全て己の未熟さ故の失態だ」

よく命が助かったと今でも思う、と陛下は淡々と続けた。

「未熟って！ 八歳児じゃないですか！ 天才だろうが王だろうが、陛下はその時、八歳児に過ぎなかつたんですよ！」

「年は関係ない。王は王でしかない、小娘」

「っ！」

私は怒りに震えながらも捲くついていた陛下のズボンを少しずつ下げ始めた。

「……何で傷痕、薄黒いんですか？」

「剣に毒が塗ってあった。だから間抜けにもその刺客は余に止めを

刺さずに去っていき、余はぎりぎりのところで助かった」

「幼い王を放っておいて、護衛は何をしていたんですか？」

「いろいろあった、あの時は。まだ周囲は混乱していて余の手駒は少なかつた。その隙を突かれた」

「……誰なんですか、八歳児に刺客を放った鬼畜野郎は」

陛下は呆れたように息をついた。

「聞いてどうする？」

「聞いてみただけです」

「証拠はない。だが予想はついている。 トリエスの南西にガ

ルダトイア神王国という古い国がある。その王だろう」

「ガル……？ え？」

「ガルダトイア神王国。大陸最古の歴史だけは長い国だ」

「どのくらいですか？」

「どのくらいとは？」

「国の規模です」

私は脹脛の半ばまでズボンを下げ終わると、ナイトドレスを縦に裂いた布を、まず踝から拳ひとつほど上に離れた場所にテーピングをするようにくるくると巻きだした。

「大陸にある国々の中では中の上といったところかな」

「私つてば自分の居る場所について何にも聞いていなかったような気がするんですけど、トリエスは、陛下」

「上だ」

「上？ 上の？」

「人によって見方は違うだろうが、少なくとも上の下では無いだろうな」

「え」

私は思わず手を止めてしまった。

ちよつと驚いちゃったよ、今！

陛下つてば、今、なんて言ったの?! 上の下じゃない? え、それつて? そしたらもう、上の中、上の上しか残ってないじゃない

い！

「なんだ」

「陛下って、大国の王様だったんですか？」

「何を今更」

「だって、誰もトリエスが大国だって言っただけですよ？！」

「それはお前が聞かなかつたからだろう？ 普通、聞かれもしないのに、この国は大国ですなどと言うと思うか？」

「え、まあ、それはそうですね……、でも、陛下ってばひ弱っ子じゃないですか！」

「それは関係ないだろう！ そもそも今朝からひ弱っ子とはなんだ、小娘！」

「ひ弱っ子はひ弱っ子ですよ！ というか、それはいいとしてですね、陛下、」

私は脹脛の部分を捲き終えてきつちり結ぶと、縦に裂いた布をもう一本手に取って暫し悩んだ末に、今度は既に捲き終わった部分を利用して、土踏まずに引っかけるようにして縦方向に何とか捲けるよう努力した。

テーピングテープじゃないから、かなり厳しいものがあつたが、とりあえずこれから歩くにあたって少しでも痛みを軽減してあげたかつた。

だって私ってば、地下通路の先に進んでみたいっていう自分の望みもあるからさ。

頑張っちゃうよ、私！ テーピングもどきをね！

「陛下の国が大国なら、そんな中の上のただ古い国なんて戦争でも仕掛けるか、けし掛けるかしたり、大国主義振りかざして周辺の国々を巻き込んで、経済制裁でも発動させて滅ぼしちゃえばいいのに」「簡単に言うがな、そううまくはいかない」

「なんでですか？」

「向こうには長い歴史と伝統と神話性とやらがあつてな。余から見れば、確実に衰退の道を辿っている国でしかないが、ガルダトイア

に続く歴史を持つ国々にとっては、トリエスこそが滅ぶべき国だと考える」

「よく判りません」

「まだ若いんだ、この大陸の中でトリエスという国は」

私は縦方向に捲いていた布を結ぶと、今度は足首を補強するように布を巻きつけていく。

きつく捲きつける事に痛いかもしれないと思って陛下の顔を見ると、彼は平気だ、といった感じで頷いてみせた。

「それって僻みですかね」

「僻みな。どうかな」

「僻み以外の何物でもないじゃないですか！ あれですよ、あれ。

最近生まれた若造が急激に成長して、あれよあれよと自分を追いこしていつちゃった事に対する、狭量なオヤジたちの僻みですよ。自分たちは与えられた物の上に胡坐を搔いてただけで、何の努力もしていなかった無能人間の癖に、格下だと思っていた若造の成長が羨ましくて腹立たしくて妬ましくって仕方ないんです。だから出る杭は打ってやろうと、醜くも浅ましい低能な思考のもとに、陛下に刺客とか送っちゃったりしてるんですよ！ うわ、最悪！ そういうの大っ嫌い、私！ 滅亡しちゃえばいいのに！ ウザすぎ！」

「お前は言うことに容赦がないな」

「そうですか？」

「ああ」

「まあでも陛下、私とそのガルなんとかっていう国の王様に呪いのオーラを送っておきますから、少しは安心していいですよ？」

なんていったって私は日本人だからね！ 平将門の怨霊を操れるかもしれないよ！ 東京都千代田区大手町にある将門の首塚から異世界に召喚しちゃうよ！ 呪いの藁人形の作成運用技術だって伝わっている国の出身だからね！

私はふんと鼻息を荒くして、仕上げとばかりに捲いている布を歩いても簡単には解けないように工夫して結んでいく。

「私ね、陛下。許せないんですよ、こつこの」

「まだ言うか。年齢は関係ない」

「年齢もありますけどね？ それだけじゃないんです」

「他に何の理由が？」

「私はね、乙女ゲー崇拝者なんです」

「何？」

「乙女ゲー崇・拝・者！ 逆ハ―至上主義、ご都合展開上等主義の加え！ 私の場合、美しいモノがとにかく好きで、コレクション…：収集癖があつてですね？ 美しいモノを並べて眺めるのが大好きなんです」

「……で？」

「だからですね、私、剥製にして部屋に飾って置いておきたい生命体ランキング上位に入るくらいのビューティーな陛下に、こんな醜い傷なんてつけた外道で鬼畜なアホタレのガルなんとか王に、将門の怨霊を送っておきますよ。場合によっては、このトリエスで丑の刻参りもやっちゃいます！」

「……よく判らんが、あまり嬉しくない言い様だな」

「なんでですか？！ よし！ 終わりましたよ、陛下。どうですか、足の固定具合」

私の言葉に陛下は自分の足首に視線を向けて軽く触った後、立ち上がって左足に体重をかけて確かめた。

「少し楽になつた気がする」

「でしょう？ テープじゃないからちよつと心許無いんですけど、無いよりはマシだと思えますよ。とりあえず靴は履けるくらいの厚さにしてありますからね。ほら陛下、片足上げて。靴下履かせてあげます」

私つてばお母さんだよ！ ほらほら坊や、いい子だから片足を

お・上・げ！

「……自分でやるからよい」

「あれ、反抗期ですか？ お母さんはそんな子に育てた覚えはあり

ません」

「いつ、誰が、どこでお前に育てられたんだ、と返した方がよいのか、それは」

「いやいいですよ、別に。ほら、へ・い・か！」

私が陛下の靴下を開いて彼の足が入れられるのをじっと待っているのに観念したのか、陛下は遣る瀬無い溜息をつきながら左足を入れてきた。

私は折角捲いた布がずれてしまわないように、靴下らしきものをいっぱい広げながら陛下に履かせていく。

「お前は医療に触れていた事があるのか？」

「え、全然ですよ！ 足は千夏ちゃんが、」

「……またちなつか」

「千夏ちゃん、エロ属性に加えてドジっ娘属性で、」

「どじっこ？」

「はい。ドジっ娘というのはですね、普通に歩けば転び、椅子に座れば転げ落ち、扉を開ければ手を挟み、階段を上ってもやつぱり転げ落ちる。んで、コップを持てば落として割ったり、机が近くにあれば足をぶつける、そんな感じのドジっぷりを素でするのがドジっ娘です」

「……そんな人間が居るのか？」

「居ますよ？ そういう千夏ちゃんが近くに居たんで、私、応急処置が出来るようになったちゃったんですよ。これはもうね、不可抗力です。あ、陛下、これこういう留め方でいいんですか？」

私は陛下の靴下らしきものの留める部分を少々苦労しながら結んで陛下に見せると、彼はそれを身を屈めて引き取った。

「ここまではあっているが、ここからはこうだ」

言って陛下は手際良く途中から結び直していく。

「そういう風に結ぶんですかあ」

へー、と興味深く眺めていると、陛下は早々に結び終え、靴を履いた。

「で、どうする」

「どうするって?」

「お前はそのまま先へ行きたいのか?」

「あー…出来れば。だめですか?」

私の言葉に、陛下はちらりとこちらを見て息をついた。

「……………仕方ない。戻ったところで臭いの残るあの狭い空間で待つことになるだけだし、面倒だが付き合うか」

そう言うと陛下は石畳の上に放置されていた短剣を拾い上げた。

それを見て、私も渡された短剣を今度はカボチャパンツの左脇腹付近に差し入れる。

「付き合うが、小娘、」

「はい」

「この先、危険を少しでも感じたら、お前が何を言おうが引き返すからな」

「あ、それは了解です!」

「では行くか」

「はい!」

そんな感じで陛下と私は、トリエス国王探険隊を再開させたのであった。

トリエス国王探険隊を再開させて私の体内時計で五分程経った頃である。

私は黙って陛下の後ろをただついていくのに飽きてしまって、彼に質問をする事で気を紛らわせようとしていた。

「なんか地下通路、変わり映えしないですね、陛下」

「そうだな」

地下通路は歩けど歩けど高さも幅も、仄かに光る妖しい光も通路の材質も何も変わる事はなかった。

落下地点から何だかんだと三十分近く歩いているのである。

そろそろ終点が見えてきて欲しいところだが、陛下の体の横から見える前方は未だ一本道が続いていた。

「そつえばさ、陛下」

「なんだ」

陛下は私が声をかけても振り返る事はしなかった。

ただもくもくと前を見ながら歩き続けている。

「私、結構疑問点があるんですよね、今回の事」

「ほう？ 例えば？」

「ひとつめ。何でレバーが珍獣部屋にあったのか。陛下、判りますか？」

「判らん。あの部屋はただの物置だとばかり余も思っていたからな。確かに昨夜バルツァーが申していた通り、数代前の王が取り締まった闇市場に流れていた珍しい獣を手元に置く為に作ったらしいが、

単に珍しいから飼ってみたくなつたが出所が闇市場だし、五月蠅い事を言われるのも煩わしいし、適当に法を作つて適当に部屋を作つてみたというところだろうな。珍獣保護法を見る限り深く考えていたとは到底思えん」

「陛下つてば、そんな適当に作られたと判っている法を私に適用したんですね」

「お前にはそのくらいが丁度よいだろう？ 適当そうだしな、お前のその頭の作りも」

この男は一言多いよ！

私に失礼な事を言つたら腰の妖刀小野妹子で切るから覚悟してね！ 切れ味抜群だよ！ 切られたら呪われるからね！ 切り口から黒い煙が出るよ！ 呪いの解除は勿論有料だから！ 陛下の持っている財産の半分ね！ 二回切つて身ぐるみ剥いでやる！

そしてその後は男娼の館にでも売り飛ばす！

私はムツとした事もあり、陛下の背中を睨みながら質問を続けた。「じゃあ、ふたつめ。何でレバーが私にだけに見えたのか」

「それも判らん。異世界人だからなのか、お前の目がおかしいのか」「なんでそこで私の目の良し悪しが出てくるんですか！」

「頭がおかしいからな、お前は」

切る！ 今、切る事に決めたよ、私！

私は妖刀小野妹子の柄に左手を乗せた。柄が冷たい感触を手に伝える。

映画やテレビでお馴染みの動作を真似るように、鞘に手を移動させ、鏢に親指を掛ける。

瞬間、陛下の冷たい声が私の耳朵を打った。

「小娘、言っておく事があるが、余に刃を向けた時、お前の命は無いと思え」

「え」

「冗談でも向けるな。余はそのように鍛えられている」

陛下の言っている通り、なんだか彼の声に冗談では済まなそうな

響きが含まれているのを私は敏感に感じ取り、すぐさま短剣から手を下ろした。

つか、なんで前を向いているのに私が短剣を触ったのが判るのよ！ 頭の後ろに目がついているんじゃないだろうな！ 妖怪陛下め！
なんて事を思っては見たが、私は少し怖くなってしまっただけで、下から距離を取った。

「鍛えられているって誰にですか？」

「そのような事、お前が知ってどうする？」

「別に意味はないですけど……」

「なれば聞くな」

「……………」

陛下の冷たい声音に私はどうにも居心地が悪くなってしまい、更に三步ほど陛下から後ろへ下がった。

これで、もともと二歩程の距離があったから、二歩、一歩、三步と計六歩分の距離が開く。

陛下の足が止まった。

それに合わせ私も足を止めると、陛下が振り返る。

紫の瞳にまた感情がなかった。

「あまり離れるな」

「……………」

「だって何も無い。いい加減にしろ。お前がこの先に進みたいと言ったのを忘れるな」

「……………」陛下、なんだか物騒だし」

私がぼつりとそう口にする、陛下が大きく一歩踏み出し、私の右手首を体ごと持ち上げるようにして掴んだ。

「痛いっ、陛下！」

「当たり前な事を言っただけだろうが。王に刃を向けた者を許すと思つか。それが例え害の無さそうなお前であってもだ。違つか、小娘」

「……………」違くはないですけど」

「早く先へ行き、さつさと終わらせるぞ。面倒だし疲れているんだ。この先が何処かに繋がっているのなら、それに越した事はないからな」

そう言うと陛下は私の右手首を離す事はせずに、そのまま引つ張るようにして歩きだす。

数分ほどお互いに黙って歩いて、自然と手を繋ぐ形で落ち着いた。陛下の手は弾力がある訳でもなく、温かくもなかった。

「そういえばお前の結構ある疑問点とやらは二つで終了なのか？」
相変わらず陛下はこちらを見ようとはせずに、前方に目を向けたまま声をかけてきた。

私はそれに気を取り直して反応する事にする。
いつまでも今し方の事を気にしていても仕方がないからだ。

流石に一国の国王に短剣を向けようとしたのは冗談だったとしてもやりすぎだったしね。

そんな反省をしてみたけれど、でも、私はまたひとつ気づいた事が増えた。

陛下は、ふとした瞬間にとても怖くなる。

「まだありますよ」

「なんだ」

「みつつめ。どうしてリーザ達が触れなかったレバーが陛下に触れたのか」

「それも判らん。お前だけが見えて触れたのなら、百歩譲って異世界人だからという理由がこじつけられる。だが余はあれらと同じこの世界の者であるし、不思議な力もない。そもそもこの世界に不可思議な事は存在しないはずだ。国王を十八年もやっているが、これまで見た事も聞いた事も、そういう報告も今までに無かった。全ては物語の中での話で、余が不思議な事象を目にしたとすれば、小娘、お前が余の前に現れた、それが初めてだ」

「うーん、じゃあ、よつつめ。珍獣部屋に開いた穴の床の瓦礫は何処にいったのか」

陛下は降参だとばかりに息をついた。

「それも判らん。少なくともあの狭い空間には無かった。どれも判らん。判らん事だらけだ。初めてだ、ここまで理解不能な事が起こるのは」

「結局、陛下、何にも判らないんじゃないですか」

「……そうだな」

「陛下、天才のはずなのに」

「それは関係ないし、余は別に天才でも何でも無い。単に記憶力が人より少しいだけだ。そう今朝も言ったはずだが？」

「陛下が天才じゃなかったら、私はどうするんですか！」

「だから馬鹿なんだろう？」

「っ！」

くそっ、この男、やっぱりムカツクよ！一発殴りたいけど、さっきの事があつたばかりだからね！流石の私も多少は自重するよ！少なくともこの地下通路に居る間はね！

私はその腹立たしさを発散するように、繋いでいる陛下の左手をぶんぶんと振ってみた。

「小娘」

「じゃあ、やっぱりこの先に行くしかないですね！異世界人である私だけが見えたレバーによって来る事になった地下通路ですもん！今いった疑問の何かは判るかも！っていうか、私、日本に帰れるかもですよ！」

「っかもマジで帰りたいたい！」

トリエスのお金で五億円分手に入ったけど、この世界で大金を手にしたって、いま私が最高に欲しいソフトが手に入る訳でもないしね！

正直なところさ、この世界で大金を手に入れても、あんまり楽しくないんだよね。買いたい物も思いつかないし、お金を使って楽しませてあげたい人も居ないしさ。

「どうかな。その理屈だと余が触れた説明がつかない」

「う……」

「そもそも、そう簡単に解決する問題なのか？ 異世界に渡るとい
う事は」

「ねえ、陛下」

「なんだ」

「調べて下さいよ、陛下の権力で」

「そうだよ。陛下は大国の国王陛下だし、権力も金も人も、手にし
ているのはこの世界の人たちと比べても段違いのはずだよな？ 効
率的つてなもんだよ。私が一生懸命調べるよりもさ。」

「何をだ。お前の帰還方法とこの地下通路の事で何か？」

「そうです」

「命じるのはいいが、判るとも思えんのだがな。少なくともお前の
帰還方法は」

「そんなこと言わないで下さいよ！ へこんじゃいますよ、私！」
やっつてらんない気持ちになって、私は脱力したように溜息をつい
た。

もう本当にやってらんないよ。日本に帰還不可フラグは立ちっぱ
なしだし、今日は精神的に疲れているつーのに、真夜中に裸足で
こんなアヤシイ地下通路歩いているしさ。

いくら異世界トリップ王道設定である逆ハーで頑張ってモチベー
ション上げたところで限界はあるよ、流石の私もね。

「帰還方法という言い方では命じていないが、異世界がらみの事柄
で何か伝わっている事はないか、トリエス以外にも範囲を広げて調
べるよう今日ルドルフには申し渡してある」

「ルドルフさん？ あ、宰相の人でしたっけ？」

「そうだ。今度、時間が出来たら紹介しよう」

「どんな人ですか？」

「どんな人と言われてもな。面白みのない人間だとしか言いようが
ない」

「何歳ですか？」

「今年、三十五だったかな」

「三十五かぁ。男としていい感じに脂が乗っている年ですね」

「そうか？」

「そうですね？ スーツが馴染んで似合うお年頃です」

「すーっ？」

「向こうの世界の男の戦闘服ですよ。着用時はカツコ良さを二割増しなんです」

「ちなみに制服は三割増しね！

「ほう？」

「ところで、ルドルフさんの髪と瞳の色は何色ですか？」

陛下は前方に向け続けていた瞳をこちらに向けた。

地下通路は相変わらず単調で、何かが起こる気配を全く感じられなかった。

陛下も先程より力を抜いているのが何となく判る。

「そんな事を聞いてどうする？」

「いえ、別に。単なる興味で」

「興味な。あれの髪は黒で、瞳は碧だ。ちなみにバルツァー同様、目が悪くて眼鏡をかけている」

「へー。なんか会ってみたいかも！ 渋くてカッコよさそう！」

「そうか。では会えばいい。今度、余の執務室にでも来い。独身だから気に入れば結婚でも何でもすればいいんじゃないか？」

その時が来ればだが、とよく意味の判らない言葉を付け足して陛下が再び前を向いた。

「え、私、陛下の執務室に行ってもいいんですか？」

「数日以内に護衛がつくからな。それが許す範囲で行動するのなら特に制限はしないつもりだ」

「そっかー」

私は気分が何だかワクワクしてくる。なんといったって珍獣部屋の外に出られるのだ。お城見学も出来るし、異世界トリップの醍醐味を体験できるというものだ。

これで日本への帰還が保障されていれば、趣味の世界体験という感じで、心置きなく旅行気分を堪能できたのだけれど。そうでないのが残念でならなかった。

「他にルドルフについて質問はあるか？」

陛下も歩いているだけでは頭が暇なんだろう。

最初は危険予測の為に静かにしていると言っていたが、今は自ら無駄話に興じていた。

「んー特には」

「そうか」

「あ、そういえば陛下」

「なんだ」

「私ってばこの世界を知らないって陛下、さっき落ちたところで言っただじゃないですか」

娼婦云々の話のところだね。

「ああ」

「じゃあ、教えて下さい！」

そうだよ！ よくよく考えなくても私ってば、ちよつと情報収集を真剣にした方がいいような気がするんだよね！

今は珍獣保護法で保護されているとはいえ、なんかさ、知った方がいって本能が命令してるの。

なんでだろう？

「面倒だ」

「そう言わずに！ 陛下、今、頭の中、暇でしょ？！ え、陛下つてもしかしなくても面倒臭がり？」

「そういうつもりはないが、……そういうえばフェリクスには偶に言われるかな」

「フェリクスさん？」

「ああ。第二騎士団長にフェリクス＝ブランシュという男がいる。ふざけた男なんだが」

「陛下にふざけた男とか言われたくないんじゃないですか、そのフ

エリクスさんも」

言いながら私は鼻の頭が痒くなってしまったので、ぼりぼりと掻いた。

地下通路は相変わらず状況は何も変わらない。

前方も先がまだあるように見える。

とはいえ、仄かに光る光源があるとはいっても、見通しは悪いから視界の範囲はかなり狭い。

「何故？」

「え、だって。極悪変態魔王じゃないですか、陛下」

「お前だけだ。余をそう言うのは」

「そうなんですか？」

「当然だろう？」

「みんな遠慮してるんですね。まあ、いいや。それですね、陛下。じゃあ、質問！ トリエスの名産品は何ですか？」

まあ、まずはここからだよね！

私ってば今いるトリエスという国を知るところから始めないといけないよね！ もし珍獣保護法の適用から外れる事になって、城から出る事になって。バルツァーさんが頼れなかったとしたら私ってば、自分の力で生きていけないといけないからね！ あ、その場合は、陛下から貰った五億円はちゃんと持って行くよ！ これでスタートは順調に進むはずだね！ 王都に家を買うの、私！ マイス イートホームだよ！

「名産な」

「例えば何がよく採れるとか、有名なお菓子とか工芸品とか何かあるでしょう？」

陛下は少し考えるように仄かに光る地下通路の上の部分を見ていた。

「 そうだな。食べ物で言えばサデヴァ王国……ああ、この小国は近日中に滅ぶ予定なんだが、」

「え、滅ぶ予定って？」

私は思わずきよとんとして聞きなおしてしまった。

「言葉通りだが？」

「へ……。で？」

「そここの境にある地域で採れるパピヨンという果物で作られる加工食が有名な」

「ぱ、ぱびよん?!」

「どうした」

「凄名前ですね！ パピヨンって!」

「凄いか？」

陛下はよく判らないようで、不思議そうな瞳をこちらに向けた。

「パピヨンというのは、向こうの世界のフランス語で蝶という意味なんです。他に犬の品種名でもあるんですが、それ以外にもいろいろアヤシイ物体名にも使われたりするイメージが強い単語なんですよ」

少なくとも私はアヤシイイメージが強いよ！ 当然ね！ 原因はエロ属性千夏ちゃんのせいだから！

「パピヨンかあ。やや、ちょっと食べてみたいかも！ 美味しいんですか？」

「ああ」

「生でも食べれます？」

「生？」

「はい！ 加工したのじゃなくて、そのまま採りたての状態で！

私、果物大好きなんですよね！」

「それは難しいな」

陛下は短剣を右手に持ったまま、髪を一度掻き上げた。

彼の髪はサラサラストレートだから、掻きあげた先からすぐに元に戻ってしまう。

とても邪魔そうだった。

「なんでですか？」

「現地に行けば食べ放題かもしれないが、王都までの輸送にパピヨ

ンが耐えられない」

「腐るって事ですか？」

「かなり痛むんだ。食べれたものではないだろう」

「そうですかー、残念」

「そうだよね。空輸したり、高速道路をトラックかつとばして輸送とか出来ないもんね。当然かもしれないけど。」

私はガツカリしてしまつて、ふうと息を吐く。

本当に残念。折角、日本では我が家の経済事情のせいであまり食べる事の出来なかつた美味しいフルーツをたくさん食べようと思つたのにね。やはりオイシイ話はそうそうないよね。

「そのままでは無理だが、焼き菓子にでもしてもらえばいい」

「え、してもらえばいいって？」

「言えればいいだろう？ リーザか他の侍女、ヘロルドあたりを捕まえて」

私は陛下のさも当然といった言い様に疑問を覚えた。

「ねね、陛下」

「なんだ」

「私って何者扱いですか？」

「どういう意味だ」

「なんかもものすつごく高待遇じゃありません？」

流石に私もちよつとアヤシイと感じるくらいにね？

私が陛下の顔を覗き込もうと一歩踏み出して、彼より背が低い為に下から見上げると、陛下も私を見下ろしてくる。

今の彼の表情には特におかしなところはない。

ただ、何を言っているんだ、といった感じで私の顔を見ているだけだった。

「そうか？ 珍獣ならこんなものではないか？」

「……本当に？」

「ああ。それより余よりも前に出るな。何があるか判らんからな」

「あ、はい」

それから暫く陛下と私は、どうでもいい話をダラダラとし続けていた。

パピヨンから始まったトリエスの名産品の話が名所の話になり、終いには何故だか今日の謁見の愚痴話になっていた。

そんな話をし続けて私の体内時計で三十分くらいが経って、落下地点出発から一時間以上は経過した頃、私の体があるシグナルを送っていた。

まずいよ……これはね。

私は抑えに抑えていたんだけど、もうどうにもならなくて、思わずぶるつと体を震わせてしまった。

それに陛下が気づく。

「どうした」

「……………」

「小娘？」

陛下が立ち止まった。

だから私も自然に立ち止まる訳なんだけど、私といえば、本当に我慢の限界が来ていて、こちらに向いた陛下の胸元に額を乗せてしまった。

「どうした、小娘。具合でも悪いのか？」

「……………陛下、トイレ行きたいです、私」

そんな私の情けない声に陛下が沈黙した。

「……………」

「どうしたらいいですか？ もうちょっと我慢の限界が……………漏れそう」

「……………此处ではするな。ああ、此处というのは本当にこの場でという意味だ。小娘、」

「はい……………陛下、もうダメそうです……………」

「待て、本当に！ 良いか、余は此处で待つ。お前は少し戻れ。先へは行くな。いま来た道を少し戻り、そこで用を足せ。余から離れ過ぎるな。目の届く範囲内で戻るんだ」

「でも……」

「でも何だ。限界が来ているだろう？ 早く行け！」

「拭くものがありません！」

私ってばもうナイトドレスも切り刻んじやってるから最低限の布しか纏ってないしね？

ああ、もうどうしたらいいんだろう！ 拭かないでカボチャパンツを履いた日には、このパンツ白いし、茶色の染みとか出来そうだよ！ それが外側からも判っちゃったりしてさ、陛下からもその染みが見えちゃったりとかさ！ 流石の私もね、それは嫌！ いくら陛下だからとか、そんな言い訳で自分を誤魔化せないよ！ だって私、パンツの染みなんて、千夏ちゃんにだって見られたくないもん！
「……これで拭け」

陛下が私にハンカチらしきものを差し出した。

私が尿意の我慢に行動が遅くなってトロトロしていたら、彼はそのハンカチを私の手に握らせ、両手で肩を掴み、いま来た方向へと私の体の向きを強引にかえた。

「行って来い」

「ごめんなさい、陛下」

「生理現象だ。仕方ない。いいから行け」

私はもう限界が来ていたから、猛ダッシュで走る為に片足を大きく踏み出した。

「陛下、これ、洗って返しますね！」

「返さんでいい！ そのまま捨てておけ！」

その陛下の荒げた声を背に私は走り出す。

しかし三歩行ったところでふと思い出し、また陛下のところへ私は引き返した。

「なぜ戻ってくる？！」

「陛下、忘れてました！」

私は早く用を足しに行きたかったから、素早い動作で短剣とカボチャパンツの腰のリボンに挟んであった物を取り出して陛下に押し

つけた。

「持つてて下さい！　じゃ！」

「なんだ、これは」

「後で説明します！」

言って私は、膀胱に刺激を与えないギリギリの速度で猛ダッシュしたのである。

地下通路の石畳の上で用を足すのは、思いのほか難しいものだった。

溝が深くないものだから、尿を出した先から液体は前後左右に広がっていく。

だもんだから私はドバッと一気に放出したいのを我慢して、チロリチロリと少しずつ出し、且つ！ ちよつとずつ後ろに下がっていた。

後ろってというのは通路を横切るような形で下がっているんだよ！
境界線を引くようにね！

だってさ、私、裸足なんだよ！ こうやって用を足さないと、足に付いちやうでしょ？！ すぐに洗えない状況なのに自分のとはいえ素足に尿が付くのは本気で耐えられないからさ！

「あー… だんだんスッキリしてきました、陛下」
「……………」

「こうやって広がっていく尿を避けるように少しずつ下がって用を足す技術を身につけましたよ、私！」

「凄いやね！ と思って言ったのに、聞こえてきたのは私に背を向けている陛下の苦々しい声だった。」

「……解説しなくていい」
「あ、言つの忘れてた！ 陛下、音、聞かないで下さいね！」
「流石に恥ずかしいからね、私も！」

日本のトイレに付いているボタンを押すと水の流れる音がする機

能が欲しいよね！ あれ、エロ仕様だし、優れものだよね！

「……そう思うのなら、何故もつと遠くへ行かない？」

「え、だって陛下、『余から離れ過ぎるな。目の届く範囲内で戻るんだ』って言ったじゃないですか」

「言った！ 言ったがな、小娘！ それにしたって歩いて五歩程度の距離はないだろう！ 何故もつと遠くへ行かないんだ！ 程度というものを知れ！」

「ちよつと何で怒ってるんですか？ ……あ、そろそろ膀胱から尿が消えてきました！」

「……………」

「そうだ、陛下」

「……………なんだ」

「で、結局、私の用を足す音は聞いちゃったんですか？」

「……………聞こえた」

「陛下の変態！ エロエロオヤジ！ ドエロの王様！ スカトロの帝王！」

「っ！ 理不尽すぎるだろう！ そうは思わんか、小娘っ！」

「理不尽って！ 権力を行使する側の陛下に言われたくない言葉ですよ！ あ、終わりました！ 物凄くスッキリです！ よいしよつと！」

「……………」

「んー…んんっ、あー…もう！ くっ！ いやあ！ はう！ あんっ！」

「……………」

「くそう……やっぱり、このカボチャパンツ問題ありですよ、陛下！ 履きにくいっいたらありやしません！」

「……………またその話が、お前は」

カボチャパンツのリボン結びに悪戦苦闘している私の耳に、陛下のうんざりした声が聞こえる。

私が陛下の方を見遣ると、彼は通路の壁面に寄りかかりながら、

律義に背中を向け続けていた。

まあ、単に用を足している場面など見たくはないってだけなんだろうけどね。

「くう……もう私、このカボチャパンツ、本当にどうにかしたいです！ デザインから考案したい！ なにより自分の為に！」

「好きにしる」

「え？」

「好きにしる、もうお前は。城の針子でもなんでも使えばいいだろう」

「アニとやらの知り合いも出来たのだろう？ と言って陛下は壁から身を起した。」

「え、アニ、自由に使っていいんですか？」

「ああ。自由に使え。アニという者だけでなく城に居る者、全てを好きに使ってよい。何か言ってくる者があれば、苦情は余に言えとでも言っておけ」

「おおう、それは私に多少の権限が与えられたという事でしょうか、国王陛下？」

「ややっ、私つてば、だんだんトリエスで力を付けてきてるよね？ 五億円も手に入れたし、城の人間も好きに使っていいとかさ？」

「まあ、ちよつと心に引つかかるものはあるんだけどね？ 小さい棘のようなものが刺さっているというか何というか。」

「それより終わったか？」

「あ、はい。履き終わりました。もうこつち見てもいいですよ」

「言いながらも私は、尿地帯を華麗に避けて陛下のもとまで走っていった。 といっても本当に数歩なただけどね。」

「お待たせしました！」

「では行くぞ」

「はい」

「小娘」

陛下は私に短剣を渡してきた。

私はそれを受け取り、再びカボチャパンツの左腰側に差す。

「で、これは何だ？」

そう言っただけで陛下が手に持って私に聞いてきたのは、先程、私が用を足す前に陛下に押しつけたものだった。

「あ、それですか」

陛下と私は、話ながらも歩きだす。

「それはですね、異世界日本のお菓子です」

「にほんの？ 食べ物なのか？」

「はい」

陛下が今持っている日本のお菓子は、私がトリップする直前にコンビニに寄って買った物だった。

私はあの時、塾の帰りに自宅最寄駅のコンビニで 言うまで

もなくパパがああ悲劇惨劇の日に車を放置してきた曰く付きのコンビニね！ アメリカンドックと、ソフトキャンディ、ガムと棒

状のクラッカーらしき ああ、もう商品名言ってもいいよね？ ぷっちょとね、キシリッシュ、いちごポッキーと、たけのこの里

コンソメ味のポテトチップスにドンタコス、キャラメルコーンにポップコーンのバター醤油味、加えて、スニッカーズとマカデミア入りチョコレート、チロルチョコとタマゴボーロとアポロとカリントウと都コンブと柿の種とカツパエビセンとマシュマロと栗ドラヤキとフリスクをね、買ってたの！

あと、五百ミリリットルペットボトルのコーラとサイダーとファンタとカルピスもね、異世界に持ってきてるよ、私！

陛下の夕飯時に現れた時に手に持っていたコンビニ袋にはね、しこたまお菓子とジュースが入ってたんだよね！ 買いだめしてたの

！ お小遣いが入ったばかりだったからさ！ コンビニ二万歳だよ！ 少ない小遣いで思いつきり散財してたからね！ オナカ空いて

たの！ とつてもね！

「これは、ぷっちょです」

「ぷっちょ？」

陛下が不可解そうな顔をした。彼の紫の瞳は、先程から手元のぷつちよに向いている。

「ソフトキャンディーです、って通じますか？」

「いや」

「柔らかい飴です。グミというゼリー……うーんと、歯ごたえがある物体が入ってて、巨峰味なんですけど……えっと、異世界にある果物の味です」

「小さいな」

「え、中はもつと小さいですよ？ 十粒入りですもん、これ」

「ほう？ 不思議な丸いものが書いてあるが」

「それは日本の字の平仮名で、ぷつちよって書いてあります。で、これが漢字。今朝、陛下に言った日本の特殊文字で、巨峰って書いてあります。食べてみます？」

「……何故、お前は今これを持つていたんだ？」

「ああ、だって、この力ボチャパンツ、あまりにもつさりしてて何か入りそうだなーと思って、腰のリボンに挟んでみたんですけど、そのまま忘れてました」

そこまで言ってから私は陛下の手からまだ開けていないぷつちよを取り、外側の包装紙をくるくると回しながら破いていく。

「ずつと腰のリボンに挟み入れていたから、ちよつと生温かいかもしれませんが、全然問題ないですよ？ 中に入っているグミという物体がぷちぷちとした歯ごたえで、甘くて美味しいです。陛下、甘いのが好きですよね？」

「……………」

「私、昨日、陛下の前に現れる直前、お店に寄ってお菓子買ったんですよ。現れた時、大きな白い袋を持ってたんですけど、陛下、覚えてます？」

「覚えてる。持っていたな、お前は。白い袋と、鞆らしきものと、反対の手には食べ物らしきものを」

「はい。その白い袋の中にお菓子と飲み物がいっぱい入ってたんで

す。お小遣いが入ったから買いためて。で、陛下、ぷっちょ食べたいですか？」

「……………」

「へ・い・か、ここは素直になりましょうよ！ 異世界日本のお菓子を食べれるなんて、世界広しといえど陛下だけです。超貴重品なんです。食べたら終わっちゃうんです！ 補給は出来ないのでからね！ 日本のお菓子は向こうの世界でも美味しい部類に入りますよ？」

「……………貰おうか」

「はいはい」

私は一粒取り出して、銀色の中包みごと陛下の手に乗せた。

「私ってば用を足して手を洗ってないから、包みは外しませんよ？」

その銀色の包みを取って食べて下さい」

「判った」

陛下は私の言った通り素直に包みを取り、一見ちよつとアヤシイ色合いの紫色の中身を躊躇いも見せずに口の中に入れた。

入れてからほんの少しして、陛下はもこもこ口を動かす。

「どうですか？ お口に合います？」

本当にどうだろう？ なんていつたつて陛下は大国の国王陛下だからね。味覚は贅沢仕様だと思っただよ。

それに比べ、ぷっちょはさ、美味しいけど庶民のお菓子というか……………お値段的にも安いしね？ 私は好きなんだけどさ。

「美味しいな」

「あ、気に入ってくれました？」

私は好きなお菓子を褒めてもらって、ちよつと嬉しくなった。

「ああ」

「もつと食べます？」

「貰おう」

それからというもの、流石陛下は甘党の国の国王陛下だった。一度甘い物を食べたしたら止まらない止まらない。

もうひとつ、もうひとつと何度も言っつて、あれよあれよとぶつちよ十粒をあっという間に完食してしまった。

そんな陛下に私はちよつと呆れてしまう。

「流石、甘党の国の国王陛下ですね……」

私の言葉に陛下は少々バツの悪そうな様子を見せ、手に溜まった包みをひとつに丸めて通路に捨てた。

現代日本だったら、激しく饜蹙を買う所謂ポイ捨てである。

「甘い物が好きだというのもあるが、実は腹が空いていてな。少し助かった」

陛下は息をつくと、また髪を掻きあげた。

あの髪の毛、本当に邪魔そう。ピンか何かで留めてあげたいなあ。上に戻ったら、リーザに言っつて何か探してもらおうかな。

「なんでオナカ空いてるんですか？」

「あまり食べていない」

「何で？」

「……食べる機会を尽く失っているんだ」

陛下は、やっていられないといった溜息をつく。

「どうしてですか？ 何時から？」

私の問いに、陛下が何故か恨みがましい視線をこちらに向けてきた。

「お前だ。お前が尽く余の食事をする機会を奪っているんだ。お前がな！」

「なんで、私！」

「まずは昨夜。お前は余の夕食の上に現れた」

「……………」

「で、一口も食べずにそのままドルフの所へ行つて、結局、昨夜は何も口に出れなかつた。朝は朝で腹が空いていたのにも関わらず、やはりお前のせいで碌に口にしていない。昼は忙しすぎて抜いたし、夕食はやる事が立て込んでいて、やはり抜いた。部屋に戻つてから軽い夜食でも持つてこさせようと考えていたのに、部屋にはお前が

居て、今、何故か此処に居る。……昨日の昼からまともに食べていないんだ」

お……それは悲惨だね？ 私は少なくとも異世界に来てから食事は抜いてないや。

しかも毎食、結構豪華なお食事が提供されてたよ？ ごめんね、陛下！

「王様なのにね」

「まったくだ」

「まあ、元気だして、へ・い・か！」

私は励ますように陛下の背中を、ぽんぽんと叩いた。

「どう出せと？」

「上に戻ったら、私が日本から持ってきたお菓子と飲み物、全部陛下に献上します！」

「……………」

「いっぱい持ってきてるんですね、向こうから！ 飲み物も陛下大好き仕様で全部甘いですよ！ だから元気出して下さい！ 陛下には上に戻れば異世界日本のお菓子と甘い飲み物が待っていますから！」

「……………」

「ね？」

言って私が陛下の顔を下から覗きこむと、紫の瞳と目があった。

「甘い飲み物？」

「はい。炭酸入り……えっと、シュワシュワとした喉越しの甘いのみつつと、いい感じに甘いのひとつです。向こうの世界では皆に知られている一般的な飲み物ですよ。結構、人気があるんです」

「そうか」

「楽しみにしてて下さいね！」

「ああ」

そこまで互いに目を見ながら話し歩いて、会話がひと段落したので二人同時に前を向き、そして二人同時に足を止めた。

「……………」
「……………」

私たちの目の前に、ひとつの扉が出現していた。
一本道の地下通路の、どつやら終点のようだった。

∴ 42 (後書き)

ぷっちょ ∴ UHA味覚糖のお菓子の事

<http://www.puccho.jp/>

扉の縦幅は陛下の身長より少し上くらい。横幅は通路より少し狭いといった大きさだった。

扉の材質が何なのかは私には判らない。一見した感じでは艶があつて、触ればツルツルとした感触を伝えてきそうだった。

扉には模様があつて、真ん中にバスケットボールサイズの円のよ
うな形がひとつ。それを中心によく判らないそれぞれ違った形のも
のが均等に散っていた。散っている形のサイズは拳大。数は五個く
らいある。

私はとりあえず扉に触れる為に一步を踏み出す。

しかしそんな私の腰を陛下が引き寄せた。

私の背に陛下の体があたる。

「待て、小娘。不用意に近づくな」

「でも、触らないと何も判りませんよ？」

「……この扉も光っているな」

「……そうですね。通路と違って今度は蛍光灯みたいに光ってます」

「けいこうとう？」

「ああ、向こうの世界の……えっと、蠟燭の強烈版みたいなやつで
す。ねえ、陛下」

「なんだ」

「なんで真ん中の円っぽいのが、一部光り方が弱いんですかね」

「判らん。はじめて見る形だ」

扉はツルツルしていそうだけれど古そうで、そして光っているせ

いか形の境界線が酷く曖昧で判然としなかった。

陛下の黄金の髪が私の視界を塞いだ。

彼はどうやら私の頭上に顎を寄せ、顔を伏せて思案しているようだった。

「……どうするかな」

「陛下、髪の毛邪魔です！ 扉が見えません！」

「……やはり戻らないか、小娘」

「え、何ですか？！ 折角ここまで来たのに！ ちょっと、何でそんなに弱腰なんですか、へ・い・か！」

「弱腰ではなく慎重だと言ってくれ。……あやしすぎるだろう、何度も言うが」

「そうですか？ 確かに光ってますけど、見た感じただの扉じゃないですか」

私のその言葉に陛下が呆れたように息をついた。

その吐かれた息が私の髪の毛を揺らす。

陛下が顔を上げた。

「どう考えてもただの扉ではないだろうが。まず自ら発光しているのがひとつ。扉の材質が判らないのが二つ。二十六年生きてきて、そして王として内外の機密のある程度を把握しているはずの余が知らない模様が描かれているというのが三つ。かなりの年数が経っていきそうであるのに、その存在がこれまで知られていなかったのが四つ。その知られていなかった地下通路自体がそう汚れてもなく、また埃も溜まつていなかったのが五つ。まだあるぞ。珍獣部屋の真下に落下してこの地下通路に出たのはいいが、一本道の直線であったのに、一度も他の地下通路にぶつからなかったのが六つ。これは有り得ない。あるはずなんだ。これだけの時間を歩いていて一本もぶちあたらないのはおかしい。城の地下には無数の地下通路が張り巡らされているし、その中にかなり大規模な地下通路がある。軍も通れるような大きさで、放射線状にある通路の東西南北を繋ぐように円形に通っている通路があるんだ。それも深さを変えて二本だ。」

だから必ずぶつからなければならぬのに、それが無かった。そもそも、この地下通路に落下する過程も普通では無かっただろうが」

何だかいろいろ考えすぎちゃって消極的になってしまっている陛下の太股あたりを、私はぼんぼんと軽く叩いた。

「考えたって仕方ないじゃないですか。ここに扉があつて、それが光つてて、不思議な模様が描いてあつて、んでもって他の地下通路にぶちあたらなかつたとしても大丈夫ですよ、陛下」

「その根拠は？」

「だってさ、陛下」

私は陛下に腰を引き寄せられた腕の中でくるとまわつて、彼の顔を見上げた。

見上げた彼は思案気な表情を崩していない。きつと口に出していないだけで、あの天才的頭脳の内部では今も目まぐるしい程に様々な方向へと動いているのだろう。

「私つてば、今の時点で陛下にとって危険ですか？」

「何？」

陛下は不可解そうに眉を寄せた。

「だから陛下にとつて、私は危険な存在ですかつて聞いているんです」

「話の脈絡が掴めない」

私は腕を伸ばして、眉を寄せ難しそうな顔をしている陛下の両頬を左右に少しだけ引っ張った。

「小娘」

「もうね、不思議は始まっているんですよ。私から言わせれば」

「珍獣部屋からこの地下通路に落ちて。それがあやしいくらいな状況でも、それでも、それが初めての不思議ではないんですよ、陛下。私が居ます。陛下にとつても私にとつても、不思議はもう昨夜の時点で始まっているんですよ。私が異世界に渡つて、陛下の前に現れた時点です」

陛下の紫の瞳が横に逸れた。きっと彼は物凄い勢いで考えている。「不思議はもう始まっていて、なのにその不思議第一号の私は危険ではないでしょうか？　むしろ陛下はやるうと思えば何時でも私の息の根を止められたはずです」

「……………」

「扉の先へ行きましょうよ。大丈夫、きっと危険な事なんて何もありませんよ。なにかあったとしても私が日本に戻るくらいなんじゃないですか？　ね、陛下。平気そうな気がしてきましたでしょうか？」

「………… お前の考えなしは筋金入りだな」

「ちよつと陛下！　人が折角、かっこよく話を纏めたのに！　なんでそう台無しにするんですか！」

陛下が小さく溜息をつくとき、私を引き寄せていた腕を解いた。

「かっこよく纏めた、な」

「そうですね！　ちよつぴりファンタジー入ってて、いい感じだったでしょ？」

「ふぁんたじー？」

「えっと、幻想的とか空想とか？」

「お前の頭の中身がか？」

「この男！」

貴様はこの状況で、やっぱりムカツク一言を言わないと気がすまないのか！

まあでも日本に帰れば、もうコヤツとはお別れなのだ。そう考えると少しだけ物淋しいかな。

ま、本当に帰れば、きつと三秒で忘れられるけどね！　陛下、

バイバイ！　アデューだよ！

「ささ、陛下！　扉の向こうに行きましょうよ！」

私の言葉に陛下がこちらを見て、底意地が悪そうに口角を上げた。

何故？　何故、ここで今その表情？

「どうお前が言っても、この扉があやしい事に変わりはない。で、だ」

「で？ なんですか？」

「余の益は？」

「は？」

え、なになに、この男、何を言いだしてんの？ やべ、マジ判りません！ 天才の思考回路は全く判りませんよ！

私は陛下が何を言いたいのか全く分からなくて、ぽかんと彼を見てしまう。

そんな私の表情に彼の超絶美形顔は益々の魔王モードに変化していった。

「危険を冒してまでこの扉の先へ行くことによる余の益するものは何だと聞いている。お前はな？ 確かに元の世界に戻るかもしれないという可能性を得る益はあるよな？ 危険を冒す価値があるという訳だ」

「……え、陛下つては何を言ってる？」

「判らんか？ お前には元の世界へ戻る為に危険を冒す価値がある。だが余は？ 余は別にあの扉の先へ行かなくとも、落下地点まで引き返して待つていれば遅くとも朝には救助の者が来るが？ 冒す必要は無いよな？ 危険をな？」

ほえー！ ほえほえ！ ほえええええー！ ややややや、びつくり仰天の助ですよ！

なんですか、この男は！ つまり、こう言ってるんですか！

『自分は戻ればいいだけだし？ なんでリスクを冒してまで先へ行かないといけないんだよ？ 行つても自分にとって利益ないしさあー。利益あんの、お前だけじゃん？ そんなの行きたくないね。爆乳美女とならともかく、お前みたいなブスで絶壁なマナ板貧乳ケツデカ女なんかにつき合つてられるかってーの！ ばーかばーかばーか。冗談は休み休み言・え・よ！ ド・ブス！ ケツ・デーカ！ いつペン鏡でも見てこいよ！ なんなら姿見でも送・ろ・う・か？』

ってさ、言ってるの?! マジで言ってるの、ねえ、へ・い・か!

私は驚きすぎて両手を口元にあてた。

「うわ……陛下最悪」

「最悪？ 何故？ 当然の事を言っているだけだが？」

「本気で陛下って、」

「なんだ」

「異世界トリップものの男役失格男だったんですね……」

「それで結構だ。むしろ光栄にすら思うな。 さて、戻るか」

ふと息をついて、陛下はもう扉への興味は完全に失せましたな如くに背を向けた。

そして長い足を使ってスタスタと元来た道を歩きだす。

私は焦った。

「え、待って！ 待って下さいよ、陛下！」

私は陛下の右腕を掴み、半ばぶら下がるような感じでしたがみ付いた。

「重い。放せ、小娘。お前も戻るぞ」

「え、嫌だ！ 陛下！」

「お前な。あの扉はどう言い繕おうとあやしすぎる。止めておけ。

余にはあの扉の向こうに、お前の帰る手段があるとは思えない」

「ねえ、陛下、お願い！ 私、少しでも可能性があるのなら、それにかけていんですよ！ だってさ、陛下だって、あれが何なのか判らないでしょ？ じゃあ、元の世界に戻るかもしれない可能性を完全に否定できないですよね？！」

「だとしてもだ。余に益はない」

「そんなこと言わないで下さいよ！ お願いします！ あ、そうだ

！ ねね、陛下！」

私は重いと言われようが何と言われようが、彼に元来た道をこれ以上戻って欲しくなかったから、体重の八割をかけて陛下の腕にしがみ付いた。

陛下の姿勢がだんだんと右側に傾いてくる。

ふふ。分・銅・万・歳！

「なんだ。……重い、小娘」

「先へ進んでくれるなら、私のチューを陛下にあげ
いらん」

言葉の最後まで聞かずに彼はばっさり切り捨てた。

むしろ願うだけだ、とでも言いたげに陛下はふんと鼻を鳴らす。

「え。じゃ……じゃあ、えっと、私の美乳揉み揉み券百枚を」

「それも要らん。何故、余がお前の胸に対して協力せねばならん？
馬鹿馬鹿しい」

「っ！………じゃあ、じゃあ、仕方ない！ もうね、
大サービスですよ、陛下！」

「なんだ。とにかく行くぞ、もう」

「聞いて下さい！ 陛下にです、ね、」

「ああ」

「私の初エッチ、つまり処女膜を破る権利を」

「ふざけるな。そんなものは要らないし、お前の妄想の想い人パー
シヴァルにでもくれてやれ。余は戻る」

「ひっ………酷い、陛下！」

「なんとでも言え。さ、行くぞ」

言つて陛下は分銅な私をそのままに引きずるように足を進めてい
く。その様子はもう、私を本当の錘とも思っているかの如くであ
った。

しかし私はそれを容認する訳にはいかないのだ！ このまま引き
ずられて戻る訳にはいかないんだよ！ だってあの扉の向こうは日
本に繋がっているかもしれないんだよ？！

根拠は全く無いけどね！

あ、じゃあひとりで行けばいいじゃん？ って誰か思った？

もちろんね、私もそれはちらりと思っただよ？ けどさ、やつぱりさー、陛下もさつきから何度も言ってるんだけど、ものすつごくあやしいんだよ、あの扉！

だから、もしかして日本に帰れるかも？という可能性が少しだけ発生している訳なんだけどさ、でもさ、でもでも違ってたかどうか？ 本当に違ってたかどうか？ 私ひとりであの扉を開けてさ、バシユツといきなり鎌鼬（かまいたち）で切り刻まれたら？ 私、死んじゃうじゃん！ 即死じゃん！ 死にたくないよ、私！ まだ十八なんだよ？！ 人生十八年しか生きてないの！ しかもさ、まだ快樂とか味わった事が一度も無いんだよ！ 死ぬんだつたら一度でいいからイクっていうのを経験したいんだよね、私！ 小説読んでも、漫画読んでも、アダルトビデオ見ても、相当気持ちいいってあるからさ！

陛下はさ、既に後宮に側室さん達が何人も居る訳だから、もう何度もイクを経験している訳でしょ？

だったらいいじゃん。陛下はもう死んでもさ！ この世に未練も悔いも無いでしょ？！

だから私は陛下とあの扉と一緒に……というか、陛下を前にして扉を開ける必要があるんだよね！ 盾だよ、陛下はね！ 勿論ね！ 中世ヨーロッパの騎士たちもさ、刺客暗殺毒殺を避ける為に女性を先に部屋に入れて様子を見たり、食事を先に食べさせて毒味させ

たりしてた訳でしょ?! レディーファーストの起源って言われてるよね!

じゃあ、私もやってやる! 当然ね! 陛下に扉を開けさせて、先に部屋に入れてさ、私は後ろから様子を見てるよ! で、なにかあったら速攻で逃走するから! 脱兎の如くね!

私はともかくにも陛下にも陛下に考えを変えてもらいたくて、必死に頭を働かせた。

チキチキチキチキ……………チーン!

思いついたよ!

「陛下、渋皮煮!」

私は腕にしがみ付いていたが、陛下が戻るのを止めたくて、扉の方へ向きを変えてもらいたくて、腕をやめ、方向を変えるよう彼の体に力を加えながら抱きついた。

「何?」

「渋皮煮です、渋皮煮! 異世界日本の料理のひとつですよ!」

「それが?」

「陛下、この世界に栗ってありますか?」

あつて、お願い! 私は今朝、朝食に出されたフルーツの盛り合わせを思い浮かべながら祈る。

苺らしき物も、サクランボらしき物もあつたからね! 栗に似たような物もあると思うんだよ! 後は陛下にそれが通じるよう祈るのみ!

「栗? あるが、それがどうした」

おお、素晴らしい! 栗で通じるのか! ナイス、異世界便利翻訳機能! ここぞという時、やってくれるよね! よしよし、製作者には私から熱いチューを贈呈し・ちゃ・う・ぞ!

私は陛下に訴えるように、彼の紫の瞳を必死に覗き込んだ。

「もし陛下が今から一緒にあの扉の先へ行ってくれるなら、私つてば、陛下に栗の渋皮煮を作つてあげます!」

陛下が面倒そうにしがみ付く私の体を引き剥がしにかかった。彼

の両手が私の肩に乗る。

「よく判らんが、別にいい」

「ややつ！ そんなこと言っていていいんですか？！ 異世界日本料理、栗の渋皮煮っていったら甘いんですよ？！ 数日くらい保存もきくから陛下の執務室の机にでも置いておけば、疲れた時に甘々の栗が何時でも摘めるんです！ どうです、陛下、食べてみたいでしょう？ 日本に昔から伝わる甘い部門の和食ですよ？！ 向こうの世界では、今、和食ブームなんですから！ 流行っているんです！ 世界的に評価を受けている料理なんですよ、和食って！」

「……………」

「こつちの世界に材料のひとつである重曹があるのかは疑問なんですけど、代用品は絶対にあるはずですよ！ 研究します！ 向こうの世界でもベーキングパウダーを代用とする場合があるから大丈夫だと思っんですよ！ トリエスの食事にケーキが登場してましたしね！ ねえ、陛下、行きましようよ！」

「……………」

陛下の反応が鈍いので渋皮煮では弱いかと思ったが、彼の紫の瞳が横に逸れた。どうも考え出した雰囲気を感じられる。

おお…… エロ方面はダメでも 私の魅力不足だからかもしれ
ないんだけどさ！ 陛下には甘党方面から攻めればイケるんじゃないだろうか。

私は少しの希望を見出して、更に畳みかけるように言葉を紡いだ。「私が日本から持ってきたお菓子の中に、栗ドラヤキとカリントウというのがあるんです！ それってば、たぶんトリエスにある材料で作れると思っんですよね！ ねね、陛下！ 上に戻って、もし陛下が栗ドラヤキとカリントウを食べて気に入れば、それも陛下が食べたい時に作ってあげます！ ドラヤキは執務の合間の休憩時に、カリントウは渋皮煮同様、執務室の机の上に常備可能な甘々お菓子としてどうぞ！ どちらも美味しいですよ！ ドラヤキは豆を甘くした餡が中に入っていて

「

国として大丈夫なの?! 私ってば、関係無くてもちよつと心配になっちゃうよ!

ああ、日本とトリエスが同じ世界にあつたら!

私、日本政府に本気で助言するの!

『これでもかかっていうくらい甘い物を贈って、大国トリエスを傀儡にして、んで、資源があれば無尽蔵に掘りつくせ! 勿論、タダでね!』

ってね! 助言するよ!

きつと時の政権は諸手を挙げて取り組むよね! だって、トリエスに原油が眠っていた日には、日本全国、お祭り状態になるもん! 先物と中東情勢で値上がりまくりの石油が安くなつてさ、政権は支持率アップ間違い無しだよ! 企業だって原料代を気にしなくてよくなつて小躍り状態でしょ? 原料代がかからない分、安価に出来た商品で向こうの世界で鬼のような攻勢がかけられるんだよ? そうなつたら安い労働力を提供する国にも負けないよね! つーか、日本の良質な商品で安価だったら、もう世界に敵は居ないよね! 駆逐出来ちゃうよね! 完全なる日本の天下が見えてくるってなもんだよ!

私は陛下の言葉に従順に何度も頷いた。陛下に飼われている珍獣らしく、犬猫のようにである。

くーん、にゃーん、わんわんわん、チュンチュンチュンのチュンチュンチュン。

「了解です! 上に戻ったら絶対作って、陛下の執務室の机の上に置いておきます! 必ずやります! 軍曹!」

私は決意を見せる為に、陛下にピシッと敬礼をする。

右手を上にも、足も揃えてみたよ! でもまあ素足だからさ、音は鳴らないんだけどね?

「ぐんそう?」

「あ、間違えました! 陛下でした!」

「……お前な。まあよい。行くか」

「はいはい！」

私の気分良い返事に、陛下は疲れたように髪を掻きあげ、扉の方へと歩きだした。

そして扉の真ん前まで来て、陛下と私は立ち止る。

「……………」

「……………」ささ、陛下、扉を開けて下さいよ」

私は彼の背中に当然の如く隠れている。

扉を開けたらどうなるか、まるでパンドラの箱を開けるかのようには私は胸を高まらせていた。

お願い、日本に繋がって！ どの場所でもいいよ！ 戻ればね！ 近くの交番まで行けば家に電話かけさせてもらえると思うからさ！

あ、もしもね？ 扉を開けたら日本に直行で、んで不運にも陛下を巻き込んだりした場合、私ってば物凄く親切だから、日光江戸村に金髪紫瞳の忍者として就職出来るように尽力するからさ、陛下、安心してね！ 職の斡旋は任せて！ 最悪、池袋か秋葉原か中野、新宿二丁目まで職を見つけてあげるね！

「小娘、お前、余を盾とするつもりだな？」

「え、なに言ってるんです！ そんな事ある訳ないじゃないですか！ やだなあ、へ・い・か！ この私が一国の国王陛下を盾になん

」

「しらじらしい言い訳はよせ。お前の軽い頭が考える事くらい誰にでも手に取るように判るだろうよ。 それより開けるぞ」

言って陛下は深呼吸をするようにして呼吸を整えると、まず短剣の鞘部分を扉にあてた。

扉と金属がぶつかるカチリとした小さな音が耳に入る。

暫く短剣を扉につけていた陛下は、それを離すと扉に触れていた部分を触った。

「何してるんですか？」

「一応、温度を確かめてみようかと思ってな。触って火傷など冗談

ではない」

「え、熱そうには見えませんが……」

「そうだが、光っているからな、とりあえずだ」

「で、どうですか？ 熱いですか？」

私が陛下の背に小判鮫のようにピタリと張りつきながら聞くと、彼は短剣の扉につけていた部分を向けてきた。

「触ってみるか？」

「いえいえ、いいですよ！ 私つてば遠慮させて頂きます！」

「……お前は完全に余を人身御供にするつもりだな」

陛下が、やっていられないとばかりに溜息をついた。

「熱くはない。開けるか」

陛下が左手に短剣を持ち替えて、右手を扉の方へと伸ばした。彼の左手を見ると、短剣を何時でも抜けるように持っている。

陛下の右手が扉に触れた。

私は唾をぐくりと嚙下する。

ドクンと胸が高鳴った。

陛下がゆっくりと扉を押す。

瞬間、蛍光灯の明かり程度に光っていた扉がフラッシュを焚いたように強まった。

「きゃ、眩しいです！」

「気を抜くな」

そう陛下が言って直ぐに強まった光が一気に弱まり、重い石を擦り合わせたような音を発しながら観音開きに扉が開く。

ああ、これで私は日本に戻るんだ。

なんの根拠もなくそう思った時、想定外の音が聞こえた。

… 44 (後書き)

池袋・秋葉原・中野 … オタク、マニア向け関連のモノがある街

新宿二丁目 … ゲイの街として有名

扉を開けた陛下の背中にへばりついてた私は、不思議な“音”が耳に入ったのに思わず聞こえたままの“音”を口にした。

「“ぴきゅっ”」

「……………」

「……………ぴきゅ？」

「“ぴきゅぴきゅ、ぴゅ、ぴきゅぴきゅ、ぴゅ、ぷびび”」

「……………」

「……………え、陛下、鼻でも詰まってるんですか？」

慢性アレルギー性鼻炎持ちの私と同じだね！ な・か・ま！ な・

か・ま！

「“ぷびびっぴ、ぴきゅーん、きゅんきゅんぴ”」

「……………小娘」

「……………陛下？ あれ、ぷびびって陛下の鼻の音じゃない？ え、じ

やあ何？」

「“ぴきゅっ”」

「……………」

「……………陛下？」

呼びかけても陛下は扉の入り口から微動だにせず、そして不思議な音も聞こえ続けるのに、私は小判鮫のようにひっついてた彼の背中から身を離し、陛下の前に回り込んだ。

そして絶句する。

「ぴきゅーん」

「……余の顔に何がっている、小娘」

「……………」

「きゅぴきゅぴ」

「……小娘？」

「……オ……………」

「きゅ」

「なにやら嫌な物がついていないか？ 気色が悪い感触が……………するんだ」

「オ……………」

「ぶきゅぶきゅ」

「お？」

「オオサンシヨウウオ、オオサンシヨウウオが！」

「きゅ」

「おおさんしょううお？」

「オオサンシヨウウオが陛下の顔についてます！ 異世界日本の特別天然記念物オオサンシヨウウオですよ、陛下！ しかもシヨッキングピンク地にライトグリーンの斑紋なんて反則技的色彩なオオサンシヨウウオです！」

私はあんまりにも驚いてしまって、思わず陛下から一メートル後ずさる。

背中に扉の片側があたった。触れた扉は陛下が言っていた通り熱くもなく、石のようにひんやりとした、ある意味心地のよい温度を肌に伝えた。

そんな私の視線は目下陛下の顔にへばりついている有り得ない色合いのオオサンシヨウウオに釘付けた。

陛下のキラキラしい超絶美形顔には今、日本で特別天然記念物指定されているオオサンシヨウウオらしき生物がべったりとひっついてる。

色は先程陛下に言った通り、シヨッキングピンク地にライトグリーンの斑紋という派手すぎる蛍光色を有していて、大きさは三十七

ンチ程だ。胴部分は濡れていない。この謎の地下通路には水が無いから乾いてしまっているのかもしれない。

その謎のオオサンショウウオが陛下の黄金の頭上に尾を捲きつけ、扁平した大きな顔部分を下にして彼の視界を遮るように顔についている。

更に、短い四本の足でぺたんぺたと陛下の顔を撫でるような仕草をしていた。日本の特別天然記念物であるオオサンショウウオ同様、前肢の指は四本、後肢の指は五本で、爪が無いので彼の皮膚を傷つける事はないだろう。

謎のオオサンショウウオは、私の目にはどうも嬉しくて仕方ないといった感じで陛下の顔にひつつきながら動き続けている。さながら、飼い犬がご主人様に嬉しくって楽しくって大好き過ぎて尻尾を振りまくっているといったような感じであった。

「きゅぴ」

「……………」

「……………」

「きゅんきゅん」

「……………おおさんしょうおとは、にほんでどう言われている生き物だ、小娘」

陛下は私同様、あんまりな状況、きつと彼の許容を超えてしまった想定外な出来事に、びっくりとも身動きをしないで実に淡々と私にそう聞いてきた。

謎のオオサンショウウオはそんな状態な彼を少しも気にする様子も無く、ぴきゅぴきゅ言いながら短い四本の足で陛下の顔を撫で続けている。

あ……………今、舐めた！陛下の顔、舐めたよ！べろんって舐めた！つか今、謎のオオサンショウウオのねっちやりとした舌が陛下の唇をちよっぴつと割らなかつた？！

「っー！」

「……………へいか？あの、日本のオオサンショウウオはですね

？ く……国の特別天然記念物指定されている希少な生き物で……、
あの……指定される前は貴重な蛋白源として食用に
「食用？」

「はい、今は違うんですけど、……そんな両生類で
「っ！」

どう説明していけばいいのか彼の様子を見ながら考えて言葉を紡いでいると、突然、陛下の全身に底冷えするような殺気が漲った。
え、何で？

「両生類?!」

「え？」

「小娘！ 今、お前は両生類と言ったか！」

「え、はい……オオサンショウウオは両生類で……す？」

私がそう言った途端、陛下と出会って初めて聞く彼の悲鳴に近い声が地下通路に響き渡った。

「取れ！ 小娘！ 今すぐコレを取ってくれ！」

「は？」

「今すぐ取れと言ってるんだ！ 王としての命令だ！」

「お、王として……わ、判りました？」

陛下の絶叫に近い命令に、何が何やら良く判らないながらも私は彼の顔に手を伸ばした。

「おいで、いい子だから」

言いながら私が陛下の顔についている謎のオオサンショウウオの胴体を慎重に掴むと、それは大人しく私の手に身を預けてきた。

触った感じはザラザラネバネバしていそうな見た目に反し、さらっと滑らかな、ぶによんとした柔らかい感触だった。体温は低い。ひんやりとした感じだ。

謎のオオサンショウウオを陛下の顔から完全に取り除くと、目にしたもの全てを石に変えてしまうメデューサのような凶悪な紫の瞳が出現した。

それがあまりに極悪過ぎて、私は思わず閉口してしまう。きつと

この世界の鬼畜部門所属の大盗賊の頭だって、こんな目つきはしないだろうつてくらいである。

「ぶゆきゆ」

「……………」

「……………」

「きゅぴきゅぴ」

「……………」

「……………」

「きゅんきゅん、ぴちゅちゅぴゅ」

「……………小娘、それをこちらに渡せ」

陛下が手にしていた短剣の鞘を払った。

その払い方がとにかく乱暴で、鞘が一度壁にあたり通路の石畳の上を勢いよく滑る。地下通路に金属音が大きく響き渡った。

陛下が一步私の方へと足を進める。

つられるように私は後退した。後退先は必然的に扉の先である。

「へ……………陛下？」

私は謎のオオサンショウウオを胸の前で両手に持ったまま、じりじりと後ずさった。

そんな私たちを余所に、手の中の謎の生命体は無邪気な様子でぴちゅぷちゅ言っているだけだ。

「渡せ、小娘。その醜悪なモノを」

陛下が一步一步足を進めながら、抜身の短剣を持っていない方の手を私に差し出した。

「しゅ……………醜悪って？」

「醜悪だろうつ？」

言って彼は、今日麩の味噌汁……………じゃなかった、恐怖の大魔王の如くの様相で紫の瞳を細め、形の良い唇を薄ら笑いを浮かべるように歪める。

陛下と私は、完全に扉の先へと足を踏み入れた。

踏み入れた先は日本基準でいう八畳くらいの広さで、何の変哲も

ない、基本的に何も無い小部屋だった。床も壁も天井も、地下通路と同じ材質、光り方である。出入り口も、いま入った一ヶ所しか無かった。

ただ、部屋の右隅に何かがあるのがチラリと目に入ったが、今はそれどこではなく、この目の前の物騒な男との対峙を私は余儀なくされていた。

私の背に小部屋の壁があたる。

それは部屋の奥まで追いつめられたという事を意味していた。

「ねね、陛下、一体全体どうしちやったんですか?!」

私は小部屋の壁面にぴったりと背中をつけて彼を見遣る。視線の先の陛下は、まるで大量殺戮犯のような鬼気迫る気配を漂わせていた。

「どうしただと? 別にどうもこうもないが? お前の手の中にあるその醜悪な生き物を渡せと言っているだけだ」

「わ、渡したらどうなるんですか?」

何がおかしいのか、陛下がくつくつと笑った。

その笑い方に私は背筋に震えが走る。

やばい! なんかこの笑い方、つい最近どこかで見た事あるような?! っていうか、陛下ってこういう笑い方、素である人間なの?! こえーよ! 何者だよ、貴様! トリエスの国王陛下じゃなかったの?! ねえ!

「無論、殺すに決まっているだろう?」

さも当然といった感じで言い放った陛下に私は仰天した。

「え、殺すって、ウオちゃんを?!」

「ウオ?」

「はい! オオサンショウウオじゃ長いんで、ウオちゃんと名付けました、今! オオサンショウウオのウオちゃんです! 可愛いでしょ? 宜しくね、へ・い・か!」

私はウオちゃんの愛らしさを少しでも陛下に判って貰うために、ウオちゃんの首かもしれないあたりに指を差し入れ、強制的にお辞

儀をさせた。

「ぴきゅ」

そんなウオちゃんの愛らしい動作と声に陛下が激昂する。

「可愛いも何もあるか！ 馬鹿か、お前は！」

「馬鹿つて！」

「馬鹿だろう！ 醜悪な両生類に名を付けるなど馬鹿という以外な
んと言える！」

陛下は、鼻の頭に皺を寄せんばかりの心底嫌そうな表情でウオち
やんを睨む。

その睨みっぷりは、まるで親の仇を目にしたかのようなだった。

「え、可愛くないですか、ウオちゃん。ツルツルしてるし、柔らか
いし、足が短くて丸っこくて愛らしいじゃないですか」

色合いはかなりアヤシイけどね！

「ふざけるな！ 両生類なぞこの世に存在するだけでも虫唾が走る
！」

「え」

「余はな、小娘！ この世の何よりも両生類が嫌いなんだ！」

「やや、陛下、そんなけつたいな……」

「やはりあの時、ルドルフなど無視して軍を出していれば！」

「え、陛下つては何を言つて？」

私が首を傾げながら尋ねると、陛下が信じられない事を口にし出
した。

「余が十五の時だ！ この世に存在する両生類がどうにも許せなく
て、大陸に居る全ての両生類を駆除せんが為に全騎士団を出そうと
したんだ！ それをルドルフが！」

「……ルドルフさんが？」

「ルドルフのヤツが『大陸中の全両生類駆除などというふざけた理
由であくまで全軍を出すというのなら、城の文官全てを解雇し、私
も宰相職を辞します。せいぜい貴方ひとりでこのトリエスを維持な
さってみては？』とな、情の欠片すら無い顔で言い放ったんだ！

あの冷酷な男は！」

陛下がそう吐き捨てるように言うのに、私は開いた口が塞がらなかった。

だって、ねえ？ え、陛下つてもしかして。

「馬鹿？」

「何?!」

「え、陛下つてば、それ本気で言ったんですか?!」

私の心底驚く様子に、陛下が最高に不機嫌な声音を出す。

「本気とは？」

「大陸中の両生類駆除の為に全軍を出すという馬鹿げた事をですよ！」

陛下の形の良い眉が跳ねあがった。

「馬鹿げた事をだと?!」

「馬鹿げてますよね?! そんな事で軍を出すなんて!」

え、マジで本気で言ってるのかな、こんな事をこの男は！ だとしたら、どんだけ自己中迷惑オコチャマ男だよ！

私は何だかまだ見ぬルドルフさんへの同情心がむくむくと湧き起こってくる。

「普通に考えなくてもルドルフさんが正解ですよ?! 陛下だつ

て、その対象が両生類じゃなかったら、ルドルフさんの意見に賛成するでしょ?! 即刻賛成派にまわりますよね、へ・い・か！」

「……………」

陛下が沈黙し、私は嫌みつたらしく大袈裟に深い溜息をついてやった。

「そんなさ、嫌いっただけで両生類駆除の軍隊なんて出された日には、トリエスだけじゃなく、他国にも迷惑極まりないですよ！ なんて両生類如きで他国の軍を自国に入れないといけないんです！ 馬鹿ですか！ もう本当に天才我儘坊やの発想が私には判りません！」

きつと私だけじゃなくて、みんな判らないと思うよ！ この世界の全人類がね！

「さつき陛下、ルドルフさんが独身だって言っただじゃないですか。ね、陛下」

「……ああ」

「それはね、へ・い・か・の・せ・い・で・す・よ！」

「ぴきゅ！」

「っ！ ……何故？ ……何故、あれが独身なのが余のせいになる？」

陛下が黄金の髪を乱暴に掻きあげた。

彼は抜身の短剣を一振りすると、小部屋の外に転がっている鞘を取りに地下通路の方へと向う。

どうやら突然の両生類来襲による激昂はおさまってきたらしい。

彼は冷静さを取り戻しつつあるようだった。

「え、それは陛下のお守が大変だからに決まってるじゃないですか」

「……………」

「そんな両生類駆除に全軍を出すなんて言い出す国王の手綱を宰相

が取らなくて誰が取るんです？ 居ませんよね？ 可哀相に、ルドルフさん！ 彼、宰相職にある限り一生独身なんじゃないですか？ 悲惨すぎます！ 陛下が後宮で快樂味わいまくっているのに、ルドルフさんは自己中我儘オコチャマ男のお守ですよ！」

陛下が鞘を拾い短剣をおさめた。カチリとした小さな金属音がして、彼は再び小部屋へと入ってくる。

そして部屋全体を見回し、右隅にその視線が行くと彼は盛大に肩間に皺を寄せた。

その見事な寄せっぷりに私も自然に右隅に目を向ける。

「……………」

「……………」

「……………なんだあれは。小娘、見てこい」

「……………こういう場合ってさ、普通、男が行くんじゃ？ まあ、いいんですけどね？」

「ぶきゅ」

「っー」

私はウオちゃんを左肩に乗せると、小部屋の右隅に向かった。

右隅には、二メートルくらいの長く平べったい物が円を描くようにしてあった。色は黒い。

私はしゃがんでその物体に触ってみる。

後ろからは、陛下のびりびりとした殺気を含んだ視線が感じられた。

「なんか皮みたいですね、生き物の」

「皮？」

「はい。脱皮した皮というより、ミイラ化した感じですかね」

「みいら？」

「あー…生き物の死骸というか干物というか」

「……………それで？」

「うーん……………相当古そうですね。生前はたぶん頭部が丸くて大きく

て、寸胴で尾があつて、短い手足……………あれ」

「……………ウオか？」

「そうです！ ウオちゃんだ！ 陛下、ウオちゃんの巨大版ミイラです、これ！」

私が見開いてミイラ化したものをよく観察すると、それは大きな頭部の巨大オオサンショウウオもどきが丸い円を描くようにしてあつた。

前に写真で見た事のある日本のオオサンショウウオよりも頭部分はかなり大きい。円の約半分を頭部が占めるような大きさだつた。「ウオちゃんに係するミイラでしょうか？」

「知らん、そんなものは」

陛下の心底嫌そうな非協力的な言葉を合図に私は立ち上がった。

陛下の方を見遣ると、彼はミイラから最大限の距離を稼げる対極側に腰を下ろそうとしているところだつた。

「知らんつて。陛下にそう言われたら、異世界人の私にはどうすることも出来ないじゃないですか」

「ならば何もしなければよいだろう？」

もうよい。座れ、小娘

何が何やら全く判らんし、腹も空いたし、足も痛いし、疲れたし、眠いし、両生類も居るし、迎えが来るまでこの場で待つ」

落下場所まで戻つたところで、どうせ待つ事になるだけだと言つて、陛下は壁に身を預け、短剣を足元近くの床に放り投げた。もう彼の全てが投げ遣りさを表している。

私はそんな投げ遣り陛下の横に腰を下ろす為に彼のもとへと向かう。

途端、彼は嫌そうな視線を向けてきた。

「小娘、その左肩に乗っている物体を余に近づけるな」

「え、じゃあ、どうすれば？」

「ウオを死骸の横に捨てて、こちらへ来い」

「捨ててつて、陛下」

「捨てると言っている」

「はいはい」

私は仕方なしにウオちゃんをそつとミイラ近くの床の上に置いた。
「ウオちゃん、迎えが来るまでの間、ここで大人しく待っててね？
あそこの自己中我儘傍迷惑男がウオちゃんのこと怖いんだって」

「誰が怖いなどと言った！」

「ぴつきゅんぷつきゅぴ！」

「っ！」

「了解、判ったって。仕方ないから此処で待ってるってさ、陛下」
偉いねウオちゃん、と肩を竦めながら私が適当にそう言つと、陛下の米神が波打った。

もう本気で心の底から両生類が大嫌いらしい。

私は呆れの溜息をつきつつ、彼の横に腰を下ろした。

腰を下ろした途端、今日一日の疲れが一気に押し寄せたみたいに体が重くなる。

「あー…なんだか疲れ果てました、私」

小部屋の壁面に陛下同様、身を預けて座りこんだ私は、立てた膝に両腕を置き、かくりと顔を伏せた。

もう本気で疲れ果てました。一日の内容が濃すぎだよ。物凄く眠いし……。

そんな疲れモードな私の真似なんてしないでいいのに、横に居る陛下も立てた膝に腕を置き、顔を伏せていた。

「余も疲れた。……散々な日だ、今日は」

言つて彼は「厄日とはこういう日の事をいうのだから」とぼつりと呟いた。

「なんで私つてば、真夜中にこんなアヤシイ小部屋に居るんでしょっ？」

「それはこちらの台詞だ」

そこで陛下と私は同時に深い深い息を吐く。

「結局、この小部屋、なんだったんでしょっかね？」

「判らん」

「判らんって。何か考えて下さいよ、天才なんですから」

「何度も言うが天才ではない。そんなに気になるのなら秘密の小部屋とでもしておけ」

「秘密の小部屋……なんだか全く考えていないっていうか安易ですよ。センス無いっていうか」

「……暫く何も考えたくはないんだ」

「完全放棄ですか。まあでも、なんかがっかりですよ、私。こんなに疲れ果ててまで此処まで来たのに」

「がっかり？」

すぐ横に座っている陛下が顔を上げた気配を感じたので、私も顔を上げた。こつりと壁に頭をつけて彼の顔を見ると、やはり陛下も疲れたように壁に頭をつけて私に視線を向けている。

「だって、日本に繋がってなかったじゃないですか」

「だから言っただろう？ 余はあるとは思えないと」

「……言ってみましたけど」

「結局、それに巻き込まれた余に何か言うところはないのか、小娘」

「それは……だって、ちゃんと陛下には和食と和菓子を作っている対価を払うじゃないですか、私」

「……そうだったな」

「陛下」

「なんだ」

「ウオちゃん、どうするんですか？」

「……」

陛下は顔を正面に向けて、一度嫌そうに目を閉じた。そして黄金の髪に指を差し入れるようにして左手を額にあてる。疲れたように息を吐くと、目を開け、現れた紫の瞳だけを私に向けた。

「ねえ、陛下」

「……放っておけ」

「え、それは酷いんじゃない？」

「何故？」

「だって此処、何も無いじゃないですか。水も無いんですよ？ 両生類なのに死んじゃいますよ。既に乾いてるじゃないですか、ウオちゃん」

「しかし、あれは今まで此処で生きてきた訳だろう？ 問題ないのではないか？ そもそも別にあれが死んだところで余は構わんし」

「陛下さあ」

「……なんだ」

「これからも生活していかなければいけない自分の城の下で、しかも目の届き難いこんな地下通路でさ、大嫌いな両生類が生息してても平気なんですか？」

「……」

「もしかしたら知らないうちに大繁殖しているかもしれないですよ？」

「……しかし、今現在、此処には一匹しか居ないではないか。繁殖は」

「完全否定できるんですか、それ」

「……」

「ウオちゃんの生態、陛下、知ってるんですか？」

「……いや」

「そういえばウオちゃんて、異世界日本的には有り得ない色彩の生物なんですけど、あれはトリエスでは一般的な生き物の色なんですか？」

「そんな訳あるか。どう見ても普通じゃないだろう？ あの色は」

「え、珍しいんですか？」

「珍しいものにも。初めて見るし、城の図書室にある図鑑にも書いては無かった」

「いつ読んだんですか、その図鑑」

「昔。王になる前だ」

陛下は額に当てていた手を外し、顔を少し上にあげた。部屋の天井を見るようできて何処か遠くを見ているようだった。

私はそんな様子の彼の肩に寄りかかるように頭を乗せる。
本当に眠い。

かつて無いくらいに疲れていて、瞼が下りるのは時間の問題のよう
うに感じられた。

陛下はそんな私を咎める事も、特に嫌がる素振りも見せなかった。

「王子様の時？」

「ああ」

「城の図書室の本、どのくらい読んだんですか？」

「そうだな……七割程かな」

「七割ですか？ 凄いですね、それ」

「暇だったからな、王子の時は。……幼かったし」

彼が肩を少しだけ竦めたのが乗せた頭を通じて判った。

「覚えてるんですか？ その時に読んだ内容」

「ああ」

「流石天才。……まあじゃあ、ウオちゃんはトリエスでも希少生物
って事なんですな」

「……………」

「それってばさ、陛下」

「…………聞きたくない」

「最高権力者のそんな言葉、それこそ聞きたくないですよ、私。情
けない」

「……………」

「ウオちゃん、珍獣保護法を適用しないといけない生物なんじゃない
いですかね、もしかしなくても」

「……………」

「へ・い・か、そうなんでしょう？ 本当はちよつと気づいちゃっ
てるんでしょう？ いくら法に国王次第とか書いてあっても、最高
権力者として公平な判断をすれば、ウオちゃんって珍獣保護法を適
用しないといけない生物なんだって。 ねえ、へ・い・か」

「……………そうだな」

「じゃあ、決まりですね。ウオちゃんは珍獣です。私が二号だから、ウオちゃんは三号です。珍獣三号」

「……………」
「連れて帰りますからね、私。ウオちゃんを。珍獣部屋で私と一緒に暮らします」

「暫くあの部屋は使えないぞ」

「え」

私はちよつと驚いてしまつて寄りかかっていた陛下の肩から身を起こした。彼の顔をまじまじと見る。

そんな私に陛下は呆れたような目を向けた。

「害獣用の液体の存在を忘れたのか、お前は」

「あ、そうでした。じゃあ、私つてば、これからどうすれば？」

「知らん。その辺に転がつてる。珍獣だし」

「……………酷い」

「それより、お前のかぼちゃぱんつには、ぷつちよの他に何か食べ物が入っていないのか？」

「は？」

「腹が空きすぎた。何か口にしたい」

「陛下、あのね？ 確かに今日はぷつちよを挟み入れてたし、私つてば、全開にカボチャパンツ晒してますけど、これつて一応、下着なんですよね？ 普通、下着に食べ物つて入ってないですよね？ 服じゃあるまいし」

「……………そうだな。失念していた」

そこまで話をして、陛下と私は壁に預けていた身の力を完全に抜いた。互いに対極側に居るウオちゃんに何となく視線を向ける。

ウオちゃんはずっと小さな瞳でこちらを、厳密には陛下をじっと見ていた。

「……………」

「……………」

「……………眠いですね」

「……………眠いな」

「……迎え、来ますかね。遅いですけど」

「……朝を過ぎて来なかったら、戻った時に処刑してやる」

「……物騒すぎです、その考え。恐ろしい」

「……そうか？」

「……少し寝ていいですか？」

「……いいぞ。不快な生物は居るが特に危険は無さそうだな。

……余も少し仮眠を取りたい」

「……じゃあ、おやすみなさい、陛下」

「……ああ」

その会話を終いに、陛下と私は口を閉じる。

そして数分もしないうちに、私たちは謎のアヤシイ小部屋、陛下の言う秘密の小部屋で、自然に肩を寄せ合い、ほぼ同時に寝息を立て始めたのだった。

ふと気がつくと、私の目の前には一葉ちゃんが立っていた。

私と一葉ちゃんが居る空間は、ぼんやりとただ白くて曖昧で、何かがある訳でも、見える訳でもなかった。

彼女は五千円札に印刷されている通りの姿で、座り込んでいる私を冷たく見下ろしている。

「……………」

なぜ一葉ちゃんが目の前に居るのか私は全く判らなくて、何も言葉が発する事が出来なかった。

「その貧乳ケツデカドブス娘」

そんな私に一葉ちゃんは、何処か小馬鹿にしたような雰囲気話かけてくる。

いきなり貧乳ケツデカドブス娘って。

ああ、私って、本当に一葉ちゃんとの相性は最悪なんだと、日本に四種類しかないお札のうちの一種類に、どうも激しく嫌われてそうなのに私は物凄く悲しくなった。

「貧乳ケツデカドブス娘、この私が呼んでいるのだけれど、無視なのかしら？」

「……………いえ、すみません」

一葉ちゃんが私の謝罪にふんと鼻を鳴らした。

その様子に、馬鹿にもされているけれども心の底から嫌われているのも判る。

私、一葉ちゃんに何かしたのかな？ 何もしていないと思うんだ

けどな。だつてさ、一葉ちゃん、パパの給料日の次の日にやってきて、その日のうちに英世とバトンタッチしちゃうじゃない？

私は遣る瀬無くなって深く息をつきつつ、慢性アレルギー性鼻炎の鼻をズルズルと吸った。

「汚い娘。おお嫌だ。汚いし、醜いし、品も無いし、頭も悪いし、この私を持っていられないくらい貧乏だし、取り柄も美点も全く無いし、女として終わっているし？」

酷過ぎるよ、一葉ちゃん！

本当、私に何か恨みでもあるのかな？　つか、私つてば、そんなに酷い？　あの冷酷変態極悪鬼畜自己中我儘傍迷惑男ですら、そこまで言わなかったのに？

私、もう財布に一葉ちゃんを入れるのは止めよう。パパに英世五人で渡すよう言っておかないとな。

「そんなお前に、私から質問があるわ」

「質問、ですか？」

「そうよ。本気でこんな役目やりたくはないのだけれど、英世は研究に忙しくて、二千元札は存在感無さ過ぎて消えかかってね。今、何処に潜んでいるのか大搜索中なのよ」

私は首を傾げた。

「諭吉は？」

「諭吉？　あら、呼び捨てなのかしら？　お前程度の分際で」

「……あ、ごめんなさい。諭吉様です」

一葉ちゃんは着物の袖で口元を押さえ、嫌そうに眉を寄せた。

「本当、頭の悪い娘ね。お前なんて一生涯男が現れないでしょうね。ふん、いい気味」

「え」

「あら、現れるとも思っているの？　馬鹿な娘。日本では彼氏のひとりも居なかったし、トリエス王にも処女を要らないと言われたし？　パーシヴァルは妄想の世界の住人ではないの」

「……………」

「誰も、あちらの世界でも此方の世界でも、お前の処女を貰ってく
れるような男は居ないわ。だってお前、貧乳じゃないの。致命的よ」
一葉ちゃんの言い様に、私は激しい衝撃を受けていた。

その衝撃に気持ちは麻痺してしまっていたが、体は正直なのだろ
う。涙がぼろりぼろりと頬を伝う。

私は右手で目をごしごしと擦った。

「酷い……一葉ちゃん」

「お前に一葉ちゃんなどと言われたくないわ！ 馴れ馴れしい！
さあ、さっさと終わらせるわよ！ 私、早く帰りたいの。お前如き
に割く時間は本来なら無いのよ！ お前と違って私は日本で必要と
されている存在なのよね。言っている事、判るかしら？」

「……はい」

一葉ちゃんは私たちが居る白い空間の、彼女自身の足元の部分に
屈んで手をついた。

手のついた部分が仄かに光り、途端、彼女は何かを引きあげ始め
る。

引きあげた物は三つ。それぞれ色が違う等身大サイズの人形だっ
た。

「準備完了。いい？ 貧乳ケツデカドブス娘。質問よ」

「……はい」

「『お前の落としたのは金の諭吉、銀の諭吉、糞尿の諭吉、どれか
しら？』」

「は？」

私が質問の意味を掴み損ね問い返すと、一葉ちゃんの目が吊り上
がった。

「ど・れ・か・し・ら？」

私はとにかく一葉ちゃんが怖くて、あまりうまく動いてくれない
頭を必死で働かせた。

「えっと……えっと……」

「私、忙しいの。早くしてくれないかしら？」

「あ、ごめんなさい！ えっと、あの、き……」

「き？」

「金の諭吉です！」

私が勇気を出してそう言った瞬間、一葉ちゃんの顔が般若の形相に変化した。

「この大嘘つきめ！」

一葉ちゃんが私に向かって拳を振り上げる。

私は恐ろしくって身を卵のように丸くする。

「お前は二度と日本の土を踏めないと思え！」

「きゃっ！」

言って一葉ちゃんは、振り上げた拳を渾身の力を込めて私の頭に叩きつけた。

「……いつたあ」

ずくんずくと頭を襲う痛みに、私は手をあてながら身を起こした。

一葉ちゃんに苛められて涙が止処なく流れ続ける目で周囲を見遣ると、場所は寝る前に居たところと同じ、城の地下のアヤシイ謎の小部屋だった。

私は慢性アレルギー性鼻炎の鼻を嚙って少し嗚咽を漏らしながら、何故か扉の方へ向いて身構えている陛下の背中をぼんぼんと叩く。どうやら私は陛下に寄かかって寝ていて、彼が急に身を起こして身構えたから、小部屋の床に倒れたようだった。頭の痛みは一葉ちゃんに殴られたからではなく、その際にぶつただけだろう。

ちよつと陛下、急に身を起こすなんて考えなしで思いやりの欠片も無い行動、酷いじゃないですか！ ……と本来なら文句のひとつ

でも言うところだけど、私は今、夢の中の一葉ちゃんの精神的苛めに大打撃を受けていて、それどころではなかった。

私は背を叩いても反応を返してくれない陛下の背を再度ぼんぼんと叩く。

そんな私の呼びかけに、陛下は振り返りもせず押し殺した声で応えた。

「大人しくしている、小娘。誰か来る」

「え、誰かって？」

「迎えだといいが」

その陛下の言葉に私は仰天してしまう。

思わず怖くなってしまつて、私は陛下の背にまたも小判鮫のようにひつついた。ついでに彼の背中に鼻水もつけてみる。

「っしっしっし。」

「……何をしている、小娘」

「いえ、別に。ねえ、陛下、それより迎えだといいがって、そうじゃないかもしれないって事ですか？」

陛下が私を後ろ手に押しつけた。

「ひつつくな。動きが鈍くなる。 どうも気配を殺しているよ
うなんだ。迎えの者の過ぎた戯れだといいが、一応、違う場合も想定しておかないとな」

「過ぎた戯れ？」

「居るんだ。そういう事を好む者が。小娘、お前に渡した短剣を寄せ」

「え、あ、はい」

陛下のちよつとぴりぴりした雰囲気には慌ててカボチャパンツから短剣を抜き、彼に手渡した。

陛下は短剣を受け取ると、二本とも鞘から抜く。

「持っている」

「はい」

私に鞘を押しつけると、彼は姿勢を一段上げた。そして、短剣を

それぞれ両手に持ち、見た事のない不思議な握り方に変える。

「あと十リス」

「りず？」

「長さの単位だ」

「ねえ、陛下、大丈夫なんですか？ 迎えの人じゃなかったら」

「さあな」

「さあなつて。私、死にたくないです」

「それは余もだが？ それより長剣を持ってくれば良かった……といつても詮無い事か。今回は」

「陛下」

「黙っている」

「……………」

「来た」

「っ！」

私が悲鳴を上げる間もなく、陛下が直ぐさま行動を起こす。

瞬間、扉の向こうからどこか飄々とした声が聞こえた。

「あ、陛下、俺達ですからね。攻撃してこないで下さいって、うわっ！」

どちらかというと明るい声が聞こえたのに、陛下は問答無用で部屋に入ってきた男の人に向かって抜身の短剣を一本投げつけた。

しかも信じられない事に、その男の人の顔面めがけて直球一直線のマジ投げである。

部屋に入ってきた男の人は、飛んできた短剣を素早い動きで長剣を抜き薙ぎ払った。

短剣は部屋の右隅、ウオちゃんがちょこんと待っているミイラの近くへ跳ね落ちる。

ミイラにあたって短剣は動きを止めた。

「危ないじゃないですか、陛下！ 何をするんです！」

「普通に来い！ 馬鹿者が！」

短剣を投げつけられた人と陛下が声を荒げて応酬をしていると、

もうひとりの違う男性が部屋に入ってきた。

「……………」
その二人目の男性は無言で陛下に目を伏せて礼らしきものを取っている。

陛下は手にしていた短剣の握り方を普通に戻すと、肩の力を抜いた。

「随分と遅かったな。ディルク、グイード」

どう聞いても棘がふんだんに含まれている陛下の声音に、短剣を投げつけられた男性が肩を竦めた。

その男性は髪は亜麻色、瞳も髪と同色で、背は陛下と同じくらい。年の頃は陛下とそう変わらないだろうと思われる、飄々としているが何処か純朴さを感じさせる人物だった。

もうひとり。まだ一言も発していない方の男性は、黒髪に深い緑色の瞳で、背は前者二人よりも頭半分ほど高い。年は陛下より五、六歳若いかもしれない。

容姿の程は二人ともまあまあと言えた。中の中、中の上を彷徨っている感じた。

やはり陛下クラスは美男美女率が高そうなこの異世界と云えど、そうそう転がってはいないものなのかもしれないと思しながら、私は亜麻色の髪の方の男性に何だか見覚えがあるような気がして首を傾げた。

何処だっただろうと思つてジツと見てみると、その彼がふとこちらに視線を向ける。あ、目が合った、そう私が思っていると、彼はさっと上着を一枚脱いだ。

亜麻色髪の彼は脱いだ上着を手に私のもとに来ると、私と目線の高さを合わせるようにしてしゃがむ。そして上着で包むようにして私の体に被せた。

彼は私の頬に流れ続けている一葉ちゃんの精神的苛めによる涙を、指で優しく拭ってくれる。

優しいんだね、亜麻色髪の彼！ ありがとうね！

なんて私が感激していると、彼は痛ましそうに私を見、吃驚するような事を咎め口調で言い始めた。

「可哀相に。……陛下、無理強いは褒められたものではありませんね」

「え」

「何？」

「び？」

亜麻色髪の彼の声に、私、陛下、ウオちゃんと続く。黒髪の彼は無言だ。

「ああ、泣かないで下さい、珍獣様。もう少し早く来れば良かったのですが申し訳ありません。まさか陛下が貴女をこのような場所で襲うとは思ってもありませんでした」

「……え、あの？」

「待て、デイルク！ 何を言っているんだ？！」

「ぷぷ、ぴつきゅ！ ぷきゅぷみゅぷみゅ？！」

ああ、亜麻色髪の彼はデイルクさんと言っただね、なんて彼の言う事に驚きつつも思っていると、立ってこちらを見ている陛下の額に青筋が浮いていた。

陛下、よく青筋立てるよね。頭の血管、大丈夫なのかな。

私がそんなどうでもよい心配をしていると、デイルクさんが私を慰めるようにフワリと軽く抱きしめる。

私は身内以外の男の人に初めて優しく抱きしめられて、口をぽかんと開けてしまった。

ちなみに涙はまだ流れ続けている。

一葉ちゃんの精神的攻撃による打撃がまだ尾を引いていた。

「怖かったでしょう？ もう大丈夫ですよ。この密室的空間に陛下と二人きりでは無くなりましたからね」

「……はい？ 怖かったです？」

「小娘！ そこで紛らわしい言葉を口にするな！ そもそもお前、なぜ泣いているんだ！」

「びび！ ぷつちゅびみゅびみゅびみゅびちゅ！ ぷみゅびみゅ、びみゅぷみゅきゅぷ！」

ディルクさんが私の髪を撫でながら陛下に冷たい視線を向けた。

「陛下、来る途中に通路に血痕がありましたか？」

「……あ」

「……それが？」

「……びちゅ？」

ディルクさんが言っているのは、言うまでもなく陛下の鼻血の跡の事だと思われた。が、なにやら彼は激しく誤解をしているようだ。陛下の眉間に日本海溝並みの深い皺がバシツと入った。

「あのような場所で初めての女性を襲うなど唾棄すべき行いですね。彼女の恐怖と絶望を貴方は理解すべきだ。ナイトドレスも無残な有様でしたよ。どれ程の傷を心と体に彼女は負ったのか、貴方は想像できますか、陛下」

「……」

「……小娘、お前は此処で何か解かないといけないものがあるのではないか？」

「……ぴび、みゅちゅぴつちゅちゅぴちゅぴちゅちゅちゅつぷみゅぴ？」

デイルクさんの腕の中で私は暖かいはずなのに、何故か陛下方面から半端ない冷気が漂ってくるのが判った。陛下が超絶に不機嫌なのが伝わってくる。

そんな彼の表情といたら、青筋は浮くわ、眉間に皺は寄ってるわ、紫の瞳は凶悪だわで地獄の霸王降臨を思わせた。

私は陛下がちょびつとだけ怖くなってしまって、ごく軽い気持ちでデイルクさんの服をきゅつと掴む。

その行動が益々の誤解を生んでしまったようだった。

てへっ！ ご・め・ん・ね、へ・い・か！

「このような卑劣な行いをするくらいなら、後宮へ通われればいいではないですか！ ここ数年全く通わず、いくら溜まっていたとはいえ、こんな形で発散されるなど！」

「……え、陛下つては不能？」

「っ！ 小娘、お前！」

「ぴ！ ぴび、みゅ！」

デイルクさんが亜麻色の瞳を私に合わせてきた。

「珍獣様……大丈夫ですからね。本当に申し訳ありませんでした。

主君の非、臣下として心からのお詫びと、なにか貴女への償いを。

エーヴァハルト宰相閣下の方にもご報告いたします。閣下の事だ。

貴女にとって決して悪いようにはなさりませんから、ご安心を。陛下は仮にもトリエスの国王で、貴女への卑劣な行いを公にする訳にはいかないのです。理不尽すぎて御納得頂けないかと思いますが、

どうか

「言って彼は私から身を離すと、本当に申し訳なさそうに頭を下げました。」

「やや、なんかすごく誠実そうな人だね！」

しかし私は、そろそろこの誤解を解いておかないと、近くで魔界の極悪大魔王のような様相で私を睨んでいる陛下に首を絞められそ

うなので、鼻血とナイトドレスの経緯を説明しようと彼の顔を見ると、デイルクさんはもう堪え切れなかった感じの表情をしていた。

彼は陛下とグイドさんに背を向けて私の方を向いている。

デイルクさんは私に片目を瞑って、後ろに見えないように口に指をあてる仕草をした。

どうも、もう少しだけ付き合って、といった合図のようだ。

あれ、これって、もしかしくなくても陛下をからかっている？ 遊んじゃっている？ ねえ、デイルクさん？

よっしゃ！ じゃ、私も付き合おうよ！ 楽しそうだしね！

と、いう訳で私は調子に乗ってみた。

「……デイルクさん」

「なんです、珍獣様」

そこで私はワツと顔を両手で覆った。当然、嗚咽もオプシオンでつけている。

慢性アレルギー性鼻炎の鼻もぐすぐすと嘍ってみてるよ！

「痛かったんですっ」

「珍獣様……それは……」

「あの地下通路で陛下つてば、私のナイトドレスをビリビリ破いたんです！ いきなりです！ いきなり豹変して私をあ通路に押し倒したんです！」

「ああ、珍獣様！ なんと！」

「陛下、言う事を聞かないと殺すって言うて！ 私つてば恐怖に震えちゃって、全く抵抗出来なくなつて。そしたら陛下、顔を殴つてきて、それで！」

「珍獣様、もういいです、無理に心の傷を決るような事はなさらないで下さい！ どうか！」

「いえ、言わせて下さい！ これを今後、他の女性が被害を受けない為の対策として参考にして頂きたいのです！」

「女神だ！ なんと貴女は清冽なるお方なのだろう！ 貴女の身は

確かに陛下によって凌辱されました。しかし、貴女の身も心も真の意味で少しも穢されてはおりません！」

「ありがとうございます、ディルクさん！ 私ってば勇気が出てきました！ 思い切って告白しますね！ 陛下ってば碌な前戯もなく挿入を！ 私の処女膜を無理矢理破って、加えて早漏だったんです！ 陛下、三擦り半で」

「そこまで遊んだ時、陛下の怒声が小部屋中に響いた。

「いい加減にしろ！ 小娘！ ディルク！」

「ぴゅちゅんぷみ！ ぴび！ ちゅぴび！」

陛下の怒声にディルクさんが振り向き、私も見ると、彼は強烈な眼力で私たち二人を睨み据えていた。

「そんなにお怒りにならなくてもいいじゃないですか」

「ねー」

「……しかし、まさか珍獣様に乗って下さるとは思いませんでした」
ディルクさんが何とも言えないといった表情でぼそりと言った。

「え、だって楽しそうでしたし。陛下で遊ぶの」

「小娘……お前な」

「ぴび……みゅぴ」

「少し……いえ、かなり驚きました」

「驚いた？」

「ええ。ノリが良すぎたというか、その……ね？」

「？」

ディルクさんが何やら言い難そうにしているのに、私は何故なのか判らず目を数回瞬いた。

「はつきり言ってやれ、ディルク。信じ難い程に品が無かったとでもな」

「ぽっぴゅぷみゅび、ちゅぴび。ぷぷぷびちゅちゅびちゅびちゅびぷぷ」

「酷い、陛下！ 私のどこをどうとったら品が無いとか言えるんですか?!」

「お前の全てだ、全て！」

「みゅぴっぴぶ、ぴぶ！」

陛下と私が互いにぎりぎりと睨み合い、さあこれから言い争いの始まりだ、という段階になった時、デイルクさんのえらく冷静な声が割って入った。

見ると彼は首を傾げている。

「ところで、陛下。先程から気になっていたんですが、貴方がお話になると必ず聞こえるこの音はなんですか？」

「っ！」

「ぴ！」

「あ、これはですね、ウオちゃんです！ 珍獣三号！」

私の言葉にデイルクさんが驚いたように目を見開いた。

「珍獣三号？ 貴女の他に珍獣保護法を適用された方が増えたんですか？ 何処に？」

「方つていうか、両生類です。そこですよ」

私はミイラの近くでちょこんと待っているウオちゃんを指さした。デイルクさんの身が若干引く。

「両生類？ ……なんですか、あの色は」

「あ、やっぱり陛下の言っていた通り、トリエスでも有り得ない色彩なんですか？」

「有り得ませんねえ……まあ、それが可愛いと言ってしまえば言えますけどね」

「やや、デイルクさんも、ウオちゃん、キモカワイイって思います？ 同士ですね！」

「きもかわいい、ですか？」

デイルクさんが腕を組みながら不思議そうに亜麻色の瞳を向けてきた。

「キモカワイイとはですね、異世界日本の言葉で、気持ち悪いをキモイに変換して、キモイけどカワイイ、キモくてカワイイという意味です！ 味があるでしょう、ウオちゃん！」

「ウオちゃん、ですか。うーん……陛下、連れて帰るんですか？」

「……」
「ちょっと、そこで何で無言になるんですか、へ・い・か！ 勿論、連れて帰りますよ、ディルクさん！ ウオちゃんは珍獣三号ですからね！」

「そうですか。判りました。すると俺の護衛対象はその両生類も入るんですかね、陛下」

「入ると思うのか、お前は！」

「ちゅちゅちゅぴ、みゅぷ！」

「っ！」

「ぴ！」

陛下がぎつと右後ろを向いて、ウオちゃんを睨みだした。

そんな彼にウオちゃんは可愛らしく首らしきところから傾げて、陛下を見つめている。

「……」

「……」

私とディルクさんは、一人と一匹を無視して会話を続けた。

「護衛対象って？」

「自己紹介がまだでしたね。失礼しました。俺は今日から貴女の護衛につく事になりましたディルク」ブランドと言います。で、」

と、そこまで言っただけでディルクさんは立ちあがり、先程から恐ろしい程の無言を貫き通している黒髪の彼を手招いた。

「どうやら紹介してくれるらしいので、私も立ちあがる。」

手招かれた黒髪の彼は、無言且つ無表情のまま素直にディルクさんと私の方へと近づいてきた。

「彼はグイード＝バルテル。陛下付きの護衛です。が、貴女は陛下のお近くで生活されるようなので、よく顔を合わせる事になると思います。グイード、ご挨拶を」

ディルクさんの言葉にグイードさんは、この部屋に入ってきた時同様、目を少し伏せてそれを挨拶に代えたようだった。

思い出した！

「どうされました？」

「従僕Aだ！」

「従僕えー？」

「思い出しました、私！ デイルクさん、私が陛下の前に現れた時、居ましたよね、扉の近くに！」

私がぽんと手を叩いて言ったのに、デイルクさんがふと表情を改めた。

それを不思議に思って私が少し首を傾げると、彼は左手で剣の柄を一度撫でた。

「覚えていらしたんですか」

「はい」

だってねえ？ 突然のトリップで訳の判らない場所にいきなり放りこまれたら、流石に周囲を観察すると思わない？ 一生懸命状況把握に努めるとかさ。

私は体に包むように被せられたデイルクさんの上着の前部分を広げた。

「これ、暫く借りていいですか？」

そういえば陛下下つてば、碌に布を纏っていない私に一言も上着を貸そうかと言わなかったよね！

と思つて陛下の方にちらりと視線を向けると、彼は呆れた事にまだウオちゃんを睨んでいた。

ウオちゃんは、そんな陛下に首らしきところを左右に振って、何

度も傾げてみせているようだ。見ようによつて物凄く馬鹿にされているように感じる仕草だった。

陛下の額の青筋が消える気配が無い。

「どうぞ。俺ので良ければ着て下さい。それより、」

持ち主の了承を得て私が彼の上着に袖を通して、ディルクさんは顎に手をあてて、亜麻色の髪と同色の瞳を細めた。

「あのような状態で現れたのに凄いですね。余裕がおりであったというか」

ディルクさんの声にほんの少しだけ、私には想像の出来ない何か
が混じった。

「あのような状態？」

「ええ」

なにやら探るような気配を少し感じ、またもや私は不思議に思う。

「そういえば、私つてば、みなさんにはどうやって現れて見えたん
ですか？」

「そうそう！ こういう事つて聞いておかないとね！」

ほら、とりあえず聞いておいて損は無くないじゃない？ もしかしたら
全く役に立たない情報かもしれないけれど、でもさ、万が一でも
私が日本に帰る為の手掛かりになるかもしれないしね！

そんな感じでやる気モードになった私に、ディルクさんは少しだけ
驚いた顔をした。

「あれ、まだ聞いておられないんですか？ 陛下、まだお話

になられていないんですか、貴方は」

ディルクさんが言つて陛下の方を彼と私が見ると、陛下はようや
くウオちゃんから視線を外した。

「何故、話さなければならん？ 聞かれもしていないのに」

「ぼび、きゅんきゅんきぶぶ？ びちゅぶちゅびゅぶぶぼ」

陛下の『あ？ なんか文句でもあんのかよ、お前らよお』的な口
調にウオちゃんの無邪気とも取れる声が合わさつて、ディルクさん
も私も、そしてきつとグイードさんも思わず閉口してしまふ。

いち早く立ち直ったのはデイルクさんだった。

彼は首後ろに手をあてて、呆れた声音を出した。

「そういう問題ですかねえ」

「陛下ってさ、なんていうか、基本的に物凄く不親切ですよね」

上着を貸そうかと一言も言わないあたりが特にね！ 私がミニミニ

二すけすけキャミソールもどきとカボチャパンツ姿なのが判っていたの

たのよね！

変態！と思いつながら私が陛下をギロリと睨むと、陛下はそれに魔

王の睨みで返してきた。

「まあ、国王陛下ですからね。そういうものなのかもしれません」

「なにやら便利な言葉ですね、国王陛下って！ 印籠みたい！」

憤慨しながらそう言つと、失礼と断つてからデイルクさんが私の方へ手を伸ばし、上着の留め金を掛けだした。

リーザと同じように首元からきつちりと締めるのに、どうもこの

世界の人の常識として トリエスの常識かもしれないけれど

女性はとにかく肌を見せないものなんだなという事を実感する。

私がこの世界に来てから会った女性たち、リーザや妖精二人、ア

二に他の使用人達は、各々個人差はあつたけれど大概が皆、あまり

首や首元、胸元を見せないような衣服を身に纏っていた。加え、床

に届くくらいの長さの裾丈の物を着ているから足首も見えないし、

袖も長袖だ。

それに気づいてしまうと、私つてば、この国の人から見て殆ど裸族なんじゃ？ と、ちよつぴり思うけれど、まあ、それでも私的にはどうでも良かった。

だってさ、そういうのつて、当の本人が恥ずかしく思っていないかったら全く意味がないんだよね。

私は現代日本人。股下五センチくらいのスカート丈でも、水着ならビキニでも全く恥ずかしくはないのだ。

リーザに着せられていたガウンらしきものよりもサイズのマシとはいえ、私はまた襟が首に纏わりつく煩わしさに溜息をついた。

「陳腐だな」

「ぷつきゅ」

陛下が口を挟んだ。

「俺に表現能力を求めないで下さいよ。では陛下が説明なされますか？」

「面倒だ」

「ぷみゅ」

「あー…では俺の陳腐な表現で許して下さい。とにかく、闇に支配された、そう感じる状態になったんですよ、珍獣様」

ディルクさんが私に目を合わせてきた。

彼の亜麻色の瞳は、私の何をも見逃さない、そんな雰囲気を感じさせた。

「闇に支配されたって、どういう感じなんですか？ 想像が出来ません」

「視界が全く効かなかった。何も見えず、何も聞こえず、といったところだ、小娘。虚無の世界があるのなら、ああいう世界なのだろうと思わせる状態だった」

「ぷちゅちゅんきゅみゅん。ぷびびぷ、ぴゅみゅぶゅ、ぷみゅびみゅびゅみ、ぴゅ。ぷみきゅんきゅんぴむ、きゅんきゅんぴみゅみゅみゅぷみゅびゅびゅ」

陛下は拾い上げた短剣の刃の部分を、角度を変えて確かめながら淡々と言った。

「虚無……」

「ええ、珍獣様。己の存在すら疑問に思う程に何も感じ取る事が出来なかったんです。自分の呼吸音すらも聞こえなかった。それが……そうですね、時間的には数呼吸程でしたかね。とにかくそう長い時間ではありませんでした」

「それで、どうなったんですか？」

私は彼らから話される一昨日の出来事に、心底驚きながら続きを促す。

想像だにしていなかった展開だ。私がこの世界に来た時に感じた状態とは違うのだ。全くと言っていい。

だって私の場合、気づいたら目の前には陛下が居たのだ。コンビ二から出て、点灯し出した街灯の下をただ歩いて。手にしていたアメリカンドックを食べ歩きしようと口に持っていた瞬間だった。

ふと気づいたら陛下が居た。

本当に、ふとした瞬間に自分を取り巻く環境がすっかり変わっていた。あの時の事で私を感じ、覚えているのは、たったそれだけだ。「言い方が本当に陳腐で自分でも嫌で仕方が無いんですが、数呼吸ほど経った時、光がですね、現れて、」

「本当にどうしようもない陳腐さだ、ディルク」

「ぼっぴゅぷみぷみきゅんきゅんぴ、ちゅびぴ」

ディルクさんが、ちよつとムツとしたようだった。

「そう思われるのでしたら陛下が説明なさったらいいでしょう？」

「面」

「ぴ」

「つか、陛下、さっきからちよつと五月蠅いです。黙っていてもらえませんか？ ウザ過ぎてムカツク」

私が当然の如くそう言い放つと、三人と一匹が黙り込んだ。

もともとガイドさんは一言も発していなかったが、そんな彼が僅かにだけだが目を開き、ディルクさんは心の底から驚いた様子で亜麻色の目を全開に見開いていた。

何故？

「……ああ、もしかして意味が判りませんでした？ ウザ過ぎは、鬱陶し過ぎるという意味で、ムカツクは腹が立つという意味です。陛下、本気でウザイ。私はディルクさんに話を聞いてるんですよ、暫く黙っててくれませんか」

陛下が話すとウオちゃんも合わせるように声を出して、ちよつと五月蠅いんだよね。

ディルクさんが額に手をあてた。

「……ああええとですね、陛下、俺が持つ表現力を精一杯使って説明させて頂きますから、少しお休みに……いえ、楽になさっていて下さい」

「……………」
デイルクさんは気を取り直すように一度息を吸って吐いた。

「では、珍獣様、続きを話しますね？」

「はい」

私は早く続きを聞きたくて、出会った日に陛下が私にやったように顎をくいと動かして先を促した。

「……………」

「デイルクさん？ 続きをどうぞ？」

「ああ、ええと、そうです、光のところからでしたね。そう、光がですね、現れたんですよ。幾つかの点を結ぶように走ったんです。それから瞬く間に光が溢れだして闇を呑み込むようにときますか、払拭するようにときますか、とにかく闇と光が陛下の前で渦を巻く様に収束していつて、その渦が人の大きさにまでに治まった時、貴女が、」

「現れたんですか？」

「ええ」

デイルクさんが頷いた。

「貴女が陛下の前に現れたと認識した時、部屋の様子は元に戻っていたんです。後は貴女の知っている通りの展開ですよ。それから幾らもしないうちに貴女は陛下に話かけたんです」

そこまで言っただイルクさんは肩を竦めた。

「それ、本当の話ですか？」

「は？ ええ、本当ですよ。信じて下さい」

デイルクさんは信じて貰えないのは心外だとばかりに言った。

「うーん……なにやらファンタジーばりばり入ってますね……」

私は考えるように胸の前で腕を組んでみた。

やっぱりなあ、聞いたところで全然判らないよ。

この世界に来てからようやく一日弱経ったけど、そこまで言うのなら陛下の言う通り『この世界に不可思議なことはない』としか私的にも感じられなかった。昔のヨーロッパの、しかもお城生活一日体験をするのなら、まあこんなものだろうといった感じでしかなかったのだ。なのにディルクさんの今言った事は、それを否定してしまう。

もしかして陛下たちは原因がこちら側、つまり地球の日本側にあるとも思っているのだろうか。

だってね？ 陛下側からしてみれば、今まで何も無かったのに私が突然現れて、そしてこの地下通路出現だもん。

おおぅ……疑われてたりしてるのかな、もしかして！ 違うよ！

地球の日本には陛下の言う不可思議とかないからね！ 声を大にして主張するよ、私！

「ふあんたじい？」

「あ、幻想とか空想とかそういう意味で、幻想空想物語というか」

「ああ、そうですね、物語の中の魔法のようでした。あまりに突拍子が無さ過ぎて、対処が出来ませんでしたよ。今、猛省中です」

「対処？」

「陛下と貴女の間に入れなかった」

そう言うデイルクさんの声音がワントーン下がった。亜麻色の瞳もぐつと細まる。

「どういう意味ですか？」

私は彼の言っている事が判らなくて首を傾げ、眉をひそめた。

そんな私にズバリと回答をくれたのは陛下だった。

陛下はむすりとした様子でウオちゃんの近く、ミイラの傍に立っていた。

「余を護り、お前を切り捨てるという事だ、小娘」

「ぴみゆん、みゆぷびゆみゆきゆんきゆん、ぴび」

「え」

「良かったな？ 現れ方が普通ではなくて」

「ぴみよんぷ？ きゆんぴきゆんぴみゆん」

「ややや、何を言ってるんですか、へ・い・か！ そんな恐ろしい……ってどうか、陛下つてば、何でそんなに不機嫌そうなんですか？ え、ウオちゃんが原因？」

さっきからもう嫌がらせのように、陛下の後に真似して声を出し

ているしね？

よっぽど気に入られたんだね、陛下。両生類、心の底から大嫌いなのにね。まあ、世の中そんなもんだよ。昨今は世知辛いからね。諦めてね、へ・い・か！

「……………」

「……………？」

「陛下？」

「……………もうよい。」

「……………きゅんぴ」

「何が？」

「よいと言っている」

「ぶみゅびきゅんぴ」

陛下の声は何処までも不機嫌そうだった。

彼は軽く息を吐くと、手にしていた抜身の短剣ふたつを左手に持ち、私に右手を差し出した。

「小娘、鞘」

「びび、ぶ」

「え、ああ、はいはい」

私は陛下に押しつけられてずっと持っていた鞘を、ひとつずつ放るようにして投げた。

投げた鞘は曲線を描いて彼の方へと向かっていく。

陛下はそれを落とす事なくふたつとも受け取ると、抜身の短剣を手際よく鞘に納めた。

「言っておくがディルク、グイード、小娘にこの世界の常識を求めても無駄だ」

「びゅちゅちゅちゅびび、びゅんび、ぶぶびびきゅんきゅんきゅきゅきゅぶび」

「……………」

「……………どつちらそのようですね」

「……………」

陛下の言葉に呆れたように同意するディルクさんと、瞬く事で同

意したらしきガイドさんに私は驚いた。

この人たちの会話の流れがさっぱり掴めないよ、私。え、今、何故いきなり私の常識云々の話になったの？ 突然だよ、この話題。私は疑問の視線を陛下に投げた。

「判らんか？」

「ぴゅんぴ？」

「はい、さっぱり」

陛下が何処か嘲るように片眉を上げた。

当然、私はその仕草に瞬時に腹が立つ。

なんで私が陛下に嘲られないといけないのよ？ 今、突然の話題の転換をしたのはそっちだよ？ 訳の判らないこと言ってるな！

よし！ 制裁だ！

ずんずんと陛下の方へと私は向かった。

勿論、殴る為にだよ！ 私ね、あまり我慢する性格ではないんだよね！ 我慢してストレスになるなんて冗談じゃない！ 感じた不快は即発散！ 私の姿勢を見習ってね！ 全国の女性の皆さん！ ムカツク男には即殴りの刑だからね！

「どつという意味ですか？」

「普通、王に向かって物は投げないという事ですよ、珍獣様」

私の疑問に答えたのはディルクさんだった。

「は？」

「今の鞘の事だ」

「ぴゅんきゅん」

「え、だって陛下が寄りこせて言ったんじゃないですか！ だから渡したのに！」

「渡す方法に問題があると言っているんだ」

「ぴゅんきゅんぴゅんぴゅんぷみゅーんきゅん」

「狭っ！」

「何？」

「ぴ？」

陛下の近くまで辿りつくと、私は一度ふんと鼻を鳴らし、彼の鳩尾に向かって拳を繰り出した。

下から上に突き上げる打ち方、所謂アッパーカットなんだけど、私の拳が彼の鳩尾に到達する前に、陛下が手の平でぱしつと受け止めた。

まあ完全本気攻撃では無かったら当たり前といえは当たり前なんだけどね。

「お前な」

「みゆぶ」

「狭量すぎ、陛下！ この変態ドエロの三擦り半男！ この世界で早漏用の薬が売っているといいですね！ 向こうの世界では塗り薬として売っているみたいですよ！ 行為の十分か十五分前に竿に塗って洗い流すらしいです！ するとですね、射精を抑制して持続力が上がるらしいですよ！ お兄ちゃんがね、大量に買ってました！ ネット通販でね！ ちなみにインドネシア産らしいよ！」

「え？」

「……………」

私の言葉にデイルクさんと、たぶんグイドさんがいち早く反応し、ドン引きするようにして固まった。

陛下が全てを諦めたような溜息をつく。

「ああ、気にするな、二人とも。おかしいんだ、頭が。この小娘はな」

「ぶぶぶ、ぶにゅんぴ、ぴみゆぶ。ぶぶみゆぶび、ぼぼ。ぶぶびびみゆ」

「おかしいって！ 早漏男に言われたくはないですよー！」

このフニヤチンめ！

「五月蠅い。少し黙れ、小娘。話が進まん」

「みゆぶみ。ぴっちゅ、ぴび。みゅんみび」

そう言っって陛下は向かい合っていた私の体の方向を変えると、右腕で両腕ごと私の体を拘束した。

「ちょっと陛下、動けません！」

「動けなくしているのだから当然ではないか？ それより、そろそろ上に戻りたいんだが、その前にやっておく事がある。グイード」「
「ぴつちゅんぴちゅびちゅみゅんみゅんぴぶ？ きゅんぴ、みゅびきゅんきゅんぴむびむ、みゅんちゅんみゅびゅびゅび。ぴゅんぴ陛下が私を拘束しながら、グイードさんの方を見た。」

「お前は両生類は大丈夫か？」

「みゅぶりゅんみゅんぴぶ？」

「……」
「そうか。なれば其処にある両生類の死骸らしきものを上まで運んでもらいたいんだ。やってもらえるか？ 大きい干からびているからな。重くはないと思うんだが、いけそうか？」

「ぴゅん。きゅんぴぶみゅんみゅんきゅんきゅんぴちゅびちゅきゅんぴきゅんぴ。ぴきゅんみゅん？ ぴゅんきゅんぴぶみゅん。みゅぶきゅんきゅんきゅ、ぴきゅみゅ？」

「……」
「大丈夫か。では運んでくれ。それと、其処の扉に見た事のない模様が描かれている。それも簡単にでいい、今、ざつと写しておいてくれ」

「きゅんぶ。みゅんきゅきゅ。みゅん、きゅんぴきゅんぴきゅんぴきゅんぴみゅんみゅ。きゅきゅびゅみゅ、び、きゅんぴゅびゅみゅびゅ」

「……」
「ああ。そうだ」

「びゅ。みゅん」

「……」
「何？ …… そうだな、石の採取か。ああ、出来るようなら、それもやっっておいてくれ」

「びゅ？ …… みゅんぴ、ぴゅんきゅ、ぴゅ、みゅんきゅんぴ、きゅ

んきゅんぴゅんきゅ

「……………」

「頼む」

「ぴぶ」

「…………え、陛下、私ってば、つつこんでもいい？」

今、私、未知との交信を初めて見たよ！ 凄いよ！

陛下、超絶美形で地位権力財力所有の、加えて天才っただけじゃなく、未知との遭遇ばりの事も出来るの、もしかして?!

私がぼかんと口を開いて、陛下を背中に拘束されているから、顔を上げて彼を顎下方向から見ると、ディルクさんの溜息混じりの声が聞こえた。

「珍獣様、これに関しては不要ですよ」

「不要？」

「ええ。トリエス王城七不思議のひとつに数えられている事ですか」

「え」

「誰も判らないんです、グイードの言っている事が。珍獣様も判らないでしょう？ そもそも言葉を発しているのか、と。なのに、陛下だけはお判りになるんです。会話が成立してしまうんですよ」

ディルクさんが首後ろに手をあてて、首を鳴らすように一度曲げると、彼は私たちの近くへとやってきた。

ちなみにグイードさんは扉の向こうへ消えた。まず先に模様を写す事から始めたようだ。

「陛下、なんでグイードさんが言っていることが判るんですか？」

「皆そう聞くんだがな。余からすれば何故判らんのか、それこそ判らん」

「ぶっぴゅんぴぶみゅ、みゅみゅみゅきゅんきゅんぴ、みゅんぴきゅん」

「ややっ、だつて口、全く動いてないですよね、グイードさん！
ね、そうですね、ディルクさん！」

「そんなんですよねえ。俺もいつも観察しているんですけど、さっぱり」

「あれほど感情の豊かな者も居ないだろう？ 判りやすいと思うが、裏表も無いし」

「ぷぴゅんきゅぴきゅぴみゅんみゅんきゅ？　ぴゅんちゅぴきゅんきゅんきゅん」

「うーん……そうかなあ？」

動いてなかったけど……目がちよつとくらいしか。

そんな私と同じ気持ちなのか、デイルクさんも首を傾げていた。

「それはそうと、陛下、あれは何です？」

デイルクさんがミイラの方を見ながら陛下に聞いた。

「判らん。ウオの仲間が干物になっていいるのではとしか言いようがない。上に持つていき、これが何なのか学者にでも放り投げてみるつもりだ」

「みゅぴ。きゅんぴゅんみゅんきゅんきゅんぴゅぴゅみゅみゅみゅきゅ。みゅんきゅぴび、きゅぴきゅぴみゅぴきゅきゅんぴゅぴゅみゅん」

少しは役に立つてもらわねばな？　穀潰しは要らん。と言って陛下は私の拘束を解いた。

拘束の解けた私は、肩をぶんぶんと回して体をほぐす。その際、陛下のオナカにちよつとあたってしまったが、それは御愛嬌だ。

陛下が後ろに一歩下がった。

「死骸の事よりだ。デイルク、お前には二、三聞きたい事がある」

「ぴゅんぴきゅび。ちゅびび、みゅぶきゅ、きゅみゅんみゅんぴ」

「なんでしょっ？」

「まずは一昨日の事だ。聞き忘れていたんだが、この小娘が現れた時、何故お前はあの場に居たんだ。違っだろう？　持ち場が」

「きゅぴきゅんきゅ。ぴきゅぴきゅみゅびび、ぶぶびきゅんぴむ、みゅみゅぶんぴゅんきゅんぴ。きゅんきゅ？　みゅんぴ」

「ああ、それですか」

ディルクさんが不味いなあ、といった様子で亜麻色の頭を一度撫でた。

「いえね、頼まれてまして。人手不足だからと」

「人手不足？ 誰にだ」

「きゅぴゅぴゅ？ きゅん」

陛下が綺麗な形の眉をひそめた。

「飲み仲間に」

「飲み仲間？ はっきり言え。誰だ」

「きゅんぴゅ？ ぴゅんきゅぴゅ。ぴゅぴゅ」

「あー…と」

「ディルク」

「ちゅぴゅ」

陛下の声に剣呑さが混じってきた。

それを感じ取ったのか、ディルクさんが観念したように息をつく。

「第二衛兵隊の隊長です」

思わぬところで再登場したキーワードに陛下も私も驚いた。

「第二衛兵隊？！」

「きゅぴゅ？！」

「やや、第二といえは！」

私たちの反応にディルクさんが不思議そうな顔をする。

「どうされたんです、お二方とも。第二衛兵隊に何か？」

振り返ると陛下の目つきが険しくなってきた。どうも私の後ろから凍気が漂ってきているような気がする。

「何故お前が衛兵隊の隊長などに頼まれなければならん？ お前は

余の直属のはずだが？」

「きゅんぶきゅぴゅぴゅきゅんきゅんぴゅむびゅんぴゅ？ みゅぶ

きゅんきゅんぴゅぴゅ？」

「そうなんですが…彼、困ってましてね？ なんでも集団で休まれたの何だのと。丁度、俺、手が空いてましたし、まあ、いいかな、と思いまして」

「ふざけるな。指揮命令系統を無視する行為、許す訳がないだろう！」

「ぴゅんぴゅ。ぴつきゅきゅんきゅんみゅん、きゅんきゅんぴぷみ！」

「はぁ……そうですね」

陛下はどうやら結構怒っている模様だ。何故か私の右肩に彼の手が置かれ、その手の掴む力がちよつと痛い。

私ってさ、被害者だよな？ 今の話、私に全然関係無いしさ。しかも日本じゃない他国の、それも異世界の国王陛下の御冠による攻撃を受けている時点です。でもさ、今、私が何か反撃したり言おうものなら、それが三倍返して跳ね返ってきそうだから、もう少し大人しくしていようと思うよ。偉いよね、私って！ 大人だよね！

「それにだ。そもそもあの場に第二衛兵隊は関係ないだろう？ な
ぜ衛兵隊に頼まれたお前が部屋の内側に居た」

「みゆんぴ。きゅぴきゅぴきゅんきゅんみゆんきゅんぴぷぷ？ き
ゆんぴゆんきゅんみゆみゆぷきゅんみゆんぴ」

「それはですねー…あー…どうご説明すればいいですかね。第二衛
兵隊隊長の彼がですね、侍従長の曾孫の白百合の間を管理している
男と、これまた飲み友達で、」

後ろから、ぷちっという音が聞こえた。

「ややや、本日二度目だよ、へ・い・か！

逃げて！ デイルクさん、逃げー！

「ほう？ なかなか興味深い話だな？ デイルク」

「ぴぷ？ きゅんきゅんぴみゆぴ？ ちゅぴ」

「はあ、そうですね……」

「小娘もそう思うだろう？」

「ぴみゆんきゅんきゅん？」

「え、そこで私に振りますか。つかさ、陛下」

「なんだ」

「きゅん」

「王城内というか宮廷内というか、括りがよく判らないんですけど
ね？ ダラけているというか、なあなあになっているというか、腐
敗が結構進んでいるのでは？ それってさ、陛下の徳の問題だった
りして！」

「そこそお聞きしたいですね。何故、迎えにあがるまで登ってこられなかったのです？ 何もわざわざ真夜中にお二人で探険ゴッコもないでしょう、子供じゃないんですから」

その言葉に陛下も私も仰天だよ！ 当然ね！ 私は首が絞まっているから声を発する事が出来なかったけれど、その変わりに陛下が共通の疑問をデイルクさんにぶつけてくれた。

「何を言っているんだ？ 無かったぞ、梯子など。落ちた先は二人並んで座れない程に狭い空間で、横に通路に繋がる穴がひとつあっただけだか？」

「ぴみゆみゆみゆぴび？ みゆんきび、きゆんぴ。みゆきゆきゆんきゆんぴゆんきゆんきゆんぴゆ、きゆんっぴびびっぴびみゆんぷぶきゆび？」

「何をおっしゃっているんです？ しつかりした梯子もありましたし、下りた場所は珍獣部屋に開いた穴と同じ大きさでしたが？ 確かにその空間からここへ繋がる通路への出入り口はありましたが」
「……………」

陛下が考えるように沈黙してしまった。

その天才的頭脳で考えるのはいいんだけどさ、それよりもね？ ちよつと首のホールド解いてくれないかな……。ちびつとずつ空気を吸うのも疲れるんだよね？ とつてもね？

「判った。それはいい。戻る時に判るだろう。もうひとつはつきりさせたい事がある」

「ぴゆん。きゆんみゆ。きゆんきゆんみゆん。ぴゆきゆきゆんきゆんぴびみゆんぴ」

「なんでしよう」

「何故、来るのが遅かった？ 梯子があつたのだとしたら尚更もつと早く迎えに来れたはずだが？」

「ぴび、きゆんきゆんぴび？ みゆんきゆんきゆんみゆんぴゆびちゆびちゆびちゆびちゆびびび？」

「……………あー……………それはですね……………」

デイルクさんは首をホールドされている最中の私を見て、何と云えばいいのかといった困った顔をした。

「小娘は落ちる時、かなり大きな悲鳴をあげたんだ。それが部屋の外まで聞こえなかったとは言わせん」

デイルクさんが陛下の言葉に「うーん」と唸りながら言い難そうに蟬谷をぐりぐり押ししていた。

なにやら本当に言い難そうだ。

でも何故？

私は首を絞められながらも彼の事をじっと見ていた。

しかし苦しいよ、陛下。いい加減にしてくれないと私、本気で死んじゃうよ！ 異世界トリップ二日目で国王による絞殺死なんてシヤレになってないからね！ そのどこ判ってる？！ へ・い・か！

「言え、デイルク。黙す事は許さん」

「ぷび、ちゅびび。きゅびきゅんび」

「あまりお怒りにならないで頂きたいんですがね？」

「それは聞いてから判断するが？」

「きゅんびみゅんみゅんちゅび？」

おおう、陛下、容赦なく追いつめてるね？ いや全く、その対象が私でなくて本当に良かった良かった……って！ く・び！ く・び！ お願いだから忘れないで！ く・る・し・い・の！ し・ん・じゃ・う・よ？

デイルクさんが深い溜息をついた。もう観念してしまったようだ。つた。

「陛下が部屋に入られたのでガイドが一旦下がったんですよ。他の者に交代する為に」

「それで？」

「びゅむ？」

「で、その間、陛下直属の護衛は部屋の周囲には居なくてですね、」
「うぎゅっ」

へ・い・か！ へ・い・か！ 首！ 首！ ねえ、気づいて！

更なる力が加わってきてるよ?! 死んじゃう! 本当に死んじゃうよ! 私! 息が! 息があー!

「ほっ?」

「みゅ?」

「それはまあ、あることじゃないですか。居なくなるといつても、ほんの少しの間ですし、陛下は部屋に入られ衛兵が出入り口を警備している訳ですしね?」

「そうだな?」

「ぴゅんぴ?」

「グライドが下がり交代の者、まあ、今回は俺なんですけど……俺が来るまでの間にですね、どうも陛下と珍獣様が珍獣部屋の下に行かれたようで、」

「落ちたんだ」

「みゅんぴび」

「はあ」

「で?」

「ぴ?」

「部屋の前に衛兵は居たんですが、ひとりだけで、ぶちつと上後方から不吉な音がまたもや私の耳に入った。

え、陛下つてば、三回目? もしかしなくても本日三回目なの?!

頭の血管、大丈夫?! 脳梗塞とか心配した方がいいんじゃない?!

いーやー、はーなーしーてー! 怖い! 怖いよ! ヘルプ!

ヘルプミー!

「そのひとりとは、もしかしてコーエン=バーレという者か?」

やややっ、そのお名前は! 件の彼ですね! え、本当にコーエンさんなの……っていうか、その可能性は大すぎるよね! だって

私、彼に害獣用の液体が入った小瓶を渡されたんだから! ここに

落ちる二、三時間前にね!

「あれ、陛下、御存じで? 衛兵のひとりにすぎない者なのに珍しいですね。そうです、そのコーエンという者がですね、珍獣様があ

げた悲鳴を、その……陛下との行為の末のものだと思っただらしくてですね、俺に報告をしなかったというか、怠ったというか、何も言わなかったんですよ。だから明け方、リーザをはじめとした侍女らがかかるまで、お二方が部屋に居られないのを誰も気づかなかったという訳で「

「……………」

お……それはなんていうか不運が重なったという事……かな？

っていうか、陛下、なんで黙ってるの？！ ねえ、首に巻き付いた貴方の腕がね、また更に力が加わってきてるんだよ！ 痛いよ！

苦しいを通り越して痛いっつーの！ 折れちゃう！ 首の骨が折れちゃうよ！

「小娘」

「びび」

陛下が私を呼んだ。

けれど私は首が本気で絞まっているから、当然返事のひとつも出来やしない。でも今の彼には何となく逆らってはいけない空気を敏感に感じ取り、私は首をこくこくと縦に動かす事で返事に代えた。

「コーエンはもう、即刻城から叩き出すべきだと思わんか？」

「きゅんぴみゅん、きゅんきゅんきゅんぴみゅんぷびゅん？」

こくこくこくこくこく！

私ってば五回も頑張って首を縦に振ってみたよ！ 窒息しそうなのにね！

ごめん、コーエンさん！ 私ね、自分の命が一番可愛いの！ だから仕事は出来ないかもしれないけれど、でもどこか一生懸命だった貴方を庇ってあげられなくてゴメンネ！ 私、そんな貴方を応援してたんだけど、無理だった！ 王の間に配置されてしまった自分の不運を恨んでね！ 祈ってるよ、私！ トリエスにも失業保険がある事を！ そして待機期間無く支給される事をね！ 会社都合、この場合、王宮都合の一方的解雇を理由に支給期間も延びるといいね！ 人生に絶望しないでね、コーエンさん！ 頼むよ！ 嫌だよ、

私！ 翌日になつたら城の木の枝に貴方がプラインとなつてるとかさ！

「決まりだな。上に戻り次第コーエンと、お前の飲み友達とやらの隊長以下第二衛兵隊全員、衛兵隊統括、侍従長にその息子と孫と曾孫、全て城から叩き出す」

「きゅんぷい。みゅぴきゅきゅぴにゅみ、みゅぶきゅちゅきゅぴゅきゅちゅちゅきゅみ、きゅんぴび、ちゅんぴび、ちゅんみゅんきゅん」

ややややつ、なんか落下前に陛下の部屋で聞いたよりも、思いつきり解雇の人数増えてないですか？！

流石、独裁者！ よつ、トリエス王！ もしかして、いい具合に恐怖政治を敷いちやつてる？

皆、路頭に迷つちやうね！ でもきつと大丈夫！ 家庭円満だったら次の仕事が決まるまで、奥さんがパートで食費は稼いできてくれるよ！ 頑張つて、一家の大黒柱たち！

「あー…陛下、それは少々可哀相では？」

デイルクさんの温情ある訴えを、当然、非人道冷酷鬼畜陛下は切つて捨てた。

「首を落とされなかつただけでもありがたく思ってもらいたいものだが？」

「みゅぴびびんきゅんきゅんぴちゅんぴちゅびちゅびちゅびきゅんぴび？」

「……そうですね」

デイルクさんは碌に戦わずして退いてしまった。

彼は「可哀相な事をしたな」と小さく呟いた後、「まっ、いいか」と私的には吃驚ものの言葉を次いで言う。

え、その程度なんですか？ デイルクさん？ 陛下は冷酷すぎだと思えますが、貴方もちよつと冷たいですよ？

えー…嫌だな、私。こんな人たちとこれから暫く一緒に居なきゃいけないの？

やられたね！ 人生ってホント上手くいかないよね！ そもそもさ、上手くいってたら私ってば、今頃日本でハッピーライフを送っていたはずなんだよ！

例えば同じ学校にさ、どこかの財閥企業の御曹司が居てさ、その人は容姿端麗、頭脳明晰、運動神経抜群でね？ 内外の女の子に大人気な人が居たりするんだよ。

でさ、ある時、純真可憐で麗しの乙女なんだけど、でも何処か平凡な私がさ、委員会か何の資料を生徒会室に届けなきゃいけないでさ。で、お約束通りその彼は生徒会長で、私が届けた時に実は隠し持っていた裏の顔、屈折した性格でもって同級の女の子をもて弄んでいたりする訳。

それを私ってば目撃とかしちゃってさ。当然、それに気づかれちゃう訳よ、彼に。

でさ、彼は口止めの為に私を呼び出して、私も純真可憐な乙女だから、罨だと気づかずになコノコ行っちゃってさ。そんなウサギな私を彼はさ、視聴覚室とか体育倉庫とかで無理矢理犯す訳よ。

んでさ、それが何度も何度も繰り返されていく内に、まず向こうがさ、私の体を忘れられなくなってさ、で、そのうち自分の気持ちに気づく訳。でも彼は本気の気持ちにはとつても不器用だから、どうしていいのか判らなくて最初は私に辛くあたるの。

でもさ、ライバル登場したり、御曹司側の家の事情に巻き込まれたりとかの紆余曲折があつてさ、結局、二人は熱々に結ばれてさ、私ってば玉の輿に乗っちゃう訳よ！

イイトコに玉の輿！ きゃっ、超最高！ いやーん！ 私ってば、愛欲と物欲の奴隷だよね！

そんな妄想に駆られて思わず興奮してしまった私は、首を絞められて苦しかったのにも関わらず、陛下の腕の中でアヤシゲに身をくねらせた。

陛下が怪訝そうに眉をひそめる。

「小娘？」

「びび？」

「陛下、苦しいのでは？ 腕を外して差し上げた方が宜しいかと思
いますよ、俺」

ディルクさんに言われたからか、陛下が私の首のホールドを解い
た。

解かれた瞬間に一気に空気が肺に流れ込んできて、私は何度か咳
込む。

そんな私の背を、ディルクさんが陛下と私の間の手を差し入れる
形で擦ってくれた。

「大丈夫ですか、珍獣様」

「ごほつ……はい、とりあえず」

「すまん、もがくほど苦しいとは思わなかった」

「びちゅ、みゅんぶ、ちゅんぴちゅんぴちゅん」

「え、確かに苦しかったですけど、別に今のはもがいた訳ではない
ですよ？」

「そうか」

「びゅん」

「それより陛下、聞いて下さいよ！」

私は後ろに振り向き手を伸ばして、彼の肩をバシバシ叩いた。

「なんだ」

「ちゅぴ」

「私ってばね、今、イイオトコ玉の輿万歳凌辱物語で、すっごい愛
欲と物欲の奴隷な主人公になっていたんです！」

「は？」

「び？」

「珍獣様？」

「こつちの世界で言う王子様に 　　もががっ」

陛下がいきなり私の口を塞いだ。

私はそれに命の危険を感じ、急いで彼の手を外そうと試みる。

やめて、陛下！ 口だけは塞がないで！ 慢性アレルギー性鼻炎

の私が口を塞がれるという事は、死を意味するんだよ！ イ・キ・
が・吸・え・な・い・の！

「お前の妄想はいい。それだけは聞きたくないんだ、余は。いま言
おうとした妄想、口にしないな？」

「みゆぶびみゆん。きゅんきゅんぴゅぴゅきゅん、きゅ。きゅび
きゅびきゅんぴゅ、きゅびゅび？」

くくくくく。

よく判らないが私は先程同様首を縦に振って頷く。

陛下が溜息をつきながら手を放した。

「妄想の話でお前の口から王子という単語だけは言ってくれるな。
なにやら怖いんだ。そのうち元王子だという己が許せなくなりそう
で。……それにしても疲れたな。そろそろ戻りたいが グイ

ード、まだ終わらないか」

「みゆぶきゅんぴきゅんきゅうちゅちゅちゅびゅび。きゅんぴき
ゅぶぶ。みゆみゆきゅちゅびゅびゅびみゆんぴみゆび。……き
ゅんきゅんぴちゅび。ちゅびちゅびきゅ ぴゅんぴ、きゅん
きゅんちゅ」

陛下の呼びかけに、扉の外側からグイドさんが顔を出した。出
したと思ったら彼はマイペースな感じでこちらへと向かってくる。

「……………」

「そうか。御苦労だった」

「びゅん。きゅんきゅん」

「……………」

「ああ、もう戻る」

「びゅ、ちゅちゅ」

「……………」

「そうだ。運んでくれ」

「きゅん。ちゅびちゅ」

「……………」

「そうなのか？ 判った。その報告は上に戻ってから聞く」

「きゆるきゅ？　ぴちゅ。きゅんきゅんぴきゅんきゅんぴ」

「……………」

「ああ」

やっぱりこの会話の成立、おかしいよね？！　何で本当に陛下って判るの？！　ガイドさん、やっぱり口が少しも動いてないんだよ！　凄すぎだよ、陛下！

ほら、見てよ！　ディルクさんもじつとガイドさんの口元を見てるけど、首を傾げてるよ？！　私の気持ちはきつと彼と同じだと思っ！

流石、トリエス王城七不思議！　私ってば残り六つに物凄く興味が出てきたよ！

陛下との会話を終えたらしきグイドさんは、小部屋の右隅にある黒いミイラの方へと向かった。

彼はその前に立つと嫌がる素振りを少しも見せずに屈みこみ、ミイラの強度を確かめるように何カ所かを持ちあげるのを繰り返している。

黒いミイラは古さで脆く崩れ去るといふ事もなく、グイドさんが持ちあげても円の形をそのままに保っていた。

「いけそうか？」

「びみゅんぷ？」

「……………」

「そうか。では戻るか」

「びちゅ。みゅんちゅ」

相変わらず私とデイルクさんには理解できない会話を二人は成立させると、グイドさんはミイラを浮き袋のように右肩に担いで立ち上がった。

彼は陛下を見て目で合図だかを送ると、次いでデイルクさん、私へと視線を向ける。

私と目が合うと、陛下にしたのと同じように彼は深い緑の瞳を少し伏せて合図らしきものを送ってきた。

私はそれにどう反応していいのか判らなかつたけれど、陛下のように特に反応せずというのも気が引けたので、とりあえず会釈しておくことにした。

軽く頭を下げると、ガイドさんはまた目を少しだけ伏せた。

私はまたなんとなく会釈を試みると、またガイドさんが同じように目を少しだけ伏せる。

「……………」

「……………」

それを更に三度ほど繰り返した時、私の背中を陛下が数回軽く叩いた。

「お前達は何をやっているんだ。戻るぞ。小娘、そういえばお前はずっと素足だったな」

「みゆぷちゅんきゅんきゅんぷ。ぴゅん。ぴび、ちゅきゅみみゆぷきゅんきゅんきゅん」

「あ、はい」

何を今更？と思つて陛下に視線を向けると、彼はディルクさんの方へと私を促そうとした。背中に添えられた彼の手に力が加わる。

「もし不都合が生じているのならディルクに背負ってもらえ。ディルク、これを背負ってやれ。ここに来るまで素足だった」

「きゅんぴきゅんぴきゅんきゅん、ちゅびびきゅんきゅんみびび。」

「ちゅびび、きゅんきゅんぴぷ。きゅんちゅんみゅんちゅん」

「判りました」

ディルクさんはそれにあっさりと了承すると、私に手を差し出した。

「珍獣様」

そのさも当然のように差し出される手に、勿論、私は慌てたよ！

「あ、大丈夫ですよ！ 足、全然痛くないです！ 通路の石畳、石ころが転がっている訳じゃなかったし、歩きやすかったですから！」

突然の気遣いに驚いて、私がディルクさんと陛下の手から逃れようとする、まるでそれを許さないともいうように陛下が私の背を押し、ディルクさんが引き取って背負うというよりも右腕一本で私をひよいと持ち上げた。私は彼の腕に座るような形で抱えられる。それによる視界の変動に、私は不安定さを感じてディルクさんの

首にしがみ付いた。

「珍獣様、あまり締めないで下さいね。少し苦しいです」

「あ、すみません……ってさ！ 陛下！」

「なんだ」

「ぴゅん」

私はディルクさんの首にしがみ付く力を加減しながら、今は立っていても目線の高さが同じになった陛下の方を見た。

私たち二人は碌に寝ていないから寝不足のはずで、彼自身も疲れただの眠いだのと言っていたのにも関わらず、陛下は相変わらずのキラキラした超絶美形顔で、そういった状態であるのを全く他人に悟らせる様子は無かった。

それがはたして得なのか損なのかは判らない。国王として特なのかもしれないが、一個人としては物凄く損をしているような気がした。あれでは誰も気づかず、加減も悟れずに物事を進め、押し付け、彼に負担を強い続けるのではないか。

そう少しだけなんとなく思ったが、だが私には全く関係の無い事で、それよりも私は目の前の彼に言いたい事があった。

「陛下ってばさ、なんでいきなり気遣いらしきものを？」

背負ってやれとかさ！ 今まで上着を貸そうとか、それこそ背負うとか素足への気遣いを一度も見せなかったのにだよ？！

そう疑問に思いながら彼を見ていると、陛下は不可解そうな様子で眉をひそめた。

「気遣い？ 別にお前を気遣ったつもりはないが？」

「きゅん？ きゅみゅぷきゅちゅびきゅちゅぷび？」

「え、でもディルクさんに背負えとかいきなり言い出したりしてるじゃないですか」

「当たり前前事を言ったただけだろう？ 今まではディルクやグイードが居なかった。だから言わなかったただけだが？」

「きゅみゅびきゅみゅびきゅみゅび？ きゅんちゅびゅびゅびゅん
びきゅんきゅん。きゅびゅみゅみゅみゅみゅび？」

「うーん……どうしてデイルクさんたちが居ないと言わないんですか？ え、それは自分が国王だから背負えないとかそういう理由で？」

「だったら仕方ないけどな？ 男としてその考えはどうかと思うけど、国王だからね？ それなら私も納得できるけど。」

「そう思ったのに彼は私の言葉を否定してしまった。」

「そういう訳ではないが」

「きゅちゅびきゅちゅび」

「やっつ、陛下の言っている事がマジで判らないよ、私！」

彼は一体親切なのか優しいのか、冷酷なのか非情なのか、変態なのか極悪なのか、本当はどういう属性の人なのか、この瞬間、私は全く判らなくなってしまった。

私が彼に対してこの短い間に気づいたこと。

それは感情の無い瞳をする事。ふとした瞬間にとても怖くなる事。そして、気遣いなのか優しいのか親切なのか判らない事を、きつと無意識ですること。でもそのやり方が不可解な事。

陛下と私の互いに理解が出来ないといったような平行線気味な会話に終止符を打ったのはデイルクさんだった。

「まあまあ、お二方とも。その話はここで終わりにしましょう。俺からしてみれば互いに言いたい事は判ります。たいしたズレではありませんから、もういい加減に戻りましょう」

「言っただイルクさんは私の持ち具合を軽く直すと、扉の方へと向かった。」

「俺が先に行きます。次いで陛下、グイードの順で来て下さい」

「判った」

「みゅん」

「……………」

「そんな感じで皆してようやくこの小部屋を去ろうとした時、私はふと思いついた。」

「ちよつと肝心な存在を忘れてるじゃない！」

あれだけ陛下の後に声を出して、さつきから大アピールし続けている存在をだよ！

「待って！ 待って下さい！」

「なにか、珍獣様」

「……やはり連れて行くつもりか、お前は」

「……きゅんぴゅんきゅんきゅん、みゅぷ」

「気づいているなら言ってお下さいよ！ なに故意的に無かった事にしようとしているんですか！

ウオちゃん、おいで」

とは言ってみたものの、私は今はディルクさんに持ち抱えられている高さだ。

ディルクさんの首で体を支えつつ、両腕を彼の肩の上からウオちゃんへ向かって伸ばしていたが、勿論、そんな事で私の手の中にウオちゃんがやって来れるとは思っていなかった。

きつとグイドさんが拾って乗せてくれるだろう、そう思っていたのに。

瞬間、ウオちゃんが脅威の跳躍力で飛んだ。

いや、両生類なのに、まるで羽が生えているかのように飛んだのだ。パタパタという音が聞こえてこないのが不思議な飛び方で私の手の上にちょこんと乗った。これには私も驚いた。

当然、私以外の二人と多分グイドさんもだよ！

「と……飛んだ！ ウオちゃんが飛びました、陛下！ 両生類なのに！」

「……やはり置いていかないか？ これと一緒に上に戻るのはどうにも気が進まない。というより置いていけ」

「……きゅんみゅみゅびゅびゅ？ ぴゅんぴゅんぴゅんぴゅんぴゅんぴゅんぴゅんぴゅんぴゅん。きゅんぴきゅんみゅ」

陛下が眩暈を感じているかのように眉間を押さえた。

「え、何を言ってるんですか！ ウオちゃんは既に珍獣保護法適用生物、珍獣三号なんですよ?! もう立派にトリエス王に保護され城に住む権利が発生していますから！」

さ、ウオちゃん、と私はウオちゃんと目が合うようにディルクさんの頭の上に乗せた。

「……そこに乗せますか、珍獣様」

ディルクさんの遣る瀬無い声が聞こえたが私は無視した。

ウオちゃんの小さな瞳を覗き見ながら私が満足気にシヨッキングピンクの頭を撫でていると、グイードさんの視線を感じる。

彼はウオちゃんをじっと見ていた。

「グイードさん？ あ、もしかしてウオちゃんに触りたいですか？
どうぞ？」

言って私がグイードさんを手招くと、彼は大人しく陛下の横を通り過ぎ、ウオちゃんにそつと手を伸ばした。

グイードさんが無表情にウオちゃんの頭を撫でている。

「ぴゅんぴ」

「……………」

「……………」

「……………」

「……グイード？」

「……ぴゅんぴ？」

陛下の声にグイードさんが彼の方を向いた。

「……………」

「何？」

「ぴゅん」

「……………」

「……世話をするってお前な」

「……みゆきゅぴゅぴみゆぶ」

「……………」

「……何を言っているんだ。勘弁してくれ」

「……みゆびゅびゅぶぶぶ。きゅきゅんぴ」

「……………」

「本気で言っているのか、グイード」

「きゅぴぴみゅぴみゅ、ぴゅんぴ」

陛下が抱えるように頭を左手で押さえた。

彼の澄んだ紫の瞳は吃驚したようにグイードさんを見ている。

なんだか心底驚いている様子の陛下に、私とデイルクさんは、ぼそぼそと耳打ちするように話をした。

「ねね、デイルクさん。なになに、あれはグイードさんが陛下にウオちゃんの世話をしたいって言ってるんですかね、もしかしくなくて」

「どうやらそのようですね。他にも何かを言っているようですが、陛下の返答からは、ちよつと判りませんね……」

「ねえ、デイルクさんをはじめとしたトリエス王城の人たちって、陛下の回答返答返事からグイードさんの言っている事を想像しているんですか？」

「正解です、珍獣様。陛下が居られなかったら、もう誰もグイードの意思を汲み取れません」

「ややっ、それはもう陛下ってば、グイードさんにとって重要な位置を占めてますね！」

「それだけではありませんよ？ グイードは護衛としては陛下以外の仕事は難しいですからね。ある意味、死活問題にまで発展しています」

「おおっ」

そんな事を二人で話していると、どうやら陛下の方が折れてしまったようだ。

彼は諦めたように息をつく。

「判った。もう好きにしろ、お前も」

「きゅん。きゅぴぴみゅび、みゅぶ」

「……………」

「ああ。やりたいようにやればいいだろう？ その小娘にも城の者を好きに使うてよいと許可を出した。二人揃って仲良く好きにすればよい。余は知らん」

「ぶぶ。きゅんきゅんぴゅーんぴゅみみゆ？ きゅんぴきゅんきゅんみゆぴゅんちゅちゅきゅび。きゅぴきゅぴきゅんみゆみゆぶ。きゅんきゅん」

「……………」

「ああ。そうだ」

「ぶぶ。きゅん」

私は全てを諦めてしまったかのように許可を出してしまっている陛下を不思議に思い、たぶん長い間、陛下を見てきただろうディルクさんに聞いた。

「あれ、陛下って押しに弱いんですか？」

「いや、そういう訳ではないんですけどね。基本的に怖い方ですし、妥協も容赦も情けもありませんよ」

ディルクさんの言い様に私はちよつと笑ってしまった。

「でも、ガイドさんには折れちゃってますけど……………」

「ガイドは……………なんというか、陛下にとってはもう子供のような位置づけで」

「え、オコチャマ男にあんな大きな子供ですか?!」

私が驚いてディルクさんの亜麻色の瞳を見ると、ディルクさんは呆れた視線で私に応えた。

「オコチャマ男って。あの方をそう言うのは貴女だけですよ」

「え、そうなんですか？」

「他に誰が居るんです？」

「うーん、まあ上司と部下の関係ならディルクさんたちは言えないにしても、恋愛で結びついている後宮の側室さんたちとか」

「まさか」

ディルクさんが即行で否定した。

「あの方は確かにお持てになりますし、後宮の女たちに人気もあります。独占したいとも思われているでしょう。現れたばかりの貴女に早速の嫌がらせをする程にはね。けれど彼女たちが誰よりも恐れられているのは陛下ですよ。あの方への暴言などとてもない」

「何故ですか？」

独占したいとまで思っている男に何故恐れを抱くのか、私にはよく判らなかつた。

だからデイルクさんに疑問に思った事を当然のように私は聞く。

「それは好きなのに陛下に嫌われるのが怖いからですか？ 後宮を追い出されるのが怖いというか」

まあ、それなら当然だよな？ いろいろ理由があつて廃止出来ないと陛下は言つていたけれど、所詮、無理を通せば陛下にやっやれない事はないだろう。まして嫌いになつた女ひとりを追いつ事など訳無いに違いない。それに伴い批判や何らかの損害は被るかもしれないけれど。

「理由のひとつではあるかもしれませんが」

「他にも理由があるんですか？ どんな？」

会話の流れで聞いた私に、デイルクさんの私を見る目が鋭くなつた。

「それを貴女が知つてどうするんです？」

「え？」

「貴女は何も知る必要はない」

ピシヤリといった感じでデイルクさんに言われ、私は途端に居心地が悪くなつてしまふ。

何だろう、この感じ。

トリエスに来て初めて感じる居心地の悪さ、違和感では無かつた。私はそんな違和感から自分を誤魔化す為に、先程、少し疑問に思つた事を深く考えもせずデイルクさんに投げた。

「そういえば、さつきデイルクさんが言つてたんですが、」

「なんででしょう」

「陛下つてば、なんで数年も後宮に通つてないんですか？」

まさか本当に不能つて訳ではないだろうに。もしそうであるのなら最初から行かないはずだし、数時間前に上で私が擦つた時に、勃ちこそはしなかつたが、ほんの僅かとはいえ反応はしたのだ。それ

に、あのディルクさんの言い方だと少なくとも数年前までは通っていたという事なのだから。

「それも貴女が知る必要のない事だと思えますが」

「……………」

いいですか、とまるで言い聞かせるような態勢になってディルクさんが私に目を合わせてくる。

「忠告というほど大袈裟なものではありませんが、貴女がこのトリエスで上手くやっていきたいのなら、深く知りすぎない事ですよ。俺が言えるのはここまです。」

陛下、そろそろ本当に戻りませんか」

「そうだな」

「きゅんぴ」

ディルクさんの声に直ぐに応えた陛下に私は驚いて彼を見た。

すると、陛下もグイードさんも既に二人での不可思議な会話はとつくに終了させていて、どうやら私とディルクさんの話を聞いていたようだった。

狭い空間での事だ。それは当然なのかもしれない。

グイードさんはよく判らなかったが、陛下の私を見る瞳はとても冷たかった。

「話は終わったのか、小娘」

「みゅぴびみきゅん、びび」

「……………」

「終わったようだな？ では戻るか」

「ちゅぴきゅんむび？ みゅぴびみ」

その言葉を合図に私たち四人と一匹はアヤシイ謎の小部屋、陛下の言う秘密の小部屋を後にした。

陛下の後に続くウオちゃんの無邪気そうな声だけが、私に少しの勇気を与えてくれた。

小部屋を出て暫くして。

相変わらずの単調な道のりに当然の事ながら私は飽きてしまっていた。

戻れど戻れど同じ材質で光り方の通路なのである。

行きとは違い既に知っている道程となってしまうていたし、しかも今はデイルクさんの右腕一本抱っこのお陰で自らの足を動かす必要も無い。

デイルクさんって凄い力持ちだよ、私、結構重いのに、と思いつながら何処を見ても同じ眺めでつまらなかつたから、私はデイルクさんの首に軽く巻きつき、その体勢に逆らわないままに直ぐ後ろを歩いている陛下のキンキラキンとした顔を眺めていた。

ちなみにデイルクさんの頭の上で大人しくしているウオちゃんも小さな目で陛下の方を見ていた。ウオちゃんは長い胴と尾をデイルクさんの左耳側に垂らし、小さな手足で彼の髪を掴んで踏ん張って後方、陛下の方を向いている。

陛下はそんな私たちに先程から嫌そうな視線を向けていた。

「後ろを見ないでくれないか」

「みゅびみゅきゅんきゅんぴ」

「そんな事を言われても…… 暇なんですもん」

「お前には言っていない。ウオに言っているんだ」

「みゅぶきゅんぴきゅん。ぶぶきゅんきゅんぴぼみ」

「え」

「陛下、ガイドだけでなく両生類とまで会話できるんですか、貴方は」

「凄いですねとディルクさんの少々驚き気味な声に、陛下の眉間に皺が寄った。」

「そんな訳あるか」

陛下は吐き捨てるように言うと、黄金サラサラストレートな髪を煩わしそうに掻き上げた。

それを見て、私はこの地下通路に入ってから思った事を言う事にした。

「陛下さあ」

「なんだ」

「きゅぴ」

「その髪、邪魔そうだから留めたらどうですか、ヘアクリップか何かで」

「へあくりつぷ？」

「きゅんきゅん？」

「何ですか、それ、珍獣様」

二人が同時に疑問の声を上げ、陛下の後ろを歩いているガイドさんをちらりと見ると彼も私を見ているから、きつと同じように疑問に思っているだろう。

私はどう説明すればいいのかと考えながら、陛下の髪に手を伸ばした。

陛下がそれを悟り、頭を近づけてきたのに私は少し驚く。

「で？」

「ぷ？」

「ああ、ええとですね、」

私は驚きながらも、陛下の横に流していた前髪にしては長い髪と横の髪を少し取って、前方から後方へ頭上に置くように纏め上げた。「例えばこういう風に纏めてですね、挟みたい髪留めで留めるんですよ」

「髪留めか。それはトリエスでは女の飾りだが」

「きゅきゅ。ちゅぴきゅぴゅぴゅみきゅん」

「うーん、日本でも基本的に女性の飾りなんですけど、最近はこちらと違うかなあ」

「違う?」

「きゅ?」

「はい。結構、若い男の人なら付けてますよ? まあ、普段からというより、仕事とか勉強とか食事の時に」

人によつては付けながら道を歩いている人も居るけどね。最近ではファッションとしてスカートを履いている男の人も居るくらいだし。そこまでは私にはちよつと理解出来ないんだけど。

私は陛下の頭上で纏め上げていた髪を一旦放し、今度は彼の耳横から後方に流すように纏めた。

陛下の髪は、テレビCMの髪モデル並みの本当に羨ましい程のサラサラストレートだった。

「シンプル……華美な装飾がついていない物ならいいんじゃないかなあ。上で挟むか、横で挟むかして。別にずっと付けている訳ではないし、がっちり固定する訳でもないし、ちよつと邪魔な時に留めておくだけです。すぐ外せますしね。そういうのってトリエスには無いんですか?」

「余は見た事がないが、どうだ、ディルク」

「きゅぴゅぴゅみゅ、みゅん、ちゅぴゅ」

「俺に聞きますか。まあ、俺も見た事はないですかね。城の女はどれも華美で重そうな髪飾りでしたっけり留めてしまつて、着脱はひとりでは無理なものばかりだったと思いますし、庶民は頑張つてりボーンがいいところじゃないですか?」

私は陛下の髪から手を放した。

彼は私が手を放すと、先程と同じ距離を取る為に少し歩を遅らせる。

「無いんなら作ってみます?」

「作れるのか？」

「ちゅぴちゅ？」

「いや、私が直接作るのは無理ですけど、作りは知ってますからね。お城の器用な人にお願ひすれば出来ると思いますけど」

「では細工師を使え。あれは器用な男だから言った物は大抵作れるだろう。イエルクという男だ。デイルク、近いうちに小娘に会わせやれ」

「きゅぴみゅびきゅ。きゅみゅちゅびちゅぶちゅびちゅぶちゅびちゅぶちゅび。きゅぶぶちゅんびび。ちゅびび、きゅんきゅびきゅんびぶぶぶ」

「判りました」

なんだか話ごとんとん拍子に進んでしまった事に私は不思議な気持ちになりつつも、そういえば、と言葉を続けた。

今、いい事を思いついたのだ。突然の思いつきだけでも、私にとっては結構重要な事である。

私はデイルクさんの頭の上で大人しく陛下を見続けているウオチヤンを撫でながら、その思いつきを実行する手段への許可を、後ろを歩いている陛下に言ってみる事にする。

「ねね、陛下」

「なんだ」

「きゅん」

「その細工師のイエルクさんって人、私、私的に使ってもいいんですかね」

「城の者を好きに使えと言った」

「きゅぴきゅみゅちゅびちゅび」

「あ、そうですね。そっかあ」

「ややっ、じゃあ、作ってもらっちゃおうっ！」

私の頭は普段ない勢いで動き始めた。

天才陛下と違って基本的に同時に違う事を考えられない頭の作りである。

私はその思いつきに、材料は何にしようか、形はどうしようかと色々と考えていて、それが頭を占めた瞬間に一切周囲が見えなくなっていた。そして、それがどうやら顔に出ていたようだ。

視線を感じて現実の世界に戻ってみると、後ろを歩いている陛下が怪訝そうに私の顔を見ていた。

「好きに使ってもいいが、何をするつもりだ、小娘」

「ぴゅぴゅぽぷみみみ、みぶきゅんきゅん、ぴゅ」

「え、それは団員証を作るに決まってるじゃないですか」

「団員証？」

「ぴゅぴゅ？」

「何の団員証ですか、珍獣様」

私の回答に陛下もディルクさんも疑問に思ったようだ。私はやっぱり何となく気になるグイードさんの方をちらりと見ると、彼もこちらを見ている。深い緑の瞳と目が合った。

私の手を振ってみると、グイードさんが小部屋に居た時と同様、また少し目を伏せた。

私のやっている事に気づいた陛下が後ろのグイードさんを振り返って見て、次いで私に視線を戻す。

彼は呆れたような溜息をひとつついた。

「何をやっているんだ、お前達は。小娘、あまりグイードで遊ぶな。これはお前の奇行についていけないだろうよ。まあ余もだが」

「きゅんきゅんぴちゅ、ぷちゅむ。ぴゅ、ちゅんちゅんぽみゅぶ。みゅきゅぴゅぴちゅきゅきゅんきゅんぴゅ。きゅんきゅん」

言って陛下は疲れた様に横髪を耳に掛けた。が、掛けた途端にサラサラと落ちてしまう。

やはり彼にはヘアクリップは必要不可欠のようだ。

しかし今はそんな事はどうでもよかった。

「奇行ってどういう意味ですか?!」

「奇行は奇行だ。それより団員証の事だ。何の団員」

まさか

お前!」

「きゅぴきゅぷ。ちゅぷきゅぴみゅちゅ。きゅんぴ
きゅみ
ゆぷ！」

陛下が信じられないとばかりに綺麗な紫の瞳を見開いた。
そんな彼に向って私はニンマリと笑う。

「ピンポン！ たぶん陛下の頭の中にあるので正解です！ や
やっ、流石天才！ でもでも陛下はブルーへヴンの団員には泣いて
も叫んでも悶え苦しんでも永久になれませんかね、残念ですが団
員証は一生涯手に入りませーん！」

「要るか！ 馬鹿馬鹿しい！」

「ぴゅん！ ちゅちゅぴび！」

そんな私たちの遣り取りにディルクさんが不満気な声を出した。

「そこ、二人で仲良く会話を進めないでくれませんか？ 俺も入
れてくださいよ。で、団員証とは何の団員ですか、珍獣様」

「あ、聞きたいですか？」

私のウキウキした声に、陛下の心底うんざりした声が被る。

「聞く価値もないぞ、ディルク」

「きゅみゅぴゅぴゅ、ちゅぴび」

「いや、そう言われると益々気になるじゃないですか、ねえ、珍獣
様」

「ですよー！ って事で！」

「って事で？」

「おめでとーございまーす！」

「え、何がですか？」

前を向きながら会話に参加していたディルクさんが私の方を向い
た。ウオちゃんを頭にちんまり乗せている彼は可愛らしいんだか間
抜けなんだか判らなくて、私はちよつと噴き出しそうになるのを堪
えながら彼の疑問に答えてあげる。

「ディルクさんには団員番号五番、ガイドさんには六番、そして
まだ見ぬドルフさんには七番を任命です！ 私の栄えあるブルー
へヴンの団員です！ 栄誉あるんですよ！」

私の言葉にいち早く反応し、呆れ声を出したのは陛下だった。

「会ってすら居ないのにルドルフも加わったのか。阿呆すぎる」

「阿呆ってなんですか！ 陛下はね、」

「なんだ」

「ぷびぷ」

「いっつもいっつも一言多いんですよ！ 男として本当に最悪！

嫌われる男の条件に入ってますよ、それ！」

「結構だ、それで。むしろ嫌われないものだな」

「きゅん、ぴゅん。きゅびちゅびみゅびきゅん」

陛下がふんといった感じで言い捨てた。

そのモテ男独特の贅沢台詞に私は瞬時に腹が立つ。

「ちよつと、陛下！ あのですね」

「いや、お二方とも、そんな話とはつきり申し上げてどうでもいいんですよ。俺はね、珍獣様に聞きたい事があるんです。で、ブルーヘヴンとは、珍獣様」

デイルクさんが陛下と私の会話を無理矢理に終わらせた。

彼は時折、陛下に対して少し砕けた態度を取る節があるようだった。陛下もそれを特に気にしている様子ではないので、彼らの間には少なくとも信頼関係のようなものが成立しているのだろう。

私が彼の質問に答える為に口を開こうとした時、陛下が先に口を挟んだ。

「このぎゃくはー構成団ブルーヘヴンの事だ。妄想のな」

「きゅびきゅびきゅびきゅびきゅびみゅぷぷ。ぴゅんぴ」

「妄想じゃありませんよ！」

失礼な！

「ぎゃくはー？」

「デイルクさん、妄想じゃ全然無いですからね！ 説明すると長くなるので簡単に言つと、逆ハーとはイイオトコ達が私に尽くす集団の事です！」

私の力の入った回答とは反対に、デイルクさんは脱力したような

声をだした。

「はあ、いい男が貴女に尽くす集団ですか」

「そうです！ 本気で光栄に思ってくれていいですよ！ 既に団員は四人居ますからね！」

「誰ですか？」

「ふふふ……良くぞ聞いてくれました！」

「お前は本当に阿呆だな。判っては居たんだが」

「みゆぷきゅんきゅぴび。みゆきゅちゅきゅん」

「五月蠅いですよ、陛下！ ウザ男は黙って下さい！」

「小娘っ！」

「ぴぴっ！」

ぎつと此方を睨みだした陛下を私は当然の如く無視した。

「デイルクさん！ いいですか、私の栄えある薔薇の逆ハ―構成団ブルーヘヴンにはですね、団員番号一番にヘロルドさん、二番にバルツァーさん、三番にユーリウス少年で、四番にラードルフさんの計四人が既に団員です！」

私の言葉にデイルクさんが心の底から吃驚したような反応をした。「本当ですか、それ！ オツサンに法務長官、真面目一辺倒で融通のきかない事で有名なベツケラート団長が団員なんですか?! 凄いですよ、それは！ 加えてユーリウス少年って 陛下、ベルクヴァイン侯爵家の御子息の事ですよね?! 今、宰相閣下がお預かりになっている！」

「信じるのか、お前は！」

「きゅんきゅ、みゆぷ！」

陛下が憤りを表すように声を荒げた。

しかし私もデイルクさんも全く気にしちやいなかった。

「っていつか、それよりもだ！ 私は今、聞き捨てならない事をデイルクさんの口から聞いたよ！」

ユーリウス少年が侯爵家の子供だったんだとか、ラードルフさんは融通がきかない人だったんだとか、本来なら多少は驚いていいは

ずの新事実発覚を完全に帳消しにしてしまつ暴言をだ！

私はデイルクさんを説教する為に、彼の両頬をがちりと手で挟んだ。

「珍獣様？」

「デイルクさん！」

「なんでしよう？」

「“オツサン”って誰の事を？」

「は？」

「誰に向かって、“オツサン”って？」

「ヘロルド・ブロンザルトの事だろう？」

「みゆびび・きゅんきゅんぴみゆみゆ？」

答えたのは陛下だった。

「ちよつと陛下！ ヘロルドさんに向かってオツサン呼ばわりする暴言、許していいんですか?!」

陛下は何を言っているんだ、といった顔をしながら肩を竦めた。

「オツサン、であっているのでは？ そういう年だろう、あれは」

「ちゆびび、みゆきゅんきゅんきゅん？ みゆぶびぶびぶび、きゅん」

「ええ、そうですね。珍獣様、それに何か問題があるんですか？」

「きゃー！」

「五月蠅い、小娘」

「みゆんぶ、ぴび」

「それ本気で言ってるんですか、二人とも！」

「ああ」

「ぷび」

「ええ」

二人は声を揃えて返事をし、私の言いたい事が全く判らないという表情をした。

私はそんな二人に怒りの鉄鎚を下す為に、まずは陛下を手招きする。

彼は何の疑問も抱かなかったのか、私の手のリーチにあっさりが入ってきた。

入った瞬間、私は陛下の頭を拳で思いっきり殴った。実にいい音がした。次いでディルクさんの側頭部を素早い動きで殴る。こちらもいい音だった。

その私の突然の行為に陛下もディルクさんも、ぼかんとした間抜け顔を晒す。どうやら言葉もないらしい。

「信じられない！ ヘロルドさんのような品のあるロマンスグレーを捕まえてオツサンって！ 彼はセバスチャンなんですよ？！ 王都に店を構える予定の執事カフェの売れっ子ナンバーワンになる逸材なんです！ それを何です！ ヘロルドさんに謝って下さい、陛下もディルクさんも！ 彼に比べたら二人なんて青二才以外の何者でもないじゃないですか！ ケツの青いクソガキの分際で生意気な！」

「……信じられないのは、お前だ、小娘」

「……きゅきゅびきゅび、みゅぶ、びび」

私の怒りの叫びに直ぐさま返してきたのは陛下だった。彼は殴られた箇所を手をあてた後、忌々しそうに一度ざっくりと髪を梳いた。「俺も信じられませんね。凄いです、珍獣様。普通じゃありませんよ、貴女は」

「普通じゃないって、失礼な！」

私がディルクさんを睨むように目を向けると、彼は別段怒ったふうでもなく、ただ純粹に感心しているといった様子だった。

「トリエス国王の頭を殴るなんて、そんな暴拳が出来るのは世界中

で貴女しか居ませんよ。 ですよ、陛下」

「そうだな」

「きゅんぴ」

陛下のむすりとした様子の返事に、ディルクさんが笑った。

「女に殴られたのは初めてなんじゃないですか？」

いい記念ですね、と笑い続けるディルクさんに陛下がむっとした顔をする。

「女どころか男にも殴られた事はそう無いが？ それに小娘は女じゃない。珍獣だ」

「きゅんきゅんみゅぴみゅぴみゅみゅきゅ？ きゅんぴきゅ

んみゅん。ちゅぴ」

ディルクさんが爆笑した。

「ちよつと！」

なんでそこで爆笑が来るのよ！

私が目吊り上げたのに、ディルクさんがまるで宥めるように空いている方の手で私の背中をぼんぼんと軽く叩いた。

「まあまあ。良かったじゃないですか、珍獣で。女として……：といふより人間として認識されていたら、貴女はきつと処刑されますよ？」

「え」

「当然でしょう？ 王を殴ったんですから」

ディルクさんが目を細めながら言った。

「ややっ、そうなんですか?!」

私は驚いてしまって、ディルクさんから少し身を引いてしまう。
「危ないですよ、珍獣様」

「それって常識なんですか?! 殴っただけで?! 陛下、そんなんですか?!」

「まあ、普通はな」

「ぶみ、きゅんぴ」

陛下が不愉快そうに襟元を軽く直しながら答えた。

「え、だって私ってば、」

「私ってば？」

ディルクさんが何処か面白そうな顔をしながら私に先を促す。

「陛下の鼻の穴に指を突っ込んで鼻血出させたし、急所攻撃二連発も喰らわしちゃって陛下の玉を上げちゃったしですね？ それに顔も舐めちゃったし、此処に落ちる前なんて、陛下のベッドの上で陛下を押し倒して、彼の竿を擦って無理矢理犯ろうとしちゃったんですよ?! え、私ってば処刑コースなんですか?!」

「は？ 今、言った事は事実なんですか、珍獣様」

「はい、事実ですけど？ 嘘は言っていないですよ、私。ね、陛下」

「よくそついう事を恥ずかし気も無く平気で他人に言えるな、お前は！」

「きゅんちゅちゅきゅーんみゅびみゅびきゅんきゅん、みゅぶ！」

陛下が遣りどころの無い怒りをぶつけるかのように左手に持ったままの短剣二本を握りしめた。短剣同士が擦れ合う金属の音が微妙に聞こえる。

「いや、陛下、他人に言える言えないの問題ではなくてですね、貴方たちは一体何をしていたんです？ 珍獣様がこの世界に現れてまだようやく二日目に突入したばかりですよ？ 進展が早すぎませんか。仲が宜しいことで結構というか何というか。もしかして俺達、迎えに来たの早すぎましたかね？」

「ふざけた事を抜かすな、ディルク！」

陛下が激昂し、通路に響くような声をあげる。

私はそれに呆れた。

「陛下ってさ、怒りっぱいですよね」

「うーん、普段はあまり感情を表に出さない方なんですけどね」

ディルクさんが首を傾げる。

その動きに合わせ頭上のウオちゃんが重心を変えたようだ。なにやら器用な両生類である。

「そうなんですか？」

「ええ。実は密かに驚いてますよ、先程から、俺は」

「余の話はどうでもいい。しないでくれないか。不愉快だ」

「きゅんきゅんみゅーび。きゅんびきゅんぶび。きゅんび」

陛下がそう言うのに私とディルクさんが顔をなんとなく見合わせた時だ。

私はふと今居る場所が、とある地点であるのに気がついた。

だから一応、注意しておくことにする。

本当、何度も言うようだけど親切だよな、私って！

「そういえば、ここって私の尿地帯だから気をつけて下さいね！」

「は？ ニョウチタイ？」

「……小娘」

「……びび」

尿を上手く頭で変換出来なかった模様のディルクさんは、私に怪訝そうな瞳を向けた。

「尿は尿ですよ？ 糞尿の尿です。下から出る液体の排泄物。ドババともチヨロチヨロとも出る液体の事ですよ」

「……」

「……お前な」

「……みゅぶ」

私は排泄時に居なかったディルクさんとガイドさんに詳しく説明してあげるために、排泄したあたりを指さした。

「あの辺りですよ。ほら、陛下のハンカチらしきものがあるでしょう？ あれで拭いたんです」

「……陛下」

「……何も聞かないでくれ」

「……きゅきゅびゅびゅぶ」

「あ、そうだ！ 陛下、やっぱりハンカチ洗って返しますね！ 拾わないと！」

もったいないしね！ 日本人はね、もったいない精神を持ってい

るんだよ！

「要らんと言っただろう！」

「きゅんぴきゅんみゅん！」

なにやらテンションが上がり出したディルクさんと上がり出した陛下、黙々とついてくるグイードさんの計三人に私は得意気に話を続けた。

「ディルクさん、グイードさん！ 私、凄いですよ！ 出した先から前後左右に広がる尿を避けながら、用を足す技を身に付けたんです！ 少しずつ尿を出しながら後ろに下がっていくんですよ！

陛下も知ってますよね？ 変態も甚だしい事に、五歩程度しか離れていない距離で私の放尿の音を聞いていたんですから！」

「……………え」

「頼む、本当に何も聞かないでくれないか」

「きゅ、ぴゅんぴゅんきゅーんきゅんきゅ」

私は更に得意げに話を続けた。

「それにですね、私つてば、通路を横に区切るように尿で境界線を引いてみたんです！ 魔除けですよ！ これであのアヤシイ謎の小部屋、陛下のいう秘密の小部屋とお城を切断してあげましたからね！ お城はもう大丈夫！ 凄いですよね、私！ 超役に立ってますよ！ 日本産巫女乙女な私です！ あ、魔除けの料金は陛下から貰ったトリエス金貨五千枚と銀貨三枚、加えて珍獣向けお小遣いである銀貨一枚の中に、今回は特別に含めてあげますから安心して下さいね！ 出血大サービスです！ きゃ、私つて物凄く太っ腹！ ね、へ・い・か！」

「金貨五千枚？」

「小娘つ、言う」

「ぴぴっ、きゅ」

「あ、それはですね、陛下が私の秘密の花園に顔をつけたから、その料金です！ 私つてば処女なんですけどね？ その初物な秘密の花園、はつきり言っちゃうと処女膜がある付近に、陛下つてば顔を

埋めただけでなく匂いまで嗅いでですね？ だから異世界日本基準でその料金を支払ってもらったんです！ 日本円に換算すると五億円！ 私ってば、このお金で何時かトリエスの王都に家を買っついです！ マイスイートホームですよ！ 名付けて官能の館！ 一階に風俗店を開店する予定ですから、陛下もデイルクさんもグイードさんもお客様として来店してくださいね！ サービスしますから！ 三人には特別に銀貨一枚ポツキリで全コースを堪能させてあげます！ 私の方針で本番は無しですが、その代わりちよつと他では味わえない体験をさせてあげますからね！ 癖になること間違い無しです！ 私が保障しますから、是非、官能の館で出しまくって下さいね！ 射精しまくりですよ！ 空砲万歳です！ 私ってば陛下を常連客にして官能の館を王室御用達にして大繁盛させて、王都の影のドンになるのが夢なんです！ 表の陛下、裏の私！ きゃ、素敵すぎ、私！ ちなみに事業税も所得税も消費税も払いませんからね！ 脱税を此処に宣言します！ トリエスの国税なんて追い払ってみせますから！」

言っただけがお客様は神様ですな如くの爽やかな笑みを顔に浮かべたのに、聞こえてきたのはドン引き状態なデイルクさんの声と怒りに震える陛下の声だった。

どうも二人は折角の私の力説を中盤から聞き流していたようだ。

「……陛下、貴方、珍獣様とある意味濃厚な関係にお成りになったんですね。なんと申しますか、普通ではない世界の関係というか、行っただけはいけない世界の関係というか」

「黙れ、デイルク！ 小娘っ、お前のくだらん未来の展望などどうでもよい！ 何が脱税だ！ それよりお前、余と約束したよな？！」
「ぶぶ、ちゅびび！ びびっ、みゅぶきゅんきゅんびゅんみゅーんきゅんびび！ きゅんびび！ ちゅんみゅぶ、きゅんきゅんぶびび？！」

陛下の紫の瞳が凶悪に光った。その光り具合と云ったら、ピッカピカという表現がぴったりな感じだ。きつと今、あの目から紫のレ

「ザー光線が放射されても誰も疑問を抱かないだろう。陛下ひとりで敵軍十万を殲滅出来そうだ。」

「え、何を？」

「惚けるな！ 余は話題にするなど言った！ この件は二度と口に乘せるなど言ったよな？！ その為の金貨五千だったはずだ！」

「ぴゅんぴ！ みゅぴぶぶぶびゅ！ きゅんきゅんぴゅんみゅんきゅーんぴ？！ きゅんぴみゅーんぴゅんきゅーん！」

「あれ、そうでしたっけ？」

「っ！」

「ぴ！」

陛下の左手の短剣がまた金属の擦れる音を出した。彼は手にしている二本の短剣をどうやら渾身の力で握りしめているようだった。

「陛下、貴方、いま最低な事を口にしていきますが？」

「何?!」

「ぴ?!」

「それに俺、物凄く驚きました。もう心の底から。今の言葉で顔を埋めたあの匂いを嗅いだだのといった事が事実だと自ら認めてしまったではないですか、貴方は。我々の前で」

「っ！」

「ぴ！」

「五月蠅い、ウオツ！」

「……ぴゅ？」

陛下の怒りの矛先が突然ウオちゃんに向いた。

「え」

「陛下？」

それに私もディルクさんも行き成り過ぎてついていけなかった。ディルクさんが歩きながら後ろを振り向き陛下を見る。

ウオちゃんが彼の頭の動きに合わせ、陛下の方へ向く為にちょこちょこ短い手足を使って方向転換をしていた。

本当に器用な両生類だ。

「余にも我慢の限界がある！ 先程から耐えに耐えてきたが、ウオ、お前は何故、余の後にだけ声を発するんだ！」

「……………びび？」

「ややっ、陛下、突然どうしたんですか？」

「陛下？ 何をおっしゃりだしているんです？」

陛下が凶悪で極悪な盗賊の頭も真つ青の紫の瞳を私に向けた。その半端ない強烈な眼光に私はデイルクさんの首に巻きつける腕に力を入れる。

デイルクさんからの苦情は無かった。彼は右腕に乗せる事で小部屋からずっと私を抱えていたが、それに左腕を加えた。デイルクさんは私の背中に左腕を回し、自分の身にしっかりと固定する。

「デイルクさん」

「珍獣様、俺にしっかりとしがみ付いていて下さい。なにやら雲行きが」

私たち二人が陛下を見ながら互いの耳元で話していると、陛下が二本の短剣の鞘を同時に抜いた。彼の左手には二本の抜身の短剣。右手には鞘だ。

「小娘、ウオを渡せ」

「え、いつ嫌ですよ！ その手の短剣がものすつごく物騒ですもん！」

私が拒否したのにも関わらず、陛下の澄んだ瞳が楽し気な様子で細くなり、口角も笑むように上がった。

それが今の状況とはどうにもかけ離れていて私の背筋に震えが走る。

怖すぎるよ！ あれは一国の国王陛下じゃないって！ だよね、デイルクさん、グイードさん！

「渡さんのか、小娘？」

「だって」

「ぴゅん！」

「会話に参加するな！ 両生類の分際で！」

陛下が怒りを爆発させた。

彼はその凶悪な紫の瞳の照準をウオちゃんに合わせると、左手の短剣を軽く振った。

「小娘、ウオを渡せと言った！ それの声帯を切る！」

「声帯って！ 陛下、ウオちゃんの声帯の場所、判ってるんです

って、うわっ！」

「つくそ！ 正気ですか、貴方は！」

陛下が一気に踏み込み、ディルクさんの頭上に乗っているウオちゃん目掛けて短剣を一閃した。

私にとっては目にも留まらぬといった早業で、ディルクさんがぎりぎりのところで姿勢を落としてくれなかったら、今の攻撃で私の髪の毛と房くらいは切られていたかもしれない。

私は陛下の信じられない行動に驚きすぎて、口と目をこれ以上ないくらいに開けてしまう。

「ちよつと陛下！ ウオちゃんを殺す気ですか！ って、きゃっ！」

「陛下！」

第二撃が問答無用に襲ってきて、私はディルクさんの腕の中で悲鳴を上げるしかなく、ディルクさんは陛下の攻撃を避け終わった瞬

間に勢いよく走りだした。

「危ないじゃないですか！ 陛下の馬鹿！ 私とディルクさんまで殺す気ですか、このドドS残虐非道男！」

「グイード！ 陛下をお止めしろ！」

ディルクさんが全力疾走並みな速さで落下地点の方向へ走りながら、怒鳴るようにグイードさんへ指示を出した。

私は指示を出されたグイードさんが、同じく疾走して殺気を漲らせながら此方へ向かってくる陛下に近寄っていくのを、ディルクさんの肩越しに見ていた。

ウオちゃんを睨んでいた陛下がふと私を見る。

そして彼は驚きに目を見開き続けている私に、実に綺麗な笑みを浮かべてみせた。

瞬間。

「グイード！ 鞆を拾ってこい！」

言って陛下は今来た道、後方に向かって右手にあった二つの鞆を振り向き様に思いつきり投げつける。

グイードさんは彼の命令に瞬時に反応し、物騒な陛下に近寄るのを止め、素直に鞆を追っていつてしまった。

私はあんまりな流れに吃驚する。

「犬です！ ディルクさん！ さっきディルクさん、陛下にとってグイードさんは子供みたいなものだって言っていましたけど、全然違いますよ！ 陛下にとってグイードさんは犬でした！」

「……………」

グイードさん、尻尾を振ってフリスビーを追っていく飼犬みただったよ！

鞆を拾いに行かせる事で忠犬を追い払った陛下は、左手に持っていた短剣のうちの一本を右手に持ち替えた。

そして小部屋で見た不思議な握り方に変える。

私は何だかそれに途轍もなく不吉な予感がしてディルクさんの背中をパシパシと叩いた。

「ねね、デイルクさん！ 陛下、短剣、変わった握り方で持ってますけど」

私の言葉を聞き終わらないうちにデイルクさんが顔を少しだけ後ろに向け、視線だけを走らせる。そして盛大に眉をしかめた。

「陛下、いい加減にして下さい！ そんな物騒な構えは止めて下さいよ！ 刃物に触れると人格が変わるあの人じゃないんですから！」

「あの握り方、あれ、何なんですか?!」

「詳しい事は言えませんが、少なくとも通常なら一国の国王が習得するようなものではありません。あの方はいろいろと危険極まりない物騒なものを習得しているんですよ。既に半分以上趣味ですがね！」

「え?」

「俺と陛下は同じ年なんですがね、あの方に初めて会った時、彼はまだ王子だったんですよ。その時の陛下といたらもう姫君のように可愛らしくってですね、加えて弱」

「デイルク！ お前は何を余計な昔話を！」

私たちと陛下の距離が恐ろしい勢いで縮まってきた。

陛下が本気で追ってきていた。

デイルクさんは私を抱え、ウオちゃん頭に乘せて走っているのだ。どう考えても逃げ切れる訳が無く。

陛下のリーチに私たちは完全に捉えられた。

「デイルク、お前、ウオよりも先に逝きたいようだな！」

「ちよつと陛下！ そんな事、デイルクさん一言も言っていないじゃないですか！ ってか、もしかして昔話っていうのが逆鱗に触れちゃってるんですか?!」

「五月蠅い！」

「そんなの隠す事でも何でも無いじゃないですか！ 陛下を見れば、小さい頃は女の子みたいに物凄く可愛かったんだろうな、って誰だっただけに想像が付きましますよ！」

「何?!」

「更に言いますでしょうか？！ 私が陛下の小さい頃を想像しますとですね、きつとお母様とその周辺の使用人達に着せ替え人形の如く、リーストリボンがふんだんにあしらわれた淡い桃色のドレスなんて無理矢理着せられて、

『きゃあ、王女様！ お可愛らしいですわ！』

とか、

『早く王女様だけの王子様が現れると宜しいですわね！』

とか、

『なんとか国のなんとか王女よりも全然お可愛らしいですわ！

将来が楽しみですわね！ きつと絶世の美女にお成りになりますわ！』

とか言われてたんじゃないですか？！ そんなもって陛下、王子の時に図書室の本を七割読んだらしいですけど、もしかしてそれって、着せ替えから逃げ込んだ先だったりして！」

「小娘っ！」

「珍獣様、凄いですよ！ 貴女は本当に！ 恐ろしい程に当たっちゃってますー！」

「え、マジで？」

「デイルク、貴様！」

「まあまあ陛下 お、着いたようですよ、お二方とも」

デイルクさんの言葉に私は振り返り、前方を見た。

そして思わず息を呑む。

「嘘」

デイルクさんが通路を抜け、屈む事もなく出入り口を通過して落下地点に入った。

彼は走るのを止めると、私をゆっくりと下ろす。

デイルクさんが後ろからついて来ていた陛下を振り返った。

陛下は通路から落下地点への出入り口で、呆然とした様子で足を止めていた。

「陛下、申し上げた通りでしょうか？ しっかりとした梯子もありま

すし、この空間も珍獣部屋に開いた穴と同じ大きさですよ」

陛下が抜身の短剣を持ったまま、右手で額を押さえた。

「信じられん……」

彼がそう言うのも当然だった。

私たちがこの空間に落下した時、二人が並んで座れない程の狭い空間で、梯子なんて無かった。そして今、陛下が立っている場所。珍獣部屋に敷いてあった絨毯を切つて姿を現したあの出入り口は、一メートル四方の穴でしかなかったはずで、少なくとも陛下が立っていられる高さでは全くなかったはずなのだ。

一緒に落ちてきた珍獣部屋の臭い絨毯は、空間の端に畳んで置かれていた。きつとデイルクさん達が来た時に邪魔だから寄せたのだろう。絨毯の上には私たちが落ちた時には無かった縄の束が置いてあった。

「どういう事だ、本当に。有り得」

そこまで呆然自失の呈だった陛下が突然身を崩した。

二本の短剣が彼の手から離れ、大きな音を立てる。

「陛下！」

デイルクさんが駆け寄った。

陛下は気を失ったとか完全に倒れたという訳ではなかった。彼は片膝についてしゃがみこみ、何かを耐えるようにじっとして動かない。

デイルクさんが陛下の傍まで行くと屈みこみ、彼に手を差し伸べた。

「無茶をするからです」

「……大丈夫だ」

陛下がデイルクさんの手を拒んだ。

思わぬ展開に私は咄嗟に動けなかった。

どうして陛下は突然立っていられなくなったのだろうか？ 出会ってから今まで、彼は眠いだの疲れただの腹が空いただのとは言っていたが具合が悪そうにも調子が悪そうにもしていなかった。

どうして。

「あ、陛下、もしかして足が痛いんですか？」

私もデイルクさん同様、陛下に駆け寄った。

陛下の傍まで行くと私もしゃがみ、彼の左足首に触る。

私がテーピングもどきを施したのだ。もしそれが悪さをしているのなら、早く取り除いてあげなければならぬ。

そう思い、私が彼の左足のズボンの裾を上げようとすると、陛下が止めた。

「いや、足首ではない。気にするな。少し休めば治まる」

陛下は全てを拒むように言っと、眉をしかめながらゆっくりと腰を下ろし、出入り口近くの壁に背を預けた。

「デイルクさん……」

デイルクさんは諦めたように小さく溜息をついた。彼は陛下が落とした短剣を拾っている。

「あと少しもしないうちにガイドが追いつくでしょう。暫く休憩を取ったら上に戻ります。このような所に長居をしても仕方ないですすね」

デイルクさんは陛下の意思を尊重したのだろう。私には何も教えてくれなかった。

私はどうしても気になってしまって、自然、視線は陛下に向いてしまう。

陛下は目を伏せていて、少し辛そうに見えた。彼は何かを痛みを耐えているように見えた。

私もデイルクさんのように陛下の意思を尊重するべきなんだろうなとは思ったけれど、でもどうしても辛そうにしている人を放っておくことは出来なかった。

それは私の性分なのだろうと思う。日本での事を思い起こせば、見様見真似の素人だったけれど、私は誰かをよく手当てしていたよな気がする。千夏ちゃんにしろ、妹の花依（はない）にしろだ。

私は陛下の左足のすぐ傍に腰を下ろした。

「ねえ、陛下」

「……なんだ」

「足が痛いんですね？」

「……」

「足首じゃなかったら、何処が痛いんですか？」

「放っておいてくれ」

「陛下」

「しつこい」

取り付く島がない彼の態度に私は少し困ってしまったが、こつこつ
う場合はあれだ。私お得意の実力行使でいくしかない。

そう思いついたら即実行するべしである。

私は陛下の左足をがつつりと掴んだ。

「っ！ 小娘っ！」

「陛下が言わないからいけないんです！ だったら触りまくって押
しまくって陛下が痛がる場所を探すしかないですよね?!」

「やめろ！」

陛下が足を掴んでいる私の手を退けようとするが、痛みが走って
いるのだから、彼の動きが鈍い。

私はその隙をついて、足首から素早く上へと押していく。

陛下が言っていた通り足首ではないようだった。私は退けられる
前にさっさと手を足の上部へと動かしていく。彼は左大腿の、足の
付け根に近い箇所に私の手がいった瞬間、言葉を詰まらせるような
反応をした。

私はその場所に眉をしかめるしかない。だって、この場所って
。

「左大腿。薄黒い引き攣れがある場所ですか」

「……」

「ガルなんとか国の刺客に背中真ん中から切られた所ですよね、
こつこつ」

私の言葉にディルクさんが驚きの声をあげた。

「陛下、ガルダトイアの話を読まれたのですか」

「少しな」

陛下が脱力したように息をついた。

「酷く攣るんだ。無理をすると偶にな」

「後遺症みたいなものですか？」

「たぶん」

私は陛下と会話をしながら、彼のズボンの裾をテーピングもどきを施した時同様に捲くっていった。

「お医者様はなんて？」

「一生付き合っていくしかないだろうと」

「そうですか。 私がせめて医学部の学生か何かだったらよかつたんですけどね」

それは逆立ちしたって無理な話だった。なにせ私の成績は致命傷を負っている教科が幾つもある。特に英語と国語と数学の肝心な三教科は瀕死に近かった。

「うーん、とりあえず足首のは外した方がいいですね。陛下の症状は私、お医者様じゃないから勿論全く判りませんが、でも普通、攣った時はこういう締め付けで良くないですからね」

私はズボンの裾を膝まで上げ終わると、靴と靴下らしきものを脱がし、ナイトドレスの切れ端で捲きつけた布を外しはじめた。

「そのガルなんとか国、本気でム力つきますね、陛下」
「……………」

「私ってば、京の都を震撼させた菅原道真の怨霊を送っておきますね。心の中でののが申し訳ない限りなんですけど」

「すがわらのみちざね？ 先程はまさかどと言っていたいなかったか、お前は」

「あ、日本には怨霊ってたくさん居るんですよ。怖いですよー、本当にうじゃうじゃなんですから！ 暑い季節になるとですね、鼻の下に髭をちょこちょこ生やしたオジサンが延々と体験談を語れるくらいには居るんですー！」

私がそこまで話した時だ。

陛下が投げた鞘をフリスビーに反応する飼い犬のように追っていたグイードさんが、この空間の出入り口によく到着した。グイードさんは陛下を目に留めると、彼の傍らに膝をついた。

「……………」
「大丈夫だ、グイード。少し休めば治まる」

「……………」
「何？」

「……………」
「そうか。判った。近い内に指示を出しておく」

「……………」
「ああ。そうだ」

「ごめんなさい、陛下、やっぱりその会話の成立、不自然すぎると思います、私」

私の言葉に続き、ディルクさんが片手を上げた。

「俺も同感です。そろそろ種明かしをして頂きたいと心底思っておりますが」

「何をくだらん事を言ってい　　っ、小娘、痛い」

「お、痛いつて素直に認めましたね、へ・い・か！」

私はテーピングもどきを外し終わると、今度はゆっくりと慎重に陛下の足を伸ばし始めた。

「陛下、これから梯子登るんでしょ？　軽くストレッチした方がいいと思いますから少しづつ伸ばしますよ？　ついでにちょっとマッサージもしますね。ディルクさん、少し時間を下さい」

「判りました。　　どうします、陛下。俺だけ一度戻って何か持つてきますか？」

「いや、いい。小娘の言う通り、少し時間をくれればよい」
「そうですか」

ディルクさんは私の手元に視線を向けながら、近くに腰を下ろした。

ガイドさんも陛下の傍らに膝をついていたが、その場に座る。

彼の視線は私の手元ではなく、ディルクさんの頭上に向いていた。

「……ディルク」

「なんでしよう」

「ガイドに渡してやれ」

「は？ 何をです」

「お前の頭に乗っているその醜悪な物体をだ」

「……………」

ディルクさんは何とも言えない顔をして、無言でウオちゃんを掴むとガイドさんの方へ放った。

ウオちゃんはワタワタと短い手足をバタつかせながらガイドさんの方へと到達する。彼は落とさずに受け取ると、ウオちゃんの全身を点検でもするかのようにひっ繰り返したりしていた。

「小娘」

「はい」

「ウオはお前とガイドで責任を持って世話をしろ。出来ない時は始末する」

「始末って」

相変わらず物騒ワードが簡単に出て来る陛下に私は呆れつつ、彼の大腿の筋肉を少しずつほぐすようにマッサージをしてく。これはママに感謝だった。一時は何で私がやらないといけないのか物凄く不満に思いつながらママの全身を揉みまくっていたが、こんな所で役に立つとは思わなかった。

まあ、我が家の場合、金銭的な面で整体やマッサージ屋に行けなかったから、娘、つまり私に図書館の本で勉強させたり、ママの昔の知り合いのマッサージを仕事としている人にタダで習わせたりして、強制的に習得させていただけなんだけどね。

十分、千五十円をケチらないといけないウチの家計って一体なんなのよ！ パパめ！

「陛下、少し持ち上げますよ？」

ウオちゃんの件は了解です。

ウオちゃんは私とガイドさんで面倒をみます、ちゃんと。ね、グ
イドさん！」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………宜しく願いしますと言っている」

「……………私ってば、これに関しては陛下を崇拜してもいいです」

「あ、俺もです」

「……………阿呆か」

その後、私の体内時計で五十分くらい、私たちはのんびりと休憩
を取ったのだった。

そんな五十分間の休憩時、私たちはどうでもよい話をしていた。

陛下の足が大分解れてきて、一箇所を集中してやりすぎるのも良くないからと休ませている間に、私はついではかりに彼の肩までマッサージをしていた。

「ここじゃ横になるのもあれですから、腰は夜にでもベッドの上でやってあげますね」

「……………」

「というか陛下、すごく肩凝ってますよ？ 痛くないですか、ここまで凝ってる」と

「凝る？」

「あれ、肩が凝るっていいませんか？ このあたりが張ってる事」
言って私は、首の付け根と肩の中間にあるツボを親指でぐりぐりと押す。

「そこは背中が痛いというかな」

肩ツボを結構な力で押しているのに文句のひとつも言わない陛下は、素直に私に肩と背中を任せていた。

私は彼の両肩を何度か左右に擦ると、今度は肩甲骨の内側の上、背骨と肩甲骨の間のツボに指を這わせる。

「この辺り押しますからね」

膝立ちになっっている私は、座っている陛下の後ろから左腕を回した。互いの体を安定させて指に力を入れられるようにする為だ。

何も言わないのを了承の意ととして私は指に力を入れる。

そんな私たちをデイルクさんがじつと見ていた。
ちなみにグイードさんとウオちゃん、ひとり一匹で仲良く戯
れている。

「驚きました、俺。今朝は驚く事ばかりです」

信じられない光景を目にしました、といった感じで言うデイルク
さんに陛下が眉をひそめた。

「何がだ」

「何がではないでしょう。この短時間で随分と手懐けられましたね、
貴方は」

「手懐けられただと？」

デイルクさんの言葉に陛下が不愉快そうな声を出す。

「だってそうでしょう？ 貴方とはかれこれ二十一年の付き合いに
なりますが、初めてに近いじゃないですか、こういう光景は」

「そんな事はない」

「よく否定できますね、陛下。姫君のように物凄く可愛らしかった
頃から小生意気にも他者をつ撥ねていた癖に」

「デイルク、貴様」

「はいはい、そこまで」

陛下のむつとしたような雰囲気を感じた私は二人の会話に割って
入った。

「なんだか放っておくと喧嘩になりそうだ。大の男の言い争いはち
よつと勘弁して欲しい。」

特に今みたいに疲れている時はね！ 正直さ、ヘトヘトなんだよ
ね、私！ 碌に睡眠が取れていないんだよ！ 完全なる睡眠不足な
の！ マッサージとかしちやってるけどさ！

「陛下が小さい頃、物凄く可愛かったのは判りましたよ。きっと内
外の王侯貴族の姫君なんて足元にも及ばなかつたくらいなんでしょ
？」

「小娘……」

「まあ、陛下の意外……でもない過去が判ったところでこの話は終

わりにして、デイルクさん、別に私、陛下を手懐けてなんていませんよ？ この地獄の極悪大魔王が私に手懐けられるとは到底思えません。あ、陛下、次、首後ろをやるんで、額を押さえますよ？」

「……判った」

「あとですね、ちょっと私に寄っかかって下さい」

私は軽く手を添えた陛下の額を後ろへ押しして、彼の体全体を私に寄りかからせた。

「……………」

「此処は首の血流とリンパの流れを良くしますからね。ちなみにリンパが何なのかは説明できませんので悪しからず。それで

すね、デイルクさん」

「なんででしょう」

陛下の首後ろ、後頭部の髪の毛の生え際付近のツボを指で挟み揉み、頭頂に向かって押し上げたりしながら、私はデイルクさんの方に視線を向ける。

デイルクさんは相変わらず私の手元を見ていた。

「陛下は別に手懐けられたんじゃないやなくて、単にマッサージ……えっと、今やっている事なんですけどね？ それがきつと心地好いだけですよ。だって陛下、凝り凝りですもん。人間ね、心と体は別なんです。少なくとも男なら判るでしょ？ 好きとも何とも思っていない女の人、嫌悪を抱いてさえいなければ平気で行為に及べる体を持っているんですから」

言いながら私は首後ろを終了して、今度は陛下の耳後ろのツボを数回押した。

「うーん、珍獣様は何と言いますか」

「年頃の娘が今のような事をよく平気で口に出来るのか、だろう？ デイルク」

陛下の言葉にデイルクさんが何とも言えないといった表情をしながら腕を組んだ。

「あのね、陛下。年頃とかそんなの関係ないでしょ、いつ言おうか
と思っただけだ」

「どういう意味だ」

「あ、俺も聞きたいですね」

二人がまるで餌に食いつくみたいに直ぐさま反応を返すのに、私
は些か呆れつつも説明してあげる事にした。

グイードさんとウオちゃんはまだ仲良く戯れている。あの様子で
は放っておけば三日くらいは戯れていそうだ。

「陛下が言っている年頃の娘が云々っていうのはですね、所詮、表
面だけを取り繕った張りぼてで、幻想でまやかしに過ぎませんよ。
アイドル……こちらの世界でいうお淑やかで品があつて美しいお姫
様がですね、一生ウンコをしないって思っちゃうのと一緒にです」

「……お前な」

「……例えば凄すぎますね」

口は動いても体はじつと大人しくしている陛下の体を私から起し、
今度は彼の鎖骨下の腕に近い部分に後ろから手をあてた。目的の場
所を探し当てた私は、其処を円を描くようにゆっくりと揉む。

「陛下、痛いですか？」

「いや、大丈夫だ」

「そうですね。で、話の続きなんですけどね？ 美しいお姫
様も絶世の美女も傾国の美女もですね、ウンコもしますし下痢もし
ます。ゲップだって嘔吐だってゲロゲロやりますよ」

「……」

「……」

「よくありがちな話ですね、女姉妹が居ないと女性に幻想を抱い
ちやう男が居てですね、彼女が出来て、その彼女が鼻をほじったり、
放屁したりするのを見て聞いて幻滅して別れちゃうとかあつてです
ね？ それ聞いてどう思います、陛下にディルクさん」

私の問いに二人からの返答は無かった。話は聞いているはずなの
に、何故か沈黙していた。

私は気にせずに続ける。

「そんなの、阿呆かと。同じ人間なんですから、鼻クソも溜まりま
すし鼻毛も伸びます。オナラだって出ますよ。ぷっぷかぷっぷかと
ね。陛下の周囲には綺麗な女の人がたくさん群がってくると思いま
すけど、彼女達だってね、そのドレスの中では、すかしっ屁の一発
や二発平気でしていると思いますよ？」

「……具体的な例えはやめてくれ、小娘」

「……精神的な傷を負いそうですね」

二人の声音が引き気味になっていたが、私は引き続き説明を続け
る事にする。

ここで真実を知っておいた方が彼らの為だ。幻想なんて抱いてい
たっていい事なんて皆無なのだ。

私は陛下の鎖骨付近から手を離すと、最後の仕上げとして頭のツ
ボ押しをする事にした。黄金の髪の中に両手の指を差し入れる。彼
のサラサラストレートの髪が指の間を滑らかに通り、少々擦ったか
った。

「彼女達が履いているトリエス王国製のカボチャパンツにだって、
ウン汁の一滴や二滴ついていきますよ、きつとね」

「……………」

「うんじる？」

「聞くな、ディルク！」

陛下が慌ててディルクさんを制止したが、彼の疑問の声はしっか
りと私の耳に入ってしまった。

だから親切に答えてあげる事にする。

「あれ、トリエスではウン汁って言わないんですか？ ウンコの濃
厚絞り汁の事ですよ？ すっごく臭くて、茶色んです。あ、ディル
クさんの髪の色をちょびつと濃くした感じかな！」

「……………だから聞くなと」

「……………髪、交換しませんか、陛下」

ディルクさんが陛下の黄金の髪に羨ましげな視線を向けた。

「でさ、陛下」

「……………」

「へ・い・か！」

「呼んでいますよ、陛下」

「……………なんだ」

「陛下はさ、陛下に寄ってくる女性が本当に見たままの純粹さ、可憐さ、美しさじゃないってことは判っているんでしょ？」

「まあな」

陛下が肩を竦めながら同意した。

「だったらさ、そんな年頃の娘だからとか言わないで、内面で思った事を垂れ流していた方が清々しくていいじゃないですか。判りやすいし」

陛下が唸るような声を出した。

「論点がすり替わっているような気がするんだがな、余は」

「あれ、陛下もそう思われます？」

「すり替わってなんていないですよ！ いいですか、陛下、ディルクさん！ 陛下の言う年頃の娘の考える事なんてですね、権力に渦巻くドロドロとした汚いモノだけじゃないんです！」

「ほう？ 例えば？」

「あ…聞いてしまつんですね、貴方は」

「陛下のいう年頃の娘の脳内ではですね、それこそ陛下なんてもう何度も犯し犯されまくってますよ！」

「何？」

「……………うわ」

「年頃の娘の脳内妄想ってば、それはもう凄いです！ 口には出さないだけでね！ 例えばですね、とある下級貴族令嬢……………いや、陛下に選ばせてあげます！ 下級貴族令嬢編、メイド編、城の洗濯女編、王都在住庶民女編、田舎少女編、奴隷女編、女暗殺者編、さ、陛下、どれが聞きたいですか？」

陛下が沈黙した。

私は無視されたのかと思って頭のツボを押しながら陛下の横顔をちらりと見ると、彼は何やら思案しているような顔だった。暫しして。

「では、城の中という事で、洗濯女編を聞こう」

陛下の言葉にディルクさんが驚愕の声をあげた。

「え、本気ですか、陛下?!　もしかして貴方、今、真剣にお考えになったんですか?!」

信じられない、といった様子のディルクさんを無視して、私は陛下ご所望のお話を聞かせてあげる事にした。

「ではでは私劇場、城の洗濯女編の始まり始まりー」

陛下の頭のツボを押しながら、私はコホンと軽く咳払いをした。

「ある時トリエスの王城に、マリリンという洗濯の仕事をしている十六歳の年頃の女の子が居ました。」

マリリンは貧しい家の出で、母子家庭。唯一の身内である母親は病気で、薬代を稼ぐ為に村長のツテを借り、お城で働く事になったのです。

彼女の勤続年数は三ヶ月。まだまだ新人で、最近、ようやく仕事の流れも判ってきた頃でございます。

洗濯女の仕事は、とても辛いものでございました。トリエスの季節は今冬。寒く、冷たい水の中に小さな手を入れて、ただひたすらに洗い物をしていたのです。

マリリンは新人です。だから先輩達に押しつけられて仕事も半端なく大量にありました。

夕刻。もう日が暮れてきた時分になりました。

マリリンは仕事が終わらなくて、ひとり寂しく城の隅っこで洗濯物を取り込んでおりました。

早く終わらせないと完全に夜になってしまいました。マリリンは焦りました。

その焦りからか、彼女は失敗をしてしまいます。

運悪く風が強く吹いて、取り込んでいる最中のカボチャパンツが飛んでいってしまったのです。

マリリンは追いかけてきました。一生懸命追いかけてました。

自分は今何処を走っているのか判らない、それ程に城の奥にま

でカボチャパンツを追いかけてしまった時、今までふわふわと風に吹かれて飛んでいたカボチャパンツの動きが突然止まったのです。

マリリンは立ち止って首を傾げました。

動きを止めたカボチャパンツをマリリンがじっと見つめていると、夜になり姿を表した月の光に反射してキラキラと輝く黄金が目飛び込んできたのです。

マリリンは口元に手をあてて、目を全開に見開きました。

彼女の目の前には、超絶美形のトリエス王国国王陛下が居たのです

「余の登場か」

「……続きが聞きたくなってしまうのが不思議ですね、陛下」

「突然の国王陛下の出現にマリリンの頭の中は真っ白になってしまいました。

どうしよう、どうしよう、怒られちゃう、そんな言葉だけが浮かんでは消えて行きます。

そんな状態のマリリンに、目の前の超絶美形陛下が声をかけたのです。

『お前の名は?』

「待て、小娘。余はそこで名など行き成り聞かないが?」

「……何をつつこんでいるんですか、貴方は」

「いいんですよ、これで。年頃乙女の妄想なんですから。怒涛のご都合主義が展開されるものなんです。

で、続きいきますね?

『……え?』

マリリンは声をかけられたのに驚いて思わず固まってしまいました。

当然です。トリエス国王といえ、性格に多々問題があるとはいえ、他に類を見ない程の美形、美声の持ち主で有名で、加え、大国の王様であり、財産も掃いて捨てるほど所有している超超超大金持ちなのです。地位権力財力と顔だけは申し分の無い存在でした」

「……馬鹿にされているような気が」

「……うーん、俺は何とも言えません」

「トリエス国王が超絶美形顔に極上の微笑みを浮かべました。それはもう毒蜘蛛が己の巣に蝶を追いつめ捕らえるかの如くな笑みでした」

「……………」

「……酷い扱いですね、陛下」

「トリエス国王陛下が言いました。」

『お前の名だ、娘。お前の可愛い声で名を聞かせておくれ。余の

コ・ト・リ』

「っ！ 鳥肌が！」

「……すみません、俺、笑っていいですか、陛下」

「『あ……あの、オラ、マリリンと言わずら』」

「おら？ ずら？」

「え？ それは方言か何かですか、珍獣様」

「質問は後です！ 続けますよ？」

『マリリン……なんと可愛い名か。マ・リ・リ・ン！ うーん、余の理想としていた名の娘だ！ お前の名を口にするだけで余の胸は高鳴るぞ！』

『そ……そうずらか？』

そこまで私が話した時、ディルクさんが嘔き出した。

彼は苦しそうに腹を押さえながら、前屈みになっている。

「ディルク……………」

陛下の苦々しい声が聞こえた。彼の表情は判らない。私は引き続き後ろから彼の頭をマッサージし続けているからだ。

「ほらほら、続きを聞いて下さいってば。」

『余はな、昔々の王子の時に夢を見たんだ。マリリンという名の娘を後に迎えると！』

「それではただの阿呆だろう、小娘！」

陛下が声を荒げ出したが、勿論私は無視をする。

「『ああ、運命だ！　このような城の庭でマリリンという名の娘に出会うとは！』」

『陛下……そんな』

『ところでマリリン、お前は何故カボチャパンツなど追っていたんだ』

『それはオラが洗濯女だからずらよ』

『洗濯女？　なんと！　余の后となる娘がそのような仕事など！』

おお！　お前の子豚のような手が荒れておるではないか！　可哀相に！　よし、ルドルフに至急手配をさせて、マリリン、お前を王妃に迎えいれよう！』

『ああ、陛下！　それはいけません！　オラは身分が！』

『そのような事、お前が気にする事ではない！　さあ、マリリン』

！　余と共に行く、王妃の部屋へ！　余とお前の愛の巢だ！』

『あん、陛下あ』

そのような流れで陛下とマリリンは王妃の部屋へと向かいました「ふざけるな、小娘！　なぜ余がよく知りもしない、それも政略でもなんでもない女を王妃に迎え入れなければならん！」

「あー…可笑的い。ところで陛下、何を本気になってお怒りになっているんです？」

「陛下とマリリンは王妃の部屋に着きました。」

陛下はマリリンを部屋に入れると、後ろ手に鍵を閉めてしまします。

『陛下？　今、鍵のかかる音がしたずら』

『気のせいだ、マリリン。余の小鳥。さあ、寒かっただろう？　ベッドに入ってゆっくりと休むがよい』

『陛下！　なんて優しい人ずら！』

『だるう？　もう夜だ、眠るといい。ああ、そつだ。その服だと寝難い。余が脱がせてやるつ』

「やはりそつという展開に発展するのか、お前の妄想は！」

「そつ思われるのなら、何故聞かれたんです？」

「……王子が登場しないのなら平気かと思ったんだが、甘かった」
「……陛下」

「続けますよ？」

『あん、陛下あ！ それまで脱がされたらオラ、全裸になっちゃ
うずら！ いやあん』

『全裸？ 当たり前ではないか、マリリン。お前はこれから余の
餌食となるのだからな！』

『え、餌食って？』

『さあ、マリリン。余の小鳥よ！ その可愛らしい声で一晩中啼
くが良い！』

『あ、へいかあ、そこはっ！ はうう……んん……ひやう、へ
い……かあ、あんあん』

『ほう？ そこか？ マリリン、お前の』

「もうよい！ それ以上聞きたくない！」

陛下が頭のツボを押していた私の手を払い、こちらを振り向いた。
彼の紫の瞳がギリギリと私を睨みつけている。

「ちょっと、陛下、ここからがいいところなのに！」

「何がいいところだ！ このまま聞き続けたところで、どうせ余が
そのマリリンという娘をどうにかするという展開にしかならんのだ
ろっつ?!」

「当たり前です！」

「っ！」

陛下の私を睨みつける眼力が一層強まった。が、当然、私はこれ
っぽっちも気にはならない。

頭のツボマッサージを行き成り払われた為に乱れてしまった陛下
の髪を、私は手を伸ばしてちょこちょここと整えてあげながら、彼の
前に移動した。

移動が完了し髪も整え終わると、私は陛下の両頬をひと撫でして
両手でやんわりと挟み持つ。

彼の頬にはほんの少しだけだが髭の気配が発生していた。

「ねえ、陛下」

「……………」

私は陛下の濁りの無い澄んだ紫の瞳の奥を覗き込んだ。

その陛下の瞳が私の瞳を捉えるように合わせられる。

私は彼に少しだけ顔を近づけた。

「あのね？　今の年頃の女の子の妄想の話はね、事実、皆の脳内で繰り広げられている事ですよ？」

「何？」

「考えても見て下さい。陛下がもしも女だったら、目の前に顔良し、地位有り、権力有り、財力、名誉有りの若い男が居たら、是が非でもモノにしたいと思うでしょう？」

「……………」

「そう思うのに相手になまじ地位と権力がある為に近づけない。なら脳内で自分の望む展開通りに妄想するしかないじゃないですか。

陛下の周囲の王女、貴族令嬢、メイド、その他使用人の女性や、加えて、トリエス王国在住の夢見る乙女達の全員に近い人達に、陛下は妄想の餌にされているんです」

「……………餌？」

「はい。彼女達の脳内妄想では、陛下が鳥肌モノのご都合上等展開が繰り広げられた拳句に、陛下は常に性の対象です。陛下が犯される場合もあり、鬼畜男役になって犯す場合もあります。城で会話し、すれ違う女性に至っては、実際に接触があるだけに夕チの悪い妄想が繰り広げられちゃってます。陛下なんてもう彼女らの脳内では何度も何度も寒い台詞を吐き、ドレスを引き裂き、ベッドに押し倒し倒されていますよ。その舞台は王妃の部屋は勿論、謁見の間の玉座の上、執務室の机の上といったところでしょうね。　ね、考えてみると、そんな気がするでしょう？」

陛下が紫の瞳を少し伏せた。

「……………確かにそのような気も」

そう彼がぼつりと呟いた瞬間、後半を黙って聞いていたディルク

さんが突然声を荒げて制止に入った。

「いや、ちよつと待って下さい、陛下！ 珍獣様、冗談では済まないような洗脳は止めて下さい！ 我が国の君主に変な話を吹き込まないでくれませんか！」

「洗脳って」

「勘弁して下さい！ ただでさえその手の事に興味が薄い方なんです！ それなのに其処に酷い女性不審が加わったらどうするんですか！ 世継ぎがまだ居ないんです！ 今現在、王族は陛下だけなんですよ！ 血筋が絶えたらどうするんですか！ トリエスが終わります！」

「そんな大袈裟な」

私はデイルクさんの言い様に呆れながら、マッサージ終了の合図の意味で “ いい子いい子 ” といった感じで陛下の黄金の頭を何度か撫でてあげた。

「……………」

「……………嘘だろ？ 誰か嘘だと言ってくれ！」

陛下は沈黙し、デイルクさんは悪夢を見てしまったかのように叫びながら頭を抱え出した。

なんだかそんなデイルクさんの反応が私は少しだけ面白くなってしまい、ちよつと追い打ちをかけてみる事にした。

陛下の額にかかる黄金の髪を私は左手で上げてみる。

彼の生え際は富士額では無かった。

「さ、坊や、いい子だからそろそろ上へ戻りましょうね？」

言っただけで陛下の額の生え際付近に “ ちゅっ ” とキスを試みる。生え際の短い髪の毛が私の鼻下を擦った。

「お……………」

瞬間、デイルクさんが完全に身を引き固める。

陛下に至っては一言も発しない。

「……………」

「……………という冗談はさておきですね、陛下、足、どうですか？」

「……………」

「陛下？」

声をかけても陛下の反応が無いので、私は少し伏せられた彼の紫の瞳を覗きこんだ。

どうも陛下はただじっと床の一点を見ているようだった。

「あれ、陛下、どうしたんですか？ 目を開けながら寝ている訳じゃないですよね？」

そうは言いながらも、もしかして寝ている可能性もと若干不安になり、私は彼の頬をペチペチと軽く叩いてみる。

何度か叩いているうちに陛下が瞬きした。

「あ、起きました？ 陛下」

「…………いや、別に寝ていた訳では」

「そうなんですか？」

「…………ああ」

そう言っただけで陛下は精根尽き果てたともいった様子で深く息をついた。

「…………疲れた。いろいろな意味で今までに無いくらいに疲れた」

「やややつ、どうしちゃったんです、へ・い・か！ 元気出して！ 上に戻ればちゃんとベッドで寝れますからね！」

陛下が目を閉じ眉間をぐりぐりと揉みだした。

「…………そうだな。もう本当に戻りたい。足は大丈夫だ。上に戻ろう。デイルク、ガイド戻るぞ」

言っただけで陛下は立ち上がり、左足先を床にとんとんと軽く叩いて具合を確かめている。

「本当に大丈夫ですか？ 梯子登れそうです？」

「大丈夫だ。デイルク、お前が先に登るのか？」

陛下の問いかけにデイルクさんが亜麻色の髪をわしわしと何度も掻き混ぜてから立ち上がった。

「はい。俺が先に。次いで陛下、ガイドの順です。珍獣様は俺が背負います」

「え、何で背負うんですか？ 私も梯子、自分で登ります！」

私はデイルクさんの言葉に驚いた。

流石に登るよ、私！ だって梯子、随分と長いしね！ 落ちた時は今いる空間が狭すぎて距離感がよく掴めなかったけれど、いま改めて見ると日本基準で七、八階分はありそうな高さなんだよね！

しかし私の主張は即座に却下された。

「そのやる気は嬉しい限りですが、貴女ではこの高さは登りきれないでしょう。高すぎます。登りきるまで貴女の体力が持たない」

「ややっ、大丈夫です、私！ だって私ってば重いんですよ?!」

デイルクさんの方が力尽きちゃうかもしれないじゃないですか！

それにデイルクさん、さつき小部屋で言ったじゃないですか！ 何故、迎えにあがるまで登ってこられなかったのです、って!」

「それは陛下に申し上げたんです。陛下がおっしゃるには梯子が無かったようですが、どちらにせよ、あつたとしても陛下だけが登り、貴女は後で俺達が救出にあがるという形だったでしょう。陛下

下、準備しますので珍獣様の説得をお願いします。グイード、

縄を取ってくれ」

その言葉にグイードさんが絨毯の上に置いてあつた縄を取りに行つた。

デイルクさんは腰に佩いていた長剣を外している。

それを見ていた私の顎に、陛下の手がかけられた。

くいと強制的に顎が持ち上げられ、陛下の瞳に合わせられる。

「小娘、お前には無理だ。上まで休む場も無い。あまり煩わしい事は言つな」

「だって……」

「デイルクの鍛え方は、きつとお前が考える以上だ。お前の重さなど訳は無いだらう。大人しく背負われていればいいんだ、お前は」

「……でも」

私の言葉に陛下が苛ついたような声を出し始めた。

「いい加減にしろ。お前が途中で登れなくなつた時にかかる迷惑を

考える」

「……………」

「そうだった場合、余はお前を捨て置く。そこに待つのはお前の死だけだが？」
デイルク、小娘の意思は無視していい。準備は出来たか？」

「はい。ガイド、彼女を俺の背に乗せてくれ。陛下、申し訳ありませんが、縛るのに手を貸して下さい」
「判った」

無視していい、その陛下の言葉通りにデイルクさんもガイドさんも私の気持ちにはお構い無しに行動を開始した。

まず左肩にウオちゃんを乗せたガイドさんが私の後ろから両脇に手を差し入れ、まるで子供に対するかのように持ちあげた。

長剣を外し、床に置いたデイルクさんがガイドさんに背を向ける。

ガイドさんはその背に私を乗せ、デイルクさんが私のお尻の下に両腕を回して支えた。

そして私はガイドさんに強制的に腕を取られ、デイルクさんの首に巻きつけられる。

二人があまりに淡々と私の意思を無視して行動するのに、私は呆気にとられるよりも、少しの恐怖を感じた。

「陛下、彼女が手を離しても落ちないように縄で固定してください」
「判った。ガイド、余の言う通りに手を貸せ」

「……………」

「まず此処から固定する」

そう会話を交わして、陛下とガイドさんは私とデイルクさんに黙々と縄を巻きつけ固定していく。胸と腰に二度三度簡単に縄を巻くと、陛下は私の両膝を持ち、デイルクさんの行動の邪魔にならないように彼の体に足を絡ませ、ガイドさんに縄を捲かせた。

二人が作業をしている間、私は何とも表現し難い気持ちになって、何も言葉を口にする事が出来なかった。

代わりという訳では無かったが、デイルクさんが陛下に話かけていた。

「陛下」

「なんだ」

「俺の剣は貴方がお持ちになって登って欲しいんですが」

「判った。お前は余の短剣を持つか？」

陛下が私の腰に左手をあてて、右手に持つ縄をぐいっと引っ張った。

グイードさんが彼の反対方向から、やはり縄を引っ張り張っている。

「いや、いいです。大丈夫でしょう。後は梯子を登るだけですし、上にはオッサンやリーザたちが待機していますから」

「そうか。小娘、痛いところはあるか？ 多少きついのは我慢しろ」

「……………」

「小娘、返事」

「あ、はい。大丈夫です」

「グイード、最後に此処を通して結ぶ。其処を押さえろ」

陛下とグイードさんが最後の仕上げとばかりに一段と強く縄を引っ張った。

それがあまりに強くて私は我慢出来ずに苦痛の声を漏らしてしま

う。

「いた……………」

「我慢しろ。こんなものか。デイルク、出来たが、お前の方は大丈夫か？」

デイルクさんが陛下の言葉を合図に軽く腕を回した。もう彼の両腕は私のお尻には回っていない。

「大丈夫です」

「そうか。グイード、ウオは小娘の肩に乗せておけ」

陛下がそう言うと、グイードさんは私の左肩にウオちゃんをそっ

と乗せた。

「びきゅ」

ウオちゃんが声を出す。

ウオちゃんの無邪気そうな声に私は何処かほっとした。

「行くか」

そう言っつて陛下はディルクさんの長剣を拾い、腰に佩く。

グイードさんは小部屋から持ってきたミイラを右肩に担いだ。

「では、登りますよ」

私を背負いながらその様子を見ていたディルクさんが二人に声をかけ、陛下とグイードさんがそれに頷く。

三人が梯子に視線を向けた。

私もつられるように上を仰ぎ、視線を向ける。

梯子は地下通路、秘密の小部屋と同じ材質で出来ているようだった。仄かに光る光り方も一緒だ。

梯子の横幅は七十センチくらいはあるだろう。だから陛下たちが登るのに幅が狭くて支障をきたすという事は無さそうだった。ディルクさんが小部屋で言った通り、作りもしっかりしていそうだ。

ディルクさんが梯子を登り始めた。

少し間を開けて、陛下とグイードさんも登り始める。

こつん、こつんと彼らが梯子を登る音だけが空間に響き、私たちは謎の地下空間を後にした。

陛下たちが梯子を登り始めて少しして。

日本基準で三階分ほど登った時、私はやっぱり気になってしまっている事があって、ディルクさんに声をかけるかを悩んでいた。

彼は黙々と梯子を登っていて、汗のひとつも掻いてはいないようだ。体が縛り付けられて密着しているから、否応無しにディルクさんの匂いが鼻に入る。

彼は陛下とは違って香水の香り　陛下も微かにという感じなんだけどね　はしなかった。不快にはならない程度の男の人の匂いがする。

少し悩み、私はやはり声をかける事にする。どうしても自分の重さが気になるからだ。

「ディルクさん」

「なんですか」

「重くないですか、私」

「大丈夫ですよ」

「でも……やっぱり重いと思うんですよね、私は」

「本当に大丈夫です。貴女は重くないですよ」

「……そうかな、そうは思えませんが」

ディルクさんは本当に平気そうに言ってくれたが、そう言われたところで私の気が晴れる事はない。

そんな私たちの会話に後続く陛下が加わった。彼の声の下から聞こえてくる。

「お前は何をそんなに気にしているんだ」

「……だって」

「だって？」

「私、トリエスに来る前に体重測ったんですけど、太ってたんですよ、三キロくらい」

「きろ？」

「重さの単位です」

下に居る陛下の溜息が聞こえた。

「三キロとはどの程度の重さだ」

「うーん……何に例えたらいいんでしょう、難しいです」

私つてば、トリエスと日本の共通事項がまだよく判ってないしね？ そんな私の言葉に陛下が暫し考えるように間を開けてから、継ぐ言葉を口にした。

「共通で判りやすい物というやはり水かな。カラフェスで何個分か、と聞いた方がよいか」

「からふえす？」

「そうか……昨日の朝食の時にへロルドが持っていただろう？ 野菜を絞った飲み物が入っていた容器だ」

陛下の言葉に、私は昨日の朝食の事を思い出す。

そういえばへロルドさんは陛下が噴き出した件の野菜ジュースを、表面についた水滴を拭いながらガラス製の容器で注いでいた。

「ああ……ピッチャーの事ですか」

「ぴっちャーというのか、お前の世界では」

「えっと、たぶん」

私は少し自信無さ気に陛下に返答する。

私つてば食器の種類や名称に詳しい訳ではないからね。改めて聞かれると自信が無かったりするんだよね。

「ピッチャーで何個分かあ」

私はへロルドさんが持っていたトリエスではカラフェスという容器を頭に思い浮かべる。

ヘロルドさんの持っていたカラフェスは、そう大きなものでは無かったはずだ。日本基準でいう二リットルのペットボトルサイズだった。丸みがあつて模様も入っていたけれど、内容的には二リットルがいいところだろう。

確か水は一リットルが一キロだったはず。ということは。一個半です、陛下。カラフェス一個半。私つてば一個半も増えたんです、トリエスに来る前に！」

ああ、もう信じられない！ 制服のスカートがキツイなどは思つてたんだよね！

原因はさ、やっぱりお菓子だと思つたよ！ 陛下じゃないけど私も甘いのが結構好きだからさ！ トリップする直前にオナ力が空きすぎて思わずお菓子を大量に買い溜めしちゃったけど、あれだつてさ、食い納めのつもりだった……訳じゃないんだけどね？ でも、近いうちにダイエットはしようと思つてたんだよね！

「その程度か」

陛下が呆れたといつたような声を出した。

「その程度つて！」

「その程度だろう？ そのくらい、その気になれば何時でも落とせると思うが？ それにカラフェス一個半増えたところで、デイルクにはさして変わらんだろうよ」

「ええ、陛下のおっしゃる通りですよ、珍獣様」

「ややつ、絶対に違いますよ！ 三キロですよ、三キロ！ 私つてばもともと五十キロあつたんです！ そこに三キロ増えたら五十三キロ！ デイルクさんは今、カラフェスを二十六個半背負っているんですよ！」

私にしては快挙なくらいに素早く計算をして教えると、デイルクさんが少々唸り気味になった。

「うーん……カラフェス二十六個半、ですか。そう変換されてしまつと結構背負っているなと思つてしまいますね……」

「やっぱりそう思つたんですね、デイルクさん！」

「ディルク！ お前は余計な事を！」

「きゅん！」

「黙れ、両生類！」

「きゅ……」

陛下に怒られ、ウオちゃんが私の肩の上でしょげてしまった。今まで私の肩に寸胴なオナカ部分で垂れ下がりが、一生懸命に下に居る陛下を見ていたが、怒られたからだろう。ウオちゃんは器用に私の肩の上で方向転換をすると、今度はディルクさんの頭の上へと登っていった。

「……両生類」

ディルクさんがぼそりと呟く。

きつと彼の気持ちは陛下と同じところにあるような気がする、そう思いつつも私の脳内の大半は、増えた体重の事で占めていた。

私はある決意をする。

「私、今日からダイエットする事にします！」

「だいえつと？」

「はい！ ダイエットとは減量の事です！」

「減量な」

「そこまで気にするほど重くないですけどね、貴女は」

「なに言ってるんですか！ トリエスに来る前、既に制服のスカ―

ト……陛下の前に現れた時に来ていた服の事ですが、そのね、ウエスト、腰部分がキツクなっていたんです！」

私は叫ぶように言っただけでディルクさんの後頭部に顔を埋めた。

「……くすぐつたいです、珍獣様」

彼の言葉を無視して私は続きを口にする。

「それにですね！ ちょっと陛下聞いてますか?!」

「……なんだ」

「私ってば陛下の少年の頃の服、今、借りてるじゃないですか！」

「……そうだな」

「あれね、アニに直してもらわないと腰まわりがキツイですよ！」

「股下もかなり長かったですけどね！」

「……………」
「男の人より腰が太いってどう思いますか！ やってらんないって話ですよ！」

「そんな私の嘆きをデイルクさんが慰めてくれようとする。」

「まあ、今でなく少年の時ですから。陛下は細」

「デイルク！ 余はな、あの服を着ていた時にはもう随分と鍛えていたが？」

「デイルクさんの言葉を陛下は何故か急いで遮った。」

「………… 貴方ね。折角、俺が話を収めようとしているのに」

「もういいです！」

陛下とデイルクさんの無神経な言葉に私はぎりぎり歯を食いしばった。

「小娘？」

「珍獣様？」

「結局さ、陛下もデイルクさんも私が重いだの太いだのと言ってますよね？！」

「………… いや」

「………… 俺は言っていないと思いますよ？」

「よく否定出来ますよ！ まずデイルクさん！ 貴方はさつきカラフェスの二十六個半は結構背負っているようなと言いました！ そして陛下！ あの服を着ていた時にはもう随分と鍛えていたと言いました！ それってさ、鍛えていて体が出来ていた時の服なのに、それがキツイってのは、やっぱり太いんじゃないかって言ったのと同じですよね？！」

「………… 珍獣様、そうではなく」

「いや、デイルク、もう正直に言おう。小娘、余は昨日の朝食の時にも言ったと思うが、お前の腰まわりはどう鼻屑目に見ても太い」「酷い！」

「陛下………… 言い方ってものですね、世の中にはあるんですけどね」

デイルクさんの脱力気味な言葉を無視し、陛下は更に続けた。

「デイルクにとつて、お前が重くないのは確かだ。お前の体の重さはカラフェス二十六個半と言ったな？ それ自体は重くはない。問題はだな、お前の身長からその体重はありすぎるといふ事だ。どう少なく見積もってもカラフェス二個分は余計だろう？」

「……っ」

「……酷すぎませんか、陛下、それは」

陛下は更に更に続けた。

「それにだ。お前が現れてから今の時点までで、余はな、小娘。お前の腹まわりに触れた事が何度かあったな？ 小部屋の扉の前では肌にも直接触れた。ずっと思っていたんだがな、柔らかすぎるだろう、その腹は。見苦しい程についてはいないが少し脂肪を減らした方がよいと思うぞ、余は」

「……デイルクさん」

「陛下！ ちょっと人格疑われますよ、今の言葉は流石に！ よく言えますね、貴方は！」

デイルクさんがそう言うのに陛下は呆れたように息をつき、更に更に更に続けた。

「デイルク、現実を知っておいた方がいい、小娘の為にもな」

「貴方ね……」

「小娘、少し痩せた方がいい。だいえっと、だったか。やれ。少し減量しろ、お前は」

「……う」

「ああ、珍獣様、泣かないで」

「泣けば痩せる訳ではないぞ、小娘。今日の食事から減量用のものを出すよう申しつけておこう。それと、騎士達の練兵場がこの城にはある。そこで少し体でも動かせ。全騎士団にその旨を伝えておく。お前は既にラードルフと面識があったな。デイルク、数日以内にあるの元へ連れて行ってやれ」

「…… 本当に酷すぎますね、陛下。俺が女だったら貴方だけは願

下げです」

「別に結構だ」

「それにベツケラート団長も困るでしょうに」

「なに、あれは少し融通をきかすという事を覚えた方がよい。真面目一辺倒と言われるのも多少は払拭した方が己の為だ。小娘の奇行はよい刺激になるだろうよ」

言って陛下は、言いたい事は全て言ったとでもいうように満足気に息を吸った。

「……珍獣様、あまり気になさらないで下さいね？ あの方は昔からああなんです。今に始まった事ではないですから………たぶん物凄く同情してくれているのか、ディルクさんが私に優しい声で励ましてくれる。」

その気持ちはとても嬉しかったんだけど、言葉の最後にぽつりと付け足した単語も気になるし、私は何故だか益々惨めな気持ちになつてしまつて、目からポロポロと涙が溢れ出てしまった。

その涙がディルクさんの首後ろを濡らす。

「陛下！」

「なんだ」

「泣かせてしまってますよ、貴方は！」

「またか。小娘、お前はこの短期間に何度泣けば気が済むんだ。泣いたところで瘦せないし、状況は全く変わらんが？」

「……そんな、の知つて、ます」

「なれば努力するのだな」

「………」

「この城の練兵場は広い。一周を走り込むだけでも相当な運動量だろうよ」

「珍獣様、この国の騎士団は大所帯ですから、眺めているだけでもいろいろな人間が居て面白いですよ」

「……大所帯、ですか」

私がぼつりとそう呟くと、陛下が素早く反応した。

「小娘、痩せる目的以外の事は一切考えるな」

「どういう意味ですか？ 私、まだ何も言ってますけど？」

「言ったも同然だろう！」

陛下が声を荒げた。

「何をですか！」

「今、お前の頭の中には大所帯という単語が入ったな？」

「入りましたね？ で？」

「なればだ。騎士団、男、大所帯、ぎゃくはー構成団ブルーヘヴンとくるのだろうか？ お前の頭の中は！」

「大当たりです！ 流石陛下！ 天才はやっぱり凄いですね！」

「阿呆か！ 誰にでも判る！ お前の軽い頭が考える事なんてな！」

「そんな風に言われたら、私が馬鹿みたいじゃないですか！」

「馬鹿だろう！」

そんな感じで陛下と私が言い争いを開始し出した時、ディルクさんが心底呆れた様子で割って入った。

「はいはい、お二方、仲がよろしいのは臣下として嬉しい限りですが、あと十五リズ程で上に着きますよ。まる聞こえですからね、声が上に。ほら、上を見てください。皆、此方を見ています」

「え」

「……」

ディルクさんの言葉に私が上を見ると、向こうの世界基準で十五メートルほど上に、明るい穴がぽっかりと開いていた。其処から何人かが此方を覗き見ているのが判る。

覗き見ている人数は六人。

逆光だから此方から向こうの顔はよく判らないけれど、まあ予想のつく範囲でヘロルドさん、リーザ、妖精二人……あれ、あと二人は誰だろう？ 陛下付きの侍女の誰かだろうか。

そう私が考えているうちに、視界はぐんぐんと明るくなっていった。

上まであと五メートル程になった時、まず私はリーザと目が合った。

「リーザ！」

「お帰りなさいませ、珍獣様。ご無事でございますか？」

「うん、大丈夫！」

「ようございました」

彼女の優しい声に私がほっとひと安心していると、ディルクさんが梯子を登りきり、謎の地下空間から完全に脱出した。

「着きましたよ、珍獣様」

「ディルクさん、ありがとございます！」

「いえ、仕事ですからね。さて、陛下、貴方も大丈夫ですか？」

「問題無い」

ディルクさんが声をかけた瞬間、陛下も梯子を登りきり、珍獣部屋に姿を現す。

次いで直ぐにグイドさんが姿を現した。

「ようやく戻れたな」

陛下はしみじみそう言うと、私の方へと手を伸ばした。

「下ろすぞ、グイド」

「……………」

グイドさんは少し目を伏せて、ミイラを穴から離れたところに置いた。

彼は下ろして直ぐに私の方へ来て、縄に手を伸ばす。

陛下とグイードさんは手際良く縄を外していった。

どんと縄が外されていき、締め付けが緩んでいくのに私は安堵の気持ちが押し寄せてくる。ようやく戻れたという実感を噛みしめていると、知らない男の人が此方を見ていた。

その男性は、まるで私を観察しているかのように難しそうな顔でじっと見ている。

彼の髪は黒、瞳は碧、眼鏡をかけていて、三十代半ばっぽい雰囲気。

私ははっと目を見開いた。

「ルドルフさんだ！陛下、ルドルフさんが居ます！やややつ、私の栄えある薔薇の逆ハ―構成団、会員番号七番のルドルフさんです！」

「ぎゃくは―構成団？」

私の言葉に疑問形で聞こえてきたのは、気難しそうなルドルフさんの声だった。

その声が何だかどつき難そうなのに私は少々慄いてしまって、縄をさっさと解いていく陛下のキラキラ顔に目を向ける。

陛下は私にちらりと視線を寄こした後、珍獣部屋に開いた穴の近くで腕を組んで立っているルドルフさんの方を見遣った。

「これの言う事は気にするな。全てにたいした意味は無い」

「意味は無いって！」

「いいからお前は黙っている」

陛下はそう言うと、一気に捲きついていた残りの縄を引き外した。縄の大半が珍獣部屋の絨毯の無い床に落ち、グイードさんがそれを素早く纏めて片付けていく。

縄が無くなった瞬間、ディルクさんが私の尻の下に腕を回したが、それと変わらない速さで陛下が私の体を引き取った。

陛下は私の脇の下に右腕を差し入れて体を持ち抱えると、ゆっくりと床に下ろしてくれた。

足が床についた途端、体を拘束されていた時間が少々あったから

か、私は上手く膝に力が入れられなくてバランスを崩す。

そんな私を陛下は咄嗟に支え、半ば抱きかかえる形で私の背中を彼自身の胸に寄りかからせた。

陛下はそのままの体勢でルドルフさんに声をかける。

「ところでルドルフ、どうした、わざわざ」

何故、お前がこの場に居るんだ、といった様子の陛下に、腕を組んだまま私を見続けていたルドルフさんの眉が寄った。

彼は私から視線を外し、後ろの陛下の方を見る。

その碧の瞳には厳しい色が浮かんでいた。

「陛下に至急承認して頂きたい物が数件ございましてね。うち一件は御自分で命じられた物なのにお忘れですか？」

陛下が少しだけ沈黙した。

「……その一件とは、どの件だったかな。最近、物忘れが、」

「よく言えますね、貴方は」

「……………」

まあ確かによく言えるよね。それは私も思ったよ、今！

陛下ってば一度聞いた事や見た事は忘れないはずなのにね！ き

つとルドルフさんもそれを知っているんだよね、当然ね！

私が背後の陛下を見上げるように振り向くと、彼の紫の瞳と目が合った。

疲れたような何かが滲んでいる瞳のように感じられた。ゲーム風に言つと、もう陛下のヒットポイントは三くらいかもしれない。レベルでも危険を意味するオレンジ色に表示されてしまう最悪な数値だ。

「本当に思いつかない。どうも頭が上手く働かないんだ。今は」

陛下のそんな言葉に答えるルドルフさんの声は驚く程に冷たかった。

「そうですか？ 梯子を登ってこられる最中はとても楽しそうに会話をしていたらしたようですか？」

「……………そうか？ そのようなつもりは無かったがな」

「まあ宜しいです」

ルドルフさんが眼鏡の縁を押さえた。ちなみに彼の寄った眉間は未だ戻っていない。

「宝物庫の件です。急ぎなのでしょう?」

「ああ、それが。判った。少し待て。直ぐに承認する。ところで、」

陛下がルドルフさんとの話を断ち切るように話題を切り替えた。

彼は引き続き私を抱きかかえるような体勢のまま、ルドルフさんより少し左側の場所に立っている人物に体を向ける。

「あれは誰だ?」

陛下に誰だと言われた人物が、肩をびくと震わせた。

その様子といたらもう明らかに恐れ慄いているのが判る。

その人物はくすんだ感じの短い金髪に、薄い緑の瞳の二十代前半と思われる男性だった。鼻と頬に細かいソバカスをパラパラと散らせている。人が良さそうな感じではあるが、何処か要領の悪そうな雰囲気を漂わせている人物だ。

彼の恐怖が私にびりびりと伝わる。理由は判らないが、彼は陛下を物凄く恐れているようだった。

私はその人物に見覚えがあった。一度だけまともに顔を合わせた事があるのだ。だって。

「あ」

私の声に陛下が反応した。

「どうした?」

「え、だって彼ってば、」

「知っているのか? お前が? 何故」

陛下がふと黙った。

そして数秒後、私を抱え支える陛下の腕に微妙に力が加わる。彼の身に冷気が漂い始めた。

「そうか、お前がコーエンバーレか」

陛下がそう言葉を発した瞬間、ビシッと珍獣部屋の空気が凍った。

その凍りつぷりに陛下の腕の中で私はびくんと全身を震わせる。
こ……怖いっ！ ごめん、私、怖すぎて今すぐこの場を去りたい
んだけど、いいかな？！ せめて隣の陛下の部屋に逃げてもらえ！
陛下、離して！ 私、もうちゃんと立てそうだから！
だってね？

この場に居る全ての人の冷たい視線が一斉にコーエンさんの方へ
向いたんだよね！ それでもって睨んでるの！ ぎりぎりぎりぎり
突き刺す様に睨んでるんだよ！

陛下やルドルフさんは勿論の事、リーザや妖精二人、デイルクさ
ん、ここまではね、判る！ 判るよ、私！ でもね？ そこにさ、
あのロマンスグレーなヘロルドさんや、陛下の忠犬グイードさんま
でが加わっているんだよ！

睨んでないのはさ、私と、デイルクさんの頭の上に居るウオちゃ
んだけなんだよね！

ウオちゃん、皆がコーエンさんを睨んでいるのに、やっぱり陛下
を見続けているんだよ、あの小さな瞳で！

ああ……コーエンさん、もう震えあがっちゃってるよ。判るよ、
私は！ 私がコーエンさんなら、たぶんもう失神していると思う！
偉いよね、コーエンさん！ まだ意識保ってるもんね！ 尊敬し
ます、貴方を私！ ただ鈍いだけなのかもしれないけどさ！

陛下がすつと息を吸った。

「お前の仕事ぶりは、この小娘とデイルクから聞いた。 随分
と活躍しているようだな？」

陛下のブリザードを纏った声音がコーエンさんを直撃した。

コーエンさんはプルプルと赤ちゃんチワワのように震えまくって
いる。正直、痛々し過ぎて見ていられない。なんだか彼を保護して
上野動物園か旭川動物園にでも連れて行ってやりたい気分だ。

「お前は侍女の控えていない小娘の部屋を夜に訪れ、不審極まりな
い代物を渡したとか」

陛下が寝不足であっても澄んだ紫の瞳を細めた。

「まずこの点だけでも衛兵としてのお前の行動は間違っているよな？ 小娘は確かに珍獣だが、一般的に見れば年頃の娘でもある。侍女の控えていないその娘の部屋に、衛兵であれお前ひとりか扉を開けさせる、この城は何時、衛兵にそのような行為を許した？」

「ひっ」

コーエンさんの引き攣れた声が珍獣部屋に響いた。

彼はもう、赤ちゃんチワワが銭湯の煙突の先に括りつけられてしまったかのような震え方だった。

「それにだ。小娘に不審極まりない小瓶をそのまま渡したとか。お前は中身を知っていたのか？ コーエン」

コーエンさんの震えがますます加速する。

私は彼がこの場で失禁しないのが不思議でならなかった。見る限り、かなりの恐怖を彼が感じているのが判る。

「コーエン＝バーレ、余の問いに答えよ」

「あっ……え、えつと、し、知りま、せんでした！ あの、全く知りませ

「だろうな。お前が意図して渡したとは余も思えん。しかし、ならば何故、中身の不明な物を小娘に渡した？ これは余が保護している珍獣だが？ 小娘に何かあった場合、お前はどの責任を取る？ 余は今、小娘が命を落とす事を望んではないが？」

コーエンさんの瞳の焦点が怪しくなってきた。

おおっ……これ以上責めるのはヤバイのでは、私はそう思ったが、陛下は追及の手を緩めなかった。

「それにコーエン、お前は実に面白い事も言っていたそうだな？ デイルクから聞いたんだが、お前は小娘のあげた悲鳴を余との行為の末だと思ったとか」

「っ、……もっ、申し訳つ、ご」

「お前のような者の謝罪なぞ聞きたくない。それよりだ。もしも、例えそうであったとしてもお前は立场上デイルクには報告すべきではなかったのか」

陛下が珍獣部屋の空気を危うい緊張感で張り詰めさせながらコーエンさんを咎め続ける。

彼は抱き支えている私の髪を、まるで膝に乗せた猫の毛を撫でるかのように、空いている方の手の指で絡ませては解いていた。

「お陰でな？ 余と小娘は一晩中、城の地下を彷徨う破目となった。その責任、お前はどう取る？」

コーエンさんの震え続けている顔がだんだん土気色になってきていた。

私は赤ちゃんチワワのそんな状況をもう少しも見ていられなくて、陛下を止めようと心に決める。

私以外の人間は動かない。彼ら、彼女らは相変わらず冷たい視線をチワワに向け続けているだけだ。

「……ねえ、陛下」

体を抱きかかえられている陛下の腕を、私はパシパシと叩いた。

「なんだ、小娘」

「もういいじゃないですか。コーエンさん、大反省してますよ、きつと」

私の言葉に陛下が深く溜息をついた。

彼は私の髪を弄るのを止め、軽く梳くように整えてくれると、腰に手をあてた。

そして、うんざりとした声を出す。

「やってられんな、本当に。 コーエン＝バーレ、お前は本日付けで解雇だ」

「えっ……」

「当然だろう？ 昼までには城を退去せよ。それを超えて残留していた場合、相応の処罰を下す。 ああ、そうだ。その前に最

後に申しつける。城の針子にア二という者が居る。至急この場に呼べ。それと王室専属の細工師イェルクに昼過ぎにでもルドルフの元へ行くよう伝えよ。 出来るよな、それくらい」

陛下に矢継ぎ早にやる事を言い付けられて……といてもふたつ

だけなんだけど、チワワは戸惑ってしまったようで、目をきよるきよると彷徨わせた。

その間愈っこしい様子に治まりつつあった陛下の怒りのベクトルが一気に上昇方向へと向かう。

「いい加減にしろ！ 余は使えない人間は嫌いだな！ お前には今日までの給金を払うんだ！ その程度の役には立ってもらおう！」

陛下の怒声にチワワ　　コーエンさんは身を飛び上がらせた。

「はっ、はひひひひ」

返される間の抜けた返事に陛下の整った黄金の眉がぴくりと動く。

そしてこの場に居る誰もが予想だにできなかった出来事が起こったのは、この瞬間だった。

とにかく怖すぎて焦っていたのだろう、パニックになりかけて

いや、完全にパニックで止まっちゃったコーエンさんが、陛下の言い付けを実行するためにそのまま前へと走りだし　　前、彼の前には珍獣部屋に空いた穴があつて。

「あぶない、コーエンさん！」

私の叫びに、近くに居たルドルフさんが飛び出したコーエンさんの腕を掴もうと素早く動く。

でも間に合わない、そう私の目に見えた時、ディルクさんの頭上に居るウオちゃんが声を出した。

「きゅんきゅん、きゅぴぴ、みゅんみゅんぴ！」

ウオちゃんの声が止んだ途端、ズンと腹に届くような音が辺りに響いた。そして一瞬にしてコーエンさんの足元に床が出現する。

珍獣部屋に居る全員が目を剥いた。

陛下や私をはじめとした人間が居る前で、珍獣部屋に空いていた穴が塞がったのだ。たぶん元通りに。空いていた形跡はパツと見た感じでは見当たらない。少しの溝も無かった。綺麗なつるつるとした大理石のような材質の床が其処にあるだけで。

「……ふ……塞がった。陛下、穴が塞がりました！」

「……………塞がったな」

私の言葉にぽつりと返した陛下が、とにかく疲れたといった様子で眉間をぐりぐりと揉みだした。

そんな陛下以外が注視する先では、コーエンさんがポカンとした

顔で一瞬にして出現した床の上で尻持ちをついている。

その後、暫く誰もが無言だったが、流石職業が国王といったところだろうか。陛下がその場の時間を動かした。

「……やはりこの部屋は臭いが酷いな。……移動するか、余の部屋に」

「……そうでございますね。では皆様、こちらへ」

陛下の言葉にまず反応したのはロマンスグレーのヘロルドさんだった。彼は黄金の格子を開けると、引かれていた仕切りの布を小さく開けて陛下を待つ。

「コーエン＝バーレ、呆けている暇は無いぞ？ お前はそちらの扉から行け。直ちに余の申しつけた事を実行に移せ」

陛下が私を抱き支えていた腕を解きながらそう言ったが、コーエンさんの硬直が解ける様子は無かった。

そんな彼の襟首を問答無用で掴んだのは、陛下の忠犬グイードさんだ。

グイードさんはコーエンさんの襟首を取ると、彼を引きずって廊下へと続く縦幅の低い扉の方へと連れて行き、扉を開けた途端にコーエンさんを足で蹴り飛ばして廊下へと放り出す。

その乱暴さに私は驚いてしまったが、更に驚かせたのはこの場に居る面々の方だった。

陛下が私の二の腕を掴んだ。いきなり掴まれたので私が彼の顔を見ると、陛下は顎をくいとヘロルドさんが居る方へと動す。

「移動するぞ、小娘」

言って彼は私を引っ張るようにして歩きだした。

「え、ちよつと陛下?!」

「ぐずぐずするな」

陛下は私をぐいぐい引っ張りながら、さつさと珍獣部屋を後にしようとする。

私はそんな彼に驚き、疑問に思いながら後ろを、残りの面々を振り返ると、彼らも陛下に続いて珍獣部屋を後にしようとしていた。

え、何で？

私の疑問だらけの視線を受け取ってくれたのはディルクさんとリーザだった。

「珍獣様、早く出ますよ。この部屋は臭いが酷い」

「この臭いは長く吸い続けるものではございません、珍獣様。後で何か良い香りのものをご用意致します」

そう言ってディルクさんは私の背を軽く押し、リーザは優しい微笑みを浮かべてくれたけれど、そうじゃなくてね？

「え、皆、ちよつと待って？　ねえねえ、原因究明とかしないんですか？」

「原因究明？」

陛下、私、ディルクさん、リーザの後に続くルドルフさんが、気難しい声音で問い返してくる。

私はそれに少々怯んだが、疑問に思っている事を言う為に小心者の心を頑張つて奮い立たせた。

「え、だって、今、床が塞がったじゃないですか。その原因とか調べないんですか？　少なくともちよつと叩いてみるとか、下の階に行つて見てみるとか、誰か有識者を呼びつけるとか、ウオちゃんを調べてみるとか……」

私の至極当然な疑問の言葉に、何故だか全員が一齐に呆れたような溜息をついた。

何故？　え、本当に何で？

「小娘、余はな、疲れていると何度も言わなかったか？」とは陛下。「珍獣様、世の中にはね、とりあえず見ない事しておいた方がよい事が往々にしてあるんですよ」とディルクさん。

「そうでございます、珍獣様。ここは一旦置いておいて、陛下の部屋へ行かれた方が宜しいですわ」とリーザ。

「ご希望でございましたら、お茶をご用意致しますわ」と妖精その一。

「そうでございますわ。今朝方、レネヴィア王国から特産の保存の

きく焼き菓子が届きましたの。とても美味しいお菓子でございますから、ご所望でございましたらご用意致します」と妖精その二。

「珍獣様、私も忙しい身でしてね。見なかった事にした方がよい事に割く時間は無いのです」とルドルフさん。

「……………」はグイードさん。

「さあ、皆様、あまり開けていると臭いが陛下の部屋に移りますのでお急ぎ下さい」とヘロルドさん。

えー…おかしくない、それって！

私は彼らの思考回路が理解不能すぎて、驚きに口を開けてしまう。そんな吃驚中の私を余所に陛下はとにかく引つ張るし、ディルクさんは背を押すし、他の面々は黄金の格子に集まってくる。

なになに、見なかった事にするっていうのはトリエスでは一般的な発想の仕方なの？ 確かにそうした方がいい時もあるよ？ でもさー、今回はそれって違くない？ 明らかにアヤシイよね、ウオちゃんも、あの床もさ！ 調べた方がいいよね、普通に考えなくても！ その見なかった事にするっていう考え方はトリエスの国民性なの、もしかしくなくても！

やややつ、それってばさ、トリエスって日本みたいな技術立国になれないフラグ立ったよね？ 完全に立ったよね、今！

だってさ、日本人だったら少なくとも調べるよ！ 今、この時点でさー！

まず床を叩いてみるよね？！ 下の階からどうなっているのか確認するよね？！ 最新式の機材を運んで測量してさ、這いつくばつても詳しく床を調査するよね？！ ウオちゃんなんて、血は抜かれるわ、レントゲン取られるわされるよね？！

マジでー……………私ってばさ、この人たちと心の底から判りあえる日って来るのかな？

なんかさー無いような気がするのはい気のせいかな……………。

そういえばさ、私が現れた時の状況をディルクさんに秘密の小部屋で聞いたけどさ、いま考えると、あれだって物語の魔法のような

状況で私が現れたのならさ、普通なら徹底的に調べるよね？ 調査するよね？ 私を拷問レベルで尋問したりとかするよね？！

ディルクさんの表現能力で言う闇と光が渦巻いて私が突然現れたんならさ、陛下が何と言おうと普通はさ、国王陛下の隣の部屋に私を泊らせたりしないよね？ 陛下つてばさ、トリエスで唯一の王族でしょ？ ひとりしか居ないんだよね、王族！

もしかしなくてもあの時、トリエスの国民性を皆遺憾無く発揮しちゃったのかな？！

私が現れた過程を皆して見なかった事にして、現れた私だけに対応した？！

最悪だよ！ ちょっとその国民性、未来のトリエスの子孫たちの為に修正した方がいいと思うよ、私！ 大きなお世話だと思っけどね！

そんな私の心の叫びは当然の如く無視されて、私は陛下に二の腕を引っ張られながら彼の部屋へと入った。

陛下の部屋に入ると、廊下への扉付近に陛下付きの侍女が十人ほど控えていた。

陛下と私の後に残りの面々も次々に入室してきたから、今現在彼の部屋は、陛下、私、ディルクさんにウオちゃん、ルドルフさん、リーザに妖精二人、グイードさんにヘロルドさん、陛下付きの侍女十人と一気に人口密度が高くなる。

控えている十人の侍女らが一斉に腰を落として礼を取っていても陛下は眼中に入らないようで、彼は気にせず私の二の腕をぐいぐいと引っ張りながら、ベッドより少し離れたところにある豪華だが小振りの机へと向かっていった。

「ルドルフ」

「はい」

陛下と私の後をルドルフさんがついてきていた。他の面々は一定の距離を保ってルドルフさんより後についてきている。陛下付きの侍女らは扉の傍から動く気配は無かった。

陛下は空いている方の手で髪を一度掻きあげると、辿りついた机の椅子の背凭れにその手を置いた。

澄んだ紫の瞳が机の傍らに立ったルドルフさんを捉える。

「悪いが今日は一日休ませて欲しい。予定されている全てを後日にずらしてくれ」

陛下のその言葉にルドルフさんの眉が上がった。

彼は碧い瞳に不愉快そうな色を滲ませる。

二人の間に凍えそうな青紫色の火花が散っているように見えるのは、私の気のせいだろうか？

そんな二人が怖くなってしまうと、二の腕を掴まれ行動が制限されていながらも、私は陛下の体に隠れるように身を寄せた。

「本日はサデヴァ側の方との内謁が組まれましたが？」

「そうなのか？ 何時来た」

「未明に」

ルドルフさんの回答に疑問を覚えたのか陛下が眉をひそめた。

「随分と早くないか」

「一昨日夜の総攻撃命令より以前に既に此方へ向かっていたようですよ」

「情けない。誰が来た」

「ガリス騎士団総長ベルトラン・バレスです」

「あの程度の規模で騎士団と称し、総長を名乗るとは笑わせる」

陛下は言い捨てると、暫し思案するように手をついていた背凭れをとんとんと指で叩いた。

そんな彼を静かに見ていたルドルフさんが、碧眼に侮蔑を滲ませながら継ぐ言葉を口にする。

「仕方ありません。名だけでも権威を示したかったのでしょうか。年若い女王の色香に惑わされた愚か者なれば」

陛下の紫の瞳にも侮蔑の色が浮かんだ。

「あの女も大概だ。国を内戦へと導いた愚王が。まあよい。放っておけ。どちらにせよ結果は変わらない」

「ですが」

「変わらないし、変える気もない。何か申すようであればガルダトイアにでも行けと言え」

「それは彼をただ放逐するという事ですか。わざわざ懐に飛び込んできた者を？」

「価値が無い。それより休みが欲しいんだ、ルドルフ。どうしようもなく疲れている。寝かせてくれ、今日一日休みをくれればよい」

疲労が限界に近いのか若干苛つきだした感じがする陛下の言い様に、ルドルフさんの方が折れた。

彼は指で眼鏡をつと上げると、机の端に置いてあつた書類らしき三十枚くらいの紙の束を中央に移動させた。

「仕方ないですね……判りました。今後は遊びも程々になされますよう」

「遊び？」

「違うのですか？ そちらのお嬢さんと」

「何を馬鹿な事を。それより幾つか手配してもらいたい事がある」

陛下が私の二の腕をようやく解放し、机の椅子に座つた。

放された腕をほぐす為に、私は肩からくるくと三回ほど回す。

それが済んで身の置き所に一瞬迷つたが、向こうに行けと言われた訳でもないで、なんとなく陛下の横に立つて黙つて彼の手元を見ていた。

先程からお仕事の話が開始されているっぽいし、流石に私は口を挟んではいけないだろう。

陛下はルドルフさんに手渡された書類らしき紙をパラパラと捲り、幾つかに纏め分けると、まずそのうちのひとつを、紙の下部だけが見えるように手早く広げていった。

これはあれだ。サインをする場所だけを覗かせて一気に書き上げる気だ。

陛下は机の端に立ててあつたペンを手に取り、彼から見て左上の

紙からサラサラと書いていく。予想通りサインだけをしている感じだ。

私はサインの流れ作業には興味が無かったから、幾つかに纏められた他の紙の一枚を手にとってみた。陛下は特に咎めない。

手に取った紙には『国王誕生式典招待客第二次案』とあった。

あれ？

そんな私の疑問符を余所に、陛下の手元を見ていたルドルフさんが、サインをし続けている彼に応えた。

「手配してもらいたい事とは？」

「ひとつはバルツァー法務長官にウオ……ディルクの頭上に乗っているあの醜悪な両生類の事なんだが、あれを珍獣三号とする手続きをしると伝えて欲しい。名前はウオだ」

「珍獣三号？ 先程から気になっておりましたが、なんです、あの色は」

「……判らん。出入り口が消えた怪しい地下で拾った。詳しい事は明日にでも話す。それと、ふたつめはグイードが持っている生物の死骸だが、あれもウオが居る場所で拾った。あれが何なのか学者に放り投げる。他にも調べて欲しい物があってな、詳細はグイードに……いや、それも明日話す」

「判りました」

「みつつめは今から書く人間を今日付けで解雇し、即刻城から叩き出せ」

陛下はサインをし終わった紙をとんとんと机の上で纏めると、それをルドルフさんに手渡した。次いで机の引き出しを開け、中から数枚の紙を取り出す。

「叩き出す？ 何をしたので？」

「これも理由は明日だ。とにかくどうしようもない連中だな」

「それでは一方的解雇になりますか……まあいいでしょう、判りました」

「よつつめ。金貨五千と銀貨三枚、昨日伝えるのを失念していたん

だが、今後、珍獣向け小遣いとして毎月銀貨一枚を支給すると小娘と約束した。今日中に用意してくれ」

「金貨五千？ 少々額が大きいですね。理由は？」

ルドルフさんが眉をひそめたのに、陛下が苦虫を潰したような顔をした。

「……言いたくない」

「しかし」

「どうしても言いたくない。聞いてくれるな」

「……」

陛下の些か強い口調に、ルドルフさんが黙した。

二人の会話に少しだけ間が出来た隙に、私はここぞとばかりに口を挟む事にした。

言わなければならぬ事に気づいたからだ。

「あ、陛下」

「小娘！ 余は二度と口に乗せるなど言ったが?!」

私が話しかけたただけなのに、陛下は条件反射のように瞬時に反応し声を荒げた。

彼の綺麗な紫の瞳が机上から私の方へと向き、ぎっと睨んでくる。私はその様子に呆れた。勘違いも甚だしいからだ。

「ややっ、言いませんよ、理由。何、怒ってるんですか。そうじゃなくて、銀貨が一枚足りません」

「何？」

「ウオちゃんの分！ ウオちゃんも立派な珍獣三号ですからね！」

ウオちゃんに対するお小遣いの支給を、同じ珍獣として要求します！」

私がふんと鼻息を荒くしてウオちゃんの為に当然の事を要求すると、陛下が目を閉じてうんざりとした顔をした。

彼は机に肘をつき、黄金の髪に指を差し入れて頭を抱える。

「……ルドルフ、追加してくれ」

「……判りました」

二人の声に何やら力が無い。

何で？と不思議に思いつつも、彼らのお仕事会話がまた再開してしまう前に、私は自分が聞きたい事を此处で強引に捻じり込む事にした。

頭を抱え、目を閉じ続けている陛下の頭上に軽くチョップを一回入れて、彼の旋毛（つむじ）をぐりぐりと押ししてみる。

これで陛下つてば明日は便秘だね！

なんて思いながら、私は気になる書類らしき紙を彼の目の前に差し出した。

「……………」

「……………」

陛下が目を開け、ルドルフさんが一瞬だけ頬を引き攣らせた。

「…………お前な。余は一応国王なんだがな」

判つてはいなさうだが、と疲れきった様子で陛下は顔を上げた。

「なんだ、小娘」

陛下が話を聞いてくれる姿勢をとってくれたので、私は彼の前で気になる紙をピラピラと振った。

… 60 (後書き)

旋毛を押すと便秘(下痢)になる
… 迷信、都市伝説。

「ねね、陛下、誕生日が近いんですか？」

「何？」

「これこれ」

「……ああそれか」

差し出していた紙を陛下が手に取った。長い黄金の睫毛に縁取られた紫の瞳が紙の上をさつと走る。

「ねえ、陛下、式典があるって事はさ、舞踏会とかもあります？」
女の人がドレスを着て、値段張っちゃってる宝石を身につけてさ、ビシッと正装した男の人が恭しく彼女らの手を取って、ダンスになんて誘っちゃってさ！

陛下の顔みたいにキラキラした広い会場で、皆くるくると優雅に踊っちゃうの！ 映画みたいだね！

愛と絶望の黒薔薇魔帝国物語でもあったんだよねー、そういうシーン！

私ってば脳内で何度パーシヴァル様と踊るのを妄想した事か！
ダンスの最後は当然熱い抱擁とキスで締め括ってるよ！

陛下が椅子の背凭れに体を深く預け、手に持っていた誕生式典について書かれていた紙を机上に放った。

「あるぞ。とりあえず国王だからな。一通りの事はやらなければならぬんだ。くだらないが」

陛下のその言葉に、例えば自分が舞踏会に出ることは無くても私はワクワクしてくる。

だつてさ、舞踏会といえばパーティーの事でしょ？

だつたらさ！　だつたらだよ！

やややっ、涎が出てきたよ、私！

じゅるん、じゅるん。

「陛下、舞踏会つてお食事出ます？」

「出る」

「いいなー。私も食べたいなあ。舞踏会に出るお食事つて美味しそ
う！」

きつとき、我が家の経済事情では決して口にする事の出来なかつた美味しい料理がいつぱい出されるんだよ！

私つてばさ、人生十八年、ちゃんとしたコース料理を口に出来たのは、トリエスに来て食べた昨日の夕食が初めてなんだよね！　迷つちゃったんだよね、私！　どのフォークとナイフから使つていいのかとかさ！　フィンガーボールだつて存在は知つていたはずなのに、思いつきり間違えたんだよ！　リーザがさ、驚愕の顔で止めに入つたんだから！

異世界日本では当然コース料理なんて一度も食べた事は無いよ！　フランス料理は勿論の事、イタリアンもさ、和食の懷石料理なんて論外だつたよ！　パパめ！　意味ナシ中間管理職が！　なにが課長代理だ！　部下が居ない時点で終了だつっの！

そんな私の心の叫びが聞こえたはずは無いだろくに、陛下が可哀相な子を見るような目で私を眺めながら、肩を少し竦めてみせた。

「食べればいいだろう？　出ればいい」

「え、出てもいいんですか？」

「ああ」

陛下が実にあつさりと許可を出すのに私は驚く。

やややっ、これはもしや、とりあえず言つてみてラッキーつていう状況じゃないの？！

いやーん、ナイス私！　やっぱり何でも欲望願望、加えて妄想は口に出してみるべきだよね！　うふ！

私は出席許可が下りた舞踏会で出されるであろう美味しい料理達に、脳内の全領域が支配され始める。

その期待に黒い目をキラキラと輝かせて、私は嬉しさのあまり陛下の首に抱きついた。

彼の黄金サラサラストレートな髪が、私の頬を優しく撫でる。

「……小娘」

「ねね、陛下、ローストビーフとか出ますかね？」

「ろーすとびーふ？」

「はい！ えつとですね、ローストビーフとは、四本足の動物の肉の塊を香辛料をつけて紐で縛って半生に焼いて、薄めに切って薬味のきいたソース？タレ？を付けて食べる料理の事です！」

私がテレビのグルメ番組で観た憧れのローストビーフを思い浮かべながら、陛下にどうしても判つてもらいたくて一生懸命説明をすると、それまで黙って聞いていたルドルフさんが顎に手をあてながら口を挟んできた。

「シュイネブーテンの事ですかね」

「そうだろうな。小娘、シュイネブーテンは多分それに近いぞ。定番だから出ると思う」

マジで?! やっぱいい、超嬉しい！ 念願のローストビーフが食べれるんだ！

あまりの幸運に嬉しすぎて、そして、それを食べさせてくれるスーパーお金持ち陛下にとにかく感謝の気持ちを伝えたくて、私は彼の頬と目尻に“ちゅっちゅっ”と二回ほどキスを試してみた。

「小娘、お前な、いい加減に」

「陛下！ 超超超ありがとうございます！」

私はもう感激すぎて彼の耳横付近にぐりぐりと顔を押し付けた。

「止せ、擦りたい」

「陛下、私ね、もうずっとずっとローストビーフが食べたかったんです！」

「そうか、良かったな？」

「千夏ちゃんがね、」

「……そこでまた、ちなつが登場するのか」

「千夏ちゃんが従兄の結婚式で、会場は都内の一流ホテルだったんですけどね？　そこで食べたローストビーフがめっちゃくちゃ美味しかったって、ずっとずっと言ってたんです！　陛下、ウチね、家計がちよつと苦しい家で、スーパー……お店のお惣菜で三百五十八円のお手頃価格で売っている、千夏ちゃんが食べたのより遥かに格下のローストビーフも買ってくれない家だったんです！　ママが『あんな少ししか入っていないの、オカズにならないでしょ』って！　食べたかったのに！　物凄く私、食べたかったのに！」

「……判った、判ったから小娘、少し離れる、首が絞まっているんだ」

陛下が首に巻き付けていた私の腕を強い力で解いた。

そして私の顔を見るなり呆れた顔をする。

陛下の親指が私の頬を滑った。

「お前は本当によく泣くな。今、涙を流すようなところがあったか？」

「だって、だって陛下、私ってばローストビーフを食べれるのが本当に嬉しくって、凄く凄く楽しみで……」

「まあ楽しみなのはいいがな、小娘。嬉しがっているところに現実を突きつけるのは流石に悪いと少々余も思うがな？　だがな、お前の言う通りすとびーふとやらは、お前がカラフェス一個分は落とすてからだ」

「……え」

なになに、今、陛下っては何を言ったの？

私は彼の言葉を上手く咀嚼出来ずにきょとんとしてしまう。

陛下はそんな私に少しだけ首を傾げてみせた。

「カラフェス一個分の体重をまず落としてからだと言った。

リーザ」

「はい、陛下」

リーザの方へ向いた陛下に、彼女は一步前へ出て、腰を落として礼を取った。

「小娘はこれから痩せる予定でな？ 減量をさせるから、今日からそれ用の食事を用意させる」

私同様、リーザもきよとした顔をした。

「減量、でございますか？」

「ああ。余の誕生式典までに少なくともニラルド、減量自体は四ラルド落とすまで続ける。まあ小娘の場合、六ラルドは減らした方が良いと思うが、いきなりそこまでは難しいだろう、小娘の性格的に」

「……か、畏まりました、陛下」

リーザが少々言葉に詰まりながらも何とか返事を陛下に返す。

彼女の表情は心底驚きました、といった感じだった。

そんなリーザにちらりと視線を向けた後、陛下に一言言ったのはデイルクさんだ。

「酷いですね、陛下。貴方は本当に」

「そうか？ 現実を教えてやり、修正への道を提供するのは逆に親切だと余は思うが？ ルドルフ」

「何か？」

「小娘には減量の為に城の練兵場で運動をさせる事にした。全騎士団に話を通しておけ」

「は？ 本気ですか？」

ルドルフさんもリーザ同様、心の底から驚いたのがまる判りな表情を見せる。

「本気だが？ それと城に居る全ての者を自由に使ってよいとも許可を出した。それも通達しておけ。ああ、お前も含むぞ、その中にはな」

「何故？」

「何故？ お前なら判ると思っているが？」

ルドルフさんが一瞬だけ息を止めた。彼は私を見ると少しだけ目

を細める。

「……御意」

ルドルフさんの了承の意に陛下は満足そうな笑みを見せ、宝石のように綺麗な紫の瞳を私の方へ向けた。

「という事だ、小娘。頑張って減量に励め」

「……陛下さあ」

「なんだ」

折角、人生初のローストビーフで喜んでいたのに水をさされ、私はどうにもやっついていられない気持ちになり、頬を膨らませた。

その膨らまし度合いといたら、指で少しでも押せば一気に口から空気が抜けてしまう程にパンパンに入っている。

それを目にした陛下が、右手を伸ばして私の頬に触れた。

「お前の頬は驚く程に膨らむんだな」

陛下は感心したように触れている手の親指で私の頬を撫でた。

そして彼が親指にちよこつと力を入れて押したのに、私は一気に口の中の空気を吐き出す。

吐きだした空気が彼の黄金の髪を揺らした。

「陛下さ、私がこれまでに読んだ異世界トリップもの話ではですね？」

「……また異世界とりっぷもの話か」

「まあ、聞いて下さいよ。そのトリップものでね？ 主人公の女の子がさ、トリップ先で痩せるだの、減量用の食事が用意されるだの、練兵場で運動しろとかさ、これまでに読んだ事が無いんですけど！」

一度もね！

私の言葉に陛下は面白そうに肩眉を上げた。頬に触れていた彼の右手が私の顔を下に滑り、顎を捉える。

陛下の顔に、この世の誰をも魅了し捕縛してしまうかのような極上の笑みが浮んだ。

「そうなのか？ よいではないか、別に。お前をその異世界とりっぷものとやらの主人公に例えるのであれば、記念すべき減量主人公

第一号だ。良かったな？ おめでとう」

「ちつとも良くありませんよ！」

あんまりな陛下の言いぐさに私は彼の手をぱしっと払い、ついでに首でも締めてやるかと掴みかかろうとした時、廊下側の扉が叩かれた。

それに陛下付きの侍女らが応対する。

「陛下、お呼びになられました針子のア二と申す者が参っておりますが」

「通せ」

「畏まりました」

陛下付きの侍女らが上品な仕草で動き出し、昨日見た姿と殆ど変わらない男恼殺系爆乳美女ア二を部屋へ通した。

部屋に通されたア二は、怪訝そうで、そして何処か警戒と恐れを抱いているかのような表情をちらつかせながら、扉からそう離れていない場所で陛下に礼を取る。

「お呼びとの事で参りました。針子のア二と申します」

「急に悪かったな」

「……いえ」

「其処では話し難い。此方へ来い」

机の椅子に腰を掛けたまま陛下がそう言ったのに、ア二は動かずに いや、動けない様子でいた。

そんな彼女を私は不思議に思い首を傾げる。

どうしたのだろう、ア二は。昨日はあんなに姐さんモードを発動していたのに。

私と同じように思ったのかどうかは知らないが、陛下が眉をひそめながら椅子から立ち上がった。

「どうした、ア二とやら」

「……いえ、申し訳ございません」

ア二は二度ほど深呼吸をして、すっと顔を上げ、陛下と私の近く、リーザが立っている付近にまで足を進める。

アニはリーザや妖精、陛下付き侍女らとまではいかなくとも、私から見ればとても品のある静かな動作で此方の方へと向かってきた。しかし、アニのあの爆乳は本当に羨ましいなあ。あれだけ静かに歩いているのに、たわわな胸が柔らかそうに揺れてるよ。

トリエス基準の露出の少ない服が口惜しい限りだね。アニのあの爆乳なら、谷間を下品にならない程度に見せた方が物凄く魅力的なのに。

そしてさ、私の憧れである谷間にペンダントが自然に挟まるっていう現象がさ、アニなら労せずして可能なのにさ。

私はアニの爆乳の柔らかさと大きさを直接触って確かめたくて、陛下の横で思わず両手をにぎにぎとさせた。

アニがリーザの横で止まると、陛下が彼女に声をかけた。

「お前の事は小娘から聞いた」

「……………」

陛下の前で、アニが無言で再度礼を取った。

その動きに彼女の爆乳がまた揺れる。

その甘い誘惑に私は生唾をゴクリと嚥下する。

「やっばい、もうね、本気で耐えられないよ！ 辛抱堪らんってこの事だよね！」

「ねねね、陛下！」

「小娘、余は今、アニと話をしているのだが？」

陛下が私の頭に手を置いた。

「やっつ、そうなんですけどね？ でもでも、もう耐えられないんですもん！」

「何が？」

私はこちらに視線を向けてきた陛下の前で、両手の平を内側に自分の顔の前に持っていき、柔らかいボールを軽く押し放す、といったような動きをして見せた。

「パフパフです！」

陛下の眉が不可解そうに寄った。

「ぱふぱふ？」

「はい！ 陛下、アニってすごいわく乳でしょ？ ちょっと揉んでみたくありませんか？！ 私ってば、アニの乳をモミモミ揉んで、

んでもってあのたわわに実った豊乳の間、深過ぎる谷間に顔を埋めてみたいんです！ パフパフとはですね、乳の間に顔を埋め挟む事ですよ！ 柔らかくていい匂いがするんです、きつと！」

私の予想だとア二ってば、爆乳なだけじゃなくて美乳だとも思うんだよね！

陛下が意味を聞くから詳しく教えてあげたのに、彼の蟀谷が即座に波打ち、またもやアイアンクローが炸裂した。

私はぎりぎりと頭を掴み上げる陛下の左手を外そうと試みるがビクともしない。

「いった！ 痛い痛い痛い、陛下！ ドドS男！ 痛いってば！」

「お前な、本人の前でそういう事は言うな！」

陛下が声を荒げて私を叱りつけた。

「何ですか？！ ア二の爆乳を見たら誰だって思う事を、私は正直に言っただけですけど？！」

正論だと思うよ？！ 少なくともこの場に居る陛下やルドルフさん、ディルクさんもグイードさんもそう思っていると思うよ！ ちなみにヘロルドさんはロマンスグレーだから除外ね！

「お前の頭のおかしい発想が他者と同じだと思っな！」

「どういう意味ですか？！」

「言葉通りだ！ ア二！」

「は、はい、陛下」

陛下が呼ぶのに、ア二の驚きに満ちた声が直ぐに応える。

「小娘の妄言は一切気にするな！」

言っつて陛下は気持ちを落ち着かせる為か、私のアイアンクローをそのままに、二度ほど深呼吸を繰り返してから継ぐ言葉を静かに口にした。

「ア二、お前に申しつけたことがある」

陛下の言葉に、ア二の顔が僅かにだが緊張を見せた。

「何でございましょう」

「小娘の体に合わせ、服を用意しろ」

「服、でございますか？」

「そうだ。小娘はこれから減量する予定でな？ 細くなっていくはずだから、それを前提にしろ。形は いや、面倒だ、形も質も余と同じでよい。ああそうだ、これにドレスは不要だと初めに言うておく」

「酷い、陛下！」

「黙れ、小娘！ 判ったか、ア二」

「……畏まりました、陛下」

「それとだ」

陛下がアイアンクローを外し、その手を私の肩に置いた。

彼は呆れとも疲れとも取れる様子で息を吐き、私に一度視線を向けると、眼前で礼儀正しく指示を待つア二に視線を戻す。

「小娘がかぼちゃぱんつをどうにかしたいらしい」

「かぼちゃぱんつ、ですか？」

「下着だ。お前は小娘に付き合っつてやれ。城の針子本来の仕事より優先してよい。放っておくとこの小娘は余の予測がつかん方向に暴走しそうだからな。相手をしてやってくれ。 ルドルフ」

「何か」

「ア二の件、針子を管理している者に言っておいてくれ」

「判りました」

「……これと言わなければならん事は全て言っただかな」

陛下はとにかく疲れたといった感じでぼつりと言つと、私の肩から手を放し、装飾の付いた高そうな上着の留め金に手をかけた。

「そろそろ寝たい。ルドルフ、何か余が急ぎすべき事は残っているか？」

「いえ、とりあえずは」

ルドルフさんは陛下の机の上にあった書類らしき紙の束を全て回収し、ひとつに纏めていた。

「そうか。 疲れたな、本当に」

陛下は上着を脱ぎ、それを机の椅子の背凭れにかけるように放る

と、首回りにある装飾と、中のシャツらしきもののボタンの幾つかを外し出した。

それを見て私は自分の身に纏っているものの存在を思い出す。いま私が入っている服は借りものだったと思い出したのだ。

私は少々慌てた感じで借りていた上着の留め金を外すと、勢いよく脱いだ。そしてそれを簡単に畳み、ディルクさんの方へ走っていった。はい、と彼に差し出す。

「ディルクさん、上着、どうもありがとうございました！」

本来なら洗って返したいところだけれど、今の私にそれは無理なことだったから、せめてと笑顔で服を差し出したのに、ディルクさんの反応は私が予想していたものとは違っていた。

ディルクさんが額に手をあてる。

「……それは今、返してくれなくても良かったんですがね、珍獣様」

「え、何ですか？ あ、やっぱり洗って返した方がいいですか？」

「いや、そうか。やっぱり常識として洗わないとダメなのか。」

「じゃあ、明日にでもリーザにお城の洗濯場に案内してもらわないと！」

そんな常識人私の今後のプラン思考を遮ったのは、シャツの襟元を緩め、寛ぎモードに突入しようとしていた陛下の怒声だった。

「小娘！」

「きやつ」

怒声と共に陛下に思いつき腕を引かれ、私は足を纏れさせながら彼の体にぶつかった。

折角畳んだディルクさんの上着が広がりがりながら床に落ちる。

見上げると、凶悪な瞳で陛下が私を睨み据えていた。

「え、陛下っては何で私を睨んで？」

「なにに、何で行き成り怒ってるの？ 陛下ってば。」

「余はな、言わなかったか？」

「何をですか？」

判らなかつたから当然の動作として首を傾げてみたら、陛下の額

に何度見たのか判らない青筋が浮いた。

「やややっ、何でそんなに怒ってるの？ え、マジで何で？」

訳が判らなくて私が口をぽけっと開けていると、陛下が私のミニミニすけすけキャミソールもどきなナイトドレスの鎖骨部分を軽く引っ張った。

「余は透けていると言わなかったか？ 地下で！」

「あ、そういう事?! つか、うっさいなー、このウザ男！」

私は陛下のウザぶりに思わずムカツときて、彼に負けない眼力で睨み上げた。

「そんなどうでもいい事で直ぐに怒らないで下さいよ！ このウザウザ怒りんぼ男！」

「何?!」

「私こそ言いませんでしたかね?! 私は貧乳だから欲情しないし、いいですって！ 陛下だって、私のこと貧乳だって言ったくせに！」

「言ってはいないだろう！」

「確かに“貧乳”って言葉は使っていませんでしたよ！ でも認めましたよね、『ああ』って！」

「無い胸とも言ったよ！ 覚えてるからね、私！」

「っ！」

陛下が言葉を詰まらせたのに、私は小馬鹿にするように鼻でふんと笑ってやった。

その瞬間、彼の額の青筋が倍增する。

彼の身からドス黒い邪悪なオーラが滲み出した。

「そもそもな」

「何です?」

「そのナイトドレスもかぼちゃぱんつも本来なら人に見せるものではないだろう！」

怒鳴りながら今度は私のカボチャパンツの腰部分のレースを陛下は掴んだ。

「ちよっと！ 純真可憐で麗しの乙女のカボチャパンツに触らない

で下さいよ、変態！ それにですね、いいんですよ、こんなトリエス王国製もつさりカボチャパンツ！ 異世界日本じゃ絶滅危惧種認定のブルマーよりも布地を使ってるんですから！ こんなの下着じやありませんよ！ 人前に晒したって、私ってば恥ずかしくも何ともありませんから！ なんだったらこの姿で城内一周しましょうか？ 陛下が御所望なら王都一周してもいいですけど？！」

その時はリオのカバーニバル級に派手にいくからね！ 頭にカラフルな羽をつけて、腰をフリフリ振りまくってやるんだから！

「誰が所望するか！ そんな事をしでかした日には即刻お前を投獄してやる！ 大体な、恥ずかしくないだの何だの、そういう台詞はその柔らかすぎる腹を何とかしてから言え！」

言って陛下は、カボチャパンツのレースを掴んでいた手を私の腹に移動させた。

「酷い、陛下！ っていうか何で掴むんですか！ 人のオナカ！」

信じられない事に、陛下は私のヘソ付近の肉をプニプニと揉んだ。「これだ、この肉は余計だろう！」

「止めて下さいよ！ 撥つたいです！ このドエロ変態男！」

私は彼に揉まれるのが撥つたくて仕方なくて、とにかく離れようと身を引こうとするが、逆に陛下に腰を引き寄せられてしまった。

陛下の揉み揉み攻撃は鬼のように続けられる。

「五月蠅い！ お前な、軽く触るだけでこれだけの弾力があるんだぞ！ おかしいだろう、この柔らかさは！」

「止めてつてば！ 嫌っ！」

「加えてだ！ 小娘、二の腕も柔らかかいんだ、お前は！」

陛下はそう怒鳴ると今度は私の二の腕をモニモニと揉み出した。

「ちよっと！ 止めて下さいよ、本当に！ 嫌だ！ ねえ、嫌だつてば！ 揉まないで下さいよ！ 陛下のエロオヤジ！」

「小娘っ！」

そんなモニモニプニプニと半ば取っ組み合いの様相を呈していた陛下と私は気づかなかつたが、彼の部屋に居た大半の人間があまり

の驚愕度合いに口と目を全開に見開き、ルドルフさんとディルクさんの間では私たちの事で会話が交わされていた。

「なんだあれは」

ルドルフさんが眼鏡中央の縁を押さえながら眉間に皺を寄せて唸った。

ディルクさんは脱力したように首後ろに手をあてる。

「うーん……俺も迎えにあがった時から驚きの連続なんですよ。…何と言っているのか判らないんですが、仲が良いのか悪いのか。…でもまあ、少なくとも普段のあの方では有りえないと言っているです。ね、あれは」

誓ってもいいですよ、とディルクさんがお手上げといった感じで軽く両手を挙げると、ルドルフさんが瞑目した。

「嫌な予感が」

「嫌な予感、ですか？」

ディルクさんが陛下と私を見ていた視線を横に居るルドルフさんに向けた。

「物凄く嫌な……いや、きつと気のせいだ。そう信じたい」

「エーヴァハルト閣下？」

「戻る。仕事が溜まっているんだ。……腹立たしいからあの二人はもう早く寝せよう」

言って、ルドルフさんが手にしていた書類の束をくるくると丸め出したのを、ディルクさんは気の無いふうに見しながら亜麻色の頭を一度撫でた。

陛下が完全なる嫌がらせであんまりにも執拗に私の二の腕を揉むものだから、また彼の玉でも上げてやるうかと心の中で企てていた時、陛下と私の取っ組み合いをピタリと制止させるような怒声が部屋中に響き渡った。

「そこのお二方！ いい加減にしてもらいたいものですがね！」

それに陛下も私も驚いてしまつて同時に怒声のした方向へ顔を向けると、碧眼に冷たい炎をメラメラと燃やしているルドルフさんが私たちに厳しい視線を向けていた。

その視線に怖くなってしまつて、私は目の前の陛下に思わず抱きついてしまつた。

陛下が私の背を軽く抱くように片腕をまわした。

「陛下、今日はお休みをご希望ではなかったのですか」

「……そうだな」

「随分とお元気そうにお見受けしますが」

「……そうか？」

「サデヴァは今回の内謁に国の存亡を賭けているのですがね。ガリスの総長個人は其処に女王の助命と保護の確約も目的に入れているのでしようが、それでも決死の覚悟で参った満身創痍の者に、貴方は其処のお嬢さんとの遊びで疲れたからお会いにならない。それを知ったら、あの総長は憤死ものでしょう」

ルドルフさんは手にしているメガホンのように丸めた書類を、もう一方の手の平にポンポンと叩きつけていた。

「なんだか彼は鬼のスパルタ家庭教師のようだった。」

「どうします、これから仕事をされますか？」

「……いや、休ませてくれ。もう寝る」

「……あ、私も」

ルドルフさんの厳しい視線と冷たい声音に負けた陛下と私は、二

人して力無く同じベッド　陛下の広い寝台の方へと歩いていく。そしてベッドに辿りつくと、陛下は左側から、私は右側からお互い無言で掛布を捲り、もそもそとその中へと入った。

一旦体を横たえると、激しい眠気と疲れがドツと押し寄せてくる。私は陛下の極上の寝心地の寝台に満足しながら、掛布を口元まで引き上げた。

急速に瞼を開け続ける事が難しくなつて、私は逆らわずに目を閉じる。

私が彼のベッドで眠る事に、陛下からは特に苦情は無かった。

たぶん彼も私同様、いろんな事がありすぎて精も根も尽き果てていたのだろう。

陛下に苦情を言う余力も、私の寝床を指示する余力も単に無かったのだと思う。

陛下は身を横たえて掛布を胸下まで引き上げると、ヘロルドさんの方へと視線を向けた。

「ヘロルド、自然に起きるまで起こすな」

「……承知いたしました、陛下」

「全員下がれ」

その言葉を終いに陛下の体から力が抜けていくのが同じベッドに居る私に判る。

彼の寝台は広がったから私は端っこにでも寝ようと思ったのだけれど、日本では煎餅蒲団だったし、ベッドの端に寝て落ちるのが怖かったから中央へ　陛下の方へと瞼を閉じながら移動した。

陛下の腕に体があたり、少し戻ろうとしたけれど、もうどうしようもなく眠くて、私はそのまま意識を失いそうになる。

そんな私を陛下は特に突っぱねるでもなく、彼は何処か諦めたように小さく息を吐くと掛布を更に引き上げた。

そして数秒後、陛下と私はほぼ同時に眠りの底に落ちる。

だから私たちは知らなかった。

陛下はたぶん文句を言う余力が無かったから、私は寝る場所が無

かったからってだけの理由だったんだけど、当たり前のように同じ寝台で寝入ってしまった陛下と私を、部屋に居た全員が唾然茫然の呈で見えていたなんて。

ディルクさんは頭にウオちゃんを乗せながら天井を見上げて脱力したようにふつと息を吐き、ルドルフさんに至っては眩暈を感じたようで額に手をあてて唸っていたらしい。

ヘロルドさんは無言で陛下が脱ぎ散らかした服を淡々と片づけ出し、リーザと妖精二人も無言で遮光の為のカーテンを引いていたとか。

アニは暫く固まっついていて、ガイドさんは陛下が放り捨てた短剣を拾い、彼の枕の下に差し入れて、
そして陛下付きの侍女ら。彼女らは、ただじつと陛下と私が眠るベッドを見ていたようだ。

この日、陛下と私が寝入ってから半刻と経たないうちに、私たちが陛下の部屋でベッドを共にした事が王城中を走ったらしい。

それが尾ビレも背ビレも胸ビレも付けまくりで噂され、この日を境に、私への後宮方面からの攻撃が半端ない勢いで激化した。

ルドルフさんもディルクさんもガイドさんもヘロルドさんも、そしてリーザも妖精二人もアニも口は堅そうだから、陛下付きの侍女らの誰かが流したのだろう。

異世界トリエス王国にやってきて、幾らも時間は経っていないはずなのに、怒涛の嫌がらせが私に押し寄せる事となったのだ。

不幸も此処に極まれりである。

… 62 (後書き)

珍獣二号の体重の数値について … 2009/09に皆様にア
ンケートを取った結果を参考に設定。従って、陛下の言葉に傷つか
れないようお願い致します。

1メートル 〃 1リズ

2キロ 〃 カラフェス1個 〃 2ラルド

陛下と私と秘密の小部屋・後編 … 四百字詰原稿用紙 約46
5枚

喉が渴く。

灼熱の太陽が容赦なく上から照り攻め、私の体の水分をどんどん奪っていく。

見渡す景色は何故かサハラ砂漠のような場所で、三百六十度テレビで観たのと同じ黄土色の砂の山が幾つも見えた。

見える範囲に人もラクダも居ない。

オアシスどころか草の一本も生えてはいなかった。

どうしようもない喉の渴きと焦熱地獄に放りこまれたかのような暑さに、私は立ち続けていられなくなって膝をついてしまう。

膝をついた先の砂は、熱せられた鉄板のように熱かった。

「やつ……私、死んじゃう……だ、誰か助け……たす……けて……」

そう助けを求めながら、私が容赦なく照りつける太陽に向かって手を伸ばした時、その太陽がしゃべった。

「起きろ」

え、太陽ってしゃべるっけ？

死にそうになりながらも疑問に思っただけで私が首を傾げた時、サハラ砂漠に大地震が起こったかのような揺れが生じる。

「きゃっ！ 地震！ テーブル！ テーブルの下に潜らないと！

カンパンは何処？！ カップヌードルは必須だよ！ お湯は無いけど！」

ちなみに私はカレー味が好きだよ！ 次点でノーマル醤油味ね！

最近、小麦粉の値段が上がってカップヌードルも値上がったからさ、ママが買ってくれなくなっちゃったんだよね！

ウチさ、本当に家計が苦しかったんだよ！ パパ、年収五百万円いってないのに考え無しにも住宅ローン組んで、お兄ちゃんが三流私立大学に行っちゃったからなんだけどさ！ 知ってる？ ウチさ、貯金が五十万円無かったの！ ママ、お兄ちゃんの学費の為に、簡易保険を解約しちゃったんだから！

パパがね、寂しそうに言ったの。

『これで次の年末調整、火災保険しか書くの無くなっちゃったなあ。あ、でも住宅控除が……』 ってね！

「小娘、とりあえず目を覚ませ。うなされ方が酷い」

その声には私はハッと目を覚ました。

目を開けてまず視界にぼんやりと入ってきたのは、ベッドの豪華な天蓋と、黄金と紫色を持つキラキラとした顔で。

「……へ…いか？」

私が彼を視界に捉え、呼ぶと、陛下は小さく溜息をついて私の隣に体を横たえた。

彼は少しだけ身を起して、どうやら私を起す為に揺さぶっていた模様だ。

「何の夢を見ていたのかは知らんが、死ぬとか助けるとか気が滅入るような寝言を横で言うのは止めてくれないか。寝覚めが悪すぎる」

言いながら陛下は、まだ寝足りないのか目を閉じて手の甲を額に当てた。

閉じられた目を縁取る黄金の睫毛が羨ましいくらいに長い。

そんなビスク・ドール陛下に思わずムカついた私は、それを引っ張ってみた。

「起きて早々何をする！ お前は！」

陛下が力任せに私の手を払った。

その払い方が寝起きだったからか何も考えていない払い方で、あの意味、彼は自爆する。

「……っ」

「あ、抜けた」

三本も抜けたよ！

私の親指と人差し指の間には陛下の黄金の睫毛が三本。その見事な長さで黄金つぷりに感心しながら、私はそれをしげしげと眺めた。

「これ、売れますかね？」

「……何故そういう発想が生まれるんだ。お前の頭は」

陛下は嫌そうに言いながら、痛かったのか睫毛が抜けた方の目をゴシゴシと何度か擦っていた。

「だって、超絶美形のトリエス王の黄金の睫毛ですよ？ お守り……えっと、気持ち的な守り袋の中に入れておけば、もしかしたら玉の輿への御利益があるかもしれないじゃないですか。乙女の夢であり理想ですよ、た・ま・の・こ・し！ ちなみに私も玉の輿を狙っています」

狙っている第一ターゲットは勿論パーシヴァル様ね！ 次点で財閥系御曹司だから！

ああ、早く日本に無事帰還して、西園寺とか伊集院とか九条とか、そういった名字の容姿端麗、頭脳明晰、スペシャル金持ちな彼を探さないと！ 忙しいんだよ、私！ やる事が沢山あるんだよね！ 異世界トリエスで油売っている暇は本来なら皆無なんだから！

「……返せ」

言っただ陛下は、睫毛を摘んでいた私の指を強引に開き、払い捨てた。

「あっ！ もつたない！ トリエス金貨三百枚で売りつけようとしたのに！」

「売れるか、阿呆！」

「売れますよ！」

「誰にだ？！」

「トリエス在住全乙女たち、と言いたいところですが金額的に無理なんで、貴族令嬢です！」

「誰も買わん！ 馬鹿馬鹿しい！」

「ややっ、買いますって！ 陛下ってさ、自分の価値を全く判っていないですよ！ もしもですね、財政難に陥ったら陛下ってば自分を切り売りすればいいだけですからね！ その時になって、お金の工面に悩む前に今の内に教えておきますけど！」

もう本当に親切の塊だよ、わ・た・し！

「切り売り？」

陛下が上に向けていた顔を此方に向けた。

彼の黄金サラサラストレートな髪が、柔らかい枕の上にキラキラと散っている。

カーテンが引かれているから今が何時かは判らないし、部屋は薄暗いけれど、所々に置かれている燭台に灯された蝋燭の炎が、彼の髪を幻想的に輝かせていた。

「はい、文字通り陛下の体を切り売りするんです。まずはハゲない程度に髪の毛を。陛下は脛毛が無いから他の体毛、睫毛とか眉毛とか、マニアな乙女達には脇毛とかチリ毛とか？」

「……小娘」

「更にツワモノマニア乙女には、小瓶に入れた陛下の精子です！

陛下ってば射精するだけですし、痛くないし、楽ですよ！」

「……お前な」

「あー……こつちの世界に精子バンクが無いのが残念無念ですね……。

陛下の精子なら高く売れそうなのに、実に惜しい！」

「精子ばんく？」

陛下の未だ眠た気な雰囲気を漂わせる紫の瞳に不可解そうな色が浮かんだ。

「あ、精子バンクとはですね、向こうの世界の技術で精子を凍結させて保存出来る施設、機関の事です。極端な話、既にお亡くなりになった方の保存された精子を女性の体の中に入れて子供を作る事も可能なんです」

「そんな事が出来るのか」

「はい。それですね？ 陛下みたいな超絶美形で頭脳明晰、高身長、加えて足が長くて、金髪紫瞳の色彩を有する血統ランク最高の白人系の人の精子は、笑いが止まらないくらいに売れるんじゃないですかね？ 陛下ってば向こうの世界で精子提供すれば、一万くらいの子持ちになれそう！ きゃっ、パパ！ 養って！ 養育費！ 生活費！ 財産分与、忘・れ・な・い・で！ 必ず認知はしてね！」

陛下が天蓋を見つめるように顔を上に向け、両手で目を覆った。

「絶対に行きたくない。お前の世界には」

「ちゃっ、結構、いい世界ですよ？ 環境問題が深刻ですけど」

「……どうして起きて直ぐにこういう話になるんだ」

目に両手をあてたまま、げんなりしたふうに陛下が言った。

そんな陛下を横目に私は見ていたが、ふとある事を思い出して仰向けに寝ていた体を彼の方へと向ける。

陛下はずっと目に両手をあてたままで、特に私の動きは気にしていないようだった。

では、今のうちに確認をば。

さわさわさわわ……モミモミモミ……スリスリスリスリ……

私が千夏ちゃん直伝の“華麗なる絶妙手つき”男根蟲惑入門編”を陛下のモノに披露してみると、彼は目にあてていた手を慌てて掛布の中に入れ、動く私の手首をガシツと掴んだ。

掴む力が思いのほか強い。

陛下が横向きで寝ている私をギツと睨んだ。

「……何故、触る？ 何故、揉む？ 何故、擦る？」

「え、だって」

「だって、何だ」

「朝立ちの確認をね？」

「何？」

「あ・さ・だ・ち！」

「何故、そんなものの確認の必要がある！」

掴んでいた私の手首を陛下は掛布の外に出し、ぺいっと捨てた。

「ややっ、だつてね？ 今朝、ディルクさんが秘密の小部屋で言っていたじゃないですか。陛下、ここ数年、後宮に通ってないって」

「……それと今のとどう関係が？」

寝起きでも澄んでいる紫の瞳で此方をずっと睨み続けている陛下を宥める為に、私は仰向けに寝ている彼の胸部分をぼんぼんと軽く叩いた。

「……止めてくれ」

「まままつ、へ・い・か！ いいですか？ 私が朝立ちの確認をしたのはですね、陛下がED、勃起不全かどうか素人診断しただけです」

「……………」

「心因性の勃起不全なら朝立ちが正常に起こる可能性があります。

で、陛下はちゃんと朝立ちしてますのでね？ 私つてばいろいろと考えたんですけど、後宮に通わない………というか通えない原因は心因性の勃起不全なのではないかと」

「ふざけた事を！」

声を荒げて私の言葉を遮ると、陛下は体を起して、彼の方へ横向きで寝ていた私の両手首を掴んで仰向けに 私をベッドに押しつけるような形で上に乗ってきた。

「え」

私は突然のその行動にびっくりだ。

「ちよつと、陛下？」

「……余がいつそのような理由で後宮に通っていないと？」

陛下が目を細めながら、互いの鼻の先があたるくらいにまで顔を近づけてきた。

「や……言つてはいないんですけどね？ でもでも美女美少女が陛下を大歓迎して待っている後宮に通わないなんて勃起不全としか考えられないじゃないですか、やっぱり。だって私が陛下なら毎日通

いますしね？ 後宮自体に問題があったとしても勿体無いですしね？ 昨日の夜に陛下のを擦った時、勃ちはしなかったですけど反応はしていたじゃないですか。だから最初は……秘密の小部屋でね、デイルクさんから聞いた時は不能では無いだろうと思ってたんですけど、でも、いろいろ考えてみると心因性っていうのもあるなあ、とね、思いました……朝立ちのね、確認を……………」

以前、後宮に通っていた時に、勃たなくなる程の嫌な事があったとかね？ ありがちな話でしょ？ そういうのって。

「……………」

「……でね、陛下はその手の事に興味が薄いつてデイルクさんは言っていましたけど、陛下つてはまだ若いでしょ？ なのに数年も通っていないっていうのはさ、女性を前にしても勃たないからじゃないですか？ 陛下、地下での会話から考えるに、お城から出て女の人を買ったりはしていないさうだし……。だからあの……先天的というか、機能的に不能なんじゃなくて、心因性でね……その……………」

後半、私はどうにも続け難くなって言葉を濁した。

陛下の私の手首を拘束する力が強くなったからだ。

「ほう？ では証明してみせようか？」

陛下が何を思ったのか、鼻先が当たるまで近づけていた顔を移動させ、私の左耳にフワリと口をつけた。

「しょ……証明って？」

「お前で」

耳元で囁くように言われた彼の美声に、私は思わずぞくぞくと背筋を震わせる。

「やややややっ、これは初めての感覚では？！」

私が未体験の不思議な感覚に驚いて体を固まらしていると、陛下が私の耳朶を軽く食み、耳元から伝うように唇を這わせて首に顔を埋めてきた。

彼の黄金の滑らかな髪が私の鎖骨の上に落ち、肌を撫でる。

その擦ったさに反射的に身を縮こませると、陛下が私の右手首を押さえていた手を離し、体のラインをなぞりながら下の方へと滑らせた。

私の太股の外側をなぞり、内側を下から上へと撫でてくる。そして今まで誰も、いや、地下で陛下しか触れた事のない場所に、下着の上から柔らかく押さえるように触られた。

陛下は太股で留めている下着のリボンを緩め、すっと指をその中へと入れる。

私の一番敏感なところに陛下のすらりとした指が擦るように直接あてられた。

「……ん」

その思わぬ彼からの一連の行為に、私は咄嗟に言葉を出せず、胸は今までにないくらいにドキドキしていた。

薄暗い彼の部屋は静かで、耳に聞こえてくるのは、私の息遣いと心臓の音、陛下が身動きする度に生じる僅かな衣擦れの音と、そして彼の。

陛下の指が私の予測のつかない動きをし、彼の唇が　舌が私の首元から徐徐に胸の方へと下りていく。地下通路で切り取ってしまったから、胸を隠す程度の長さしかないナイトドレスを留めるリボンを、陛下はスリりと口で解いてしまう。

ナイトドレスが左右に開き、私の小さな胸にひんやりとした空気が触れた。

蝋燭の頼りない炎の揺らめきに幻想的に輝く陛下の黄金の髪が、私の胸元で妖しく煌めいて　。

「……あ」

「……」

「……や」

「……」

「……っ……………これで……………私も処女喪失ですね」

「……」

「……ようやくです、陛下。私ってば、異世界日本で彼氏が本当に出来なくて、いつつもパーシヴァル様で妄想するしかなかったんですけど、千夏ちゃんがね、言ってたんです。処女じゃなくなるのって少し寂しい感じもするけれど、いいものだよって。千夏ちゃん、初めての時、結構痛かったらしいんですけど、でも気持ちの充足感の方が上だったんだって。なんか下がスカスカする感じってというか、風穴が開いた感じでスカツと爽快というか、そんな感じがしたって」

「……………風穴？」

陛下の私の体を触る手が止まった。

「はい。処女膜が破れてスースーした感じがしてスッキリしたって。」

異世界日本ではね、陛下。国の性意識調査で、私くらいの年齢の女性の三割弱が既に処女を喪失済みなんです」

「……そんな調査をしているのか、お前の国は」

「してますよ？　なんか変ですか？　でね？　トリエスではどうか知りませんが、異世界日本ではですね、私くらいの年齢の女性の結婚は一般的にちよつと早いですよ。という事はですよ？　大半は婚前交渉な訳で、それが許される自由な風土の国なのに、私つてば、その三割弱に入れなかつたんですよ。入りたかつたのに！　千夏ちゃんの話聞いて、私つてば、凄く入りたくて仕方なかつたのに！」

「……おかしくないか、その考え方は」

「そうですか？　ちつともおかしくはないと思うんですけど……。まあ、それより早くやりましょうよ、へ・い・か！　ややっ、超楽しみ！　快樂つてどんな感じがするんでしょうね？　今、陛下に触られてちよつと変な感じがしたんですけど、それが所謂“感じる”つていう感覚なんですか？　きゃー！　私もとうとう大人の世界に仲間入りですね！　私ね、初エッチ、あ、エッチの意味つて言った事ありましたっけ？　エッチとはセックス、性行為の事ですからねで、その初エッチをですね、私つてば、パーシヴァル様が、日本の財閥系御曹司にと決めてたんですけど、もうこの際、陛下でもいいです！　異世界トリップ先の王様に凌辱される！　こういうシチュエーションもオイシイですよ！　有りだと思います！　異世界トリップものには人気になれるパターンです！　ここに逆八も加われば最強ですよ！　十八禁……えつと十八歳未満は見てはいけない世界に突入です！　ささっ、陛下、手が止まっています！　早く続きをしてください！　ワクワクですね！　あ、陛下、エッチし終わったら、お赤飯炊きましょうね！　トリエスつて小豆と餅米あるかなあ？」

「……世界一馬鹿な事をしているような気がしてきた、余は。情けないというか、手を出してはいけないものに出そうとしたというか」

「え、何を言つて？　ねね、へ・い・か！　早く早く！　私、“イク”っていうの早く経験してみたいんですよ！　千夏ちゃんがね、」
「……………何故だろう。余は何時か、ちなつを恨むような気がする」
そうポツリと言つと、陛下は身を起し、私の身を跨る形で膝立ちした。

彼は乱れた髪を一度掻きあげて簡単に整えると、私を見下ろす。
そんな陛下を私は彼に乱されたままの格好でただ見上げていた。
陛下はシャツらしきもののボタンを上から幾つか外していたから、若干はだけてしまつていて、彼の鎖骨と胸元がよく見えた。

その様子は、幾つかの蠟燭だけが光源のこの薄暗い室内では何とも色っぽくて、私はデジカメが手元に無いのを心底残念に思う。
写真に撮つてブログに晒せば、アクセスアップ間違い無しな代物なのに。

そんな事をぼんやりと考えていると、陛下がそのまま屈んで私に手を伸ばした。
彼は左右に開いてしまったナイトドレスのリボンを掴むと中央にきゅつと寄せる。

「すまなかつた。どうかしていた」
何とも言えないといった顔で謝罪する陛下に、私は驚いてしまつて彼のリボンを持つ両手首を掴んだ。

「え、何を謝つて？」
「当然だろう？　お前を抱こうとしたんだ。……………何故か。…珍獣だと思つているはずなのに」

「ややっ、抱こうとしたのが何で謝る原因に？　つか、何で勝手に止めてるんですか？　続けられないんですか？」

「……………お前な」
「え、本当に止めちゃうんですか？！」

「……………ああ」
「嫌っ！」
「嫌つてお前、何を言つて……………」

「だって、だって、私ってば、ようやく脱兎女だったんですよ?!
そんなさ、陛下! 一度始めた事は最後まで完遂して下さいよ!
馬鹿!」

陛下が深い溜息をつきながら、数秒ほど瞑目した。

「余が言えた義理では無いがな、小娘」

「何ですか」

「もう少し己の身を大切にしろ。とりあえずな。それと、」

言葉を一度切って、陛下は手際良くナイトドレスのリボンを結んでいった。

彼はリボンを形良く結ぶと、ナイトドレスの短すぎる裾を下にピ
ンと張りながら下ろす。

「少しは気にするとか、恥じらいをな、持った方がいい。胸が
見えていても隠す事をしないというは、どうかと思う」

「胸……」

「ああ。見えていた。それに……いや、何でもない。忘れてく
れ」

そう言って陛下は私の上から退き、枕を背にするようにして横に
座った。

彼は立てた片膝に肘を置いて、黄金の髪に指を差し入れるように
して頭を抱える。

「……酷い自己嫌悪だ。あの時以来だな、こっぴつのは」

「あの時って?」

陛下が座ったので、私も身を起して彼と同じように座った。

私の問いかけに陛下は応えない。

ただ無言で溜息をついていた。

「っていうかさ、陛下、なんで自己嫌悪に陥ってるんですか?」

「何でってお前、」

「私は陛下にして欲しかったですけど? むしろ最後までしてく
れなかったのにムカつきます」

「……………」

陛下が頭を抱えていた手を外し、顔をあげた。彼は幾つも置いてある柔らかい枕に脱力したように背を預ける。

私は力が抜けてしまった陛下の手を何となく手に取った。とりあえず今朝、肩が凄く凝っていたから、該当するツボを押してみる。

「此処は肩ツボですよ」

「肩つぼ？」

「はい。押すと肩にいいんです」

「……聞いていいか」

「何ですか？」

「いいという理由は？ …… ああ、肩つぼではなく、胸の方だ」

陛下が何となく言い難そうに聞いてきた。それが何だかちよっとだけ可愛く思えて、私は少し笑ってしまう。

「小娘？」

「いいといった理由はですね、」

「ああ」

「何と言えばいいんでしょう？ 私の胸が無いのはもう動かしようのない事実だし、自分自身判ってますから、陛下がどう思おうと今更ですし、それにですね、陛下に例え豆粒とか思われても、それ以上の収穫があつたからいいんです、という事なんですけど」

ツボを押していた手を陛下はすっと引き、その手を私の頬に添えた。

「よく判らない」

「あれ、判りませんか？ だって陛下つてば、確かに最後まではしませんでしたが、私を抱こうと少しだけかもしれないんですけど思った訳でしょう？」

「……………」

「だからいいんです。これで私、ちょぴつと自信がつかました。この先、日本に帰れたら日本で、帰れなかったらトリエスで、私、本気で彼氏を作るの頑張ります！ 陛下、ありがとうございますね！」

私が笑顔で陛下に礼を言ってみると、彼は一瞬だけ瞳を揺らし、

次いで何やら困ったような顔をした。

「……自信がついたのなら良かった……と言ってよいのかよく判らんが、小娘、」

「はい」

陛下が私の頬に添えていた手を下ろした。

「悪いが、トリエスでは暫く諦めてくれ。にほんに帰れたのであれば勿論好きなだけ相手を作ればよいと思うが」

「え、何ですか？」

「余が保護しているという時点で、お前はどうしたって利用されてしまうからな。……それに今は都合が悪い」

「都合が悪いって？」

陛下の言っている意味が判らなくて、私は彼の紫の瞳を見ながら首を傾げた。

大国トリエスの王が保護しているから利用されてしまう、というのは判る。確かにね？　そういう話はあるがちだよな？

でも、今は都合が悪いというのは何でだろう。どうして？　私が彼氏を作るのが、どうして都合が悪いという話になるの？

利用されるという以外の理由が私には判らない。思いつかない。

何故？

陛下が私から視線を外し、彼は枕に預けていた体を起した。

陛下の豪華な天蓋付きベッドの横にはサイドテーブルがあって、彼はそちらに手を伸ばす。

「言葉通りとしか言いようがないな。とにかくお前は余がよいと言うまでトリエス……いや、この世界で特定の相手を作るな。興味を持つ素振りを見せる事も許さない」

「許さないって。……あれ、でも陛下ってば地下で私にルドルフさんを薦めてませんでしたっけ？」

「薦めていた訳ではないが……。まあ、時期が来ればルドルフだろうがディルクだろうが他の誰であろうが好きにすればいい」

「……やっぱりよく判らないんですけど、それは何時までですか？」

「今のところは何とも。それより小娘、」

「はい」

「温いが水でも飲むか？ 果実が入れてあるから喉越しは良いと思うぞ？」

そう言っつて陛下は、ひとつの小振りのグラスと一リットルサイズのカラフェスらしき物を手にし、私に見せた。

シンプルな模様が入っているガラス製のカラフェスらしき物には、簡単な蓋がしてあって、中には水と、向こうの世界でいうレモンかライムっぽい果実が数切れ入れられていた。

それを目にした私は、喉がカラカラだった事を今更ながら思い出す。

私は陛下の方へ勢いよく両手を差し出した。

「飲みたいです！ そういえば私、喉が猛烈に乾いていたの忘れてました！ もうね、喉も口の中もカピカピなんですよ！」

「かぴかぴ？」

「はい！ カピカピに乾きすぎてサハラ砂漠で死にそうになる夢を見たくらいです！」

「砂漠な。それで死ぬとか助けると寝言を言っていたのか」

「何だかな、と言いながら陛下は蓋を横に少しずらし、グラスに水を注いだ。」

「ほら」

「ありがとうございます！ ではでは遠慮なく」

私は陛下から七割ほど水が注がれたグラスを受け取ると、一気にごくごくと飲み干した。

昨夜、アヤシイ地下に落ちる数時間前から何も液体を入れていなかった私の喉は、日照り続きの畑に撒いている水のように吸収して更にガツピガピに干からびていた口の中は、彼から与えられた水の分量だけではとてもではないが足りなかった。

それでも口内に爽やかな柑橘の香りを感じ始めた時、陛下がカラフェスらしき容器を私の方へと近づける。

「まだ足りなそうだな」

「あ、すみません。って、陛下は飲まないんですか？」

陛下が軽く肩を竦めた。

「お前が手にしている物がひとつしかないからな。後でいい」

「ややつ、国王陛下を差し置いて先に頂き大変申し訳ございません」
私が心を込めて謝ってみたのに、対する陛下は眉をひそめた。
「お前のそういう言葉は何と言うか、心が籠っていないのがよく判るな」

「え、どの辺が？」

「気づいていないのか？ まさかな？」

言いながら陛下はグラスに追加の水を注いでくれる。

またグラスに七割程が注がれたので、今度はゆっくりと水を口に
した。

「あー…生き返ります」

「そうか」

グラスの二割ほどを飲んで私は一度息をついた。

本当に生き返る。とにかく喉と口の中が乾いていたのだ。

私はグラスを左手に持ったまま、右手で鼻をこしこしと擦った。

「鼻が詰まってて口で息をしながら寝てたから、口の中がヤバかったんですよね。コチコチですよ、鼻」

「こちこち？ そういえばお前は鼻が悪いのか？ 寝言で完

全に起される前に、何度かお前の鼻の音で目が覚めた」

「え」

私は陛下の言葉に鼻を擦る手を止めた。

彼は手にするカラフェスらしき物を軽く円を描くように揺らしながら、私の鼻あたりに視線を向けている。

「ピーピー鼻を鳴らしていた」

「ややつ、それ本当ですか?!」

「ああ」

「ひょえー、ごめんなさい、陛下！ 私、慢性アレルギー性鼻炎持ちで、耳鼻科に定期的に通院中の身なんですよね！」

「慢性あれるぎー性鼻炎？ じびか？ 通院とは？ 病気なのか、

小娘」

陛下が眉をひそめたまま私に問いながら、彼は手にしていた容器

をサイドテーブルに置いた。

「なんて言えばいいのか……、慢性アレルギー性鼻炎って、何かに鼻が反応して詰まったり、鼻水が出たりする病気なんです。突然、クシャミが出る時もあります」

「ほう？」

「別にヤバイ……うつるとかアヤシイ変な病気じゃ全然ないんですけど、何かに反応して鼻が詰まるんで、なかなか治らないというか、そんな病気で……」

私は鼻にあてていた右手を下ろし、手にしているグラスに添えた。「だけど異世界トリエスに来ても何かに反応しているみたいなんで、やっぱりスギ花粉じゃありませんでした。化学物質でもないみたいです。陛下の部屋や珍獣部屋で動物を飼っていないから毛でも無さそうだし、埃かなあ……」

「埃？」

「はい。あ、でも陛下の部屋って、毎日、掃除が入っているんですよ？」

「そうだな、一応」

「ですよー、と言いながら私がまたグラスに口をつけようとするのと、陛下がサイドテーブルにある小さな引き出しからハンカチらしき布を数枚取り出した。

「使え。いつもこの中に入っている。鼻をかみたい時はこの中の物を使っている。ああ、使用済みの物は戻すな、小娘。全て捨てる。

捨てる場合はこの中だ」

言うておかないとお前は戻しそうだ、と言いながら、陛下はサイドテーブルの下の方の縦に細長い小振りの扉を開けた。

彼の方へ少し身を乗り出して見てみると、成程、扉の中にはゴミ箱らしき物が備えてある。

「判りました」

返事をする、陛下が私の膝の上にハンカチらしき物を放るように乗せた。

私は乗せられた其れをなんとはなしに見て、ふと地下での事を思い出す。

「そういえばさ、陛下」

「なんだ」

「秘密の小部屋でね、」

「ああ」

「陛下つてば、私の口、押さえたじゃないですか。私の妄想を止めようとして」

陛下が僅かに首を傾げた。

彼の黄金の髪が煌めきながら横に流れる。

「押さえたな、そういえば。それが？」

「あれ、私には二度としないでください」

私の言いたい事が読めないからか、陛下が訝しそうな顔をした。

「何故？」

「死んじやいます、私。慢性アレルギー性鼻炎持ちが口を塞がれるつて事は、死を意味します。鼻が詰まっている場合が多いのに、口を塞がれたら、どうやって息を吸うんですか？」

私の言葉に陛下が一瞬だけ黙した。

「……確かに」

「私ね、誘拐とかされたら、騒がないから口だけは塞がないでっってお願ひしないといけない人間なんです。息が吸えなくて、すぐ死んじゃうから」

テレビの刑事ドラマで被害者が誘拐されるシーンを脳裏に思い浮かべながら言うと、陛下は腑に落ちないといった様子を見せた。

「……本末転倒だろう、それは」

「でも死ぬよりはいいでしょ？」

「死んだ方がいいと思う場合もあるのでは？」

「それは誘拐の末、輪姦強姦という意味ですか？」

「さあ、それは人それぞれだからな。」

それより、そんなに

鼻が悪いのなら医者にでも診せてみるか？ お前のような症状を耳

にした事が無いから期待は出来ないだろうが」

「うーん……とりあえず診てもらおうかなあ。薬とかあれば欲しいし……点鼻薬は無いんでしょうけど。……でも本当に何に反応してるんだろう？ 参ったなあ。日本に居た頃、何度か血液検査してもらったんですけど、原因が判らなかつたんですよ。埃の項目も特に反応していなかつたし」

「血液検査？」

「えっと、血を抜いて、どの物質に鼻が反応してしまっているのか調べるんです」

私の言葉に陛下が目を細めた。

「一般的な検査なのか？」

「え、はい、一般的ですよ。庶民な私でも気軽に受けられる検査です」

勿論パパの扶養に入っているから、保険もきいてるしね？

私はグラスを左手に持ったまま、右手で陛下から渡されたハンカチらしき物で鼻を拭いた。

渡された布は流石王様用なのか、肌触りが良く、仄かに花の香りがする。正直、ちょっと使い捨てにするには勿体無さ過ぎる代物だ。「先程言っていた精子ばんくといい、進んでいるようだ。お前の国、世界は」

陛下が私に手を差し出した。

どうやら拭いた物を寄こせと言っているようだ。

鼻を拭いた物を一国の国王陛下に渡すのもどうなの？と思わなくもなかったが、拭いた箇所を内側にして、私は彼の手に乗せた。

陛下がサイドテーブル備え付けのゴミ箱にそれを放る。

「うーん……こういう事を言つと、きつとこの世界の人は気分が悪くなつちゃうかもしれないんですけど、」

「なんだ。構わんから言え」

「私が居た世界はですね、」

「ああ」

「トリエスに比べたら……その、結構進んでいると思います。技術とか文明とかそういうのが全般的に」

「そうか」

「あれ、陛下、随分とあっさり受け入れちゃうんですね。……気分が悪くなったりとかしないんですか？ 腹が立つとか、嫌悪感を抱くとか」

私が若干躊躇いがちにそう言うと、陛下が何とでもないといった様子で肩を竦めた。

「いや、別に。ごく短い間だがお前と話をしていて、それは何となく判っていた」

「やや、陛下つてば、やっぱり天才なんですね」

陛下が邪魔そうに髪を掻きあげながら、不本意そうな表情をする。「何度も言うが天才ではないと言っている。小娘、」

「はい」

「その事はあまり他の者には言っな。お前の危惧する通りの反応をする者は必ず居るだろう」

陛下の言葉に私は素直に納得する。彼の言っている事は至極当然であると言えるからだ。

「はい、そうします」

私の返事に陛下は軽く頷くと、彼は手を伸ばし、寝台の上部から垂れ下がっているビロード地っぱい布を少し横に避けて何かをした。

「……………」

「……………」

「……………何してるんですか？」

「ああ、呼び鈴を鳴らしている」

「え」

「そろそろ起きた方がいいだろう？ 多分夕刻だろうと思うが、いい加減、何かを腹に入れたいしな。昨夜は入浴もしていないし。…

……………散々だな、本当に」

「いや、そうじゃなくて」

「なんだ」

「いやいや、普通、呼び鈴といったら物凄く偏見かもしれないんですけど、ハンドベルみたいなものじゃないんですか？ 手で陶器がガラス製の鈴みたいなのをチリチリ鳴らすんです。え、どうなってるんですか？ 陛下っては何をしたの？」

私の頭に思い浮かぶのは、勿論繊細な細工が施されているハンドベルサイズの呼び鈴だよ！ よく映画やマンガでお姫様や貴族が鳴らしているよね?! 使用人を呼ぶためにチリチリと優雅にさ！

陛下が私の言葉にビロード地の布を大きく避けた。

そして私に見てみれば？といった様子で、顎でその場所を指し示す。

私はベッドの上を膝で這うように少しだけ移動し、指し示された方向を覗き込んだ。

見ると、直径一センチくらいの太さの黄金で出来た棒が天井へと繋がっている。棒の先 たぶん手で持つ部分だろうと思われる箇所は、少し太めに作ってあって、宝石らしき石が何個も嵌め込まれていた。

「……………」

「……………」

「……………これが呼び鈴ですか？」

「ああ。作らせた。お前が何を言っているのかは判る。普通はそれだ。これは天井に這わせて外へ繋がっている。軽く回せば控えている者に聞こえるという単純な物だ」

「え、何でこれ？」

「嫌だろう？」

「何がですか？」

陛下がビロード地の布から手を離れた。

「お前が言っている呼び鈴ではな、小娘。音の聞こえる範囲がかなり狭い。そうするとだな、」

言って陛下は嫌そうに廊下側の扉の方へと視線を向けた。

「あの扉のすぐ傍で使用人らが、それこそ何人も控える事になるんだ。耳を澄ませてな」

「……………」
「護衛や衛兵は仕方ないとしても、常に音を拾われるというのは、あまり気分の良いものではないぞ？」

「……確かに。プライバシーの侵害ですよね」

「ぶらっぱしー？」

「えっと……他人の干渉を許さない、各個人の私生活上の自由という意味ですかね……………」

「それだな。さて、そろそろ来るぞ」

陛下がそう予言して私の体内時計で約一分。

廊下側の扉の向こう側に複数の人の気配がし出して、扉が数度叩かれた。

それから更に三十秒。

陛下は特に返事をしなかったが、扉が静かに開かれる。

薄暗かった陛下の部屋に、廊下から眩しいくらいの光が入ってきた。

それに陛下と私は同時に目を細める。

「失礼致します、陛下」

まず最初に入室してきたのは、私よりも黒い髪をキツチリと結いあげている三十代前半と思いき、なかなか綺麗な感じの女性だった。彼女は陛下に礼を取ると、顔を上げ、此方の方へと視線を向ける。一瞬だけ彼女は、私の方を見て険しい顔をした。しかしそれは本当に一瞬だけで、直ぐに見本のような美しい笑みを作る。

「明りを入れてもようございますか、陛下」

「ああ」

彼女の丁重で柔らかい声音に、陛下は愛想の『あ』の字もない様子で返した。

返しながら彼は、何故か私の背を数回軽く叩く。それに疑問の視線を投げたが、陛下は此方を見ようとはせず、そうこうしているう

ちに、廊下側の扉からワラワラと他の侍女らが入室してきた。

後から入ってきた侍女らもやはり一度陛下に礼を取り、それから部屋中に明りを灯しだした。部屋が一気に明るくなる。

後から入室してきた侍女らは二十四人。最初の彼女と合わせて二十五人。

昨日も今朝も多いなあとは思っていたが、今は一段と人数が増えている。

国王陛下ともなると、こんなにも多くの侍女がつくのかと半ば呆れつつ、私がぼけっとしてしていると、陛下が淡々とした様子で彼女らに指示を出した。

「着替えと食事の用意を」

「畏まりました」

「それと、」

「はい」

「リーザを此処に。小娘の世話はあれに任せている」

陛下の言葉に、最初に入室してきた彼女が少しかだけ沈黙した。

「……………畏まりました」

「言っておく事がある」

「何でございましょう、陛下」

「これからは呼んだ場合、かならずリーザにも知らせろ。理由は小娘が居るからだ」

「……………畏まりました」

陛下はあくまで淡々とした様子で言うと、私が手にしていた飲みかけのグラスを取り上げた。

そして残っていた水を一気に飲み干すと、サイドテーブルに空いたグラスを戻す。

そういえば陛下も地下に落ちる直前から何も飲んでいないよね、ごめん、早くグラスを返さないで、陛下も喉が渴いていたんだよね、といった感じで私が心の中で彼に謝罪をしていると、そんな彼の行動に部屋に居た侍女らが一斉に固まった。

なぜ彼女らが固まるのかが判らなくて私が首を傾げると、陛下が形の良い眉をひそめた。

「何をしている。早くしろ」

「も、申し訳ございません！」

「失礼致しました、陛下！」

彼の不機嫌そうな声に、陛下付きの侍女らが慌ただしく動きだした。

ある者は部屋を退出し、ある者は残りの明りを灯し、またある者は遮光の為に引いていたのである。カーテンを開ける。

殆どの侍女らがそのように与えられた役割をこなしている中、うち数人が動きながらも様子がおかしいのに私は気がついてしまった。これには溜息をつかざるを得ない。

確か陛下は地下に落ちる前、『あれらはお前に適していない』と言った。

彼は知っていたのだろうか？

私がリーザを付けてもらったのは異世界トリエスに来て直ぐ。

彼がリーザをつけると言ったのは、私が陛下の前に現れて直ぐだ。彼は食事をする為の部屋からの去り際、ヘロルドさんに指示を出したのだ。

判らない。

そもそもトリエスでの考え方とか、王城での考え方とか、私にはさっぱり判らないのだ。

私が疑問に思う事は、陛下なら当然予想のつく範囲内なのかもしれない。

むしろその方が比較にならないほど高いと言えるだろう。

私は再度溜息をつく。

陛下付きの侍女の数人は私に敵意を抱いている。

どうも注意を向けなければならぬ先は、後宮に住まう人達だけでは無い模様だ。

そんなふうな考えの淵に沈んでいた私は気づかなかった。

宝石のように綺麗な紫の瞳で、陛下が冷酷ともとれる様子で私を見ていた事を。

陛下が侍女らに指示を出して少しして。

陛下はベッドの淵に腰をかけていて、私も彼の近くに何となく座っていると、既に見知った顔がようやく部屋へと入ってきた。ディルクさんとガイドさんだ。

彼らは私たちを見て、軽く頭を下げて近づいてくる。

ディルクさんと目が合うと、彼は私に素朴な感じのする笑みを浮かべてくれた。

ディルクさんの頭上にはウオちゃんが居て、ガイドさんは手にお笑い番組でよく上から落ちて来るサイズの盥（たらい）を持っている。

勿論、盥といっても材質は銀のようで、可愛らしい花と蔦の模様が緻密にあしらわれていた。

「随分とお休みになられましたね。もう夕刻というには遅い時間です」

「そうか。それよりガイドの持っているものは何だ？ 何

故、この部屋に持つてくる」

陛下が嫌そうな声を出した。

問いかけてはいるが、彼はきつとあの天才的な頭脳で答えは疾うに導き出しているはずだ。

なにせ私でも見て直ぐ判った代物だ。

「ご覧の通りですよ」

「きゅんぴ」

「っ！」

ディルクさんが聞くまでもないでしょう？といった感じで答えると、陛下が鼻の頭に皺を寄せた。

「……ふざけるな」

言つて、ディルクさんを見ていた陛下が、つとその先を横に変える。

彼はグイードさんに視線を向けたのだ。

「何？」

「……………」

「……余がこの世の何よりも両生類が嫌いだとお前は知っているだろっ？」

「……………」

「何を言っているんだ、グイード！」

「……………」

「何故？！ 何故、この部屋で飼う事が決定しているんだ、お前の中で！」

「……………」

「その理由は納得しかねる！」

「……………」

「何が？」

「……………」

「嫌いだと言っているだろうっ！」

「……………」

誰も理解出来ない会話が終了したのかどうなのか、グイードさんが盥を床に対して水平に持ち直し、珍獣部屋へ続く黄金の格子の方へとマイペースな様子で歩き出した。

陛下が始めて見る焦り具合で、ベッドから腰を上げ、そんなグイードさんを追いかける。

「待て、グイード！ 誰が余の部屋で飼う事を許可した？！」

「……………」

「した記憶は全く無いが?!」

「……………」

「いつ? 何処でだ?!」

「……………」

「拒否権は無いのか、余に!」

グイードさんが盥を格子扉の横に置いた。

それを目に留め、陛下はグイードさんを追いかけるのを止める。

「……………」

「……………判った」

彼はその場に立ったまま、両手に拳を握って何かを耐えていた。

その様子があまりに哀れで、私は思わず笑ってしまう。

「陛下、負けましたね」

よっ、元祖ひ弱っ子!

「……………何故そこでお前が笑うんだ?」

「え、おかしいからに決まってるじゃないですか」

当然ね?と、ぷはっ、と噴き出しながら言うと、陛下が額に手を

あてた。

「……………やってられない。おい」

陛下が額にあてた手を下ろし、近くで何やら作業をしていた焦茶

色の髪の侍女に声をかけた。

声をかけられた侍女は直ぐさまその手を止め、陛下の方へと向く。

「何でございましょう、陛下」

陛下が忌々しそうに息を吐いた。

「グイードが水を用意して欲しいらしい。あの入れ物に七割ほど入

れて欲しいと」

指示を受けて、侍女が驚いたように目を見開いた。

まあ多分『いつそんな話をしたんだよ、お前らさ?』といった驚

きなんだろうけど、流石は侍女を職業としているのか、彼女は即座

に表情を改めた。

「直ぐにお持ち致します」

焦茶色の髪の侍女は腰を落として陛下に礼を取った。そして彼女は数歩ほど陛下の方を向きながら後退すると、廊下側の扉へと向かう。

途中、私が腰をかけている陛下のベッドの近くを通り際、焦茶色の髪の侍女は私に微笑みを浮かべて「失礼いたします」と陛下にするのと同様、腰を落として礼を取ってくれた。

ああ、彼女は大丈夫そう。

そう思っただけでも日本人の特技『笑顔で会釈』を実行すると、焦茶色の髪の侍女はふんわりとした笑みを浮かべてくれる。

いい人そうだな、と彼女が退出するのを見送ってから、近くで腕を組んで、まるで私の傍に控えているみたいなディルクさんに声をかけた。

「ディルクさん」

「何でしょう？」

ディルクさんは陛下とグイードさんから私の方へと視線の先を変えた。

彼の頭上のウオちゃんは、相も変わらず陛下を見ているようだ。

ウオちゃんの小さな目の先の陛下は、眉間に皺を寄せながらグイードさんを見ていて、グイードさんは、ハンカチらしき布を懐から取り出して、銀製の盥を一生懸命磨きだしている。

もしグイードさんが日本に住む事があつたら、彼の職業はペットショップの店員か、水族館か動物園に決まりだろう。絶対天職のはずだ。

「陛下つてば、動物には結構甘そうですよね」

「動物？ ウオちゃんの事ですか？」

「いえ？ 違いますよ。グイードさんの事です」

「は？」

「グイードさん、陛下にとって忠犬、ワンコじゃないですか」

「……………」

「だから陛下、性格は良くないですけど、国王を辞めたら男娼の館

に就職決定ですよな」

「いや、珍獣様、話が繋がっていませんよね？ 俺の気のせいではないはずですよ」

デイルクさんが、むむむっといった感じで私の言葉にツツコミを入れた時、リーザと妖精二人が陛下の部屋に到着した。

即座に目が合い、私が彼女たちにはよの挨拶をと口を開こうとすると、陛下付きの侍女の数人 私にどうも好意的ではない侍女らが、部屋に入ってきたリーザたちを一瞥した。

別に睨むとかガンを飛ばしている訳ではなかったけれど、とても感じが悪いのは確かだった。

なんだか人間関係も複雑そうだなと思っていると、リーザがそんな彼女らを全く気にしない様子で私に近づき、優しそうな微笑みを浮かべてくれた。

「おはようございます、珍獣様。よくお休みになりましたか？」

「うん、よく寝れた」

彼女の柔らかい声に、私は自然に笑みがこぼれる。

それを見てリーザは「ようございました」と目を細めて再度微笑むと、手に持っていた服を私に見せるように持ち上げた。

「お着替えをお持ち致しました。お食事を召しあがられる前に、お着替えをなされませ。今のお召し物はいあまりでございますから」

「あんまり？ そうかな？」

確かに切り取りまくったナイトドレスにカボチャパンツ姿だけど、日本風に言い直せば、ミニミニすけすけキャミソールと短パン姿ではないんだけどね？

別段おかしい格好ではないはずだ。家着としては十分な服装だと私は思っている。

ただまあ、ここが日本の我が家ではなく、異世界トリエス王国のそれも国王の部屋であるのが問題なのかもしれないけど。

TPOは大切だって日本でもよく言われているしね？

「じゃあ、着替えようかな」

言つて私がベッドから降り、先程、陛下が形良く結んでくれたリボンを解こうと手に掛けると、リーザが持っていた服を下に落とし、力の抜けたような声を出しながら私の手を押さえた。

「お……お待ちください、珍獣様」

「リーザ？」

止められたのを不思議に思つて首を傾げると、部屋に居る全員が此方を注視しているのに私は気づく。

「あれ、皆どうしたんですか？ 何で皆して私を見て？」

そんな当然の私の疑問に応えたのは、グイードさんを見ていたはずの陛下だった。

彼は此方の方へ、ずんずんといった感じで近づいてくると、軽く手を振つてリーザを下がらせる。

彼女の手が離れたので、では続きをば、とりボンを引っ張ろうとすると、今度は陛下が私の手を押さえた。

「ちよつと陛下！ 手が邪魔なんですけどー！」

「邪魔をしているのだから当たり前だが？」

「え、何で？」

「何で？」

陛下の黄金の眉が不愉快そうに寄つた。

「余はな、小娘、言つたよな？」

「何をですか？」

「恥じらいを持って。隠す事くらいはしろと。此処は余の部屋で、居るのは侍女だけではないが？」

「あー…そういう事か。でもさあ、」

「でも何だ」

陛下が私の手を強制的にリボンから外した。

手を放すと、彼は右手を腰にあて、澄んだ紫の瞳で私を見下ろす。その様子は何だか小煩い教師のようで、正直ウザかった。

「此処が陛下の部屋だつてというのは今更だし、侍女だけではないって言われても、居るのは陛下とデイルクさんとグイードさんだけじ

「やないですか」

「だけじゃないかだと？」

「はい。ディルクさんは私の護衛なんですよね？」

「そうだな？」

「グイードさんは陛下のワンコだし、」

「……わんこ？」

「陛下に至っては今更ですよね？」

「……」

「……あれ、今更とは、陛下」

ディルクさんが腕を組んだまま眉をひそめて陛下に聞くと、彼は苦々しいものを声に滲ませながら拒絶を表した。

「お前は口を挟むな、ディルク」

「あ、ディルクさん、陛下はもうね、私の胸をじかに見てるんですよ。見てるところか舐めました！」

「は？」

「小娘！」

陛下が私の言葉を遮るように声を荒げたが、勿論、私は止めてあげる気なんて更々無い。

だってね？

こういう事はさ、言っただけにアピールしておかないとき、私ってば、いつまでたっても誰にも見向きもされない貧乳女のレッテルを貼られたままになっちゃうじゃない？ だからさ、声を大にして言っておかないと、なんだよね！

不名誉なレッテルをベリンと剥がし、そろそろ屈辱的汚名をこの辺で晴らしておかないとき、いろいろと不味いんだよ！ 念願の名誉回復だよ！ 人生十八年目でようやくね！

この際、真実なんてどうでもいいんだよね！ 私にもようやく男の気配がつてのを匂わせる事が大切なの！ 重要なんだよ！ 似非既成事実万歳だよ！ 必要とあれば想像妊娠だとしてやるんだから！

よく言うじゃない？ 処女は面倒だと思つ男の人は結構いるつて！
でもつて、男の気配が無い女は更に面倒に感じるとか、逆に警戒
するとかさ！

嫌なんだよ、そういうの！ この際、陛下でも誰でもいいから男
の気配を漂わせておけばさ、いざナイスガイが目の前に現れた時、
要らない警戒はされないでしょ？！ それより自分の気になる女に
他の男の気配がしてたらさ、狩人属性発動の、略奪愛フラグが発生
するかもしれないじゃん！

きゃっ、略奪愛！ 最高！ 私には縁遠い言葉だと思つていたけ
れど、もしかしたら立ち回り次第では発生するかもですよ、全国の
永遠なる乙女達よ！

誰か地獄の極悪大魔王から私を略奪してよ！ 塔に閉じ込められ
たお姫様を救うようにね！

ややっ、このシチュエーションもなかなかオイシイよね！

数少ないチャンスは取り漏らさずにゲットする、これ基本中の基
本だよ！

略奪愛構想に大興奮する気持ちを頑張つて抑えながら、私はディルクさんに教えてあげる為に彼の上腕二頭筋付近をパスパスと叩いた。

「珍獣様？」

「ねねね、ディルクさん、知りたいですか？」

それはもう詳しくね？ うふっ！

私の言葉にディルクさんが素直に頷いた。

「ええ、なんとなく興味が」

野次馬根性みたいでアレなんですけど、とディルクさんは戯けたように片眉を態（わざ）と上げて見せた。

「ふざけるな！」

陛下が更に声を荒げ、私を黙らせようと捕獲に動いたので、私はディルクさんの腕を引き、陛下の居る方向とは反対側、珍獣部屋の対極側にある王妃の部屋に向かって走り出した。

陛下の部屋は、走っても直ぐに端に辿り着かないくらいには横に広い。

走りながら大人しく腕を引かれてついてくるディルクさんに、私は大きな声で教えてあげた。

「陛下ね、」

「はい」

「私のナイトドレスのリボンを口で解いてですね、」

「……は？」

「私の美乳にチューして舐めたんです！」

「……………え、それ、本当ですか？ 本気で事実？」

「はい！ 嘘は全くついてないですよ！ それにですね、」

「小娘っ、いい加減にしろ！ デイルク、止まれ！ 何を素直に聞いているんだ、お前は！」

陛下が後ろから追ってきていた。

しっかし、広い。広すぎるよ、この部屋は！

これなら侍女が二十五人も控えていても当然なのかもしれないな、なんて思いながら、私は間を開けずに続きをデイルクさんに教えてあげる。

早く言わないと流石に陛下に捕獲されそうだからだ。

「陛下ね、私のちっさいお豆に、ハッキリ言っちゃうと乳首をですね、口に含んだんです！」

「……………」

「小娘！ お前は、よくもそういう事をベラベラと！」

「しかも吸ったんですよ！ 私、はじめて胸で“感じる”っていうのを経験しました！」

私ってば、さっきので大人の階段を三段くらいは上がったよね！

凄いやね、わ・た・し！

早く千夏ちゃんレベルにまで追いつきたいな！。

あ、でも彼氏を作っちゃいけないって、本当にいつまでなんだろう？

こうなったら、さっさと解禁にして欲しいよね！ だって私には略奪愛が待っているんだよ！

例えばさ、パーシヴァル様級のスペシャルイケメンな王子様がね、私が捕えられている塔の最上階に、火を噴きまくりなドラゴンを倒して登ってくるの！

それでね？

『貴女を救いに来た。さあ、この手を早く』

そう言って、救いにくる為に負ってしまった傷を気にせずに、優

しい微笑みを浮かべながら私に手を差し伸べてくれるの。

私ってば健気な乙女だから、本当は嬉しくって、その手を取りたくって仕方がないのに、首をぶんぶん可愛らしく左右に振って拒否しちゃうんだよね！

『駄目です。私は行けません』

『何故？』

『私がこの塔から出たら、魔王が貴方の国に攻め込むでしょう。彼は必ずそうします。だって魔王は私に執着しているんです。貴方と貴方の国にご迷惑は』

『迷惑など！ 貴女は私を信じてこの手を取って下さればよいのです！ それに私と国の事は大丈夫。魔王などに負けませんよ』

そう言ってるね？

王子様ってば安心させるように柔らかく微笑んで、私をキュッと抱きしめてくれるの！

私ってば純真可憐で繊細な麗しの乙女だからさ、頬をピンクに染めて恥ずかしがっちゃったりしてさ！

王子様、そんな私を見て、もう耐えられなくてさ！

私の顎を捉えて、上に持ち上げて、王子様の形の良い唇がゆっくりときさ！

くっくくくつ！ 最っ高！ なになに、この萌え展開！ ちょっと略奪愛とは微妙に違っちゃったけど、いいよね、コレも！

そんなウキウキ妄想を脳内で展開していると、思いつきり腕を後ろに引かれた。

王妃の部屋への扉にあと一步といったところだった。

「うわっ！」

「小娘っ、お前は余計な事を恥ずかし気もなく人前で！ 信じられん！ どうしても理解出来ない！ お前の頭の中だけは！」

陛下がデイルクさんから私を引き剥がし、黙らせる為に首をぎりぎりと絞めてきた。

その締め方っていったら閉口もんだよ！

陛下つてば、後ろから私の首に右腕を回して左上腕を掴み、左手で私の後頭部を押しつけて絞めてるんだよ！

つかさ、これって裸絞めだよな？！

もしかしなくても立派な格闘技の技だよな？！

しかも貴様、地下で首をホルルドした時よりも、明らかに絞め方がグレードアップしてるよな？！

私の気のせいじゃないはずだ！ 貴様！ 純真可憐で繊細な麗しの乙女に向かつてそんな技を仕掛けるなんて！ 百六十七億八千四十三万年飛んで三日早い！

アイアンクローといい貴様は一体何者だよ！ 総合格闘技にでも転向して、トリエスの王様なんて辞めてしまえ！ 今すぐにね！

私は首を絞めあげられて一気に空気が吸えなくなるのに、瞬時に腹が立って歯を食いしばった。

この男、どうしてくれよう……。

視界の端に映るデイルクさんは、なにやら陛下を宥めている模様だ。

デイルクさん、甘いよ！ こういう男にはね、制裁が必要なんだよ！

思いつきりね！

私は目を瞑り、精神統一に入った。

回りの音がすーっと小さくなっていき、代わりに妹の花依（はない）に特訓された事が記憶に蘇ってくる。

昨年の花火大会の事だ。

千夏ちゃんは胸を、私はお尻を変質者に触られた事があった。

その時、お兄ちゃんも加藤も一緒に居て変質者を追いかけてくれたから、それ以上の被害は特に無かったんだけど、後にそれを知った花依が怒り狂ってしまって、お兄ちゃんを変質者に見立てて教えられたのは。

『いい？ お姉ちゃん！ 変態に遭遇したら私がこれから教える事を速やかに実行するんだよ！ お兄ちゃん、其処に立って』

『え？ 嫌だよ……花依は将来格闘家になるのが夢な人間じゃん。お兄ちゃん、痛い嫌いだし……』

『妹の言う事が聞けないの？』

『……すみませんでした』

『じゃ、お姉ちゃん、いい？ まずね、女性が男性に抵抗する場合は、体の硬い所を使う事』

『硬いところ？』

『そう、肘とか膝とか頭とかね。で、グーは使わない。逆にこっちが手を痛めちゃうから。そして抵抗、反撃は一撃必殺。これは重要だよ。一発で仕留めないと駄目。それを外したら、更なる悲劇が待っていると思っていよいよ。一撃で仕留め、相手が怯んだ隙に逃げる。女の力では所詮、本気の男には敵わないからね。怯まずに攻撃、躊躇わずに逃走』

『判った』

『じゃ、まずはね、基本中の基本。後ろから腕で首を絞め上げられた場合ね。お兄ちゃん、背後から私の首に腕を回してよ。あ

あ、本気で絞めたら後で殺すから』

『殺す、ね……判りました。』

はあ……どうして漫画のよう

な可愛らしい妹がウチには居ないんだろう。一度でいいから言われたいんだよ、かわいい声で“私のお兄ちゃん大好き”って』

『何か言った？ 露出狂キモ兄貴。花依様に何か文句でもあるっの？』

『いえ、滅相もございません。お願いだからドスキかせないで？』

怖すぎるからね？ ……これでいい？』

『よろしい！ じゃあ、お姉ちゃん、こういった背後から腕で首を絞め上げられた場合はね？』

『うん』

『幾つか方法はあるんだけど、まあ比較的簡単確実なのを教えておくよ。花依スペシャル金玉潰しね』

『……やっぱりそうくるんだなあ』

『うるせえよ、露出狂！ 黙りやがれ！ で、お姉ちゃん、花依スベシャル金玉潰しを教える前にワンポイントアドバイス』

『ワンポイントアドバイス？』

『そう。竿は相手の収縮膨張具合によつて効かない場合があるから狙わない。狙うは金玉のみだよ！ いい？ 金玉オンリーね！』

『判った。金玉しか狙わない！』

『よし！ じゃあ、背後から首を絞めてくる変態には、今から教える事をそのまま実行して』

私はあの時に花依に教えられた事を陛下に実行する為に、瞑つていた目を開けた。

視界に入るのはディルクさんと陛下の腕。

ディルクさんは呆れたような顔で陛下を未だ宥めて続けている。

私は首を絞められながらも僅かに吸える量の 陛下は別に私

を殺すつもりで絞めている訳ではないから、ちよつとは吸えるよ、

当然ね 空気を肺に入れた。

花依の声が脳裏に響く。

『まず後ろの変態の股間を利き手、お姉ちゃんは右手だね、右手で探して。この時点で相手に気づかれないでね』

私は陛下の股間の位置を彼の体にあたる背中で予測をつけながら、右手をそつと動かした。

指にちよこんと彼の左寄りの竿が触れる。

首の絞まり度合いも、ディルクさんの様子も変化は無いから、まだ気づかれてはいないようだ。

とりあえず此処までは成功したようで、私はほつとする。

だって、やるからには完璧を目指したいからね！ いえーい！

『股間を発見したら変態の金玉を下から思いつきギリギリギリギリ握って。潰してもいいよ、勿論ね。金玉粉碎は未来の日本格闘技界女王である花依様が許す！ いい？ 金玉だよ、竿じゃないからね！』

判ったよ、花依！ お姉ちゃん、頑張る！

私はふんと肺に入っていた空気を鼻から出すと、下から素早く陛下の金玉に右手を向かわせた。そして。

「っ！ 小娘っ、またか！ お前は！ 放……いつ」

「ち、珍獣様、それはちよつと待って下さい！ いや、本当に！」
陛下に掛けられていた裸絞めが、ふと緩んだ。

聞こえてくるのは、陛下の苦痛の声とディルクさんの驚愕の声で。

『金玉をギリギリ握ると変態は手を緩めるからさ、あとは接近したまま変態の腹部に全力で肘を叩きつける！ 後方左肘打ちね！ 叩きつけたら変態の手を振り解いて逃走あるのみ！ あ、でもね、もしも逃走途中で長い棒や石でも見つけたら、余裕があった場合のみ相手の頭部にでも叩きつけたらいいよ！ 日本格闘技界女王花依様が許可するから！ 流血させてやれ！ 報復あるのみだよ！ 変態には完膚無きまでの制裁を！ 目には目を、歯には歯を、不快感には金玉破砕だ！ バーンとね！』

私は花依の教えを忠実に実行する為に、歯を食いしばり、素早く左肘を後方へ、陛下の腹へと叩きつけた。

しかし、渾身の肘打ちに陛下が体を折って呻く事を予想していた私に、信じられない言葉が降ってくる。

「 甘い、小娘」

「え」

私が陛下の声に慌てて振り向くと、紫の瞳が凶悪に変化していて、陛下が口角を上げて超絶美形顔に極悪な笑みを浮かべていた。

腹に肘を叩きつけたのにどうしてと思ひ、急いで視線を彼の腹に向けると、私の肘は陛下の掌にちんまりと治まっている。

「嘘！」

「悪いが現実だ。 さて、どうしてくれようか、小娘。 どうして欲しい？ お前は」

陛下は眉を顰めながら金玉を握っていた私の手をパシッと横に払い、一息つけると、私の後頭部に手を持っていった。

そして髪をわしつと握ると、下に引つ張り、私の顔を強制的に上に向かせる。

力の加減はしているみたいで痛くはなかったけれど、強引に合わせられた彼の超絶美形顔は、思わず聖水を振りかけたくなる程の邪悪っぷりだった。なまじ綺麗なだけに迫力度合いは半端ない。凄絶といつていい程で、その様相はまるで。

「ラ……ラスボス最終形態」

「らすぼす最終形態？」

あまり良い事を言われていないのを悟っているのか、陛下の凶悪な紫の瞳に愉悦の色が浮かんだ。

何でそこで愉悦？

「余はな、小娘。あまり寛大な人間ではないんだ。残念ながらも心が狭いんだ。物凄く」

「……え？ 陛下つてば、突然何を？」

なになに、この男は一体全体なにを言い出してるの？

ラスボス最終形態モード発動中の陛下をきよとんと見ていると、彼は私の額に自分のそれをコツンと付けた。

凶悪で極悪な紫の瞳と私の黒い瞳との距離が数センチにまで迫る。陛下が冷笑した。

「それにな？ お前の飼い主としては、やはりきちんと躰をしなくてはいけないのだなと痛感した。 だろう？ 珍獣」

「お……」

ややっ、前回陛下に珍獣って呼ばれたのはいつだったっけ？

えっと、えっと…… 思い出せない！ 急には思い出せないよ！

まだトリエスに来てちよっとしか経っていないけど、内容が半端なく濃いなだね！ 正直、私の脳ミソじゃ追いつかないんだよ！

あのさ、すつごく不吉な予感がするんだけど、気のせいかな？！ ビリビリするんだけど大丈夫なのかな？！ 何だかヤバくない？

！ 流れがさ！

陛下の顔からすつと表情が消えた。

彼は額を私から離し、髪からも手を離すと、少々離れてしまった場所に居るリーザに聞こえるように指示を出す。

「リーザ、用意した小娘の食事は下げる。一食抜く」
「え」

その陛下の言葉に私は仰天だよ！

ぶっちゃけ、これ以上の驚倒は無いよ？！

あまりに予想外な彼の言葉に私はとにかく驚いてしまつて、陛下に縋ろうと両手を伸ばしたけれど、彼はそれをスルリと逃れ、リーザや侍女らが居る方へ、用意されだした食事がある方へと足を進めた。

そんな陛下を私は彼の歩調に合わせて追いかける。

「嫌つ、陛下！」

食事を抜くなんて冗談じゃないよ？！ 私、飢餓モード発動寸前なんだよ？！

「嫌も何も。お前は丁度減量する予定なんだ。食事を抜くのは効率的でよいのでは？ おい、もう着替えはいい。今すぐ食事にする」

どうせこの後、入浴するんだしな、と陛下は私に背中を向けたままスタスタと長い足を動かして、昨日一緒に朝食をとった小振りの食卓へと向かった。

「ねね、陛下！ 嫌だ！ 嫌だつてば！ へ・い・か！ 食事を抜くなんて酷いこと言わないで？ 私、オナカ空いてるんですよ！ ペコペコなんです！ もうオナカと背中がくっついてるんですよ！ 今日朝も昼も食べてないんですつてば！」

「知るか」

私の必死の訴えを陛下は無情にも一言で切り捨てる。

リーザに出した指示を撤回して欲しくて、私は彼の腕に縋った。出会ってから常に身に纏っていた高価そうな上着の存在が無い陛

下の腕は、薄い布地を通して私に彼の体温を伝える。

陛下の腕は心地のよい温かさだった。

「放せ」

「は・な・し・ま・せんっ！ ねえ、陛下、私ね？ 睡眠よりエロより妄想より三度の食事が、ゴハンを食べる事が大好きなんです！ 人生食欲最優先なんですよ！ 食べる為に生きていると言っても過言では無いと断言出来ます！ だからね、へ・い・か！ いま言ったこと撤回して下さい！」

「……………」

「ね？ ね？」

「……………」

「ねえ、お願いします、陛下！」

「……………」

「む、無視しないで下さいよ！」

「放せ、席に着きたいんだが？」

「嫌だつてば！」

私が陛下の腕に縋りつきながら懇願している間に、豪華だが国王の部屋には小振りとも思えるサイズの食卓に陛下と私は辿り着いてしまった。

食卓の上には売り飛ばせば暫くは食い繋いでいけそうな食器の数々が置かれていて、これを日本に持って帰る事ができたなら、ママが大喜びで質に流すだろう物ばかりだ。

陛下が私の腕に手を添えて、縋りつかれていた腕を引っこ抜いた。

「リーザ、食事の邪魔だ。向こうへ連れて行け」

「……………」

言いながら席に着いた陛下にリーザは困ったような顔を向けながら、私のもとへと静かに近づいてきた。

リーザが私の両腕にそつと手を添える。

「……………珍獣様」

「……………ごはん……………」

私は添えられた手を気にせず、着席した陛下の首に腕を回した。彼の黄金の髪に顔を埋めて、しがみついてみる。

私なりの精一杯な抵抗の仕方だったが、陛下は特に気にしないと、いった素振り、フルート型のシャンパングラスらしき物を手にとった。

食前酒といったところだろう。

今回の彼の給仕はヘロルドさんではなく、陛下の部屋に最初に入ってきた濃い黒髪の陛下付きの侍女だった。

彼女は私に視線を向ける事なく、上品な様子で陛下の近くに控えている。

彼の対面の席の近くには妖精二人が控えていて、並べられていた食器を片づけていた。

装飾の施されたキッチンワゴンに次々と戻され、ワゴン上にある私が食べるはずだったであろう料理達は、丸い蓋がしてあって中身は判らない。

陛下の髪に顔をつけながら横目でちらりと妖精らを見ると、彼女たちもリーザと同様、困ったような顔をしていた。

ディルクさんが陛下と私から少し離れた後方に立った。彼は頭上にウオちゃんを乗せたまま、心の底から呆れたような表情をしている。

グイドさんは我関せずな様子で相変わらず盥を磨いているし、残りの陛下付きの侍女らは、廊下側の壁際に一列に並んで控えていた。

陛下は二口ほど食前酒らしき飲み物を口にしてから、近くに控えている黒髪の侍女に視線を向けた。

「いつもの給仕はどうした」

「今日はわたくしが」

「答えになっていないが？」

手にしていたシャンパングラスを食卓に置くと、陛下は若干不愉快そうな音を出した。

「誰か、へロルドを呼べ」

その言葉に廊下側の扉に一番近かった侍女が消える。

黒髪の侍女が一瞬だけ眉をしかめた。

扉近くに控えていた侍女のひとりが消え、扉が閉められると、陛下は一度パンの方へと手を向かわせたが止めた。

黒髪の侍女がスープ・チュリンに似ている容器から陛下の前の皿に中身を取り分ける。

見た感じ、スープは向こうでいうキャベツとベーコン、スライスされたオニオンが少々入ったコンソメスープのようだった。

陛下が私の拘束を物ともせず器用にスープを口に運ぶ。

その動きに空気が流れ、美味しそうな匂いが私の鼻腔をくすぐった。

不思議な事に慢性アレルギー性鼻炎で詰まっていた鼻は、いつの間にか快適なくらいに通っていた。

「……陛下、ごめんなさい」

私は彼の耳の傍で謝罪の言葉を口にした。

謝罪の意を少しでも判ってもらいたくて、陛下の首に回している腕に力を入れる。

「放せ、苦しい」

「……ごめんなさい。ごめんね、陛下。ごめんなさい。もうしません。もう今後、絶対に陛下の金玉をギリギリ握りません。金的攻撃は一切しません。本当にごめんなさい。だから……だから私に夕食を食べさせて下さい。お願い、陛下」

「……………」

「陛下、許して？ 本当にごめんね？ 私、とつてもとつてもオナカが空いてるんです……………」

「しかし、ようやく纏まったものを腹に入れられるな……………長かった」

「陛下あ」

私の全力の謝罪も、陛下は意に介する様子を全く見せなかった。

これ以上口にしたくなかったからか、私が拘束していて飲みにくかったからなのか理由は定かではないが、彼は全てを口にせずスプーンを下げさせた。

陛下がナイフとフォークを手にとる。

次に彼の前に置かれたのは、大きなディナー皿に見栄え良くちよこちよこと盛られた前菜のような料理だった。

昨日の夕食で初めて食べたコース料理と違う内容に、私のオナカが鳴りそうになる。

思わずヨダレも出そうだよ、というか出ちゃったよ！

「陛下……」

私は陛下の首に回している腕の力をそのままに、彼の耳付近にぐりぐりと顔を押し付けた。

ついでに出てしまったヨダレも陛下の黄金の髪で拭いてみる。

ぐりぐりぐり、ふきふきふき。

料理、すごく美味しそうだなー！

いいな、いいな、食べたいな！ すっごく、すっごく食べたいな、私！

だって日本に居た時はテレビで見る事しか叶わなかったような料理達なんだもん！

ちなみに我が家のテレビは、まだ二十一型ブラウン管テレビだからね！ 当然、デジタル放送未対応だから！

ママ、困ってたよ！ 対応テレビを購入するかという事じゃなくて、デジタルテレビチューナーが幾らするかという事をだけどね！
パパめ！ 千夏ちゃんちも加藤んちもエコポイントが始まった時に買ったのに！

「……またこれか。デイルク、最近多くないか、この内容は」

「……いや、そんな事よりも、俺は貴方の凄さに感服しています」

「凄さ？」

「よく食事を続ける気になりますね、その状態で」

俺には出来ません、とデイルクさんが腕を組みながら呆れ入って

いた。

「……お前には判らんだらうよ。とにかく腹が空いているんだ。何食抜いたと思ってる」

またこの野菜が使われているのか、嫌いなのにと陛下は、向こうの世界でいうトマトとチーズを何かのソースであえたサラダと、ホワイトアスパラに生ハムを乗せてパセリを散らせたもの、ザワークラウトに捏ねたジャガイモを焼いたものを乗せた前菜から、チーズと生ハムとジャガイモを抜き取った。

フォークについたパセリを忌々しそうにナイフで取り、トマトを自分から一番遠い位置へと追いやる。

チーズとジャガイモを生ハムで器用にくるくると巻いて、陛下版創作料理を完成させると、彼はそれを半分に切り、口に入れた。

料理人がこれを見たら嘆き悲しむ事は必至だ。

少なくとも三種の料理の味がミックスされてしまっている。

「……不味いな」

当たり前である。

「料理人の腕が落ちたのなら総入替えするかな」

「……それは料理人のせいじゃなくて、陛下の食べ方に問題があると私は思います」

「……」

陛下が無言で前菜の皿を下げさせた。

黒髪の侍女が次の料理の用意を開始する。

陛下がパンに手を伸ばした。

手にとったパンは向こうの世界でいうブルスケッタで、上に赤ピーマンとトマトとハーブとガーリックを混ぜ合わせたものが乗っていたが、彼はそれをトントンと皿の上に落とす。

「……ねえ、陛下、……それ、美味しそうだなあ」

「……」

「……ごめんなさい……本当にごめんなさい……もうしません……もうしませんから……ごはん、食べたいなあ……陛下……」

……私、ごはん食べたいです」

陛下がトマトを嫌いなら、私が陛下の分も食べてあげるからさ？

咀嚼したり飲み込んだりする陛下の動きを顔で感じながら、私が彼に謝り続けていると、ずっと私の腕に両手を添えていたリーザが不憫そうな声で私を援護してくれようとした。

「珍獣様……………陛下、もう十分ご反省なさっておられるようですし、ご用意しても」

「許さん」

リーザが小さく溜息をついた。

「……………珍獣様、あちらへ参りましょう？ 此処におられても仕方がないようでございますし、お飲み物くらいはご用意させて頂きますので……………」

「……………ごはん」

へ・い・か、ご・は・ん、ご・は・ん！

私、飲み物だけじゃ全然足りないよ！ 腹の足しにもならないじゃん、飲み物だけじゃ！

お願いだよ、陛下！ 私にごはんをプリーズ！

「……………珍獣様、さあ、あちらへ……………あら？」

リーザが私の腕に添えていた手を離して、上品な様子を崩さずに屈んだ。

彼女は私の力ボチャパンツを確認するように手をあてる。

「珍獣様、御御足（おみあし）の内側の下着のリボンが解けていらつしゃいますわ。何故このような所が……………申し訳ございません、わたくしの結び方が悪かったようでございます。あちらで結び直しま

「

「あ、それはね、」

「小娘、その件について一言も口にしなければ食事を許すが、どう

する？」

「お」

「……陛下、貴方、一体何をされたんです？　もしかして俺が今、一瞬にして頭に浮かんでしまった事ですかね？」

本当にどうしたんですか貴方は、とデイルクさんが言うと、陛下が手にしていたブルスケッタの土台のパンを放るように皿に戻した。「黙れ、デイルク。　小娘、どうする？　お前には食事をとるといふ選択肢が増えたが？」

陛下がテーブルナプキンで手を軽く拭った。

拭い終わると、彼は首に巻き付けられていた私の腕を力を入れて緩め、超絶美形なキンキラキン顔をこちらに向ける。

至近距離にある澄んだ紫の瞳に私の飢え飢え顔が映り込んだ。

「お前はどうしたい？　口を嚙む事で夕食を得るか、口にして明日の夜まで食事を抜くか？」

「あれ、なんか食事の抜かれる回数が増えてませんか？」

「気のせいだ。　で、お前の返答は？」

「ごはんで！」

勿論私は即答した。

だって悩む事は無いよね？

今すぐの食事が、明日の夜まで食事抜きかだよ？！　比ぶべくもないよ！

確かにさあ、胸のようにアピールして、誰にも見向きもされない貧乳女の不名誉なレッテルを剥がしてさ、屈辱的汚名を晴らす事も大切だよ？　物凄く重要だよ？

胸の事にプラスして、陛下がカボチャパンツのリボンを解いて私の秘密の花園に直接触れた事をさ、大袈裟に捏造してでも皆に大アピールして、これでもかかっていうくらいに駄目押ししてさ、念願の名誉回復したいよ、私だってね？

でもさ、食事の条件となったのは『口を嚙む』だし、いくら名誉回復をしたくても、私の中ではさ、優先順位は食事の方が断然上な

んだよね。

だって別に不名誉なレッテルも屈辱的汚名も今に始まった事じゃないしね？

それに何より今はオナカがペコペコなんだよ！

「陛下、私、言いません！ だから、ごはん食べたいです！」

きつぱりハッキリ言い切り、私が陛下の首から手を引つ込めると、陛下がシャツらしきものの襟元を簡単に整えた。

「そうか。ところで“ごはん”とは食事の事か、小娘」

「え？」

「意味だ。昨日の朝も言っていたが」

「あれ、トリエスでは食事を“ごはん”って言わないんですか？」

「言わないな。食事の事か」

「はい。他に炊いたお米の事を指したりもします。で、それよりへい・か、私つてば、食事をしてもいいんですか？」

「ああ。席に着け。リーザ、用意してやれ」

陛下が目線で対面の席を私に指し示した。

その言葉に私は喜びに尻尾を振って、いそいそと妖精その二が椅子を引いてくれた席につく。

妖精その一が私の前に、一度片付けた皿やらグラスやらを手際良く置きはじめた。

ウキウキモードの私に、ようございましたね、と優しく微笑みながらリーザが濡らした柔らかい布で手を拭ってくれる。日本でいう御絞りの感覚なんだろう。

大人しく手をリーザに差し出しながら、私はある事をふと思い出してしまった。

「あ、陛下」

「なんだ」

陛下は私に応えながら、シャンパングラスに新たに注がれたお酒らしき飲み物を口にしていった。

色は薄い琥珀色で発泡はしていない。

陛下の喉が少し動いていた。

「私つてばね？ 手を洗っていませんでした！ 地下で放尿境界線を引いた後、一度も！」

「こぶっ」

陛下がむせた。

彼は何度か小さく咳をすると、シャンパングラスを食卓に置いた。グラスには二割ほど残っていたが、黒髪の侍女がまた注ごうとするのに、陛下はむせて咳が出てしまうのを形の良い眉をしかめつつも抑え、グラスの上に手を翳した。

「うーん、私、思い付く限りでも、その洗っていない手で陛下の顔も全身も触りまくっていたような？」

少なくとも髪と睫毛と首と手には直接触れたような気がするよ？

「……けほっ……… そうだったな。余も失念していた」

眠すぎて、と陛下はテールナプキンで口を押さえ、控えめに咳込み続けている。ちよびつと気管に入ってしまった模様だ。

「大丈夫ですか、陛下」

そんな陛下にディルクさんが前へ出て、陛下の背を軽く擦った。

リーザに手首まで拭かれながらそんな彼らを眺めていると、ディルクさんと目が合った。

向けられる亜麻色の瞳に、彼に右腕一本抱っこをされていたのを私は思い出す。

「あ、ディルクさんの顔も触ったような気がします、私！」

「……… そうですね。俺も今、それを思い出しました」

ディルクさんが、どういう表情をしたらよいのか判らないといった様子で陛下の背を擦り続けていると、陛下が「もういい」と小さく手を振って止めた。

黒髪の侍女の元に、いい匂いを漂わせながら新たなキッチンワゴンがやってきた。

彼女はそれを受け取ると、陛下の前にメインと思われる料理を置いていく。

まず置かれたのは魚料理で、ソテーした正体不明な切り身サイズの魚に香草が添えてあり、ホアホアした白い物体が乗せてある。

陛下が目の中の料理にナイフとフォークを向けて初めにしたのは、添えてある香草を避ける事だった。

「そつえばさ、陛下」

「……なんだ、とにかく食事を開始しろ、お前は。 リーザ」

「はい、只今」

陛下にそつ返事を返すと、リーザが私の手を拭うのを止め、一歩下がった。

妖精その一が私の前にスープ皿を置き、その二が中身を入れる。入れられたスープは陛下と同じコンソメスープのようだったが、中にはキャベツらしき葉っぱの欠片が気持ち入っていただけだった。

あれ、ベーコンは？

と思わなくもなかったが、本気でオナカが空きすぎていたので、昨夜リーザに教えてもらったスープ用のスプーンですくって、さっそく口に入れてみる。

私の舌の上を通り喉を通過したスープは、深い味わいながらもサラリとしていて、私は思わず頬を緩ませた。

やっぱり、マジで美味しい！ 流石、王様の部屋に運ばれてくるスープだよ！ 昨夜のジャガイモベースのスープも絶品だったしさ！ 私ってば、日本では粉末をマグカップに入れて、お湯を注ぐスープばかり飲んでいたから、もう感動もんだよ！ 涙が出ちゃうかも！

あ、勿論、粉末スープも美味しくて私は大好きだったんだけどね！ 私は程良い温度で提供されたスープをいそいそと口に運びながら、対面で魚料理を食べ終えつつある陛下に話かけた。

私の横で妖精その二がゴブレットに透明な液体 水を注ぎ入れている。

「ねね、陛下さ、」

「なんだ」

「そつえば陛下も手を洗わないで食事を開始してますよね？ さ

つきパンを食べてましたけど、カボチャパンツのリボンを緩めて私の秘密の花園、判り易く言うとお乙女の突起とその下の穴を擦るように直接指で触っていたのに、洗わなくていいんですか？ 確かに私、陛下から貰ったハンカチらしき布で用を足した後にちゃんと拭きましたけどね？」

「小娘！」

陛下が手にしていたフォークとナイフを置きながら、突然声を荒げた。

私はそれにびっくりだ。

スプーンを口に入れたまま、きよとんと彼を見てしまう。

「ややっ、なんでいきなり怒鳴るんですか？」

その言葉に、陛下の綺麗な紫の瞳が再び凶悪な光を放ちだした。鋭い光が私にズブズブと突き刺さる。

「口にするなど言ったよな、余は！ 食事を許す代わりにだ！」

「え、……………あ、そうでしたね？」

私は一度首を傾げて、そういえばそうだったなと思い出しながら頷くと、陛下が耳にかけるように髪を掻きあげだした。

「……………お前との約束ほど虚しいものはないな。よく判った。身に沁みて判った。今頃だ！」

「俺の頭に浮かんだ通りじゃないですか、陛下」

「五月蠅い、ディルク！ 何だ？」

陛下が髪に手をあてたまま動きを止めた。

「どうしました、陛下」

ディルクさんの問いかけに陛下が眉をひそめる。

「髪が濡れている。何故」

「あ、それはね？ 私がさつき陛下の黄金サラサラストレートな髪でヨダレを拭いたからですよ！ えへっ！」

「何？」

「ヨ・ダ・レ・を・拭・い・た・か・ら・濡・れ・て・る・ん・です！ たくさん出たから結構濡れてるでしょ？ うふっ！」

「っ！」

髪に手をあてたまま目を見開き絶句する陛下に、ディルクさんが溜息をつきながらリーザに指示を出した。

「……リーザ、陛下に何か湿らせた拭ける物を」

「はい、兄さん」

「え」

私は背後に控えているリーザに勢いよく振り返った。

リーザは陛下に渡すのであろう物を、私側にあるキッチンワゴンから取り出そうとしている。

「兄さんって？」

「そういえば申し上げてごさいませんでした。ディルクはわたくしの兄でございます、珍獣様」

「やややっ、兄妹なの?! 本当に?!」

「はい」

目的の物を取り出したリーザが、微笑みを浮かべて私に頷いた後、未だ絶句して固まっている陛下のもとへ静かな足取りで向かった。

「に……似てないね、あんまり。驚いちゃった。あ、髪が同じ亜麻色か」

だってリーザってば美女じゃない? そりゃあディルクさんも一般的基準からしたらカツコイイ方に足をつっ込んでいるとは思うけど……。

「母親が違っんですよ。父親が救いような男で、俺が城に上がって一年後に生まれたのがリーザです」

六つ違いの妹ですよ、とディルクさんはリーザから拭く物を受け取りながら言った。

「母親……ごめんなさい」

「ああ、気にしないで下さい。たいした事ではないので」

「そうでございます、珍獣様」

そう言って優しくそうな笑みを見せてくれる二人に、私が言葉を直ぐには見つけられないでいると、妖精その一が次の料理であるサラ

ダを置いた。

サラダは向こうの世界でいうシーザーサラダで、いろいろな種類の野菜にクルトンとチーズがトッピングしてある。

私は手にしていたスプーンを妖精その一に渡し、サラダに取りかかる事にした。

「お互い苦労したな。馬鹿が父親だと」

衝撃から立ち直ったのか「自分でやる」とディルクさんから拭く物を受け取り、陛下がしみじみとした様子で言った。

「陛下の御父君と俺達の父親は比較にならないほど立場が違うじゃないですか。貴方の御父君は国王で、俺達の父親はただの庶民のろくでなしでしたからね」

「そういったものに身分は関係ない。むしろ王という立場で馬鹿である事の方が救いようがない。周囲に迷惑も甚だしいだろうが」

「陛下のお父様って馬鹿だったんですか？ …… っていう聞き方をしてもいいのかなあ？」

私は好奇心でちょっと聞いてみたくなったので、彼らの会話に口を挟んだ。

食べているサラダはドレッシングが美味しくて、既に半分を食べてしまう程の勢いだ。

「構わん。アレはとにかく馬鹿だった」
「アレって」

「政治的能力も経済的能力も軍事的能力も皆無でな。頭の中にあるのは常に女、女、女で女と遊ぶ事のみ心血を注いでいた能無しだった」

「女？」

「ああ。良いのは顔だけで、脳内は女の事以外は絶無。暴君でなかった事だけが唯一の救いだったような男だ」

馬鹿すぎて暴君にもなれなかったのかもしれないが、と陛下は吐き捨てるように言いながら、私がヨダレで濡らした髪を一生懸命に拭いていた。

その様子はまるで苛められっ子が髪につけられたガムを拭き取っているようで、なんとなく見る者に哀れみを感じさせた。

「幼いながらも余は、ああはなるまいと心に誓ったものだ」

「極端なんですよ、貴方は」

ディルクさんが呆れた声を出した。

「極端だと？」

「ええ」

「どういう意味だ」

「こと女性に関しては潔癖すぎるくらいがあるという事ですよ。何となくでも身に覚えがあるでしょう？」

「無いな」

ふんと鼻を鳴らすように言うと、彼は拭った物をテーブルの端に置いた。

それをリーザが手にし、黒髪の侍女が次の料理の準備に動く。

「まあ、それはそれとしても、陛下には感謝しておりますよ。今まできちんと申し上げた事は無かったです」

「感謝？」

「ええ。赤子の娘ひとりまともに育てられない男のもとからリーザを取り上げてくれましたからね」

「あのままにしておいたらお前の妹は死んでいたか売り飛ばされていただろうが。なれば引き取り育てるのは当然の事だと思うが？」

「それはそうなんですけどね、」

なんと申し上げれば通じるかな、といった様子のディルクさんを眺め見ながら、私はサラダを食べ終え、妖精達に合図を送った。

次の料理は何だろうか？

「ねえ、陛下」

「なんだ」

「陛下の周囲って兄妹とか多いんですか？」

「多いとは？」

「だってディルクさんとリーザは兄妹でしょ？ 妖精二人……じゃ

なかった、えっと、ヘルミーネとルイーゼはさ、そっくりだから双子だと思っし」

そんな私の言葉に即座に否定の声を上げたのは当の妖精達だった。「違いますわ、珍獣様」

「わたしは双子ではございません」

「え、だってそっくりじゃん」

私が驚いて陛下から妖精達に視線を移すと、妖精その二がサラダの皿を片づけ、その一が高そうなティーカップを私の前に置いた。

「わたくしたちは双子ではなく三つ子なんです」

「姉が居るんですよ」

「三つ子?!」

なになに、この妖精ばりの美少女が同じ顔して三人も居るっていうの?! そんな奇跡がこの世に存在しちゃう訳?!

私は思わずぽかんと口を開けて、妖精達をまじまじと見てしまう。

「はい、三つ子でございます」

「姉はこの王城ではなく、余所で働いているので珍獣様に紹介出来ないのが残念でございますが」

「余所で働いているの?」

「はい」

「えー! 陛下最悪!」

私がキツと対面に座る陛下に視線を向けると、陛下が怪訝そうな顔をした。

彼の前に肉料理の皿が幾つか置かれた。

ひとつめの皿は向こうの世界でいうフィレステーキ、ふたつめの皿はソーセージの盛り合わせ、みつつめの皿は何かの肉に衣をつけて揚げ、手の込んでいそうなソースをかけた料理だった。

「最悪とは?」

「だって! 三つ子の二人を雇ってるんだったら、もう一人も雇ってあげたっていいじゃないですか! 陛下のケチンボ! 奇跡の三つ子妖精を引き離すなんて最低!」

妖精族の王様にバチあてられたって知らないからね！ 私はこの三つ子たちをチェンジリングとみたよ！

「ちっ、違います、珍獣様！」

「そういう事では！」

「違ってます？」

妖精達が慌てて言うのに疑問の視線を投げると、陛下がステーキにナイフを入れながら、むすりとした様子で答えた。

「余がこれらの姉も雇っているが、事情があつて余所で働かせているという事だ」

人に抗議する前に事実確認くらいしてから物を言え、と陛下は憤り気味に一口サイズに切った肉を口に入れた。

「でもそれだつて三つ子を離れ離れにしているじゃないですか、結局のところ」

「期限付きだ」

「期限つて、いつまでですか？」

「さあな」

「さあなつて」

「煩い。食事が済んだのなら向こうに行つてくれないか」

「え？」

「済んだのだろう、お前は」

言つて陛下は、私の前に置かれているティーカップに視線を移した。

ちよつと何を言つてるの？ この男は相変わらず。

私はまだメインの料理どころかパンすらも口にしていないけど？

「なに言ってるんですか、陛下。もしかしてボケでも始まりました？」

ややっ、それは大変だね！ まだ陛下つてば二十六歳なのに！

あ、でも国王陛下だし、介護体制は万全か。それなら安心だね！

後継ぎが居ないからトリエスは滅ぶかもしれないけど！

「それはお前の事ではないか？」

「私の事って？」

「お前は減量中だろう？ スープにサラダ、飲み物は水に砂糖無しの紅茶。そして今、お前の前には紅茶が出されている。食事は終わりという事だろう？ どう考えても」

「え」

「終わりだ。実に珍獣らしい内容だったな？ さしずめ草食動物といったところか」

「ややややややややアイヤー！ ワタシ、ソレ納得できないアルよ！」

陛下の蟀谷がピクリと波を打った。

「なに人だ、お前は」

「とりあえず異世界日本のお隣の大国中国人モードになってみました！ 中国って大きいんですよ！ 正式には中華人民共和国っていつて、人口が十三億人もいるんですよ！ 最近は砂漠化と環境汚染が酷いらしいんですけどね？」

日本にまで黄砂が飛んでくるしね！

「お前の世界の話はいい。興味が無い」

「え、そんなこと言わないで下さいよ、へ・い・か！ っていうかさ、陛下、私ね？ 陛下の保護している珍獣二号はね？ 草食動物じゃないんです！ 肉食動物……ううん、雑食なんです！ 有りと有らゆる物が食べられる手のかからない優良品種動物なんですよ！

ねえ、陛下、肉は？ 陛下のお皿に乗っているステーキ、お肉の焼いたのは？」

「お前は減量中だ」

陛下が眼前の皿に目線を落とし、再び肉を切りだした。

「ねー、へ・い・か！ に・く！ に・く！ に・く！ にく・じゅう・はち」

「……………」

私は中腰になって食卓の上に身を乗り出した。

昨日の朝食でも使用したこの食卓は、高価そうだが小振りで、日

本の一般家庭にあってもおかしくはないサイズなのだ。

私は自分の前に置かれていたティーカップを横に避け、食卓の上で半ば腹這いになりながら、黙々とステーキを食べている陛下の方へ顔を近づけた。

そして、じーっと彼の動いている口元へ物欲しそうな視線を投げ
てみる。

「……………見るな」

「ねー」

「……………頼むから向こうへ行ってくれないか」

「ねえ、陛下、聞いて？ ウチね、家計が苦しかったって朝に言ったと思うんですけど、どのくらい苦しかったのかということですね？」

私は陛下の前のステーキの皿から、添え物のニンジンのグラッセらしきものを指で摘んで口に放った。

お、もろニンジンのグラッセだ！ 甘くてバターの香りがして超
美味しい！

よし、もう一個！

もうひとつ摘んで口に放り、手についた汚れを彼の傍にあったテ
ーブルナプキンで拭くと、まるで未知の生命体を見るかのような澄
んだ紫の瞳と目が合った。

「……………」

「大抵の朝食は卵かけゴハンとワカメの味噌汁だけっていうくらい
に苦しかったです」

「……………卵かけごはん？ わかめのみそしる？」

「あ、そうか。えっと、卵かけゴハンはですね、お店で『お一人様
一点限り』で売っている格安の生卵に醤油、昨日の朝に説明した黒
インクに塩分を入れた液体を入れて混ぜ混ぜして、それを炊いたお
米にかけて食べ物で、ワカメの味噌汁は、その辺の砂浜に打ち上げ
られて落ちている海藻を切ってお湯で煮て、その中にダシ……………うー
ん、干からびた魚を砕いた粉を入れて、腐った豆と塩分を混ぜたウ
ンコ色のものをお湯に溶いた汁物、スープの事です」

陛下が何故か嫌そうに眉を寄せた。

「……………腹を壊さないのか？」

「壊しませんよ？ でね？ そんな食生活の私ってば、今、陛下が食べているフィレステーキ、大きなお肉を焼いた料理、あまり……………というか、ほとんど食べられなかつたんです。私の誕生日にだってママ、サイコロステーキで……………。陛下、サイコロステーキって、どんなのか想像つきます？」

「……………さあ」

「コロコロした小さいお肉を焼いた料理なんですけどね？ でもウチの場合、質のいいコロコロ肉を焼いたのじゃなくて、細かい屑肉や内臓肉をとある手段で固めて四角く形状を整えた成型肉のやつで、不味いのなんのって……………。ちなみにママがよく買っていたのは、モ―と鳴く四足動物七割、ブヒーって鳴く四足動物三割で配合されている成型肉でした。確か五百グラム、五百円だったかなあ？ あ、五百グラムはカラフェスを四分割した重さで、五百円は……………とにかく安いというか」

「……………そのような肉が存在するのか」

陛下が何とも表現し難いといった声音を出した。

「存在しますよ？ 少なくとも我が家ではよく目にしました。……………いいな、陛下、そのお肉。私ね、ステーキ、昨年の夏に千夏ちゃんとか藤と一緒に買ったファミレス……………飲食店でね、加藤に一口貰って以来食べてないんです。昨日の夜、トリエスで初めて食べたコーヌ料理は鳥肉みたいだったし。いいな、美味しそう……………」

とにかく少しでもステーキを口にしたかった私は、陛下の綺麗な紫の瞳をじつと見ながら訴えてみると、長い黄金の睫毛に縁取られた彼の瞳が揺れた。

「……………なんだ、その顔は。やめてくれ」

「ちよつとだけ」

「……………」

「ねね、陛下、ちよつとだけ、ちよびつとだけ頂戴？ 一口だけで

いいから食べたいなあ、私」

ね？ つと澄んだ紫の瞳を見つめながら首を傾げてお願いをしてみると、陛下が深い溜息をついた。

「……………口を開ける」

その言葉に条件反射のように口をぱかっと開けると、一口サイズに切った肉を陛下が私の口の中に入れた。

私はそれをモグモグと咀嚼する。

肉はとても柔らかくて美味しく、私の想像を遥かに超えた味だった。

嬉し過ぎて思わず“にぱっ”と顔中に笑みが広がり、そんな私を陛下が見ていた。

「美味しい！ 陛下、もう一口！ あ、ソーセージらしきのも食べたいな！ その長いの！」

「……………余が痩せそうだ、余が」

そう言っただ再度溜息をつきながら、陛下はまた一口サイズに切った肉を私の口の中に入れてくれる。

「本当に美味しい！ あのね、あと、カツレツみたいなもの、衣をつけて揚げたようなのも忘れないうで下さいね、へ・い・か！」

「……………判った」

これが陛下と私が一緒にとる二度目の食事風景だった。

陛下の食事がひと通り済むと、最後の締めとして美味しくそうなデザートが彼の前に出された。

黒髪の侍女は不自然なくらいに私の方へは視線を向けずに、淡々とした様子でガラス製の皿を置く。

彼に用意されたデザートは、驚くくらいに芸術センスに富んだものだった。

陛下が無言でデザート用のスプーンを手にする。

色合い的に予想すると、最初にまずレモンシャーベットらしきものを食べるつもりようだ。

私は引き続き食卓の上に半ば腹這いになったまま、陛下の顔をじつと見ていた。

「それも美味しそうですね、陛下」

「……………」

「いいなー…。陛下が今食べようとしているそのシャーベット。さっぱりしていそうで美味しそう。肉料理の口直しに最適って感じですよね？ それに、その横のミルクプリンっぽいのもプルプルしてて、かなり美味しそうだし……。真ん中にあるのはフォンダンシヨコラですかね？ フォークを入れたら、中から濃厚な生チョコが出てきたりするんですか？」

「……………」

「トリエスにもハート型ってあるんですね。異世界日本ではね、陛下。二月十四日という暦の日に、バレンタインデーっていうのがあ

って、女の子が好きな男の子にチョコレートを渡す日があるんです。で、その日にそういうハート型のフォンダンシヨコラをあげる場合があるんですよ。陛下、トリエスにもバレンタインデーみたいなものって、あるんですか？」

ハート型があるしね？と聞くと、陛下がデザートに向けていた視線を上げた。相変わらず澄んでいる紫の瞳が私の瞳と合わせられる。「……………いや、聞いたことはない」

「そうですね…。私ってばトリエスの暦とか知らないですけど、今度、飼い主様である陛下に感謝の意を込めて、トリユフ、えつと向こうの世界のチョコレート菓子でも作りましょうか？ 毎年、誰からもチョコを貰えないパパと、ついでにお兄ちゃん、義理で加藤にも作っていたから結構上手いんですよ、私。ところで陛下、」

言いながら私はずいっと食卓の上を前進し、陛下に近づいた。それによつてデザートは私の胸元に、陛下とは四十センチと離れていない。

「……………なんだ。……………小娘、もう少し下がれ。近すぎる」

「ままま、距離は気にしないで？ ねね、陛下、その琥珀色の網状のやつ、もしかして飴細工ですか？ その横のお花も！ ややつ、私、そういうの一回食べてみたかったですよね！ へ・い・か、ねえ、とりあえずそのスプーンの上のシャーベット、私の口の中に入れてみて？」

私の言葉に陛下が疲れたような顔をした。

そんな表情をしながらも、開けて待つてみた口の中に律儀にシャーベットを入れてくれる。

入れる時、口の端にスプーンが触れてしまい、シャーベットが少し付いてしまったが、彼は気づくとテーブルナプキンでスツと拭ってくれた。

予想ではレモンシャーベットだったが、口の中で溶けるそれはグレープフルーツに近い味だった。

当然のことながら物凄く美味しい。

私がシャーベットの美味しさに笑みを浮かべていると、陛下がフオンドンシヨコラにスプーンを入れた。中から出てきたトロリとしたチヨコレートを掬い絡めて、何かを言う前に再び私の口の中へと放りこんでくれる。

「あれだけ肉を食べて、まだ入るのか、お前は」

結局、ほとんど食べただろう？と呆れの入った瞳を私に向けながら、次に陛下はミルクプリンにスプーンを入れた。

「え、何を言ってるんですか、陛下。ごはんと甘いものは別腹なんですよ？」

常識です、常識、といった感じで私が言っていると陛下が眉をひそめた。ミルクプリンにカスタードソースっぽいのを絡めて、また私の口に入れてくれる。

「別腹？ そのような事がある訳ないだろう。際限なく太るぞ、その考えを改めんと」

「失礼な！ あ、これパンナコッタですね！ これも美味しい！」
「……ぱんなこった、な。もう自分で食べる、全て。ほら、」

そもそも何故先程から余がお前に食べさせているんだ、と納得のいかない様子を見せながら、陛下は私の手にスプーンを握らせた。

「え、全部食べてもいいんですか?!」

「ああ。好きなだけ食べて、好きなだけ太ればよいのでは？」

そんな嫌味を言いながらティーカップに手を伸ばした陛下を、もちろん私は気にすること無く、残りのデザートに手をつけることにする。

まずは一口食べて気に入ったフオンドンシヨコラを食べる事にした。

「やっぱり美味しい！ 流石、王様用ですね！ 一個二百八十円のと訳が違います！ もう私、めちゃくちゃ幸せ！」

「それは良かったな」

「あ、陛下も一口食べます？」

「要らん」

「やつ、そう言わずに！」

本当に美味しいんですよ？と、陛下の口元にフォンダンシヨコラを乗せたスプーンを持っていったが、陛下は思いつきり私を無視して優雅にお茶を飲んでいた。

「へ・い・か！」

「ほら、口を開けてくださいよ！」

「……………」

「リーザ！」

「なんでございましょう、珍獣様」

私が呼ぶとリーザは即座に反応し、微笑んでくれた。

そんな彼女に私も微笑みを返してみる。

「リーザにいいこと教えてあげる！ 陛下ね、私に金貨五千枚をくれたんだけど、その理由はね、秘

「こむす

「はい、シヨコラ」

声を荒げて言葉を遮ろうと開いた陛下の口の中に、私は素早くスプーンを突っ込んだ。

彼の歯に少しあたってしまったけれど、口内にフォンダンシヨコラを置いてくるのには成功したようだ。

スプーンを引き抜くと、陛下がモコモコと咀嚼しながら何故か頭を抱え出した。

「あれ、どうしたんですか？ トリエスの一流料理人が作ったフォンダンシヨコラ、お気に召しませんでした？ 私はすごく美味しいと思うんですけど……………」

「……………」

「え、陛下、本当にどうしたんですか？」

そう尋ねながら、頭を抱え続けている陛下の黄金の頭を、地下の時と同じように“いい子いい子”といった感じで撫でてみる。

よく判らないけれど何かシヨックなことがあったのなら、ペット

としては飼い主様を慰めてあげないとね？

ほら、私、陛下に飼われている珍獣二号だし、衣食住の面倒を見てもらってるしさ。

そう考えての行動だったんだけど、私が陛下の頭を撫でた途端、部屋中が微妙な空気に包まれたのが判った。

廊下の扉側に控えている侍女らは全員驚愕したような表情で此方に目を向けているし、それより近くから強い視線を感じて其方に顔を向けると、黒髪の侍女が物凄い形相で私を睨んでいる。

おおぅ……その目はちよつと怖いよ、そう思いながらも陛下の頭を撫で続けていると、ディルクさんの力の抜けたような声が耳に入った。

「……珍獣様、陛下は一応トリエスの国王ですのでね？ 使用人ではありませんが、衆目のある場でそのような行いはどうかと、俺は思っています……どうなんでしょう、陛下。貴方は望んでそれを甘んじておられるんですかね？」

だったら俺は何も言えませんが、とディルクさんは肩を竦めた。

「……望んでいる訳ないだろう。……何をしているのだろうと、ふと思ってしまっただけだ。小娘、止めてくれ」

陛下が撫でていた私の手を外した。

次いで顔を上げると、疲れた様子で息をつく。

「休んだはずなのに食事をしただけで疲れた」

もつする事をさっさと済ませて早く寝たい、と陛下が髪をかきあげた。

その様子に、起きたばつかりなのに何で疲れているのかと私が聞こうとすると、廊下側の扉が叩かれる。

扉近くに控えている侍女が、直ぐに対応した。

「陛下、アツヒエンヴァル様とお呼びの者が参りましたが」

「通せ」

陛下が許可を出すと、直ぐさま扉の両脇に侍女が付き、音を立てる事なく静かに開かれた。

扉が開かれ、現れたのは三人。

ひとりはヘロルドさんで、ひとりは先ほど彼を呼びに行った侍女、
そしてもうひとり。

私が初めて見る男の人が、二人を従えるような形で立っていた。
初めて見る彼は、緩やかな曲線を描く金髪をひとつに束ねて前へ
垂らし、碧い瞳をしている。年齢は陛下とそう変わらないだろうと
思われる感じで、容姿の程は上の中か上の上。陛下は別格だとして
も、新たに現れた彼もかなりの美形だった。容姿も雰囲気も言うな
れば正統派の貴公子みたいな人だ。

私が彼を観察するように見ていると、視線に気づいた見知らぬ彼
は微笑むような表情を作った。

彼は部屋の中へと足を進め、それに続いて他の二人も入室する。

「陛下、遅い時間に申し訳ありません。どうしても本日中にご報告
したい事がございまして」

「いや、よい。余が突然休んだのがいけないのだからな」

陛下が立ちあがった。

彼は食卓から離れ、初めてみる男の人の方へと向かう。

私もスプーンを置いて食卓から降り、陛下の後に続いた。

陛下が見知らぬ彼の前で立ち止まり、私も陛下の斜め後ろで足を
止めると、初めて見る彼が碧い瞳を私に向けてくる。

「彼女が？」

「ああ。小娘、昨夜の話に出ていたヴィルフリート」アツヒ
エンヴァルだ。身分は公爵家嫡男で第一騎士団の団長。カーティス
伯爵でもあつたか」

「ええ、覚えていてくださり光栄です、陛下」

ヴィルフリートさんが品のある笑みを浮かべて言うと、「忘れた
かったがな」と陛下がつまらなそうに返した。

「はじめまして、珍獣様。早く貴女にお目にかかりたいと思ってお
りました。宰相殿もディルクも私より先に貴女にお会いしていて、
なんとも歯痒い思いを。どうぞヴィルフリートとお呼びください」

そう言って彼は、パーシヴァル様の免疫が無ければ確実に心を持つていかれそうな貴公子の微笑みを顔に乗せ、実に自然に私の手を取った。

そしてやっぱり自然に手の甲にすつと唇を落とす。

「お……」

「貴女とは陛下よりも先にお会いしたかった。そうであれば私にも少しは勝機があったものを」

ヴィルフリートさんが私の手をくるりと返し、今度は手の平に唇をつけた。

え、懇願？ それってトリエスも向こうの世界と意味が一緒だったりしないよね？

私が彼の行為に唾然としてみると、ヴィルフリートさんの碧い瞳が私の黒い瞳の奥を覗き込むように合わせられた。

「現れたばかりの貴女に陛下が金貨五千枚を貢いだと、今、ヴィネリンスはその噂で持切りです」

「何？」

「うゝいねりんす？」

「この王城の呼び名ですよ、珍獣様。意味は大陸古語で『純白の乙女』。穢れなく清らかで、太陽も月も夜空に煌めく星々をもその美しさに姿を隠すという、霸王を虜にした愛と美の女神を意味します。黒曜石のような艶やかな髪と瞳、触ると吸いつきそうな滑らかな質感を予感させる肌理（きめ）の細かい肌、ヴィネリンスとは、まるで貴女の為の言葉のようですね、珍獣様」

「や……流石の私もそこまではおこがましすぎて言えない……ような？」

それに聞く人によってはウツトリしちゃう言葉なのかもしれないけど、言っている事は結構適当だよね、ヴィルフリートさん。

だってさあ、黒曜石って。そもそも私、確かに髪も瞳も色は黒色属性かもしれないけど、真っ黒ではないんだよね？ 黒さでいうならさ、あそこの黒髪の侍女さんの方が完璧な黒色の髪だよ。

「戯言はいい、ヴィルフリート。噂とは何だ」

ヴィルフリートさんの、この短期間で私がトリエスで出会った人たちには見受けられなかった違った意味での灰汁の強さに引いていると、陛下がそんな彼の言葉をバツサリと一言で切り捨てた。

「戯言では無いんですがね」

誤解しないでくださいかね？とヴィルフリートさんが、またもや私に正統派貴公子スマイルを向けると、陛下の額に青筋が浮かび出した。

「ヴィルフリート！」

「お怒りにならないでください、陛下」

相変わらずですね、とヴィルフリートさんが貴公子スマイルを苦笑に変えた。

「噂ですが、凄いですよ」

「凄いだと？」

「私が聞いたのはたぶんほんの一部にすぎないのでしょうか、それでも幾つも耳にしました」

「どういった？」

「陛下が会って間もない異世界からきた娘に纏まった金を渡すほど入れ揚げている、このままではトリエス王としての財産も、国庫までをも貢ぐのではないか、とか、」

「何？」

「今までの姫も入室を許さなかった王の部屋で同衾し、片時も離さないほどに寵愛しておられる、その御様子では懐妊するのも時間の問題だ、では異世界の娘を王妃とするおつもりなのか、それほど寵愛であれば一体どれだけの力をお与えになるのか、もしや陛下は、今、軍を差し向けているサデヴァをその娘の所領となさるのでは、とか、」

「……………」

陛下が額に手をあてた。

「他には、ヴィネリンスの人間全てを自由に使ってよいと言われた

らしい、では陛下は既に娘の言いなりで政（まつりごと）にも口を出す事を許しているのだろう、だから娘の為にサデヴァに攻め入り、年若く美しいと評判の女王に少しの慈悲もお見せにならないか、だ、それほど盲目的に愛しておられるのであれば、軍の代理統帥権を与えるのではという話は冗談だと思っていたが本当なのかもしれない、とまあ他にもいろいろ」

「……眩暈が」

「……なんかよく判らないですけど、私ってば凄い存在になってませんか？ 魔女というか悪女というか魔性の女というか、そんな感じ？ でも何でそんな変な方向に噂が発展を？」

私、トリエスに来たのいつだっけ？ 気のせいじゃなければ、ようやく丸二日くらいじゃ？ それに行動範囲も物凄く狭いような気がするけど？

「珍獣様、貴女は一躍時の人ですよ。なんでも泣く子も異国の王も黙ると言われている強国トリエスの王を一目で虜にされたらしいので」

ヴィルフリートさんがおかしそうに笑った。

「……サデヴァは………まあ、置いておいたとしても、なぜ軍の統帥権にまで話が　まさか、」

陛下の言葉にヴィルフリートさんが頷いた。

「多分そのまさかですよ、陛下。軍に話を通すよう宰相殿にお命じになられたのでしょうか？」

「……どこをどう解釈すれば、そういう発想にまでたどり着くんだけだ、ただ小娘を練兵場で運動させる旨を伝えただけだぞ、それも減量で、と陛下が眉間を揉みだした。

「ある方面にだけは潔癖な気質の貴方の事だ、大方目算を誤り、サデヴァの事も他の事も予想を大幅に上回る反応だとも思っておられるでしょうが、私から言わせれば　甘い」

「………」

「だから適当に遊びなさいと申し上げていた」

「それとこれとは」

「違いますよ。さて、」

「ヴィルフリートさんが正面を向きながら陛下の耳に顔を近づけた。」

「……………」

「……………」

彼は陛下にだけ聞こえるように声をひそめて何かを言っている。

途端、部屋中の空気が張り詰めた。

張り詰めた原因は勿論私でもなければ、ディルクさんやグイードさん、ヘロルドさんやリーザ、妖精たちではない。

陛下付きの侍女らが息を詰めていた。中でも黒髪の侍女をはじめとした数人が耳を澄ませているのが私にでも判る。

ほんの少しして、ヴィルフリートさんが陛下から身を離れた。

彼は私に正統派貴公子スマイルを向けて、ごく浅い角度で腰を折る。

「珍獣様」

「はい」

ヴィルフリートさんが再び私の手を取って、唇を甲に落とす。

「アツヒエンヴァルから三十万、カーティスから十万を貴女に」

「何の事ですか？」

彼が突然なにを言い出したのかさっぱり判らなくて、私は目をぱちぱちと瞬いてしまった。

ヴィルフリートさんが笑みを深くする。

「金貨ですよ。貴女に資産を」

「は？」

「陛下から五千、アツヒエンヴァルから三十万、カーティスから十万の計四十万五千を貴女はこの世界で手に入れられた。アツヒエンヴァルから財産管理人を付けます。宰相殿も直接現物を渡すのはどうかと言っていた。丁度いいので此方で管理しましょう」

「え……金貨四十万五千って。私的レートだと四百五億円ってこと？ え、陛下、陛下、ヴィルフリートさんの言っている事が私には全く判らないんですけど！」

なんでいきなり金貨をくれるとか言ってるの？ それも宝クジの当選金額を大幅に超えているような大金だよ？！

私が正統派貴公子スマイル顔のヴィルフリートさんに視線を向けたまま、陛下の腕をぺちぺちと叩くと、陛下が眉間を揉んでいた手を下した。

「物凄く簡単に言っと、ヴィルフリートがお前の後見を名乗り出たんだ。もう甘んじておけ。金もありがたく貰っておけばいい。暇つぶしに王都の屋台でも買い占めて遊んでいればよいのでは？」

串焼きが食べたいと昨日言っていたらどう？と言って、陛下が私の方を見た。

「え」

「こうなったら話に乗ってやる。小娘、追加で余からも六十万分の黄金だ。合わせて百万五千。この時点でお前の気に入りのバルツァーの総資産を軽く超えたぞ。その辺の弱小貴族なら足元にも及ばんし、中堅貴族でもお前に勝てない者は居るだろう」

「おや、珍獣様は法務長官を鼻屑に思っておられるのですか？ どのように面白みも無ければつまらない男を？」

容姿の方もいまいちでしょうに、と私の心にもグサリとくるような事を平然と言って、ヴィルフリートさんが私に手を差し出した。

「改めてご挨拶を。今から貴女の後見人となりましたヴィルフリート「アツヒエンヴァル」です。煩雑なことは全て私にお任せを。珍獣様はただお好きなように、このヴィネリンスでお過ごしになられていて下さい。御用向きにはなるべく沿うよう力を尽くしましょう。宜しく願います。長い付き合いになればよいのですが」

そう言っただけ微笑み続けるヴィルフリートさんに正直ついていけないで、陛下の方を見ると、彼は顎をくいと動かして、私にヴィルフリートさんの手を取れと言っていた。

珍獣二号の立場的には飼い主様の言う事は絶対服従で、大人しくヴィルフリートさんの手を取るべきなんだろうけれど、あまりに胡散臭さ満載すぎて躊躇ってしまふ。

そんな私に陛下が紫の瞳を細めた。

「小娘？」

疑問形を取りながらも明らかに促している陛下に、私は深く息を吐く。

もういいや。何とでもなれって気がするよ。

そもそもさ、私に拒否権なんて無いよね。陛下の保護している珍獣だしさ、それでもって陛下は国王陛下だし、ヴィルフリートさんは大貴族みだし？ 権力度合いからいっても、ディルクさんや

リーザは勿論の事、法務長官がどのくらい偉いのかピンとこないけれど、身分が子爵でしかないバルツァーさんなんか太刀打ち出来ないよね。まあ、私が泣きついてても助けてくれるとはちよっと思えないんだけどさ。残念ならね？

私は気持ち切り換える意味で空気を吸い込むと、ヴィルフリートさんの手を握った。

まあでもアレだよ。まっ、いいかって感じ？

なんだかこの世界で私ってばお金持ちになったみたいだしさ。よく考えると一千五億円って手に入れようと思っても絶対に出来ない金額だよな。それになになに？ 私に財産管理人が付くって凄くない？ きゃっ！ ちよっどころじゃなくカツコイイかも！

私さあ、真面目にこのトリエスで商売はじめてもいいかな？ もしかしなくても多額の軍資金が手に入っちゃったよね？ やっぱい、何のお店開こう！ 陛下は屋台でも買い占めればって言うてたけど、トリエスに既存にある物は商売として駄目だと思っただよね。やっぱりランジェリーショップ『い・ち・ご』を開店するべき？！ よしっ！ 明日、アニに相談しようっ！ カボチャパンツ廃止は勿論の事、爆乳用から貧乳用までブラも品揃え豊富でいくからな！ 待ってて、王都在住の乙女たちよ！ 貧乳モリモリ改造用ブラから女騎士用スポーツブラまで用意するから！ って、トリエスって女騎士って居るのかなあ？

私は多額のお金の入手とランジェリーショップ『い・ち・ご』の発動に、半端なくワクワクのウキウキになってしまっ、顔に満面の笑みを浮かべながら握っていたヴィルフリートさんの手をブンブんと縦に振りまくった。

「珍獣様？」

「私の方も宜しく願いますね、同士！」

「同士？」

私の言葉にヴィルフリートさんが微笑み続けながら優雅に首を傾げた。

「はい！ 爆乳同盟の同士です！」

「……は？」

「……相手にするな、相手に」

陛下がまたかといった表情になり、手を振った。

「しかし……珍獣様、爆乳同盟とは？」

「え、だって、ヴィルフリートさんはアニの爆乳に突撃したんでしよう？」

私はヴィルフリートさんの手を離して、彼の腹に「このこのう」と肘をクイクイと押しつけた。

ヴィルフリートさんの私を見る碧い瞳に驚きの色が走る。

彼は二、三度ほど目を瞬かせると、記憶を探るような様子を見せた。

「アニ……アニ……アニ……アニ……アニ、か……

……アニ……アニ……アニ……アニ……

……アニ、ねえ……

……アニ……

……ああ、針子の！」

「……相変わらずだな、お前は」

「あれ？」

その間は一体何事？ え、ちょっとヴィルフリートさん、アニを思い出すのに時間がかかりすぎでは？ もしかしなくてもアニ姐さん、食われちゃっただけ？ 遊ばれちゃっただけなの？！

さ……最悪男が此処に！ トリエス在住の乙女の皆さん！ 女の敵が此処に居ます！

これじゃあ、アニがクス呼ばわりするのも当然か。そういえばアニ、ヴィルフリートさんが王城内の女という女を口説きまくってるって言ってたな。

「それで珍獣様、針子のアニがどうかしたのですか？ 突撃とは？」

「え、だってヴィルフリートさんってば、アニのこと抱いたんでし

よ？ あの垂涎モノのたわわに実った豊かな胸に顔とか埋めたんですよね？」

「……小娘、お前はな、一度その脳内を」

「いいから陛下は黙って？ ねね、ヴィルフリートさん！ やっぱり爆乳はいいですか？ 揉み具合とか、掴んで手にあまる感触とか！ 乳頭の色は桃色？ アニの胸って想像通り柔らかいのかな？！ やっつ、私も顔を埋めてみたい！

いい匂いがしそうですね！ うらやましいなー！ あの胸、少しでいいから分けて欲しい！ もう何で人間の肉って粘土みたいに干切っては付けられないんでしょうね！ そしたら私ってば、オナカとお尻の肉を胸に移動させるのに！」

たくさんね！ 千夏ちゃんと一緒に I カップになっちゃおうよ！ きゃっ、I カップ！ I カップ！ I カップになったら私ってば、グラビアアイドルになっちゃうんだから！ そんなでもって野球選手とか格闘家とかお笑い芸人とかと結ばれちゃうんだよ！

「……………ぷっ」

ヴィルフリートさんが口元に手を持っていくのと同時に吹き出した。

「え、何で吹き出して？」

「面白い方ですね、珍獣様。大きな胸がお好きなんですか？」

「はい！ 爆乳大好きです！ つーか憧れです！ で、アニの爆乳はどうでした？！」

「ええ、よい触り心地でしたよ？」

「重かったですか？」

「はい」

「いいな！ 私も触りたい！」

ヴィルフリートさんの返答に大興奮してしまった私は、両手の平を彼に向けると、彼は私の意図に気づき、手の平を合わせ叩いてくれた。

パンツと小気味の良い音が陛下の部屋に響く。

「いい加減にしる！ 何だ、二人揃って！」

「いいから陛下は黙ってて！ 本当にいいなー爆乳！」

「そんなに懂れているのですか？」

「当然ですよ！ 見てください、この貧乳！」

私はヴィルフリートさんに形が判るよう、ミニミニすけすけキャミソールもどきなナイトドレスを両手でピンと下に張った。

「小娘！ それは透けていると何度言ったら判るんだ、お前は！」

「透けてたって関係ないですよ！ 陛下だって私の胸、無い胸って言ったくせに！」

「おや、陛下にしては珍しいですね、女性の体の事を話題になさるとは」

「……………」

「でも、珍獣様、可愛らしい胸も魅力的ですよ？ どちらかというと私はその魅力の方に惹かれます」

ヴィルフリートさんがニコリと笑って、ナイトドレスから私の手を丁寧な仕草で外した。

「え、貧乳でも魅力を感じるんですか？！」

「はい。可愛い胸に控えめにある先端を口に含むのは、こころ嗜虐心を刺激されるといいますか。それに可愛い胸の方が感度がよく敏感という話もありますしね？」

「きゃー！ 陛下、陛下！ 居た、居ましたよ！ 貧乳でもいいっていう人が！ 素晴らしい！ ちょっと陛下も見習って」

「二人揃って人の部屋でくだらない会話をするな！」

陛下が声を荒げ、私とヴィルフリートさんを凶悪に光る紫の瞳で睨みつけてくる。

ヴィルフリートさんが「おやおや」といった感じで、面白そうに片眉をあげた。

「もう、なんで怒ってるんですか？ 偏食してるから栄養かたよってるんじゃない？ 大きなお世話かもしれないですけど、野菜、食べた方がいいですよ？ オコチャマじゃないんですから！」

「大きなお世話だ！」

「ヴィルフリートさんが笑いだした。」

「確かに野菜は食べた方がいいですね」

陛下が少し離れた場所に立っていたへロルドさんの方へ、ぷいっと向いた。

「へロルド！ 浴場に行く！」

「畏まりました。ご用意は出来ておりますので、こちらへ」

少々苦笑い気味にへロルドさんは言っつて、陛下を廊下側の扉の方へと促す。

それに陛下が当然のように一步を踏み出したが、それ以上は私が許さなかった。

私は陛下の体に残るから腕をまわし、彼の歩みを止める。

「何だ、小娘！ 放せ！」

「いやいや、ちよつとちよつと！」

「なんだ！」

「え、なんで陛下が先に入りますか？！ お風呂に！」

「何？」

陛下が眉をひそめながら私の方へ振り返り、歩こうとするのを止めたので、私は彼の体から手を離れた。

「どつという意味だ」

「だから何で陛下が先にお風呂に入るんですか？ 陛下と私はお風呂共通でしょう？ じゃ、私が先じゃないですか！」

「当然ね！」

「何故？」

「珍獣様、こついう場合は王が先に」

「嫌ですよ、へロルドさん！ だってですね？ 陛下の後に入るつて、結局、お風呂つて人間をぬるま湯で煮るつて事でしょ？！ 陛下の煮汁風呂なんて私、願ひ下げです！ それにチンカスが浮いていたらどうするんですか！ 絶叫ものですよ！」

「ちんかす？」

へロルドさんは頬を引き攣らせたが、陛下は意味が判らなかつたように眉をひそめたまま素直に疑問形を返してきた。

私はそれに呆れて、嫌味のように盛大に息を吐いてやる。

「本当にどうしようもないお坊ちゃまなんだから！ 一度世間の辛酸を嘗めた方がいいですよ！ 人生修業の為にね！」

「お前は何を」

「ここに溜まるゴミの事です」

言つて私は陛下の急所をワシツと握つた。

勿論、先ほど金的攻撃はしないつて言つてしまつたから、ギリギリと握り潰すようにはしていない。ただ掴んだだけだ。全く以つて不本意だけどね？

私は陛下の急所を当たり前のように握り、加えてモミモミと少し揉んでから、なんとなく擦つてみた。

うーん、やっぱりお兄ちゃんよりも全然大きいな。他の人はどうなんだろう？ 私つてば比較対象がお兄ちゃんとパパしかいないのが問題だよな。

そんな事を考えながら擦っていると、へロルドさんとリーザ、妖精ら、そして部屋中の侍女らの時間が止まつた。

ディルクさんは腕を組みながら溜息をつき、ガイドさんはこちらを一切気にせず、盥を磨き続け、ヴィルフリートさんは驚いたように目を見張つている。

「擦るな！」

「あれ、なんで皆して同じ顔で固まつてるんですか？」

「当たり前だろう、小娘！」

「あ、もしかして皆も触りたかつたり？」

なんだ、なんだ、それならそうと早く言えばいいのに！

私は擦っている手を千夏ちゃん直伝“華麗なる絶妙手つき”男根蟲惑入門編”に切り替えた。

「っ！ 小娘、止める！」

陛下が逃げるように体を引き、私の手を退かそうとしたけれど、

私は彼の腰に左腕を巻きつけて右手を初級編にグレードアップさせた。ちなみに中級、上級編は服を脱がさないと出来ない技だったりする。

「どうぞ、どうぞ！　こんなので良ければ触ってあげてください！　フニヤチンですけど！　あ、お坊ちゃま陛下の為に解説しますと、フニヤチンというのは、ふにゃふにゃな竿の事ですからね！　堅くないから男の象徴としての魅力は半減以下です！」

「小娘、お前……」

「陛下さー、大きいダケじゃね？」

陛下の額にビシビシツと青筋が走った。

「擦るのを止めると　言っているんだ、余は！」

突然陛下が私の足を払った。

「うわっ！」

そして床とご対面する前に、ひょいと私を荷物のように肩に担ぎ上げ、足早にベッドの方へと向かう。辿り着くと、陛下は私を彼の寝台の上に叩きつけるようにして落とした。

陛下のベッドは最高級品仕様だから、とりあえず乱暴に落とされたところで痛さは全く感じない。でも　。

「ちよつと何するんですか！　最っ高にムカつくんですけど！　この乱暴男！」

「余が先に入浴する！　お前はそこでウオとでも遊んでいる！　デイルク！　小娘にウオでも渡しておけ！」

「……はいはい」

「みゅんぴ。きゅぴきゅぴ」

「っ！　両生類！」

「え、絶対嫌！　陛下の後なんて！　ふざけないで下さいよ！　何が浮いたお風呂なんて冗談じゃないです！」

陛下がギツと私を睨みつけた。

「余が毎日入浴していないとでも？！」

「え、違うんですか？！　少なくとも昨日は入って無いですよね？」

！」

「っ！」

「それに向こうの世界の中世の西洋人って、国王がお風呂に入るのにも会議をしたくらいなんですよ?! 某フランス国王ルイ十四世のことなんですけどね! 風呂嫌いだったらいいんですが、確か毛穴に詰まった垢が流れると病気になるとか、体臭が健康の証だとか、垢が身体を庇護する膜だとかなんとかで生涯ほとんど言っていないほど入浴しなかったらしいんです! だから香水もつけていてですね? 陛下、つけてますよね、香水!」

「ふらんすという国とトリエスの慣習を混同するな!」

「混同したくもなりますよ! 私にとつては昔のフランスもトリエスも一緒です! という訳で私が先に入りますから!」

言つて私がベッドの上で立ち上がり、偉そうに腕を組んでふんと陛下を見下ろすと、陛下が此方を睨みつけながら両手に拳を握つた。

「行け! とつとと行け、お前は! もうよい! ああそうだ!

余はゴミでも何でも溜まっついていてな! 入浴すれば何かが浮くんのだ! だから行け! 先に行けばいい! そしてせいぜい気のすむまで寛いでくればいいだろう?!」

「やややややややっ! 何かが浮くんですか?! 陛下、本当に?! きゃー! え・ん・が・ちよ! 私に触らないで!」

「小娘っ!」

この憤りをどう消化すればいいのか判らないと怒りに震える陛下と、そんな彼を偉そうに鼻先で笑う私に、部屋に居る大半の人間が信じ難い光景を目にしましたといった様子でポカンとしていた。

そんな中。

やっぱりディルクさんは溜息をついていて、グイードさんは我関せずで盥を磨き、ヴィルフリートさんは。

「最高だ! おかしすぎる! 気に入った!」

と言つて、体をクの字に折り曲げて、息も絶え絶えに爆笑していた。

陛下から先行入浴権をもぎ取った私は、むすりとした様子の陛下を置いて、リーザと妖精二人、そして私の護衛のディルクさんとその頭上に居るウオちゃんの五人と一匹で、国王専用の浴場へと向かう事になった。

初日の入浴はひとりで、二回目の入浴はリーザと妖精ら四人で向かったけれど、今回からはディルクさんもついてくるらしい。

陛下の部屋を出る時に、『護衛なのは判るんですけど、陛下の部屋から近いし、ついてこなくても別にいいですよ』とリーザに上着を着せられながら言ったのだけれど、ディルクさんには『仕事ですしね？』と肩を竦められ、陛下とヴィルフリートさんには『今後は必ずディルクをつれていくように』と何故だか強く言われた。

そんな会話がなされてから、今、五人で浴場へ向かっている訳なんだけれど、陛下の部屋から幾らもしないうちに、私はある事を思い出した。

「あ」

私の小さな声に、リーザが聞き洩らすこと無く反応する。

「どうなさいました、珍獣様」

「忘れてた！ あのさ、リーザ。私が向こうから持ってきた荷物って、今、何処にあるの？」

「珍獣様の御荷物でございますか？」

「うん！ 鞆と白い袋のやつー！」

地下で陛下にあげた“ぷっちょ”をカボチャパンツのリボンに挟

み入れた時、リーザが残りの荷物が今必要ないのなら仕舞うっていつて何処かに持っていったんだよね。

リーザのことだから仕舞うって言って捨てたりはしないと勿論思うんだけど、それでも若干不安に思っただけで彼女の顔を見ると、リーザは私を安心させるような微笑みを向けてくれた。

「大丈夫でございますよ。ちゃんと保管してございます。珍獣様がお召になつておられたものも洗つて同じ場所に」

「ありがとう！ 何処に保管してあるの？ 浴場に行く前に出来たら寄りたいたいんだけど可能な場所かなあ？」

「大丈夫でございます。珍獣部屋には専用の収納部屋がございますので、陛下がご使用になられている部屋に置かせて頂いておりますから」

「え」

「こちらでございます」

言つてリーザが向かったのは、陛下の部屋からそう離れていない扉だった。

目的の扉の前に立つと、リーザは懐から鍵を取り出した。鍵は黄金製の鎖に通して首から下げられていた。

カチリと乾いた音を立てて開いた扉の向こうは、部屋の中央に豪華な接セット、三方の壁際には幾つものワードローブと種類の違うテーブルが置いてある。

部屋の広さはトイレよりも少し広くて、四十畳くらいだ。

部屋に入つて、「比較的使用頻度の高い服と小物だけが置いてある部屋なんです」と言いながらリーザが向いた方向、左手側に私の荷物があつた。

壁に押し付けるようにしてある所々に黄金があしらわれたアイボリー色のハーフムーンテーブルの上に、鞆とコンビ二袋がちんまりと置いてある。

同じ場所に制服が無いなと思つてみると、心の声が聞こえた訳ではないだろうに、リーザがハーフムーンテーブルの隣にある同色の

ワードローブを開けた。

「お召し物はこちらでございます」

見ると、向こうの世界と同じ形のハンガーに掛けられた制服と、中にある小棚の上に着が置まれてあった。中身はそれだけで、陛下の物は入っていない。

「ありがとうございます！」

私はキッチンと保管してくれていた事に再度お礼を言ってみる。

「いいえ。何か御必要な物が？」

「うん、陛下と約束してたのを思い出してさあ」

「約束？」

それまで大人しく後ろをついてきていたディルクさんが疑問の声を出した。

妖精二人も同様の気持ちだったようで、同じ方向に首を傾げている。

「地下で、えっとディルクさんとグイードさんが迎えに来てくれる前の事なんですけどね？ 私ってば、陛下に向こうの世界から持ってきたお菓子と甘い飲み物を献上するって約束したんです」

「お菓子と甘い飲み物ですか？ 差し支えなければ、どういった経緯で？」

「たいした事じゃないですよ？ あ、これこれ」

リーザが開けてくれていたワードローブから離れ、ハーフムーンテーブルに近づくと、私はコンビニ袋の中を覗いた。

ぱつと見、中身は何ひとつ減っていないようだ。

「陛下ってば、オナカが空きすぎて元気が出ないっていうから、じゃあ全部献上しますから元気だしてね、楽しみにしてて下さいね、って話になったんです。したら陛下、『ああ』って」

ディルクさんが小さく息を吐いた。

「……どうしたのかな、あの方は」

「どうしたのかな？」

「いえ、こちらの話です。それでその珍獣様の世界から持ってきた

菓子類を、今、陛下に持って行くんですか？」

「あ、違いますよ！ そうじゃなくて、リーザ、」

「なんでございましょう？」

私はリーザの方を向いて、袋から取り出した四本のペットボトルを彼女に差し出した。

言うまでもなく、五百ミリリットルペットボトルのコーラとサイダーとファンタとカルピスだよ！

「これ、冷やせないかな？ 氷とかで」

「大丈夫でございますよ。いま直ぐに冷やした方が宜しいですか？」

「うん、出来れば。陛下にお風呂あがりにも飲んでもらおうと思つて」

お風呂上がりの冷えた炭酸飲料は最高だしね？

私が笑顔で頷くと、ペットボトルを受け取ったリーザに妖精その二が手を差し出した。

「リーザさん、わたくしがやりますわ。 珍獣様、陛下に御献

上なさるお菓子も陛下のお部屋へお持ちした方が宜しいですか？」

「そうだね、お願いしてもいい？ 白い袋の全部がそうなんだけど」

「畏まりました」

妖精その二がペットボトルを受け取りながら、花が咲き誇るようなフワリとした妖精の微笑みを浮かべた。

「話がついたところで、浴場に向かいますでしょうか」

陛下が後に控えていますしね、と言いながら、ディルクさんは私の速度に合わせるように歩くと、扉を開けてくれた。

「ルイーゼ、用が済んだら浴場に」

「判りました、リーザさん」

そう言葉が交わされると、コンビニ袋を持った妖精その二と別れ、私を含めた残りの面々は国王専用の浴場へと向かった。

「では俺は此処で控えていますので、ゆっくりとしてきて下さい」
そう言つてディルクさんが足を止めたのは、国王専用の浴場への扉をくぐり、幾つかの部屋を通過してからだつた。

国王専用という事は、当然、基本は陛下ひとりしか使用しないはずなのに、その浴場は無駄に広く、無駄に豪華で、無駄に用途不明な部屋がたくさんあつた。

ディルクさんが此処に居るといった部屋は、浴場から着替えをする為にあるのだらう。小部屋をひとつ挟んだ部屋で、他と同様豪華仕様だ。

置かれている長椅子ひとつをとつても、パパの年収を軽く超えていそうな代物だ。なにせ長椅子の至る部分に黄金がふんだんに使用されていて、陛下の髪や顔のように無意味にキラキラ仕様なのだ。

これを日本に持つて帰る事ができるなら、ママが以前言っていた住宅ローンの繰り上げ返済ができるんじゃないや？

そう思いながら長椅子を撫でてみると、リーザが次の部屋へと私を促すような仕草をした。

「さあ、珍獣様、あちらへ」

「あ、うん」

返事を返し、ディルクさんを置いてリーザらと隣の小部屋へ移動すると、昨日は居なかつたのに、見知らぬ使用人らしき二人が控えていた。

陛下付きの侍女やリーザ達よりも質素感が漂う服に身を包んだ、私とそう年齢の変わらなそうな女の子たちだ。

二人揃つて瞳と同色の赤みの強い茶色の髪をきつちりと頭上で纏め上げていて、妖精たちのように美少女という訳ではなかつたけれど、なんともそっくりな面立ちだつた。

『もしかして双子だつたり?』と思つてみると、二人が腰を落として礼の形を取る。

「本日、珍獣様のご入浴のお手伝いをさせて頂く事になりました
ローとロツテと申します」

私がおその言葉に挨拶をしようと口を開く前に、リーザが眉をひそめながら直ぐさま返した。

「聞いていないけれど」

どこか鋭さを感じるリーザの声音に、赤茶色の髪の二人の顔が惑いの表情に変わる。

「あの……指示がございましたので」

「誰からの指示ですか？」

「私たちを管理しているゼルマという者ですが……」

「ゼルマ……ゼルマ」ボームかしら？」

「そうでございます」

「そう、判りました。ですが、手伝いは不要とゼルマ」ボームに伝えて下さい。下がって結構ですよ」

リーザの言葉に赤茶色の髪の二人、ローラとロツテが目に見えて焦り出した。

後ろに控えていた妖精その一が、さり気無い所作で私の前に出る。

「こっ困ります！」

「何故ですか？」

「何もせずに直ぐに戻されては叱られてしまいます！」

「ゼルマさんは厳しい人で、それでは私たちが珍獣様に御不興を被ったと思われてしまうんです！」

トリエス女性特有ファツションだと思われる露出の少ないワンピースをキュツと両手で握り締めながら、二人は何やら必死な様子でリーザに訴えた。

しかしリーザは、私には見せない厳しく感じられる態度で撥ね付ける。

「それは此方に関係の無い事です。もう一度言います。下がちなさい」

「リーザ様！」

「お願い致します！」

「下がりなさいと」

「ねね、リーザ、皆で一緒に入ろうよ！」

銭湯みたいだね！ 親睦には裸の付き合いつてなもんだよ！ 日本文化万歳だ！ 私ってば温泉の国の人なんだよね！

それにさあ、きつと私には判らない色々な事が水面下であるんだろうけど、何もしないで戻されたら叱られるって判ってるのにさ、下がれなんて流石にそれは可哀相だよ。

見た感じ、ローラもロツテも悪い人には見えないしね。その辺は安易な判断なのかもしれないんだけどさ。

加えてだよ？

初日のお風呂は完全にひとりだったから良かったんだけど、昨日はちよつと考えさせられたんだよね……。恥ずかしいというか何とかな？

だってさ、異世界トリップ物によくある『お体を隅々までお洗います』とかは、私が手伝い不要と言ったからか無かったんだけど、素っ裸で入浴する私をさ、リーザと妖精二人ってば、浴場の端ですつと見てるんだよね。勿論、服を着たままでだよ？

裸同士なら恥ずかしくない事でもさ、片方が服を着たままなのに、自分だけ裸って、なんだか拷問並みに恥ずかしかったんだよね。正直、初体験の羞恥っぷりだったよ。

だから私ってば思ったんだよね！

「仲良く一緒に入ろうよ！ リーザも妖……ヘルミーネも、ローラもロツテも皆で素っ裸でさ！ さささっ、皆、脱いで？」

パパパツとね！

言いながら、有言実行の私は一番近くに立っていた妖精その一の服に手をかけた。

首後ろの留め金をパチツと外し、ボタンを一気に外しにかかる。

「ちっ珍獣様?! お待ち下さい！」

みるみると露わになっていく妖精の背中は、白く滑らかな肌質で

綺麗だった。

「おおおおおう！ ヘルミーネってば、色っぽい背中だね！」
年下のはずなのにオカシイよ！

「本当にお待ち下さいませ、珍獣様！」

「珍獣様、わたくしたちは御一緒に入浴する事は出来ません」

狼狽えるヘルミーネの声に、リーザの冷静な声が被った。

「え、何で？」

「珍獣様は、わたくしたちがお仕えする対象であられますし、それにこの浴場は陛下専用でございます」

「あ、そうか。でも平気だよ。私に仕えているからというのは、面倒をみてもらってるってだけで、そもそも気にする必要は無い事だし、陛下の浴場云々っていうのもさあ、全く以って気にする必要がないと思うんだよね？」

私は追剥のようにサクサクと妖精の服を脱がせ終わると、後ろの豪華仕様の長椅子に放った。

次いで、問答無用でリボンを引っ張り、やっぱりカボチャパンツだったのかと思しながら、妖精のパンツも脱がしにかかる。

「陛下もさ、美女美少女たちの煮汁風呂なら大歓迎なんじゃないの？ むさ苦しい男の煮汁じゃないんだしさ。　　ってことで、ほら、リーザもローラたちも早く脱・い・で！」

妖精の足首を掴んで強制的に床から浮かせると、私はカボチャパンツを引き抜いた。

残りは向こうの世界の補正下着も真っ青な、半分コルセット機能付きのトリエス王国製ダサダサもっさり鎧ブラだけだ。

私はワシヤワシヤなレースを掻き分けて留め金を見つけると、バリバリと引っ張り外してからリボンを解きにかかる。

「そういう訳には。わたくしたちは飽くまで使用人にすぎません」

「ままままつ！　そう堅い事は言わずに！　じゃ、えつと、えつと、陛下に何か言われたらさ、私のせいにすればいいよ！　『珍獣が偉そうに命令した』とか何とかいってさ！」

王城、ヴィネリンスだっけ？　そこに居る全ての人を自由に使っていて許可が出るんだから、拡大解釈してみましたって言い訳がききそうじゃん？

「ご命令、でございますか？」

リーザの声音がほんの少しだけ変わった。

私はそれに気づき、妖精のブラを外して後ろの長椅子に放りながらリーザの方に視線を向ける。

リーザが自分の服に手を掛けた。

「畏まりました、珍獣様。ご命令でございますれば御一緒させていただきます」

「え？」

「わたくしは陛下から、王権を侵害しないもの、陛下のご命令に反しないものであれば、珍獣様のご命令には絶対的に従うよう命じられております」

「は？」

リーザの想定外すぎる言葉に私は心の底から驚いてしまった。

だって、ちょっと待って、の世界だ。

絶対的って。陛下ってばリーザに一体何を命じているのだろう？

「やっつ、リーザ？　陛下に何か言われたら命令されたって言えばいいよってだけで、私、別にリーザに命令した訳じゃ」

「同じでございます。珍獣様の御言葉はわたくしにとって遂行すべきお言葉でございますので」

「……………」

リーザの言う事に私は咄嗟に何も言えなくなってしまった。こういう場合は、どう切り返したらいいんだろう？

啞然としている私をよそに、リーザは手際良く服を脱いでいく。

「ローラとロッテと言ったかしら？」

「はっ、はい！」

「そうでございますっ！」

「貴女たちも珍獣様のご命令通りに」

「えっ、で……でも」

「此処は陛下専用の浴場でございますので……」

戸惑いだした二人に視線を向ける事なくリーザは服を脱ぎ終わると、私に近づき、妖精その一と一緒に私の服を脱がしだした。

陛下の部屋を出る前に着せられた上着を妖精その一が、陛下に形良く結んでもらったミニミニすけすけキャミソールもどきのナイトドレスのリボンをリーザが解く。

「ローラ、ロツテ。珍獣様のご命令に沿うのは陛下のご意思です。従いなさい」

「は、はいっ！」

「かつ、畏まりましたっ！」

「リ、リーザ？」

「珍獣様、今日はリヤシスという甘い香りのする小さい花をたくさん浮かべてございますから、体もよく解れると思います」

そう言って、私の胸を見て一瞬だけ目を見開いたリーザは、これまでに何度も見せてくれた優しい微笑みを向けてくる。

物凄い勢いで慌てながら服を脱ぐローラとロツテが裸になるのをほんの少し待ってから、私たちは五人揃って陛下専用の無駄に豪華な浴場へと足を踏み入れた。

トリエス国王専用の浴場は、三度目だというのに、何度でも感嘆の溜息が漏れてしまうような豪華さだった。

此処は古代ローマかギリシヤなのかと錯覚させるような神話の神々をモチーフにしたらしき彫像が四隅にデントと設置されていて、湯を張っている空間への目隠しなのか、所々に薄い布が上から垂れ下げられている。

広さも、どこかのスパリゾートにでも迷い込んだかのような規模で、何かの石で造られたお風呂は、学校のプールの半分くらいの大きさだ。

その大きさの風呂一面に白い花が浮かべられている様は実に圧巻で、トリエス王国が半端無く豊かなのか、陛下に浪費癖があるのか、私にポンツと六百五億円をくれる羽振りの良さから、たぶん前者だろう事が手に取るように判る浴場だった。

そしてそれほどの豪華さ、広さであるはずなのに全体的に品良く纏められているのは天晴れとしか言い様がない。

「珍獣様？ どうなさいました？」

そんなゴージャス陛下専用浴場に裸族な五人で足を踏み入れて直ぐ、私がいきなり足を止めたのに、リーザが柔らかい微笑みを浮かべながら問いかけてきた。

ちなみに初めて見るリーザの胸は、私の見立てでは E カップで、形良く、綺麗で柔らかそうなのに思わず手を伸ばしそうになっただけ、私はそれをグツと堪えた。

なんとなくだけど、リーザにはそういう事をしてはいけないような気がするのだ。

「またもや忘れてた!」

「何をでございましたよう?」

「ウオちゃん! 取りに行ってくる! 先に入っていていいよ!」

「珍獣様? 取りに行くとは兄の所にてございますか? お待ちください! そのお姿では!」

「いいから、いいから! 大丈夫! デイルクさんだし!」

「珍獣様、どうかお待ち下さい! 兄だから大丈夫という根拠がわたくしにはよく判りません! 後生でございます!」

「とにかく先に入って待つてて! すぐ戻ってくるからさ! ついて来なくていいから! あ、じゃあ命令ね!」

私がそう言い切ってしまうと、リーザをはじめとした四人が浴場から出ようとするのを止めてしまう。

それにほんの少しだけ複雑な感情がよぎったが、しかしその気持ち以上の便利ツールの入手に、私は幾分満足しながら小部屋へと向かった。

「なんか命令って癖になりそうだよね」

そう呟きながら、そのままトコトコとデイルクさんが控えている部屋の扉へと小走りで向かう。

重厚な観音開きの扉の右側に体を隠しながら、私は顔と肩が出せるくらいにまでゆっくりと扉を開けた。

「デイルクさん!」

呼ぶと、デイルクさんだけでなく、もうひとりの男性も同時に私の方へと振り向く。

どうやら私たちが控えの部屋を出てから人が増えていたようだ。新たに増えた人物は、濃い灰色の髪に暗褐色の瞳で、小説や漫画でいうと幼少期の不幸な出来事から影を背負ってしまった設定が似合いそうな、なかなかナイスな雰囲気を持つ男性だった。顔もそれなりに整っている。年の頃はデイルクさんよりも少し年上くらいに

見えた。

ディルクさん同様、その灰色の髪の毛の彼も帯剣していた。

二人は私の方へ振り向いた途端、軽く目を見開く。

そういえばリーザもさつき私を見て目を見開いてなかったっけ、
と思っていると、表情を元に戻したディルクさんが私の方へと体を
向けた。

「……珍獣様、あえて指摘させてもらいますと、見えていますよ」
「何がですか？」

「左胸です。もう少し体を右に寄せて下さい。それで隠れますから
その言葉に「おおおう」と言いながら私が体を右に寄せている
と、ディルクさんと灰色髪の毛の彼が近づいてきた。

あと数歩という距離を保って、彼らは足を止める。

「どうしました？」

「あ、えつと、ウオちゃんも入れようかなと思ひまして」

「ウオちゃんですか？ 知られたら陛下に怒られますよ？」

あの方の地下での呆れた暴走っぷりを見たでしょう、と言いな
がら、それでも頭上のウオちゃんに彼は手を伸ばした。

「でもウオちゃんも珍獣三号だし、国王専用の浴場に入浴する権利
がありますよね？」

「そう言ってしまうえば、そうなんですけどね。まあ、言わなければ
判らないし、いいか」

湯の中で排泄だけはさせないで下さいね、と若干苦笑い気味では
あったが、私が左手を差し出すとディルクさんはウオちゃんを乗せ
てくれた。

「ウオちゃん、お湯、大丈夫かなあ？ 入れそう？」

「きゅんきゅん」

「うーん、よく判らないけど、大丈夫なのかな？ ところでディル
クさん、その人は？」

「ああ、彼は」

紹介する為に口を開いたディルクさんを、灰色の髪の毛の彼が手で制

して止めた。勿論、手で制したといっても、陛下のように偉そうにではない。自分で言うからいいよ、といった感じだ。

「お初にお目に掛かります、珍獣様。第一騎士団に籍を置かせて頂いておりますフェルテン」ビシヨフと申します」

「フェルテンさん？」

「はい」

はて、どこかで一度名前を聞いたような気が？

そう思って私が首を傾げながら記憶を探っていると、ディルクさんが彼についての紹介を付け足した。

「彼は第一の副団長で、陛下からの信頼も厚い人物です」

だから貴女も信用して大丈夫ですよ、とディルクさんが言うと、フェルテンさんが私に目礼した。

「宜しくお願い致します」

「あ、こちらこそ宜しく申し上げますっ、思い出した！陛下が言ってたんだ！」

「陛下が？」

「何をですか？」

私はウオちゃんをディルクさんのように頭上に乗せながら、彼らに「そうそう」と頷いて見せた。

「昨日の夜、ヘロルドさんやリーザたちが近くに居ない時は、ルドルフさんかヴィルフリートさん、フェルテンさんをつまえるようにって言われたんです」

地下に落ちる前、まだディルクさんが護衛としてついていない時に言われた事だ。

感情の無い、鉱石の冷たさを思わせる瞳を向けられながら言われて
。 そうだ、あの時の陛下はどこか様子がおかしくて

「成程」

「珍獣様、」

「はい」

直ぐに返事してみると、フェルテンさんが僅かに眉を下げ、判

りにくい笑みを向けてきた。

「アツヒエンヴァル団長からの指示で、ディルクが貴女の護衛につくのが難しい時は、私が補助という形で入る事になりましたので、ご了解下さい」

「補助、ですか？」

「基本的に俺が貴女に付きっ切りで護衛しますが、一日中という訳にもいかないのですね」

俺も人間ですし、寝たり休んだりしないと、とディルクさんが冗談めかして言った。

「私は別に全然構わないんですけど」

「ありがとうございます。宜しくお願い致します」

「こちらこそ宜しくお願い致します？」

「まあ、彼との予定外な顔合わせはここまでとして、珍獣様、一糸纏わぬ姿のようですし、風邪を引きますよ」

「あ、そうだった！　じゃ、さくさくと入ってきちゃいますね！」
陛下が後に控えているしね？　遅いつて言われるのも何だしさ。

私が左手を振りながら笑顔を向けて言うと、つられたのかディルクさんが片眉を上げながら笑みを作った。

「ああ、大丈夫ですよ。陛下もヴィ……いえ、アツヒエンヴァル団長と話があるようでしたから、ゆっくりと入ってきて下さい。気の済むまで寛いでいいですよ」

「私も彼と話があるので、どうぞお気になさらず、ごゆっくり」

「そうですね？　じゃあ、遠慮なく！　ウオちゃん、お風呂で泳ごうねー」

「きゅぴきゅぴ、みゅんぴ」

頭上のウオちゃんを撫でながら、もう一方の手で開いている扉に私が手を伸ばすと、気づいたフェルテンさんが「私が」と閉めてくれた。

ディルクさんの頭上にずっといたはずなのに、手の平に感じるウオちゃんの体は相変わらずひんやりとしている。

扉が閉められて私が浴場へと歩いている間も、ウオちゃんはフェルテンさんによってピタリと閉じられた扉の方を向き続けていた。

無駄に豪華な陛下専用の浴場へと戻ると、ディルクさんと似たような苦笑を顔に浮かべたリーザと、可愛らしく首を傾げている花の妖精、何故か興味津々といった視線を向けてくるローラとロッテに迎えられた。

みんな私に裸を見られるのには特に抵抗は無いようで、上も下も隠すような事はしていない。

トリエス女性のデフォルトだと思われる露出度の少ない服は、どうも対外向けのもののようにだ。

それなら『い・ち・ご』はイケるかも、と考えていると、リーザがやんわりとした仕草で私の背中に手を添えた。

「珍獣様、これ以上はお風邪を召してしまいますから、直ぐに湯に入られますよう」

「そうだね、リーザたちも裸だし。あ、ウオちゃんを入れても皆、平気かな？」

「わたくしたちは平気でございますが、ウオちゃんは大丈夫なのでしょうか。両生類でございますし……」

「うーん、よく判らないけど、嫌ならウオちゃん自身が判断して入らないと思うんだよね」

なんとなくなんだけど、ウオちゃん、普通の両生類とは違うような気が私ってばするんだよ。

お湯も平気なような気がするし、駄目なら自分の意思で逃げるなり、拒否の態度を取ると思うんだよね？

だってさ、ウオちゃん、どう考えても人間の言葉を理解していそ

うな鳴き方をするし、それにさあ、トリエスの国民性で皆、思いつきり無視しているけど、ウオちゃんさ、あのアヤシイ地下への出入口を鳴き声だけで閉じたっばいじゃない？

だっけど、みんな本当に何で気にしないんだろう？ 見なかった事にするにしても、ちよつと行き過ぎだよな？

そんな私の内心の疑問を他所に、リーザが優しく微笑みながら、リヤシスという白い花が一面に浮かべられている湯へと私を促す。

「それもそうでございますね。では珍獣様、こちらへ」
湯の張られた縁に辿り着くと、促されるままに私はゆっくりと足を入れた。

そして気づく。

「そうだ、入る前に流さない」と

「珍獣様？」

私はお湯から足を引き抜くと、向こうの基準で二十メートルほど離れたところにある、体を洗うスペースへと向かった。

それに不思議そうな顔をしながら四人がついてくる。

陛下専用の浴場は日本人の私にも違和感のない造りとなっていて、湯を泡だらけにして中で体を洗うという仕様にはなっていなかった。シャワーこそ無かったが、体を温める湯とは別に、体を洗うスペースにも日本の浴槽サイズ三個分の量の湯が張られていて、洗面器に似たような容器が置かれている。

トリエスに来て初めての入浴の時、その日本人にも違和感のない仕様に正直ほつとしたのだ。

ただ、体を洗うスペースには寝そべられる物が設置されていて、その辺りが日本と違うといえば違うのかもしれない。

私は洗面器もどきを手に取ると、湯を汲んで、まずは自分の体を流した。

「入浴する前に軽くでも汚れを流さないと、お湯が汚れちゃうでしょう？ 陛下が後に入るのが判っているのに、流石に可哀相じゃない？」

幾ら一言多いドSで鬼畜極悪なお坊ちゃま陛下でもね？

「ほらほら、不思議そうな顔をしてないで、皆も流して？ お湯の中に入る前に体を流すのは、マナー……えっと後に入る人への気遣いとして大事だからね？」

そんな日本ではごく一般的な事を言いながら私がウオちゃんにも湯をかけると、ウオちゃんは気持ちよさそうに「きゅんきゅん」と首を上下に振った。

ウオちゃんはお湯が平気なようだった。少々熱めのお湯なのにだ。やっぱりウオちゃんは普通の両生類じゃない。

ウオちゃんの汚れを流して、眉を寄せながら私が持ち上げると、両手の指を組んで、ウルウルという表現が当てはまりそうな瞳をしたローラとロツテの感極まった声が聞こえた。

「珍獣様……」

「なんとお優しい……」

「え？」

「私、感動いたしました！ お噂とは全く違います！ こんなにお優しいお方だったなんて！」

「陛下が片時も離さないくらいに御寵愛されるのも納得でございます！ 陛下は素敵な御方をお見つけになられたのでございますね！」

「は？ いやいや、ちょっと待って？」

急に何を言い出しているんだろうと即座に止めてみたが、目を潤ませた二人は全く聞いちゃいなかった。

「きやつ、なんて素敵なんでございましょう！ 広大な国土、強大な力に莫大な富を手中にされ、権勢を欲しいままにされている美貌の国王陛下と世界を隔てた方との運命的な出会い！」

「まるで御伽話のようでございますわ！ そんな運命的な出会いをしたお二人が、一瞬で恋に落ちる！」

「そして大陸の覇者たる王は、全身全霊で愛する女性の為に己の持つ物を捧げ、」

「異国を滅ぼし、」

「力を与え、」

「王妃とされる！」

「陛下は『愛するのはお前だけだ、生涯ただ一人、お前だけを

』なんてあの魅惑的な紫の瞳で真摯に見つめながらおっしゃられて、」

「珍獣様も、『わたくしもですわ、陛下。もう貴方無しでは生きてはいけません』なんておっしゃりながら陛下に身を添われて、」

「お互いのお気持ちを確認し合ったお二人は熱く熱く見つめあい、」
「惹かれるように唇を近づけ、」

「初めはそつと触れるように、」

「次第に小鳥が啄ばむような口づけを、」

「そしてだんだんと熱く激しく濃厚に、」

「深い深い接吻をされるんですわっ！」

「時間も忘れてしまうような甘い甘い接吻をつ！」

「すつ素敵すぎますわ！」

「感動で身が震えてございます！陛下がある時から後宮に全く足をお向けにならず、並み居る美姫すらも一切ご自身にお近づけにならなかったのは、珍獣様に出会う為だったのでございますね！いやっ、なんて素晴らしいの！」

「珍獣様、私、胸がドキドキしてきました！」

「私もでございます！もう張り裂けそう！」

妄想エキスパートな私ですら絶句モノの二人の暴走に、私は思わず呆気にとられてしまった。

とにかく二人を止めなければと、この異世界で頼りになる人リストに入れてあるリーザの腕に縋るように触る。

ローラとロツテの、このとんでもなく有り得ない方向の妄想を耳にしたら、陛下だったら全身の力が抜け切って二度と立ち上がれないかもしれない。下手をすると超絶美形の肉体から魂が抜けてしまう可能性だってある。

だって陛下は、地下での妄想マリリン話にですら本気で鳥肌を立て

てていたんだよ！

「……リーザ、私つてば一体どうすれば？」

「……ふたりとも、その話はいいから早く体を流しなさい。珍獣様のご入浴をお待たせしてはなりません」

リーザがそう言うのと、強い口調ではなかったのに、ローラとロツテがピシッと背筋を伸ばした。

「申し訳ございません！ 直ぐに体を流します！」

「珍獣様！ 私、珍獣様のお優しさに感銘を受けました！ 一生ついていきます！」

「え」

「私もです！ 珍獣様の御為なら例え火の中、水の中でございます！ 珍獣様、私どもは体を流すだけでなく、洗ってから入らせて頂きたいと思えます！ 本来なら陛下専用の湯でございます！ 私ども如きが少しでも汚してはなりませんから！」

「あ……じゃあ、私も洗おうかな……ついでに」

あまりの二人の勢いに微妙に引きながら花の香りのする固形石鹸に手を伸ばすと、ローラが素早くそれを手に取った。

「珍獣様……」

「いや、あのね？」

「私が！」

「いやいやいやいや、自分でね？ 自分でやるから、いいよ！」

「そんな悲しい事をおっしゃらないでください！ ロツテ！」

「任せて、ローラ！ 押さえつけるのは得意よ！ 拘束の達人、ロツテ、いつきまーす！」

「リッ、リーザ、助けて！」

「珍獣様あ！」

「大好きですっ！」

「ぐえっ！」

入浴三回目で完全に油断していた私が馬鹿だった。

強制的に体を洗われるのは、異世界トリップ王道設定のひとつだ

ったのに。

それから少しの間、私はトリエスに来て初めての地獄を味わった。
陛下……。

なんて筋違いな恨みを私は彼に抱いてみたりした。

白い花が浮かべられている湯の中に肩まで体を沈めると、花の甘い香りが鼻腔を擽った。

花といったら桜とかタンポポとかの一般的で道端に咲いているものしか知らない私は、向こうの世界のなんの花の香りに似ているのかまでは判らなかつたけれど、とてもいい匂いの花なのだというのは判った。

湯の中で泳いでいるウオちゃんを眺めながら、気持ちが悪く着くなあ、と小さな白い花、リヤシスを両手で掬っては溢して遊んでみると、私同様、髪も体も洗い終わった四人も、湯の中に体を沈めて寛いでいた……というのは嘘で、寛いでいたのはリーザと妖精だけで、ローラとロツテは両手の指を合わせ組んだ手を胸元に、感激に身を震わせていた。

顔の色も真っ赤で、あれは決して湯で血行が良くなっただけの赤味ではないはずだ。

そんな二人がそのままの状態で、浴場の出入り口側近くに居た私に、バシャバシャと近づいてきた。

引き続きローラとロツテが目をウルウルとさせている。

「ちっ珍獣様、私、感動しております！」

「陛下専用の湯に入れるなんて、夢にも思いませんでした！ ありがとうございます！ きゃっ、私、どうしたらいいんでしょう！」

二人が同時に『ぎゃあー』といった様子で頭を左右に振った。

どうも大興奮中らしい。

普通の人だったらドン引きかもしれないけれど、そういう興奮の仕方をしてしまう気持ちは私にも理解できた。

だって私も、パーシヴァル様との相性度が九十パーセントになった時に発生したイベントで、頭をフリフリ腰をフリフリしてリビングにあるテレビの前で飛び跳ねていた事があるからだ。

ママに『家が壊れる』って怒られて、箱ティッシュを投げられたんだけどね？

まあ、二人の対象が陛下っていうのが、ちょっとどうなの？と私的に思わなくもないんだけど。

「本当にありがとうございます、珍獣様！ 珍獣様は私たちにとって神様です！」

「か……神様って」

「私、私、同僚に自慢しちゃってもいいですか？」

「あ、私も自慢したいです！ 陛下は私たちの間では高嶺の花すぎて、太陽と黄金の紫水晶王子様と影で呼ばれているんです！」

「太陽と黄金の紫水晶王子様？」

見たまんまだね！ なんの捻りも無いよ！

でもでも、それは何？ もしかしなくても私が陛下を御伽の国のメルヘン王子というのと同レベルだったりしちゃう？

やややっ、乙女の妄想ってやつぱり世界を跨いで共通だったんだね！ 凄いよ！ 私も感動したよ！

っていうか、陛下、逃げてー！ 私が地下で言った通り、陛下は妄想の餌になってるよ！ 思いつきりね！

でも陛下、諦めも必要かもしれない！ もうさ、そのキンキラキンの超絶美形で生まれた事を恨むしかないと思っ！ だって陛下、この世界でも別格の容姿っぽいしさ、地位権力財力若さを兼ね備えちゃってるじゃん！ それは仕方ないってな話だよ！

だけど、この世界でも乙女の妄想相手は、国王という地位の人じゃなくて王子様なんだね！

そうだよ！ 普通、国王と言ったら、でっぴりと肥えて脂のの

った中年オヤジか、貴様、いつまで性欲を維持しているんだよ？の色ぼけジジイとか想像しちゃうもんね！ 判る、判る、その感覚！ そんな事を思いながら、同意の意を込めて、ローラとロッテの指を合わせ組んだ手に私が手を載せてみると、ローラが「そういえば」と首を傾げた。

「珍獣様、顎の痣、どうされたんですか？」

「え？」

「そうでございます、私も気になっておりました。お腹と背中にも痣がございますし」

「痣……」

「はい、凄く濃い痣が出来てございます。痛くありませんか？そこまで酷い痣」

背中なんて色が赤黒くなっておりますよ？ 痣の周囲が黄色く変色しております、と続けるローラとロッテの言葉を耳に入れながら、私は自分の顔がどんどん般若のように変化していくのが判った。

当然だよ！

「いや、痛くはないんだけどさ、思い出しちゃったよ、私！ 酷い痣って！ あのDS男！」

どうしてくれよう！

そうだよ！ 痣が直ぐに消える訳がないよね！ 赤黒いつて！黄色く変色してるって！ ドドドドドドドDS陛下め！ 本当にどんだけ力を入れたんだよって話だよ！

私は瞬時に怒りが沸点にまで到達して、勢いよく湯の中で立ちあがり、仁王立ちになった。

湯は立ち上がるとオヘソより少し下くらいの深さしかない。

そんな私にローラとロッテは、パチクリと目を瞬かせた。

リーザと妖精は、とりあえず静観する事に決めたようだった。少し離れたところで湯に体を沈めたままだ。

「珍獣様？」

「あの、どえす男とは、誰の事でございますか？」

「勿論、陛下の事だよ！　ちなみにドSの意味は、由来から詳しく説明しちゃうと某フランスの侯爵の話からしないといけないから簡単に言つとね？　人を苛める事で快感を覚える性癖の持ち主の事で、『ド』がつくのは、その強烈版つて事だよ！　陛下つてば、ドSなんだよ！　初めて会った私にギリギリと腰と顎を」
「きゃっ！　そのお話、私、知っております！」
「私も！　いやーん！　私たち、その愛の証を直接目にする事が出来たのでございますね！　もうもうどうしよう！　感動続きで死んでしまいそうです！」
「え」

なになに、この二人は何をまた言い出しているの？

私つてば、陛下をドSと言つて、その意味も説明したはずだけど？　たつた今ね！

私同様、ローラとロツテも立ちあがった。

「珍獣様、本当に凄いです！　一瞬であの陛下を仕留められるなんて！　尊敬です！」

「……あのね？　本当に何を言つて？」

「きゃっ！　お恍けにならないで下さい！　知っておりますよ、私たち！　いやんっ！」

ローラとロツテが合わせ組んでいた手を解いて、挟むようにして頬に当てた。

「私たちの間では、珍獣様は現れた瞬間に陛下を惚れさせて、虜にされたと専らの噂でございます！」

「そして、陛下と珍獣様が初めて出会われ、永久（とわ）の愛を誓われた場所、白百合の間では、珍獣様は、早く珍獣様に触れたかった陛下によって強引に膝の上に座らされて、その存在を抱きとめるように、再び異世界へ戻つてしまわないように、強く強く強く抱きしめられたのでございますよね！」

「もうギュッと抱きしめて、異世界への扉が再び珍獣様を戻そうとするのを、陛下が必死で止められたと聞いております！」

「……マジで？」

「まじ、でございますか？」

ロツテが、きよとんとした感じで首を傾げた。

「あ、本当に、という意味で」

「本当でございますよ！ 本当なのでございますね！」

「いや、ちよつと？」

「やっぱり本当だったんだ！ だから言ったでしょ、ローラ！」

「私だつて信じていたもの！ ゼルマさんが軽々しく憶測で物を言うなつて、ひとり勝手に怒っていたんじゃない！」

「夢が無いわよね、ゼルマさんつて！」

「本当よ！ だから三十四にもなつて相手が居ないのよ！ 怖いもの！ ゼルマさん！ なんか地味だし！」

「でもゼルマさんつて、そこそこいいところの出つていう噂があるわよね？」

「そうなの？」

怒涛な様子で言葉を発していたローラとロツテが顔を見合わせた。どうやら陛下と私の話から、ゼルマさんという人へ話題が移行したらしい。

私はそれにホツとして、彼女たちから少し距離を取るために後退しようとする、気づいた二人が私の腕をガシツと掴んだ。

「珍獣様！ ゼルマさんの話はどうでもいいとして！」

「珍獣様は陛下に強く抱きしめられた後、陛下に今にも接吻されそうなくらいに顔を近づけられたとか！」

「え」

「陛下は額と額を合わせて、珍獣様の唇に触れそうな距離で、この場ではと必死に耐えられたとお聞きしております！」

「はあー、もう本当に物語のようでございますわ！ 私もその場に居たかったです！」

「いやいや、違うから。そういう事じゃないからって聞いて？ お願いだから聞いて？」

二人は私が否定しても、相変わらず全く聞いちゃくれなかった。ローラもロツテも、「どうして私たちって陛下と珍獣様が永久の愛を誓われた白百合の間の担当じゃないんだろっ？」「それは無理よ、身分的に」と会話を続けている。

陛下、マズイよ！ 否定しても全然聞く耳持ってくれないよ！こんなんじゃない益々、有り得ない方向に噂が立つちゃうよ？！私ってばどうすればいいの？！

っーかさ！ そもそも陛下が後宮に全く通わないから話が無駄に大きくなるんじゃない！ ふざけんな！

とにかく話を違う方向に持っていく為に、私は二人に別の話題を振ることにした。

それは無理につくる話題ではなく、さっきから気になっていた事なのだ。

そう、ローラとロツテの裸族の姿を見てからね？

「ねね、それより、ローラ、ロツテ」

「はい」

「なんでございましょう？」

私は彼女たちの胸に視線を向けた。

「ローラとロツテは今、何歳？」

「私たちは十八でございます」

「それがどうかなさいましたか？」

「よっしゃ！ 同士見つけたよ！」

私は心の中で喜びのガッツポーズを試してみた。

「決まりだね！ 私とローラとロツテの三人で貧乳同盟結成だよ！

今ここにね！ 千夏ちゃんは E カップ、アニは千夏ちゃんを超える測定不能の爆乳、リーザが E で、妖精は C とみたら、彼女たちは除外ね！」

妖精、年下のはずなのに C カップとか本当にオカシイよ！

私の言葉にローラとロツテが目を見開いて驚いたような顔をした。

「……貧乳、」

「……同盟、でございますか？」

そうポツリと呟いた途端、二人の赤茶色の瞳からブワワワツと涙が次から次へと溢れてきた。

それに私も逆に驚いてしまう。

「え、どうしたの？」

「……珍獣様、私たちの胸って、やっぱり貧乳でございますか？」

「気にはなっていたんです。十八にもなって全然出てくる気配が……無くって……」

「皆に比べて、すごく真つ平らなんです……私たち」

「下から上の方向に胸を撫でて、ちつとも手に引つかからなくて……」

「この間、同僚の意地悪な子に、男みたいね、って言われて……」

「その子、他にも、石板の上に小さい豆でも乗っているみたいな胸ね、って……」

「私たち、寝る前に一生懸命、胸を引つ張っているのに、全く大きくならないんです……」

「珍獣様、どうしたら胸って大きくなるんですか？」

「珍獣様、私たちに異世界の知恵をお教え下さい！」

ちよつと待って、二人とも！

気持ちはずいぶん凄く凄く判るけど、それを私に聞いちゃう？ ねえ、聞いちゃうの？

見て見て！ 私も貧乳なんだよ？！ 二人の仲間なんだよ？！

大きくなる方法があるんなら私が聞きたいよ！

とは思ったけれど、涙をポロポロ流しているローラとロツテに言えるはずもなく、私は異世界日本で言われている事を教えてあげることにした。

昨夜、陛下にも言った事なんだけどね？

「異世界では、異性に胸を揉まれ続けると大きくなるって言われてるけど……」

「異性に胸を揉まれ続けると、ですか？」

「うん」

「えっ、ローラ、どうしよう！ 私、お付き合いしている方が居ないわ！」

「私もよ！ 珍獣様、トリエスでは胸の大きな女性が好まれるんです！ 私たち、このままでは胸が小さいから相手が出来なくって、だから揉まれなくって、小さいままだから益々相手が出来なくって……どうすれば……」

二人が輪をかけて泣き出した。

どうも相当なコンプレックスのようだ。

貧乳娘の気持ち判りすぎるだけに、どうにかしてあげたかった。

私は腕を組み、頓智を駆使する坊主のように頭を働かせる。

ポクポクポクポクポク……ドーン！

思いついたよ！

私は二人の肩に安心させるように手を載せた。

「大丈夫！ 自信持って！ ヴイルフリートさん、えっと、第一騎士団団長のヴィルフリートさんね？ 彼がね、大きい胸よりも、可愛い胸の魅力の方に惹かれるって言ってたよ！ ヴイルフリートさん、モテるでしょう？ その人が言うんだもん、安心し」
ローラとロツテが絶望的な声を出した。

「アツヒエンヴァル様では自信なんて持てません、珍獣様！」

「そうでございます！ アツヒエンヴァル様は城中の女性という女性に片っ端からお声をかけておられますし、それに！」

「アツヒエンヴァル様は、美人で胸の大きな女性を好んで口説くと有名でございます！」

「ややややっ、マジで?!」

「まじでございます！」

「ローラ、やっぱり私たちって駄目な女なんだわ！」

「やっぱりそうだったのね！ アツヒエンヴァル様は城中の女性に片っ端からお声をかけておられるのに、私たちって、一度もかけられた事が無いもの！」

ヴィルフリートさんめ！

言ってる事が全然違うよ！ っていうか、どうせならローラとロツテに声くらいかけてあげてよ！

くそう……どうしよう………仕方ない、この際、犠牲になってもらうか。

だってね？ ローラとロツテが貧乳で傷つくのは見てられない

よ。同じ貧乳としてね？

私は彼女たちの肩から手を離し、私の悲しき貧乳がよく見えるように胸を張って、腰に両手を当てた。

「ローラ、ロツテ、見て」

二人が素直に視線を上げた。

「珍獣様？」

「見て、とは何処をでございますか？」

「勿論、私の胸をだよ？」

その言葉に、ローラとロツテの視線が私の胸に留まる。

「私ってば、ローラやロツテに負けなくらいの貧乳でしょ？」

むしろ私は二人に微妙に負けていると思っただよね！

「……あの、」

「……珍獣様は、」

此処での立場は私が目上のようなから正直には言い難いだろう、二人が言葉を濁す。

「正直に言っているよ？ 私が貧乳なのは、もうどうにもならない事実だから。でもね、二人とも、そんなに悲観する事はないよ？

いいこと教えてあげる！」

「いいこと、でございますか？」

「なんでございますか？」

ローラとロツテが藁にも縋るような表情でゴクリと喉を鳴らした。涙もどうやら止まったようだ。

私は二人に笑顔を向ける。

「ローラとロツテの太陽と黄金の紫水晶王子様、つまり陛下なんだけどね？ 陛下の好みはローラとロツテのような貧乳なんだよね。

陛下ってば貧乳が大好きなんだよ！ だから二人は自信を持っていると思う！ だって超絶美形なトリエスの国王陛下が貧乳好きなんだもん！」

ローラとロツテが吃驚に目と口を大きく開いた。

「ほ………本当でございますか?!」

「うん、本当だよ？ 私も貧乳でしょ？」

そんな事を私は特に深く考えもせずと言った。

「陛下は貧乳がお好き……」

「うんうん、好き好き大好き！ 目にしたらチューしたくなるほど大好きなんだよ！」

という事にして安心してよ、とりあえずさ！

付け加えの意味で、私は二人に笑顔の大安売りをする。

「それにさ、私ってば、『い・ち・ご』っていう下着屋さんを開店しようと思ってるの！ 『い・ち・ご』ではね？ 向こうから私が着けてきた異世界日本の貧乳御用達ブラを見本にして、寄せて上げて寄せまくる貧乳モリモリ改造用ブラを製作する予定だからさ！ 脱いたら詐欺とか言われちゃうくらいにモリモリ山モリになって、谷間も作れて、男もコロリと騙せる魔法の下着を販売するから期待してて！ あ、そうだ！ ローラとロツテには、貧乳改造ブラの試作品が出来たら試着してもらおうかな！ その時は呼ぶね！」

「……はい、」

「……ぜひ、」

「……楽しみでございます」

「……私もでございます」

「あれ、二人とも、どうしたの？ なんか上の空だったり？」

私が『い・ち・ご』の夢構想を熱く語っていたのに、ローラとロツテはそれを右から左に聞き流しているふうで、ただひたすらに一点を怖いくらいにじっと見つめていた。

一点、それは私の左胸付近のようで。

「……ローラ、あれって虫刺されの痕じゃないわよね？」

「馬鹿ロツテ！ 虫刺されの痕である訳ないじゃない！」

「やっぱり？！」

「強い口づけの痕よ！ 陛下が珍獣様の胸を強く強く強く吸われた痕に決まってるでしょ！」

「ききききききききやっ！ どうしよう！ 私、興奮で鼻血が出そう

！」

「私も！ 珍獣様、陛下は貧乳がお好きって本当だったのでございますね！」

「それも口づけの痕がそんなに残るほど強く吸われるなんて！ 陛下は珍獣様の貧乳が大好きで仕方ないんですわ！」

「いやん！ 陛下は珍獣様のあの胸に口づけられ、強く吸われ、舐……ああ、駄目！ 私には、これ以上は刺激が強すぎて口に出来ません！」

「なんか私、興奮で頭がクラクラしてきました！」

「私もでございます！」

「……………口づけの痕って？ え？」

私は大興奮中の二人の視線の先、自分の左胸を見下ろしてみた。途端、驚愕の物がデンツと鎮座しているのが目に入る。

私の左胸の先端の直ぐ内側に、赤い印がシツカリと付いていた。

マジで？！ 本気にマジで？！

だからさつき、リーザもディルクさんもフェルテンさんも目を見開いてたの？！

へ・い・か！ バレちゃったよ！ っていうか、どうするの？！

妄想暴走気味のローラとロツテの前で駄目押し証明しちゃったよ？！ 陛下が貧乳好きって事をさ！ それも私の胸が大好きっていうヤバすぎる付加価値もついちゃってだよ？！

キスマークつけちゃったんなら、つけちゃったって言ってよ！

陛下の馬鹿！

知ってたら私も流石に、二人と一緒にお風呂に入ろうなんて言わなかったよ！ 陛下が貧乳好きなんていう危険な嘘も絶対につかなかった！ そもそも私ってば、陛下が爆乳と貧乳のどっちが好きかなんて知らないしさ！ 陛下の女性の好みなんて全く興味無いしさ！ 私は陛下につけられたキスマークへの二人の熱烈な視線がなんとなく居たたまれなくて、両手で胸を覆い隠した。

その私の行為に、ローラとロツテが物凄く残念そうな顔をする。

彼女たちの手が、そろりそろりと伸びてきた。どうやらまだキスマークを見ていたいようだ。私の手を退かそうとしている。

私は顔を引き攣らせながら、必死に頭を働かせた。勿論、現況をどうにかする為にだよ！

流石の私もさ、たとえ事故みたいなキスマークだったとしても、ジロジロ見られ続けるのは嫌だよ！ 乙女なんだよ！ 私も一応ね！ 忘れないでね！ 頼むよ！

「あ、あのね？ ローラ、ロツテ、このお風呂ってば大きいじゃない？ あのさ？ 異世界の泳ぎとか見てみたくない？」

「……異世界の泳ぎでございますか？」

「……いえ、別に」

「いやいやいや、興味持とうよ！ お願いだから持ってみようよ！ 私は二人の伸びてくる手から逃げるように、浴場の出入り口側の淵へと足を掛けて、勢いよく湯からあがった。

ローラとロツテが嫌すぎる事に、物凄く物欲しそうな顔で近くまで来て、私を見上げる。

ちなみにリーザと妖精は、ちょっと引き気味な表情をしながら同じ場所で湯に体を沈めたままでいた。

「……もう少し見ていたいよね、ロツテ」

「……うん、もう少し見ていたい、陛下と珍獣様の愛の印を」

「いや、忘れて！ 本当に忘れてよ！ 頼むから！」

知ってる？！ 私だって、恥ずかしくて泣いちゃう事だってあるんだからね？！ 何度も言うけど、乙女なの！ お・と・め！ 私ってば、純真可憐で繊細な麗しの乙女なんだよ！ ガラスのハートの持ち主なんだよ！ 忘・れ・な・い・で！

私は二人の視線を断ち切るように、思い切って両手を上げ伸ばし、所謂、飛び込みの姿勢を作った。

「異世界の泳ぎ、トリエスで初披露するよ！ 初めはクロールっていう泳ぎね！」

言って、私は腰を曲げた。

視界の隅に、トビウオのように湯の表面を跳ねて遊んでいるウオちゃんが入る。

「第一のコース！ 珍獣二号！ 日本！ ジャパーン！ ジャポーン！ ピッ！」

ホイッスルの音まで自分の口で言っつて、私は四人に異世界の素晴らしい泳ぎを見てもらおうと、指先から湯に入るような水泳の飛び込みを試みる。

だけど私が飛び込む為に淵を蹴った瞬間、リーザと妖精の驚愕と制止の声が耳に入った。

「お止めください！」

「深さが足りません！」

「え？」

飛び込み中の私が、彼女たちの言葉を脳内で理解した時には、すでに遅しかった。

指先から綺麗なフォームで湯の中にザパンツと入った私に、直ぐさま底が目前に迫る。

だから私は咄嗟に腕を引いた。

理由は突き指をしない為にだ。

でもその判断は思いつきり間違っていた。

ゴチンツと壮絶なる衝撃が私の額を襲う。

湯の中に煌めく星々が見えて、頭の全体がグワングワンという音鳴りに支配され始めた時、私は誰かに勢いよく腰を引かれた。

「珍獣様、大丈夫でございますか?!」

「リ、リーザ……いたたた……… やっちゃったよ、でも大丈夫

」

ぐいっと引き上げられ、真後ろから聞こえてくるリーザの声に、心配させないように私が直ぐに返事を返している最中、ローラと口ツテの悲鳴と絶叫が浴場に響き渡った。

「きゃあああ……！」

「珍獣様ああ!!」

「額から血が!!」

「血が出てございます!!」

「どっ、どうしましょう!!」

「手当を! 今すぐ手当をなさないと!!」

そこまで彼女たちが悲鳴と絶叫の言葉を紡いだ時、浴場の出入り口の扉が勢いよく開いた。

重厚な扉であったのにも関わらず、あまりに軽く開くさまは驚くものがあった。

浴場に乱入してきたのはデイルクさんとフェルテンさんだ。

彼らは足を踏み入れた瞬間に私の額を視界に入れたのが判った。

目つきも気配も鋭く、でも、その瞳は一切の感情を排除したように冷たい。

フェルテンさんがデイルクさんに前方を任せたふうにして、剣の柄に手を置き、いつでも抜けるような体制で周囲に視線を走らせる。デイルクさんは。

デイルクさんにとっての異物はローラとロツテだった。

だから彼は表情ひとつ変えず、私の額の血を目に留めた瞬間に素早く剣を抜いた。

何も問わず、理由も原因も考える事すら必要ないと、異物の強制排除を実行しようとしたのだ。

「違います!」

リーザがそう言わなければ、二人は彼の一振り、二振りで確実に死んでいたはずで、ロツテの側頭部ギリギリのところを描く軌跡は止められなかった。

デイルクさんは二人の頭蓋を力で叩き割ろうとしたようだった。

ローラとロツテがあまりの事に気を失って湯の中に沈む。

それを、リーザの言葉で剣を引いたデイルクさんは、少しの罪悪も無いといった様子で見下ろしていた。

フェルテンさんも、ただ黙って目端に留めただけだ。

下半身だけしか浸かっていたから湯冷めしてしまったんだろ。

ほんの少しの間だけだったけれど、リーザに後ろから抱き締められるまで、私は体の震えが止まらなかった。

そして。

押さえた額から数滴の血が湯の中に落ち、それ以上落ちないようにか、それとも癒してくれようとしたのか。

いつのまにか頭上に登っていたウオちゃん、私の血をペロリと舐めた。

カチリと剣を納めた控え目な音をディルクさんが出した時点で、私の入浴の時間が終了した。

促されるままに浴場から出ると、胸元と肩口、袖口に大きなリボンがあしらわれていた透過率ゼロパーセントの白いナイトドレスが手渡される。

丈は短めで脹脛（ふくらはぎ）の中程までしかなく、袖も七分袖だ。

自分で着るからいいよと言ったから、リーザと妖精は手早く自分の服を着ると、フェルテンさんによって小部屋まで運ばれ、未だ意識が戻らないローラとロツテに服を着せていた。

私の額の傷は、ディルクさんに手当をしてもらった。

小部屋に戻って直ぐにタオルらしき布をリーザに巻きつけられた私を手当してくれた彼は、何度か目にした素朴さを感じさせる微笑みを向けてくれた。

その様子は、元の彼に戻ったようで正直なところ私はホツとした。今は傷にガーゼらしき布が当てられて、頭に軽く包帯が巻かれている。

ウオちゃんは再びディルクさんの頭上に戻り、するべき作業を終えた彼らと共に隣の控えの部屋に行ってしまった。

顎と背中のかげに、額の傷、いま思い出したけれど足の小指の内出血といい、私つてばトリエスに来てから、かなりのハイペースで怪我をしているんじゃない？

なんて思いながら、大きなリボンを苦勞しながら結んだ。
何度結びなおしても形良い蝶結びにならないのに諦める。

私はナイトドレスを着終わると一度深呼吸をしてから、リーザたちに近づいた。

体の震えは止まり、今は完全に落ち着いている。

リーザが浴場で抱き締めてくれたのと、ディルクさんが微笑みを見せてくれたからだろうと思われた。

「リーザ、まだ二人とも目を覚ましそうにない？」

私が声をかけると、服を着せ終わったのか、リーザが立ち上がった。

合わせて妖精その一も立ち上がる。

「そうでございますね……もう目を覚ましても良さそうなのでございますが……」

リーザがそう言った時、控えの部屋側の扉が叩かれた。

こちらがそれに応える前に、静かに開かれる。

「失礼いたします。ルイーゼでございます」

「あ、ルイーゼだ！」

「申し訳ございません、少々遅くなってしまいました。珍獣様、お飲み物をお持ちいたしました。問題がございましたとの事、お聞きしております。不安感を静める鎮静作用があるお茶でございますので、お召し上がり下さいませ」

冷たくしてございますよ、と妖精その二がふんわりと微笑んだ。

私は妖精たちに促されて、小部屋の長椅子に座った。

冷たいお茶が差し出され、勧められるままに口をつける。

お茶は向こうの世界のミントティーそのもので、すっきりとした味わいで美味しかった。冷たい液体が食道を伝わるのが、とても心地良い。

「リーザさん、フェルテン様が着替えが済んだようなら彼女たちを運ぶので入室してよいかとの事なのですが」

「珍獣様、許可しても宜しいでしょうか？」

「え？ 私は全然構わないけど」

「ではそのように」

「判りました。 フェルテン様、」

妖精その二が後ろを振り向き、フェルテンさんと呼んだ。

「失礼いたします」

フェルテンさんは小部屋に入ってくると、まずは私に軽く頭を下げた。

次いでリーザの方へと視線を向ける。

「リーザ、君の兄君が事の仔細を説明しろと言っているよ」

フェルテンさんの言葉に、リーザが小さく息をついた。

「判りました。 珍獣様、少しの間、席を外させて頂きます」

「あ、うん！ 私の事は気にしないで！」

私がリーザに笑顔を向けて言うと、彼女は柔らかい微笑みを返し、惚れ惚れするような上品な仕草で隣室へと消えていった。

リーザがディルクさんの居る部屋へと消えると、フェルテンさんはローラとロッテに近づき、片膝をついた。

「ヘルミーネ、何処に運べばいいか判るか？」

「彼女たちはゼルマッポーメ様の管理下の者たちだそうでございます」

妖精その一の言葉に、フェルテンさんが溜息をついた。何故か心の底からの深い深い溜息だ。

「……彼女か。参ったな」

「フェルテンさん、参ったって？」

私はそんな彼の様子がちょっとだけ気になったので聞いてみると、フェルテンさんが困ったような声音を出した。

「とある事情で私は彼女に酷く警戒されているんですよ……」

「警戒？」

「ええ。完全なとぼっちりなんです……仕方ない、行くしかないか。ルイーゼ、私だけでは少々難しい、ついてきてくれ」

「はい」

「それとヘルミーネ、お前はリーザと一緒に今日はもう下がれ。ディルクも了承している」

「ですが、」

「お前もリーザも、その姿で御前に上がるつもりか？ 珍獣様にはディルクが引き続き付くし、陛下の部屋でも彼女がひとりになる事はない。必ず陛下かディルク、アツヒエンヴァル団長が居るはずだ。ディルクもリーザにそう指示を出しているだろう」

「ヘルミーネ、大丈夫だよ！ 私、自分の事は自分で出来るし、後は寝るだけだしね？ もう休んで！ お疲れ様！」

言って、私は長椅子から立ち上がると、妖精その一の肩をポンと叩いた。

「畏まりました、珍獣様。今日はここで失礼させて頂きたいと思えます」

「うん！ ルイーゼもまた明日ね！」

「はい、珍獣様」

「では、リーザの説明もそう長いものではないでしょうし、行きま

すか」
私たちの会話がひと段落するのを待っていたふうのフェルテンさんは、視線をローラとロツテに向けると、彼女たちの腰にそれぞれの腕を巻きつけた。

どうやら荷物のように両肩に担ぐつもりようだ。

腕を巻きつけて、フェルテンさんが勢いに任せて二人同時に持ち上げようとすると、それまでピクリとも動かなかったローラとロツテがパチリと目を覚ました。

そして。

「きつ……………きゃあああああ!!」

「いつ……………いやあああああ!!」

「おっ、襲われちゃうわ、私たち!」

「強引にされちゃうんだわ!」

「無理矢理されちゃうんだわ!」

「私たち、ひとりの男に同時にされちゃうのね!」

「……あら? それは双子なんだから、別にいいんじゃない?」

「……それもそうね?」

「……無理矢理かもしれないけれど、これでもしかして私たち、」

「……相手が出来るということなのかしら?」

「……異性に揉まれ続けると大きくなるのよね?」

「……それは、ようやく私たちにも幸運がめぐって来たという事なのかしら?」

「……ふふ……………うふふつ」

「……くく……………うくくつ」

なにやら楽しそうに笑い合う覚醒早々の二人の会話内容に、私も引いたが、フェルテンさんは心の奥底からドン引きしていた。

彼の上半身が十五センチは後ろに下がっている。

フェルテンさんは遠慮なく嫌そうに顔を歪めると、ローラとロツテに巻きつけていた腕を素早く引いた。

が、そんな事は二人が許さなかった。

許すはずが無かったんだよ!

ローラとロツテがフェルテンさんの腕に夕チの悪い蔓草のように絡みつく。

「見知らぬ旦那様っ! 私たちをお望みなのでございますね!」

「ローラとロツテは、ふたりでひとりでございますので、ふたり揃って嫁がせて頂きたいと思えますっ!」

「不束者ではございますが、未永く夫婦として宜しくお願い致しますっ!」

「旦那様には、絶対に絶対に寂しい思いはさせません!」

「毎日、交互で夜のお相手をさせて頂きますね！」

「楽しみでございますね！」

「旦那様がお仕事に支障を来たすくらいにしちゃったりして！」

「きやつ！ ロツテの助兵衛！」

「そついうローラこそ！」

「いやーん！」

「きゃあー！」

「ところで旦那様、旦那様のお名前をお教え下さいませ！」

「お教え下さいませ！」

「……………」

「ローラ、ロツテ、彼はフェルテン……えっと、ビショフさん？と言つて、第一騎士団の副団長だよ。ローラとロツテにとっては玉の輿になるのかな？ 良かったね？」

「珍獣様つ、何故？！」

フェルテンさんが勢いよく此方に振り向いて、驚愕の表情を私に向けた。

それに私は首を傾げるしかない。

「え、何故つて言われても。二人とも知りたそうだったし、私とローラとロツテは貧乳同盟の同士ですしね？ 彼女たちの貧乳がフェルテンさんに揉まれて少しでも大きくなるんなら、同士として情報提供の協力くらいはしないと。あ、もしかしてフェルテンさんは陛下の覚えもめでたい騎士だから、陛下の許可とかいるんですか？ じゃあ、私がひと肌脱いであげますね！」

「珍獣様、貴女は何を」

「珍獣様、本当でございますか？！」

「珍獣様、なんてなんてお優しい御方なんでしょう！ もうロツテ、大感激でございます！」

ローラとロツテが瞳を潤ませながら、更にフェルテンさんに絡みついた。

今度は両足も使ってみた模様だ。

フェルテンさんの眉間に盛大な皺が寄る。

「……でも陛下は、お許し下さるでしょうか」

「……そうでした、身分が」

「大丈夫じゃないかなあ？ 陛下とはまだごく短い間の飼い主様とペット、愛玩動物の関係でしかないんだけど、話しをした感じ、陛下下って身分に関しては結構考えが柔軟そうな気がするんだよねー」

デイルクさんとの会話を聞いていると特にね？

「そんな訳で陛下には話しておくから、ローラ、ロツテ、フェルテンさん攻略頑張ってください！」

私が気合の意味でビシツとピースサインを二人に向けると、ローラとロツテが真似をして同じように返してきた。

「はい！」

「頑張ります！」

「珍獣様、お待ちください！ 陛下には」

フェルテンさんの慌てた声を意図して無視して、私は妖精たちの方を向いた。

妖精たちはポカンとした様子で、事の成り行きを見守っていたようだ。

「ヘルミーネ、ルイーゼ、おやすみ！ フェルテンさん、ロ

ーラとロツテとお幸せにね！」

言って、微妙な空気を漂わせ始めた小部屋から、私は無責任にもサツサと退散した。

偉そうで高そうで重々しい陛下の部屋の扉の前に辿り着くと、扉の両端に立っている衛兵らしき四人が私に向かって頭を下げた。

そういえば衛兵の件はどうなったんだろうかと思いつながら、私になんとなく彼らに会釈を返していると、特に気に留めるふうでもないディルクさんが、扉を数度叩いて、返事が返ってくる前に遠慮の欠片も無く開けた。

開いた扉を私とディルクさんの二人だけが通り、直ぐに閉じられる。

今、この場にリーザは居なかった。

フェルテンさんが妖精に言っていたように、リーザもディルクさんに今日はもう下がれと指示を出されていたようで、あの後、私がノックも無しに控えの部屋に入ると、彼女は『また明日の朝に参ります』と言ったのだ。

それでディルクさんと彼の頭上のウオちゃんの二人と一匹だけで陛下の部屋に戻ってきたのだけれど。

「ややつ、陛下もヴィルフリートさんも何やってるんですか？」

そんな私とディルクさんの目に入ったのは実に奇妙な光景だった。陛下とヴィルフリートさんは、豪華応接セットに向かい合っており、仲良く何かを話していたようだ。

それ自体は別に奇妙でも何でも無かったのだけれど、ちょっと距離が近すぎた。

ローテーブルに向かって互いに身を乗り出して、なにやら手元の

物を熱心に見ている。

「侍女全員を下げ、男二人きりで額を突き合わせて気持ち悪いこと此の上ないですね。オッサンとグイードはどうしたんですか？ ああ嫌だ。そういうのに俺だけは巻き込まないで欲しいですね。俺は女が好きなんです。　　珍獣様、あの二人は放っておいて、これから城下にも下りて飲みに行きましょうか」

いい店があるんですよ、とデイルクさんが私の肩を抱いた。

「何を馬鹿な事を言っているんだ」

「デイルク、私は自他共に認める女好きだと思っているけどね。陛下はともかく」

「ふざけるな！ 何がともかくだ！ 気持ちが悪い！ いつ余が男などに　　デイルク、小娘の頭に巻かれたものは何だ？」

手元の物を熱心に見ながら口を動かしていた陛下が視線を上げ、私と目があつた瞬間に彼は眉をひそめた。綺麗で冷たい感じのする紫の瞳も同時に細める。

陛下の言葉にヴィルフリートさんも顔を上げると、彼は何故か口角をつと上げた。

「面白いね。私が後見についた事がもう広まったのかな」

「知った者は居ると思うが、それにしても早すぎるだろう。」

小娘、

手に持っていた何かを陛下はヴィルフリートさんに放り、私を手招いた。

私がそれに素直に従い、近づくと、彼は私の腰を引き寄せて自分の横に座らせる。

陛下の手が頭に巻かれている包帯に伸びた。

「デイルク、説明を」

「うーん……どうご説明するべきかな」

デイルクさんが首後ろに手を当てて、陛下の部屋の豪華な天井に目を向けた。

「リーザが悪いのか、俺が事前に中を確認しなかったのがいけない

のか……俺ですかね、やはり」

私の頭の包帯をクルクルと解きながら、ディルクさんの言葉に、陛下の声音に厳しいものが混じりだした。

「中に刺客でも居たのか？ 全ての出入り口、露台の上にも下にも衛兵が立っているのに？ 誰の手の者が判ったのか？」

「いや、そうではなくて、」

「なんだ」

「中に予定外な使用人が居てですね、」

「予定外な使用人？」

「陛下、私が自爆しただけです」

「なに？」

陛下の包帯を解く手が止まった。

彼の澄んだ紫の瞳に私の情けない顔が映り込む。

「自爆したんです、私。お風呂が浅いのに関わらず、頭から飛び込んでみたんです」

「飛び込む？ 何故？」

陛下が不可解すぎるといった表情で首を傾げた。

「それは……だって、飛び込むしかなかったんですもん」

「飛び込むしかないという意味が判らないが？ お前は入浴も普通に出来ないのか」

呆れたといったように陛下は息をついて、私の頭に巻かれた包帯を解くのを再開した。

「頭がおかしいとは判っているんだが、お前のやる事だけは本気で予測がつかないな。まあ、余とお前の間には決して越えられない歴然とした壁が立ちはだかっているし、仕方がないんだが」

「また頭がおかしいって言った！ 仕方がないって！ 人をどうしようもない人外生物みたいに言わないでくださいよ！」

「お前は珍獣だろう？」

今更何を言っているんだ、と人を完全に小馬鹿にしている陛下の言い草にムカツときて、私は半ばヤケクソ気味に言い放つ事にした。

「そうでしたっ！ 私つてば珍獣でしたっ！ じゃ、仕方ないですね！ 鳴き声は何がいいですかね？！ グイドさんが犬だから、私は猫なんかいいかもしれないですねっ！ にゃーん！ にゃーん！ にゃんにゃんにゃんにゃん！ 私つてば飼い主様に服従してるにゃん！ 飼い主様、お望みなら顔を舐めますにゃーん！」

「本当に面白い方ですね、珍獣様。公爵家で飼いたいくらいです。陛下に飽きたら、いつでもウチにいらして下さいね。アツヒエンヴアルは歓迎しますよ。陛下ほどにはいきませんが、大陸でも数本の指に入る贅沢をさせてあげましょう」

首輪は何がいいかな、とヴィルフリートさんは楽しそうに呟き、ああでも、と何やら黒さを感じさせる笑みを浮かべる。

それに背筋がゾクリときて、陛下の大腿あたりの服を私が掴むと彼は面倒そうに「相手にするな。あれの元に身を寄せた日にはお前の中で何かが終わると思え」と言って、包帯を解き終えた。

陛下がそつと傷に当てられていたガーゼらしき布を捲る。

「で、陛下。珍獣様の傷はどうです？ 女性なんですから傷が残るようなものは可哀想ですよ。必要なら今すぐ医師を」

「いや、其処までではないな。切れてはいるが、たいした事はない。だが小娘、たいした傷ではないが瘤にもなっているぞ」

額に瘤を作った娘を初めて見た、と陛下はゆっくりとガーゼを戻し、丁寧に包帯を巻き直しだす。

頭の周りを陛下の腕が囲うようにして動き、私は為すがままになりながら、ただ彼の喉仏を見ていた。

「そつだ、陛下」
「なんだ」

「手で傷を押さえたんですけど、お湯の中に血が数滴垂れちゃったんです。ごめんなさい。お湯、入れなおしてもらって下さい」

「血か。数滴だろう？ 問題ない。その程度で気にしなければならぬほど狭い浴場ではないしな」

陛下は何でもないと口調で言いながら、私の頭の横で包帯を留めているようだった。

彼の手が私の耳に触れては離れる。

「でも……やっぱり血だし」

「慢性あるぎー性鼻炎は感染する病気ではないのだろうか？」

起きた時に言っていたよな？と適当な様子で言っつて、陛下は包帯から手を離れた。

そして、ついでといった感じで、私のナイトドレスの胸元の不格好に結ばれた大きなリボンに手を伸ばす。

少しの躊躇いもなくシユルリとそれを解くと、形良い蝶結びに結びなおしてくれた。

陛下はその結び目に少しだけ満足そうな表情をして、ぼんつと結んだリボンの上を軽く叩く。

「両手を出せ」

そう言われて素直に陛下の前に手を差し出すと、今度は肩口と袖口のリボンも綺麗に結びなおしてくれた。

「おや、仲が良すぎませんか？ なんですか、この妙にほのぼのとした空気は」

「やはりお前もそう思っつのか。俺も地下に迎えにあがった時からずっと思っつていたんだよな。宰相閣下は嫌な予感がすると言っつていてさ」

「嫌な予感ねえ」

「ヴィルフリ………あー………しまったな」

ディルクさんが失敗したと額に両手をあて、そんなディルクさんに陛下は呆れの視線を投げた。

「くだらない事を言っつてないで、いい加減に座れ、ディルク。いつまで突っ立っつているんだ。小娘の前ではいいだろう、もう」

今は気にするべき者は居ないし、小娘は何も考えていないから無意味だ、と続けた陛下の言葉に、ディルクさんが肩を竦めてヴィルフリートさんの横に腰を下ろした。

「ではお言葉に甘えて」

「なんだか不思議な流れになってきたなと思いつながら、私の対面に座ったディルクさんを見ると、彼はどうみてもヴィルフリートさんよりも偉そうに座っていた。」

「ヴィルフリートさんは良くも悪くも品良く貴公子然とした姿勢で寛いでいる。」

「あれ？もしかして三人は仲がいいんですか？お友達関係？」

「友達というより腐れ縁だな」

「嫌になるくらい長い付き合いなんです。俺は五歳からなんです。二人は更に長いですよ」

「産まれて直ぐですかね？私は記憶にないですが」

「直ぐとっていいだろうな。五月蠅く泣きじゃくっていたお前に初めて会ったのが、互いが一歳になる前だし」

「え。陛下、今、なんて言っただんですか？」

「私は陛下の言葉に驚いて、ナイトドレスのリボンを結び終え、正面を向いて座りなおした彼を見遣った。」

「そんな私に、陛下が「なんだ」とキラキラした睫毛に縁取られた紫の瞳を向けてくる。」

「一歳になる前に泣いていたヴィルフリートに会ったと言った」

「き……記憶にあるんですか?! えっ、一歳前なのに?!」

「別に変な事ではないだろうが」

「変ですよ!」

「変ですね」

「俺も変だと思えますよ?」

「三人揃って人を変人みたいに言うな!」

陛下がむっとしたように眉根を寄せた。

「そう怒らないで下さいよ。それより陛下、俺、喉が渴いたんですが、この間言っておいた酒、忘れずに手に入れてくれました? トリエス国王の称号に恥じるような質の酒は認めませんよ、俺」

「あると思うよ」

私的には驚愕なぐらいに大きな態度に変化したディルクさんの疑問形に応えたのは、ヴィルフリートさんだった。

両腕を背凭れに掛けて足を幅広く組んでいるディルクさんの横で、ヴィルフリートさんが年寄り臭く、よいしょ、と立ち上がる。

彼は立ち上がると、手にしていた物をローテーブルの端に置いた。置かれた物は金色の金属で、緩やかな曲線をつけた煙草サイズの物だった。

ヴィルフリートさんはずっと手に持っていたようだ。

先ほど私が陛下に手招かれた時、彼に放られた物だろう。

「この間、山程いろいろと同時に贈られてきていましたよね、陛下。ダルスアーダとレネヴィアとサデヴァと、あと例のラガリネ王国でしたか」

「ああ。要らんに呆れるほどにな」

「ややっ、それは贅沢な話では？！ 王様宛てって何が贈られてくるんですか？」

「うちなんてお歳暮もお中元も、毎年、ママの昔からのお友達から届くふたつしかないんだよ？！」

「パパはね？ ひとつも贈られてこないからね！ 年賀状も四枚しか来ないんだよ！ その事を指摘した事があるんだけど、パパ、」

『最近個人情報保護が五月蠅いからね……』

「って、寂しそうに言うんだよね！」

「ちなみにママに贈られてくるものは、ひとつは私にマッサージを教えてくれた滋岳（しげおか）さんって女性からで、お中元もお歳暮もゼリーを贈ってくれるの！」

「で、もうひとりの人は、我が家では絶対買ってもらえない高級フルーツを贈ってくれるんだよね！ その人は男性で、一度だけ会った事があるんだけど、蘆屋（あしや）さんっていつてカツコイイ人なんだよ！ パパとそう年齢が変わらないらしいんだけど、天と地ほど違うの！」

ママに前、

『蘆屋さんって、ママとどういう知り合いなの？』

って聞いた事があるんだけど、ママ、私に言うのに、あまり気が進まなそうだったんだけどね？

『パパに出会うまで結婚を約束していた人よ。防衛省に勤めているわ。父親は政治家、母親は貴女も知っている企業のやり手の女社長よ』

『え？ それって結婚すればママってば玉の輿だったんじゃない？』

『そうね。でも、それだけよ。防衛省自体には心を惹かれたんだけど、彼自身はつまらない男だったわ。それに比べてパパはね、名前が魅力的すぎだったのよ。趣味の領域に突入していたというのかしら？ ビビビツと運命を感じたわね。加えてパパ自身、とことん要領が悪くて見ていて飽きなかったし、面白い顔をしているでしょ？』

ってね、言ったの！

それでね？

『もう蘆屋さんには会っちゃ駄目よ。彼、貴女と同一年の息子が居て、婚……ううん、とにかくママの言う事は聞かないさいね。蘆屋さんとは今後二度と会わないで。彼が接触してきても無視するのよ。判ったわね？』

ママ、その時、ちょっと厳しい感じの口調だったから、私ってば、よく判らなかつたけど素直に頷いたんだよね？

蘆屋さんからの高級フルーツを食べちゃ駄目って言われた訳じゃなかったし、まあいいかな、と思ったださ。

そんなふう以前に以前の事をつらつらと思いついて、陛下が私の右頬をぐにゅりと摘まんで引っ張った。

「小娘？ 何を呆けている」

「いひゃいひゃいひゃい！ ひゃめれくらひゃいひよ！ いひゃいれす！」

「痛くしているのだから当たり前だ。お前な、人に話を振っておいで、脳内を違う世界に飛ばすとは失礼だとは思わんのか？」

「いひゃい！ へいひゃ、ぐおめんらひゃい！」

痛すぎて直ぐに表面上だけ謝ってみた私に、陛下は「どうしようもないな」と言って、頬から手を離れた。

そして、その手で何故か私の鼻を摘まんで左右に揺する。

「ヴィルフリート、酒はいつものところだ。ディルク望みの物は右上、小娘にはダルスアードから贈られた酒がいいだろうな。余もそれでもいい。中身は確認済みだ。右下にある」

「判りました。では貴方の酒から飴まで入っている飾り棚を漁らせてもらいますよ？」

ヴィルフリートさんは、わざとらしく肩を竦めると、王妃の部屋の方向に向かって歩き出した。

「ヴィルフリート、余計な事は　　っ、そうくるのか！　おい、ヴィルフリート！」

「なんですか？　飴も欲しいんですか？」

「そうではない！　余の寝台の横の引き出しから持ってきてくれ！」

「何をです？」

「拭くものだ！」

「だから私ってば、いっつも鼻が詰まってるって言ったじゃないですか！ 慢性アレルギー性鼻炎なんだって！ いつでも鼻水噴射回路全開なんですよ！ 手に鼻水がついたからって絶対に謝りませんからね！」

鼻から手を離して、その手を開いて眉をこれでもかというくらいに顰めた陛下に、私はベエと舌を出してやった。

彼の手には鼻を一回かんだくらいの量の物体Kがシツカリと付いている。

「珍獣様は本当に何というか、いろいろと凄いですよね。俺、素直に貴女を尊敬しますよ。忠誠でも誓ってみようかな。面白そうだし」

「ふざけた事を言っな！」

「ちよつと陛下！ ふざけた事って！ でもでもディルクさんってば、私に忠誠を誓ってもいいと？」

「ええ。俺の持つ全てを使って、あらゆるものから護ってみせましょうか？ 貴女が不快に感じる人間を消してもいいですよ」

おおおう、そう言われるとなんか私ってば、絶対服従の騎士を従えた女王様みたいじゃ？ 人間を消すっていうのは、かなり不吉すぎるから横に置いておいてね？

私はウキウキしてしまつて体を左右に揺らしていると、ワインボトルを二本、グラスを四つ、陛下の言う拭くものを数枚持ったヴィルフリートさんが戻ってきた。

彼は陛下の膝の上に御所望の物をポトポトと落とすと、陛下の対面に座る。

「私も珍獣様に忠誠を誓ってもいいですね。退屈な日々が楽しくなりそうです。陛下、この際、噂通りに王妃にしてみました？ 通常の王族には決して望めない笑いの絶えない家庭が築けると思いませんか？ 貴方さえその気になれば本気で彼女を支えますが」

そんな貴方たちを眺めて、私とディルクは影で腹をかかえて笑わせていただきます、腹筋が痛くなりそうだ、とクスクスと上品に笑いながら、ヴィルフリートさんはグラスにそれぞれの酒を注いでい

った。

ディルクさんとヴィルフリートさんには赤ワイン色のお酒、陛下と私には桃色の半透明なお酒だ。

「くだらない事を！ 小娘が王妃になどなってみる！ トリエスの品格も落ちるが、それよりも余が過労と心労で倒れるような気がしないか？！ 王であつても少しは選ぶ権利があつていいはずだ！」

手をゴシゴシと拭い、額に青筋を浮かべての陛下の主張に、ディルクさんもヴィルフリートさんも何処吹く風で、各々まったりと寛ぎながらお酒に口をつけていた。

それに陛下の眉が跳ねあがる。

「聞いているのか？！」

「ちよつと！ 私にだつて選ぶ権利がありますよ！」

「何？！」

「つか、陛下さ！ 人を貧乏クジみたいに言わないでくれませんかね？！ 私だつて、陛下みたいな地位権力財力と顔だけの、ひ弱ツ子なんて絶対に嫌です！ 無駄で無意味にキラキラキラ、キンキラキンキラしちゃってさ！ 性格は最悪だし、ドSだし、お皿の端っこにトマト避けちゃうような野菜嫌いのオコチャマだし、加えて、包茎でフニヤチンの早漏じゃないですか！」

「小娘っ！」

「陛下のバーカ！ 私つてば近いうちにトリエスの全国民に陛下の野菜嫌いのオコチャマっぷりをバラしますからね！」

「っ！」

「うーん、お似合いだと思うのは私だけかな？」

「いや、俺もそう思うよ。同じ低い目線で会話が成立しているところが特に。 ほら、陛下、珍獣様、じゃれ合……口喧嘩なさつてないで、飲んだらどうです？ ダルスアーダ王から陛下宛に贈られてきた酒でその色の物は、幻の酒と評判の希少なやつなんじゃないんですか？ 珍獣様、これ一杯で庶民の家三軒分ですから飲んだ方がいいですよ」

俺は甘い酒は好きではないんですが、とディルクさんは身を乗り出して、私の手に桃色のお酒が入られたグラスを持たせてくれた。軽く揺らしてみると、鼻水を出してスッキリした私の鼻腔に甘い香りが入る。

「三軒分？」

「ええ、この酒に使われている果実がなかなか採れないとか。こんな量の酒で家三軒とか庶民はやっていられない話ですよ」

「あ、その気持ち凄く判ります！ 陛下、ディルクさんが薄

給を嘆いてますよ！ 可哀想に！」

「今、ディルクは一言も給金について口にしていないだろう？！」

「は？ そうですかね？ 私には『給料あげるよお、そのケチンボ国王め！ 世界を跨いで地球在住の全人類にまで喧嘩を売っている超絶美形のくせに！ このナルキツソスが！』って聞こえましたけど？！」

「なるきつそす？」

陛下は青筋を額に浮かべ、眉間に皺を作りながら、手を拭っていた布をローテーブルの端に放った。

ゴシゴシと一生懸命拭っていたけれど、まだ気になるのか、彼は二、三度ズボンの大腿部分で擦ってからグラスに手を伸ばす。

「向こうの世界にギリシャ神話つてのがあるんですけどね？ ナルキツソスは、その神話の登場人物なんですけど、美青年で、水に映る自分の姿に恋をして死んで、水仙の花になっちゃったんですよ！ 陛下も超絶美形だし、鏡に映る自分の姿を見て、ウツトリとかしちやってるんじゃないんですか？！ うわっ、キモッ！ 最悪！ ややっ、私ってば寒気がしてきました！ この部屋、超氷河期に突入したんじゃない？！」

就職活動中の学生も真っ青なくらいにね！

「小娘っ……誰が……いや、もうよい。余はお前の言葉などに、まともに相手をしているほど暇ではないんだ」

「……していると思いますけどね」

「同感」

「何か言ったか?!」

陛下はギツとディルクさんとヴィルフリートさんを睨んで、忌々しそうに深呼吸をすると、桃色のお酒を一気に喉に流した。

飲み干すとヴィルフリートさんにグラスを向け、無言で次を催促している。

ヴィルフリートさんが素直にそれに従っていた。

ワインボトルが陛下のグラスに傾けられる。

私はそんな彼らをなんとなく眺めながら、自分のグラスに口をつけた。

日本の法律の『お酒は二十歳になってから』を律儀に守っていた私にとって初めてのお酒だったから、恐る恐るといった感じで飲んでみる。

口に含んだそれは、桃とマンゴーを合わせたジュースのような味だった。

「これ、甘くて美味しい!」

「飲みやすいだろう? だがお前はそれで止めておけ。飲みやすいが強い酒だからな」

言つて、陛下はソファアの背凭れに深く身を預けた。

グラスを数回揺らすと二杯目を口にする。

そんな彼に、手酌で何杯目か判らない早いペースで飲んでいるディルクさんが話かけた。

「そういえば陛下、ダルスアーダ王からの贈り物の中にあつた噂のペルシー百匹は捌き終わつたんですか?」

「あれは偉観だつたね」

ヴィルフリートさんがグラスから口を離して、小さく嘖き出した。

「おお……ペルシーといえば、あのペルシーちゃん? 百匹つて?」
ペルシーという名前に、首と胴体が切り離された可哀想なペルシーちゃんが、私の脳内に生々しく鮮やかに再生される。

それに思わずブルリと体を震わせると、その動きに気づいたらし

い陛下が、私の肩を抱くように腕を乗せて、うんざりとした声を出した。

「ふざけた話でな。ダルスアーダ王から酒や宝飾品、絹に加えて生きた動物が、ペルシーが百匹も贈られてきたんだ。高価な生き物なのは判るんだがな？ 百匹も贈られた余は一体どうすればいいんだと、ダルスアーダ王に一度問うてみたくな」

何度考えても嫌がらせではないかという結論にしか辿りつかないんだ、十八になる王の発想とは思えん、と陛下は三杯目をヴィルフリートさんに催促した。

「百匹は凄いですね……で、陛下はどうしたんですか？」

「売り捌くという手もあったが、仮にも一国の王から贈られてきたものだし、体裁も悪いし、別に金に困っている訳でもないからな。

後宮と城で働いている希望者に適当に配れと命じた。お前がもう少し早く此方の世界に来ていたら、好きなだけ飼う事を許したが」

「え。それは……どうもありがとうございます？ でも……ペルシーはちょっといいです。目を瞑るだけで、両目に針を刺されたペルシーちゃんが思い浮かびますもん、私」

「……そうだな」

そこまで話して、なんとなく二人して「ふう」と息をついていると、ヴィルフリートさんが「ああ、そういえば」と思い出したように言って、自分のグラスにお酒を注いだ。

「珍獣様、そのペルシーの件、贈り主は突き止めていますからご安心ください」

「そうなんですか？」

「ええ」

ヴィルフリートさんは手酌したお酒を一口飲むと、貴公子の微笑みには程遠い笑みを顔に浮かべた。

「この世に存在し、息をしている事を後悔するような嫌がらせと、それ相応の血をみる報復をと思ったのですが、こと貴女がらみに関しては証拠の裏付けを取りたかったので、実に不本意な事に緩い方

法で処理することになってしまいました。珍獣様には申し訳ない限りなのですが」

「いえいえいえいえいえ！是非緩い方法で！」

ヴィルフリートさん、さつきから何気に怖いよ?! なんか纏っているオーラが黒いんだよね！ ねえ、気づいてる?!

「結局、誰だったんだ」

「エルネスティーネ嬢を中心に、クレールヒエン嬢とレティーツィア嬢、アウレーリエ嬢の四人合作のようですね」

「そうか」

「貴方が分配したペルシーを使用したので、探るのに少しの間もかかりませんでしたよ。拍子抜けもいいところです。呆れ果てました」

「愚かだな。判ってはいたが、くだらん」

「エクレア嬢って後宮の人たちですか？」

肩に置かれた陛下の腕の下で身じろぎして、彼の顔を見ながら私が聞くと、つまらなそうにワイングラスに視線を落としていた陛下の紫の瞳が私に向いた。

「えくれあ？」

「私ってば名前が長くて覚えられないから四人の頭文字を合わせてみました！ エクレアは向こうの世界の生菓子的事了！ 甘くて美味しいんですよ？」

「……お前な」

「で、後宮の人たちなんですか？」

「そうだ。トリエス貴族の娘で、エが侯爵家、クレアが伯爵家だ。強欲で腹黒な父親に相応の娘たちといったところか。視界に入れるのも煩わしい者たちだ」

お前の言葉を使うなら“うざい”だな、と陛下が嫌悪も隠さずに言う。

「え、それはちょっと……酷くないですか？」

確かにペルシーちゃんは私的に強烈だったし、罪の無い命を嫌が

らせの為だけに奪ったのは絶対に許せないけれど、父親の強欲腹黒と娘は関係ないんじゃない？

そう思っただけが眉を寄せると、肩に乗っていた陛下の腕が、私の頭を抱えるように後ろから回されて、眉間に指を当てられた。

グイグイと寄せた眉を広げられる。

「そうか？ 後宮にはそういう者達ばかりだが？ 胸糞悪い従僕付きの存在自体がどうでもいい王女から、一族郎党殲滅したくなるような貴族の娘まで勢ぞろいだ。まあ、そういうのを いや、後宮の話は止めよう。気分が悪い」

そう言い捨てて、陛下は手にしていたグラスを置いた。

「さて、そろそろ浴場に行くか。髪も体も気持ち悪いし、なにより小娘の何かも手についたしな」

陛下は広げていた私の眉間を軽く弾くと、肩から腕を引いて立ち上がった。

そんな彼を私は見上げ、たった今、思い出した事を口にする。

「浴場と言えば陛下、バレちゃいましたよ」

「バレた？ 何が？」

お酒を飲んでも澄んでいる紫の瞳を不思議そうに煌めかせて、陛下が座っている私を見下ろした。

彼の視線と私の見る先が絡み合う。

「キスマーク！ 左胸の先端の直ぐ横の強く吸った後ですよ！」

「おや」

ヴィルフリートさんが面白そうに片眉をあげ、陛下がすつと息を吸った。

「……………誰に？」

「リーザとヘルミーネとディルクさんとフェルテンさんと、」

「……………ディルクにフェルテン？ フェルテンが何故？」

「加えてローラとロツテです！」

「ローラ？ ロツテ？」

私の言葉を継いで、陛下の疑問の声に応えたのはディルクさんだ

った。

「予定外の使用人の事ですよ。リーザの話によるとゼルマ「ボーム」管理下の者だそうです」

「ゼルマ「ボーム」？」

「彼女か。厳格で有名な女史ですよ。陛下、覚悟なさった方がよさそうですね。噂がますます酷く大げさに広まりますよ。たとえゼルマが厳しく指導していたとしても、下級使用人は輪をかけて好き勝手に噂しますからね。責任が無いですから」

「楽しくなりそうだと、ヴィルフリートさんが笑いだし、それにつられるようにディルクさんの顔も可笑しそうな表情になっていく。

「これで明日の朝には爆笑ものの噂が城下にも広まってますね。そうなたらどこまで真実とかけ離れたものになるのか。貴方が気になるようでしたら仕入れてきましょうか？ 王都の飲み屋あたりで」

「元第二衛兵隊長の彼のその後も気になりますしね？ 俺のせいといえは俺のせいですから、彼の失職は、とディルクさんは頭上のウオちゃんを器用に避けながら亜麻色の髪を撫でた。

「ウオちゃんといえは、退屈そうに小さな目を陛下に向けている。

「そのような情報は不要だ！」

「条件反射のように声を荒げた陛下に、ヴィルフリートさんが冷たい一言を放った。

「そもそも貴方の甘すぎる目算が原因です。自業自得ですよ」

「……っ」

「でもいいではないですか。私からすれば理想的な流れです」

「何もせずとも勝手に広めてくれるのですから、信憑性が増すというものですよ、とヴィルフリートさんはドス黒い微笑みを顔に浮かべる。

「そんな彼に視線を向けていた陛下は、疲れたように髪を掻きあげた。

「その話はもうよい。浴場に行くてくる」

「あれ、陛下、護衛の人は？ グイードさん居ませんけど、ディルク

クさんが付いていくんですか？」

「いや、ひとりでいい。ディルク、ヴィルフリート、余が戻るまでこの部屋にいてくれ」

「了解」

「判りました。それはそうと陛下、」

「なんだ」

「ゼルマⅡボームを珍獣様付きとして配置換えをしてもいいですかね？」

ヴィルフリートさんの言葉にディルクさんが驚いたように彼の方へ向き、心の底から呆れた顔をした。

ディルクさんの様子を視界に入れたらしき陛下が、不審そうに眉をひそめる。

「何故？」

「リーザら三人だけでは何かと大変だと思えますしね。彼女たちも私的な事はあるでしょうし」

なにせ珍獣様は時の人ですから、とヴィルフリートさんが黒すぎる微笑みを深くした。

「……しらじらしいな。お前の胡散臭さが前面に出ているんだが気づいているか？　まあよい。好きにしろ。小娘に害が無ければ余は構わん」

そうあっさりと許可を出して、陛下は面倒臭そうに右手を振った。

「それは大丈夫です。保障しますよ」

その言葉を聞いているのかどうなのか、言い終わる前に陛下は豪華応接セットから離れる。

そして私たち三人に一度も振り返る事なく、彼は浴場へと部屋を後にした。

陛下が浴場へ行ってしまった後、私の体内時計で二分くらいだったけれど、彼の豪華な部屋に沈黙が訪れた。

一気に静かになってしまった部屋の中で、デイルクさんは黙々とお酒を飲んでいて、ヴィルフリートさんはグラスを持っていない方の手を顎に当て、何故か私の方に碧い瞳を向けている。

デイルクさんの頭の上のウオちゃんは、小さな目を閉じてしまった。寝てしまったのかは判らない。まだウオちゃんとの付き合いが短い私には、いまいち判断がつかなかった。

なにか話題を振った方がいいのかなとちょっと思っただけれど、咄嗟に何も思い浮かばなくて、私もデイルクさんの真似をして、グラスに三分の一ほど残っているお酒に口をつける事にした。

お酒は本当にジューズみたいだった。陛下は強いお酒だと言っていたけれど、アルコール成分が入っているのか正直疑問だ。体に何の変化も感じられないのだ。

向こうの世界のお酒と比較する為にも、『お酒は二十歳になつてから』なんて律儀に守っていないで、パパの晩酌の発泡酒でも飲んでみればよかつたなと思っていると、ヴィルフリートさんが口を開いた。

「珍獣様との共通の話題を探していたのですが、私はまだ貴女について殆ど存じ上げないので悩むところですね。異世界人の貴女にトリエスについてでもお話ししましょうか？ 特産や名産といった事でも」

つまらない話題かもしれないのですが、とヴィルフリートさんは先程までの黒い微笑みを引っ込めて、貴公子の微笑みを私に見せた。「うーん、陛下にパピヨンの話は聞きました」

あと名所の話だったかな？ お湯が噴き出るところがあるとか言っていたかも、と私が首を傾げると、ヴィルフリートさんも少しだけ傾げた。

「パピヨンの話？」

「はい、生で食べられないって」

私はグラスを空にしてローテーブルに置いた。そしてなんとなくヴィルフリートさんの前にあるワインボトルを見てから、彼らの間に置かれているワインボトルに目を向ける。

気づいたディルクさんがヴィルフリートさんの前に置かれていたワインボトルを手にして、私のグラスに注いでくれた。

ダルスアーダ産の甘いお酒の方だ。

中身が満たされたグラスを手にして私が半分くらい飲むと、ヴィルフリートさんが会話を再開する。

「あれは輸送に耐えられませんかからね。珍獣様は生で食べたかったですか？」

「はい、とつても！」

私ってば加工されたものより、フルーツをそのまま食べる方が好きなんだよね！

ヴィルフリートさんの質問に答えながら、私は注がれたお酒をゴクゴクと喉に流し込む。

ぷはっ、と再びグラスを空にすると、ディルクさんが「え？」という顔をしながら、また同じお酒を注いでくれた。

「では、生でも無理ですが、パピヨンで作られたお菓子を近いうちに用意してきましょう。公爵家専属の料理人にパピヨンの菓子作りが上手いのが居るので」

「ややっ、楽しみです！」

ちよっちよっちよっ！ 公爵家専属料理人のお菓子なんて美味し過

ぎて頬がポロリと落ちちゃうんじゃないの？！

私ってば、トリエスに来てから美食家への道が開けちゃってるんじゃない？！

おおおおおう、糖尿に気をつけないと！ 向こうの世界の美食家って、糖尿病になっっている人が多いっていうしね？ よし！ 私、練兵場で運動頑張るよ！ パパみたいに内臓脂肪は溜めないようにしないとね！ 病気のもとだよ！ あれって遺伝するらしいからさ！ パパめ！

メタボなオナカをユツサユツサ揺らし、パツパツで窮屈そうな背広を着て会社に行くパパを思い出しながら、私は三杯目のお酒を一気飲みした。

お酒が本気で美味しい。

私は全然飲み足りなくて、ダルスアーダ産の方のワインボトルに手を伸ばした。

何度もデイルクさんに注いでもらうのも悪いし、手酌しようと思っただからだ。

持ってみるとボトルの半分ちよつとの中身が消えていた。

「これ、全部飲んじゃって平気ですか？ 高いお酒なんですよね？ 陛下、怒ったりするかなあ？」

「いや、あの方は全てに関して執着の薄い方ですし、半端無い金持ちで育ちもいいですから、そういう事に怒りはしません、それより貴女は平気なんですか？ 本当に強い酒なんですよ、それは」

「口当りが良いのをいいことに女性を酔わせて、寝台に連れ込める強い酒として有名なんですよ」

私が四杯目をグラスに注いでいると、デイルクさんは若干心配そうに、ヴィルフリートさんは「特に女性に人気のない貴族がこぞって求めるんです。もともと数が出ない上に求める者が多くて常に品薄でね。だから値も跳ね上がるんですよ」と可笑しそうに私を眺めていた。

「そうなんですか？ うーん、強いとは思えないんですけど……」。

でもこれ、本当に美味しいなあ。私的には余裕かも！ お酒って美味しいんですね！ 私ってば、これが人生初めてなんで、お酒がこんなに美味しいものとは知りませんでした！」

言いながらグビグビと次から次へと飲んでいると、ボトルの中身がどんどん消えていった。

そしてボトルに残っていた全てを胃の中に納めてしまうと、ローテーブルを挟んで対面に座る二人が感嘆の声をあげる。

「凄い！ 珍獣様、体の方は大丈夫ですか？ 頭が朦朧とするかは？」

「本当に凄いですね。私はその酒をその勢いで飲み干した女性を初めてみましたよ」

「別に平気ですけど？ あ、少しだけ体が熱くなってきた感じはするかな？ でも、それだけです」

そう私がケロリとした感じで言うと、ヴィルフリートさんがもう一方のお酒を私のグラスに注いだ。

それで彼らが飲んでいた方のボトルも空になったようだった。

「珍獣様、こちらの酒も飲んでみてください。いま飲んでいたものより二段階くらい強い酒です。甘くはないので女性受けはしないものなのですが」

「おい、ヴィルフリート」

「まあまあ。 珍獣様、どうぞ」

「どうも」

グラスになみなみと注がれて、上品さも何も無かったけれど、私はそれを溢さないように口に運んだ。

先程のお酒同様、一気に胃袋の中に納めてみる。

そんな私を二人がじっと見ていた。

「どうです？」

「いけそうですか？」

私が飲み干したタイミングでディルクさんとヴィルフリートさんが同時に聞いてくる。

空になったグラスを私は口から離れた。

「はい。これも美味しいと思います。甘くはないですけど、深みがあるっていうのかなあ？ でも、これも私的には強いお酒だとは思えないんですけど……」

「ヴィルフリート、仲間が増えたな！」

「素晴らしい！ 他にも持ってこよう。どうせ陛下は甘い酒しか嗜まれない」

「え」

二人の反応に一驚していると、宝の持ち腐れもいいところだ、とヴィルフリートさんが素早く立ち上がってお酒を取りに行き、ディルクさんが空いたボトルと汚れたグラスをローテーブルの端に寄せた。

その場所には先程、ヴィルフリートさんが置いた金色の金属が置いてあった。

「そういえば、さつき陛下とヴィルフリートさんが熱心に見ていたその金属って何ですか？」

私の質問に、飾り棚の前でお酒を物色していたヴィルフリートさんが幾分声を大きくして答えてくれた。

「素材は金ですよ。試作品の一部が出来あがったんです。今日、宰相殿のところへ寄った時に、これで良いか陛下に確認を取ってくれと言われたのでね」

「……ああ、あれか」

「ディルクさん、あれって？」

「うーん……あまり趣味の宜しくない物というべきか、俺には理解したくない発想の品というべきか、」

「そうかな？」

ヴィルフリートさんが戻ってきた。

彼の両手はワインボトルが三本、そのハーフサイズのボトルが三本、グラスが三つと盛り沢山だ。

「まあ、あれですよ、珍獣様。楽しみにして下さい、という事

で

「え？ 私に関係があるんですか？」

「ええ、思いつきり」

ニコリと綺麗な笑顔を見せると、ヴィルフリートさんがハーフサイズのボトルの栓を開けた。

そしてそれを私の前に置く。

「これはトリエスの北方地方の酒で、大陸一、二を争うと言われる強さの酒です」

「ちまちまと手酌も面倒だな。そのままいくか。珍獣様、庶民はこの大きさの瓶は直接いきますから、そのまま飲みませんか？」

「いいですよ！ 私つてば庶民です！ パパの年収は五百万円以下で、トリエスでいうと……えっと、金貨五十枚以下！ 家族五人で年間金貨五十枚以下の収入なんです！ 住宅ローン……うんと、家を買った時の借入の返済と、お兄ちゃんの学費、私と妹の塾代と、ついでにママの趣味代と、妹のボクシングジムと柔道と空手と剣道と合気道の習い事代で家計は常にカツカツ！ ママつてば、いっつも家計簿を開いては溜息をついていたんですよ！」

我が家の窮状を声を大にして訴えて、私は人生に絶望して疲れ果ててしまったサラリーマンが、場末の酒場でお酒を煽るように瓶に直接口をつけ、顔を上げてグビグビと飲んだ。

「ぶははっ！ これも美味しい！ 苦味に深みがあつていいですね！ さっきのお酒よりは強いなつて私にも判ります！」

そんな私に何故か二人が呆れた視線を向けだした。

「珍獣様はいろいろと規格外だなあ」

「流石に私はあの酒をああは飲めない。 珍獣様、足りなかつたら沢山ありますから、これも遠慮せずに飲んで下さいね」

「ありがとうございます！」

ヴィルフリートさんはズズスイツとワインボトルを二本、いま飲んでるハーフサイズのボトル一本を私の前に寄せた。

ディルクさんは私と同じお酒を同じように口を付けて飲みだし、

ヴィルフリートさんはワインボトルの方を開けて新しいグラスに注いでいる。

「パピヨンの話も終わりましたし、次は何の話をしましょうか」

「俺達と珍獣様の共通の話題か。難しいな」

二人が首を捻りながら、各々自分のお酒に目を向けている様子を見遣りながら、私は手にしていたお酒を飲み終えた。

次はヴィルフリートさんが飲んでいるのに挑戦してみよう！

そう思っって手を伸ばすと、デイルクさんがコルク栓を開けてくれる。

私は今更グラスに注いで飲むのも面倒だったので、ハーフボトルのお酒と同じように、ワインボトルの方も直接口を付けて飲むことにした。

喉に流し込むお酒は辛味で、酸味と渋みが絶妙なバランスを構成しているといった感じだった。

「これはこれで美味しいですね！　ところで私っつては思いついたんですけどね？　初恋の話なんてどうですか？　デイルクさんとヴィルフリートさんの！」

私の提案にヴィルフリートさんがグラスから口を離して微笑んだ。「いいですよ？　ああ、でも私の場合は珍獣様に引かれそうな気もするな」

「引かれる？」

「ええ。少々女性向きの話ではないのですよ。話して嫌われたくはないし、うーん」

「やめておいた方がいい、ヴィルフリート。あれは俺も引いた。お前との縁を断とうかと思ったくらいだ。陛下にも知られない方がいいぞ。つい今し方の許可を取り消されたくなければな」

「そこまでかな」

ヴィルフリートさんは納得がいかないといった様子で、手にしているグラスを揺らした。

「あの方は変に潔癖で真面目なところがあるからな。自分に全く関

係なくても、下手をすると遠ざけられるかもな」

「それは困る。陛下と争って勝てるとは思えないし。無謀な事はしない主義でね」

「賢明な主義だ。争ってもみる。この世の反則としか思えない驚異的な頭脳で信じ難い手をそれこそ何百通りも打ってくるぞ」

俺はそんな挑戦はしたくない、とデイルクさんは指を引つ掛けて上着の襟元を緩めた。

「味方であればあれほど頼もしい天才は居ないが、敵となるとね。

私はたまに近隣諸国の王が不憫に思えてくるよ。無能ばかりではないのに、我が陛下と同時代に王となってしまった不運としか言いようがない」

ヴィルフリートさんは陛下とは違う色合いの金色の睫毛を僅かに伏せながら、口元に笑みを作った。

「潔癖といえば陛下が後宮に通わなくなってどのくらい経つかな」

「彼女が来てからだから、六年……いや、七年か？ 物の見事に行かなくなったな」

それ以前も消極的だったけどな、王の義務だから仕方なくといった感じで、とデイルクさんがお酒を口に運びながら言う。

「有り得ない。あれほどの権勢を誇っている王が。本気で世継ぎはどうなさるおつもりなのだろう？ しかも後宮を率先してあのように目も当てられない状態になさって」

「おい、ヴィルフリート、それ以上は」

「ああ、そうだね。 珍獣様、ひとつ面白い話をお聞かせしま

しょう。いま話していたように陛下が後宮に通わなくなって六、七年は経つのですが、理由は幾つかあって、そのひとつが、」

ヴィルフリートさんが可笑しそうに笑った。

「『あれらとの話が苦痛だ。何故、余の予測通りに会話を運び、口にするのだろう。内容もくだらないし、薄いんだ。時間の無駄ではない』ですよ。彼が十七歳の頃に聞いた言葉です。陛下は女性との甘い駆け引きを楽しめない無粋な方なんですよ」

「陛下の予測を外れる会話が出来る者を探す方が難しいと、何故理解できないんだろうな、あの方は。そう考えると珍獣様が初めてかもしれないですね。どのような理由であれ彼が予測出来ないと言った女性は。本当に凄いですよ、貴女は」

「デイルクが聞いた宰相殿の予感が当たるかもな」

「やはりそういう意味か？」

「それ以外考えられないだろう？ 珍獣様、もし陛下が貴女を望んだ場合は私に任せて下さい。アツヒエンヴァルの養女にして、必ず貴女を王妃にしてみせますから。陛下が望まれた女性を側室にするような情けない真似は絶対にしません。邪魔をする者が居ようものなら、片っ端から排除します」

「そこで俺が出番か」

「得意だろう？」

デイルクさんが肩を竦めた。

「あのー…なんか完全に陛下と私を置いてけぼりで話していますけどね？ 私ですけど、陛下もちっとも望んでいないと思うんです。それは置いておいたとしても全く現実的じゃないんですよ。陛下と私が結婚するとか」

私の言葉に二人が不思議そうな顔をして、「現実的でないとは？」とヴィルフリートさんが私に聞いてきた。

「だって陛下ってば王様じゃないですか。一国の国王陛下ですよ？自分を卑下するつもりはこれっぽっちもないし、日本人である事に誇りを持ってますけど、でもでも、やっぱり譲れないものってあるんじゃない？」

そう、彼らの話は、どうにも私にとって現実的に感じられないんだよね？

だってさ、向こうの世界に照らし合わせて考えると非現実的すぎるんだよ。夢物語の域を出ないというか、小説や漫画の世界じゃないんだからさ。

乙女ゲー崇拝者の私でも、彼らが何処まで本気で言っているのか

よく判らないんだよね。

私は一息ついてから、手にしているお酒をゴクリゴクリと飲む。
ワインボトルの三分の二が既に私の胃の中に消えていた。

「譲れないもの?」

「どついう意味ですか?」

「きゅぴ? きゅむきゅむ、きゅきゅみゅ? ……ぴきゅぴび、きゅんきゅん」

陛下が部屋から退出してからは小さな目を閉じていたウオちゃん
が、突然目を開き、声を出した。

それにディルクさんが左手でウオちゃんを触り、ヴィルフリート
さんがチラリと視線を向ける。

「身分は多大な努力と犠牲を払ってヴィルフリートさんとディルク
さんの力で押し上げてもらって解決したとしてもですね、人種の壁
つていふのがあると私つては思つんです。私は向こつの世界でいふ
東洋人で、陛下は向こつの世界でいふ西洋人です。陛下と私は人種
が違つんですよね。庶民同士なら全く問題なくても、王統に違つ人
種を入れるのはどうかと思つんです。そついうのを無理に無視して
強引に押し通して婚姻を結んでも、お互いに不幸になるだけです。
絶対に幸せにはなれません。陛下だつて王様業が忙しいと思つのに、
いらぬ苦勞と苦惱を背負わせるのも可哀想じゃないですか」

残念ながら互いの想いだけではどうにもならない事があるつてい
うのは、悲しい事だけど私にも理解できちゃうんだよね?

世の中、小説や漫画のように都合良くいかないのは常識だし。

そつ思つて言つたのに、ディルクさんもヴィルフリートさんも訳
が判らないとつたような顔をした。

「人種の壁ですか? どついう意味でおつしゃつているのか私には
判りませんが」

「例えば珍獣様の言つ違いとは何です?」

「え? それは……いろいろあると思つますが、一番は肌の色か
なあ?」

「肌の色、ね」

「肌の色が違うから何なのですか？」

「何って言われても……差別とか、そういうのが。向こうの世界でも現代社会ではあからさまにはしていないと私も思っているんですけどね？ ……まあ、私ってば生まれ育った日本を出た事が無いし、日本は島国で、定義の仕方にもよりますけど、昔はともかく今は民族紛争も酷い宗教対立も基本的に無いと言われてる国で……だから、あくまで私が知っている範囲でしか無いんですけど……」

二人の口調と雰囲気からなんとなく責められているような気がしてしまつて、私は口籠るように答えた。

「生まれながらに与えられ、努力しても変えられない、他者の助力によつても変えられない、本人にはどうしようもない事での差別、か」

ヴィルフリートさんがほんの僅かだったけれど、嫌悪を顔に出した。デイルクさんは表情を消してしまったので判らない。

手にしていたお酒を一口二口飲んで、ヴィルフリートさんはグラスを膝の上に乗せるように下ろした。

「この世界にも差別はあります。恥ずかしい話ですが身分が一番大きい。次いで国の格ですかね。確かにトリエスは大国といえるでしょう。他の国々に比べ豊かで、国土も広い。強大で大規模な軍事力も有しています。しかし歴史が浅い。いつまで経っても新興国扱いで、他国に軽んじられているところがあります。その変革は即位されてから陛下が腐心してこられた事のひとつと云っていい。ですが、それは国として、王家としてであって、民衆には関係のない話です。トリエスやその周辺の国々で、人種による差別の概念があると、私はこれまでに耳にした事ありません」

「ヴィルフリートさんの何処か厳しさを感じる言葉に、デイルクさんが続いた。

「人種という言い方をするのであれば、俺達から見て、珍獣様はこの辺りではあまり見ない人種ですね。しかし世界は広い。俺達が未だ知らない土地も人もあるだろうし、肌の色を言うのなら、珍獣様が先ほど口にしていた酒の産地であるダルスアーダ王国の人々は、俺達よりも肌が茶色ですよ。それにトリエスからは遠いですが、他にも違う色の肌を持つ国もあります。トリエスの王都ヴィネヴァルデは大きな都で、人の交流も流通を盛んですから、城下に下りれば俺達と違う人種が普通に居ますよ。彼らの間に人種による差別が無いのは確かです」

「近いうちに遊びにでも連れて行ってあげますね、とデイルクさんは気遣ってくれたのだろうか、口調を和らげて言葉を付け足した。

「世界が違えば考え方も感じ方も違う、という事かもしれないですね。身も蓋もない言い方をすれば、珍獣様、我々からすれば王妃とは、トリエス国王であられる陛下の子を産んでくれさえすればいいのです。勿論、権力闘争や覇権争いのような汚い世界がありますから、身分や血筋、それに付随する権力や人脈、財力といった問題は発生します。ですが少なくとも人種や、前例はありませんが貴女のように異世界人であるというのは、此方の世界ではあまり問題視されません。私から見て貴女は幽鬼の類にも幻妖の類にも見えない。陛下と事を為せば、十分、子を望めるように見えます」

こればかりは実際に挑戦して頂かなければ何とも言い切れないのですけれどね、とヴィルフリートさんは漂う空気を変えようとするかのように貴公子の微笑みを作った。

「まあ、仮定でしかないもので重くなってしまったので、この話はここまでにしましょう」

ですが今の話をして、私は貴女に安心したところもあります、とヴィルフリートさんは言って、ディルクさんは、そうだな、と首肯した。

何に安心したのか私は判らなかつたから、疑問の視線を投げたけれど、二人ともそれには応えてくれなかつた。

「何の話をしていた……そうだ、お前の初恋の話だったな」

「そう、私の初恋の話をするかどうかで話題が逸れた。珍獣様、考えたのですが、やはり私の初恋話は申し訳ないのですが止めておきます。貴女が口になさると思っていないが、万が一という事もありますから」

陛下にだけは知られない方が良さそうなのでディルクとふたりだけの秘密に、とヴィルフリートさんが片目を瞑った。あちらの世界で言うウィंकだ。

重くなってしまった空気を払拭しようとするヴィルフリートさんの行為に、私は乗ることにした。

彼が言ったように、仮定でしかない、それも実現性皆無の話で今

をつまらなくするのは間違っているからだ。

それに折角の人生初のお酒を不味くするのは勿体無いしね？

私はまたお酒をグビッと飲んでから、体がだんだんと熱くなってきたので、脹脛半ば丈のナイトドレスを太股まで捲り上げて足を組んだ。

「うーん……珍獣様、陛下でなくとも少し言いたくなってしまうんですけどね？」

「なんですか、デイルクさん？　っていうか、ヴィルフリートさん！　正直なところヴィルフリートさんの初恋話、私ってば逆に気になっちゃうんですけど、初恋話はデリケート、繊細な話……なのかなあ？　まあ、無理に聞く話ではないですのでね？　デイルクさんとふたりだけの秘密にしてください！　という訳で、デイルクさん！　次はデイルクさんの初恋話にいきたいと思うんですが、どうですか？」

その私の言葉に、デイルクさんが頭痛に襲われたような顔つきをしました。

「あー…いや、俺もちょっと」

「あれ？　デイルクさんも駄目な感じですか？　ヴィルフリートさんと一緒に女性向きではないとか？」

「いえ、俺の場合は裏切られたというか、そういう話ですのでね？

お聞き苦しいと思います」

「おお、裏切られたんですか……」

裏切りという予想外の言葉が彼の口から出たのに、私は手にしていたワインボトルをキュッと握った。

「ええ、まあ」

「裏切られたか、確かに」

ヴィルフリートさんは鬼なのだろうか。突然、吹き出した。

「笑うな！　ヴィルフリート、珍獣様だけでなく陛下や他の誰かに言いでもしたら、その時は覚えていろよ！」

「それは怖いね」

「まままままつ！ デイルクさん怒らないで？ 私つてば絶対に聞きませんから！ ではでは、初恋で傷心してしまつたデイルクさんに慰めのお菓子を！ さつき、ルイーゼが陛下の部屋に持つて…
…あ、あつた！」

浴場に行く前に妖精にお願いしたペットボトルとお菓子を目で探してみると、夕食をとつた食卓の上にちゃんと置いてあつた。

ペットボトルは大きめなワインクーラーに入れられて冷やされているようで、お菓子は袋ごと食卓に乗せられている。

慰めのお菓子を取りに行く為に、私はワインボトルをローテーブルに置くと立ち上がった。

「あれは陛下のですから、いいですよ」

「いえいえ、甘い属性じゃないお菓子ですから大丈夫です！ 向こうの世界では、酒の肴にもなる柿の種を持つてきますから、ちょっと待つて下さいね！」

言い終えると、私はタタタツといった感じで食卓へと走つた。

結構飲んだから足がふらつくかもと思つたのに、私の体は相変わらず何の変化もなかつた。眩暈も吐き気も思考が鈍る事も、パパがよく言つていた頭痛も全くない。

本当にちよつと体が熱いな、といった程度でしかなかつた。

「酒の肴ですか」

「それは是非食べてみたいですね。仕切り直しますか」

ヴィルフリートさんも立ち上がり、お酒が納められているらしい陛下の飾り棚、向こうでいうゴージャスキャビネットへとまた向かつていった。

「いま思い出したのですが、珍獣様に召し上がって頂きたい酒があるのですよ」

嬉しそうな感じの口調でそう言つて、ヴィルフリートさんは迷わずキャビネットから目的の酒を取りだしたようだった。

食卓の上のコンビニ袋から柿の種を手にとつた私と、ワインボトル一本を手にしたヴィルフリートさんが同時に豪華応接セットに戻

る。

ヴィルフリートさんは私に見せるようにワインボトルを軽く振って、栓を抜き、グラスに注いでいった。

注がれるお酒は濃い琥珀色だ。

「これは陛下の心の中の宿敵国の腰巾着、ラガリネ王国の記念すべき第三回目の苦渋の贈り物です。とても美味しいと思いますよ？」

是非、彼らの笑える苦悶を味わってみてください」

「……え、それってちよつと悪趣味じゃ？」

お酒の味わい方として思いっきり間違っているよね？ 私の気のせいじゃないよね？

「珍獣様、気にしないでください。到底理解しえない悪趣味な発想だと俺も思いますから。それはそうと珍獣様の口に合うかな。珍獣様、ヴィルフリートの言う事はともかく、飲んでみますか？ これは庶民の家一軒分です」

「一軒分ですかあ。じゃあ、飲んでみたいかも！ ややつ、私つてば今夜、庶民の家を何軒分飲んだらう！」

私、このままだと超贅沢な女になっていきそうだよな！

癖になっちゃうかも！

「どうぞ」

「ありがとうございます！」

お酒が注がれたグラスをヴィルフリートさんに手渡され、左手に持っていた柿の種をローテーブルに置くと、私はグイッと喉に流し込んでみた。

「彼らの苦悶の味はどうですか？」

「ヴィルフリート……」

「ぶはあ！ 飲み終わりました！ えつとですね、なんて言えばいいんだろう？ 香り高いつていうんでしょうか？ 花の香りと向こうでいうバニラの味わいがして、口に含むとスパイシー……うーん、胡椒っぽい香辛料の刺激が少々あります。樽香もするかも？ 柔らかい口当たりで凄く美味しいと思います！ そうですかあ、これが

ラガリネ王国の苦悶の味……じゃあ、彼らに更なる苦渋と苦悶と惨劇を？ 血の雨を彼（か）の地に降らせ？ ラガリネを阿鼻叫喚の巷と化し、トリエスに勝利の美酒をもたらすのだ？ そんな感じですか？」

「いや、珍獣様、ヴィルフリートのお話は、」

「流石珍獣様。物凄く私と気が合いそうですね。貴女のような思考の持ち主の女性は初めてです。嬉しいですね。さあ甘美なる酒を、もう一杯」

「おおおう、どうもありがとうございます！ ではでは、陛下のラガリネ王国侵攻滅亡殲滅を祝して！ トリエス王国万歳！ 陛下の御世に幸あれ栄華あれ！ 行け行けトリエス、目指すは世界征服だ！ 諸外国を滅ぼし尽くし、比類なき大帝國を築くのだ！ きゃっ！ トリエスかっこいい！ トリエス最高！ トリエス大好き！ トリエスラヴラヴ！ トリエス王国と陛下にカンパリー！」

「乾杯！」

「陛下は今現在ラガリネに侵攻してなんていませんよ！ は

あ……この二人を同時に相手にするのは疲れるな。陛下はいつまで風呂に入っているつもり……そうだ、あの方は長風呂だった」

私とヴィルフリートさんがお互いのグラスをチンツと鳴らして楽しく笑いあっている横で、ディルクさんは明後日の方向を見ながら、げんなりとしていた。

「ぶふう！ ラガリネ王国苦悶のお酒、超うまうま！ あ、そうだ！ 柿の種を忘れてた！ さささっ、ディルクさん、ヴィルフリートさん、異世界日本のお菓子、柿の種も酒の肴として食べてみて下さいー！」

ヴィルフリートさんと乾杯してグラスに注がれた分のお酒を一気に飲み干すと、私はグラスを置いて、柿の種の袋を手に取った。

柿の種の外袋には、『スーパーフレッシュ十袋詰』と書いてあり、中には表示通り小袋が十袋入っている。

私はベリンツと外袋を開けると、小袋をふたつ取り出した。そし

て、ふたつの小袋も開けてから、彼らに渡す。

「はい、デイルクさん、ヴィルフリートさん。異世界日本のお菓子で酒の肴にもなる柿の種です」

「どうも」

「ありがとうございます」

デイルクさんとヴィルフリートさんは柿の種を手渡されると、まずは食べずに袋を観察しているようだった。

「袋が透明だな」

「材質がこの大陸には無いものだ。やはり異世界ともなると色々と違ってくるものだね。 珍獣様、文字のようなものが書いてあるのですが、これはなんと読むのですか？」

「え、どれですか？」

小袋の一部分を形の良い指でさして、ヴィルフリートさんは私の方へとそれを向けた。

「『亀田の柿の種』って書いてあります。で、これは『あけくち』です。日本の特殊文字である漢字と平仮名ですよ。別に怪しい事は書いてないです。裏面も暇なら読めば？くらいの事しか書いてありません。そんな訳でどうぞ」

「では遠慮なく」

「いただきます」

二人は小袋に視線を落とすと、同時に柿の種を一粒取り出し、パクリと口に入れた。

静かな陛下の部屋に、ポリポリと彼らが咀嚼する小さな音が発生する。

「どうですか？ 異世界日本のお菓子、お口に合います？」

「……………」

「……………」

私の質問には応えず、二人がまた柿の種を一粒口に入れた。

再びポリポリと小さな音が聞こえて暫し。

デイルクさんとヴィルフリートさんが視線を上げた。

「珍獣様、これ美味しいですね。かきの種でしたっけ？ 俺、こういうの好きです」

「おおおお、良かったです！ まだ八袋もありますから、お好きなだけどうぞ！」

「ありがとうございます。小腹が空いていたので嬉しいです」

そう言つて、ディルクさんの食べるペースが上がった横で、ヴィルフリートさんは小袋をじっと眺めていた。

「あれ、ヴィルフリートさん的には駄目な感じでした？」

「いえ、美味しいと思います。ですが、不思議な味ですね。使用されている調味料がトリエスには無いものだな」

「あー… ちよつと待つて下さいね。外袋の裏に原材料名が書いてありますから」

私はローテーブルの上に置いておいた外袋をクルリと返して、原材料名に目を通した。

「うーんと、ピーナッツ、これは豆の事です。食塩、植物油脂、米、でん粉、醤油……これですかね。後は砂糖とかカツオという魚ですもん。ソルビトール、パプリカ色素、カラメル色素、香辛料抽出物、乳化剤は私にもよく判りません。トリエスに無さそうで味に関係ありそうなのは醤油という調味料っばいです」

「しょうゆ、ですか？」

「はい。醤油というのは基本的に、黒色の液体に塩味がついている調味料で、確か前にNHKで……そうか、えつとNHKは向こうの世界で情報を発信している団体で、受信料を取っているんですが、我が家は払ってないみたいです。で、それはいいとして、醤油の原料は大豆っていう豆と小麦粉だったかなあ？ それで、大豆と小麦を蒸したりして、麹菌とかを繁殖させて麹を作つて、食塩水と混ぜたりするんだつたかな？ 大まかに言つとそんな調味料なんですけど……」

「厳密には種類も工程も、こんなもんじゃないと思うんだけどね？ 首を捻りながらも私なりに頑張つて醤油について説明を試みる」

と、ヴィルフリートさんは「そうですか」と残念そうな顔をした。
「再現は無理そうですね。しょうゆにしても、少なくともこうじ菌というものが無ければ駄目だろうし、製造工程も当然いろいろあるでしょう」

「おおぅ……やっぱりそうですね。私ってば、近いうちに醤油と味噌に餓え餓えになりそうです」

「なんだか味噌汁プリーズとか素で言いそうだよな？」

今まで醤油を混ぜ混ぜした卵かけご飯とワカメの味噌汁にうんざりしていたけれど、もう一生食べられないのかもしれないと思うと、彼らを深く深く愛していたんだなっていうのがよく判るよ。

大切なものは失ってから気づく。

向こうの世界でよく言われている言葉だけど、本当にその通りだよな。

そんなふうにいるながら、しょんぼりしていると、ヴィルフリートさんが私の空いたグラスにラガリネ王国苦悶のお酒を注いでくれた。

「元気を出して下さい。しょうゆは無理ですが、私が入手できるものなら何でも手に入れてあげますから。今の時点で何か望みの物はありますか？」

そんな物凄く優しい事を言って、貴公子の微笑みを惜しみなく披露してくれるヴィルフリートさんに感動しながら、私は醤油の説明で思い出した事を聞いてみる事にした。

「ヴィルフリートさん、私ってば醤油の原料の大豆で思い出したんですが、トリエスって小豆っていう豆、ありますか？」

「あずきですか？ 私は知りませんね。ディルク、君は？」

「俺も聞いた事はないな。珍獣様、どいう豆ですか？」

「大きさはこれくらいで、」

言いながら、私は四本の指で小さな丸を作って小豆を表した。

ヴィルフリートさんが顎に手を当てて考えているふうになっている。ディルクさんはピーナッツを手にとって口に入れていた。

「色は小豆色……うーん、なんと表現すれば……黒みを帯びた赤色な豆というか」

「あつたかな。意識して食べていなかったし」

「俺も」

「で、珍獣様、そのあずきがどうかしたのですか？」

「えっとですね、陛下にドラヤキっていう異世界日本のお菓子を作ってあげる約束をしていますが？ それに小豆が必要なんですけど……」

私の言葉に、ディルクさんの亜麻色の瞳に呆れの色が滲んだ。

「その約束はもしかして地下ですか？」

「はい、そうです」

「あの方が甘い物好きなのは知っていたが、そういう人だったか？」

「うーん、どうだったかな。少なくともこれまで聞いた事はないが……。でもそうですね、珍獣様、私の方で手に入る豆を全種類調達しておきましょう」

「あ、お願いしてもいいですか？」

「ええ。陛下との約束でもあるようですしね。数日以内に」

「ありがとうございます！ 作ったらヴィルフリートさんとディルクさんにもお裾分けしますね！」

「それは楽しみです」

なんともあつさり通る要望に私が顔を緩ませると、ヴィルフリートさんは微笑みを返しながら、ラガリネ王国苦悶のお酒を一口飲んだ。

「それにしても長いな、あの方の入浴は」

「長風呂だからな。陛下は」

「そうですねですか？」

ディルクさんが笑いをかみ殺した。

「噂によるとひとり浴場に籠り、暫く湯に浸かっているとか。寝ているんじゃないですかね。珍獣様、陛下は基本的によく寝るんです」

「お」

「え」

「そうだったね。ではまだ戻ってこないだろう。それまで他に何の話でも」

「あー…じゃあ、王様ゲームでもしましょうか！」

うーん、と考え出してしまったヴィルフリートさんとディルクさんに、私は日本で有名な遊びを提案した。

なにも陛下が戻ってくるまで無理に話題を探す必要もないしね？
そんな考えのもとに口にした私の提案に、二人が首を傾げた。

「王様ゲーむ？」

「何ですか、それは」

「そっか。ゲームは遊戯、勝負事という意味で、王様ゲームとは、クジで無作為に決めた王様役の人の命令を、他の参加者が絶対的に聞くという遊びです。例えば、引いたクジ番号の二番の人と五番の人はキス、口付けをする事、とか、三番の人は全裸になる事、とかなんですけどね？ でも、今は人数が三人しか居ないし、何番の人が何をするというだけじゃなくて、王様の希望も聞くという事でどうでしょう？ 暇つぶしにやってみませんか？」

「面白そうですね。やりましょう」

ぜひ王様になってみたいな、とヴィルフリートさんがニヤリと口角を上げた。

「おいおい、ヴィルフリート」

「流石ヴィルフリートさん！ ノリがいいですね！」

「お褒めに与り光栄です、珍獣様。さて、クジが必要ですね。」

陛下の机の中に何か適当な物があるかな

後半を呟くように言うと、ヴィルフリートさんは腰を上げた。そして今朝、地下から戻ってきた時に、陛下が書類にサインをしていた机へと向かっていく。

辿り着くと彼は、少しの躊躇いもなく引き出しを開けた。

「ここにも飴が入っているのか。もう直ぐ二十七にお成りになるのに、こういうのもどうなのかな。これでいいか」

私はお酒を飲みながら、ディルクさんは柿の種を食べながら待っている、ヴィルフリートさんが左手に何かを持って戻ってきた。彼は再びディルクさんの横に腰を下ろすと手を広げる。

「……………」

「……………」

「珍獣様、これでどうでしょう？ 棒の下部に王の印として赤く塗ってきましたが」

「……………」

「……………」

「おや、駄目ですかね？」

「いえ、あの…………えっと、それっては何ですか？」

「あの方の机の引き出しにはそんな物が入っているのか」

「私も少し驚いた、というより呆れたね。珍獣様、ご覧の通り飴ですよ。それも子供が好むような」

「ペコちゃんのポップキャンディー……………」

思わず唖ってしまった私の視線の先にあったのは、五百円玉サイズの平たい飴に短い棒が付いている、ペコちゃんのポップキャンディーにそっくりな飴だった。

ヴィルフリートさんの手の上のみつつの飴は、全て透き通った薄い赤色で、イチゴ味に見える。

ヴィルフリートさんは呆れたと言い、ディルクさんも脱力したような表情をしていたけれど、流石の私も唾然としてしまった。

「陛下の甘党は筋金入りですね。徹底して逆になつてしまいました」

「俺が陛下と初めて会った五歳の時も、甘つたるいミルクを飲んでいましたからね……………」

「良かれと思われて用意していたのは判っていたから勧められるままに飲み続けていたが、あれは苦痛だったね」

「ああ。お陰で俺はミルクが嫌いになつた」

城に上がる前は結構飲んでいただけだな、とディルクさんは空になった柿の種の袋をローテーブルに置いた。

「王様げーむ付き合います。やりましょー」

「では、私は残ったものにしますから、珍獣様とデイルクは同時に」
「はい」

「判った」

私とデイルクさんが了承の意を口にすると、ヴィルフリートさんはペコちゃんのポップキャンディーもどきを持った手を、私たちの間に差し出した。

ほんの少し迷って、私が真ん中のポップキャンディーを摘まむと、デイルクさんが左のを摘まむ。

お互いに一度目を合わせると、同時に引いた。

「おおー」

「珍獣様が王様ですね。何を命令されますか？ それとも希望を？
なんでもいいですよ」

ヴィルフリートさんはそう言うと、ポップキャンディーをローテーブルに置いた。

デイルクさんも片眉を上げると同じくポップキャンディーを置いて、「お好きなように、王様」と背凭れに深く身を預ける。

そんな希望要望要求が百パーセント何でも通っちゃいそうな状況に、私の心臓が急激にバクバクと激しい鼓動を打ち始めた。

やややややややややっ、これは調子に乗ってみちゃうべきなんだろうか？！

言っちゃってもいいのかな？

二人とも怒らないかな？

物心がついた時からの夢を、今、私つてば叶えちゃってもいいのかな？！

どう思いますか？！ 私の心の中の唯一絶対神パーシヴァル様！
よしっ！ 迷っても仕方ないよね？！ 夢が叶いそうな時に勇気を出さなくてどうする、私！ パーシヴァル様だって、背中を押し
てくれてるよ！ きつとね！

「実は私、小さい頃からの夢があるんです」

「夢ですか？」

「どういった夢ですか？ 私たちで叶えられそうな夢でしたら、叶えて差し上げますが」

「いいんですか？」

私つてば卑怯にも言質取っちゃうよ？！

そんな私の確認の言葉に、二人が「どうぞ」と促す。

「叶えられる夢ならいいのですが」

「なにか欲しい物があるのでしたら、アツヒエンヴァルは陛下に次ぐ資産家ですから気にせずにあたるといいですよ」

うわ……引き出し無尽蔵ATMがここにも！ 陛下が一号機なら、ヴィルフリートさんは二号機だね！ と一瞬思ったけれど、私の夢は全くお金は関係なかったから、違うんです、とブンブンと手を振った。

「買って欲しい物がある訳じゃないんです！ そもそも私、トリエスに何かがあるのかよく判っていませんし！ そうじゃなくってですね、私つてば異世界トリップを果たしたのに、えっと、せっかく異世界に来たのにですね？ ぶっちゃけ殆ど王道設定に沿ってないんですよ！」

言つて、私はドンツとローテーブルを叩いた。

「異世界に渡った先の陛下は、異世界トリップ男役失格男だし、逆ハ一要素も物凄く弱いんです！ っていうか、信じられない事に今の時点で皆無なんですよ！ 今まであえて気づかないふりをしていたんですが、もう限界です！ 私の栄えある逆ハ一構成団ブルーヘヴンの勧誘だつて全くといっていいほど出来てないし！ トリエスに来て二日と数時間、団員番号一番にヘロルドさん、二番にバルツアーさん、三番にユーリウス少年、四番にラードルフさん、五番にデイルクさん、六番にグイードさん、七番にルドルフさんの計七人しかまだ居ないんですよ！ しかもこの七人のうち、自分がブルーヘヴンの団員だつて知っているのが約半分です！ 有り得ない！ 異世界トリップものの主人公には、相手役の超イケメンに大事にさ

れて、求愛されて、周囲に居る無数のイイオトコたちに愛されまくって尽くされまくるのが約束されているはずなのに！」

声を大にして言った私の言葉に、ヴィルフリートさんは、よく判らないといったように眉を下げた。

それにデイルクさんが反応する。

「ヴィルフリート、逆はーとは、いい男が彼女に尽くす集団の事らしいぞ」

「ブルーヘヴンとは？ 君は団員のようだが」

「ああ、それは気づいたら入団していたんだ。ブルーヘヴンは単に逆はー構成団の名称だろう？」

「デイルクさん、正解です！ でも単なる構成団の名称っていうのはいただけません！ 二人ともよく聞いて下さいね！ ブルーヘヴンは、無数のイイオトコが私に尽くす逆はー構成団の名称で正解なんですけど、逆はーは乙女の永遠なる憧れであり夢なんですよ！

だから私ってば、その栄えある逆はー構成団にブルーヘヴン、異世界にある青薔薇の品種名を付けたんです！ これは昨日の朝食の時に陛下にも説明したんですが、」

そこまで言って、私が一度息継ぎを入れると、デイルクさんとヴィルフリートさんが、ほんの少しだけ目を見開いていた。

「青薔薇？」

「驚いたな。彼女の口から青薔薇が出てくるとは。」

珍獣様、

それで陛下にはどうご説明されたのですか？」

「ヴィルフリートさん、よくぞ聞いてくれました！ 向こうの世界の青薔薇ブルーヘヴンは、薄い青色、灰がかかった水色のような薔薇なんですけど、向こうの世界には元々青薔薇は無く、世界各国が品種の改良を重ねて競い合った結果誕生した薔薇なんです！ その誕生した青薔薇のひとつがブルーヘヴンなんですよ！ ブルーヘヴンは英語という言葉で、ブルーは青い、ヘヴンは天、もしくは天国という意味で、花言葉は不可能、有り得ない、新たに設けられたもので、奇跡、神の祝福です！ そんな求められた奇跡の花の名前だった

だから、私の栄えある逆八ー構成団の名称にしてみたんですよ！
どうですか？ すっごい価値がありそうな名称だと思いますか？
！」

私の逆八ー構成団に本当にピッタリだよね！

そう思いながら、説明できた満足感に私が深く息を吸っている、
ディルクさんは無表情に、ヴィルフリートさんは薄く微笑んだ。

「素晴らしい。それをお聞きになった陛下は貴女になにか褒美を
しませんでしたか？」

「え？ 褒美？ うーん……そうそう！ 望みを聞く数をひとつ増
やしてくれました！」

そういえばあの時の望みって、珍獣部屋に仕切り、バルツァーさ
んちに遊びに行く、お小遣いのみつつじゃなかった？

お小遣いは叶ったとして、バルツァーさんちもこれからだとして
も、珍獣部屋に仕切りつて、もう無効扱いなんじゃない？ 珍獣部屋、
当分使えないんでしょう？

うわっ！ 損したんじゃない？！ もしかしなくても！ くそう

……陛下め！ 今から訂正きくかな？！

「珍獣様、」

「はい」

「ブルーヘヴンは、いい男が貴女に尽くす集団の事なのですよね？
そうであるのなら、トリエスでいい男と言われている私も入らな
いと駄目ではないですか」

「あれ、ヴィルフリートさんも入団希望ですか？」

先程から薄い微笑みを浮かべ続けているヴィルフリートさんに、
私が目をぱちくりとさせると、彼は陛下とは違う綺麗さを持つ碧い
瞳を合わせてきた。

「ええ、是非。私だけでなく第一の騎士全員を入団させて下さい。
貴女の僕（しもべ）として煮るなり焼くなり好きに使って下さって
結構ですよ」

「おおおおおう！ 本当ですか?!」

「ええ。そうだ、珍獣様、こちらに」

「はい？」

ヴィルフリートさんが手招いたので私は立ち上がり、彼の所に行くためにローテーブルをまわった。

彼に近づくと、ヴィルフリートさんが私の腰をヒョイと持ち上げて、自分の膝の上に座らせる。

「お」

「陛下のように私からも貴女に御褒美を。さっそく今から逆はーとやらを味わってみませんか？」

「……え？」

「デイルク、逆はーは複数の男でないと駄目だそうだから、君も参加しろ」

言うなり、ヴィルフリートさんは薄く微笑んでいたのを貴公子モードに変えて、横向きで膝の上に座らせた私の横髪を優しい手付きで梳いた。

そんな彼の行為に、私の大興奮スイッチがカチツとオンに入る。

「うきゃー！ 私ってば異世界トリップ二日と数時間目にして、ようやく逆ハーマードが発動してきたかも！ やっぱい！ 超嬉しい！ 異世界トリップして良かったです！ 日本じゃ絶対に発動しませんでした！ 異世界最高っ！ トリエス王国最高です！」

「私たちの国を気に入って下さったようで良かった。デイルク、君も何かしたらどうだ？」

何度か髪を梳いて、触れていた横髪を耳にかけたヴィルフリートさんは、私の頬谷に柔らかく唇で触れた。

それに私が反応する前に、デイルクさんが若干困惑気味な声音を出す。

「俺か……何をしたらいいのか思いつかないんだけどな」

「そうだな、では、君は左から、私は右からいこう」

「何を？」

「彼女の頬に親愛の口付けを」

「おおおおおう！」

「おいおい、調子に乗り過ぎてないか、ヴィルフリート」

「デイルク、彼女は王様であり、ブルーヘヴンの主だ」

どこか喜悦を滲ませたヴィルフリートさんの様子に、デイルクさんは降参といった感じで僅かに肩を竦めた。

竦めると彼は、ヴィルフリートさんがしたように、私の左側の髪を包帯に触れないようにして掻き揚げて、そつと耳にかける。

「了解。 珍獣様、」

「我々の親愛を受け取って下さい。ようこそトリエスへ。私たちは貴女を歓迎します」

二人はそう言うと、私の右頬にヴィルフリートさんが、左頬にデイルクさんが、それぞれキスをしてくれた。

私の体内時計で約五秒。

当然私は狂喜乱舞の大興奮状態に突入だ。

彼らの唇が離れると、嬉しさのあまり思わず私は二人の首に抱きついた。

「うぎゃうぎゃうぎゃー！ 私ってば超超超感動しました！ 両頬チュー初めてです！ リアルで逆ハーを経験したのもですよ！ やっぱりに実際に感触があるだけに乙女ゲーとは全然違います！ 私ってばワックワクのウッキウキです！」

「喜んでもらえたのでしたら良かった」

「うーん、良かったですね？」

耳元で聞こえる二人の声にニンマリとして、私は彼らの首を解放した。

私の心の小躍り状態を表すかのように、未だ手にしていた陛下のポップキャンディーをデンデン太鼓のようにクルクルと回す。

「もう本っ当に大感動大満足です！ デイルクさん、ヴィルフリートさん、ありがとうございますね！ 逆ハーはですね、異世界トリップものの最強設定なんですよ！ 逆ハーと銘打っていると、逆ハー大好き固定客がモリモリ付くんです！ 言葉は悪いんですが、逆

ハ―は大量に釣れる美味しすぎる麻薬なんですよ！ 属に言う入れ食いです！ うけけっ！」

「よく判りませんが、そんなに喜んでもらえるのなら、今度、第一の騎士を全員使って逆は―を体験なさって下さい。ああ、第二と第九、十六から二十、二十二、三十一、三十五、四十二から四十六、四十九も協力してもらえそうかな」

第五十一もいけるか、あの辺りはノリのいい連中だから、とヴィルフリートさんは私の髪を整えるように撫でてくれた。

「あまり話を大きくすると陛下に怒られるぞ。いま挙げただけでも凄い人数だろう？」

「なに、皆、面白がると思うよ。さて、珍獣様、陛下もまだ戻られないし、王様ゲーむを続けましょうか」

ヴィルフリートさんはニコリと感じ良く笑うと、私が持っていたポップキャンディーと、ローテールに置いてあった二人が引いたものをディルクさんに回収させた。

ディルクさんはそれを同じ高さに揃えると、ヴィルフリートさんの手に持たせる。

ヴィルフリートさんは私を膝の上に乗せたまま、ポップキャンディーをクルクルと軽く混ぜ、私とディルクさんの間に差し出した。

「どうぞ？ また二人から引いて下さい」

「はい！ 次も王様だといいな！」

「どうでしょう？ 私も王様狙いでいきますよ？」

そんな彼の言葉を合図に、私とディルクさんがクジを引いた。

今度は、私が左のポップキャンディーを、ディルクさんは右のポップキャンディーだ。

私が引いたキャンディーの棒には、赤い王様の印は付いていなかった。

すぐ傍でヴィルフリートさんの落胆した声が耳に入る。

「残念だ、今度も私は王様ではないな」

「俺が王様だ。俺としてはお前にだけは当って欲しくなかったから、

ひと安心だ。さて、どうしようか　　そうだな、では俺からの命令は、珍獣様の初恋話を」

「おや、話を戻した拳句に無難なところでいったね」

ヴィルフリートさんは膝の上の私を支え直しながら、片眉を上げてディルクさんを見遣った。

それをディルクさんが鼻で笑う。

「当たり前だ。俺はお前じゃないからな。それに異世界人の初恋話というのも知ってみたい気もするし」

「それもそうだね」

「いいですよ！ 了解です！ 私つては陛下に対してもそうなんです、長い物には思いつき巻き巻き巻かれちゃう属性の超小者なので、従順にご命令に従いまーす！」

私は教室でするように「はい！ はい！」といった感じで右手を上げると、コホンと語りの体制に入った。

「ではでは私の初恋話の始まり始まりー！」

「楽しみですね。俺、正直なところ、珍獣様の話は面白くて聞くのが好きになりそうなんですよ」

後半は焦りましたがマリリン話は最高に笑えました、とディルクさんが言うのに、ヴィルフリートさんが「ずるいな」と不貞腐れ気味になった。

私はそんなヴィルフリートさんの金髪の頭を、陛下にしたように「いい子いい子」と撫でてみる。

それにディルクさんが押し黙り、ヴィルフリートさんは吃驚に口をポカンとさせた。

「ままままつ、ヴィルフリートさん、マリリン話は今度時間が出来た時にでもジックリお話ししてあげますので、いい子だから今は我慢して下さいね？ ではでは王様のご命令に従い、私の初恋話に行きたいと思います！ ……とは言ってもですね、実はあんまり覚えていないですよー」

ヴィルフリートさんの頭から手を放して、私は腕を組んで「うー

ん」と唸った。

「私の初恋……卓也くんになるのかなあ？ 私ってば、今まで彼氏が全く出来なかったんですけどね？ でも小さい時は違ったよ
うな気がするんですよー……。記憶が物凄くあやふやなんですけど、
小学校一年生の時、七歳前後の頃の話なんですけどね？ 同じクラ
スの……学校で一緒に机を並べて勉強していた卓也くんって男の子
が、私の事を好きだったような？」

ヴィルフリートさんは軽く深呼吸をして気を取り直したようで、
私が話したのに、面白そうに肩眉を上げてみせた。

「おや、両想いではないですか。珍獣様も隅に置けませんね」

「いいですね、男の子の方も珍獣様が初恋でしょうか、幼いですし
微笑ましそうな表情を見せるヴィルフリートさんと、「羨ましい
な、そういう普通の初恋」と言いながら腕を組んで頷いているふう
のディルクさんから、私は昔を思い出すために視線を斜め下に落と
しました。

「でもー……」

「でも？」

「でも？」

「いつだったかに、知らない金色のおじいちゃんが学校帰りの私の
ところにやってきて、それを卓也くんが見て怒っちゃって。浮気し
たとか貧乳とか離婚してやるとか卓也くんに確か言われて……」

「知らない金色のおじいちゃん？」

「浮気とか、ひん……離婚とか小さいのに凄い事をいう男の子だっ
たんですね、そのタクヤ君は……」

「で、その後、私ってば、近所のお兄ちゃんの譲くんに遊びに誘わ
れてて、」

「近所のお兄ちゃん、ねえ」

「それで、どうしたんですか？」

「うーん、小さい頃の話なんで、本当に記憶があやふやなんですけ
どね？ 金色のおじいちゃんとサヨナラをして、譲くんと遊びに行

「つたんですけど、譲くんが秘密基地につれていってくれて、『楽しい事をしようね？ 僕と気持ちいい事をしようね？ 全て僕に任せてくれればいいからな？』って言うてくれたのに、」

「……………」

「……………」

「また金色のおじいちゃんがやってきて、二度と譲とやらには近づくな、って言われて、早く家に帰れ、って怒られたような？ でもそう言われなくても、譲くん、それ以来、私を見ると悲鳴をあげて逃げるようになって……」

「そこまで私が二人に話した時、濡れた黄金の髪を後ろへ撫で付けて、艶やかな金色に輝く陛下が戻ってきた。」

… 82 (後書き)

各初恋話はサイドストーリーのネタです。モノによっては相当先にUPする予定のお話もあります。

ペコちゃんのポップキャンディー

<http://usanko.com/img/pop.jpg>

亀田の柿の種

<http://usanko.com/img/kakinotan.jpg>

自分の部屋だから当然なのかもしれないけれど、陛下はノックする事なく部屋に入り、後ろ手に扉を閉めた。

櫛を入れた黄金の髪を耳に掛けている彼の恰好は、この二日と数時間で私が見た中では断トツのラフさだ。

向こうの世界とは微妙に違う形のパジャマらしき上下を品良く着て、上のボタンの幾つかを外している。

パジャマらしきものの上には、ゆったりとした作りのガウンを羽織っていた。

陛下は扉を閉めた後、私たちの方に目を向けた。

途端、彼の澄んだ紫の瞳がほんの一瞬だけ揺れる。

そんな彼を特に気にする事なく、私はブンブンと手を振って陛下を出迎えた。

「陛下、おつかえりなさい！ ゆっくりなお風呂でしたね！」

「部屋の酒臭さが酷いが、その酒瓶の数々は何だ？ あれから相当飲んだようだな、ディルク」

陛下は何処か不愉快そうに言うと、眉をひそめ、私たちの居る豪華応接セットの方へと歩いてきた。

「あー…俺よりも珍獣様の方が凄かったような」

「陛下、私たちの誰よりも強いですよ、彼女は」

貴方など足元にも及びませんね、とヴィルフリートさんは言って、陛下が応接セットに辿りついたタイミングで、膝の上の私の頬に突然チュツとキスをしてくれた。

それにちょっと驚いてしまつて彼を見遣ると、碧い瞳が「私にも」といつているような気がした。

だから私もヴィルフリートさんの頬にチュツとキスの返礼を試みる。

頬チユーをし合つてお互いなんとなくニツコリと笑い合つと、デイルクさんの「少しは遣り方を選べよ、ヴィルフリート」というごく小さな嘆息と、陛下の冷たい声音が聞こえた。

「ずいぶんと仲が良さそうだな？ 良かった事だ。後見する者とされる者だ。結束が固ければ周囲もさぞ危機感を持つだろうよ」

「おや、何をつまらない事を。珍獣様と私は後見の枠を越えたのですよ。　　そうですね、珍獣様」

「はい、越えました！」

私とヴィルフリートさんは爆乳同盟の同士で、且つ、彼はブルーヘヴンの団員だもんね！

ちなみにヴィルフリートさんは団員番号八番ね！

そんな事を思いながら、ねー、と仲良く一緒に首を傾けて以心伝心していると、陛下がドサリといった感じで対面のソファアに腰を下ろした。

「そうか。良かったな」

「あれ、陛下、お風呂で嫌な事でもあつたんですか？」

「どつという意味だ」

「なんか虫の居所が悪いみたいですし……つて、そうだ！ 陛下、このポップキヤ……じゃなかった、飴、食べてもいいですか？」

そう言つて、私がクルクルとポップキヤキャンディを指で回していると、陛下の黄金の睫毛が瞼の動きに合わせてパチパチと動いた。

「……………」

「陛下？」

「私も食べてもいいですかね？」

「俺も食べてもいいですか？」

陛下は無言で、私が首を傾げる中、ヴィルフリートさんとディル

クさんが私と同じように持っていたポップキャンディーをクルクルと回していた。

「……何故それを」

「は？ 声が小さくて聞こえませんか？ 陛下さ、人に物を伝える時は、しっかりと言わないと！ 私ってば、王様として失格の烙印を押しちゃいますよ？」

まったくしょうがないなあ、といった口調で私が言うと、陛下がギツとした感じで此方を睨みつけてきた。

「何故お前たちがそれを手にしているのかと聞いた。それは余の机の中にあつた物のはずだが？」

「私が貴方の机を漁つたんですよ」

膝の上の私の腰に手を回して座り直させながら、ヴィルフリートさんが飄々とした様子で言った。

どうもヴィルフリートさんは私の座る位置をずらしたようだった。一箇所に重み加わり続けるのが辛いからだろう。

まあ、私ってば重いからね？

でも、地下で陛下にも同じ事をされたのを思い出し、私は思わずムツとして視線を向けていた先の陛下をギリギリと睨んでみた。

それに彼の綺麗な紫の瞳が反応し、こちらを睨む眼力が増してくる。

「何故」

「何故と言われても、時間を潰す為としか」

「陛下のお風呂が長いから、私たち三人、王様ゲームをして遊んでいたんです。ね、デイルクさん、ヴィルフリートさん」

「ええ」

「楽しかったですね」

王様ゲームと一緒にした仲間意識からか、三人で目を合わせて笑い合ってみると、仲間外れな陛下が疑問の声を出した。

「王様ゲーム？」

「はい。あ、そうか。えっと、王様ゲームとは、えー……………」

を揃えながら並べ出した。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「陛下つてば、ちよつと几帳面ですよね」

「おや、珍獣様、気づかれましたか」

「オッサンが言うには、服は脱ぎ散らかすらしいんですけどね。基本は几帳面なんだと思いますよ。貴女のナイトドレスのリボンも結び直したでしょう?」

「あー…そういえば」

「もう放つといってくれ! いいだろう別に! 自分の部屋が散らかっているんだ! 片づけようが何をしようが余の勝手だ! 小娘のリボンもあまりに酷い結び目だったから直したに過ぎない!」

ドンツと空のハーフトールをローテーブルに置くと、陛下は盛大に眉を吊り上げた。

そして櫛が入って整っていた髪を、忌々しそうに手櫛でザツクリと後ろへ掻き流してしまう。

「そんなに怒らなくてもいいじゃないですか。せつかくの美人さんが台無しですよ?」

「なに?」

「陛下が部屋に入ってきた時から思っていたんですけどね? 陛下つてば、もう凄い美人さんですよね! なんなんですか、その美女モード! 真つ平らな胸に膨らみが無いのが不思議なくらいです!」

「小娘つ!」

陛下が激昂したように突然ソファから立ち上がった。

それに私はキョトンとしてしまう。

「やややややややつ、いきなりどうしたんですか? なんでさつきからそんなに怒って? というか、私つてば真実を述べているだけですけど?」

陛下の蟀谷がピクリと波を打った。拳も握られ、力が入っているのか一部が白くなっている。

「真実を述べているのだと？」

「はい。だってですね？ もともと有り得ないくらいの超絶美形で、女性的では全然ないんですけど、全体的に綺麗すぎるっていうか、嫌な男臭さが全くといっていいほど無いじゃないですか。髭の気配も殆ど無いし、脛毛も無いですしね？ っていうか、陛下、髭、ちやんと伸びてます？」

地下で少しだけ気配はあつたけどね？

「……っ」

「あー…珍獣様、それ以上はちょっと」

「珍獣様、出来ればあまり言わないであげて下さい」

可哀想ですからね？ とヴィルフリートさんが私の背中をポンポンと軽く叩いた。

「え、なんですか？ 私ってば誉めてるんですけど？ それに、たった今も言いましたけど、真実を言っているだけですし」

「どこが誉めていると？」

「誉めてますよ？ だって陛下ってば、嫌な男臭さのない超絶美形に加えて、お風呂に入って血色の良くなった肌に、濡れてキラキラな黄金の髪を後ろに撫でつけてるって、どんだけ艶っぽいんだって話ですよ。っていうか、惜しい！ 実に惜しい！ 陛下が女性だったら、本気で傾国の美女になって、いくつもの国を手玉に取った拳句に破滅へと導けるのに！ 後世に語り継がれる伝説の悪女になれますよ！ 私が陛下だったら、その容姿を利用して、昔の中国の歴代皇帝も裸足で逃げ出しちゃうような男だらけのムフムフ巨大後宮を作っちゃいます！ 男は全て私の愛の奴隷です！ 勿論、運営費用は国民からの搾取ですよ！ 徴税額は年収の九割は当たり前！ 払えない人間には重い労役と兵役をシツカリ課します！ ああ、ここが日本だったら！ 陛下ってば、ニューハーフ世界コンテストに日本代表として出場して、確実に優勝出来るのに！ あ、ニューハ

「地獄の極悪大魔王！ 暗黒と混沌の覇者フリードリヒ四千六百四十九世め！」

「誰だ、それは！」

「適当です！」

「っ！」

「あ、でもプロイセンにそんな名前の王様が居たような？」

「異世界の王の話はどうでもよい！ 余には関係が無いからな！」

「関係無くはないですよ！ 先人の事を知るのは大切です！ 向こうの世界に温故知新という四字熟語がありますよね、」

私がそこまで言葉を紡いだ時、陛下がフンと小馬鹿にしたように鼻を鳴らす仕草をした。

「この世界には無い言葉だが、聞く限り、故人や故事から学んで新しきを知る、過去を充分学び知恵を得て、新しい知識や見解を習得し、進めよ、といった意味だろう？ 当たり前すぎて、くだらん！」

「ほえほえほえほええー！ なんて判るんですか？！ 漢字なのに！ 私なんて覚えるのに五日もかかったんですよ？！ 陛下つては大天才すぎて怖いです！ 私、恐怖に震えちゃいます！ ぷるぷるぷるぷる！」

「……………どこまでも人を馬鹿にするつもりだな？」

「え、なんでそう穿った方向に」

「仲が良いのはもう十分に判りましたので、その辺で終わりにしませんか？」

「夜も遅いのに、俺達の前でイチャッ……………喧嘩はなさないで下さいよ。邪魔者は退散させてもらいますから」

私たちの言い争いを遮るように聞こえてくる言葉に、陛下と私が二人の方を同時に見遣ると、ディルクさんもヴィルフリートさんも『オナカいっぱいです』といったような顔をしていた。

亜麻色の瞳と碧い瞳に順番に目が合うと、二人が怠そうに立ち上がる。

ヴィルフリートさんがローテーブルの端に放置されていた金製の

試作品の一部とやらを、値の張りそうな服のポケットに納めた。

「まあ、お二人仲良く夜を過ごされて下さい」

「では俺達はこれで。ああ、陛下、お伝えするのを忘れていましたが、衛兵の件は宰相閣下が対処済みですので。夜の護衛は俺以外の者が」

「……判った」

「あ、待って下さい！　って、ちょっと、へ・い・か！　肩から手を放して下さいよ！」

デイルクさんとヴィルフリートさんが一分後には陛下の部屋から消えていそうな勢いの流れに、私は焦って二人を呼びとめた。

ソファアーに肩を押さえつける陛下の手を、ぐいっと退ける。

「待って下さい！」

「なにか？」

「どうかしましたか？」

「二人にお土産を！　今、持ってきますから、ちょっと待ってて下さいね！」

言いながら私は、素早く身を起して陛下を押し退けると、食卓の方へとダッシュした。

そしてガサゴソとコンビ二袋の中を漁って目的の物を取り出す。

再びダッシュして豪華応接セットに戻ると、三人が不思議そうな表情をしながら私を待っていた。

私はデイルクさんとヴィルフリートさんの前で立ち止まると、ローテーブルの上にあった柿の種も手に取って、それぞれにお土産を差し出した。

「はい、これ！　都コンブとフリスクです！　デイルクさんには都コンブとあまった柿の種を、ヴィルフリートさんにはフリスクをお土産です！」

デイルクさんとヴィルフリートさんが、目を数度瞬いた。

「しかし、」

「あまり貰いすぎましても」

「大丈夫です！ どれも甘くないものですから！ 都コンブは酸味の効いた海藻で、フリスクは口の中を爽快にする錠剤です！ どちらもアヤシイ食べ物じゃないので、安心して食べて下さい！」
開け方が判らなかつたら、いつでも聞いて下さいね？ と私は言つて、彼らに「はい」と手渡した。

「どうも」

「ありがとうございます」

二人が私へのお礼を口に乗せながらも、陛下の方にチラリと視線を向けた。

それに陛下が小さく息を吐いて、僅かに顎を動かす。
好きにしろ、という意味だろう。

陛下の了承を得たからか、ディルクさんは柿の種の外袋の中に都コンブを入れ、ヴィルフリートさんは金製の物体を納めたポケットにフリスクを入れた。

「おや、珍獣様、額の血が滲んでいますね」

ヴィルフリートさんの言葉に、ディルクさんが私の額に手を触れた。

「なるべく空気に触れるように薄い綿布を使ったからな。う

ーん、お二人で暴れていましたしね」

「……………え、それって陛下のせいじゃ？」

陛下が私を持ち上げてソファーに落とした拳句に押さえつけたんだだけど？と思つて、キツと彼を見遣ると、陛下がムスリとしていた。

「……………」

「陛下、やはり医師を呼びますか？」

「いや、取りかえるだけで大丈夫だろう。たいした出血量でもない。ヴィルフリート、帰りがけに手当箱を持ってくるよう申し付けておいてくれ」

「貴方がおやりに？」

「ああ」

「判りました」

陛下とヴィルフリートさんのやり取りが一段落すると、ディルクさんが思い出したように頭上に手を伸ばした。

「そうだ、珍獣様」

「はい」

「ウオちゃんをお返ししておきます」

「そうでした！ ウオちゃん、おいで！」

呼ぶと、ディルクさんの手が届く前にウオちゃんが飛んだ。

地下で見たように、パタパタという羽の音が聞こえてこないのが不思議なくらいの飛び方である。

ウオちゃんがディルクさんの頭上から、私の頭の上へと移動を完了した。

額の傷を気遣ってくれたのか、若干横向きに寸胴な体を落ち着かせる。

「きゅぴ」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「きゅんきゅん」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「では、陛下、珍獣様、失礼いたします」

「よい夜を」

「ああ」

「え、無視ですか？！ 今の思いっきり無視するんですか？！ ややっ、マジで？！」

私の心の底からの指摘も、信じられない事に三人は綺麗に黙殺してくれた。

それに私はポカンと口を開けざるを得ない。

デイルクさんとヴィルフリートさんが陛下と私に軽く目礼をする
と、廊下側の扉へと向かっていった。

陛下はなんとなくといった様子で、私は彼らの国民性を改めて目の
当たりにして呆然と退出する二人を目で追っていると、「そうそ
う」と扉の前でヴィルフリートさんが振り返った。

「申し上げるのを忘れておりました。陛下、珍獣様、子を為された
ら私が責任をもって守り立てますからご安心を。教育は私たちが失
敗したと全身で後悔している宰相殿が引き受けてくれるはずですか
ら、心置きなく本能の赴くままに激しく行為に耽」

「五月蠅い！ なにを訳の判らない事を言っているんだ、お前は！
くだらない事を口にする暇があるのなら早く屋敷に帰れ！ 今夜
はヴィネリンスからも退去しろ！」

陛下は声を荒げると、ギツとヴィルフリートさんを睨みつけた。

それにヴィルフリートさんは、微塵も気にしていない様子で肩を
竦める。

「はいはい」

「……はあ、ヴィルフリート、今のは逆効果じ」

呆れ返っているような口調のデイルクさんの言葉は、パタリと扉
が閉じられたので最後まで聞き取る事は出来なかった。

「やっていられん！」

扉が閉じられると、陛下は投げやり気味にソファ―に腰を下ろした。

座ると、彼は羨まし過ぎる長い脚を無造作に組み、ローテーブルに置いてあるお酒に手を伸ばす。

先程、瓶を整頓した時にでも中身を確認したのだろう。

彼は迷う事なくラガリネ王国苦悶のお酒を手を取った。

「陛下」

「なんだ！」

「もう！ 私に当たらないでくださいよ！ 偏食児！」

「みゅぴ！」

「っ！」

「あのですね、ウオちゃんの盥、どうしたんですか？ 珍獣部屋の横に無いんですけど」

私が浴場に行く前に、グイードさんが銀製の盥をひたすら磨いていた場所、珍獣部屋に続く黄金の格子扉の横に、ウオちゃんの盥が見当たらなかった。

だから聞いたままでなんだけど、私の質問に陛下がうんざりとしたような顔になる。

「……あれは此方だ」

陛下が立ちあがった。

彼は嫌そうに溜息をつきながら零れた横髪を耳に掛け直すと、王妃の部屋の方向へと歩いていく。

頭の上のウオちゃんを右手で押さえながら、私は彼の後ろを小走りですいていった。

陛下と私はコンパスが違うから、彼が気遣う事なく歩けば、私が小走りになるのは悔しいが仕方無い。

「あれ、なんでこつち？」

「お前が浴場へ行つた後、グイードが珍獣部屋からの臭いがするからと場所を移動した」

「臭い？ 害獣対策用の？」

「ああ。グイードには感じるのではないか？」

「まあ、ワンコですもんね。犬の嗅覚は人間の百万倍から一億倍らしいですし」

「犬で決定なのか、あれは」

「だって陛下の忠犬じゃないですか。グイードさん、陛下が死んでも渋谷駅で焼き鳥を食べながら、じっと待ってそう」

「しぶや駅？」

「うーん、トリエスでいう城門前ですかね？」

「……お前の説明は大抵が適当だな」

そう諦めた様子で言った後、陛下は「あそこだ」と顎を少しだけ動かして盥を指した。

ワンコなグイードさんが磨き上げてピカピカなウオちゃん専用の銀の盥は、陛下の部屋と王妃の部屋を繋ぐ扉の横に置いてあった。

盥は陛下の部屋に数多くある蠟燭の炎に照らされて、幻想的な輝きを放っている。

「おお、水がちゃんと張ってありますね。ややっ、上陸用の陸地までいつの間にか作られています！ 流石グイードさん！ あれ？

でもさつき陸地用の材料なんて持ってましたっけ？」

「……なぜ、余の部屋で両生類を飼わなければならないのか、未だ納得できないんだがな」

「いいじゃないですか、ウオちゃん一匹くらい。陛下下つてば心が狭いですね」

「……………」
言葉を返してこない陛下を放つといて、私は頭の上のウオちゃんを両手で持って、盥の中にそっと入れた。

静かな陛下の部屋に、ちゃぼん、と水の音がして、彼は私の直ぐ後ろで腕を組んで見下ろしている。

ウオちゃんが嬉しそうにビチビチと水面を跳ねた。

「きゅっきゅっきゅっきゅぴ、ぴっぴっぴー！」

「ウオちゃん、気に入ったようですね」

「……………」

後ろの陛下から抑え切れないといったような殺気が放たれた。

不穏な気配を背中を感じながら、楽しそうに水面を跳ねたり泳いだりし出したウオちゃんを、私はしゃがみながら眺めてみる。

するとウオちゃんの動きが突然止まり、引っくり返ってプカプカと水面を漂いだした。

「きゅぷう」

「……………」

「……………」

「ぷうぷう」

「……………陛下、ウオちゃん、どうしたんですか？」

「……………余に判ると思うか？」

「でも陛下つてば、グイードさんとお話をする事が出来ますしね？」

「やっぱり両生類もね？」

「まだ言うか」

そんな会話をしながら盥に視線を向け続けていた陛下と私の前で、ウオちゃんがポリポリと爪の無い指でオナカを掻き出した。

シヨッキングピンクの体とは違うパステルピンク色の舌が、ビロインとだらし無く伸びてくる。

後ろの陛下の殺気が激増した。

「なんだかウオちゃん、陛下の部屋で物凄く寛いでいませんか？」

「……………両生類め」

虫酸が走って仕方無いといった様子で言い捨てると、陛下は「いつか息の根を止めてやる」と物騒なことを呟きながら盥から背を向けた。

そして盥の場所に来た時と同じ速度で、スタスタと豪華応接セツトの方へと戻っていく。

「あ、ちよつと待って下さいよ！」

「……………」

「もう！ ウオちゃんにそう怒らないで下さいってば！ そうそう、それより陛下、お酒を飲むんだったらお風呂上がりですし、炭酸飲料でも飲んだらどうですか？ お風呂あがりの冷えた炭酸は結構イケますよ？」

言いながら小走りで陛下に近づいた私は、炭酸飲料が冷やしてある食卓へと誘導する為に、彼の右腕に自分の腕を絡ませた。

更に足を速めて陛下の腕を引く張ると、機嫌は良くなさそうだったけれど、彼は素直に速度を合わせてくる。

「お前が向こうから持ってきた飲み物か」

「はい！ 甘い属性の飲み物です！ コーラとサイダーとファンタとカルピスっていう四種類なんですけど、浴場に行く時に妖精に冷やしておいて欲しいってお願いしたんですよね」

あれから結構時間が経っているし冷えていると思います、と付け加えて、私は辿り着いた食卓の椅子を引いた。

陛下を半ば強引に座らせて、向こうから持ってきた五百ミリリットルサイズのペットボトル四本をワインクーラーから取り出して彼の前に並べる。

ペットボトルに付いた水滴が食卓を濡らしてしまったけれど、陛下は特に気にした様子もなく目を向けていた。

「この黒色なのがコーラで、透明なのがサイダー、赤紫色っぽいのが葡萄味のファンタで、白いのがカルピスです」

「……………」

「もうちよつと何か説明したいところなんですけど、私ってば飲み

食い専門で詳しい事は殆ど知らないんですよ。どれも日本国民には一般的で美味しい飲み物ですよ、としか言えないんですけど……えっと、何か質問はありますか？ 原材料名でも読みますか？」

「いや、いい。お前の勧めるもので」

「そうですね？ じゃあ、うーんと……カルピスは炭酸じゃないし、いきなり黒い系の色のコーラとファンタは陛下に抵抗があるかもしれないから、初心者向けって事でサイダーでいいですか？」

「ああ」

了承の言葉を口にしながら、陛下は椅子の肘掛けに腕を預けて頬杖をついた。

陛下の部屋の照明である蝋燭の炎が、彼の長い黄金の睫毛を揺らめきながら照らし、澄んだ紫の瞳と頬の上に影を落とす。

その様子をなんとなく目に入れながら、私はカチツと蓋を回し取って、彼にサイダーのペットボトルを差し出した。

「こうやって右に回すと蓋が取れるんです。で、これはそのまま口をつけて飲んで下さい。陛下には庶民っぽく感じちゃうかもしれないですけど」

「判った」

私の差し出したサイダーを少しの躊躇いもなく陛下は手に取ると、デイルクさんとヴィルフリートさんが最初に柿の種の袋を観察したように、同じように彼もまずは容器を注視した。

「アヤシイ飲み物では無いですよ？」

「疑っている訳では無い。入れ物を見ていただけだ」

静かな調子でそう言うと、陛下は仄かに微笑んだ。

たぶん無意識だと思われる優美なそれを浮かべながら、彼はサイダーを一口ほど喉に流す。

「……………」

「……………」

「……………どうですか？」

「美味しいな。純粹に甘いし、癖もない」

「おお、良かったです！」

陛下の感想に一安心してニコリと私が笑みを見せると、陛下もつられたのか、仄かな微笑みを深い笑みに変えた。

ついていた頬杖を外して、今度はペットボトルの半分まで勢いよくサイダーを飲む。

そして飲み口から口を離すと、彼は好物を前にしたオコチャマのように嬉しそうな顔をした。

そんな表情を無防備に見せてしまう王様なはずの陛下に、無意識って怖いなあ、と思いつつ、私は中身を物色する為にガサゴソとコンビニ袋を広げる。

「陛下、お菓子も食べますよね？」

「ああ。………そうか、こういう飲み方もあるのだな」

「こういう飲み方って？」

陛下の言葉に私がコンビニ袋から彼に視線を移すと、陛下はまたペットボトルに目を向けていた。

「さいだーの事だ。小娘、発泡する水はこちらの世界にもある。お前の言う“たんさん”は、トリエスではシュプリと言って自然に湧き出ている場所があるんだ」

「なんだ、あるんですね！　っていつか、炭酸って湧き出るんですか？」

サイダーが間歇泉（かんけつせん）のように噴き出す様が頭に浮かび、私は驚きに口をあんぐりと開けてしまう。

澄んだ紫の瞳を此方に向けた陛下が、蝦蟇口（がまぐち）を閉じるかように何故か私の唇を摘んだ。

「むくっ！」

「お前が知らないだけで、そちらの世界にもそついった場所はあるのでは？」

「むっむくくっむくっ！」

「昔、ディルクとヴィルフリートと城を抜け……いや、以前に行つた事があるんだが、土地の者が健康の為にシュプリを飲んでいた

んだ。だから少しだけだが口にした事がある」

遠い昔を懐かしむような色を瞳に滲ませた陛下は、そこまで話すと私の口から手を放した。

「ぶはっ！ ちよつと陛下、口を塞ぐなんて酷いです！ 私が慢性アレルギー―性鼻炎持ちなんだって何度言ったら判るんですか?!」

「一度聞けば判るが?」

「酷過ぎるっ!」

貴様、どんだけのドSだ!

そう思い怒り心頭の私が陛下に掴みかかろうとすると、彼は右腕一本で軽くないしながら炭酸についての話を続けた。

… 84 (後書き)

公の事
渋谷駅で焼き鳥を食べながら、じっと待ってそう
… 忠犬八千

「それより小娘、果実酒に真珠……通じるか？」

「え？ 果実酒に真珠ですか？ 通じますけど？」

「そうか。余の言うシユプリは天然に湧き出ているものだが、ギズユーズと言つて果実酒に真珠を溶かして発泡させて飲む国があるんだ」

陛下がいなしていた右手を私のオナカに移動させて、むにと今度はナイトドレス越しに肉を摘まんだ。

「ちよつと！」

「地下で少しだけ話をしたガルダティアなんだが、神話の時代から伝わる飲み方だそうだ」

「果実酒に真珠つて溶けるんですか、つて、へ・い・か！ オナカ摘まむの止めて下さいよ！ つか、揉・ま・な・い・で！」

責様、何故揉む？！

いい加減にしないと私も切れちゃうよ？！

うがーと両腕をぶんぶん回して攻撃の為に陛下に突進しようとする、彼はいと簡単に私を防いだ。

摘まんでいた手を私のオナカに当てたまま突っ張り棒代りにしたのだ。

「くはっ！」

「……柔らかすぎるな、本当に。まあ、それはいいと……いや、よくないんだが、真珠は溶けるぞ、小娘。もし試してみたいと思うのなら、やってみればよいのでは？ 隣の部屋に母上……先代の王妃

の真珠の首飾りがあるから、適当にバラして其処の飾り棚の酒の中にも手当たり次第入れてみる」

溶ける酒とそうでない酒があるからな、と言って、陛下はサイダーをくびびつと再び飲み出した。

「え」

「ああでも、口にしようと思うのなら新しい真珠を用意しよう。それはそれとして、ギズユーズはガルダトイアでも今は宗教的儀式の時だけの飲み方らしい。儀式の時は真珠だけでなく他にも何かを入れるらしいがな。いつの頃からか」

「おお、宗教的儀式……そ、それはもしや邪悪な何かを召喚する儀式だったりして！ んでもって何かを入れるっていうのが、うら若き乙女の血で、それを杯に注いで第六天魔王に捧げるんです！ 例えばこんなふうに！

『さあ、娘、第六天魔王召喚には乙女の、それも処女の生血が必要なのだ。捧げよ！ 第六天魔王織田信長に！ 泣き叫べ、それが織田信長の力の源となるのだ！ ウワツハツハツハツ！』

『あーれえー、だ、誰か、誰か助けるのじゃ！ 王子！ わらわの白馬の王子はまだなのかえ？！ 貧しい田舎村出身の勇者でも構わぬから早く来るのじゃ！ おお、でも容姿は白い歯がキラリと光る金髪碧眼を希望じゃ！ 齡（よわい）は十七歳から二十四歳までじゃぞ！ 年が離れているオトコは願い下げゆえな！ わらわにはこの後、結ばれる展開が待つておるのじゃ！』

『何を勝手な事を叫んでいるのだ！ 早く召喚の儀式を済ませるぞ！ なるべく苦しめようにしてやるから安心するがいい！ えいっえいっえいっ！』

『あうあうあう！』

『くっ！ くっ！』

『ひゃう！ ああん！』

とですね、無情にも乙女を切り裂くんです。で、真珠は血の味を少しでも誤魔化す為に入れるだけで、祭壇の前で乙女の血肉を喰らい、

第六天魔王の召喚、そして憎つくき若造王の国トリエスを邪悪な力で血湧き肉躍る生き地獄に――

「ガルダトイアは邪教の国ではない、小娘。それに今の話は捉えられた者の話し言葉も古風すぎるが、会話の最後が切り裂き、裂かれたにしては変だと思わないのか、お前は。何が血湧き肉躍る生き地獄だ。お前の方向性がおかしい酷い妄想力には、ある意味感心はするがな？」

だが、そうだな。確かにガルダトイアは古臭くて秘密主義なところがある。それを神秘的と感じるか不気味と感じるかは、生まれ育った環境と状況によるだろうな。他国に伝わっていない事も色々あつて、探りを入れてはいるんだが、こと王族が直接関わる宗教的なものについては正直よく判らないんだ。……まあ、今は聞こうと思えば聞けなくも無いし、問い質す事も出来るんだが、気の進まない事をしてまで知りたい事でも無いしな。それより小娘、シュプリ、ギズユーズの他にも、酒でも発泡するものが此方の世界にもある。この部屋に置いてはいないが庶民によく飲まれる酒で、デイルクのいう王都の飲み屋には必ずあるはずだ」

そこまで言うと、陛下はサイダーの残りを一気に飲み干した。

空になったペットボトルを食卓の上に置いて、空いた手で再び頬杖をつく。

「美味しかった。このような飲み方があるのを知っただけでも益があった。残りの飲み物は厨房と、イエルクに飲ませてどうにかさせる」

陛下との話しに私が攻撃の突進をするのを忘れていて、彼は突っ張り棒な右腕をゆっくりと下ろした。

「どうにかさせるって？」

「作らせるに決まってるだろう？ お前もまた飲みたいと思わないのか？」

「うーん、そう言われると飲みたいですけど……あ、陛下、」

「なんだ」

「前にね？」

「ああ」

「お酒大好きなパパが家計の事情でビール、えっと発泡するお酒の事なんですけど、ビールより安い発泡酒に切り替えないといけなくなつた時があつてですね、で、何を思ったのか、泣く泣く私にどうでもいい蘊蓄（うんちく）を語り出した事があつたんですけど、」

夜中の三時半まで付き合わされた時の事を思い出してしまつて、思わず私はうんざり顔になつてしまふ。

明日は一時間目から眠くなる国語があるんだつて何度言つても、酔つていたパパは全く解放してくれなかつたのだ。

「あの時パパつてば、キリンの一番搾りはスツキリしているのに旨味があつて大好きなんだ、とか、アサヒのスーパードライは洗練されたクリアな辛口がもう最高とか聞きたくもないのにビールの素晴らしさを延々と何度も語つてですね、んで、ビールの歴史の話になつて、醸造所の話から炭酸の話になつたんですけどね？」

「たんさんの話？」

「はい。ビールの醸造所の大きな樽だか桶だかの上に、水の入つた入れ物を吊るしておいたら炭酸水が出来たとか言つていたような？ 気体が水に溶け込むという話だつたと思うんですけど…… それ以上は判らないです。うーん、炭酸の気体って人工的にどう発生させるんだらう？」

陛下が言つていた湧き出るシュプリをどうにかして持つてきて味を付けた方が早いのかな、と思つて私が首を傾げていると、陛下が考えているのか、紫の瞳をすつと横に逸らした。

「人工的、か。……水、酒、発生する水溶性の気体、成程な。今までに無かつた発想の仕方だ。判つた、小娘。やはりイエルクの分野だろう。味は厨房の者が受け持てばいいだけだ」

「イエルクさん？ 細工師なの？」

私がそう聞くと、陛下が横に逸らしていた目を合わせてきた。

「ああ。肩書きは細工師だが、あれは幅広く深い知識の持ち主でな？ 一昨年の論文にお前の言つた事の入り口があつた。その時は活

用性が誰も見い出せなくて、それについての研究は認められなかった」

それから認められないものが続いたから今はする事が無くて腐っているはずだ、と陛下は肩を竦めてみせて、コンビ二袋に手を伸ばした。

「入り口を見つけているんだ。お前の話を伝えれば方向は見えるだろう。いつかトリエスでも皆が口に来るのではないか？ 予算を通すと面倒だし遅くなるから、これについての研究費用は余が直接出そうと思う」

「おおう、もし売出すのなら、投資した者としてロイヤリティーはシツカリと取った方がいいですよ？」

「ろいやりていー？」

「はい！ 特許権とか著作権の使用料の事です！」

陛下が小さく噴き出した。

「お前は金がらみの事となると確実に抑えてくるな」

「ややっ、だつてお金は大切なんですよ?!」

ママがつつも、やりくり大変そうにしてたしね！

「確かに大切だ。そうだな、もしイェルクの研究が成功し、商品として売り出せる事になった暁には、イェルクには見合った報酬を、お前には特許状を与えよう。トリエスの法で期限は定められているが、その間、相応の利益を得ればよいのでは？」

「おおおおおお、本当ですか?!」

なんて素晴らしい権力、なんて素敵な金脈！と私は嬉しさのあまり陛下の首に“きゅうっ”としがみついた。

それに陛下が嫌そうな顔をする。

「酒臭い、小娘。離れる。特許状はその時に与える事の出来る状況であればの話だ。小娘、これは？」

コンビ二袋から取り出して、陛下が赤い袋を私に見せた。

私は陛下から体を離して、それについての説明に口を開く。

「これはキャラメルコーンです。真ん中にある写真、えっと絵にあ

るものが中に入ってます。サクサクとした甘いお菓子とピーナッツ
っていうお豆ですよ。私は美味しいから好きなんですけど、陛下、
いま食べます?」

「食べる。夕食を必要量とっていないから相変わらず腹が空いてい
るんだ。 お前のせいだが」

「お……あのあの、トリエス王国国王陛下様、異世界日本産のキャ
ラメルコーンを是非に! それ、貸して下さい! 袋を今お開け致
します!」

金蔓陛下の機嫌を損ねてはいけないと、私はニヘラと笑うと、彼
の手からキャラメルコーンの袋を受け取った。

それに、陛下が夕食の必要量をとっていないのは、確かに私のせ
いであるからだ。

あの時私は一口といいながら、かなりの量を胃に納めてしまっ
ている。

私は袋をベリッと開けると、陛下に差し出した。

「ささっ、どうぞ? 手で直接食べて下さいね。あとあと、私つて
ば、トリエス王国国王陛下様の肩をお揉みさせて頂きたいと思いま
す!」

はいはい!と右手を挙げてから陛下の肩に両手を乗せると、私は
くいつと右肩を前に押した。

「小娘?」

「陛下、ちょっとだけ横向きになって下さい。椅子の背凭れが邪魔
で揉みにくいと思うんで。えっと、足を肘掛ぎりぎりからね?」

「……判った」

地下でのマッサージが、きっと心地良かったのだろう。

陛下は素直に体を横にずらすと私に背中を任せ、キャラメルコー
ンの袋の中に手を入れた。

食べるのに邪魔にならないように気をつけながら、私はまず彼の
両肩を擦る。

「ちょっと強めにいきますから痛かったら言って下さいね」

「ああ」

返事をしながら陛下がキャラメルコーンを一粒口に入れた。
モコモコと彼が咀嚼しているのが私の手にも伝わる。

「どうですか？ キャラメルコーン」

「美味しい。甘いし、口に入れると溶けていく感じがする」
そう感想を述べると陛下はまた袋の中に手を入れて、今度は中身を数粒取り出して口に入れた。

それを目に入れながら、私は彼の肩のツボを押し始める。

「美味しいと言ってもらえて良かったです。陛下、キャラメルコーンは二通りの食べ方があるんですよ」

「二通り？」

「はい。袋を開けて直ぐにサクサクな状態のを食べるサクサク派と、開けて一日くらい放置して湿気らせて食べるシナシナ派の二通りです」

「わざわざ湿気らせるのか？」

背中を向けている陛下が不思議そうな声を出した。

会話をしながらも彼の食べるペースは早い。

「結構美味しいですよ？ ちなみに私はシナシナ派です。でも、日本で一般的な食べ方じゃないかもしれないんですけどね。メーカー……えっと、製造元もシナシナ派は認めないような気も？ なんて湿気防止の為にピーナッツを入れているという噂もありますし」
「……湿気らせるのは止めておく」

「え、お勧めなのに。まあ、いいですけど。あー…でも、異世界にトリップして、トリップ先の陛下がお菓子好きなのが判っていたら私ってばあの時、ハッピーターンも買ったのになー…」

「買うか悩んだんですけど財布の中身が心許無かったんですよ、と言つと、キャラメルコーンを美味しそうに食べていた陛下が後ろを振り返った。

「はっぴーたん？」

その拍子に彼の頬が私の胸に触れたけれど、勿論、胸が無さ過ぎ

て陛下が気づいた様子は無かった。

私は次に首筋をマッサージしたかったから、彼の顔を挟み持つて、ぐいっと強制的に前に向かせる。

「はい。米を砕いて丸めて焼いたモノに、甘塩っぱい超ウマウマのハピ粉がついているお菓子の事なんですけどね？ ハピ粉は合法麻薬とまで言われるくらい一部で絶賛されている粉なんです」

「合法麻薬な」

絶賛する割には例え方が酷くないか、と陛下は言つて、キャラメルコーンの袋の開いた口を軽く折つた。

「あれ、もう食べるのを止めちゃうんですか？」

「これも残りは厨房の者に食べさせる。似たようなものが作れるのなら作らせたいし。それより、こういう面倒な事をせずとも、にほんが同じ世界になれば取り寄せたんだがな」

「え、そこまで？ でもでも陛下だったら取り寄せるっていうより、日本を侵略するか、製造元の東八トを強引に買収しそうですよね」
もし万が一世界が繋がって買収の話になったら、元からいる社員に酷い事はしないで下さいね、と言つと、陛下が心外そんな声音を出した。

「お前は余を何だと思つているんだ」

「地獄の極悪大魔王様ですけど？ 私、陛下なら武器さえ何とかなければ今の日本侵略はチヨロイような気がします。現代日本は結構へタレててですね」

政治も脱税や違法献金のような汚職続きでどうしようもないんですよ……と言いながら、左腕を彼の体にまわして肩甲骨の内側をグリグリ押し始めると、陛下は疲れたように溜息をついて食卓の上に手を伸ばした。

「……………小娘、これは？」

「他のも食べるんですか？ えっと、それはカレントウです。黒糖味で」

そこまで説明した時、廊下側の扉が叩かれた。

∴ 85 (後書き)

東八ト ∴ <http://tohatto.jp/index2.php>

ハッピーターン ハピ粉&合法麻薬

<http://www.excite.co.jp/NewS/bit/00091128188919.html>

キャラメルコーン&ハッピーターン&カリントウ

<http://usanko.com/img/caramel.jpg>

4種の飲み物

<http://usanko.com/img/cider.jpg>

キリンの一番搾りはスッキリしているのに旨味があつて ∴ 企業サイトから引用

<http://www.kirin.co.jp/index.html>

アサヒのスーパードライは洗練されたクリアな辛口が ∴ 企業サイトから引用

<http://www.asahibeer.co.jp/>

陛下はカリントウの袋を手にしながら、私は彼の体に左腕をまわして背中を押しながら音のした方向に目を向けると、聞いた事のある侍女の聲が扉の向こう側から聞こえた。

「陛下、お寛ぎのところ失礼いたします。アツヒエンヴァル様からご指示のあつた手当箱をお持ちいたしました」

「入れ」

部屋の外にも聞こえるように声をあげた陛下の言葉に、重厚な扉が静かに開かれる。

開かれた扉から入室してきたのは、先程も居た黒髪の侍女を筆頭にした何人も侍女たちだった。

陛下の部屋に入ってきた侍女たちは、物の見事に全員私に敵意を持っていてようで、向けてくる視線には棘があつた。

それに内心溜息をつく、私は黒髪の侍女が持ってきた手当箱に目を向ける。

陛下をはじめとしたトリエスの人たちが言う手当箱は、向こうの世界の救急箱と同じ大きさで、違うところを敢えて挙げるとするのなら、かなりの豪華仕様の箱だという事だけだ。

「救急箱、じゃなかった手当箱ひとつ持ってくるのに侍女十三人つて凄いですね」

「そういうものだ。煩わしい事この上ないだろう？」

「……なんか私ってば、物凄く睨まれているような気がします」

「……もう隠そうともしていかないな。呆れたものだ」

私の遣る瀬無い声音に陛下が嫌気の差した声音で応えていると、扉から幾らも離れていない場所で此方に視線を向けていた黒髪の侍女が顔を険しくした。

主に私への視線が一層厳しくなる。

「陛下、お聞きしても宜しいでしょうか」

黒髪の侍女の問いかけに、陛下は特に何も言わなかったが了承の合図を送ったみたいだった。

胸元にある彼の頭が僅かに動いたのが判る。

「何をされておられるのでしょうか？」

「何をだと？ お前には関係ないし、侍女が余の行動を問うのを許した覚えもない。手当箱は其処に置いておいてくれ。下がっていい命令しなれた者特有の威圧感のある口調で陛下が言っと、黒髪の侍女が一瞬だけ身を強張らせた。

彼女は手当箱を持っている手に力を入れたようだった。

「少しだけ指先の色が変わる。」

「陛下、お怪我をなされたのでございましたら、わたくしが手当てを」

「いや、余ではなく小娘だ。下がれ」

「陛下が直接手当てをなされるのでしょうか？ それはなりません、わたくしが」

「余でも出来る」

「そういう意味では」

「下がれと言ったのだが？」

「陛下、」

「……………」

陛下の纏う空気が変わってきた。

黒髪の侍女が食い下がる度に、彼と対峙している訳ではない私の背筋が寒くなっていくのが判る。

黒髪の侍女は更に言葉を続けようとしているのか、小さく息を吸い込むと口を開いた。

それに私は少し焦ってしまふ。

黒髪の侍女は空気が読めないのだろうか？

たぶんだけれど、これ以上、手当て云々の話で陛下に食い下がらない方がいいように私は思うのだ。

陛下は嫌な方向に怒りだしているような気がする。

オコチャマだけど一国の国王である陛下と侍女。

甘党の国と兼務しているけれど、トリエスという大国で強国の王様と侍女。

だめだ、たいして考えなくても軍配は陛下にあがってしまふ。

本気で怒った場合の陛下がどう出るのか私には判らなかつたけれど、とにかくこのままでは黒髪の侍女に雷が落ちるのは確実に見えた。

だから私は微力ながらも動く事にする。

だって、国王と侍女の言い争いの行く末なんて見たくないしね？
なんとなく悲惨すぎる結末を迎えるような気もしないでもないし
ね？

私は陛下からマッサージの手を離すと、黒髪の侍女の方へと小走り
りで近づいた。

「あの、侍女さん？ わざわざ侍女さんの手も陛下の手も煩わせる
必要はないですよ？ 私ってば、手当ては自分で出来ますから大丈夫
夫です！」

近づくとつれてピリピリとした空気が伝わるのに、思わず苦笑い
の表情になってしまったけれど、黒髪の侍女の元に辿り着くと、彼
女から手当箱を少々強引に受け取った。

手当箱を両腕に囲うようにして持つと、私は陛下の方へと振り返
る。

見ると、彼は既に食卓の椅子に座ってはいなくて、此方に向かっ
てきていた。

陛下は侍女たちに近づくと、五歩ほどの距離を保って足を止める。
私は彼女たちのピリピリ空気もなんとなく嫌だったので、直ぐに

彼の傍に寄った。

持った手当箱が重かったので、とりあえず足元に置いておく。

「ねね、陛下、そういえば聞き忘れてたんですけど、私っては何処で寝ればいいんですか？ 珍獣部屋、使えないんですよね？ 私、なんかお邪魔みたいですし、居るべき場所があるんなら其処に行きますけど」

私が陛下の部屋に居るから侍女が無謀にも食い下がり、陛下との関係が目に見えて悪化しているのだ。

だったら、さっさとこの部屋から私が退散すれば、この場はまるく収まるというものだろう。

そう思つての言葉に、陛下が感情の一切を排除した紫の瞳を私に向けた。

「お前には隣の部屋を使わせようと思つていた。珍獣部屋から移した荷物は明日にでも退かせるから、とりあえず今夜のところは寝台が使えれば問題はないだろう？」

「はい、全然大丈夫です！ でも、隣の部屋つて王妃の部屋の事ですよ？ 私が使つてもいいんですか？」

「誰も使つていないしな？ 別に構わん」

「恐れながら陛下、王妃の部屋を珍獣様がご使用になられるのは反対でございます。部屋でしたら他を今直ぐ御用意させて頂きますので」

「何？」

「お」

黒髪の侍女の言葉に部屋の空気が凍った。

勿論、凍らせたのは陛下で、黒髪の侍女をはじめとした彼女たちの戦意は何処から湧くのか満々だ。

黒髪の侍女は私をひと睨みすると、眉をしかめながら陛下に視線を向けた。

陛下は腕を組み、感情の読み取れない綺麗な紫の瞳で彼女を見据える。

「珍獣様はあくまで獣の扱いであられます。その存在が王妃の部屋をご使用になるのは、未来の王妃様への冒瀆以外の何物でもございません」

「冒瀆？ まだ見ぬ王妃にでも義理だてか？」

「義理だてでは。ですが」

「余が許可をしている。お前は何の権限があつて口を出している」
陛下の声音が一段下がった。

彼の纏う空気にどんどんと冷たさが増していく。

黒髪の侍女や他の侍女たちはそれに気づいたようで、少し顔を青くしたけれど、引き下がらなかつた。

「け……権限などございませぬ。ですが、それでもございませぬ！
王妃の部屋だけは！ その卑しい獣に使わせるなど！」

「余が飼っている獣だ」

「獣は獣でございます！ 陛下、その獣を御手許におかれるのはお考え直し下さいませ！」

「黙れ」

「御目をお覚まし下さい、陛下！ それは人間の女でございます！
法で珍獣とされていても、わたくしたち同様、人間の女ではございませんか！ それもどのような地から来たのか判らないのです！
もしも異世界が不浄の」

「余の前でそれを言うか！」

それ以上口にするのは許さんとばかりに、陛下が声を荒げた。

自分の失言に気づいたのだらう、黒髪の侍女が口元に両手を当てる。

「あつ……申し訳」

「お前は」

「もういいですよ、陛下」

私はふうと息を吐くと、陛下の腕をパシパシと叩いて、彼の注意を引いた。

これ以上、陛下と黒髪の侍女に会話をさせては駄目だ。

悪化の一途を辿るだけで、下手をすると彼女たちの解雇だけでは済まないような気がする。

とにかく今は侍女たちの方にご退散願おうと私はオナカに力を入れた。

「いいとは何がだ、小娘」

「っていつか、良かったです」

「良かっただと？」

「気にする方向が複数じゃなかったんで、良かったって言うてるんです。さっきはビビっちゃいましたよ。えっと、侍女さんたちが陛下に呼ばれて明かりを入れに来た時の事です。思わず柄にもなく考えちゃいました。つか、こういうのって小説や漫画によくある展開です。先が読めました。陛下と侍女さんが言い争っても平行線です。王妃の部屋の使用云々を言うって事は、侍女さんたちの裏には後宮か、それに関係する人達が糸を引いているっていう単純明快な王道路線を思いつきり踏襲してますよね？それが判って私ってば安心しました。一気に気が楽になりましたよ」

「ち、違っつ！何も知らぬ卑しい獣の分際でお前は何を！」

私の言葉に黒髪の侍女が顔を赤くして食いついてきた。

その様子には私は内心ガツポーズをしてみよう。

よし！ここから一気に畳み込んで怒らせて、部屋から退出してもらおうからヨ・ロ・シ・ク・ね！

「ややつ、異世界に来て陛下以外に初めてお前とか言われました。

まあ、そんなに興奮しないで下さい。侍女さんたちの行動言動は判り易すぎて、誰でも直ぐに察知すると思いますよ？庶民な私でも判ったくらいですから、王宮に居る人たちなら尚更だと思えます。陛下なんて勿論とつくに気づいていたと思えますし、もしかしたなくても貴女たちの後ろに誰が居るか把握しているんじゃないですか？

陛下と後宮の関係はあまり良好じゃないんですよね？だったら、もっと上手く立ち回らなければならなかったし、私から言わせれば、そんな貴女たちを使っているような後ろの人たちの程度が知れると

いうもんです。想像でしかないんですが、例えばヴィルフリートさんなら、相手に気づかれないうちに微笑みながらこの世の枠から敵を叩き落すくらい的事はしそうです。もし私が侍女さんや侍女さんの後ろに居る人たちだったら、まずは相　　えっと、人間性を疑われそうだから止めておきます。まあですね、それは置いておいても、私ってば侍女さんたちが言っている事は正論だと思いますよ？　それに私は反論出来ません。確かに私はトリエスでは珍獣ですし、陛下の未来の王妃様の部屋を使うのはちよつと問題があるような気がします」

「　　ほう？　ではお前はどつするつもりだ」

黒髪の侍女だけでなく、陛下も食いついてしまったようだ。

おおう、何故?!と心の中で思っていると、陛下が目を細める。

彼の口角が酷薄そうに上がり、その様子はまるで私を試しているかのようにだった。

陛下の手が私の右頬に当てられて、親指の腹で目尻を何度か撫でられる。

彼のしてくる行為に私は脳内で疑問符を浮かべながら、最後の仕上げを言うことにした。

「王妃の部屋は使えない。珍獣部屋も使えない。客室は危険だと言われた拳句に、陛下の保護無しに外へ出た日には、半刻息をする事も保障できないと言われてしまっている私です。だったらね？　仕方ありません。今日の昼間のように陛下の部屋で寝ます。えつと陛下付きの侍女さん、ご心配なく。王妃の部屋は使いません。私、陛下の部屋で寝ますから。まあ、獣ですし？　その辺に転がって寝ますよ　と、貴女たちの裏に居る人たちに今直ぐ報告に行ってください。だから安心してね、と。そうそう、貴女たちが余計な事をやるから、こつなつたんですよ、と嫌味も一発つけ加えるのも忘れずに。何もしなければ、一番最悪な状況にはならなかったのに、と」

ちよつと言い過ぎたかなとも思ってたけれど、確実に陛下付きの侍女たちに退散してもらいたかったから、私はこれで良しとする。

それにね？

このくらいの嫌味は言わせてよ。

だってさ、こう言ってしまった以上、私ってば最悪絨毯の上で寝る事になるんだよ？

猫みたいに丸くなってね！

にゃーん、にゃーん、にゃんにゃんにゃんって、私ってば、もうやってらんないよ！

まあね、日本の我が家では煎餅蒲団だったしね？ 毛布の一枚もあれば、毛足の長い絨毯の上だし、問題は全く無いんだけどね？

私の言葉に陛下付きの侍女らは啞然としたようで、咄嗟に言い返せないでいるみたいだった。

私は何だか面倒臭くなってしまって、彼女たちの前で部屋の主である陛下にさっさと了承を得てしまおうと言葉を続ける。

「で、陛下的にはどうですか？ いつまでか判りませんが、陛下下の部屋で寝起きしてもいいですかね？ 別に陛下下の命を狙う気とか更々ありませんよ？ そんな事をして、身内もしがらみもない私には得になることなんて何ひとつ無いですから。むしろ安全と衛生面の保証、引き出し無尽蔵なATM……じゃなくって、無制限の金脈が無くなって困ります。幾ら財産を分けて貰ったからって、異世界人の私には、それって結構死活問題のような気がしますよね？ それに陛下が私と一緒にの部屋で寝起きするのなら、今ならもれなく毎晩全身マッサージ付きを保証します！ 無期限で無料です！ お得ですよ？ 超超お得ですよ？ 向こうの世界の専門家、滋岳さんから伝授された高等技術なんです！ 価値有り有りです！ なんだったらアロマオイル……えっと、トリエスで精油とホホバオイルを探るか作るかして、陛下にアロママッサージもしてあげます！ ご所望なら日本の風俗並みなのも私ってば出来ますよ？！ その技はお兄ちゃんを被験者にして千夏ちゃんに習いました！」

此処で了承してもらえないと彼女たちに売った喧嘩が水の泡になるから、私が必死に自分の出来る事をアピールしていると、何がお

かしいのか陛下が突然笑い出した。

彼は頬に当ててていた手で引き寄せるように私の右肩を掴み、心底おかしそうに、くつくつとした何処か嫌な感じのする笑いを暫く続ける。

ひとしきり笑った後、陛下は侍女たちに鋭い視線を向けた。

彼の澄んだアメジストのような紫の瞳は、冷たい光を放っている。全身が震えてしまうような冷たく感情の無い、冷酷さと恐ろしさだけを感じさせる瞳だった。

事実、黒髪の侍女をはじめとした他の侍女らが、顔を蒼白にして全身を震わせている。

「お前達の申したい事はよく判った。では望み通り、小娘は余の部屋に住まわせる。それで良からう？　　下がれ。不快だ。明日の朝はリーザらだけを寄こさせる」

「へ……陛下、お許しを！　わたくしたちは　　」

「何度言わせる。下がれと言った。聞こえなかったのか？　なに、不安になる事はない。別にお前らをどうこうするつもりは無い」

今はまだ。

陛下は付け足した言葉を私にだけ聞こえるように口にすると、煩わしそうに手を振った。

「下がれ」

侍女らが慌てて部屋から退出していった。中には転んでしまった者も居る。

そのあまりの恐れ様に、私は何だか遣る瀬無くなってしまった。

「陛下、苛め過ぎ」

「そうか？　お前の嫌味もなかなかだったと思うが？　　そ

れより、小娘」

「なんですか？」

陛下が私の肩から手を放して、顎を捉えた。

彼はその美しい顔に冷たさだけしか感じない微笑みを作る。

「お前はここぞという時に面白い事を言うな？」

「は？ 嫌味がですか？ ちつとも面白くないと思いますけど？」
「判らんのならよい」

陛下が私の顎をくいと上に持ち上げた。
そして彼の綺麗な紫の瞳が、私の黒い瞳の奥を覗き込もうとするかのように合わせられる。

「気に入った」

「何がですか？」

「気に入ったと言った。死神の守護にお前を加える」

「死神って？」

私が聞くと、陛下は冷酷そうな微笑みを深くした。

「お前が知る必要はない」

「……………」

「お前が余の邪魔をしたり、足を引つ張らない限り、お前の身の安全は余の名にかけて、そうだな、通り名にかけても保障しよう」

「陛下の名前？ 通り名？」

「ああ」

持ち上げていた顎を更に上げると、彼は私の耳元に口を寄せた。

「お前が目障りにならない限りな？」

そう静かに囁いて、数時間前のベッドの上の時と同じように、陛下は私の耳朵を軽く食む。

そして伝うように唇と舌を這わせて首を 頸動脈が通る辺り

を強く吸った。

チリツとした痛みが走り、私は思わず彼のガウンに掴み縋る。

「……………」

時間にしてほんの数秒ほど。

陛下は顔を離して、宝石のように綺麗で冷たそうな紫の瞳を細めると、顎を捉えていた手で私の首をやりわりと掴んだ。

その手が苦しくない程度にまで力が加わってきたのと、陛下の不可解な言葉と行為に私は眉を寄せる。

「何が言いたいのか、何がしたいのか全く判らないんですけど……………」

「判らなくてもよいよ。 さて、口を洗うか。夜も遅い」

「口を洗う？」

「洗わないのか？」

陛下が私の首から手を放し、乾いてサラサラに戻った黄金の髪を揺らしながら首を傾げた。

私も彼と同じ方向に傾げてみると、頬に黒い髪が被さる。

気になったのか、陛下は私の髪を指で掬うと耳にかけてくれた。

「口を洗うってどういう意味で言ってます？」

「言葉通りとしか言い様がないが？ 異世界人は寝る前に口を洗わないのか？」

不衛生ではないか、と陛下が眉をひそめた。

「……歯を磨く？」

「歯を磨く？」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……一緒の意味ですかね？」

「……そうだな。まあ、言い方などどうでもよい。行くぞ、疲れた」
そう言って、陛下はクルリと私に背を向けると、陛下の部屋に隣接している向こうの世界でいう洗面所にスタスタと向かった。

陛下の足は長くて、根本的な歩幅が違うから、私はあつという間に取り残される。

「あ、待って下さいよー！」

「待ちたくない」

「変態！」

「お前にだけは言われたくないが？」

そんな会話を交わしながら、一緒に歯を磨きに行った訳なんだけ
ど。

陛下と私は気づかなかった。

先程まで引っくり返ってオナカをポリポリと掻いていたウオちゃん
んが、私たちを目で追っていたなんて。
ウオちゃんは見ていた。

陛下をずっと。

… 86 (後書き)

陛下は人間です

陛下の部屋に隣接している向こうの世界でいう洗面所は、やはり
というか何というか、とにかく豪華仕様だった。

昨日も一昨日もリーザに付き添われて使わせてもらったから初め
てでは無いのだけれど、見事な装飾が上まで伸びているのと、描か
れている天井画に迫力がありすぎる。

なんとなく気になってしまっただけで見上げると、たくさんの瞳が陛下
と私を見下ろしていた。

「陛下、」

「なんだ」

「あの天井に描かれている天使もどき、顔が怖いです。左から十三
番目の青い目のなんて特に」

「見なければよいだろう？」

小娘、これが初めてではないだ

ろうから、使い方は判っているよな？」

「はい、判ります」

その言葉に視線を戻すと、陛下が私にトリエス製歯ブラシを差し
出してくれていた。

トリエス製歯ブラシは柄とブラシとに分かれていて、ブラシは差
し込んで固定する形になっている。

ブラシ部分は贅沢な事に一回使い捨てタイプだ。

そのつくりは私にもあまり違和感の無い仕様になっていて、向こ
うでいう『かため』の動物の毛のようなもので出来ていた。

「どちらを使う？」

「うーん、薔薇の香りじゃない方で」

陛下が私の手にした歯ブラシに、ミント味の歯磨き粉もどきを付けてくれた。

歯磨き粉もどきは小さな陶器の入れ物に入っていて、スプーンで掬って使うようになっていた。

私はそれを一度水に付けるために、向こうの世界でいう蛇口もどきを捻った。

トリエスには今のところ水道は通っていないようだったけれど、陛下の洗面所には、手頃なサイズの蓋つきの水甕に綺麗な水が入れられていて、下部に取り付けられた蛇口を捻ると水が出てくる作りとなっている。

私は歯ブラシを口に入れてから、思った事を陛下に言った。

「私ってば本当に良かったです」

「何が？」

自分の歯ブラシに歯磨き粉を付けて、同じく口に入れた陛下が、黄金サラサラストレートな髪を邪魔そうに掻き揚げながら応えてくれた。

「この衛生環境の事ですよ。心地よく歯磨きが出来る環境と綺麗なお風呂にトイレ、虫が生息していない寝台とかですね、私ってば、陛下が与えてくれるこの環境に本気で感謝してるんですけど」

「感謝？ ヴィルフリートやディルクにも提供できると思うが？」

「それはそうかもしれないですけど、二人は陛下の近くに居る事を許された特殊な部類に入る人たちじゃないですか。私ってば自身身が庶民ですし、庶民を見下している訳でも差別している訳でも全くないんですけど、でも、どうしても譲れないものがあるっていうかですね？ もしも私が異世界トリップをした先が庶民の家だったら、陛下が与えてくれる衛生環境を得られたとは到底思えないんですよ」

「そうだな。比較的裕福な家なら……いや、それでも王と同等という訳にはいかないだろう。同じ庶民でも王都から離れれば離れるほ

ど難しくなっていくだろうし、他国の場合は更に難しいと思う」

「そうなんですか？」

「ああ。他国の庶民の生活水準はトリエスのそれより厳しい場合が多いんだ」

陛下は歯ブラシを奥まで入れたようだった。

話す声が籠り出す。

「お前がもしトリエス以外の国に渡っていたら、かなり大変な思いをしたかもしれない。求める基準が此処であるのならば尚更だ。それに、お前の求めるものは満たしているかもしれないが、他の国の王の元に渡った場合も苦勞を、というより高い確率で既に命は無かつたと思つぞ？ 余と同じように事が進んだとは思わない方がいい」

「え」

「当たり前だろう？ 特殊な対応をしたのは此方の方だからな」
言つて、シャコシャコと歯を磨きながら、陛下が澄んだ紫の瞳を鏡越しに向けてきた。

「それより、そういう恰好をすると子供に見えるな、お前は」

十五くらいに見える、と陛下は呆れたような顔をして、歯ブラシを持っていない方の手でピシッと私の鼻頭を弾いた。

「ちよつと何を、つてというか、子供つて？ え、十五つてどういう意味で言ってます？」

「どついう意味も何も。肩あたり、きつくないのか？」

私のナイトドレスの肩の部分を軽く引つ張りながら、陛下が少しだけ眉を下げた。

「……別に」

「……大丈夫そうだな。信じられん。十八なのだろう？ 言おうと思つていたのだが、これは子供用だ」

「は？」

「大方、お前に大人用を着せたところで、透けていようがどうしようがお構い無しだから、子供用を渡されたということだろうな」

「子供用?!」

「ああ。トリエスではこの形で、この手の透けない布地を使うものは子供用だ。胸元と袖口のリボンが異様に大きいだろうが」

丈も脹脛までしか無いだろう、と陛下は私のナイトドレスを少しだけ摘み上げた。

「酷すぎるっ！ 私ってば純真可憐で繊細な麗しの、しかも年頃の乙女なのに！ ってか、どうして子供用なんですか?! 身長は日本人の平均はあるし、童顔とか言われたことも過去一度も無いんですけど！ 胸だって……えっと、胸は……そりゃあ、A カップすら……あ、あまっちゃいますけど、でもでもでもでもっ！」「だからお前の行動が奇抜すぎるからだろう？ それと、えーかっぶが何なのかは余には判らんし判りたくもないが、あまるのには問題がありそうだな？ お前のその言い方だと。では仕方ないのでは？」

陛下がどうでもいいといった様子で歯を磨きながら器用に肩を竦めた。

「私の脆く繊細な硝子の心が傷ついちゃいますよ!」

「脆く繊細な硝子の心な。よく言える、とは思うがな？ だが、そ

もそもお前は幼児体……」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……あれ、陛下、今、なんて言おうと?」

「……いや、何も? さて、」

「……ふっ」

「何故そこで咳込むんだ、小娘っ！ かかっただろう?!」

垂れる!と慌てながら豪華な洗面台に向かって前屈みになる私に、陛下が歯ブラシを啜えながらギツと睨んできた。

私は持っていた歯ブラシを置くと、蛇口を捻り、ペッと口の中のものをつき出す。

「仕方ないじゃないですか！ 気管に入っちゃったんですもん！ 鼻の調子が悪いから、息を吸うのと話すのと磨くのと全てが口での同時作業なんです！ ものすっごく高度な技術が必要なんですからね！」

「なにが高度だ！ 馬鹿馬鹿しい！」

やっていられない、と吐き捨てるように言うと、陛下は優美な籠に置かれているタオルもどきに手を伸ばした。

ひとつを私の頭の上に放り、次に手にしたタオルでかけられたものを拭い出す。

「お前と出会って三日と経っていないが、涎をつけられ、鼻水をつけられ、いい加減にしてくれないか！」

「顔も舐めちゃいましたし、血が数滴入ったお風呂にも入れちゃいましたしね！」

「そうだったな！」

蛇口から出る水を手で掬って口を濯いでいた私に、ペシッと拭っていたタオルを投げつけると、陛下はコップを手に取り、合間を縫うようにして水を注ぎだした。

私の横で何度か口を濯いで、それが終わると、彼は前屈みになっていた私のオナカに左腕を通す。

「え」

「行くぞ」

そう言うのと同時に、私は米俵のように陛下の肩に担ぎあげられた。

「ちょっと、なんなんですか?!」

「口も洗い終わったし、次は頭に巻かれたものを取り換えるに決まっているだろう？」

出来るものなら中身も取り換えたいがな、と投げやり気味に付け足して、手足をバタつかせて抵抗する私を物ともせず、陛下はさっさと洗面所を後にした。

途中で手当箱を拾った陛下は、ポンツと気遣いの欠片も無く私を寝台の上に放り投げると、彼自身も其処に腰を下ろした。

「投げないで下さいよ！」

「いいから頭を出せ。早く済ませて寝たいんだ」

面倒だと思うのを隠そうともしないで言うと、陛下は手当箱を開け、向こうの世界でいう包帯とガーゼ、薄黄色の液体が入った小瓶を取り出した。

手当てをしてもらうのだからと寝台の上にきちんと座ると、彼は私の頭に巻かれていた包帯を手際良く解いていく。

解き終わって傷に当てられていたものも取ると、陛下は小瓶の蓋を開けた。

「何ですか、それ」

「消毒だ。一応な。血は止まっているな。暴れたりしなければ、もう出血はしないだろう」

言って、液体を湿らせたひんやりとするガーゼを傷に数回当てる。と、それを寝台の横にあるサイドテーブルのゴミ箱にポイツと捨てる。

今度は湿らせていない新しいガーゼを傷に当てて、それを手で押さえながら、彼は手早く包帯を巻いていった。

「出来た。寝るぞ。疲れが取れないし、眠い」

使用済みの包帯もゴミ箱に捨てて、陛下は手当箱をサイドテーブルの脇に置く。

一度腰を上げて、ガウンを脱いで適当に放ると、私を邪魔そうに枕の方へと退かせながら掛布を大きく捲った。

そして息を吐いて、怠そうな様子で横になる。

「陛下、そんなに疲れているんなら、眠れるまで腰でもマッサージしましょうか？」

「いや、いい」

陛下が甲を下にして左手を額に乗せた。

「どうしてですか？」

気持ちいいと思いますけど、と私は言葉を続けながら、陛下のベツドの中になんとなくモソモソと入ってみる。

彼の隣に横になると、陛下が自分と私の上にも掛布を引き上げてくれた。

「額に傷をつくっているような者にされてもな。今日は大人しくしている」

「別に大丈夫ですけど？」

「いいから。早く寝るぞ。予定外の休みを取ったから明日は早くから行動しないとイケないんだ」

「判りました。じゃあ、近いうちにやってあげますね」

「ああ」

「……………」

「……………」

「ねえ、陛下、」

「なんだ」

「私ってば、なんとなく陛下の寝台に入っちゃいましたけど、一緒に寝ていいものなんですかね？」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」
今更だな

「……そうですね」

そう言いながら二人同時に溜息をつく、陛下は直ぐにでも睡眠に入ろうとしているのか、額に乗せていた手を幾つもある枕の下に移動した。

「ねね、陛下」

「なんだ。もう寝ろ」

「うーん、寝たいんですけど、私ってば明るい寝れないんですよ……。蠟燭が全開に点ってるんですけど、あれ、消さないんですか？」

「……………」

「へ・い・か！」

「……呼びたくない」

「……そうかもしれないですけど……………じゃあ、私が消してきます？」

どうしようもなく消極的な陛下の言葉に、私が侍女たちの代わりにしようと仕方なく身を起こそうとすると、陛下はそれを遮るように私のオナカを三回揉んだ。

「ちよつと！」

「一人で消しきれぬ量ではないし、届かないものもあると思うが？」

「……………だって」

「寝ろ。気にするな」

「おおっ」

煌々と点っている蠟燭たちを眺めながら、寝る気満々の陛下の横で私が嘆きの声を上げていると、ベッドから離れたところに居るウオちゃんの声が突然聞こえた。

「きゅきゅきゅん、きゅきゅきゅん、きゅんきゅんきゅん！」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………消えましたね」

「……………消えたな」

ウオちゃんが声を出し終わると同時に、部屋中の全ての明かりがフツと消えた。

驚いてポカンと口を開けながら真横の陛下を見遣ると、窓から射しこむ月明かりに照らされた彼の紫の瞳が驚愕に見開かれている。

陛下の整った黄金の眉が嫌そうに寄った。

「……………ウオ、明りを点せ」

「ちゅちゅちゅび、ちゅちゅちゅび、ちゅびちゅびちゅび！」

「ウオちゃん、消灯！」

「きゅきゅきゅん、きゅきゅきゅん、きゅんきゅんきゅん！」

陛下の指示通りに部屋中の明かりが点り、私の指示通りに全てが消える。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「ねえ、陛下、ウオちゃん、物凄く怪しくありませんか？」

「……………そうだな」

「調べないんですか？」

「今朝、ルドルフに地下の死骸についての指示は出したが？」

「うーん、そうですね、今の事とかは？」

「……………今日のところは何も考えたくない。少したりとも考えたくはないんだ。寝させてくれ。もう全てが嫌すぎる」

陛下が掛布を深く被った。

顔が見えなくなってしまったのに私も中に潜ってみる。

つんつんと彼の喉仏あたりを突つつくと、疲れ果てましたといった様子で陛下が息をついた。

「何でそんなに現実逃避に走ってるんですか？」

「……………」

「まあいいんですけどね？ でも陛下、私つてば、摩訶不思議な事は見なかったことにするっていうトリエスの国民性は少し改善した方がいいと思いますよ？ ちょっと皆、無視しすぎです」

陛下もそうだけど、ディルクさんもヴィルフリートさんも、リーザも妖精も、ルドルフさんもヘロルドさんも、そしてたぶんグイードさんもね？

「……………」

「ほらほら、掛布から頭を出して？ 私つてば陛下が眠れるまで手のツボでも押していてあげますから」

私は掛布を胸元まで下げると、彼の手を取ってツボを押し始めた。陛下は大人しく私に手を預けたまま、もう一方の手を再び額に乗せる。

「そうだ、陛下」

「なんだ」

「聞こうとしていた事を思い出しました。ねね、トリエスつて身分差がある結婚つて難しかったりします？」

「身分差がある結婚？」

私の方に顔を向けて、陛下が不思議そうな声で応えた。

「そうだな、トリエスは伝統と慣習の縛りが弱い分、身分に關しては他国に比べて随分と寛容で緩やかだ。まあ、その者の立場や置かれている状況にもよるけどな。何故だ」

「うーん、フェルテンさんのね？」

「フェルテン？」

「はい。フェルテンさんの結婚を許してあげて欲しいんです」

私の言葉に、陛下が不可解そうに眉をひそめた。

「意味が判らない。フェルテンが婚姻を結ぶのに、何故、余の許しがいるんだ。決まった際の事前報告だけでよい。国の利害に絡むものでなければ、家同士の話では？」

「あれ？ そういうものなんですか？」

「ああ」

「でも…」

「でも何だ」

「フェルテンさんの相手が問題なんですよ……」

手のツボを押すのを止めて陛下の手に自分の手を合わせてみると、陛下がなんとなくといった感じで指を絡めてきて、お互いにニギニギと握り合った。

「問題？」

「はい。身分差がね？」

ヴィルフリートさんは身分による差別が一番大きいと言っていたのだ。

やはり身分をどうにかして引き上げないと、陛下の覚えもめでたい騎士と、良く見積もっても中の下だろうと思われる使用人との結婚は物凄く難しいのかもしれない。

そう思いながら言葉を続けていると、陛下が澄んだ紫の瞳を少しだけ細めた。

「誰だ」

「ローラとロツテです。浴場に居た使用人の。まあ、彼女たちの身分が何なのか、ちゃんと聞いていないんですけどね？ ……低いのかなと私なりに思ってた」

「浴場に居た使用人？ ではフェルテンとは釣り合わんな。あれは伯爵家の三男だ。今は長男が跡目を継いでいるんだが、体が弱いらしくてな。子も望めないらしいし、いずれはフェルテンが継ぐか、あれと細君との間に子が出来でもすれば養子に差し出すことになるだろう。次男は美食の旅とやらに出て以来、十数年行方不明で伯爵家では亡き者として扱われているし」

「えっ、フェルテンさんって結婚してるんですか？！ 奥さん居るの？！」

私は心の底から驚いてしまって、直ぐ傍の陛下の顔をマジマジと見つめると、彼は黄金の眉を僅かに下げた。

「いや、今は居ない」

「あ、お亡くなりになったとか？」

「そうだったら、まだ救われたのかな。……駆け落ちだ」

「え」

「五年前の話だが、初恋の君とやらと手を取ってダルスアーダ王国に渡ったそうさ。その初恋の君はレネヴィア王国の王都に拠点を置く大商人の息子だとかでな。勘当されたらしいんだが、経験を生かしてダルスアーダに店を構えたのだとか。で、店は短期間で繁盛して、二人は此の上なく幸せにやっているらしいと、ヴィルフリートが面白そうに仕入れた情報を話していた。余とディルクと……フェルテンの前で」

「おおっ」

フェルテンさんが可哀想すぎるのとヴィルフリートさんが鬼すぎるのに、私が複雑な顔をしていると、陛下もなんとも言えないといった様子で言葉を続けた。

「それ以来、女性不信になったのか、二度と結婚はしないと宣言していてな。あれの兄が困り果てていた。意外だが、今、フェルテンに再婚する意志が？」

「はい。だから、そのローラとロツテと。どっちかひとりか、ふたりともかは私もよく判りませんが」

陛下の問いに私が枕の上でコクコクと頷きながら返答をしていると、彼が疑問の声をあげた。

「ふたり？ トリエスで重婚は禁止されているが？」

「え、そうなんですか？ でもでも陛下下つては後宮を持っているじゃないですか」

「あれらは妾扱いだ。妃、一般に言う妻ではない」

「へー……って、その辺はどうでもいいんです！ ねえ、へ・い・か！ 身分差、なんとかありませんか？ ローラもロツテも、そこんとこ気にしてて物凄く可哀想なんです！」

「そこがよく判らんのだが、フェルテンに再婚の意思があるのなら、己でどうにでも手を打つのでは？ あれは愚鈍な男ではないが？」

「普段はそうでも、実際、自分自身の結婚ともなると不器用にもなるもんですよ！ それにフェルテンさん、前の奥さんに駆け落ちされての再婚でしょ？ この件に関しては、慎重にも臆病にも不器用にも、そして手際悪くもなっちゃうと思いませんか？」

「そういうものかな」

「そういうもんです」

うーん、と納得しかねるといった様子で陛下は暫く考えていたけれど、ふっと息を吐くと、ニギニギしていた私の手を離れた。

「判った。あれの兄に話を通しておこう。たぶん余が何もせずとも、事を伝えるだけで身分云々言わずに嬉々として動くと思う。背に腹はかえられんだろうしな」

「良かった！ ねね、陛下、なるべく早くお願いしますね！ めでたい事だし、この際、ちゃちゃちゃつと話を進めちゃいましょうよ！」

「そうだな。明日にでも時間を見つけてやっておく」

よっしゃ！ 陛下が動くよ！ ローラ、ロツテ、良かったね！

万が一、二人がフェルテンさん攻略に失敗しても、主君である国王が動いちゃったらフェルテンさん、陛下の覚えもめでたい騎士だもん、絶対に逆らえないと思うんだよね！ 何も言えなくなっちゃうと思うんだよ！ 仕事の事じゃない自分の再婚の話だしさ！ うふっ！

へ・い・か、宜しくね！ 後は任せたよ！ 貧乳同盟同士のローラとロツテの今後の幸せと玉の輿、そしてなにより巨乳化計画がかかっているんだからね！ いえいつ！

そんなふうにして私がローラとロツテの幸せを願って心の中で拍手を打っていると、横の陛下がポツリと呟いた。

「 眠いな」

「さつきから眠い眠い言ってますけど、昼間ずっと寝てたじゃないですか。あ、でもさつき、ディルクさんが陛下は眠り姫だって言っていたような？ だからか！」

「誰が眠り姫だ。あれが本当に言ったのか？ 昼間の睡眠自体、お前の鼻の音で何度も目が覚めて、寝不足が全く解消していないんだが？」

「お……それは……ごめんなさい？」

ふんとした感じで陛下が言うのに私は素直に謝って、顎のあたりまで掛布を引き上げると、ベッドから一番近い窓に目を向けた。

視線を向けた先には、私が今まで見たこともない多くの星々が夜空一面に輝いている。

「トリエスって星が多いですね」

「そうか？」

「はい、日本ではこんなに見えませんでした。昔は凄かったらしいんですけど、環境汚染と、夜でも外で行動できるように明るくしちやっただから星が見え難くなっちゃったんです。まあ、ウチは都心に比べれば見えた方なんですけどね？ 判り易いところで冬にはオリオン座が見れました。向こうの世界のギリシャ神話で、オリオンはポセイドンっていう海の神様の子供なんですよ。綺麗ですね、星って。陛下、こつちの世界にも星座ってありますか？ あ、星座で通じます？」

「通じる。根本的な思想は向こうも此方も変わらないようだな。

そうだな、小娘、ここからだとな今の季節は空の中程に秤の星座が見える。こちらの世界では有名な星座だ」

「秤？」

「ああ」

「どれですか？」

「少々判り難いんだが、真ん中付近に四角を形作る周囲のものよりも明るめの四点の星があるだろう？ それを目印にして、近くにある二点の星とを結んだやつだ。二点の星は四点の星よりも少し暗めだが判ると思う」

「えっ判りません。どれですか？ どれもキラキラ光ってますけど？ どれが四角の四点？」

その言葉に陛下が小さく息を吐いて、私の目線に自分のそれを合わせようとしたのだろう、彼は体を少し起こすと顔を近づけてきた。頬と頬を少しの躊躇いもなくピッタリとくっつけてくる。

陛下の纏う石鹸の香りが、ふわりと私の鼻腔に入ってきた。

「酒の臭いが本当に酷いな、小娘。飲み過ぎだ。あれだ。余の指す先を見る」

私と目線を合わせた陛下が、夜空に向かって腕を伸ばした。

「あー…あれかな」

「それだ、それ」

「……私がどの星の事を言っているのか判らないくせに、適当に相槌を打たないで下さいよ」

「……お前には付き合いきれん」

陛下がくっつけていた頬を離れた。

「本来は正義を計るとされる星座なんだが、お前の場合はさしずめ体重だな」

「は？ 陛下つては何を言つて？」

「お前の場合は体重を、つまり減量を意味する星座だと言っている。痩せるのだろう？ 今夜のようにあれほどの肉を食べていたら、いつまで経っても痩せないだろうが。だからせめて夜だけでも秤の星座を見て、少しは反省して食欲を減退させるんだな」

酒も太るしな、と鼻を鳴らすようにして言い捨てる真横の陛下に、私は啞然茫然だ。

なになに、なんなのこの男？ 本当に何なの？

どうして星座から体重の話に?! 私は今、こっちの世界にも星座ってありますか、って聞いたただけけど?!

つか、さっきから言ってる事が判らな過ぎ! 死神とか目障りがどうのとかさ! ふざけんな! 大天才の異能力保持者めが!

当然私は怒髪天をつくかの如くに怒りが燃え上がり、ガバツと掛布を跳ね退けて起きあがった。

「小娘？」

「ムカついた」

「なに？」

「ムカついたって言ったんですよ、この無礼男め！」

その言葉と同時に、私はドスンと陛下のオナカの上に跨り乗った。

「何をしているんだ、小娘っ！ 退け！」

「どきません！」

「重い！」

「言っに事欠いて、また重いつて言いましたね?!」

貴様！ あやしい地下でも重いつて言ってるんだからね！ 私っ

てばシツカリと覚えてるよ?!

「言ったが、それがどうした！」

「あつたま来た！ 脱がす！」

「なに？」

「頭に来たから脱がすと言ってるんですよ！ 覚悟しろ、陛下め！」

「おかし過ぎるだろう！ お前のその発想の方向性は！ 止めろっ

！」

陛下のパジャマもどきを力任せに左右に引っ張ると、彼はさせじ

と私のナイトドレスを引っ張った。

怒りに脳内が支配されている私は少しもそれを気にすることなく、

陛下のパジャマを強引に腰の方に向けて引き摺り下ろす。

すると陛下の肩からパジャマがスルリと外れて、腕は肘まで、背

中は半ば程まで脱がす事に成功した。

「さあ、全部脱げ！ トリエス王国国王陛下！ 躊躇わず思いつき

りババツとね！」

「ふざけるな！」

「漢は黙って裸族！ これ鉄則ですよ！」

「どこの鉄則だ！」

「我が母国日本です！」

「ここはトリエスだ！ 阿呆！ っ！ 返せ、小娘っ！」

「こんなパジャマもどき、陛下には不要です！ 許せて葉っぱ一枚

のみ！ いや、葉っぱも許せません！ なんてたつて陛下は彫像なんですからね！」

「なに？！」

「ちょ・う・ぞ・う！ ダビデ像ですよ！ さあ、私が石膏で固めてあげます！ がっちがちにね！」

そして城門に晒してやる！ 勿論、全裸でだよ！

トリエス王国全国民のみなさーん！ お触り一回トリエス銅貨三枚です！

私つてば銅貨の価値がイマイチ判つてないけどね！

「小娘！ 何処を触っているんだ、お前は！」

「きゃっ！ ちょっと、陛下！ ナイトドレスのリボン、解けちゃつたじゃないですか！」

「知るか！ 手を放せっ！」

「い・や・で・すーだ！ あっ！ 破れた！ 陛下が無理に引つ張つたからナイトドレスが破れちゃいましたよ！ リーザに怒られたら陛下のせいですからね！」

「是非とも怒られて欲しいものだな！ 小娘、下は下ろすな！ 止めると言っている！ 直接触るな！ いつ……何処を引つ張っているんだ、お前はっ！ いい加減にしな！」

その後、陛下と私は私の体内時計で小一時間くらい、お互い半裸状態でベッドの上で暴れまくっていた。

そして二人して疲れ果てて、そのまま折り重なるようにして眠ったのだけだ。

王城ヴィネリンスの全貌を私はまだ知らないけれど、少なくとも異世界人ひとりに与える部屋が一室も無いなんてことがあるはずもなく。

状況と売り言葉に買い言葉で、この夜、私はトリエス王国国王陛下の部屋に居座る事が決定した。

それはつまり、陛下と私の奇妙な同居生活が始まったという事だった。

… 88 (後書き)

ダビデ像 (ミケランジェロ) : Wikipedia
http://ja.wikipedia.org/
Wiki/%E3%83%80%E3%83%93%E3%83%
87%E5%83%8F|)(%E3%83%9F%E3%82%B
1%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%82%B8%E
3%82%A7%E3%83%AD)

陛下と私の奇妙な生活 : 四百字詰原稿用紙 約444枚

「ところで私ってば思いついたんですけどね？ 初恋の話なんてどうですか？ デイルクさんとヴィルフリートさんの！」

異世界からやってきた彼女の口からその言葉が出た時、俺は思わず心のうちで溜息をついてしまった。

ああ、酒がウマイ。

ひとこと言えば従順に取り寄せておいてくれる古い付き合いの国王に感謝しつつ、俺はなるべくこの話題には触れたくないと思いつつながら珍獣の彼女に目を向ける。

元気すぎる存在は酒瓶を揺らしながら楽しそうに笑っていた。

これまでの人生は平和で安全で、汚い世界に触れる必要も無かつたのだらうと丸わがりの彼女は、今、トリエス王国国王陛下の元に身を寄せている。

トリエス王国は非常に優秀な王の元、強大な国力を手中にし、人や物が集中する大国だ。

統治も安定していて、国内は平和そのもの。

一般的な庶民の暮らし向きも、そう悪いものではないから、他国

からの移民難民も年々増えているのが現状だ。

そのあたりは此の世の反則と言える天才的頭脳で王が問題なく捌いていて、国内の安寧秩序を見目麗しい若い国王がもたらしているのだから、王の人気は年齢性別関係なく高いものになっている。

なにかの際に手でも振れば地が割れんばかりの大歓声が起こるし、よく理由が判らない不思議な献上物も多い。

とにかく人気のある王なのだが、だがそれは、あくまでトリエス国内での話だ。

国内でも国境に近い街や村では、また違った評判を耳にする事になるだろう。

そんな王に保護されて身を寄せた珍獣の彼女。

そこになんらかの意図があると、果たして彼女は気づく事が出来ているだろうか？

非常に優秀な王は基本的に無駄な事はしないし、意味の無い人間を同情や気紛れで傍に置いておくような、甘くも無ければ酔狂な御仁でも無い　　と思っていたんだが、実のところ今はいまいち自信が持てない。

いつもの陛下と様子が違うのは明らかだし、彼女を持てあまして困っているのは、腐れ縁を続けてきた俺には一目瞭然だ。

まあ、珍獣の彼女は突飛すぎて、俺やヴィルフリートでも持てあますだろうと思うから、仕方無いといえれば仕方無いのかもしれない。そのような事を思いながら会話を進めていると、珍獣の彼女がナイトドレスを盛大に捲り上げて足を組んだのに力が抜けた。

極短い間とはいえ、俺よりも彼女と居る時間の長かった陛下は、きつと更に脱力するものを見せられているのだろう。

そう思うと何だか不憫に思えてくる。

大丈夫だろうか、あの方は。

頭の出来はいいし、いろいろとあるが、基本は温室育ちの純粹培養なのに。

「　　という訳で、デイルクさん！　次はデイルクさんの初恋話

にいきたいと思うんですが、どうですか？」

ああ、とうとう俺の方に話が向いてしまったようだ。

普通の初恋話なら幼かった頃の微笑ましいものとして隠す事なく話すところだが、普通でないからそういう訳にもいかない。

「あー…いや、俺もちよつと」

「あれ？ デイルクさんも駄目な感じですか？ ヴイルフリートさんと一緒に女性向きではないとか？」

「いえ、俺の場合は裏切られたというか、そういう話ですのでね？ お聞き苦しいと思います」

「おおう、裏切られたんですか……」

珍獣の彼女が気の毒そうな目で俺を見て、手にしている酒瓶をキユツと握った。

その視線が遣る瀬無いこと此の上ない。

「ええ、まあ」

「裏切られたか、確かに」

ヴイルフリートが吹き出した。

腹が立つ！

こいつは性格に問題大有りだし、この件を知っている唯一の人間だけに夕チが悪すぎるんだ！

腐れ縁の古い付き合いで、ほぼ全てと行っていい程に此方の事情を知っているヴイルフリートを睨みつけると、効かないだろう虚しい脅しをかけてみる。

「笑うな！ ヴイルフリート、珍獣様だけでなく陛下や他の誰かに言いでもしたら、その時は覚えていろよ！」

「それは怖いね」

予想通り、俺の言葉など全く気にならないと言わんがばかりに、ヴイルフリートがわざとらしく肩を竦めてみせた。

「まままままつ！ デイルクさん怒らないで？ 私ってば絶対に聞きませんから！ ではでは、初恋で傷心してしまったデイルクさんに慰めのお菓子を！ さっき、ルイーゼが陛下の部屋に持って…」

…あ、あつた！」

珍獣の彼女が部屋を見渡して目的のものを見つけたようだ。
酒瓶を置くと勢い良く立ち上がる。

どうやら異世界から持ってきた菓子類をくれようとしているようだが、俺は陛下がどれだけ甘い物好きか知っていた。

「あれは陛下のですから、いいですよ」

「いえいえ、甘い属性じゃないお菓子ですから大丈夫です！ 向こうの世界では、酒の肴にもなる柿の種を持ってきますから、ちょっと待ってて下さいね！」

言うなり、彼女は陛下の部屋の中を元氣一杯に走り出す。

それをなんとなく目で追いながら、俺の思考は昔へと飛んでいった。

あれは、俺も“彼女”もヴィルフリートも五歳の時の事だった。

『私について来るのなら、君の今の生活とこの先の人生を変えてあげましょう。それを幸福に思えるかは保証できませんが』

ろくに働きもせず、どこから調達してくるのか連日のように酒と女を味わい、博打に興じる自堕落な日々を送り続ける男が俺の父親だった。

母親は居ない。

正確には、どうしようもない男に嫌気がさして身ひとつで出ていった、というのが正解だ。

もう少して五歳になろうという或る日、憂さ晴らしにあの男に殴られた俺は、村の片隅に隠れるようにして蹲っていて あの人

に出会った。

あの人は、『仕事を終えた帰り道に珍味が生息するという洞窟を見に来たんです』と言って笑い、ついで『どうしますか』と俺に手を差し出した。

迷いなく俺はその手を取った。

理由は至って単純で、このままでは俺は駄目な人間になると、幼いながらも判っていたからだ。

あの人に連れてこられた場所は、豪華絢爛で巨大迷路のような美しい城だった。

初めて見る城に目を大きくして驚いていると、『王の住まう城、グイネリンスですよ』と教えられた。

そして、いま思えば報告が上がったのだらうあの人に『ここで待っているように』と言われたのを無視して、俺は好奇心を満たすために城の中を勝手に歩き回った。

見るもの全てが息を飲む程の美しさだった。

当時の言葉の足りなかつた俺には、それをどう表現していいのか判らなかつたが、身が震えるほどに圧倒されて、ただただ感動したのを今でも覚えている。

歩きまわって暫くして、あの人に待つよう言われた場所に戻ろうにも戻れない事に、迷子になってしまった事に気づいたのは、随分と城の奥にまで入り込んでしまった時だ。

あの時は勿論判りようもない事だったが、五歳になったばかりの幼かつた俺は、城の嚴重な警備から見事に見逃されていた。

とにかく歩きまくり、周囲が薄暗くなってきたのと人気（ひとけ）が無いのに半泣きになりながら、俺は通路の突当りに細く開いた扉

を見つける。

躊躇いつつも誰か居ないかと更に開けると、天井の高い大きな部屋の一面に、無数の書物が整然と置かれていた。

恐る恐る中へと入り、紙の捲る音が聞こえたのに、自然、そちらへと足が向かう。

そして。

俺はそこで天使に出会った。

大きな本を膝の上に載せ、それとは別の紙の束に不機嫌そうな顔で視線を落としていたのは、この世に存在する事が奇跡だというくらいに美しく可愛らしい少女だった。

これほどの美少女はそう居ない。

それは五歳になったばかりの俺にでも判った。

天使は本に囲まれながら、黄金の長い睫毛を伏せ気味に、柔らかそうな形の良い唇を小難しそうに結んでいる。

サラリとした黄金の髪に、清楚で愛らしいレースと刺繍をあしらったリボンをつけ、一部の毛先はクルクルと巻いていた。

リボンの周りには、白い花と桃色の花が上品に差し込まれている。淡い桃色の、御伽話の妖精が身につけているようなドレスを可憐に着こなし、ふんわりとした裾を花のように広げて、床の上にペタリと座っていた。

近づくにつれ、白磁の“ぷにっ”とした頬を持つ天使からは、仄かにミルクの匂いが漂ってくる。

ミルクの天使が俺に気づいたようだ。

パッチリとした黄金の睫毛を瞬かせながら、村では見ない綺麗な紫の瞳が俺を捉える。

見ためと同じ可愛らしい声が、触りたくなるような桃色の唇を持つ口から発せられた。

「何か用？」

声をかけられた俺は、焦ってしまつて咄嗟に何も言えなかった。何故だか胸がドキドキします。

先程まで半泣き状態だったはずなのに、滲んでいた涙が一瞬で消えたのが判つた。

何も答えない俺に不審を抱いたのだろう。

ミルクの天使が整つた黄金の眉をひそめた。

「何か用かと聞いたんだが？」

「あのっ、俺、今日からこの城にあがる事になつた、えっと、ディルクと言います！」

「そう」

「よつよろしくおねがいます！」

「なにが？」

「えっ、なにがって？」

ひそめていた眉を更にひそめて、ミルクの天使は俺をジッと見たが、やがて何かを諦めたのか「なんでもない」と言つと手を軽く振つて、再び紙の束に視線を落とした。

それから暫く、天使は視線を落としたまま、そして俺は彼女の近くに立つたままの状態が過ぎていくだけだった。

その状況に呆れたのだろうか、ミルクの天使が小さく溜息をつく。

「突つ立つていないで座つたらどうだ？」

「はい！……あの、聞いてもいいですか？」

再び声をかけてもらえたのに嬉しくなりながら、俺は少し気になつていた事を思い切つて聞いてみた。

「なんだ」

「何の本を読んでいるんですか？」

大きいし難しい本なんですか、と言葉を付け足しながら俺がミルクの天使の横に座ると、彼女が可愛いらしく首を傾げながら、俺に

手にしていた紙の束を見せてくれた。

「大きい本はただの図鑑で下敷き変わりにしているだけだ。で、」
「ずかん？」

「……そこからか。図鑑は生物や植物などを絵付きで系統的に説明している本だ。読んでいるのはこの書類。内容はこの国の現在の財政と軍備についてだ」

「ざいせい？ ぐんび？」

俺は初めて耳にする難しい響きの言葉に、ミルクの天使の綺麗な紫の瞳に問う視線を投げた。

すると天使の声が一気に面倒そうなものになる。

「……まあ、この国にとって重要な事だ。それより、なんだ、これは」

「なんだっていうのは？」

「馬鹿だ、馬鹿だと思っただけだが、ここまで大馬鹿だとは思わなかった。血が繋がっているとは思いたくない。愚王が」

「くおう？」

ミルクの天使が忌々しそうに紙の束を図鑑の上に投げた。

「私の父親は国王をやっているんだが、良いのは顔だけで頭に全く中身が無いんだ。それも興味があるのは女だけときている。あれに一度あの世を見せた方がいい」

「すごい！ お父さんは王様なんですか?!」

王様がお父さんという事は、目の前のミルクの天使は王女様なんだ！

国王の居る城に本当に来たのだという事を改めて実感して、俺は思わずドレスの端を掴んでしまう。

触れた淡い桃色のドレスは柔らかくて滑らかで、初めて感じる肌触りだった。

ミルクの天使が疲れた様子でコシコシと眉間を揉み出した。

「ああ。少しも凄くは無いし、様なんてつけなくていいぞ。ただの馬鹿だからな。それにしても私の身内は馬鹿ばかりだ。どう鼻屑目

に見たところで母上も良いのは顔と体つきだけで頭が足りないし、他の側室も馬鹿ばかり。やっていられない。私には異腹に二ヶ月ほど年下の弟王子がいるんだが、昨日、私になんと言ったと思う？裏にガルダトイアが見え隠れする貴族に飴玉を貰って手なずけられた拳句に、『あめのつつみがとれなくてたべられないよ。とつて』と言ったんだ！ 加えてだ！ 『あとでえほんをよんでね。そうだ、ぼく、きのうね、あなたのなまえが、かけるようになったんだよ。それとね、ドリーセンこうしゃくのむすめと、けっこんするの。ぼく、ほんとうは、あなたとけっこんしたかったんだけど、きょうだいはけっこんできないってこうしゃくがいったから、かなしいけどあきらめたんだ』とはなんだ！ 侯爵に懐柔されただけでも許し難いのに、何が私と結婚だ！ 気色が悪い！ 二ヶ月しか私と変わらないのにあの阿呆具合は何だ！ アレも駄目だ！ 将来が全く期待できない馬鹿さんなんだ！ きつと脳の発育が悪いんだろ、それも致命的に！」

そこまで言うのと、ミルクの天使はフンとした様子で息をついて、紙の束を再び手に取った。

それから暫し、まるで俺の存在を忘れたかのように天使は紙の束に没頭しているようだった。

俺はミルクの天使が読み終わるのを大人しく横に座って待っていたが、遠くにある窓の外が段段と赤くなってきたのに、悪いかなあ、と思いつつも声をかけてみる事にする。

そろそろ戻らないと、あの人が俺を探し回ってしまうかもしれないからだ。

「……あの」

恐る恐る声をかけると、長い黄金の睫毛に縁取られた紫の瞳が此方を向いた。

天使の眉間にスツと皺が寄る。

「なんだ、まだ居たのか」

「俺、迷子になったみたいで……」

ミルクの天使に対してなのか、迷子を告白するのが恥ずかしくてなのかはよく判らなかったが、頬がどんどん熱くなっていくのが自分で判った。

きつと顔が真っ赤になっているに違いない。

そんな俺を見てどう思ったのだろう、天使が大きく息を吐いた。

「そういう事は早く言ってくれ。私は今、取り込み中なんだ」

「……ごめんなさい」

「少し待て。いい加減そろそろ来ると思うんだ。来たら夕刻だし私も戻る。その時に送ってやる」

言いながらミルクの天使は再び紙の束に視線を落としたが、何か思いついたとでもいうように、直ぐに綺麗な紫の瞳を俺に向けてきた。

「そうだ、これでも飲んで待っている」

ミルクの天使が俺の座る反対側に手を伸ばした。

姿勢を少しだけ前屈みにして見ると、金色の縁取りが美しい白い盆の上に、黄白色の液体が六割ほど入ったカラフェスと、硝子製の優美な杯が幾つか置かれていた。

柔らかかそうな小さな手でカラフェスを両手で持ち、杯のひとつにトロリとした中身を注ぐ。

溢れない程度にまで注ぎ終わると、ミルクの天使は「ほら」と杯を俺に差し出した。

「それは何ですか？」

「ただのミルクだ。飲めるか？」

「はい、俺、ミルクは結構好きです」

父親がどうしようもなくミルクすら毎日飲めなかったが、俺は手に入った時には必ず口にしていた。

背は順調に伸びていたが、同じ年頃の村の子供たちに比べて体が細かったからだ。

栄養は摂れる時に摂っておこうと、四歳になったばかりの頃に悟った事だった。

俺は心をワクワクさせながら差し出されたミルクに手を伸ばした。

「そうか」

ミルクの天使が受け取り易いように俺の手に杯を持たせてくれた。その時、天使の手が俺の手に触れて、心臓が驚くくらいに跳ね上がる。

顔がますます熱くなり、胸のドキドキも激しくなっていた。

そして心が温かく感じた時点で、俺はミルクの天使が好きになったのが判った。

村の名産の、あの人の言う珍味が大好きな幼馴染が言っていた“初恋”と症状が全く同じなのだ。

ミルクの天使が自分の初恋の女の子になったんだと理解した俺は、それにストンと納得すると、逆に落ち着く事が出来た。

顔の熱さも徐々に消えていき、胸のドキドキも収まってくる。

俺はミルクの天使にお礼の意味を込めて、俺なりの笑顔を見せてみた。

すると天使は、笑顔とは正反対のムスリとした表情になる。

笑顔が見たかったからそれを少々残念に思ったが、俺は気を取り直してミルクの入った杯を口にもっていった。

まあ、いいか。

少しずつ仲良くなっていけば。

俺はあの人の元で、何時までかは判らないが当分は城に居る予定なのだ。

そう思いながら、村で飲んでいたものよりも少し黄味があった城

のミルクを飲むために、俺は手にしている杯を傾ける。

城のミルクはきつと凄く美味しいんだろう。

村で飲んでいたミルクと色が違うし、ミルクの天使、トリエスの王女様が飲んでいるものなのだから一級品に違いない。

「いただきます」

「……………」

「……………」

俺はむせた。

「どうした？」

「……………こほっ、い、いえ、何でも……………」

何だろう、この半端無く甘い飲み物は。

喉越しが物凄く悪いし、胸がムカムカしてくる。

天使がくれた強烈な甘さのミルクに、俺は硝子製の杯に目を向ける。

口の中が酷い甘さでまったりし過ぎて、なぜだか飲んだはずの液体が鼻に向かって逆流しそうな感じだ。

本当に何だろう？

ただのミルクじゃないのだろうか？

この液体は一体。

「もつと飲め」

ミルクの天使が小さな両手で再びカラフェスを持って、まだ一口しか飲んでいない俺の杯に黄白色のミルクを並々と追加した。

もう一滴も入らないくらいに注げたからか、ミルクの天使が満足そうな顔をする。

村では見なかった紫色の瞳にジッと見られながら、どう言えばいいのだろうと、俺はこれまでに無いくらいに一生懸命考えた。

出来ればもう、この“ただのミルク”は一滴たりとも飲みたくない。

「え、ええと、もう俺」

「遠慮はしなくていい。ミルクを飲むと背が伸びるとフェリクスが

言っていた。私も五歳の平均身長くらいは欲しくて飲み続けているのだが、なかなか結果に結び付かない」

「……そうですか。でも、」

ミルクを飲むと背が伸びるのか、と初めて知った事に頷きながらも、俺は本当にどう言っただ断ろうかと頭を高速で回転させた。

そんな俺にイラついたのだろう。

カラフェスを床に直接置いたミルクの天使が、俺の手を包み持ち、強制的に杯を口へと持っていきこうとする。

「えっ、あの、待って下さ」

「とにかく飲み。栄養不足から背が伸びなくなってからでは遅いだろう？ ほら早 ようやく来たか！ 遅い、ヴィルフリート！」

「ごめんなさい、殿下」

ミルクの天使の叱責に、淡々とした口調で返しながら部屋に入ってきたのは、緩やかな曲線を描く金色の髪を顎の位置で切り揃えた、俺と年が変わらなそうな少年だった。

如何にも貴族の子供といった風体で、村の女の子が大騒ぎしそうな整った顔立ちをしている。

彼は大きめな袋を抱え持ちながら、真っ直ぐミルクの天使の方へと姿勢良く歩いてきた。

天使と俺のもとに辿り着くと、彼 ヴィルフリートは袋を床に置く。

「遅すぎないか？ 陽はだいぶ傾いているが？」

「殿下に教えられた通りにアツヒエンヴァルの名をいっばい言いました。でも」

「ヴィルフリート、言い訳はするなと言ったよな？ 何事も結果が全てだ。くだらない人間にはなるな」

「はい、ごめんなさい、殿下」

ミルクの天使は俺から手を離すと、ヴィルフリートに向かって顎をクイツと動かした。

そんな小生意気そうなのも可愛いなと思って見ていると、ヴィル

フリートが持ってきた袋をゴソゴソと広げる。

広げると二人は、互いの額がつきそうになるのも気にしない様子で同時に袋の中を覗き込んだ。

「……この服か。着るのが面倒なんだがな」

「探したんですが、殿下の衣裳部屋、ドレスが増えています」

「……人生を投げたくなりそうだ」

力が抜けたのか、ミルクの天使が花とりボンで飾られた愛らしい黄金の頭をカクリ前に倒した。

それによってヴィルフリートと頭とぶつかり、コツリとした音が鳴る。

ヴィルフリートは特に気にしないといった様子で、袋から中身を取り出そうと腕を動かした。

そんな仲の良さそうな二人に、俺の心は悲鳴をあげる。

そうだよな、無理だよな。

ヴィルフリートは将来かっこよくなりそうだし、見た感じ貴族だと思っし。

身分的にも王女様である彼女とは、きつと釣り合うんだよな。

今まで実感はなかったが、珍味だけが有名な田舎村出の俺だって、庶民と王女様とは身分が違いすぎるのは理解出来るし。

俺は王女様を護る役目でいいや。あの人に駄目元でそう言ってみよう。

俺の初恋は終わったな、そんな事を思いながらミルクの天使の横にそのまま座っていると、俺の初恋に真の意味で引導を渡したのはヴィルフリートと存在ではなかった。

「えっと、俺、出て行った方がいいですよな？」

ヴィルフリートが服らしきものを取り出し、ミルクの天使が立ち上がると同時に背中に腕をまわしたのに、俺は驚いて彼女を見上げた。

天使が可愛い黄金の眉をひそめる。

「何故？」

「だって着替えるみたいだし、俺が見たら……その……」

「何を訳の判らない事を言っているんだ。この格好で出るに出られないから着替えるだけだし、男同志、問題ないだろう?」

「お……男同志?!」

男ってどういう事だ、と俺が目と口をあんどりと開けたのを、パツチリとした長い睫毛に縁取られた紫の瞳で、ミルクの天使が此方を一瞥した。

「ああ、男同士だ。とにかく其処で少し待て。つれて行ってやるから。くそ、脱げない! ヴイルフリート! 後ろの留め金を外してくれ!」

「殿下、僕は女性の服を脱がせるのが上手くなりそうです」

特技になったら僕はどうすればいいですか、と続けて言いながら、ヴィルフリートも立ち上がり、ミルクの天使の背に手を伸ばした。

天使のかわいい額に青筋が浮かぶ。

「くだらない事を言っていないで、早く外せ!」

「はい。あれ、君、どうしたの? あ、もしかして。お気の毒さま?」

ヴィルフリートが留め金をせつせと外しながら、俺に向かってニヤリと口元を歪めて見せた。

えっ、なんなんだろう、こいつ。

そんな彼の表情に俺が思わず体を引くと、胸元のリボンを解きながらミルクの天使が不可解といった声音を出した。

「何を言っているんだ?」

「うーん、彼の名誉のためにも言っではいけないような気が僕はします」

「名誉? はあ……もうどうでもいい。全てが。それよりディルク」

「……」

「ディルク! 呼んでいるんだが?!」

「は、はい!」

声を荒げた天使に驚いて、俺は慌ててミルクの入った杯を置いて

立ち上がった。

そんな俺にミルクの天使は、花とりボンで飾られた黄金の頭を差し出すように向けてくる。

花とりボンがサワサワと俺の鼻の下を擦った。

ミルクの天使はやっぱりミルクの匂いがする。

「お前は頭の忌々しい花を取ってくれ！ 全くやっていられない！ 髪を編み込んだ拳句に大量に差すなど、ふざけているにも程がある！」

「えっと、編み込みも解きますか？」

どこから解けばいいんだろうと考えながら、とりあえずクルクルと巻かれている黄金の髪を手にしてみると、天使が解いた胸元のリボンを床に叩きつけた。

「ああ！ 全て解け！」

「痛かったら言うてください」

「判った……くそっ、お前も私より背が高いのか！ デイルク、お前は今何歳だ！」

「俺ですか？ 俺は一昨日五歳になりました」

その言葉にミルクの天使が床に叩きつけたリボンを腹立たしそうに踏みつけた。

「私より七ヶ月も年下ではないか！ 背が高すぎる！ 何を食べたらそんなに」

「彼が特別高い訳ではないと思います、殿下。貴方が低いんです」「っ！」

「僕と彼は五歳にしては少し背が高いかもしれませんが、殿下は四歳の子供よりも低いじゃないですか。殿下、留め金を全て外しました」

言いながら、ヴィルフリートが桃色妖精ドレスの背中を少しの躊躇いもなく開け広げる。

天使がドレスから両腕を引き抜き、「ようやく脱げる」と吐き捨てながら上半身を露わにした。

「世の中、不公平すぎて嫌になる！」

「そういうのを殿下が言うのは、おかしいと僕は思います」

「おかしい訳があるか！ 不公平の極みだろう？！ 何故、私はこんなに誰よりも女顔なんだ！ 背も伸びないし！」

脱いだ妖精ドレスを、天使は思いつきり遠くの方へと投げつけた。

「殿下は美少女天使、妖精王女、ひ弱で可憐なお姫様ですからね」
「ぴったりでですね、殿下に」

そんな風に言われているのか、本当にその通りに見えるな、と俺がヴィルフリートの言葉に頷くと、ミルクの天使の蟀谷が盛大に波を打った。

「ふざけるな！ なにがぴったりだ！ なにが美少女天使だ！ なにが妖精王女だ！ なにがひ弱で可憐なお姫様だ！ 将来は絶世の美女になるだろうだと？！ 早く殿下だけの王子様が現れると宜しいですわね、とはどういう意味だ！ 王子は私だ！ 傾国の美女になれる訳がないだろう？！ 私は男なんだ！ やってられない、本当に！ ヴィルフリート！」

「はい」

「ミルク！」

「判りました」

天使の言葉にヴィルフリートは何処か諦め気味に感じると、床に置かれたカラフェスを手に取った。

天使が屈んで、未使用の硝子製の杯をヴィルフリートの前に三つ置く。

「よし、二人も飲め！ 一緒に背を伸ばす！」

「……いえ、僕は別に」

「……俺も別に。それ物凄く甘」

「私の言う事が聞けないのか？！」

「……はい」

「……はい」

「当面の目標は五歳の平均身長まで伸ばす事と、髭を生やす事！」

もう誰にも美少女などとは言わせない！ 私は筋骨隆々でむさくるしい熊のような大男になりたいんだ！」

可愛い顔で小憎らしく怒って、白磁の頬をぷっくりと膨らませたミルクの天使　　いや、トリエスの王子である殿下が声を大にして目標を掲げた。

そして俺とヴィルフリートは、殺人級の糞甘いミルクに酷い吐き気と胸焼けを起こしながら、殿下とミルクで誓いの杯（さかずき）のようなものを交わすこととなったのだ。

腐れ縁の始まりである。

少々気の強い王女様だと思った。

しかし、女の子は顔かもと思っていた俺は、それでもいいかとの時は思っていた。

けれど裏切られた。

彼女、いや、彼はこの国の第一王子、王太子であり歴とした男だった。

詐欺だ。

あの可愛らしい顔で、淡い桃色妖精ドレスを着ているなんて。

俺の初恋は残念ながら一日と持たなかった。

が、それは不幸中の幸いという事だったのだろう、たぶん。

「陛下、おっかえりなさい！ ゆっくりなお風呂でしたね！」

珍獣の彼女が浴場から戻ってきた陛下を笑顔で迎えた。

本当のところは推し量れないが、俺から見れば何故だか凄く嬉しそうに見える。

ごく親しい者にしか判らない癖なのだが、そんな彼女を視界に入れた陛下が、戸惑いに一瞬だけ瞳を揺らした。

その理由は彼女の無邪気全開な笑顔なのか、彼女がヴィルフリートの上にいることなのか、そこまでは判らない。

俺と同様にヴィルフリートも、そんな彼の様子に気付いたようだ。ヴィルフリアートの口角が僅かに上がる。

ああ、何やら企みだしている。

長い付き合いだから想像はつくし、ヴィルフリートは意図的に後宮の話を彼女にしている。

地下で俺が知る必要は無いと彼女に言ったのは、どうやら無駄になりそうだ。

ヴィルフリートが彼女の頬に口付ける。

おいおい、陛下に何らかの刺激を与えるにしても遣り方ってものがあるだろう、遣り方ってものが。

ヴィルフリート、世の中には裏目に出るとい言葉がある事を知った方がいい。

自身の事で身に覚えがお前にはあるはずだ。

ヴィルフリアートの行為に陛下が不機嫌になっている。

信じられない。

あの方の内面は通常なら表に出さないぶん第三者には殆ど判らないが、長い付き合いの俺達には判ってしまう。

本当かよ……彼女が来てから、まだ二日。

早くないか？

だけどヴィルフリート、陛下の気持ちを発展させ、加えて気付かせるのは相当難しいと思うぞ。

八歳で即位され、あの事があり、それからずっと陛下はその職務を全うし続けてきた。

はたから見ていると痛々しい程に真面目に努力してこられたんだ。
天才が全力で王であるうとする。
誰も勝てるはずがない。

それにヴィルフリート、珍獣様も難しそうだ。

お前は陛下の気持ちさえ動けば、彼女の気持ちなど考慮にすら入
れずに実行に移すつもりなのだろうが、彼女の場合は規定外過ぎて、
どう動くのか俺には予測不可能だ。

そうそう上手くいくとは思えない。

話を聞いていると、どうも思考の方向性と感情の持って行き方、
価値観も普通とは違うみたいだし。

この二日で、陛下の言うように頭がおかしいと思っただ事もある。
しかし、彼女の人間性に問題は無いと思うし、人種の話のように
違う視野も持ち合わせているみたいだ。

なにより彼女は陛下に、あのトリエス王に、苦勞、苦惱を背負わ
せるのは可哀想だ、と言い切った。

彼の別の一面をまだ知らないからかもしれないが、そう言える人
間は幾らも居ないだろう。

とにかく珍獣の彼女は色々な意味で凄いと俺は素直に思う。
なぜなら。

「陛下が部屋に入ってきた時から思っていたんですけどね？ 陛下
つてば、もう凄い美人さんですよ！ なんなんですか、その美女
モード！ 真つ平らな胸に膨らみが無いのが不思議なくらいです！」
「小娘っ！」

凄い。

「はい。だってですね？ もともと有り得ないくらいの超絶美形で、
女性的では全然ないんですけど、全体的に綺麗すぎるっていうか、
嫌な男臭さが全くといっていいほど無いじゃないですか。髭の気配
も殆ど無いし、脛毛も無いですしね？ っていうか、陛下、髭、ち
やんと伸びてます？」

「……っ」

本当に凄い。

俺とヴィルフリートしか知らない事だが、髭に関しては結構気にしているんだ、彼は。

「誉めてますよ？ だって陛下つてば、嫌な男臭さのない超絶美形に加えて、お風呂に入って血色の良くなった肌に、濡れてキラキラな黄金の髪を後ろに撫でつけてるって、どんだけ艶っぽいんだって話ですよ。っていうか、惜しい！ 実に惜しい！ 陛下が女性だったら、本気で傾国の美女になって、いくつもの国を手玉に取った拳句に破滅へと導けるのに！ 後世に語り継がれる伝説の悪女になれますよ！ 私が陛下だったら、その容姿を利用して、昔の中国の歴代皇帝も裸足で逃げ出しちゃうような男だらけのムフムフ巨大後宮を作っちゃいます！ 男は全て私の愛の奴隷です！ 勿論、運営費用は国民からの搾取ですよ！ 徴税額は年収の九割は当たり前！ 払えない人間には重い労役と兵役をシツカリ課します！ ああ、こ

こが日本だったら！ 陛下つてば、ニューハーフ世界コンテストに日本代表として出場して、確実に優勝出来るのに！ あ、ニューハーフつていうのは、心は乙女、体は男、場合によっては体も女にしてしまった人たちの事を言うんですけどね？」

「小娘……」

本当に心から凄いと思う。

よくもまあ、幼少期についた陛下の心の傷を、こつも見事に抉れる言葉を次から次へと口から出せるものだ。

陛下は今でこそ俺やヴィルフリートと変わらないくらいに背も伸びたし、体も真剣に鍛えているから、ほどよく逞しい肉体を維持している。

女性になど到底見えないし、トリエスは勿論の事、大陸の中でも俺達三人は背の高い部類に属するだろう。

しかし彼は幼少期、誰よりも美少女然としていた事に今尚癒えない深い心の傷を負い続けているのだ。

母親である先代の王妃に無理矢理ドレスを着せられ

「陛下さ、ドレスでも着て王城、えつとヴィネリンスでしたっけ？
ヴィネリンスの中を歩いてみたらどうですか？ そうしたら後宮
の女性たちが衝撃を受けて、自信を無くして、一気に問題解決かも
しれないですよ？ なんなら私が陛下に似合うドレスを考案してあ
げましょうか？ 陛下つては足が綺麗だからスリット入れるといい
かも！ スリットつていうのは って、うわっ！」

彼女は凄すぎる。

この時、俺は珍獣の彼女にある種の崇敬の念を抱いた。

二人の今後がどうなるのかは俺には判らない。

それはヴィルフリートも同じだろう。

先程、ヴィルフリートが彼女に救いの手を差し伸べた。

それに俺は賛同だ。

例え九割方が面白そうだからという理由だったとしても、それし
か方法は無いと俺も思うからだ。

突然降って湧いた異世界から来た珍獣の彼女は、そもそも全く関
係の無い存在だ。

世界すら違うのに、流石に不憫すぎるといふものだろう。

そんな彼女の行く末が、俺が陛下の考えを予測する結末に行き着
かなければいい そう思っていなくもなかったんだが、翌朝の
二人を見て心底馬鹿馬鹿しくなった。

あれを無自覚無意識にやっているのだとしたら、いっそ二人だけ
の世界に行ってしまう。

一言言いたい。

少しは周囲にどう見られているのか気にしろ、と。

… 嗚呼、初恋の君は（後） デイルク視点（後書き）

『嗚呼、初恋の君は』に登場した人物は、全員ノーマル設定です。

嗚呼、初恋の君は … 四百字詰原稿用紙 約41枚

ふっと身じろぎの気配を感じて目を開けると、パジャマモドキは何処へやらな陛下の胸に、左頬を下にして私の頭が乗っていた。

どうやら折り重なるようにして寝続けていたようで、陛下と接している面は、なんとなく汗ばんでいる感じだ。

未覚醒のぼうつとした状態で、枕にしていた胸板をなんとなくペチペチと叩いてみると「暑い」と唸るような声が僅かな振動とともに耳に入ってくる。

その声に顔を上げると、陛下がすっと眉をひそめたから、私もつられてひそめてしまった。

「あー…おはようございます?」

「おはよう? ……暑いな。体温の高い子供か、お前は」

「え。…っっていうか私も暑いですよ。なんかあつつくて、陛下とくっついていてる方は、もあもあします…背中が寒いですけど」

「もあもあ? ああ、掛布が腰までしか掛っていない」

額の血もまた滲んだな、と口にしながら、陛下が私の背中に手を当てた。

「冷えている」

そう言っつて、自分の体温で温めようとしているのか、それとも暑さを冷ます為なのか、彼は私の冷えた背中に両腕をまわす。

「小娘、着ていたものはどうし 落ちているな、床に。何故?」
「知りませんよ。陛下が破いたんじゃないですか」

少しだけ動かした陛下の視線の先を追うと、昨夜、私が半ば意地

で剥ぎ取った彼のパジャマモドキの横に、リボンが解けて無残に破れたナイトドレスが落ちていた。

陛下の嫌そうな声が耳朵を打つ。

「お前が脱がそうとするからだろう？ ……下だけは死守したが」

「……私だつてカボチャパンツは履いてますよ」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……もうどうでもいい。それより酷い悪夢を見た。初めて

だ、あのようなのは」

「酷い悪夢？ どんなのですか？」

上に乗っかっている私の髪が肌を擦ったのだろう。

陛下は背中にまわしていた右腕を億劫そうに動かして、髪を擦じるようにして私の首の付け根付近にポイツと乗せた。

「野菜が、」

「野菜？」

「この世に存在する全ての野菜が余の上に降ってきて押し潰される夢だ。切つても投げて減らなくて、そして」

「そして？」

「トマト……昨夜、お前も言っていたから通じると思うが、無数の種子がドロリとした粘液に塗れて入っている赤い果菜の……夕食で皿の端に避けた物体なんだが」

「確かに向こうの世界にもありますから通じますけど、粘液って、」

「そちらの世界でも一般的な食材なのか？」

「はい。好きな人は毎日食べているんじゃないですかね」

サラダとかジュースとか、パスタとかピザとかでね？

私が当たり前のように言つと、背中にまわっていた陛下の両腕が何故かキュツと締まった。

それを少し苦しく感じたけれど、私の背中に心地よい温かさが増

していく。

「あんなもの、滅ばいいのに」

「お、そこまで?」

「小娘、あの忌々しい赤い物体が巨大化して迫ってきたんだ。余にだから切った、剣で」

「へー…それは……怖いですね? で?」

陛下の形の良い黄金の眉が辛苦に寄った。

「中からウオが……」

「……」

「大量のウオが……」

「……」

「無数の種子と粘液に塗れた大量のウオが中から飛び出してきて、それもピーピー言っているんだ。ずっと!」

「……」

「……」

「……」

「……陛下さあ、その夢、絶対に他言しない方がいいですよ?」

「何故?」

「王様としての威厳とか権威とかが失墜するような気が私ってばします。あと、ヴィルフリートさんに知られたら一日中笑われるのは確実です」

「……」

「まあ、私がずっと上に乗って、それも鼻を鳴らしながら寝ていたから、そんな夢を見ちゃったんだと思います。だから、えっと、謝りますね? ごめんなさい、陛下」

私はオコチャマな悪夢を見てしまった陛下を慰めてあげる為に、ほんの少しだけ身を起して、『いい子いい子』をしながら黄金サラサラストリートな髪を簡単に整えてあげた。

陛下は悪夢でエネルギーを使い果たしてしまったのか、大人しくしている。

「体が休まった気がしない。疲れが全く取れていない気がする」

「おおぅ……じゃあ、今日も休んじやったらどうですか？ 国王権力を我が儘方面に発動して」

「阿呆か。休めば休むだけ後が辛くなるだけだ。それより小娘、」

「なんですか？」

「見えている。前にも言ったが少しは気にしろ」

「見えているって、何がですか？」

「なんの事を指しているのか判らなくて首を傾げると、朝っぱらからキラキラした睫毛に縁取られた紫の瞳に、私の寝惚け顔が映り込んだ。」

「胸だ。嫁入り前の娘が、親しくも無い男の前で上半身裸なのを気にしないのはどうかと余は思うんだがな。そうは思わないのか、お前は」

「しかも上に乗っているなど救いようが無いだろう、と陛下は注意の色を滲ませた声音で言った。」

「……別に」

「なに？」

「別に気になりませんけど……」

「……」

「……」

「……相変わらず余には全く理解できないんだが、何故、気にならないんだ？」

「……私だって前にも言ってますけど、貧乳なんですもん」

「それは理由に 待て。何故、そこで泣きだすんだ。お前の頭の中だけは、どうしても判らない。とにかく泣かないでくれ。起きて早々、疲れを増やさないでくれないか」

泣くなと言われても、どうにも悲しくなってしまうって、私は陛下の胸に再び顔をつけてスンスンと泣いた。

次から次へと溢れ出て来る涙がポタポタと彼の肌に落ちる。

ツキツキと痛んできた心にどうしていいのか判らなくなつて、涙で濡れてきた陛下の胸に私は嗚咽を漏らしながら顔を擦りつけた。

「……っ……陛下」

「……なんだ」

「私つてば、なんで胸が無いんですかね……」

「……さあ、遺伝ではないか？ 少なくともお前自身のせいではないだろう？」

「ママはEカップ……結構大きいんです。花依、妹なんですけど、花依も中三のクセにCカップで妖精と同じくらい胸があつて……」

「妖精と同じくらいと例えられても意識して見た事が無いからな……。お前は父方の血を濃く引いたのでは？」

言いながら、陛下は腰までしか掛つていなかった掛布を少しだけ引き上げた。

履いているカボチャパンツが掛布の中でづられて上がつてしまい、若干お尻に食い込んでしまったが、今の私には全く気にならない。

「パパ……そうかもしれません。でも、」

「でも？」

「パパ、お肉が凄くて、私よりも胸が」

「……」

陛下が一瞬だけ押し黙つた。

「それにね、陛下、加藤が……」

「かとう？ ああ、机を並べて学んでいたという男か。……そういうえば胸を揉まれたんだっただな、お前は。で、そのかとうが？」

「千夏ちゃんと一緒にウチに遊びに来た時にね？」

「ああ」

「千夏ちゃんがお兄ちゃんに用があつて私の部屋から出て行った時に、加藤が言つたんです」

「なんと言つたんだ」

「『貧乳なんだから俺を気にせずに、さっさと私服に着替えれば？』

もしかして胸を見られるのが恥ずかしいなんて思っていないよな？
自意識過剰すぎだろう、貧乳のくせに。知ってるか？ 貧乳は胸
じゃない。それを隠そうとするなんて笑える』って」

「……酷いな。そのような事を言われたのか」

「はい。……それで加藤のヤツ、『俺が脱がせてやるよ。こつちに
来いよ、貧乳』って。『その貧乳が、今後、大きくなるのか俺が見
てやる。感謝しろよ？』って笑いながら言ったんです」

「それで見せたのか？」

「お兄ちゃんと千夏ちゃんが来たから……」

「そうか」

私が止まらない嗚咽で幾分呼吸困難気味なのに、陛下は楽にしよ
うとしてくれているのか、赤子をあやすようにポンポンと背中を軽
く叩いてくれた。

剥き出しで冷えていた背中には、彼の体温が本当に心地良い。

「そのような事を言う者に見せなくて正解だ、小娘。気にするな。
そもそも胸に関しては、お前に何の落度も無い」

「……う」

「泣くな、頼むから。とにかく、かとうの言った事など鵜呑みにす
るな。お前は胸を隠すという事をこれからは心掛ける。大小関係な
く胸は胸だからな。判ったか？」

「……はい」

「しかし不可解なのは、かとうは何故」

陛下がそこまで言った時、廊下側の扉がコンコンと叩かれた。

それに彼が反応する前に丁寧な調子で開かれる。

「陛下、珍獣様、おは」

へロルドさんの言葉が途中で止まった。

怪訝に思ったのが、陛下が扉の方へと向いたのが、彼の胸に顔を
つけて泣いていた私にも動きで判る。

「へロルド？」

ああ、リーザ、小娘に服を。妖……ヘルミー
ネとルイーゼは目元を冷やす用意をしてくれ。泣いてしまっ

……なんだ、ディルク、その呆れたような顔は。それに後ろに居る侍女らと衛兵たちは何なんだ。何の用だ。何故、部屋を覗いている」

「………」
「なんだ、グイード」

「………」
「なに？」

「………」
「待ってくれ、いつ余が小娘を泣かせたんだ」

「………」
「は？ 無理矢理とは何だ。どういう意味で」

「あー…その貴方の言葉でグイードが何を言い出したのか判りませんが、貴方という人を知っている俺とこの場には居ないアツヒエンヴァル団長以外はそう思うと思いますよ、この状況を見れば普通にまあ、オツサ……いえ、もう何でもないです。とにかく仲睦まじくて良かったですね。俺としては昼には抱腹絶倒ものの何かが聞けるのかと思うと楽しみでなりません」

ちなみに衛兵らは貴方がた二人が昨晚なにやら騒がしかったようですから気になったのではないですか、とディルクさんは馬鹿馬鹿しいと思うのを隠そうともしない様子で言った。

「お前は何を」

「リーザ、珍獣様のご支度を早く。俺たちは一度下がる。で、いいですよね？ ブロンザルト様」

「ええ。では、陛下、控えておりますので終わられましたらお呼び下さい」

ディルクさんと先程言葉を途中で止めたヘロルドさんが、サクサクといった感じで物事を進めていくのに、陛下が諦めたように一度息をついた。

彼は私の背中をポンポンと叩き続けている。

「判った。下がって ああ、待て、ヘロルド」

「何でございましょう？」

「自分の事は自分で出来るから、お前は今から言う物を手配したら執務室の方に来てくれ。余も支度が出来次第直ぐに行く。話があるんだ」

「手配ですか？」

「ああ。ガルダトイアから急ぎpomshyuを取り寄せて欲しい」

「pomshyu、でございますか？」

へロルドさんの声を考えるような響きが宿った。

「あの果実はまだ早いのではないでしょうか」

「そうか？ そろそろ初物が出る頃合いだと思いが？ ガルダトイア王家に渡る前に抑える。向こうの二十倍出すとでも言えば現地の者は喜んで差し出してくるだろう」

「畏まりました……ですが、」

「なんだ」

「今、当国は緩衝国であるサデヴァとは紛争中でございますし、ガルダトイアへの道は厳しいと思われませんが、そうでございますね、ここは私めが直接、」

「待て。お前が行ってどうする。ガルダトイア国境手前まで軍を使う事を許すから、ふざけた事を言い出さないでくれないか。命令通りに動け。行け。さて、小娘」

そう陛下が話の先を私へと変えた時、少しの衣擦れの音を立てて気配がひとつ消えた。

へロルドさんが命令を遂行する為に退室したのだろう。

私はずっと陛下の胸の上でスンスンと泣いていたので直接は見ていなかったけれど、部屋全体が雑然としてきたのは判った。

「お前はいい加減に泣きやんでくれ。pomshyuを手配した。お前が好きだと言っていた生で食べられる果物で初物だ。パピオンはどうしても無理だが、pomshyuもそれに匹敵するなかなか美味しい果物だぞ？」

「パピオンに匹敵する美味しい果物ですか？」

『美味しい果物』というキーワードに反応して顔を上げてみると、

すぐに陛下が指でクイクイと涙を拭ってくれた。

「ああ。外見は赤く中は白い果物だ。届いたら好きなだけ食べればいい。だから、かとうに言われた事など忘れる。泣くのは止めてくれ。本当に疲れが増すんだ。　　リーザ、それを取ってくれ」

「畏まりました」

言われた通りにリーザが差し出した昨夜放り投げた自分のガウンを、陛下は片腕を伸ばして受け取った。

そして、それで私を背中から被せ包むと、キュツと一度前を合わせる。

体が痛い……、と小さく呟き枕を背にして自分の身を起こしながら、私を跨らせるように膝の上に乗せて、周囲から見えないように前身頃を手前に引っ張った。

私の腕を手早く袖に通して、ガウンの腰紐を二周させて結び終えると、掛布を引き上げて腰元から下を隠す。

陛下のガウンは大きくて、しっかりと前を合わせても鳩尾の下まで見えてしまうからか、彼は互いが向きあう形で私を自分に凭れ掛からせた。

体勢が不安定で、それを維持する為に私が陛下の首に腕をまわすと、彼も私の背に右腕をまわして体を支えてくれる。

サラサラストリートな黄金の髪で私の顔を擦りながら、陛下は澄んだ紫の瞳を皆が居る方へと向けた。

「デイルク、部屋を覗いている者達を下がらせる。特に余付きの侍女らの入室を当分の間禁止する。部屋に近づく事も許さん。そう周知しておいてくれ」

「いいですが、それでは貴方の身の回りの事はどうするんです？　ブロンザルト様が一人です？」

それは無理があるのでは、といったデイルクさんの口調に、陛下は暫し口を噤んだ。

「　　リーザと、昨夜ヴィルフリートが言っていたゼルマ・ボームと……そうだな、あとは針子のアニで当面を凌ぐ。小娘に害は

無さそうだし、この際、アニを強引にでも侍女に格上げしてしまえばいい。それに照明問題は解決したしな。少ない人数でも特に問題は無いと思う」

「照明問題？ 解決とは？」

「それに関しては何も言いたくない。今は極力思い出さたくないんだ。 ガイド」

「……………」
「ウオに餌でも与えてこい。今日一日余に近づけるな。悪夢が頭を過る。護衛は他の者を適当に探すからお前はウオと裏の森で遊んで来い。池も沼も湖も川も滝も洞窟もあるからウオも喜ぶだろうよ。今すぐ行け」

「……………」
「そうだ」

「……………」
「なにが？」

「……………」
「色合いがふざけている両生類だからな……。面倒だから人目にはあまりつかないようにしろ。例の地下通路使え。森への扉の鍵はルドルフに」

「……………」
「楽しんで来い。夕刻まで戻ってこなくていいからな」

「……………」
「ああ。もう行っていいぞ」

陛下のその言葉に、ガイドさんが直ぐに行動に移したのが気配で判った。

幾らもしないうちに水音が聞こえたので、陛下から身を起してウオちゃんの方を見ようとすると、途端に背中にまわっている彼の腕に力が入り叶わない。

前が見えるから体を起すなという意味なのは理解できたけれど、ウオちゃんが「きゅんぴきゅんぴ、きゅきゅーん！ きゅんきゅん

「きゅぴきゅぷきゅっ！」と、私に何かを言っているような声を出しているのが気になった。

そうこうしているうちにウオちゃんの声が部屋の外へと移動し、だんだんと遠くなり聞こえなくなっていく。

「グイードの行動が早いですね」

「かなり喜んでいいるからな。嬉しくて仕方ないのではないか？」

「そうですか。彼にも友人が出来て良かったですよ。では俺も一度下がります。外で控えていますんで」

「ああ」

ディルクさんも退室する気配を感じて、強引に首を捻って視線を向けてみると、彼は呆れ入った笑みを浮かべながら陛下と私に目礼した。

そして一步下がって此方に背を向けて、扉の外側からチラチラと視線を向けていた衛兵たちと、あからさまに覗いていた陛下付きの侍女らをホレホレといった感じで追い遣る。

それが完了するとリーザと妖精達だけを残して、ディルクさんは扉をパタンと閉めて出て行った。

リーザたち以外が退室すると、背中にまわっていた陛下の腕が解かれた。

自然、私も彼の肩に両手を移して、よっこらせと体を起こす。

私の両脇の下に手を入れて持ち上げて、陛下は自分の膝の上から私を退けた。

サラサラストレートな黄金の髪を何度か掻き揚げながら寝台から足を下ろし、端に腰を掛ける形になる。

それによって私に彼の背後は丸見えで、初めて目にする剥き出しの白い背中には、パジャマモドキのズボンの中へと続く醜く引き攣れた薄黒い傷痕があった。

「リーザ、着る物を」

「畏まりました」

「珍獣様、ご用意出来ましたので御目をお冷やし致します」

「珍獣様、此方へ」

「うん。あ、ちよつと待って」

花の微笑みを浮かべて妖精たちが手を差し出してくれるのを遮って、私は四つん這いになりながら陛下の後ろへと移動する事にした。その動きによってブカブカな彼のガウンモドキの前が開いてきてしまったが、私は気にしないことにする。

それよりも、どうにも見過ごす事の出来ない痛々しいものを目にしてしまったからだ。

「陛下」

「なんだ。 リーザ、自分で着るから持つてくるだけでいい。
余はよいから小娘の方をやってやれ」

「はい」
陛下の言葉にリーザは一度腰を折って、足音も立てずに上品な様子で部屋を出て行くとする。

それを見送りながら私は陛下の背後に腰を下ろし、彼の背中引き攀れた薄黒い傷痕の上に、ピタリと右手を置いてみた。
起きた時に『暑い』と言っていた彼の背中は温かい。

「小娘？」

「ねねね、へ・い・か！」

「だから、なんだと聞いた」

「背中の中の傷、痛いですか？」

私の言葉に、陛下がひとつ溜息をついた。

「痛くはない。地下でも言ったが、いつの傷だと思っている。八歳の時のだ」

無理をしなければ違和感も無い、と言いながら陛下は後ろ手に私の右手を外した。

彼は前方を向いたまま適当に私を相手している感じだ。

「うーん、でも、やっぱり痛そう……」というのを通り越して痛々し過ぎです。 ややっ、私ってば、いいこと思いました！」

「いいこと？」

「はい！ 今は痛くないのかもしれませんが、八歳の陛下は物凄く痛かったはずですよ！ だから、その八歳の陛下に私がオマジナイをしてあげますね！」

「マジナイ？ 言っている事がよく理解出来ないが」

「チビチビ陛下に、痛い痛い飛んでけチューですよ！」

言って、私は背中を向けている陛下の返事を待たずに、オマジナイのキスをチュツと薄黒い傷痕にしてみた。

次いで、その引き攀れを唇でなぞり、覚えている形を描いて結ぶ。

「……………」

「異世界日本の価値有り有りなオマジナイなんです！ 我が家では小さい頃、よくママがやってくれたんですよ！」

当時は本当に痛みが消えた気がしたんですよね、と言いながら背中から顔を離すと、チラリと此方に感情の読めない視線を陛下が向けた。

澄んだ紫の瞳が、温もりを感じさせない紫水晶のように綺麗だ。

「……そうか。もう何をどう言えばよいのか余には判らん。」

妖……ヘルミーネ、リーザが戻ったら、向こうに服を持って来いと
言ってくれ」

「畏まりました」

陛下が寝台から立ち上がった。

「あれ、陛下、どこ行くんですか？」

「顔と口を洗ってくる。着替えたら直ぐに行かないとならないしな嫌になるくらいの予定が詰まっているはずだ」

全てが面倒臭いといったどちらかというと感じの悪い態度で、陛下は怖い天使の天井画がある洗面所の方へと足を踏み出した。

それが合図かどうか判らないけれど、妖精達が私の目元に冷たいタオルモドキを当ててくる。

長いコンパスでスタスタと遠ざかる傷痕のある背中を目にしなが
ら、私は気持ち声を大きくして質問を投げた。

「朝食は食べないんですか？」

「要らない。お前に貰ったものを適当に食べるからいい」

「え。貰ったつてもものってお菓子と甘い飲み物ですよ？」

「だから？」

彼の即答に勿論私は呆れた。

「陛下ってさあ、炭水化物好きだし甘っこいの大好きだし、向こうの世界で産まれてたら、ハンバーガーとピザとコーラーとお菓子だけで生きていく人種になりそう。そんでもって、ハンバーガーに入っているピクルスとピザに乗っているピーマンだけで野菜を摂った気になっちゃうんです」

くラガリネから使者が来る予定だしな」

「おおおう、ラガリネといえばウマウマなお酒のラガリネ王国ですわって、陛下、本当にお菓子持っていくんですか？」

「悪いか」

ムスリとした声音で応えながら、お菓子とジュースが置いてある食卓に陛下が辿り着いた。

私だけでなくリーザや妖精達からも視線を向けられているのを全く気にせずと言った様子で、陛下は白いコンビ二袋の中にガサゴソと音を立てながら、食卓の上に並べてあるペットボトルを無造作につっこんでいく。

「悪くは無いですけど……食事はちゃんと摂りましょうよ。体に良く無いですよ？」

「煩い。余の勝手だ」

「おう……そうやって周囲の心ある献言を跳ね退けて、好き嫌いを克服しないで偏食の道を二十六歳になった今でも堂々と歩んでいるんですね……最悪です」

「……………」

「野菜嫌いといい、両生類嫌いといい、好き嫌いがハッキリしているというか、陛下つては嫌いなものは徹底して嫌いですよ。それつてはやっぱり力のある国王陛下様だから、気に入らないものには一切気を使う必要はないという、天上天下唯我独尊的超俺様思考に基づいての性格なんですかね？」

それはそれで凄いというか逆に羨ましいですけど、と試ってみると、陛下は完全に此方を無視してコンビ二袋を手を取った。

超高級と判る私とお揃いの服を着ている超絶美形の彼に、安っぽいコンビ二袋は当然ながら似合わない。

「あ、陛下、いつてらっしゃい？」

「……………」

「陛下？ いつてらっしゃい？」

「……………」

「……………」
「……………」
「……………」
完璧なまでに私を無視して、陛下は羨まし過ぎる長い足を活かしながら、かなりの速度で扉へと向かっていった。
その失礼で生意気な態度に力チンときた私は、寝台をバシバシと右手で叩いて教育的指導を試みることにする。
だって当然だよな？

此処で誰かが注意しなければ、一体いつ、あの超俺様で生意気な性格を矯正できるのかって話だよ！

私ってば間違ってるじゃないよな？！

「へ・い・か！　　いつてらっしゃいつて言われたら、いつてきます、
でしょう？　　挨拶はキチンとしないと駄目です！　オコチャマにも
程があると皆に思われちゃいますよ？　　ということ、やり直し！
いつてらっしゃい、お仕事頑張ってきて下さいね？」

私は更に声を張り上げた。

「いつてらっしゃい！　　お仕事頑張ってきて下さいね！！　　へ・い・
か！　　私ってば何度でも言いますよ？！　　陛下が部屋を出ても廊下
で叫び続けますからね！　　もう一度！　　いつてらっしゃい！　　お仕
事頑張ってきて下さいね？！」

「……………」
行
つてくる」

扉の前で此方に背中を向けて立ち、私の体内時計でたっぷり一分は溜めた後、陛下は葛藤が感じられる声音でポツリと言った。

それに私は聞こえるように深く深く溜息をついてやる。

「……………」
陛下が部屋から出ていった。

挨拶から教えてあげないと駄目なんて、まったくもって手のかか

るオコチャマ男だ。

私は妙な達成感を感じながら、その後、リーザ達に促されるままに洗面所の方へと向かったのだった。

陛下がお仕事に行つて、顔を洗つてサツパリした私がリーザ達と一緒に洗面所から出てくると、既にディルクさんが部屋の中に居た。軽く腕を組んで扉の横に凭れていた彼は、私たちに気づくと近づいてくる。

「なにやら、いい匂いがしますね。今まで陛下の部屋では嗅ぐことの無かつた香りです」

言つて、ディルクさんが可笑しそうに笑つた。

「いい匂いですよね！ ディルクさん、今日から私にも化粧水とクリーム……えっと、凝乳状の基礎化粧品が支給される事になったんです！ 私つてば感激です！ ちよっぴり気にはなつていたんですけど、居候でペット、愛玩動物的扱いの身だから、流石に図々しいかなつて思つて言い出せなかつたんですよね！」

そう！

異世界トリエス王国に来て三日目、私つてばようやく基礎化粧品を手に入れる事が出来たんだよ！

凄いよね！

ついさつきリーザがね、『申し訳ございません、珍獣様、失念しておりました』って言いながら渡してくれたの！

効能の程は正直よく判らないんだけど、つけてみると向こうでいうラベンダーに近い香りがして、とっても癒される感じですよ！

リーザ曰く、今、宮廷や貴族の女性の間で流行の化粧品なんだつて！

メード・イン・ガルなんとか国らしいよ！

ちなみに私つてば今現在、誰かさんのせいでドレス厳禁男装姿だから、メイクはしてないよ！

まあ、日本でも普段は色付きリップくらいしかしてなかったんだけどね？

残念な事に、滅多に渋谷に行ける訳でも新宿に行ける訳でも無かったからさ。

遠いんだよ、私の生活エリアからは。

電車賃が高いの。片道千円越えちゃうんだよ。

お小遣いが月五千円なのに、全くやっていられないって話でさ。

だから私つてば休みの日に、お兄ちゃんに我が家唯一所有の車、白のワンボックス十年選手で、千夏ちゃんと一緒に『しまむら』と『ユニクロ』に連れて行ってもらってたの。

結構いいんだよ！

チヨコチヨコ行つて覗いてみると、比較的安めで可愛い服があるの！

掘り出し物があるんだよ？

「兄さん、わたくしが失念して……」

私のウキウキな気分を他所に、リーザが申し訳なさそうな声を出した。

心なしか清楚系美女顔がシヨンポリとしているように見える。

そんな彼女の様子に、ディルクさんがリーザと同じ亜麻色の頭をポリポリといった感じで掻いた。

「それは申し訳ありません」

「いえいえいえいえ、基礎化粧品が手に入って嬉しいだけなんで気にしないで下さい！ リーザもね？」

本当に気にして欲しくなくて、私はブンブンと首を全力で振つてみせた。

それが功を奏したのかは全くもって不明だったけれど、ディルクさんとリーザの表情が柔らかくなる。

「そつだ、お聞きしようと思つていたんですが、珍獣様は今お幾つ
なんですか？」

「え？ 年齢のことですか？」

「ええ」

「あ、そつか。陛下にしか言つてないかも。私つてば今、十八歳で
す！」

半年後に高校を卒業する予定なんですよ、と言いながら笑顔を皆
に向けて、何故かシンとした沈黙が訪れた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「あれあれ、皆、何で黙つて？」

デイルクさんが眉根を寄せながら唸つた。

「…………… ヴィルフリートの遣り方は、十五、六には些か酷な気もしな
いでも無かつたが、十八なら……………」

「え、なんの事ですか？ つていうか十五、六つて？」

デイルクさんの言葉に私が首を傾げながら聞くと、彼は瞬時に表
情を無難な笑顔に変えた。

「いえ、こちらの話です。そうそう珍獣様、今日は朝食を召し上が
られた後、昨夜、ヴィルフリートが言つていたゼルマッポームをお
引き合わせさせて頂きます。針子のアニもそれに合わせて向かわせ
るようにすると、陛下からの言付けです」

「ゼルマさん！ 確かえつと、ローラとロツテが厳しいと言つてい
た三十四歳の！ おおおお、今日も何やら盛り沢山な予感がしま

す！ アニも来るみたいだし、私ってば楽しみですよ！」

「良かった。ではリーザ、珍獣様に朝食を」

「はい、兄さん。 珍獣様、此方へ」

そう言いながらリーザが私を食卓へと促しだすと、朝食の準備をするのだから、妖精達が廊下側の扉へと向かっていった。

「珍獣様、部屋の外にお食事は来ておりますので、直ぐにお召し上がりになります」

「珍獣様、今日の朝食は期待して良さそうですね」

リーザが優しそうな微笑みを見せてくれる横で、ディルクさんは幾分噴き出し気味な様子で言葉を継いだ。

「漏れ聞こえてくる話では、厨房はかなり頑張ったらしいんです。

どうも貴女に気に入られたいようです」

もう本当に凄いですよ、とディルクさんは何故か苦しそうに笑い出した。

その様子に私が疑問符を浮かべた顔を見ると、リーザが苦笑いをして、ディルクさんは。

「駄目だ、俺には耐えられない！ 本気で笑えるんですよ、珍獣様

！ 陛下はですね、この数年 ぶはっ！」

そう言って、暫く意味不明な爆笑をし続けていた。

そういえば減量メニューの話はどうなったんだろう、と私ですら気にせざるを得ない超豪華、且つ、すこぶる高カロリーな朝食を済ませると、アニと初めて見る女性が陛下の部屋に入ってきた。

朝からオナカがパツパツ過ぎて、誰にもバレないようにウエストのボタンを密かに外していると、何処か居心地が悪そうな様子の男 悩殺系爆乳美女のアニと、翡翠の髪状（かんざし）と言って過言で

はないと思われる、美しい緑の黒髪を纏めた真面目そうな三十代の女性が近づいてくる。

女性の瞳はかなり薄い灰褐色で、その瞳のせいで少なくとも初対面の人間にはキツイ印象を与える感じた。

顔立ちは可もなく不可もなくといったごく一般的なもので、彼女の身に纏う雰囲気は、一緒に居る者に親しみを感じるさせるというよりも、自然と身を引き締めさせるものの方が強い。

胸のサイズはCカップといったところだろう。

「珍獣様、お初にお目にかかります、今日から身のまわりのお世話をさせて頂く事になりましたゼルマ」ボームと申します。わたくしの出来得る限りの」

「あ、難しい挨拶は要らないですよ！ 私は陛下の愛玩動物兼居候の珍獣二号です！ トリエスでは猫属性でいこうと思っていますので、どうぞ宜しくお願いします！」

陛下の前限定ですけど偶に猫の鳴き声を出しますんで引かないで下さいね、と食卓の椅子から立ち上がって握手を求めると、ゼルマさんは少しだけ目を見開いて、ほんのちょびつとの笑みを見せてくれた。

「アニも今日から改めて宜しくね！ とところでゼルマさんもアニもなんだか突然な感じで陛下付きだか私付きだかの侍女にされたみたいですけど、バタバタとかしませんでした？」

そんな挨拶ついでの何気ない言葉だったんだけど、言った瞬間にゼルマさんの額にピシシツと青筋が浮いた。

「……………おう」

あの浮きつぷりは陛下に匹敵するかもしれない。

ゼルマさんの額の青筋に、私をはじめアニ、リーザ、妖精達がただただ注視していると、ディルクさんだけが申し訳なさそうな表情を僅かに見せた。

「……………ゼルマ、なんと言っているのか、その、」

「いえ、余計な言葉は要りません、ディルク。全てはあの嗜虐を好

む魔物が原因だと判っていますから」

「……うーん、嗜虐を好む魔物、か」

ディルクさんが複雑な顔をして唸り気味に呟く。

なにやら事情がありそうだ。

よく判らないけれど、そういつた事に首を突っ込むのは得策ではないので、私は方向を変える為に違う話題を振る事にした。

「あのー…私つてばちょっと気になっているんですけど、今日は何をすればいいんですか？」

その問いかけに、まず反応してくれたのはディルクさんだ。

「珍獣様は何をさねたいですか？ 護衛の俺が居ますし、今日はこの部屋から出してあげるくらいの事は出来ますが」

「あ、そうなんですか?! じゃあじゃあ是非出てみたいんですけど、でもその前に私つてばアニにお願いしたい事があるんですけどね！」

「私にですか？」

鮮やかな赤い髪の後れ毛を揺らしながら、アニが不思議そうに此方を見た。

私が話題を変えてから、皆してなんとなくといった感じで陛下の部屋の豪華応接セットの方へと歩いていく。

「うん！ 本気でカボチャパンツとブラをどうにかしたいと思って！
リーザ、あのね、私が向こうからつけてきた下着と靴を持ってきて欲しいんだけど、」

リーザが綺麗な微笑みを作って私に向けた。

「畏まりました。今、お持ちいたします」

「では、わたくし共はお茶のご用意を」

ゼルマさんがそう言うと、妖精達も花の微笑みを惜しげも無く振りまきながら可愛らしく頷く。

「あー…なんか至れり尽くせりな高待遇過ぎて、幸せなのと同時に身の置き所に困ってしまうような？」

そんな本心からの言葉に、ディルクさんがふと真面目な顔になっ

て「今の貴女はそれをただ受け入れるしかないですよ」と言い、何を言いたいのかよく判らなかつたから、私は疑問の視線を向けてみたけれど、この時の彼は亜麻色の瞳を合わせてくれようとはしなかつた。

「えっと、いろいろ作ってもらいたい物があつて、」

リーザが私の頼んだものを持って戻ってきて、素晴らしい飾り付けに手を伸ばすのを思わず躊躇ってしまった向こうでいうマカロンタワーと紅茶を摘まみながら、私はセッセとまずは鞆の中身をローテーブルの上に広げていった。

鞆はパンパンに詰まっていたので中身を取り出すのに些か苦労しながら、私は初めて食べるマカロンモドキに舌がとろけまくっている。

トリエスに来て確実に美食家への道を突き進んでいる自分にドキしながら、私はいつか届くはずの、生で食べられる美味しいらしい果物、ポムシユも楽しみで楽しみで仕方なかつた。

「よいしょっと。 うんと、これが今使っている教科書と塾のテキストで、これはトイレットペーパーに変化予定の廃棄物、えっと、これは筆箱と携帯で、これが財布とシユシユとヘアクリップでつと、これは、」

「その鞆の中に、なにやら沢山詰め込んでますね、珍獣様」

凄くないですか、とディルクさんが呆れた口調で言うのに、その場にいる全員がウンウンと頷いた。

ちなみに私の肉汁シミシミパンツと、寄せて上げて寄せまくる分厚いパッド入り貧乳御用達、超優れ物メイドインジャパンの白地に水色レース付きAカップブラは、ローテーブルの端にチンマリと置

いてある。

なんだかもう純真可憐で麗しの乙女の女子高生の下着というよりも、テーブルを拭く布巾に近い扱いだ。

切ないこと此の上ない。

「うーん、トリエスに来た時、私ってば塾の帰りで、それでもってその日、学校のロッカー、えっと私専用の棚の整頓もした日だったんです。アニ、これ、シュシュっていつて髪の毛を纏める物なんだけど、こういうモコモコ生地ってトリエスにある？」

日本では巷によく見るカラフルなパステル色のシュシュを、ほいっと私が差し出すと、首を傾げ気味にアニが「失礼します」と手に取った。

「面白い生地ですね。色も珍しいですわ。トリエスでは……というより、仕立てや生地産地の産地で有名なレネヴィア王国でも無いと思います。職業柄いろいろと触れる機会がありましたけれど、私はこれまで見たことがありません。リーザさんやゼルマさんはどうかしら？」

「わたくしも様々な仕立てのドレスや宝飾を目にしてきましたけれど残念ながら」

「わたくしも」

「おお、そうなんだあ。この生地でモコモコルームウェア、えっと部屋着を作ってもらおうかなと思っただけ……。じゃあじゃあ、あとほね、ウオちゃんを入れる肩掛けの小さな鞆と、下着を作ってもらいたいんだけど……」

ソファに座っている私の足元に、アニは羨まし過ぎる胸を揺らしながら、膝について姿勢を低くした。

他の皆は興味津津といった様子で、腰を屈めて覗き込んでいる体勢だ。

「鞆に肩掛け以外の御注文はありますか？」

「あ、無いよ！ ウオちゃんが入ればいいってだけで！」

その言葉に、女の私でもクラクラきそうな妖艶な笑みをアニは見

せた。

「それなら直ぐにでも出来ますわ。私より鞆作りが得意な者が城に居ますので申し付けておきます。あとは下着ですが、」

「うん！ これなの！」

私は布巾ヨロシクな切ないパンツとブラを手にとって、アニに「はい」と手渡した。

アニはそれを一旦膝の上に広げて、生地を指で触ってから軽く引っ張って、鮮やかな赤い眉を中央に寄せる。

「……此処は何が入っているのかしら？ それにこの生地の伸び方も」

そう独り言のように呟いた彼女が触っていた箇所は、ブラのワイヤー部分とアンダーだった。

他にもホックとか紐についているプラスチック素材を気にしているようだ。

「やっぱり難しい感じかなあ？ 私ってば、これを量産して『いち・ご』っていうお店を開いて、トリエスでひと商売しようと計画していたんだけど……。軍資金も異世界日本円で一千五億円分用意出来たし」

「うーん、と私とアニが考えていると、それまで興味深そうな視線を向けていただけのディルクさんが口を挟んできた。

「素材に問題があるのでしたら、これからイェルクの工房にでも行きますか？ もしかしたら代替素材を用意出来るかもしれませんし」

それに、地下で陛下に近いうちに会わせるよう言われてましたしね、と軽い調子で彼は付け加えた。

「おおおう、イェルクさんですか！ 細工師の！ そうそう私ってば、イェルクさんにもお願いしないとイケない事があったんです！」

「では早速行きませうか。此処からだ距離も結構ありますし、食後のよい運動になりますよ？」

「え、食後の運動ですか？」

「ええ」

ディルクさんの視線が私のオヘソのあたりでスツと止まった。
それに私は怒涛の勢いで青ざめる。

気づかれてたんだ！

ウエストのボタンを密かに外していたのを、シッカリバツチり気づかれてたんだ！

あまりの恥ずかしさに心臓をバクバクさせながらリーザ達にも目を向けてみると、皆、私が外したボタンあたりを見ていた。

「あ……あの、あのあのあの、あの！ 今直ぐ、今直ぐ私ってば行こうと思います！ イエルクさんの工房に！」

そんな私の遣る瀬無い叫びは勿論、だだっ広い陛下の部屋では虚しく響くだけだった。

∴ 91 (後書き)

しまむら	http://www.shimamura.
gg.jp/	
ユニクロ	http://www.uniqlo.com
/jp/	

陛下の部屋でこれからやる事があるらしいリーザ、ゼルマさん、妖精達を置いて、私とデイルクさんとアニの三人はイエルクさんの所へ向かうべく、部屋を出て、階段を下り、一旦建物の外に出る事となった。

なんでもイエルクさんの工房とやらは、敷地内にはあっても陛下の居住区域からは結構離れていて、お城の中を通過して行こうとすれば阿呆らしいくらいに遠回りで時間がかかるらしい。

私はイエルクさんに見せる物を全部ズボンのポケットに突っ込んで、お城脇の道を歩くアニの後をポテポテとついていった。

デイルクさんは私の直ぐ後ろを歩いている感じた。

「とりあえず一番気になっっている事を私っては聞こうと思います。

デイルクさん、お城の端がよく見えません。それは向こうにある鬱蒼とした木々に隠れているからですか？」

「無意味に広いですよ……この城は」

城内は迷路ですよ、と言いながら、デイルクさんはアニから離すかのように私の腕を後ろに引いた。

それによって私とアニとの距離は大股三歩くらい開いてしまう。

不思議に思っただけを振り向いて彼の顔を見ただけで、デイルクさんは構わずに話を続けた。

「開かずの扉もありますし、定期的に遭難者も出ますよ」

「え」

「搜索隊を出す度に陛下は『何故覚えられないのか』と怒っている

んですが、城の全容を頭に叩き込んでいる人間は恐らくあの方だけでしょね」

「おお……大天才ですもんね」

「自分の記憶力が人と違うとようやく理解してくれたのは、陛下が十三歳の時の事です」

大変でした、とデイルクさんは苦笑いをしながら肩を竦めた。

「見える範囲のお城も庭も、滅茶苦茶広そうで無駄に豪華な感じですよ。向こうの世界にもお城ってあるんですが、テレビっていう物で観る世界遺産で、此処までのものは無かったような気がします」

「此方の世界でもヴィネリンスほどの城は無いですよ。この城が異常なんで　ア二、伏せる！」

何気ない会話の途中でデイルクさんが突然ア二に向かって声を荒げ、咄嗟の事すぎてなんの反応も出来ない私を、彼はグイッと自分の懐に入れた。

デイルクさんが素早く長剣を引き抜き、それと同時にキンツと物騒な音が私の耳に入る。

「お……」

剣に弾かれ嫌な金属音を立てながら敷石の上を滑り落ちるそれは、降り注ぐ陽光にその身を銀色に煌めかせて

「た……短剣、デイルクさん、短剣が！」

「ええ、短剣です。安心して下さっていいですよ、珍獣様は俺が護りますんで。さてと、まずはひとつめとひとつたところか」

気を落ち着かせるようにポンポンと私の肩を叩きながら、デイルクさんは何とでも無いといった様子で剣を鞘に納め、道を挟んでお城の対称側にある立派な植込みに向かって顎をクイツと動かした。

私も胸をバクンバクンさせながら同じ方向に目を向けたけれど、木と葉っぱ以外は特に何も見つけられない。

今の一瞬で私の全身は滝のような汗が噴き出していた。

「なんで短剣……」

「正直に言いますが、貴女は一部の連中からこの数日で相当な敵意

と天晴れな程の妬みを買いまくっていますしね？ それも命を狙われる水準で」

「は？」

「まあ、そういう事です。 アニ、大丈夫か？」

弾いた短剣を拾いながら、前方に倒れるような形で伏せっているアニの方にデイルクさんは視線を向けた。

鮮やかな赤い髪をほつれさせて、冷や汗を額に浮かべている可哀想なアニに、しかしデイルクさんは近づかない。

近づいて起こす為の手を差し伸べるような素振りは一切見せずに、自力で立ち上がれ、と態度で言っていた。

「え……ええ、大丈夫です」

美しい敷石に手をついて、アニがゆっくりと立ち上がった。

その様子を目にしながら、デイルクさんは先ほど顎を動かした植込みに向かって、拾い上げた短剣を無造作に放り投げる。

不吉な短剣だからポイ捨てでもしたのだろうか？

植込みが僅かに動いた。

「アニ、二人を確実に護れるとは俺も言い切れないから、先にイェルクの工房へひとりで行ってくれ。俺と珍獣様は少し遅れて向かうから」

「わ、判りました。でも珍獣様は大丈夫ですか？」

「彼女は大丈夫だ。だから先に そうか、俺達が追いついたら意味がないから、アニは城の中から向かって欲しい」

「はい。 では珍獣様、私はお先に」

冷や汗の浮いた引き攣り気味の顔で、それでも申し訳なさそうな笑みを此方に向けてから、アニはクルリと城の方へと体の向きを変えた。

この場から一刻も早く逃げようとする事も、足早になる事もなく、先程と同じ歩調で進んで行く。

流石、姐さんだ。肝心要な部分で肝が据わっていきそうだ。

暫くしてアニの姿が見えなくなった頃、デイルクさんが口を開い

た。

「珍獣様、これからイェルクの工房へ向かうまで多少は何かがあるかもしれないですが、混乱されて俺から離れないように」

「たまに居るんですよ、逃げようとして護衛から離れてしまっ庇護者が、と言いなながら、デイルクさんは歩くよう私を促した。」

彼の左手が私の背中に当てられる。

二人でホテホテと歩くお城脇の道は、見渡す限りは誰も居なくて小鳥の鳴き声が聞こえるだけの実にのんびりとしたお散歩コースだった。

「気候も暑くもなく寒くもなく、日本でいうと新緑の季節に近い。そういえばトリエスに四季ってあるのだろうか。」

「今度、陛下にでも聞いてみようかな？」

「えっと、離れるとどうなっちゃうんですか？」

「世の中、基本は弱肉強食の世界じゃないですか」

「……お、おお、そ、そうですね。あのあの、」

「なんですか？」

「私が陛下の部屋から出ると短剣とか投げられちゃうのなら、イェルクさんの方に来てもらうっていうのは駄目なんですか？」

「確かイェルクさんは、する事がなくて腐っているはず、って昨夜の炭酸の話の時に陛下が言っていたような気がするんだよね？」

「それにしても私ってば正直短剣を投げられるまでとは思っていませんよ。」

「自覚というか実感がわいてなかったんだよね？」

「嫌がらせレベルの贈り物が届くくらいだと、ぶっちゃけ思ってたというか。」

「一昨日の朝食の時に、保護無しに半刻息をする事ができるかすら保障できないとか、後宮に乗り込めば殺されるとか、陛下は言っていたけどさ。」

「でもそれってば、お城の外に出れば、後宮エリアに行けば、というのが大前提だと思っっていたんだよ。」

そういえば客室も危険だったんだっけ。

「それは可能ですが、まあでも、ね？」

「え、何が『まあでも』なんですか？」

「珍獣様はこのままずっと陛下の部屋に閉じ籠っているつもりですか？」

「それは……ただのヒキコモリになっちゃいますけど、でもお」

「俺としては、その辺りは諦めて下さいとしか言いようがないんですよね。さて、もう少し足を速めませんか。工房までは本当に距離があるんですよ」

「あ、はい！ デイルクさん、ところで距離ってど

この瞬間から狂瀾怒涛の攻撃ラッシュが開始した。

「うわっ！」

「芸がない！」

第二弾の攻撃は、またもや何処からか投げられた短剣だった。

先程のようにデイルクさんに護ってもらいながら、私は促されるままに足を速めていく。

走るのは得意ではないけれど、小走り程度なら私にだって十分についていける速度だ。

デイルクさんは払い落した短剣を、延々と続く植込みの方へと、また放り投げるようにポイ捨てし、「ふたつめ」と小さく呟いた。そんな姿を現さない二度目の短剣攻撃に、私は早くもムカついてしまふ。

だから私は叫んでやった。

勿論、何処かに居るだろう卑怯極まりない短剣投げ曲芸師に向かってだよ！

刺客とか暗殺者とかの呼称で呼んであげないからね！

「私はウィリアム＝テルの息子のジェミじゃないよ！ 頭にリンゴ乗ってないでしょって、あれは矢か！」

「珍獣様？」

「卑怯者！ 正々堂々と出てこい！ 相手してやる！ 言うまでもなくデイルクさんがだけどね！ 強いんだよ！ とつてもつても強いんだからね？！」

「……珍獣様、それはいいんですが口よりも足を動かして」
デイルクさんが私の二の腕を掴んで進行方向にグイッと引つ張った。

それによつてグンと速度が速くなって、私は足をもつれさせながらデイルクさんについていくのが精一杯だ。

私の体内時計で十秒もしないうちに息が切れてきた。

脇っ腹も痛くなってくる。

だって仕方ないよね？

私つてば、ウエストのボタンを外さないと苦しいくらいに朝ごはんを胃に納めちゃったんだからさ！

「な……なん………で走、るんです、か？」

「あれ、もう息が切れているんですか？ 少々数が多そうなのでね、分散させようかと思っっているんですが 来ますよ」

「え？」

上から何かが降ってきた。

お城の方から放物線を描きながら降ってきて、デイルクさんが何とでもないとといった様子で振り払ったそれは。

「花瓶！ デイルクさん、花瓶ですか、それは！」

「ええ、花瓶ですね。破片、当りませんでしたか？」

「大丈夫です！ っていうか、なんて………なんて古典的な！ 今、投げ落としたヤツ出てこーい！ 此処は学校か？！ 学校で定番な苛めの手法を実践しよう？！ 馬鹿なの？！」

「珍獣様、とにかく口よりも足を動かして。次が来ますよ、よっつ

めです」

「どこからですか?!」

吹き矢だった。

どうやら植込みの中から飛んでたようだ。

短剣二連発といい、吹き矢といい、ディルクさんのポイ捨て行為といい、あの植込み、完全伐採した方がいいんじゃないかと思われるんだけど、ヴィネリンス庭園管理者的にはどうなんだろう？

「ふざけんな！ 私は狩猟される獲物かっての！ 矢が石製ってどういう事?! トリエスは今、石器時代なの?! もしそうなら庭園にマンモスでも放つとけ！ 全生物中最強の毒性を持つモウドクフキヤガエルの毒でも矢に塗ってあった日には絶対に許さないよ?! 六条御息所並みの生霊スキルがあるかもしれないんだからね！

私ってば日本人だからさ！ そこんとこちゃんと判ってる?!」

「珍獣様、いいから足を。いつつめ来ますからね」

「もう、あつたまきた！ ドンと来い！ 私ってば受けてたつてやるから！ さあ、ディルクさん、私の式神一号バルツァーさんは今居ないから、ディルクさんは式神二号として行きますよ!」

言つて、私は走りながらディルクさんのオシリをパチンと叩いた。周囲に気を配っていたディルクさんが驚いたように此方を振り向く。

「珍獣様?」

「他所見しない！ ディルクさんは十二天将騰? (とうしや) 役に任命するんですから！ ささつ、全力で頑張つて下さい!」

ちなみにバルツァーさんは玄武役ね!

卑怯者への対決姿勢をアピールする為に、慢性アレルギー性鼻炎の鼻からフンと肺の空気を私が噴射した時、攻撃第五弾がやってきた。

ディルクさんが此方に届く前に勿論払い落してくれたが、該当のブツを目にした私は、陛下級の青筋をビシビシッと額に走らせる。

「この短くて矢羽の少ない矢は……クロスボウか! 騎士の甲冑す

ら易々と貫通させて致命傷を与えると、いうクロスボウなのか！　そこまでやるか！　此処は上野か！　不忍池があるっていうのか！　私は矢ガモだっというの？！　私ってば美味しくないよ！　脂はのってるけど出汁の質は悪いと思うんだよね！　鴨南蛮には適していないと思うよ？！」

「珍獣様、何度も言ってますが口より足をね？　また来ますよ」

私が叫んで、ディルクさんが呆れ声を出しながら攻撃を淡々と防ぐ。

そして、事が起こる度に何処かに向かって数を数えながら合図らしきものを送って、彼自らが犯人を追いかけるような事はしない。

そんな事を何回も繰り返して、ディルクさんが二十を超える数を数えた時、「大収穫だな」と苦笑いじみた声が聞こえた。

「珍獣様、着きましたよ」

「……よ、よう……ようや、く」

息絶え絶え、汗だくだく、髪ポロポロで巻いていた包帯も解けて紛失、ついでにウエストのボタンを外していたが為にズボンもズリ落ちかけている私の前方に、家らしき一軒の建物があった。

お城の敷地内にあるには壮絶な違和感がある粗末な外観の三階建て。

周囲にある草木は生い茂り、手入れなんてしていないのがまるわかり。

玄関ポーチから幾らも離れていない空間に大量にはためくのは洗濯物か。

シャツモドキ、ズボンモドキ、足の部分が細身で長めの紐つきトランクスモドキ。

いったい何人分の洗濯物なんだろう？

「ディルクさん、ここってイエルクさん以外にも人が居るんですか？」

「居る、というより共同生活を送っていますね。一応イエルクが纏め役として居て、その下に三十人弱の男が」

「……物凄くむさ苦しそうです」

「同感です。陛下は時間を見つけては偶に遊びに来ているようですね」

「おお、男の園バンザイ」

「行きますか。アニはまだ着いていないかもしれませんが」

デイルクさんのその言葉に私は大きく息を吸って呼吸を整えてから、建物の入り口へと向かう彼についていった。

とりあえず歩きながらウエストのボタンは留めておく。

さっきまでキツかったウエストに、三ミリくらいの余裕が出来たようだ。

朝ゴハン分のカロリーは消費出来たということだろうか。

カロリー消費の最たる原因、卑怯な攻撃を受けながら走った末に、私たちはようやくイェルクさんの工房に辿り着く。

半端無く疲れて、既に私はヘトヘトだったけれどね。

デイルクさんの後に続いてイエルクさんの工房に入った私を待っていたのは、建物内に充満するなんとも言えない不思議なニオイだった。

慢性アレルギー性鼻炎の鼻の通りは現在良好だ。

なんのニオイかを判別する為に、私が思いつきり息を吸いこもるとすると、デイルクさんが此方を振り返る。

「珍獣様、言うのを忘れていましたが、気持ちが悪くなったら教えて下さいね」

「デイルクさん、これ、なんのニオイですか？ いい匂いという訳でもないし、耐えられない臭いという訳でもないし……」

「此処はいろいろと置いてあるんですよ」

俺も詳しい事は知らないんですけどね、と言って、デイルクさんは入って直ぐの玄関ホールと思われる空間に私を置いて、右手にある部屋に入っていった。

建物の中は外観同様、お城の敷地内にあるには違和感のある粗末な造りだ。

上を見上げれば至るところに埃と蜘蛛の巣があり、横を見れば窓ガラスが曇っている。

その場で足踏みをしてみると、ジャリジャリとした音すら鳴った。

「……そうか、この建物の外観と周囲の雰囲気、マリー・アントワネットの王妃の村里に似ているんだ。草木の状態は比べ物にならないくらい、こっちの方が酷いけど。ぐすっ」

良好だった鼻から鼻水が出てきた。

ポケットティッシュが手元に無いので、汚いが手の甲でコシコシと拭う。

「次に来る事があつたら、陛下の部屋のハンカチモドキを拝借しないと駄目かも」

異世界トリップの滞在先がこういったところで無くて良かったと思いつつ、私が再度鼻を拭くと、ディルクさんが入っていた部屋の扉が音を立てながら開いた。

中から出てきたのは二人の男性。

ひとりにはディルクさんで、もうひとは、どこかモサモサ感のする陛下と同じ長さのくすんだ銀髪、青緑色の瞳の持ち主だった。

ディルクさんより幾分背が低めで、体型は痩せ型。

文系、理系、体育会系のどれかと問われれば、まず間違いなく理系だ。

銀縁の眼鏡がよく似合っている。

顔の造作は、なかなかいい線をいっていると思われた。

「お待たせ致しました。珍獣様」

「えつと、イエルクさん？」

「はい。イエルク君ボイムラーと申します。貴女のお噂は此処にも」

「は？ 噂ですか？」

イエルクさんが私の手を取って、甲に口づけるような動作をした。実際はつけていない。

大正解だ。

その手は今さっき、鼻水を二度も拭いているから、とてもとても汚いのだ。

「ええ。それはもう派手で華やかなお噂が。それより、なにか私にお聞きになりたい事がありとか」

そう言つて手を離すと、イエルクさんは出てきた部屋ではなく中央の扉の方へと私を促した。

ちなみに今居る玄関ホールモドキは、右、中央、左の三つの扉と、

左手に二階へと続く階段がひとつある。

「はい！ お聞きしたい事というか、お願いしたい事というかがあります！」

「そうですか。ディルクから陛下のご許可が下りていると聞いております。私に対応できる事でしたら何なりとお申し付け下さい」

イエルクさんは形式的な様子で一度私に微笑むと、中央の扉を開けた。

まず私が部屋に入り、ディルクさん、イエルクさんと続く。

通された部屋は二十畳ほど。玄関ホールと同じく隅々には埃が溜まっていて、窓ガラスも曇っていた。

部屋の中央には、陛下の部屋にある家具とは比べ物にならない粗末な木製椅子四脚と、テーブルがひとつ置いてある。

左右の壁際にはテーブルセットと同じ様相の棚が置いてあって、雑然とした有様で統一性のない物が押し込められていた。

見渡す限り花や装飾品といったものは一切無い。

「珍獣様、好きな席にどうぞ」

「あ、はい。えっと……」

好きな席と言われても困ってしまうけれど、とりあえず窓側の席にしておこうかなと椅子を引いてみる。

ガタゴトとした音が鳴った。

座ろうと椅子を見ると、表面に何やら不思議な粉がたくさん付着している。

「……………」

ディルクさんの溜息が聞こえた。

「イエルク、少しは掃除したらどうだ」

当番制にでもしてやらせればいいだろうに、と言いながら、ディルクさんが上着のポケットからハンカチモドキを取り出して椅子に敷いてくれた。

「ありがとうございます……」

お礼を言って座ると、イエルクさんの苦笑い染みた声が聞こえる。

「皆、研究だと張り切るんだけどね。掃除となるとどうも……。それに、此処には掃除婦をまわして貰えないし」

「偶にとはいえ陛下がいらっしやっているのだから、あの方に直接申し上げてみては？」

「うーん、此処にいらっしやる時の陛下は、大抵、何かを集中されてご覧になっておられるからなあ」

それを邪魔するのも悪いし、と付け加えて、イエルクさんは部屋の外に向かつて『誰か、珍獣様にお茶を』と声を張り上げた。

「掃除の話は此処までとして、珍獣様、御用件の方を」

「えっと……どうしようかな。あのあの、アニが来てからでもいいですか？ その方が話が一度で済むと思いますし」

「アニ？」

「今朝、針子から陛下と珍獣様付きの侍女に異例の昇格をした者だ。此方に向かつているんだが、事情があつて少々到着が遅れている」

「成程。判りました。ではそれまで宜しければ貴女のお噂の話でも致しますか？」

その言葉を合図にイエルクさんとディルクさんが私の対面に向かった。

イエルクさんは椅子に付着した粉を全く気にしない様子だったが、ディルクさんは手で軽く払ってから腰を下ろす。

「あー…そうだ。あの、なにか書くものを貰えますか？ お願いしたいものを図説しようかなと思うので」

「判りました」

あの中に確か……、と呟きながらイエルクさんは立ち上がって、壁際に置かれている棚を漁り出した。

そうこうしているうちに、焦茶色のボサボサ髪のごツツイ体格の人が部屋に入ってきて、『どうぞ』と言いながら大きな手でお茶を淹れてくれる。

「ありがとうございます。……えっと、いただきます」

繊細さをかなぐり捨てたような武骨なカップを手にとってみると、

中には見たことの無い葉っぱが何枚か浮いていた。

勇気を出して飲んでみる。

「……………」

不味い。

物凄く不味い。

半端無く不味い。

半分涙目になりながら私がゴツツイ人の顔を見ると、彼はニコリと人好きのする笑顔を見せた。

「珍獣様、それはダルスアードという国経由で手に入れた健康茶なんですよ。なんでも腰痛、足腰の倦怠感解消、頻尿、臓器の強化といった効果があるとか。他には痩身でしたでしょうか」

「……………向こうの世界でいう杜仲茶みたいなものですかね」

「珍獣様の世界にもあるのですか。興味深いですね。その健康茶は、ダルスアードの東方に位置する国からの品だと商人から聞いております。残念ながら今のところトリエスとは直接の国交が無く、こちらからは未知の領域なんですけどね。 イェルクさん、何を探しているんですか」

「書くものなんだが……………」

「右下にありますよ。 では珍獣様、ごゆっくり」

「あ、はい！ どうもでした！」

そんな感じでゴツツイ人が部屋から退出し、私はイェルクさんから紙とペンを受け取る。

その後暫く、同じものを出されて渋い顔をしているデイルクさんを目の端に留めながら、アニが来るまで、私はお願いするものの図説をジョリジョリ感がするテーブルの上で一生懸命書いていた。

ディルクさんとイエルクさんに見られながら、満足するくらいにまでいろいろと書けた頃、ゴツツイ人とは違う人に案内されながらアニが到着した。

私とディルクさんから遅れること、体内時計で四十分くらいだ。

お城の中を通ると本当に時間がかかるんだなと思いつながらアニを見ていると、イエルクさんが「では御用件をお聞きしましょうかと、アニに私の隣の席に座るよう促した。

「まず、ひとつめなんですが下着を作りたいと思ひまして、その素材を探しているんです。ね、アニ」

「ええ」

アニが頷いたタイミングで、私は一度立ち上がった。

ズボンのポケットに押し込めていた様々なブツを取り出して、ジヨリジヨリテーブルの上に一旦置く。

「イエルク様、珍獣様が異世界から持ってこられた下着に付いている金具と思われる物と伸びる生地について、私には適当な素材が思いつかないのです」

「どれですか？」

イエルクさんが僅かに首を傾げながら、銀縁眼鏡の中央フレームを中指で上げた。

「これです！ って、あの、私、判り易いように服の上から下着を付けてみますね！ ちょっと待って下さい！」

言つて、私は重みのある陛下とお揃いの上着と中のベストモドキを脱ぎ、シャツモドキの上から白地に水色レース付きブラを装着した。

肉汁シミシミパンツもズボンの上からサクツと履いてみる。

「陛下のせいで、ちょっと下の下着には染みが付いちゃってるんですけど、これが異世界の下着の上下です」

イエルクさんが席を立て、私に近づいた。

「触っても？」

「あ、どうぞどうぞ！ お好きなように！」

服の上からの装着だしね？ 私ってば、全然気にならないよ！

「金具と思われる物は此処ですわ」

アニがワイヤー部分と、肩紐にあるプラスチック、背中のホックを指さした。

「伸びる生地も、此処までのものは見たことが」

次いで、アンダーに指を入れてクイツと後ろに引っ張る。

イエルクさんもアニに習って、アンダーをクイクイと引っ張った。「うーん」

「特に此処は想像もつかなくて」

今度は右乳のワイヤー部分をアニは両手で軽く曲げた。

やはりアニに習って、左乳のワイヤーをイエルクさんも押し曲げる。

「……ああ、こういったのは似たような物がありますよ。下着に代用できるかは試してみないと判りませんが」

「おおおおお、そうなんですか?!」

「ええ。これ、後で中身を出してしまっても大丈夫ですか？」

イエルクさんとアニがブラから手を離れた。

「いいですよ！ 私ってば、もうこの下着を付けることはないですから！」

だって、アニに新しいのを作ってもらえるのなら、それでいいしね？

私がウンウンと頷きながら返事をすると、イエルクさんが「そうですか」と頷き返してくれながら、扉の方へと向かう。

「皆、来てくれないか。異世界の生地で見てもらいたいものがあるんだ」

「え、皆って？」

彼の言葉に驚いていると、私の体内時計で五分もしないうちに、三十人を超える男どもがドヤドヤと部屋に入ってきた。

その光景に私は一歩退き、アニは眉をひそめ、ディルクさんは息をひとつ吐く。

部屋が一気に窮屈になったが、イエルクさんをはじめとする彼の仲間たちは別段気にする様子もなく私を取り囲んだ。

「……………あの、」

「皆、珍獣様が服の上から付けられているのは異世界の下着だそう。使用されている生地が私にはどうも思いつかなくてね。誰か思い当る者は居ないか？ 触っていいと許可は貰っている」

イエルクさんのその言葉に、三十人を超える男性の視線と手が一斉に私に向かった。

「う、うわっ！」

前後左右からブラとパンツを引っ張られ、生地を指で触られまくる。

いくら服の上から装着されたものといっても乙女の下着にこれはないと私は顔を引き攣らせてしまったが、彼らの視線にエロエロな色は皆無だった。

皆、興味津津と瞳を輝かせている。

そして口々に、

「これが異世界の生地か」

「生地の質がいいな」

「おお、伸びる伸びる」

「肩紐についているものは不思議な素材だ」

「縫製も驚くほど細かく丁寧だぞ」

と言っていた。

そして皆に下着を触られまくって暫し。茶金色の髪の毛の二十代前半とおぼしき男性がイエルクさんと呼んだ。

「イエルクさん」

「なにか心当たりはあったか？」

「はい。そういえば数年前にトリエスが従属国とした南方の国に、こういった伸びる素材がありますよ。応用すればいけるんじゃないですか？ いつだったか、グミムルにある物質を混ぜたら伸びるようになったと売り込みにきていました。使い道が思いつかなかった

んで注文はしなかったのですが、その時、業者が少し置いていったんですよ。王都の叔母の家に置いたままだったと思いますから持てきますか？」

「ああ、持ってきてくれ。君が言うように応用できそうなら取り寄せてみよう」

「了解しました。明日にでも取ってきてます」

「珍獣様、とりあえずその下着の素材については、もう少しお待ちいただけますか」

言いながら、イエルクさんは皆を私の周囲から少し下がらせた。

下着の話はこれで終了したのだと判断して、私は触られまくった乙女のパンツとブラを手早く外す。

すると手を差し出してきたので、若干躊躇いつつも素直に彼の手の上に下着を乗せた。

「宜しく願います」

「努力します。下着の他には何かございますか？」

「あります！ えっとですね、」

私は周囲に居る人をちよっぴり掻き分けて、ジヨリジヨリテープルの上に置いたうちのひとつであるモコモコ素材のシュシュを今度は手に取った。

「また生地的事なんですけど、こういうのって作れますか？」

「イエルク様、補足しますとレネヴィアにも、こういった生地はありませんわ」

はい、とイエルクさんにシュシュを渡すと、彼は考えるように生地を触ってから、横に居た人に渡した。

それからはリレーのように次々に皆の手に渡る。

一通りまわってから、イエルクさんが仲間たちに聞いた。

「皆、どうだろう？」

「イエルクさん、俺の母に聞いてみますよ」

黒髪黒瞳の男性が声をあげた。

「確か君の実家は、生地を扱う商売をしていたのだったか」

「はい。この間、帰省した時、レネヴィアにはもう負けられないと豪語していたので、意地でもなんとかするんじゃないですかね。陛下の珍獣様がご所望の生地となれば、抱えている者たちを酷使してでも開発生産に繋げていくと思いますよ。その後の旨みがありすぎますし」

でも染色まではどうかなあ、見たことのない色だから、と少々考え込むように黒髪黒瞳の男性が付け加えたのに、茶色の髪の毛の別の男性が口を挟んだ。

「それは俺に心当たりがありますよ。染色の匠が知り合いにいます。自負心にかけて色を作り出すと思います」

頑固一徹な老人でしてね、と言って笑い、「珍獣様、これは俺たちが与らせて頂きますね」とシユシユを懐に入れた。

「お願いします！」

「他にはございますか？」

「あります、あります、たくさんあるんです！」

イエルクさんに聞かれ、次に私が手に取ったのはヘアクリップだ。パカパカと皆に開閉して見せてから、イエルクさんに手渡す。

「髪を挟んで留めるものなんですが作れますか？ 陛下用に欲しいんですけど……」

イエルクさんは私が見せたように開閉しながらヘアクリップの中心部分を観察している。

何回かパカパカさせた後、彼はふつとした笑みを見せた。

「これは簡単ですね」

「おおおおお、そうですか！ 良かったです！ 陛下にあげるんで、髪の毛の色に合わせて黄金で作ってもらえますか？ 男の人なので余計な装飾は要りません」

「判りました。数日以内にお渡し出来ると思います」

「お願いします！ あとあとあと、お願いしたい事がまだまだありますですね、」

「なんででしょう？」

「これです！」

そう大声をあげながら、私は先程アニが来るまでに書いていた紙をイエルクさんを中心に皆に見せた。

「私の栄えある薔薇の逆ハー構成団の団員達に渡す勾玉をお願いしたいんです！」

ようやく此処に話が持っていけたよ！

長かったよね！

異世界トリップ最重要要素である私の大事な大事な逆ハー構成団の為の依頼だよ！

私ってば、意地でもこのトリップを逆ハーにもっていく気満々だからね！ みんな覚悟しててよ！

∴ 93 (後書き)

小トリアノン宮殿(王妃の村里写真) ∴ Wikipedia
http://ja.wikipedia.org/wiki/
ki/%E5%B0%8F%E3%83%88%E3%83%
AE%E2%A2%E3%83%8E%E3%83%B3E5
AE%E6%AE%BF

「逆はー、ですか？」

「はい！ 説明すると長くなるので完全省略しますが、イエルクさんを始め、ここ皆さんも団員ですからね！」

「はあ、団員ですか」

イエルクさんが不思議そうに首を捻るのに、周囲も「なんだろうな」といった様子になる。

今回はヴィルフリートさんの時のように、ディルクさんによる補足説明は無かった。

彼の方を見ると呆れたような視線が返ってくる。

勿論、私は全く気にならなかった。

「で、勾玉の事なんですけどね？」

「まがたま？」

「はい！ 石でこの絵の通りの形に作って欲しいんです！」

勾玉の絵を書いた紙をイエルクさんに、はい、と渡すと、ディルクさんとアニを含めた皆が興味津津とそれを覗きこんだ。

「この形でしたら加工にはそう手間はかかりませんので直ぐに出来ますよ」

「おおおおおお、じゃあお願いします！」

「石は何にされますか？」

「えっと、青い石がいいです！ ブルーヘヴン、青薔薇がモチーフ……えっと、表現の動機となった中心思想？なんで！」

「では、なるべく安価な石にしましょうか。お配りになるのですた

ら青玉などは高価ですし」

「その辺りはお任せします！ あ、陛下用に紫水晶のも作ってもらえませんか？」

「あれ、陛下は団員には永久になれないのではなかったでしたっけ？ 地下で団員証は一生涯手に入らないと、あの方に言っていたような」

私の言葉にディルクさんのツツコミが入った。

「勿論、絶対に入れませんよ！ 泣いても叫んでも悶え苦しんでも入れません！ でも、お守りとして渡す事にしたんです。一応、衣食住のお世話にはなってますしね？ 紫は陛下の瞳の色だし、異世界日本の特殊文字ではですね、紫「むらさき」は紫「し」とも読んで天子を表すんですよ！ あ、天子は君主の事です！ その他に、紫が高貴な色とされている例としては深紫色ですかね。禁色のひとつで一位の公卿、トリエスという一級貴族にだけ許された色なんです。不勉強なんですけど、他には天子にだけ許された色の黄櫨染（こうるぜん）をはじめ、青白椽、赤白椽、黄丹とかあったと記憶します。ちよつと本気で自信が無いんですけどね」

「これは？」

ディルクさんがジョリジョリテーブルの上に置いてあった他の紙を指した。

彼が聞いてきた紙には、とある図形が描いてある。

私はその紙をディルクさんの方へと向けながら、作ってもらいたい服のデザインを描いた紙をア二に手渡した。

「ア二、これ、後で説明するけど、作ってもらいたいんだよね」

「判りました」

「後でちゃんと説明するね？」

「はい」

「で、うーんと、ディルクさんの質問のものなんですけど、」

私が紙に視線を落としながら説明をしようと口を開くと、部屋に居る皆が耳を澄ませているのに気づいた。

部屋がシンと静まり返っている。

「私が団員達に配るのはあくまで団員証なんですけど、でも陛下に渡す予定のもののようにお守りの意味も付けようかなと思っただけです。だから異世界日本で何かと有名な凶形を描いてみたんですけど、これは止めることにしました。手書きで描いて皆の配るのは大変そうですね？ でも、勾玉だけでも十分だと思っんです。うーん、どう説明すればいいのかなあ」

「いろいろと物知りなんです、珍獣様」

デイルクさんが何処か感心したような声音を出した。

「いえいえいえいえ、全部、今までやった乙女ゲーの影響です！」
「パーシヴァル様の前は群雄割拠の戦国時代モノに嵌っていたし、更にその前は平安時代ものにドツプリだったんだよね！ 隠しの帝ルートが垂涎モノだったんだよ！ だから自然に頭に入っちゃっただけなんだけど、その乙女ゲーの帝が本気でカッコ良くてさあ。パーシヴァル様のように、いろいろあつて影とか背負っちゃって、いい味だしてたんだよね！」
そんな感じで懐かしい影のある帝を脳内で再生していると、影といえはと、私は陛下の白い背中にある痛々しい黒い傷痕とふっと思ひ出してしまった。

「そうそう、陛下つては刺客とか向けられた事があるんですよ？
今でもですか？」

「は？ ええ、まあ、そうですね」

話が飛んでしまったからだろう、デイルクさんが不可解そうな表情を少しだけ見せた。

「イエルクさんをはじめとした周囲の皆も揃って同じような顔をしている。」

「どのくらいの頻度で？」

「うーん、時期にもよりますが、それなりにですかね。なにぶん大国王ですから。世継ぎもまだですし、あの方は次をまだ明確にご指名になっておられないんですよ」

陛下おひとりの命を奪えばトリエスを大混乱へと陥れられますからね、とデイルクさんは肩を竦めてみせた。

「おお。だったら護身用に銃とか持たせたらどうでしょう？」

今朝見た背中への傷痕が何とも痛々しかったのに、私の頭に銃の存在がペカペカツと思ひ浮かぶ。

もうあんなに痛そうで、しかも彫像並みの芸術的な肉体に、これ以上傷を付けられるのは回避するにこした事はない。

というか、陛下自身が許しても、異世界日本の乙女と腐女子たちが許さないと私ってば思うんだよね？

それに刺客は銃で即座に抹殺が安全確実ってなモノだし、自分の身は自分自身の手で守った方が裏切りとか一切考えなくていい分、一番気が楽な方法だ。

「じゅっ？」

「どういふものですか？」

デイルクさんのあとに、それまで黙っていたイエルクさんが口を挟んできた。

周囲の皆も声こそ出さなかったが、ずっと耳を澄ませ続けているのが判る。

アニがデイルクさんのハンカチモドキが敷いてある椅子に私を促してきたので、素直に従って座った。

「向こうの世界の武器で、一般的に火薬を燃焼させた気体の圧力で弾を発射して、相手を威嚇したり撃ち殺したりするものです。タイプ……えっと、大雑把に言つと、拳銃、小銃、機関銃とか型はさまざまあつて、もしそれを兵器として使用すれば剣よりも強いですよ」「そのような物があるのですか。ではそれがあれば剣を振り回す騎士は不要になりますね」

デイルクさんが戯けたような口調で言いながら、小さく笑った。

「おおおおおう、それは失職と言つ事ですか?! 恐ろしい!

やややつ、私つてば、今、設計図を描こうと思つてたんですけど止めておきますね!」

「設計図？ 珍獣様は描けるのですか？」

「はい！ ママが軍オタ……うんと、軍関係大好き人間で、三度の飯より軍事物映画を見たり、武器の資料眺めてウツトリしたり、エアガン、空気銃を収集しては分解して、何処から手に入れたのかわからない部品を加えつつ、自分の思うように再構成したりですね？ あと、自衛隊……異世界日本の軍隊みたいなものなんですけど、自衛隊や他所の国の軍隊である米軍基地のイベント……えっと催し物に飛び跳ねながら参加していたんですよ。で、私もそれに付き合っていたので、知らず知らずのうちにいろんな事が頭に入っていたというか。まあ、設計図と言っても肝心なところは駄目かもしれませぬ所詮、素人の趣味の範囲内だったんで。こんな作りのもの、という感じでしたら描けるという程度なんですけどね？」

「どうだ、イエルク」

「欲しいな。 珍獣様、詳細は駄目でも結構です。作りの大まかな考え方が判れば、後は素材を含め私達が考えます。お手数ですがお描き頂けませんか」

デイルクさんが目を細めて私を見て、イエルクさんをはじめとした、この場に居る仲間達全員が真剣な様子で私を注視していた。

それに私は二つ返事で了承する。

「いいですよ！ 了解です！ 皆さんには多大なお世話になりそうですし！」

「そうと決まれば大きめな紙……いま此処に居ないのは おーい、コーエン、大きめな紙を持ってきてくれ！」

イエルクさんが部屋の外へ聞こえるように物凄く大きな声をあげた。

部屋の入り口近くに立っていた仲間のひとりが扉を開けて、繰り返して「コーエン＝バーレ、大きめな紙！」と声を張り上げる。

それに驚愕したのは、当然、私とデイルクさんの二人だ。

アニに至っては無言で嫌そうな顔をしている。

「は？ え、コ……コーエンさん?!」

「おい、イエルク、コーエン＝バーレとは、もしかして、あのコーエン＝バーレか?!」

「あのコーエン＝バーレ? 元衛兵のコーエン＝バーレなら正解だよ。彼、衛兵を辞めさせられたと号泣しながら陛下のご命令で呼びに来てね。素直そうだったし、そのまま雑用として直接私が雇ったんだ」

なんでも故郷の母親が病気だとかで妹と王城で働きだしたばかりだったみたいだね。故郷はサデヴァ国境近くのパピヨンの産地の村だったかな? と、さして興味もないといった様子で言いながら、イエルクさんはペンを私に差し出した。

そして驚き桃の木のコーエンさんを待つこと暫し。

部屋にチワワが入ってきた。

彼の様子は全く変わっていないくて、とても元気そうだ。

でも、私とディルクさんとアニを視界に入れると、突然、彼は全身を震わせる。

「あ……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「コーエン? 持ってきた紙を珍獣様にお渡ししてくれ。何を震えているんだ、君は」

言っつて、イエルクさんは眉をひそめる。

そして震えてなかなか紙を差し出そうとしないチワワに呆れたのか、スツと紙を取り上げると、私の前に大きな紙をサクサクと広げた。

「何枚もありますから、出来れば貴女が御存知の全てをお描き頂きたい」

「判りました。頑張ります! それはずうと、コーエンさん、

此処に陛下は居ないですから、そんなに怖がらなくても大丈夫ですよ?」

私はチワワの震えが少しでも止まるよう精一杯の笑顔に向けてから、銃の設計図を描くべく手を動かし始める。

そんな言葉を彼に言ってあげたのに、私の体内時計で一分もしないうちに新たな人物が部屋に遠慮なく入ってきた。

「随分と人口密度が高いな」

「ひっ！」

コーエンさんの全身が凍った。

カチンコチンになってしまった。

彼の悲鳴とも言えない声に、なんとなく目を向けたらしい新たな来訪者は、瞬間、眉間に盛大な皺をつくる。

「……コーエン＝バーレ、お前が何故此処に？」

「おおぅ……なんたる不運。へ・い・か、あんまりチワワを苛めないであげて？」

「ちわわ？」

「コーエンさん、イエルクさんに雑用として雇われたんだって」

「……物好きな」

ふんとした感じで言い捨てながら、陛下はコチコチチワワを無視して部屋の奥、私の方へと歩いてきた。

彼の手には今朝同様、似合わない安っぽいコンビニ袋が下がっている。

「小娘、何をしているんだ」

「何って、銃の設計図を描いているんです」

「じゅっ？」

「向こうの世界の武器だそうですよ」

「ほう？」

デイルクさんの補足に、陛下は、まだほんのチョピットしか描けていない私の手元に視線を落とした。

「暇なので珍獣様ご注文の品々の作成と、異世界の武器の研究をしようと思えます、陛下。楽しみです」

「なるほど。面白そうだ。異世界の武器とやらの研究費は余が出そ

う。存分にやれ」

「ありがたい！ 必ず結果を出してみせます。久しぶりに腕が鳴りそうだ」

陛下の言葉にイエルクさんが歓喜の声をあげた。

彼の仲間達も「おお！」「やった！」「頑張るぞ！」と口々に騒めきだす。

「ああ、あとついでだ。小娘にかかる費用も余が出す。ルドルフの方に請求をまわせ。で、それはいいとして小娘、注文の品とはもしや逆はー構成団の？」

「当りです！ 私つてば、いっぱい団員を抱えているので、もう大変なんですよ！」

「そうか。よかったな」

適当な様子で私に返しながら、陛下は手に持っていたコンビニ袋をジョリジョリテーブルの端に置いた。

「陛下は何しに来たんですか？」

「強引にだが時間が少し作れたから、たんさんの依頼をと持ってきた」

「国王陛下様が直接？」

「その方が話が早いからな。それに、食後は歩くようにしると言ったのはお前だが？」

「おおお、それは糖尿予防の話ですね」

「イエルク、とりこんでいるようだから、これの説明は後です。手が空いたら来てくれ。それと別件で、例の物だが急いで欲しい。近日中に仕上げる」

「畏まりました。明日、明後日中には仕上げておきます」

「戻る。デイルク、適当なところで切り上げさせる。小娘、夕食と一緒に取れそうだから、そう時間をかけずに部屋に戻れ」

「はい！ 夕食にはローストビーフ、えっと、シュイネブーテンが希望です！」

「少しも痩せたようには見えないが？」

そう言いながら陛下は部屋をさっさと出ていき、私は銃の設計図をなるべく多く描きあげるべく、皆が見守る中、夕刻と思われる時間まで黙々と手を動かし続けたのだった。

あたりが薄暗くなってきた頃、イエルクさんのところで一通り設計図を描き終えた私は、リーザや妖精、ゼルマさんが控えている陛下の部屋に戻された。

この時点でデイルクさんとアニが離脱して、人材不足なのか、私の護衛としてヘロルドさんがやってくる。

彼は、「御支度が整われましたら、本日のご夕食は白百合の間になりますのでご案内致します」とロマンスグレーな微笑みを浮かべながら言い、その言葉通り、リーザ達に入浴、着替えの世話を受けて、陛下と私が出会った場所、乙女の下着が肉汁シミシミパンツと化した煌びやかな部屋に私は通された。

我が家のキッチン、ダイニング、リビングを繋げても入らなそうな長い食卓用テーブルに促され、陛下到着まで体内時計で一時間強も待たされる。

初めて出会った時とは違う場所に陛下の席が用意されていて、その隣に座らされた私は、昼間の疲れからかウトウトとしまだしてしま

った。
そんな私にヘロルドさんがさり気無く声をかけてきた時、陛下が白百合の間に入ってくる。

部屋に控えていた人達がワラワラと動きだした。

今現在、この部屋の中に私に敵意の視線を向けてくる人間はいない。

「……………」

「……………」
「……………」
「……………」
「ねね、陛下、心が籠って無くて全く構わないんです。とりあえずな感じでいいんですけどね？ 遅くなった、とか、すまない、とかいう言葉は、これだけ人を待たせたのに無いんですか？」
「無いな」

「おお、完璧なまでに自己中心で動いてますね。俺様完全体ですか。……まあ、いいんですけど。それよりオナカが空きました。私つてば、お昼ゴハン食べてないんですよ」

陛下が食卓の席に着いた。

彼は澄んだ紫の瞳を私に向けながら、とりあえずといった様子で差し出された飲み物に口をつける。

「イエルクのところを出されなかったのか？」

「はい。聞かれもしませんでした」

忘れた頃に杜仲茶モドキを何度も注ぎに来てはくれたけどね？

そういえば、ディルクさんもアニも私の手元を興味津津といった感じで見続けていただけで、お昼ゴハンの事は一言も口にしなかったな。

皆、オナカが空かなかつたのかなあ？

「そうなのか？ では、内容は減量用だが、夕食はしっかりと食べ

」

陛下の長くキラキラしい黄金の睫毛がパチクリと動いた。

その様子を疑問に思った私が彼の視線の先を追うと、私の前にとても美味しそうで涎モノな超高カロリー料理が次々と並べられていく。

山盛りの炭水化物、滴る動物性油、大量投入され、練り込まれたふんだんな糖分。

豚さんになってくれ、と言わんばかりの脂肪増産養分たちのオン

パレードだ。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………そういえばね、陛下」

「……………なんだ」

「朝もね、食後の甘いモノ込みで、たくさんの料理が出たんですよ
ね」

「……………」

「陛下の指示というか命令って、効力は如何程なんですか？」

「……………」

「へ・い・か！」

陛下が深く溜息をついた。

「それなりにあると思っていただけだな」

自分で考えながら食べる、と投げ遣り気味に言うと、彼は野菜を
せつせと避けながら食事を開始した。

やっている事はオコチャマ宜しくな野菜避けだけど、傍から見れば
優雅に食事をしているようにしか見えない。

超絶美形ってお得だ。

「陛下、トマト食べてあげましょうか？」

「……………」

「減べばいいのになと思っちゃうほど大嫌いなら、端っこに避けても
お皿に乗っているだけで嫌じゃないかなあ、と私的に思うんですけ
ど」

私、トマト好きですしね、と付け加えて彼の顔を見ると、フォー
クモドキにグサリと刺されたトマトが直ぐさま向けられる。

「口を開ける」

「はい」

あーん、と口を開けてトマトが放りこまれるのを待っていると、陛下は素早くフォークを差し入れてきた。

私はトマトをモグモグと咀嚼する。

「美味しいです、このトマト！ 出来のいいフルーツトマト並みに甘いです！」

「そうか」

それから私が特に何も言わなくても、向こうの世界でいう人参、ほうれん草、玉葱、芽キャベツ、そして何故かマッシュルームなどのキノコ類も次々と口の中に入れられた。

それに私は思わず呆れの視線を向けてしまう。

「陛下つてばキノコ類も嫌いなんですか？」

「……………」

「まあでも、野菜もキノコも嫌いじゃないですし、いつでも私つてば引き受けますよ？」

ビタミン摂れるし、血液がサラサラになるし、腸も血管も若返って健康的だしね？

繊維質も摂れて、お通じにもいいよ！

「くち」

「はいはい」

再び、あーん、と開けると、今度は茄子モドキを押し込まれながら、陛下と私はのんびりなペースで食事を続けていく。

ちなみに、この野菜処理方法が半ば習慣化するなんて、陛下も私も、勿論、この場に居るへロルドさんも使用人達も微塵も思わなかったに違いない。

私の体内時計でたっぷり二時間は夕食に費やし、陛下の部屋に二人して戻ると、豪華応接セットのローテーブルの上に、お願いしていたウオちゃん入れと思われる肩掛けの鞆が置かれていた。

リーザ達下がった静かな彼の部屋を私はパタパタと走って、早速鞆を手にしてみる。

「もうウオちゃん用の鞆が出来てる！ 早すぎ！」

手にした鞆は柔らかい革製で、所々に鞆と同じ革で作られた花があしらわれていた。

ウオちゃんは私達が食事中に戻ってきたらしく、銀製の盥が置かれている方向から水音が聞こえてくる。

私は鞆を肩にかけると、後ろを歩く陛下に見せる為に振り返った。

「陛下、この鞆、見て下さい！ 今朝ね、アニに」

「なんだ、この本は」

せっかく肩にかけて鞆を見せてあげたのに、彼の視線はローテーブルの上に注がれていた。

「それは向こうの教科書です！ それも今朝なんですが、向こうから持ってきた鞆の中身を出したんですよ！」

「ほう？」

「塾の英語と国語、学校の世界史と日本史、数Ⅰと基礎解析と代数幾何、物理と化学と生物があります！ 私ってば文系を選択したんで、学校のロッカー……えっと、私専用の棚に一昨年から置きっぱなしだった理系の教科書を、いい加減に家に持って帰って処分しよ

うと思っただんです！ もう要らないし！ トイレの紙にでも変えた方が有効活用ってなものですしね？」

言いながら、肩にかけていた鞆を私がローテーブルの上に戻す横で、陛下が物理の教科書を手に取った。

そして視線を落としてパラパラと繰り、パタンと閉じると、教科書の背表紙で私の頭をコツリと叩く。

「小娘、仕事をしてみないか？」

「仕事？」

「翻訳だ。異世界の教科書とやらを読んでみたい。少しずついい。トリエス語に翻訳しろ。お前は読み書きは出来るよな？ バルツァーが持つてきた珍獣保護法も、余の誕生式典の書類も読めていたし」「おおおおおおお、しまった！」

忘れてたよ！

確か私つてば、字が読めないように振る舞おうと思っていたんじやなかったっけ？

陛下に、『では、余が保護することもないな？』とかって、城外に放り出されない為にね！

異世界で労働に勤しむ気はさらさらないよ！

貴族の逆ハーメンバーも、まだ足りないんだからね！

その考えは今も全く変わってないよ！

「わ、判りました。では一ページずつ……」

でもバれてしまったのなら、不本意ながらも多少は妥協しなきゃ駄目か、と渋々頷くと、形の良い黄金の眉の間にスツと皺が寄った。

「終わらせるのに何年かける気だ。阿呆か。一日三十ページずつだ」

「さ、さんじゅっページ？！ 念の為に聞きますけど、もしかして本気で言ってます？！」

「本気だが？」

「陛下の鬼！ 悪魔！」

「悪魔、な」

陛下は、ふんとした様子で言うと、物理の教科書をローテーブル

の上に放った。

「何とでも言え。小娘、優先順位は理数、歴史、言語の順だ。判ったか？」

「……判りたくないですけど判りました。物凄く、ものすごおおおおおやりたくないですけど！」

なんで異世界にまで来て教科書を開かないといけないのかと一気に気が重くなりながら、私が豪華ソファードスンと座ると、続けて陛下も横に腰を下ろした。

彼は他の物にも興味を持ったようだ。

今度は教科書の傍に置いてあったヌイグルミ型のペンケースを手取る。

「中を見ても？」

「どうぞ？」

流石陛下は天才だ。

ほんの一瞬だけ指を彷徨させたが、私に聞くことも無く、クツキーモンスターの背中に付いているファスナーを開ける。

最初に彼が手にしたのはシャープペンシルだ。

「筆箱なんです、それ。今、陛下が持っているのは其処を押すと黒い芯が出てきて、形から判ると思いますけど書く道具です」

私が教えた通りに陛下は力チカチと芯を出すと、「便利そうだな」と言っつてシャープペンシルを分解し始める。

これ以上は出来ないだろうというところまでバラすと、彼は満足したように「成程な」と言っつて再び元の形に戻した。

「小娘、これは？」

クツキーモンスターをポンと教科書の上に置くと、陛下は次に携帯を手を取った。

携帯の色はサーモンピンクで、ピンクは私の大好きな色だ。

「それは携帯電話です。遠くの人と話す便利な道具というか。でも、異世界トリップの王道設定通りで、あっちの世界でしか勿論使えませんでした。ぷっちょをカボチャパンツに挟み込んだ時に見たんで

すけど、アンテナ……うーん………あ、陛下、私の家と私の部屋、家族と千夏ちゃんとか藤と妖子ちゃんの写真、写し絵みたいなものなんですけど見てみます？ 型落ちのですけど新しい携帯を買ってもらったばかりで、それしかまだ撮ってないんですけどね？」

「ああ、見てみようか……というより、今、ひとり増えたな。ようこが」

「同じ学校の友達なんです！ 不思議系な子なんですよ？」

「不思議系な。余としては、お前も不思議に思えるが」

発想の方向性がおかしいし、と陛下の綺麗な紫の瞳が携帯から私に一時だけ移った。

多くの蝋燭の炎に照らされて、黄金の髪と一緒にキラキラと輝いている。

前にも少し思ったが、彼のそういう姿は実に幻想的だ。

「失礼な！」

私は瞬時に頭にきてキツと目を吊り上げてみたが、彼は特に気にするふうでも無く、興味の対象を携帯に戻したようだった。

その様子に、ひとり怒っているのも馬鹿らしくなって、私は陛下の手に自分の手を重ねる。

そして彼の手を動かすようにして、折りたたみ携帯をパカリと開いた。

「えっと、ちょっと操作してみます？」

「操作？ そうだな、教えてくれ」

「うーんと、これが確定で、これがクリア、前に戻るとか解除とかで、写し絵が入っているのは此処です。これを上下左右に押せば、そのまま上下左右に移動して選択します」

「判った」

陛下が素直な様子で小さく頷き、初めてとは思えない程の滑らかな手つきで操作していく。

機能設定の項目を開いてみたり閉じてみたりした後、画像が入っているデータフォルダを彼は開いた。

「おおう、飲み込みが早すぎです。適応力が凄いいつか」

「そうか？　小娘、これは？」

「えっと、この写真、写し絵はパパが借金してまで購入した我が家です。ちなみに返済期間は三十五年もあります」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………あれあれ、感想は？」

心なしか陛下の表情に哀れみの色が混じった。

「……………こう言ってしまうのは悪いんだが、一般的な木の大きさを基準とすると随分と小さく見えるんだが」

「いえいえ、ちつとも悪くは無いですよ？　この家つてば、陛下の部屋の総面積も無いですもん。というか全然足りません。ちなみに私の部屋なんて、陛下専用トイレより狭いです。洗面所よりも狭いですよ？　次に行つて下さい。戻らなくても右を押せば大丈夫です」

「判った。　これがお前の部屋か？」

「はい！　狭いでしょ？　物を基準に大きさを測るんですけど、机の上に乗っている箱がカラフェスと同じ大きさくらいです」

「では、余の寝台と変わらないくらいか」

「そんな感じですよ！」

うーん、といった様子で陛下が見ている液晶画面の上の方を、私は指し示した。

「この壁に貼つてあるのがパーシヴァル様ですよ！」

「パーシヴァルと言われても、小さいし、陽の光が入り込んでしまつて顔はよく判らん。長い銀髪だというのは判るが」

「ややっ、目を凝らしてよく見て下さいよ！　パーシヴァル様、サラサラな銀髪に、血のような真紅の瞳で超カツコイんです！　陛下に負けないくらいの超絶美形なんですから！　つていうか、私が知っている限りでは、顔で陛下に唯一対抗出来そうなのはパーシヴァル様だけです！　ねね、次に行つて下さい。次はパパですよ！」

陛下が溜息をついた。

「……かなり太っているな」

「お肉凄いでしょ？」

「ああ。だがお前は完全に父親似という訳ではないんだな。次は母親か？」

「そうですね！」

「……………」

「……………」

「……………」

「あれ、ママに感想は無いんですか？ おかしいなあ？」

首を捻って腕を組んだ私の横で、陛下が感心したといったような
声を出した。

「いや、驚いた。美醜の基準は国や時代によって違うと思うが、お前の母親は、にほんではどう評価されている？」

「ママは超美人さんで通ってます！ でも私ってばママ似じゃないんです。……お兄ちゃんと花依はママ似なのに」

なんたる不運！ なんたる悲運！ と両手で顔を覆うと、陛下が
ポンと私の頭を軽く叩く。

「そうだな。お前は両方を足して割ったような感じだ。でも、いいのではないか？ 二人の子供と証明された容姿で」

「そうですね？ ちっともいいとは思えないんですけど……」

「何が不満なんだ。どちらかの顔に似すぎているほど気持ちが悪い事は無いぞ？ 吐き気すら覚える程だと思うが？ これは兄か？」

「はい。お兄ちゃんです。露出狂の」
私の言葉に陛下が小さく息を吐いた。

「そういう紹介の仕方は止めてくれないか。……細いな、全体的に」
「お兄ちゃん、結構ヒョロ系なんでよねー……。インドア派、うーん、

室内大好き派というか」
「ああ、そのような感じだ」

成程と認めるように頷くと、陛下は足を組み、次の画像へとキ―を押しした。

「花依です」

「妹か。確かに母親似だな。将来は綺麗な女性になるだろう。だが、少々キツイ印象を受けるのだが、どうなんだ」

「うーん、キツイっていうか、凶暴っていうか、トリエスの職業でいうと騎士向きですかね」

「そう言われると納得だ。騎士向きな顔をしている」

既に手慣れてしまった様子で再びキ―を押すと、次の画像を目にした陛下は何故か眉をひそめた。

「陛下？ これは千夏ちゃんです。胸もシツカリ写してますから、千夏ちゃんの羨ましい巨乳っぷりが判って貰えると思います」

「……確かに大きいが、それはともかく、ちなつは脳が羽で出来ていると、周囲に羽が舞っているというか、そのような印象を受ける」

「失礼な！ 癒し系と言って下さい！ 千夏ちゃんはドジっ娘ですが、エロに関しては凄い知識なんですよ?!」

「そうか。それは凄いな。次は？」

それはどうでもいいといった感じでスパンと千夏ちゃんの話を終わらせると、陛下は次の紹介を促した。

「えっと、加藤です」

「この者が、かとうか」

「はい」

「なんだ、たいした男ではないではないか。小娘、このような者に言われた事など、今後、一切気にする必要は無いぞ」

言って、視線を私に移すと、陛下は足を組み替えながら携帯を一旦膝の上に下ろした。

「……でも」

「でもではない。気にするな。とにかく忘れる」

「ただ加藤は学校で、それなりにカッコイイって言われてて、頭

も凄くいいんですよ？」

「そうは見えないが？ 容姿は確かに悪くは無いが、それだけだ。特別良いとは思えない。頭に関しては直接対峙していないから何とも言えないが、それは気にする理由にはならないと思うが？」

「そうですかね……」

「そうだ。そう思え。次にいこう」

新たな画像を目を入れた陛下の黄金の眉が、千夏ちゃんの時よりも一段とひそめられた。

「妖子ちゃんです」

「これは違う意味で凄いな。なんというか、彼女の周囲が不思議と黒く見える。何故、ようこは長い前髪を全て前に垂らしているんだ？ 見え難くないか、これでは」

「あー…妖子ちゃんはですねー…うーん、話すと長くなるんで、これは寝台でお話します。夜に聞くにはもってこいです」

「嫌な話のような気がするが、そうだな、もう夜も遅いし、寝るか」「はい！ あ、その前に、陛下の写真も撮ってあげますね！ そのままで居て下さい！」「」

「判った」

了承を得た私は、陛下から携帯を受け取ってそれを彼に向けた。陛下は黙って此方を見ている。

数多くの蝋燭の炎を光源にしている室内は十分に明るかったが、それを物ともしない撮影ライトを私はオンにした。

「撮れました！」

「あのような明るい光を初めて見た」

「撮影ライトっていうんですよ。フラッシュとも言いますが。昔は着火すると瞬間的に燃焼して強い光を発する調査した粉を使っていたらしいです。今の仕組みは知りません。で、はい、これが陛下」画面を見せると、陛下が「ふうん」といった感じで私の手から携帯を受け取った。

「カメラっていうんですけど、これも私には仕組みが判りません。」

大昔はレンズとかフィルム……うーん、とにかくそんな感じのを使って焼きつけていたみたいで」

「小娘、このけいたいは、この世界でもお前にとって必要か？」

「え？ 使えないから必要ないといえれば必要ないですけど。電池も……燃料というか、そう持たないと思いますし」

「そうなのか？ ああでも、家族のしゃしんが入っているのだったな」

「そうですね、なんでですか？」

陛下が何を言いたいのかわからなくて私が首を傾げると、彼は手にしている携帯をパターンパターンと開閉し出した。

「中を見てみたいと思ったんだ。イエルクと。きっと仕組みは理解できないだろうが」

「いいですよ、別に。どうぞどうぞ？」

開閉を止めて、今度は携帯の側面の合わせ目を観察するように見ている陛下に、私は快く了承の意を伝えた。

私が少しの逡巡も見せなかったからか、彼は完璧な美形顔を不思議そうに此方に向ける。

「いいのか？ しかし」

「確かに写真が見れなくなるのは寂しいような気がしますけど、でも私ってば日本に帰るのを諦めた訳じゃないし、陛下にはお世話になってますしね？ それに私、別に今、辛い訳でも、寂しくて悲しくて仕方無い訳でもないですから。今のところ結構楽しく過ごさせてますし。だから本当に気にせずにごうぞう？ いつかトリエスにもカメラと電話が出来る事を祈ってますね」

私の言葉に陛下が極上の笑みを見せた。

無意識だろうけど、この笑みひとつで騒乱を巻き起こし、国のひとつやふたつを滅ぼしそうだ。

クッキーモンスターの横に携帯を置くと、陛下はソファアールから立ち上がった。

そして私を見下ろす。

「では言葉に甘えよう。小娘、」

「はい」

「取り上げた詫びとして、調整がつき次第城下にも下りてみるか？」

「え、いいんですか?!」

携帯と引き換えの思いも寄らない提案に、私は直ぐに嬉しくなつてしまつて、ソファアを動かしてしまう勢いで立ち上がった。

急速に湧きあがってくる心のウキウキを上手く昇華出来なくて、陛下の腕にギュツとしがみついてしまう。

「本当に?! 本当ですか?! 調整がつき次第つて、どのくらいですか?!」

「数日中には。屋台巡りでもすればよいのでは?」

「ややややややややっ、私つては凄く楽しみです!」

「それは良かった。だが小娘、バルツァアの屋敷への訪問は当分無理だ。あれは今多忙で、お前を招く用意が出来なくなった」

「判りました! それは待ちますんで、別にいいです!」

全然いいよ! 私つてば王都を歩いて買い食いしたいだけだから

! 庶民の逆ハ一構成団員をスカウトしたいだけだから!

だからバルツァアさんちに今直ぐに行けなくても全然いいんだよ!

全く問題ないよ!

「話がついたところで口でも洗うか」

「はい!」

嬉しさのあまりの私の元気の良すぎる返事に、陛下は呆れたような色を紫の瞳に浮かべた。

腕にしがみついている私を引きずりながら、歯を磨くべく、彼は洗面所へと足を進める。

そして陛下と私が目的地に足を踏み入れた時、銀の盥に居るウオちゃん、静かな彼の部屋にバシャンと大きな水音を響かせた。

∴ 96 (後書き)

e - s t r e e t . j p /
クッキーモンスター

h t t p : / / w w w . s e s a m

「なんだ、寝ていなかったのか」

二人で一緒に歯を磨いて、『誰も入れるな』と扉の外に居る人に命令した陛下が、ひとりお風呂に入りに行つて。

用意してあつた寝巻に着替えて、彼の寝台の上でぼんやりと夜空を眺めていると、入浴を済ませて戻つてきた陛下が掛布を捲りながらそう言つた。

彼は振動を抑える為か、ゆっくりと私の隣に身を横たえると、未だ濡れた髪を少しも気にせず、幾つもある枕に頭を押しつける。

「待つてたんですよ？」

「何故？」

「さつき、夜に聞くにはもつてこいの話を寝台でするつて言つたじゃないですか」

「忘れたんですか、と付け加えながら陛下の方へと体を横向きにすると、澄んだ紫の瞳がそんな私を捉えた。

「確かに言つてはいたが、もう夜も遅いし寝」

「『むかしむかし、あるところに、』」

「お前は相手の意志を無視して始める気だな？」

「『今にも死にそうなお爺さんとお婆さんが住んでいました』」

「……………」

「『お爺さんは、買春と博打の軍資金を調達する為に、よそ様の山へ無断でタケノコを採りに、』」

「……………窃盗ではないか。目的も酷い」

「『お婆さんは公共性の高い川に生活ゴミを流しに行きました』」
「不法投棄か。最悪だな」

「『お婆さんが生ゴミや汚れのパンツ、下着を捨てていると、川上の方から、ドンブラコ、ドンブラコと大きな井戸が流れてくるではありませんか』」

「なに？ 井戸が流れてくるだと？」

「『お婆さんは、“あんれまあ！ なんて大きな井戸だろう。持って帰ってお爺さんと一緒に食べよう”と言って、井戸を家に持って帰りました』」

「……………」
「『あなたが熊吉とデキている事を旦那にバラされてもいいのか？』と、お婆さんが隣の家の主婦のオヨネさんを脅迫して強奪した夕飯を温めていると、タケノコがいっぱい入っている籠を背負ってお爺さんが帰ってきました』」

「……………隣人にはなりたく夫婦だ」

「『お爺さんは家の中にある井戸を見て言いました。“なんと美味しそうな井戸だろう！ こんな熟した井戸を見るのは初めてじゃ。

よし、早速、井戸を切って食べることにしよう。婆さんや、包丁を持ってこい” お婆さんは包丁をお爺さんに渡しました』」

「井戸を切る、食べる、というところに詳細な説明はないのか？」

「『お爺さんは包丁を受け取ると、井戸を切るべく振り上げました。するとなんとという事でしょう』」

「……………」

「『井戸から青白い手がペタリと出てきたのです！』」

「……………」

「『お爺さんとお婆さんは、突然出てきた青白い手を凝視しました。カタカタカタカカ恐怖に体が震えてきます。青白い手が井戸の縁にかかり、腕が次第に出てきて、そして……………そして、濡れた長い黒髪の見知らぬ不気味な女が出てきたのです！ お爺さんとお婆さんは女の名を叫びました。“貞子！”』」

「待て。何故、見知らぬ女が出てきたのに、老夫婦が名を叫べるんだ？」

気づくと私と向き合う姿勢になっていた先程から五月蠅い陛下に、私は諫める意味で、黄金の髪がかかる彼の額をペチンと叩いた。

「……小娘、」

「もう！ さつきからなんなんですか？！ あのですね、陛下、怪談話をしているんですから、何故とか言わないで、そのまま聞いて下さいよ！ オコチャマじゃないんですから！」

「疑問に思うから聞くんだろう？ 普通に。それに矛盾だらけでは納得がいかない」

「矛盾つて！ 妖子ちゃんから聞いた怪談話なんですから価値アリの超貴重な話なのに！」

「ようこ？ ……ああ、周囲が不思議と黒く見える前髪の長い女か」先程と同じように陛下は眉をひそめると、此方に向いていた体を仰向けにして、目を閉じた。

どうやら眠りの体勢に入ったようだ。

「妖子ちゃんは凄いですよ！ 手相が見れるし、幽霊も見えます！ 学校の七不思議も制覇したんですから！」

ちよつと、話の途中でなに寝ようとしているんですか、と続けて、目を開かせるべく、私は蹶り（にじり）寄って彼の上に乗った。

その行為に、寝むそうな紫の瞳が再び姿を現す。

「てそう？」

「手の皺を見て占う事です！ それより陛下、」

「なんだ」

重い、と言いながら私を横に退けると、陛下は少しだけ身を起して、寝台横のサイドテーブルに置いてある水に手を伸ばした。

グラスに注ぐと、中身を一気に喉に流し込む。

それを見て、私も喉がなんとなく乾いてきたので、水を飲み終わった彼に手を伸ばしてみると、相変わらずずひとつか置いて無かったからか、使用済みグラスに再び水を注ぎ、陛下は私に手渡した。

飲むと、水は昨日と同じく柑橘系の香りがする。

口の中に清涼感をもたらす水を飲み干して、グラスを彼に返しなから、地下で疑問に思った事を私は聞いてみる事にした。

「そういえばトリエス王城七不思議って、何なんですか？　ひとつは陛下がグイードさんの言葉が判るって事ですよね？」

「全くふざけた話だ。何が七不思議のひとつだ。グイードが可哀想だろう。そもそも七不思議なんてくだらないんだ。昔、ディルクとヴィルフリートと、し……………いや何でもない」

「へ・い・か！」

何故だか歯切れが悪くなったのに、私がジト目で彼を見遣ると、眉間を揉み出しながら、しぶしぶといった様子で陛下は口を開いた。「あまりにくだらないから全ては知らんが、ひとつは肖像の間だったな」

「肖像の間？」

「ああ。歴代の王と王妃の肖像画が、夜な夜な呻き声をあげているぞうだ」

そんな訳あると思うか？　馬鹿馬鹿しい、と陛下は吐き捨てるように言つと、話は終わりだともいうように掛布を深く被った。

勿論、その掛布を私は追剥のように剥いでやる。

掛布を盗られて寝台にただ寝転がっている彼は、まるで、まな板の鯉のようだ。

「行きましようよ！　原因究明です！」

「……………寝たい。明日も早いんだ」

「ややつ、ちよつと！」

「明日は人の迷惑も考えずに早朝からラガリネの者が来ると今朝言っただろう？　ルドルフ達も何故もつと遅い時間に予定を組まないのか、嫌がらせとしか」

「気にならないんですか、その呻き声」

「……………」

「行きましようよ！ どうします？ 実は呻き声が陛下の大嫌いな両生類の鳴き声だったりとか！ 秘密の小部屋にウオちゃんも居ましたしね？」

私のその言葉に、体の何処かにあるであろう遣る気スイッチが押されたのか、陛下はムクリと身を起こした。

「行こう。長剣と毒薬でも持って行くか」

「毒薬つて物騒な」

「何の毒が一番効くかな」

両生類ならば退治してくれる、殲滅だ、人の城で許可無く生息するのだけは許さん、と言いながら、陛下は遣る気満々に寝台から出て立ち上がった。

∴ 97 (後書き)

参考文献 ∴ リング／鈴木 光司 著

両生類殲滅七不思議探検に行く事となった陛下と私は、揃って寝巻姿だった事もあり、簡単に身支度を開始した。

面倒だと言つて陛下はリーザ達を呼ばずに、彼女達が明日用にと用意してあつたらしき服を見つけて、私の分を寝台の上に放る。

放られた服に着替える為に私が寝巻を脱ぎ出すと、彼は服を持って洗面所の方へと向かった。

そして、苦勞しながら着替え終えたところで、陛下は身支度を済ませて戻ってくる。

「終わったか？」

「ねえ、陛下」

「なんだ」

「この靴下らしきもの、地下で一度見せてもらったんですけど、どう結んでいいのか私つてばスツカリ忘れちゃいました」

「……裾を捲つて寝台に座れ」

「はい」

言われた通りに腰を下ろした私の前に、陛下が片膝をついた。

「あれ、もしかして陛下が履かせてくれるんですか？」

「ああ」

「お…おおう、一国の国王陛下様に靴下を履かせてもらえるなんて私つてば贅沢な人間なのでは？」

凄く偉そうです、と続けた私に、陛下は小さく溜め息をつきながら、靴下モドキを手にとつた。

「そうだな。人に履かせるのは余も初めてだ。

小娘、足」

「はいはい」

陛下は差し出した私の左足を自分の大腿に乗せると、手にとった靴下を履きやすいように折り、私の足にスルスルとそれを通していった。

左足、右足と手際良く履かせ終わり、ズボンの裾を下ろすと、今度は私の全身に澄んだ紫の瞳を向けてくる。

そして、少しだけ眉をしかめた。

「小娘、着方がおかしい」

「そうですか？」

「此処はこう留める」

言って立ち上がり、腕を引いて私を立たせると、陛下は私の首元のタイモドキを結び直した。

次いで、ウエスト付近のベルトモドキをギュウツと締めまくる。

当然、私は悶え苦しんだよ！

「いつ、痛い痛い痛い痛いっ！　痛いですよ、陛下！　キツイです、物凄く！」

「少しは我慢しろ」

「我慢にも限度つてものが、」

「五月蠅い」

ピシヤリと言うと、陛下は私の抵抗を物ともせず力で押さえつけながら、衣服をさっさと改めていく。

満足したのだろう、こんなものか、と言いながら苦しむ私から手を離すと、今度はお酒が入っている飾り棚へと向かっていった。

「何ですか、それ」

ベルトモドキを緩めながら彼の元に私が近づくと、陛下は棚の奥から小瓶を取り出していた。

小瓶は彼の手に収まる円柱状のもので、中には琥珀色の丸い玉が何粒も入っている。

陛下は私の目の高さに小瓶を掲げ、軽く振った。

「それが毒？」

「これが毒に見えるか？ ただの飴だ」

「は？」

「パピヨンの飴だから美味しいぞ」

「いや、そうじゃなくて」

私は陛下の意図するところがサツパリ判らなかつた。

だから小瓶を振るのを止め、飾り棚から離れた彼に、私はムムツと眉を寄せてしまふ。

「なんだ」

「なんで今飴玉が？」

「なんでと言われてもな。道のりが長いし、飴でも食べながら思つたんだが？」

陛下の回答に、私の眉がますます寄つてしまつた。

「うーん、私つてば、どこをどうつつこんでいいのか判らないんですけど、道のり、長いんですか？」

「長い。この城はとにかく大きくて広いんだ。数代前の阿呆な王が無謀な散財をしながら増築に増築を重ねてな。余が王となった時にもまだその影響があつた程の無計画さだつたんだ」

仕掛けも凄いぞ、数年前にその仕掛けに嵌つたらしき白骨化した遺体が大量に発見されてな、と陛下は付け足す。

「おお、そうですかあ」

「小娘、食べるか？」

「え、もう？ まだ部屋すら出てないのに？ あ、待って、

仕舞わないでください！ 食べます、食べます！」

私の反応に、ムツとした様子で小瓶を懐へと仕舞おうとするオコチャマ陛下に、慌てて私は彼の胴体に抱きついた。

せつかく出現したパピヨンの飴だ。

彼の機嫌を悪くして食べ損なうなんて堪らない。

食べるという意志表示の為に、餌に群がる飢えた池の鯉のように、私は上を向いて口を開閉した。

パクパクパク！

パクパクパク！

パクパクパクパクパクパクパク！

「へ・い・か、食・べ・ま・す！」

入・れ・て！ 入・れ・て！ ク・チ・の・な・か・に・入・れ・て！

パクパクパク！

パクパクパク！

「へ・い・か！ は・や・く！」

「……………」

陛下は小瓶を開けて、コロリと私の口の中に飴を一粒入れてくれた。

開閉のタイミングが合わなくて、陛下の指を間違って舐めてしまったけれど、私は気にせず、入れてくれた飴をコロコロと口内で転がしてみる。

パピヨンの飴は、ライチと洋ナシのいいところ取りをしたような味だった。

「これ、美味しいですね」

「だろう？」

陛下は自分も飴を口に含むと、小瓶を懐に仕舞った。

そして、王妃の部屋の方へと足を進め出すので、私もそれにポテポテとついていく。

「なんかパピヨン、本気で生で食べたくなくなってきました」

「そればかりは本当に難しい。あれは少しの衝撃でも直ぐに痛む」

「陛下は現地に行つて食べようとか思わないんですか？」

「現地に？ それも難しいな。ああ、城を空けるのがという事ではない。パピヨンの地は国境付近だから。余が行くには問題がある」

「治安が悪いとか？」

「いや、余が行かなければ平和そのものの村だと思つぞ？」

陛下が王妃の部屋の扉に手をかけた。

へロルドさんや他の人達のように丁寧な様子でなくそれを開け放

ち、部屋へと足を踏み入れる。

私は入り口で待つ事にした。

理由は勿論、昨夜の侍女さん達との一件があるからだ。

陛下はそんな私を振り返り、些か不愉快そうに目を細めると、珍獣部屋から移動させた荷物の小山を漁りだした。

「私ってばよく判らないんですけど、国境付近に王が行くのって危険なんですか？」

「通常であればそういう訳ではない。今は時期も悪いが、パピヨンの名産地に接している国が問題なんだ。お前の前でも話しているから耳に残っていると思うが、今、攻め入っているサデヴァだからな」

「……攻め入ってるって。侵略って事ですか？ ちょぴつと気にはなっていたんですけど。でも、なんか陛下なら納得です。隙あらば暇つぶしに近隣諸国をゴンゴン滅ぼしてそう。じゃあ、陛下が下手に近づけば、もう人質にしてくれ、殺してくれって感じですね。陛下、狙われまくっちゃいますよね」

陛下が漁っていた荷物の小山から視線を上げ、心外そうに私を見た。

目的の物を探せたのか、一振りの剣を手に行している。

それは、大きい装飾が施されている柄頭の中央に、薔薇の形をしたものが嵌め込まれていた。

宝石でも使われているのか薔薇の部分だけが青く、妙に印象に残る剣だ。

「暇つぶし……流石にそれは無い、小娘。お前は余をなんだと思っているんだ。サデヴァの向こうはガルダティアでな」

「ややっ、ガルなんとか国と言えば、陛下の体に傷痕を残した忌々しい国じゃないですか！」

「忌々しい国な。まあ、今のところ表面上は白々しい友好を保っているから、外交として出るのなら多少の面倒は回避できる。だが、果物を食べに行くだけとなると恰好の餌食だ。故、余はパピヨンの地には行けない。お前も縁が無かったと諦める。噂がたった今とな

つては、お前も無事では済まん。この先、堕ちていくだけの国だが、ガルダトイアも救いようがない程の無能という訳ではない。情報くらはいは掴んでくるはずだ」

「パピヨーン！」

あんまりの事に私は犬の遠吠えのように叫んでみた。

生のパピヨンに何だかことん縁が無さそうなのに、残念無念の溜め息をつく。

パピヨンの加工食品である飴が結構美味しいから、生ならきつと瑞々しいプリップリの甘さを堪能できたに違いない。

そんな残念オーラを出している私を他所に、陛下は王妃の部屋を出ると、適当な様子で剣を腰に佩いた。

「準備、終わりました？」

「ああ。行くぞ」

両生類を殲滅しに。

言つて、地獄の極悪大魔王のような怖い笑みを陛下は見せた。

「お二方、どちらに？」

廊下側の扉を開けて陛下の部屋を出ると、私達はフェルテンさんに声をかけられた。

他に扉の両脇に四人の衛兵が居たけれど、護衛はどうやら彼だけのようだ。

今夜は陛下と兼用なのかな？と思ひながら、私は爽やかな挨拶をフェルテンさんにする事にする。

挨拶つて本当に大切だよ！

人間関係を円滑にするには、とつても有効な手段なんだよ？

「フェルテンさん、こんばんは！」

「フェルテン、肖像の間に行こうと思う」

「肖像の間ですか？ この時分に？ 何故です」

私の爽やかな挨拶は綺麗にスルーされた。

けれど、私は全くめげずに彼に再度話しかける。

「七不思議の解明ですよ！」

「七不思議、ですか」

フェルテンさんの暗褐色の瞳が私に向けられた。

「はい！ 今から、七不思議解明の為に、肖像の間に行くんです、つてそうだ！ 陛下は全てを知らないらしいんですけど、フェルテンさんは、ガイドさんのと肖像の間以外の七不思議を知ってますか？」

考えるように濃い灰色の眉をフェルテンさんは中央に動かす。

「そうですね、私も全てではないですが、他にふたつ程」

「おおおおお、他にはどん」

「言うな、フェルテン。小娘に知れた日には、その全てに付き合われる嫌な予感がする」

「そんな事しませんよ！」

「どうだかな。　　そういえばフェルテン、もうお前の兄から話は聞いたか？ 丁度王都の屋敷に滞在していたから用件を今日中に済ませたんだが」

「兄から話ですか？ いえ？」

陛下とフェルテンさんが、お互い不思議そうに少しだけ首を傾げた。

「そうなのか？ 余と話をした時に飛び上がらんばかりに喜んでたんだがな」

「喜ぶ？ 何の話をされたんです」

「何の話？ 決まっているだろう、お前の再婚の話だ」

「……………は？」

ピキンとフェルテンさんが固まった。

そんな彼を目の端に留めながら、私達は肖像の間へと足を進める。

前に陛下と私。

直ぐ後ろをフェルテンさんがついてくる形だ。

「お前が、ローラとロツテという使用人と再婚したがっていると小娘が言っていた」

陛下の言葉にフェルテンさんが驚愕の表情を見せた。

本当に申し上げたんですか、と彼の暗褐色の瞳が私に言っている。

「えっ、ちょ、ちよつとお待ちくだ」

「あ、陛下、身分差は解決しました？」

「ち、珍獣様?!」

「ああ。縁のある子爵家の養女にさせるらしい」

「あの、陛下、そ」

「良かったですね、フェルテンさん！ 身分差も解決しましたし、お兄様の了承も得ているようですし、なにより陛下公認ですし？」

「何をおっしゃ」

「お前の兄によると、余の誕生式典の少し後に予定するらしい。余が話をした今日から動くと申していたから、大まかな日程くらいは決まったのでは？ 二度と結婚はしないと宣言していたから、かなり意外だったが、これで伯爵家も安泰だろう。良かったな。おめでとう」

「いえ、陛」

「おめでとunggざいます、フェルテンさん！」

「お待ちくだ」

「フェルテン、非公式なものになるだろうが世話になっているし、祝いの品でも贈ろう。欲しい物を決めておけ」

「陛下、お聞」

「本当に良かったですね！ 陛下、めちやくちやお金持ちだから、普段躊躇っちゃうような超高額な物を希望した方がいいですよ！」

「お願」

「お前な。フェルテンはお前のように非常識な事は言わんだらうよ。だがフェルテン、くだらない遠慮はするな」

「……………」
フェルテンさんが、私たちの後ろで絶望的な顔をしていた。
たぶん陛下に此処まで言われてしまっただけ、もうフェルテンさんには覆せないのだろう。

なんてたつて陛下は腐っても大国で強国の王様だしね？

フェルテンさん、ごめんね！ でも私、貧乳同士、ローラとロツテには幸せになってもらいたいんだよ！

っていうか、ローラとロツテ、フェルテンさん攻略、うまくいったくない？

やっぱり貧乳だからかなあ？

よし！

私が『い・ち・ご』のモリモリ改造ブラ・スペシャルバージョンで、ふたりに魅力的な谷間をつくってあげるからね！

そしてモリモリ乳の二人に迫られるハーレムな幸福を、フェルテンさんに提供してあげるから！

だから三人で幸せな家庭を築いてね！

私の願いは、皆で仲良く幸せになる事だよ！

陛下、あとどれくらいで着きます？

「まだまだだ。今、出発したばかりだと思うが？」

「そうですけど、あれ、フェルテンさんがついてこないです。

え、まさかの職務放棄？」

存在を感じなかったので後ろを振り返ってみると、フェルテンさんが、既に遠い陛下の部屋から幾らも離れていないところで、呆然とした様子で立ち止まっていた。

私の言葉に陛下も後ろを振り向き、怪訝そうに眉を寄せる。

「ついて来ないな。構わん。放っておけ。再婚の喜びを噛みしめてでもいるのだろうよ」

そう言つと彼は前方に視線を戻した。

静かなお城の廊下に、陛下と私の足音だけが響く。

「そうかなあ？ でも護衛はどうするんですか？」

「居なくていい」

「え、だけど刺客とか居るんですよね？ 大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。そうそう頻繁に来られてたまるか。そこまで城内は危険ではない」

「ややややっ、でもでも、私ってば、今日、たくさん狙われましたけど？」

「デイルクさんが二十を越える数を数えたほど襲われましたが？！それって、そこまで危険じゃない、って言える数なの？！

「感覚が麻痺しちゃうくらいデフォルトの事だったら、私ってば今直ぐ逃げ出したいよ？！

「勿論、産まれ育った異世界日本にね！

「微温湯な平和万歳！ 平和ボケ大歓迎だよ！

「っていうか、つい先日、護衛も無く不用意に部屋を出たら危険、ってその口が言ってたっけ？！

「忘れたとは言わせないよ？！

「……まあ、その辺りはあまり 小娘、誰かに会うのも煩わしいから、隠し通路を使う。フェルテンもついてこないしな」

「言って、陛下は突然方向を変え、壁際に近づいた。」

「今、意図的に話しを逸らされたような？ まあ、いいか？」

「少々釈然としない思いを抱えながら、そんな彼を見ていると、陛下は柱と壁の繋ぎ目にある素晴らしい装飾の部分に手を差し込んだ。何かをしているようだ。」

「カコンカコンと謎の音がし出す。」

「……………」

「……………」

「カチツ、ガタリとした物音が廊下に響いた。」

「陛下が両の掌を壁につけて、それを押す。」

「すると。」

「か、隠し扉？！ 隠し扉ですか？！」

「此処は忍者屋敷なの？！

装飾の繋ぎ目を利用した、一見してそれと判らない扉の出現に、私は吃驚に思わず後ずさってしまふ。

隠し扉は押し扉式になっていて、空いた隙間から見える向こうは暗闇の世界が広がっていた。

「暗く狭いが、ここを通れば目的地に着く。半分とまではいかないが、それなりの時間短縮が出来るはずだ」

まともに行くのは気が滅入る、夜も遅いしな、と彼は出現した細く暗い道に一步入り、私に手を差し出した。

「これは一本道では無い。手を」

お前が道に迷えば白骨化は免れない、と縁起でも無い事を口にして、そろそろと近づいていった私の手を陛下は取る。

「は、はい。……手、離さないで下さいね。なんかお化けが出てきそうで怖いです」

噛まれると死んで、同類にされちゃうようなモンスターが中に居たらどうしよう！

そういうのはゲームの中だから許されるんだよ？！

私ってば、ゴハンを何杯も食べられるほど乙女ゲーは大好きだけど、クリーチャーを倒さないとクリア出来ないゲームは心底大嫌いなんだよね！

まあ、反射神経が鈍いから上手く敵が倒せない、っていう理由も大きいけどね？

でも、基本的に怖いのは苦手なんだよ！

そんな事を思っただけが止まってしまった私を、陛下は、馬鹿な事を、といった様子でクイツと引つ張った。

勢いでポストと彼の懐に入ってしまう。

「そんなものは居ない。例のあやしい地下は平気で、何故これが怖いんだ」

「だっ、だつてバイオハ」

その言葉を最後まで言う事は出来なかった。

隠し扉の内側の暗闇に、陛下が何の躊躇いも無く私を引き込んだ

からだ。

∴ 98 (後書き)

バイオハ

∴ バイオハザードの事

pcom.co.jp/bio|series/
公式サイト http://www.ca

暗闇に身を包まれて直ぐに、ガタン、ガチツという音が私の耳朶を打った。

隠し扉が閉まってしまったようで、目を全開に開いているのに、見事に何も見えない。

ここは京都清水寺の随求堂（ずいぐどう）か、つてくらい真の暗闇すぎて、陛下に腕をまわされて、進む方向へと促されているよ。うなのに、私は足をピクリとも動かす事が出来なかった。

「陛下、私つてば、まだ拝観料の百円を払っていません」
「拝観料？」

「はい。中三……えっと、十五歳の時、学校の修学旅行で京都に行つたんですけどね？ あ、京都は、うーんと、前に話した希代の陰陽師安部清明が大昔に住んでいた場所なんですけど、そこにある宗教施設に、胎内めぐりっていう、とある石を指して暗闇を歩いていくのがあるんです。これ、それに匹敵する暗闇で、えっと、」
「ごちゃごちゃと五月蠅いな、お前は。灯りを持って来なかったんだ、暗いのは仕方ない。通路の造りは把握しているから、余が促す通りにお前はただ歩けばよいだけだが？」

「でも、数珠が無いですよ？」
「じゅず？」

少タイラツとした感じの声音になってきた陛下の言葉を耳に入れながら、手先が届く方だけだけど、私はヒンヤリとする壁を触って数珠の有無を確認した。

随求堂の胎内めぐりは、壁に数珠が巡らされていて、それを頼りに随求石に向かって暗闇を進むようになってる。

「えっと、数珠は」

「いいから歩け。二百リズほど進んで、まずは右に曲がる」

二百リズ行く間に何度か左右両側に脇道があるが、二つ目の右側と四つ目の左側、続けて左左右左の脇道に誤って進むと趣味の悪い仕掛けが発動する、と続けて、陛下は私の体にまわしている腕の力を強めた。

だから、私はつんのめるように前へと足を踏み出してしまう。

暗闇すぎて怖くて、私は横から彼の体に両腕をまわし、ビッチリとくっつきながら進む事にした。

それによつて、陛下の服の装飾か何かが頬に当って地味に痛いし、腰に佩いている剣の鍔か柄頭がオナ力のあたりを微妙に圧迫するけれど、そこはグツと我慢するしかない。

偉いよね、私って！ 我慢の子だよね！

じゅ・く・じょ！ じゅ・く・じょ！

間違えた！

お・と・な！ お・と・な！

「歩きにくい」

「仕方ないじゃないですか！ 何にも見えないんですもん！ 私だって、痛いのが我慢して歩いてるんです！ っていうか、こんなにも見えないのに、陛下、さっき、二百リズ先を右って言ってましたけど、そもそも二百リズ先が判るんですか?!」

私には、二百リズを二百メートルって向こうの単位に変換しても、判る自信が全く無いよ?!

だって本当に何にも見えないからね！

「判るに決まっているだろう、空いている手を壁に伝えながら歩くな」

と、さも当然のように言い、歩く速度をあげた陛下に、私は直ぐに心の中で白旗をあげた。

忘れてた！

陛下ってば、大天才だったんだ！

きつと、常人には到底持ち得ない優れた距離感覚もあるに違いないよ！

異能力保持者万歳！ 誰かホルマリンを用意して！ 漬けてやる！

「陛下、」

「なんだ」

「全く見えなくても、大天才陛下が迷子になる事は無いっていうのは信用しているんですけどね？ でも、私の体にまわしている手は絶対に離さないで下さいね」

はぐれて置いていかれてもしたら、私、陛下が言ったように白骨化しちゃうこと確定だよ？

そんな有様が急速に頭に浮かんでしまつて、思わず弱弱しくなつてしまつた私に、陛下は力が抜けたような声音を出した。

「……もう、お前は暫く黙っている」

そう言われて、暗闇の中を陛下にくつつきながら素直に黙つて歩いて。

何も見えない中だから感覚が狂つてしまつているかもしれないけれど、私の体内時計で四十分は経つたんじゃないかと思われた頃だ。なんだかいろいろと限界がきてしまつた。

「へ……陛下」

「……」

「ねえ、陛下」

「……」

「へ・い・か！ お願いします、返事をして下さい！ 私つてば、暗闇すぎて気がおかしくなりそうです！」

「……なんだ」

相変わらずの暗闇の中、顔をギューツと押し付けている陛下の体から伝わる声の振動に、私はホツと安堵の息をついた。

それを励みに、彼に巻き付けている両腕の力を入れ直す。

「質問してもいいですか？」

「質問？」

「はい。二つあるんですけど、まずは一つめ。あの、この暗闇の通路、結構歩いてますけど、お城の中をこうも歩ける通路で分断するって、外の廊下を歩くのに支障とかないんですか？」

「まあ、あるな」

「やっぱり」

陛下は私にまわしている腕に、左方向へと進路を変える為の力を加えた。

促されるままに、私は足を進める。

もう私には、右にも左にも何回曲がったかなんて判らなかつた。けれど、しがみつく彼の足取りには寸分の迷いも無い。

「この通路には階段や梯子もあるが、所々、傾斜もしていて階数が変わるんだ。今回は、入ってから一度も階段を使用していないが、階数は何度かわわっている」

「そうなんですか？ え、今、何階？」

「一階だ」

言って、陛下は今度は右へと曲がる。

暗闇の通路に聞こえるのは、陛下と私の話し声と足音、衣擦れと僅かな剣の金属音。

そして、彼の静かな息遣いと安定した鼓動、それだけだ。

「この城は、とにかく造りが悪いんだ。目的地に行くのに、腹が立つ程の回り道をしないとならない事もある。城の者に言わせると迷路らしい。貴族から使用人まで、迷子になるわ、行方不明になるわで散々だ。原因は、誰も理解出来ない自分勝手な方針に基づいて、増築に増築を重ねた数代前の阿呆な王のせいなんだがな？」

過去に行けるものなら一発は殴りたいと言いながら、陛下はまた右に曲がる。

「陛下」

「なんだ。二つめの質問か？」

「違います、その前に要望です！ パピヨンの飴が欲しいです！ 私ってば、小腹が空いてきました！」

陛下が立ち止まった。

「夕食をあれだけ食べて、もう小腹が空いたなどと言うか」

そう呆れたように言うと、まわした腕をそのままに、彼はモソモソツと動いて、私の顔を探るようにして小瓶を口に当てた。

「開ける」

言われて素直に口を開けると、コロコロと数粒の飴が入ってくる。

「knnippaairnd」

「何を言っているのか判らない」

グイドさんの言っている事は判るのに、バルツァーさんが判ってくれた私の言葉が判らないって、どういう事?! と心の中で疑問に思っていると、陛下も飴を口に入れたようで、歯に当たった小さな音が頭上から聞こえた。

陛下は小瓶を懐に戻すような動作をすると、再び歩きだす。

「二つめの質問をしていいですか?」

口に数粒入っているパピヨンの飴を、器用に舌で避けながら、私は話しを再開する事にする。

本当に何も見えないこの状況で、無言なのは結構きついのだ。

「ああ」

「二つめは、今、陛下の腰にある剣の事なんですけどね? 陛下は、その剣を普段から使っていたりするんですか?」

「これか? いや?」

「ふうん、剣の柄頭が綺麗なのに勿体無いですね。なんで普段から使わないんですか? それ、青薔薇ですよ? 私の栄えある薔薇の逆ハ―構成団にピッタリの!」

最高すぎるよ!

青薔薇の剣だよ!

ねえねえ、そんな素敵な剣を私の団員達に持たせたらどうなっちゃうと思う?」

こっとなるんだよ!

『私は誓ったのです！ この青薔薇の剣にかけて貴女をお護りすると！』

『その気持ちは嬉しいわ！ でも、私は貴方に怪我をして欲しくないの！ ましてや今回の敵は、歴代最強と言われている又ラリヒヨンなのよ？！ 万が一という事があるわ！ 私は……私は貴方に死んで欲しくないの！』

『貴女は私が又ラリヒヨンに負けるとでもおっしゃるのですか！』

『そうは言っていないでしょう？！ でも、万が一といふ……あつ』

『私の熱い想いを受け取って頂けましたか？ 貴女のこの可

愛い唇で』

『なにを はう』

『ああ、貴女の可愛らしい胸が私の手を誘う。いけない胸だ』

『いやあ』

『貴女が私を心配して下さっているのはとても嬉しい。でも、私には、どうしても譲れないものがあるのです』

『そ……ひゃう……それ……あつ……それ、は？』

『 貴女を失いたくない』

『えつ……あん』

『貴女を失いたくないのです。なにもしなければ又ラリヒヨンに奪われ、貴女を失ってしまう。なれば、私の取るべき道はただひとつ。この青薔薇の剣にかけて貴女をお護りする、又ラリヒヨンと戦うだけなのです。どうかご理解下さい、私の愛する方。ああ、貴女の此処も私を誘っている』

『あつ、其処は……いやあ、らめえ！ 恥ずかし……きゃん』

『ああ、熱い』

『ひあ』

とね、こつこつ十八禁展開がドドドーンと待っている訳なのよ！
うはっ！

なにこれ最高！

美味しすぎるよね！

そんな妄想に私がウヒウヒしていると、陛下の脱力しきった声が私の耳に届いた。

「ああ……そういう方面からの質問か。お前の逆はー構成団な。確かにこれは青薔薇だが、まあ、不評だったんだ」

「不評？」

私は顔を上に向け、陛下の顔があると思われる方を見た。

周囲の状況は変わらないから引き続き何も見えないけれど、彼も此方に向いたのか、僅かに動いた空気が私の前髪を揺らす。

「ああ。使い難いんだ。お前の言う逆はー構成団にピツタリの柄頭が邪魔で。戦闘向きでは無いと言われた。乗りで作らせるのでは無かったとの反省品だな」

両生類退治には丁度良いかもしれんが、と陛下は言って、肩を竦めたのが動きで判った。

誰に言われたんですかと私が口を開く前に、陛下が続けて話します。

「青薔薇に興味があるのか？」

「当たり前です！ 私の栄えある薔薇の逆八ー構成団の団名の花ですし、そもそも向こうの世界では、品種の改良に改良を重ねて競い合っている価値有り有りの花ですからね！」

向こうの世界の「これって紫色じゃ？」と思わず突っ込んでしまいたくなる青薔薇たちを思い浮かべながら、私が勢いよく言うと、陛下がそれとは対照的に、実にあっさりとした様子で答えた。

「では、見てみるか？」

「見てみる？」

「ああ。青薔薇を。この城には青薔薇庭園がある」

何も見えない暗闇を歩き続ける中、陛下の思わぬ言葉に私のテンションがゴゴンと急上昇する。

「やややややややややっ、見たいです！ 超見たい！ 私ってば、青薔薇庭園に行きたいです！」

「そうか。では、明日にでも何処か時間を作って行くか。丁度、今が見頃だ。着いたぞ」

言つて、陛下は足を止め、左の方へと体を向けた。

当然、彼に腕をまわされている私は、その動きに引きずられる。

「お、おおおおおおおう、何事もなく！ え、仕掛けの発動は？」

「余が道を間違えるとも思つていたのか？」

「いえ、思つていませんでした！」

陛下つてば、大天才だからね！

私つてば、そこは信じていたよ！

心の底からね！

「間違えさえしなければ、この通路はある意味便利なんだ。

間違えさえしなければ、だがな」

言葉の後半部分に微妙な呆れの感情を滲ませながら、陛下は回していた腕を外し、彼の胴体に巻き付けていた私の手も外した。

その瞬間、私は体に震えが走る。

視界が全く利かない真の暗闇の中で、温もりが完全に消えたからだ。

「いやっ！ 離さないで下さいよ！ 怖い！」

「手が塞がつていては扉を開けられない。直ぐに開けるから大丈夫だ。目に気をつける」

時間帯的に灯りは点いていないと思うが一応な、と陛下は言つて、扉に向かったのだらう、私の周囲の空気が大きく動いた。

数秒して、カチリ、ガコツとした音が鳴る。

「開けるぞ」

その彼の言葉を合図に、長方形の細い光が、暗闇に慣れてしまった私の目に飛び込んでくる。

徐徐（じょじょ）に太くなつていく光に、私は目を細めた。

「眩しいです」

「結構な時間を暗闇の中に身を置いたからな。やはり灯りは

点いていない。月明かり程度だ。出るぞ、此処が肖像の間だ」

言いながら、扉を人一人分けて、陛下は光の向こうへと消えていく。

そして、彼が消えてしまった事に私が驚き、焦った時、光の中から伸びてきた手が、私を扉の向こうへと導いた。

∴ 99 (後書き)

清水寺 ∴ http://ja.wikipedia.org
/wiki/%E6%B8%85%E6%B0%B4%E5%AF
%BA

又ラリヒョン ∴ http://ja.wikipedia.
org/wiki/%E3%81%AC%E3%82%87%E3%82
%82%A%E3%81%B2%E3%82%87%E3%82
%93

どのくらいジツとしていただろう。

例え月明かり程度とはいえ、その光に目が慣れるまで、私はピクリとも動けずにいた。

そんな私の腕を、陛下は未だ掴んだままだ。

今なお視界の覚束無い私には、その温もりがとても有り難い。

「大丈夫か？」

「はい、なんとか」

少しずつ慣れてきた目を瞬かせて返事をする、陛下の手が外された。

「肖像の間だ。その名の通り、歴代の王と王妃の肖像画が飾っている。灯りは無くとも、今宵は満月だ。月明かりでなんとなくでも判るだろう？」

陛下の言葉に私はコシコシと目を擦り、淡い月光に照らされた肖像の間を見渡した。

「広いですね」

「そうか？ まあ、場所だけはあるからな」

肖像の間はドーム状で、学校の体育館を六つほど合わせたような広さだった。

どうやら私は、暗闇の隠し通路から肖像の間に飾られる一つの絵画の後ろから出てきたようだ。

肖像画は二つ一組で等間隔に飾られている。

現在の採光である淡い月光は上から射し込んでいて、高すぎて細かいところまではよく判らないけれど、装飾が施されている天井の中央に、ステンドグラスが嵌った丸い天窓が一つあった。

そして、それから幾分離れた下方に、透明度の高い硝子が嵌めこ

まれたアーチ型の小窓が幾つかある。

丸い月が小窓のひとつから姿を見せている。

月は向こうで見る満月よりも幾分大きく、改めてその事実を認識した私は、本当に異世界に居るのだという実感が急速に沸き起こってしまい、思わず体が硬直してしまった。

それに陛下が気づく。

「どうした？」

「いえ、何でもありません。あの、それよりですね、陛下、」
「なんだ」

私は、今し方に出てきた隠し通路と繋がっている肖像画を指し示した。

指した肖像画は、他の絵と同じで、二つ一組で飾られている。

あくまで月の明かりの元で見ているので、色の認識は微妙に間違っているかもしれないけれど、そこに描かれているのは、背中の中程まである金髪に紫色の瞳を持つ男性と、黒髪に緑色の瞳を持つ女性だった。

ていうか、これって。

「この超絶美形の男性の肖像画、陛下ですよな？ 髪、長かったんですか？」

「……………」

「で、隣の女性は王妃様？ 凄く美人です！ あ、でも、あれ？」

王妃様は今、居なかつたんじゃ？ あ、成程！ もしかしなくても離婚されたんですか？！ あー…じゃあ、離婚の理由は、陛下が超俺様甘党オコチャマな男だったからですね！ 野菜嫌い、トマト大嫌いなオコチャマっぷりに呆れちゃって、耐えられなくなっちゃったんだ、王妃様！」

可哀想！ と続けた私の言葉に、陛下の整った黄金の眉がピクリと動いた。

「何処をどう見れば此れが余だと、と言いたいところだが、己でも似すぎているのを否定できないからな」

「え、似すぎてっつて？」

不思議に思っつて首を傾げると、陛下が物凄く嫌そうな顔で眉間を揉み出した。

彼の澄んだ紫の瞳が、ひたと肖像画を見据える。

「先代の王、父上だ。頭の中に女の事しかなかった大馬鹿の」

「は？」

「そしてその隣は母上だ」

「え？」

「似ていないだろう？」

「いやいやいやいやいや、何を言っているんですか、へ・い・か！

陛下がお母様に似ていないというよりですね、」

私は目を見開きながら、陛下と男性の肖像画を見比べた。

「まんまじゃないですか、お父様に！ そっくりすぎです！ 陛下

がお母様に似ていないんじゃないんです、陛下とお父様が瓜二つすぎ

ます！ え、クローン？」

「くろーん？」

無感動な様子で私の言葉をただ復唱しながら、陛下は揉んでいた眉間から手を下ろした。

光源が月明かりだけだからか、普段より暗めに感じる紫の瞳が、説明を求める色を滲ませる。

「えっと、クローンは、生体のコピー、複写というか、単細胞生物の細胞分裂というか、そんなのです」

「……単細胞生物の細胞分裂な。そこまで酷い言い方をされたのは初めてだ」

「え、そうなんですか？」

「ああ」

陛下が肖像画と同じ黄金の髪を、やっていられないといった様子で掻き上げた。

それによって、サラサラと零れ落ちる髪が、幻想的な淡い月光にキラキラと煌めく。

「やっぱり、陛下は王様だから、皆、いろいろと遠慮しているんじゃないですか？ でも、本当にそっくりですね。陛下とお父様、髪の毛の長さしか違いませんもん」

「だから先程、言っただろう？ 似すぎている程、気持ち悪い事はない、と。 さて、この件は不快だから此処までとして、」

そう言いながら、陛下が不快なお父様の肖像画に背を向けた時だ。呻き声が聞こえた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……ねえ、陛下、うおうお、ぐおぐお聞こえます」

「……聞こえるな」

「七不思議通り、肖像画の呻き声ですかね？」

「そんな訳あるか。そもそも七不思議に不可思議な事など何も無い。必ず原因があるはずだ。昔に調べた七不思議のひとつもそうだった」

陛下は腕を組み、考える様子で肖像の間をぐるりと眺める。

「この部屋の造りは音が反響する。それが呻き声のように聞こえるだけだろう。 ついてこい」

組んでいた腕を解き、陛下が歩きだした。

言われた通り、私はポテポテとついていく。

うおうおぐおぐおな呻き声は聞こえ続けている。

隠し通路のように暗闇という訳では無かったからか、私は呻き声が肖像の間に響いていても、少しの怖さも感じる事はなかった。

陛下が居るというのもあるかもしれない。

「陛下、何処に行くんですか？」

「下だ。この肖像の間の下には地下室がひとつある」

「地下室？」

「ああ。其処に誰か居るのだろう。何もない部屋だから、何の為に居るのか判らんがな。しかし、知っている者が居たとは意外だ。あ

の部屋は余が小さい頃、デイルクとヴィルフリートと隠れて剣の練習をしていた時に使っていた部屋で、本当に何も無い」

陛下が足を止めた。

止めたのは、陛下のご両親の肖像画から四代遡った王様と王妃様の絵の前だ。

陛下は片膝をついて姿勢を低くし、肖像画の額縁の下方を持って、手前に引っ張るようにして横にスライドさせた。

すると、肖像画の後ろから隠し通路が出現する。

通路とはいっても、直ぐに下へと続く階段になっており、大人二人が横並びで歩けるくらいの幅があった。

「扉が開いているな」

「階段に幾つも燭台が置いてありますね。明るいです」

「……行くか。こうなると、呻き声の原因は両生類では無いだろうが、あの何もない部屋を誰かが使う理由が気にならないでもないからな」

陛下は肖像画をカチリと何かで固定すると、階段へと足を踏み出そうとする。

それを見て、私は慌てて彼の背中に縋りついた。

「なんだ、小娘」

「あのあの、陛下、飴ください、飴！」

「飴？」

「パピヨンの飴です！ 小腹が！」

「……もう満足するまで食べる」

背中に縋りつく私をベリツと引き剥がすと、陛下は懐から小瓶を取り出し、私に押しつけた。

そしてアーチ型の小窓の方に視線を向けて、何故かぼんやりと月を眺めだす。

「え、なに黄昏れているんですか？」

「……いや、別に。行くぞ。原因を確かめて、さっさと部屋に戻りたい」

「はい！ あ、陛下、飴、ありがとうございます！」

「己の体重を念頭に置く事は忘れるな」

「っ！」

そんな会話をしながら、陛下と私は地下へと下りていく。

そしてこの後すぐ、驚き桃の木な仰天ものの光景を私達は目にするのだ。

階段は、半円を描くようにして肖像の間の下へと続いていた。

特に問題なく二人で下りきると、十メートルくらい先に地下室がある。

地下室の扉は鉄製のようで、上部に覗き窓のようなものがあった。中に誰かが居るのが、覗き窓から漏れた明かりで判る。

陛下と私は一度も足を止めずにその扉を目指した。

「此処だと、うおうおぐおぐおな呻き声に聞こえませんか、陛下。

ちゃんと話し声に聞こえます。何を話しているかまでは、まだちょっと判りませんが」

「女の声だな。それも複数。何を喚いているんだ、この時分に、このような所で」

「なんか叫んでますよね？　ところで陛下、あの地下室、扉からして、なんだか牢屋というか監禁部屋みたいな雰囲気かプンプン出るんですけど……」

「此処は王城だからな？　怪しい部屋の一つや二つあったとしても何ら不思議ではない」

「おおぅ……怖いですね。あのあの、私には無関係な方向でお願いしますね？」

頼むよ！

投獄とか監禁とか、私の趣味趣向に全くそぐわないからね！

「それはお前次第だな」

「うわっ、なんとという鬼畜発言！」

「大声を出すな。気づかれる」

声を潜めてそう言っていると、陛下は立ち止った。

地下室の扉の前に着いたのだ。

扉を眼前にしてみると、高さが結構あり、覗き窓は陛下の目線の位置にある。

陛下は覗き窓から中を見て、怪訝そうに眉をひそめた。

「何をやっているんだ？」

「え、見たい！ 私も見たいです、へ・い・か！ そんな高い位置の覗き窓、背伸びしたって、飛んだって、私には届きません！」

七不思議の呻き声の原因が見てみたくて、私は両腕を彼の方に伸ばしてみた。

すると、陛下は意を酌んでくれて「仕方ないな」と言いながら、私を持ち上げてくれる。

抱っこしてくれたのだ。

落ちないように彼の首に腕を巻きつけ、頬にあたる陛下の髪に擦ったさを感じながら、私は覗き窓の向こうを見る。

不思議な光景だった。

陛下の言うようにその地下室は基本的に何も無いようで、家具らしきものは、中央に六人用の簡素なテーブルが一つ置いてあるだけだ。

テーブルの上には幾つか物が載っていて、それを、お揃いの紫色のフード付きマントを着た女の人達が囲んでいる。

フードは全員被っていない。

女の人の人数は、ザッと数えた感じで二十人くらいだ。

集団の中央に居る焦茶色の髪の女性が、テーブルの上から使用済みの包帯のような物を手に取った。

『第二百八十六回の集会始めの歌の後は、皆様お待ちかね、収穫物堪能の儀に移ります。今回は大収穫ですわよ？』

焦茶色の髪の女性がそう言うと、女性たちの絶叫が部屋中に響き渡った。

きゃあ、とか、いやーん、とか、そういうのだ。

「……………」

「……………」

焦茶色の髪の毛の女性が包帯の匂いを嗅いだ。

『陛下の香りがします。さあ、皆様もお嗅ぎになって？』
言いながら、包帯から顔を離れた焦茶色の髪の毛の女性は、右隣に立っていた女性にそれを手渡す。

渡された女性は、顔を真っ赤に、鼻の穴を大きくして、包帯に顔を埋めた。

「……ねね、陛下、今、あの人、陛下の香りって言いませんでしたか？」

「……」

焦茶色の髪の毛の女性が、今度はテーブルの上から皺クチャになったハンカチのようなものを手に取った。

そしてまた、その匂いを嗅ぐ。とても幸せそうに。

『陛下がおかみになったものですね。あの方の匂いと体液が染み込んでおられる至宝の一品です』

「……え、おかみになったって、鼻紙？ 体液って、もしかしくなくても鼻水の事ですか？」

「……」

『お風邪をお召になつていたのかもかもしれません。普段、このようには手に入りませんのに、今回は幾つもございましたわ』

焦茶色の髪の毛の女性は、この場には居ない誰かを案じるような表情で、今度は左手側の女性に鼻紙を渡した。

鼻紙を手にした女性は、興奮のあまり貧血でも起きたのか、そのまま後ろに倒れてしまう。

失神してしまったのだろう。

誰も後ろから支えなかったから、頭を床に強く打っていないかが心配だ。

「ねえ、陛下、私、気づいちゃったんですけど、あの包帯と鼻紙、もしかして陛下の寝台の横にあるゴミ箱の中身だったりし」

「その先を言わないでくれないか。寒気が」

私を抱っこしながら、陛下が、ぶるりと身を震わせた。

そんな彼を他所に、覗き窓の向こうは、包帯と鼻紙を順々に回し、皆で大興奮して騒いでいる。

「なんだか皆、楽しそうです。それはそれとして、うーん、私、あの焦茶色の髪の女の人、見た事があるような気がするんですけど、何処でだったかなあ……」

「ヴァーリア、なにを」

「あ、ヴァーリアさんっていうんですか、って思いだした！ 陛下付きの侍女さんだ！ ほら、陛下の命令でウオちゃんの盥に水を入れにいった人！」

「……………」

「で、陛下、ヴァーリアさん、陛下付きになったのは何時からですか？」

「ちょっとそこ、気になるよね？」

「……………言いたくない」

私の質問に、陛下は回答を拒否したけれど、続く彼女たちの会話から、彼とヴァーリアさんの関係が判った。

『ヴァーリア、貴女の収穫能力はいつも凄いですけれど、今回はもう素晴らしいですわ！ 陛下付きの侍女でないわたくしには、到底出来ない事ですもの！ 尊敬しますわ！』

『ありがとう。でも、暫くは難しくなりそうです。今回はリーザさん達に無理を言って屑籠の処理を任せてもらいましたけど、あまり良い顔をされなかったのですわ。次回の集会には用意できるかどうか…………』

『そうですね。陛下はお付きの侍女たちを全て遠ざけられてしまわれましたし』

『でも、貴女だけは何とかなりませんか、ヴァーリア。陛下の乳兄弟を従兄妹に持っているではないですか。従兄妹殿から取り成していただくとか』

『それは無理ですわ。従兄妹のハーラルトには以前、お前にはつい

ていけない、今後一切手を貸さないし、無関係でいよう、と言われ
てしまっておりませぬもの』

『まあ、何かなさいましたの？』

『臆病な男なのですわ。陛下の御髪を手に入れて欲しいとお願いし
ただけですのに』

『御髪は手に入りまして？』

『ええ、一本だけですけれど。両想い成就の呪い（まじない）には、
あと六百六十五本足りないと言ったら、そう言われたのですわ』

『ああ、幻の六六六呪いですわね！ それは残念ですわ！』

『ねえ、ところでヴァーリア、貴女、陛下の御手はお付きになつて
？』

『まさか！ そんな夢のような出来事がありましたら、同士の皆様
には直ぐに報告しますわ！』

『そう……やはり難しいですね。ヴァーリアは、わたくしたちと
違って、陛下の乳兄弟の従兄妹という美味しい立場だと思ってお
りましたのに』

『正直なところ、陛下の乳兄弟の従兄妹であるわたくしには、いつ
か何かしらの機会に恵まれるのではないかと思っておりましたわ。
でも、異世界から来られた立場に比べれば、ありふれた乳兄弟の従
兄妹なんて……』

『珍獣様ね』

『珍獣様、あの方は凄い方ですわ。一瞬で陛下を虜にされたのでし
ょう？』

『並々ならぬ御寵愛らしいですわね』

『野心のある貴族達は戦々恐々のようですよ？ 誰もお入れにな
ることの無かった御自身の御部屋で深く愛されておられるのですも
の。侍医殿も困っておられましたわ。御懷妊をされたか内密に確認
しろと圧力をかけられている、と』

『まあ、無粋な』

『まったくですわ。ああでも、陛下の御子でしたら、さぞ、お美し

いのでございましょうね！ 先代様と陛下の事もございませぬもの、男児でしたら、それはもう素敵な王子にお成りになりますわ！』

『そうですね！ そして、わたくしたちはその年下の殿下と、許されざる恋に落ちるのですわ！ なんて素敵！』

『それは少々年が離れすぎておりませんか？ 犯罪に近いですわ。それはそうと、異世界人というのは羨ましいですわよね』

『そうですね。その立場があれば、あの陛下の御寵愛を得られる可能性があるので。美しい姫君達をお見慣れになっておられる陛下には、強い印象を与える事の出来る“異世界から来た”というのは重要な点ですわ』

『わたくし、異世界に行きたいですわ！ そうすれば、陛下のような殿方と結ばれる可能性が高いという事ですわよね？ 珍獣様のよー！』

『そうですね！ ああ、行きたい！ 珍獣様の世界に！ そして、陛下のように比類無き美を有する殿方と結婚するのですわ！』

『いいですわね、それ！』

『ねえ、皆様、わたくし思ったのですけれど、異世界に行って、行った先の王族と恋に落ちるお話って需要があるかしら？』

『需要？ どういう意味ですか？』

『もし、そういったお話をご覧になりたい方がいるのなら、わたくし、小説を書いてみようかと思いましたが。だって皆様、現実を忘れて夢をみたい時はありますでしょうか？』

『それ、読みたいですわ！ ねえ、貴女、是非、書いてらっしゃいよー！』

『わたくし、出来あがったら買ってもいいですわよ！』

『皆様、良い事を思いつきましたわ！ そのお話、紫水晶を愛でる会の会報に載せませんか？』

『いいですわね！ ああ、わたくし、今からとても楽しみですわ！』

うつとりとした表情で熱く語り合っている女性達の熱気と意気込

みが、覗き窓からムンムンに私達に伝わってくる。

そのエネルギーがただただ凄すぎて、中を覗いてから一度も、私は地下室の中から目を離せないでいた。

「陛下、私つてば、異世界トリップもののお話が誕生する瞬間を見た気がします。ちょっと感動です」

「……………」

「でも、私の世界に来て、彼女達の求める好条件の男の人って居るかなあ？ 陛下が基準でしょ？ 既に人類の枠を超越している陛下級の超絶美形は、地球上に存在しないと思うんですけど……………。あ、某モナコ公国のアンドレア王子とか？ 彼、独身かなあ？」

ちなみに私の母国日本の皇子様はお二方とも既婚者です、と付け加えていると、ヴァーリアさんが「皆様、時間が押してきましたわ。収穫の儀を続けても宜しいかしら？ 今回の目玉といきますわ。皆様、とくとご堪能あれ！ わたくし達の陛下、太陽と黄金の紫水晶王子様の」 とテーブルの上から何かを手を取った。

「今度は何ですかね、陛下。あ、太陽と黄金の紫水晶王子様つて、陛下の事ですからね？ ローラとロツテに教えてもらいました」

「……………」

「ん？ 小さな棒が三本？」

「……………」

「え、赤い印が付いているって、もしかしなくてもヴィルフリートさんが王様ゲームの為につけた印？」

「……………」

「ひえーひえひえひえひえひえひえひえひええええ、ねえ、あれ、陛下、あれつてば、ポップキャンディー、陛下の机の中に入ってた飴の棒ですよ！ あ、舐めた！ ヴァーリアさん、ベロンつて舐めました！ 次の女の人は吸いましたよ！ しゃぶつて、ジュージュー吸いました、今！」

「……………」

「おおおおおお、悪い事をしました！ あの棒は、私とデイ

ルクさんとヴィルフリートさんの唾液しかついていません！ それにさっきの鼻紙と包帯も私が使ったものですし！ ヴァーリアさん、私が包帯していた姿、見なかったのかなあ？ ややつ、なんだか凄いい罪悪感が！」

「……………」

「陛下、もうこれってばさ、愛の儀式ですよ？ 陛下に捧げる愛の儀式。熱烈で濃厚で粘着的な？ 向こうの世界ではストーカー的ともいうんですけど、凄すぎです。私も流石に、ちよっぴり引きました、って陛下？ どうしたんですか？ あれ？ 具合悪いんですか？ ややつ、大丈夫？」

そういえば陛下が静かだなあ、と気がついて、ようやく私が彼女達から彼に視線を戻すと、陛下の顔色が頗る悪かった。

もう真っ青だ。

私と同様、彼女達から視線を外した陛下は、煌めく黄金の睫毛を伏せながら扉にトンと背中をつける。

そして、力が抜けたように、私をスルリと下におろした。

「……小娘、気持ち悪い。……………吐きそうだ」

陛下と出会って数日の中で、一番弱弱しい声だった。

ヒットポイントがマイナスをいってしまったてるかもしれない。

大変だ！

教会に、教会に早く連れて行かないと！

“いきかえらせる”のにお金、幾らかかるかな？！

「陛下、お部屋に帰ります？ 私を杖代わりに体重をかけてもいいですから、肩に手を置いて下さい。身長差がありますけど、私っつてば、全力で支えますから。とにかく戻りましょうね？ いい子だからね？」

本当に気持ち悪そうな顔をしている陛下を扉から起こして、彼の背中をよしよしと私は撫でてあげた。

そうこうしているうちに、愛の儀式の締めなのか、陛下に追い打ちをかけるような賛美の歌が地下室から聞こえだす。

『あーあー、陛下あ、わたくし達のお、麗しき陛下あ、あーあー、陛下あ、綺麗な陛下あ、素敵な陛下ああ、太陽とお、黄金のおお、紫水晶う、王子様ああ、あーあー、陛下あ、愛してるう、愛してるう、抱きしめてえ、陛下あ』

駄目だ！

一刻も早くこの場を離れないと、陛下がマジで死んじゃう！

そう思い、私は急いで彼の手を肩に乗せ、彼女達に気づかれないうちに、よいせよいせと元来た道を引き返す。

下りてきた階段を上り、肖像の間を通過して。

具合の悪そうな陛下に無理矢理指示を仰ぎながら、暗闇の隠し通路を通って彼の部屋をひたすら目指して。

何とか辿り着いた頃には、陛下は酷くぐったりとしていた。

とりあえず私は、そんな彼を豪華応接セットのソファーに座らせる。

「陛下、水、飲みます？」

「……いない」

何も入りそうにない、と力無く言って、陛下は座る姿勢を保つのも苦しそうで、前屈みになった。

その様子は、いくら極悪大魔王の陛下と言えども可哀想すぎた。

「大丈夫ですか？」

「……」

「気持ち悪いの、全然治まらない？」

「……………ああ」

「じゃあ、寝台で寝た方が、」

「いや、眠れそうにない」

それらの言葉を聞き、そうですか、と私は陛下の隣に腰を下ろした。

地下室の前でしたように、背中を何度も擦ってあげる。

暫くそうしてあげた後、私は彼の黄金の頭を抱きこむようにして、自分の方へと倒した。

「陛下、もう少し頭をこつちに　　そう、で、足はこつち
そうです」

彼に姿勢を変えてもらうと、黄金のサラサラストレートな髪が私の膝の上に広がった。

陛下に横になってもらったのだ。

膝の上の黄金を、気持ちが悪く落ちて着くように、私は優しく撫でたり梳いたりしてあげる。

「気分が良くなるまで膝枕してあげます。私ってば、腿にもたくさんお肉が付いているから、枕としては最高だと思えますよ？　なんなら子守唄も歌ってあ・げ・ま・す・ね！」

「……子守唄はいい。　　柔らかいな」
「でしよう？」

こうして私達は、夜が明けるのを待った。

そして、膝枕をしながらポツリポツリと交わした会話で、気分転換も兼ねて、早朝に青薔薇庭園に行く事が決まった。

∴ 101 (後書き)

某モナコ公国アンドレア王子 ∴ 『モナコ』 『王子』 『アン
ドレア』等で検索をかけると彼の画像がかります

陛下の気分がなかなか浮上しなくて、あれからずっとソファの上でダラダラと過ごしていた私達は、陽が昇ると直ぐに、青薔薇庭園へと向かう為の準備を開始した。

準備とはいっても、七不思議探検の時に服は着替えているから、アニに用意してもらった肩掛けの鞆にウオちゃんを突っ込むだけだ。連れていくのに陛下は嫌そうな顔をしたけれど、ウオちゃんにも爽やかな朝日を浴びさせてあげたい。

彼の気持ちを無視して、ウオちゃん入りの鞆を私が肩に掛けると、諦めたような顔をしながら、陛下は部屋の扉を開けた。

扉の外には衛兵さん達が立っていた。

しかし、見知った護衛の人達は居ない。

それに陛下が特に気にした素振りを見せなかったので、私は一応聞いてみる事にする。

「ねね、陛下、護衛の人が誰も居ないんですけど、いいんですか？ デイルクさんとか、グイードさんとか、フェルテンさんとか、他の人とか」

「よい。今宵はフェルテンだったはずだが、あれの事はもう放っておけ。それに行き先は青薔薇庭園だ。問題ない」

「そうなんですか？ 陛下にそう言われてしまえば、そうですか？ しかし私は言えませんけど」

「そのうち、デイルクあたりが来るだろう。刺客について気にしているのなら、大丈夫だ。お前への刺客は、余が傍に居る時には来ないだろう。それに世の中、目に見えるものだけが全てではないしな？」

そう言って、陛下がスタスタと歩いていってしまうので、私は早歩きでついていく。

前にも思ったけど、コンパスが違っただよね！ コンパスの長さが！

それはもう致命的にね！

「青薔薇庭園って遠いんですか？ イェルクさんのところみたい」

「いや、直ぐ其処だ。部屋からは死角で見えないがな」

「おお、じゃあ、もう直ぐ異世界の青薔薇が見られるんですね！
なんだかワクワクします！ 青さはどのくらいだろう！ 向こうの世界の青薔薇って、灰色っぽかったり、紫色っぽかったりするんですよ！」

「此方の青薔薇は、青は青だと言えんな。まあ、そう大したものではないが、見て気に入ったのなら世話をしている者に一声かけてやってくれ。あの庭園は一人の男で維持されているようなものだから」

手摺の装飾が見事な豪華仕様の階段に辿り着くと、陛下は「此方だ」と言っただりていった。

少しでも横になったのが良かったのだろう、未だ本調子では無さそうだったが、足取りはシツカリしている。

「なんで一人なんですか？ 規模が小さいとか？」

「いや？ そこそこの広さはあると思うが？」

「え、じゃあ、予算削減とか？」

「無駄なところに割くつもりは毛頭無いが、庭師の数を削らなくてはならない程、この国は金には困っていない。そうではなく、あれがそう望んだ」

「あれ？」

「その庭師の男だ。 此処から外へ出るぞ」

そう言っ私を肩越しに振り向いた陛下は、控えていた使用人らの手によって外へと開かれた扉をくぐる。

庭園の爽やかな緑を背景に、柔らかな朝の陽光に黄金の髪を煌め

かせた陛下は、とても美しくて幻想的だったけれど、何故か物淋しく感じられもして、私は不思議に思って首を傾げた。

お城を出て直ぐに、青薔薇庭園へは五百リズほど歩けば着くと、陛下が教えてくれた。

五百リズがどのくらいの距離なのか私には判らなかつたけれど、脳内で勝手に五百メートルに変換してみる。

五百メートルならそう遠くないなと一先ず安堵して、私は外の眩しさに目を細める。

「……眠いですね。朝日が目に沁みます」

「余も眠さはあるんだが、今はそれが睡眠に繋がりそうもない。

もう、散々だ。やってられない」

後半を吐き捨てるように言った陛下は、庭園の新鮮な空気で、体内の澱を排出するかのように軽く深呼吸をする。

「うーん、確かに、陛下に捧げる愛の儀式は凄かったですよね、いろいろと」

「……………」

「でも、私の言った通りだったでしょ？ 乙女の妄想は凄いつて。まあ、今回の場合は、それを発展させた行動力というか活動力ですけど」

「……身に沁みて理解した。あの会合は絶対に止めさせる。質の悪い新興宗教のようで不気味だし気持ち悪い。良くなってきたとはいえ、寒気と吐き気が未だ完全には治まらんしな」

「え、それは駄目でしょう」

「何故？」

前を向いて足を進めていた陛下が、早歩きしている隣の私に視線を向けてきた。

「乙女の妄想とか活動を阻害すると碌（ろく）な事になりませんか？ 陛下と自分、男と女の健全な妄想の元に活動しているんだし、いいじゃないですか。ヴァーリアさんにゴミ箱を漁られるのを阻止するくらいにしておいた方がいいです。そういうのを頭から押えつけると、下手するとボーイズラブに発展しますよ？ やおいともいいますけど」

「ぼーいずらぶ？ やおい？」

意味の判らない単語の発生に、陛下が怪訝そうに眉を寄せた。

「はい。男同士の恋愛や肉体関係を意味しているんですけど、ヤオイは、山なしオチなし意味なし、でヤオイです。陛下なんてもう餌確定ですね。どっちが受け、攻めとか議論されちゃったりして！

あ、受けは女性的というか受動的役割の方で、攻めは男性的、能動的役割の方を言います。陛下の場合、確実に相手として名前が挙がるのは、ヴィルフリートさんとルドルフさんでしょうね。ディルクさんとグイードさんは、彼女達にどう認識されているのか私には判らないので何とも言えないんですけど、ヘロルドさんも有りなんじゃないかなあ？」

ちなみに陛下が総受けか総攻めかの私の予想は可哀想だから言わないでおきますね、と付け加えると、陛下がうんざりしたような顔をした。

「つくづく嫌になる」

「何がですか？」

「この顔だ」

「は？ 顔？」

「昔から嫌で堪らないんだ。この顔のせいでどれだけの被害を被っていると思う、小娘。余はバルツァーのような容姿でこの世に生をうけたかった。あれくらいが丁度よい。普通で」

バルツァーが心底羨ましい、と言って、陛下は再び前を向いた。

「それってかなり贅沢じゃ？ それにバルツアーさんに物凄く失礼な感じもします」

「お前も同じような事を口にしたらどう？」

「そうでしたっけ？」

「害獣除けの小瓶の話聞いていた時だ。『あーやってらんない。私の同類はバルツアーさんだけです。彼なら私の気持ち判ってくれると思いますもん』とな」

「い、言ったような気がします！ っていうか、もう凄まじい記憶能力ですよ、陛下！ 私ってば、ちよっぴり鳥肌が立つちゃいました！」

「……………」

「まあでもさ、陛下、人生、開き直りも大切ですよ？」

「開き直り？ どういう意味だ」

「陛下のお父様ですよ。御手本にしてみてもどうですか？ お父様のように、全てを性欲のままに解放してしまえばいいんです。女好きになって、来る者拒まずで。そうすれば、その超絶美形に群がる女の人達に対して、何にも思わなくなると思うんですよ」

その言葉に、陛下が心底嫌そうな顔をした。

「阿呆な事を。あれはただの大馬鹿だぞ？ 女の事だけではない、国の危機にも気づかなかった愚かな男だ」

「国の危機？」

「ああ。余が小さかった頃の話だ。小娘、前をしてみる。あれが青薔薇庭園だ」

陛下がスツと左腕を上げて指し示した先に、鮮やかな青が一面に広がる一角があった。

青薔薇だ。

太陽の光に煌めく深い海の青が見事に咲いている。

庭園は、規則正しく配置された薔薇の木で、小道やアーチが造られていて、遙か先にだが、中央付近にガゼボらしきものも見えた。

「本当に青色なんですね、陛下！ 凄い！ 青薔薇だ！」

「だから、青は青だとしか言えないと言っただろう？」

「はい！ 青でした！ 向こうの世界の青薔薇とは全然違います！ それにこの青薔薇庭園、広そうですね！ 東京ドーム一個分は軽く超えてそうですね！」

「とつきよーどーむ？」

「あ、えっと、異世界日本で広さを例える時によく使われる方法なんですけど、聞いたところで、よく判っていない人が多いと思います」

「無駄な例え方だな」

「私もそう思います」

そこまで陛下と話しをした時、青薔薇庭園の入り口と思われるアーチの一つに辿り着いた。

陛下と私が一旦足を止めると、一人の男の人が近づいてくる。

青薔薇庭園の庭師だろう。

年の頃は陛下より少し年上そうで、短い髪は褐色、瞳は青薔薇色。容姿は可もなく不可もなくな、寡黙そうな雰囲気のある男の人だ。

彼は私達の近くまで来ると、作業中だったのか、手にしていた剪定鋏を作業服のポケットに入れ、陛下に腰を折った。

「これに青薔薇を見せようと思う。お前の勧めるところへ案内を」

「畏まりました。どうぞ此方へ」

男の人は姿勢を戻すと、私たちにアーチを潜るよう促す。

青薔薇は蔓薔薇ではないようで、アーチには白薔薇が使われていた。

純白に輝くその白い薔薇を見上げながら、私は陛下と共に先導する庭師の後をついていく。

「庭師さんって、いつも朝、早いですか？」

「そうですね、だいたい陽が昇るのと同時に仕事を始めます」

「大変なお仕事ですね！ 陛下が普段なら寝ている時間から仕事をしているって！」

「お前など、その仕事すらしていないだろうが」

「私ってば女子高生ですよ?! 学生である間は仕事をしなくてもいいんです!」

「そうなのか? だが昨夜、翻訳の仕事が出来たな?」

「忘れてました!」

完全なる忘却の彼方だったよ!

心の底から気の進まない作業だからね!

前を歩く庭師の人が、クスリと控えめに笑った。

「何を笑っている、ベルント」

「あ、ベルントさんっていうんですか? 私、珍獣二号と言います

! 宜しく願います!」

「いえ、お噂通りだと思ひまして」

陛下にそう言つて、此方こそ宜しくお願い致します、と続けて私に言つと、ベルントさんは左に曲がった。

陛下も私も、彼の案内する通りに左に曲がる。

それから各々青薔薇を見たりしながら、特に何も話すでもなくベルントさんの目的地に向かつて進んでいった。

そして私の体内時計で五分くらい経つた頃、「着きました。今、一番、青薔薇が美しく咲いている場所でございます」とベルントさんが立ち止まる。

場を譲る為か彼は数歩退き、陛下と私の視界を遮らないだろうところまで膝を折つた。

私の目に入ったのは、見事な青の乱舞だった。

花卉や葉のにつく朝の露が陽の光に燦然と輝き、まるで海の中から空を眺めているかのようだ。

あまりの素晴らしさに私は大興奮して、一番近くにある青薔薇に断りもなく手を伸ばした。

「私ってば感動しました! 向こうの世界には無い完璧な青薔薇が、こんなにも咲き乱れているなんて! まるで海の中にいるみたいですよ! こんな素敵なお薔薇を育てているなんて凄いです、ベルント

さん！ 尊敬です！」

「勿体無きお言葉ありがとうございます」

「この青薔薇が向こうの世界に渡ったら、珍しすぎて超貴重種になりそう！」

「この世界でも青薔薇は珍しいですよ。これほどまでに咲き誇らせているのは王の青薔薇庭園だけです。気候風土を選び、病気や害虫にも脆弱で手入れが難しく、トリエスの一部地域にのみ存在する花でございますので」

「そうなんですか？ じゃあ、この世界でも青薔薇って高く売れたりします？ 向こうの世界にこの青薔薇を持っていった日には、ぼったくり価格で商売できること請け合いですよ！ 苗なんて渡しません！ 一輪幾らでぼったくるんです！」

当然だよね！

向こうの世界にも、青薔薇一輪に何万円も何十万円も払える大金持ちは居るからね！

我が家には到底無理だけど！

脳内で諭吉を乱舞させながら、鼻息荒く青薔薇の花弁を私が撫でていると、陛下が呆れたような声を出した。

「お前はいつもそういう話だな」

「だって、お金が無いと生活できないじゃないですか！ 欲しい物だって買えないんですよ？ 私ってば、異世界日本でいっつも一葉ちゃんに泣かされていたんですから！ ちなみに一葉ちゃんは、トリエス銀貨半分の価値の紙幣の事ですからね！」

先日見た夢で一葉ちゃんに殴られたのを私は思い出し、思わず触っていた青薔薇を引きちぎってしまった。

一葉ちゃんめ！ 一葉ちゃんめ！ 一葉ちゃんめえ！

しかし薔薇には棘がある。

それをスツカリ脳内から欠落させていた私は、当然、棘が刺さり、指から血を流す事になる。

「……痛っ」

私は流れ出た血を舐めた。

口内に鉄の不快感がジワリと広がる。

そこでふと向こうの世界にあるエディブルローズの存在を私は思い出し、特に深く考えもせず、青薔薇の花弁を一枚口の中に入れた。

「うーん、不味い！ 薔薇のいい香りはしますが、苦味がちょっと強すぎます！ 食用としては難しいですね、実に惜しい！」

綺麗な青薔薇なのに、と味の再確認の為に再び花弁をモシヤモシヤと食べる私の行為に、陛下とベルントさんが驚いたような表情をみせた。

「お前は何をしているんだ」

「いえね？ 血を舐めて口の中が鉄臭かったから、口直しになるかなあ、と思ってる」

「阿呆か。だが……そうだな、小娘、」

陛下がスツと目を細めた。

「何ですか？」

「お前に、ある神話の一遍を教えよう」

「神話？」

「ああ」

青薔薇の棘を刺して、未だ血が滲み出ている私の手を陛下は取った。

血が付くのも構わずに、傷ついた私の指を撫でるように触ってくる。

それによつてピリリと痛みが走るのに、私は眉をしかめながら、

彼の細められた紫の瞳に視線を向けた。

「この大陸に歴史だけは長い最古の国があると教えただろう？」

「ガルなんとか国の事ですよね？」

「ガルダトイア神王国だ。その国で昔から伝わる神話に、青薔薇の話がある」

「青薔薇の話、ですか？」

「ああ。遙か昔、世界がまだ神々の時代だった頃の話だ。神々の住まいがあったとされるガルダトイアの地に、ひとりの人間の娘が住んでいた。その娘は、容姿も器量も平凡であったが、内なる精神は清らかに澄み、輝きを放っていた。その輝きを見る事が出来た神々は、娘を大層慈しみ、森の奥深くにある神殿に大事に大切に閉じ込めた。娘を全ての穢れや悪しきものから遠ざける為に」

「へー……。その娘的には余計な御世話のような気がしますけど、それです？」

「余計な世話な。お前はそういう思考の持ち主な訳だ」

陛下は私の手を離して顎を取り、上にクイツと持ち上げた。

綺麗な紫の瞳が、私の瞳の奥底を覗き込むように合わせられる。

「同じ頃、不浄の地にひとりの悪しき男が居た。誰からも愛されずに孤独で、醜く、神々からも人間からも忌み嫌われていた男だった。その男は神に非ず、人に非ず、血を糧に卑しく生き続ける魔の存在だと蔑まれていた。だが、悪しき男も娘の精神の輝きを見る事ができた。そして己には無い、清らかさに焦がれた。悪しき男は娘を欲したが、神々に護られている存在には近づけない。故、不浄の地のみに存在し、唯一咲く花、美しき青薔薇を娘に贈った。十三本の青薔薇を。地獄のみに生息する青い鳥に託して。娘が青薔薇に触れ、棘で血を流し穢れるように。花卉を口に入れ、不浄が娘を侵すように。穢れ、侵され、神々の地から出ざるを得ない状況を作り、悪しき男の居る不浄の地に赴くように祈りを、呪いを籠めた」

陛下が空いている方の手で、手近にあった青薔薇を筆り取った。

その手を開き、柔らかい微風に乗せて、私の頭上から青い花卉を散らす。

花卉は私の頬を撫でながら、ひらひらと蝶が舞うように美しく、そして、どこか寂しげに落ちていった。

「娘は悪しき男の思惑通り、初めて目にする青薔薇に好奇心から触れた。棘を指に刺して血を流し、舐めて、愚かにも口直しにと花卉を一枚口に入れた。呪いの成就だ。穢れ、侵された娘を神々は放出

せざるを得なくなつた。娘は神々に護られた神殿から追放され、悪しき男の待つ不浄の地へ行かざるを得なくなつた」

陛下は目配せをして、控えていたベルントさんに青薔薇を一輪切り取らせた。

ベルントさんは慣れた仕事で手早く棘を取り去り、陛下に手渡す。その青薔薇を片手だけで器用に陛下は私の横髪に絡ませて、耳の上に差した。

「それで？」

「それでは？」

「続きですよ。娘とその悪しき男はその後どうなつたんですか？

不幸才子ですか？ それとも二人仲良く幸せに？」

「神話はそこまでだ。不浄の地にのみ咲く青薔薇は、娘を神殿から追放させた忌々しい地獄の青薔薇だとも言いたいのだろう。この世界で青薔薇とは、地獄に咲く唯一の花とされているんだ。その流れでいくと、娘は幸せにはならなかつたのでは？ 学者による神話の解釈もそうだったと思うが」

「納得いきません！」

「どの辺が？」

「だってさ、へ・い・か！ なんて悪しき男のところに行くのが不幸だつて決めつけちゃうんですか？ 判つてない！ 全つ然判つてないです！」

「余はお前の言っている事の方が判らない、相変わらず」

「あのですね、異世界日本の乙女達や腐女子達なら、そんなつまらない浅い解釈なんて絶対にしないです！ 悪が不幸とか絶対嘘！

神々に護られただけの、そんな退屈な生活なんて糞喰らえですよ！

確かにね？ 神様萌えとかありますよ？ 白馬の王子様萌えもありません！ ちなみに萌えは、好意や愛着、情熱や欲望、保護欲とか庇護欲とか、まあ、そういう諸々のものをひっくりくるめた意味です！ 神様萌えも白馬の王子様萌えも、萌えの上級者には、そんなものじゃ全然物足りないんですよ！ ダークサイド、えっと、一般に

暗黒面と言われているんですが、私なんて、そこに落ちちゃった男は大歓迎です！ 神様や白馬の王子様よりも、影のある男の方が萌え萌えですよ！ 誰もがキヤーキヤー言っている男なんて、絶対に浮気します！ 断言できます！ 現実には甘くないんです！ この世に聖人君子なんて居ません！ それよりもですね、影があつて、孤独で、ついでに冷酷で残酷で、でも私にだけは優しい？なんて属性の悪しき男だったら、私だったら鼻血モノです！ だってそんな可愛い男が私の独占状態じゃないですか！ 私がその娘だったら、すごい幸せです！ 血が糧だつていうんだつたら、モリモリ食べて栄養をつけて、増産しまくった私の血をどんどん飲ませてあげます！ んでもって、自分の幸せを悪しき男に分けてあげて、一緒に楽しくラヴラヴ甘々イチヤイチヤのベッタベタに暮らしますよ！ ンでんで、今まで散々悪しき男に悲しい思いをさせてきた神々と人間達に復讐です！ 私を神殿という名の鳥籠に閉じ込めた神々と、悪しき男を排斥していた人間達を私が進んで殲滅します！ 神殿を破壊し、人間達の住まいは焼き打ちに、泉はボコボコと何かが湧き出る紫色の毒沼に変え、川を溶岩に、

「判った、小娘」

「ンでんで、勇者登場に備えて洞窟に魔物を放ち、宝箱を用意して、要所に魔將軍を配置」

「判った。判ったから、もうよい。お前の発想の方向性にはいつも驚かされるが、だが、そういうのも悪くないと余は思う。小

娘」

「お」

突然、陛下が私の額にフワリと唇を落とした。

同時に下りてきた黄金サラサラストレートな髪が、私の顔に触れ、擦ったさを覚えて直ぐに彼の唇が離れていく。

額に感じた熱が消えていくのに、僅かな喪失感と、それを遥かに上回る驚きが私の心を占める。

「え、なんで？」

「青薔薇の洗礼を。トリエスによく来た」

「は？」

「まあ、それだけだ」

陛下が肩を竦めた。

顎に当てられていた手と、青薔薇を髪に差した手が、自然な動きで私の背中にまわる。

そして軽く引き寄せられたのに、私もなんとなく陛下の背中に腕をまわした。

「うーん、良く判りませんが、そうそう陛下」

「なんだ」

「陛下には言っていなかったような気がするんですけど、私の栄えある薔薇の逆ハー構成団のブルーヘヴン、青薔薇の品種名なんですけどね？」

「ああ」

「ブルーヘヴンは、向こうの世界の英語って言う言語なんですけど、青い天国っていう意味ですからね」

「……………」

「天国の薔薇でもあり、地獄の薔薇でもある。素敵なお花ですよ、青薔薇って。そう思いませんか？」

「そうだな」

陛下が私にまわしていた腕を少しだけ緩めた。

「小娘、話が長くなった。朝食にしよう」

「おおおおお！ 私ってば、オナカが空いているんですよ、もうとつくに！ ペコペコ過ぎて六キロ、カラフェス三個分も痩せちゃいました！」

「嘘をつくな。減るところか、むしろ増えているだろう？」

「え」

「余は撤回していないが？」

「何をですか？」

「お前が余の誕生式典で、ろーすとびーふを食べる事の出来る条件

だ」

「いやいやいやいやつ、何を言っているんですか、へ・い・か！」

またまたあ、と私は笑顔で誤魔化してみたけれど、陛下はそれを鼻でふんと笑い、ベルントさんに「此処で朝食をとるとへロルドに」と言いつける。

ベルントさんは直ぐさま立ち上がって行こうとしたけれど、ふと何かを思い出したのか動きを止めた。

「珍獣様」

「はい」

「青薔薇を不用意に口にするのは今後お止め下さい」

「え？ なんですですか？」

「結構強い薬剤をかけておりますので、お体に障ると思われます。

では」

苦笑気味にそう言って、一礼をして直ぐにベルントさんは去って行ってしまふ。

そんな彼の言葉に私が軽くショックを受けていると、陛下は「どうしようもないな」と言って溜め息をついた。

∴ 102 (後書き)

エディブルローズ ∴ 食用薔薇のこと

ベルントさんが去って、私の体内時計で一時間くらい経った頃だ。青薔薇庭園内を目的も無くプラプラしていた陛下と私を見つけてくれたのは、朝から素敵なロマンスグレーのヘロルドさんだった。

彼に「ご用意が出来ました」と案内された朝食の場は、青薔薇庭園の中央付近にあるガゼボではなく、庭園端のお城に近い開けた空間だ。

其処には白い食卓と四脚の椅子が置いてあり、既にディルクさんとグイードさんが控えていた。

ディルクさんは私と目が合うと、素朴な笑顔を見せてくれながら、私が座るべき椅子を引いてくれる。

「おはようございます、陛下、珍獣様。陛下、リーザ達は少し遅れるとの事です」

「構わない。少ない人数でまわしているのだしな」

陛下はグイードさんが引いた椅子に座った。

促されるままに私達は席に着いたのだけど、陛下と私は対面ではなく隣同士だった。

青薔薇がよく見えるようにという配慮だろう。

その青薔薇をなんとはなしに眺めていると、ヘロルドさんが冷えた水と牛乳、オレンジジュースと思われる飲み物と前菜らしき皿を置いてくれた。

皿には、向こうの世界でいうマリネやキッシュなどがちよこちよこと載っていて、とても美味しそうだ。

私は、ホウレン草や人参、ベーコンと思われるものが入ったキッシュもどきに、まずは手をつける事にした。

「おおお、これウマウマです！ そうだ、陛下。そういえば、

今日は朝早くに、どっかの国の人に会って言ってませんでしたっけ？ 青薔薇を見ながら優雅に朝食とかいいんですか？」

「よい。待たせておけばいい。そもそも時間が早すぎなんだ。それに、今更のようなラガリネの手の平返しにつき合う義理は、本来なら無い」

「手の平返し？」

「いろいろあるんだ、いろいろな」

「ふうん。あ、誰か来た」

「……朝から最悪だな」

私の言葉に、切っていたキツシュから視線を上げた陛下が眉間に皺を寄せた。

そんな彼の手元の野菜入りキツシュからは、ホウレン草らしき葉っぱが引き摺り出されかけている。

「最悪って？」

「素通りしてくれればいいが……来そうだな」

「来ますね。ねね、それより陛下、今、野菜を引き摺り出しているそれ、本来の食べ方をしないんだったら、勿体無いから私に下さい。ウマウマ過ぎて、私ってば、もう食べ終わっちゃったんですけど」

「……判った。口を開ける」

「はい」

あーんと開けた私の口の中に、陛下は器用にキツシュを乗せたフオークを差し入れてきた。

引き摺り出されかけたホウレン草も、彼はちゃんと私の口内に納めてくる。

それらを私がモゴモゴと咀嚼し、陛下が次の分を用意していると、一人の女性が侍女と護衛らしき二人を連れて、私達の朝食の場へやってきた。

「一緒にお食事をし、お揃いのお召物。仲がよろしいですね。陛下、おはようございます」

「……………」

「王の珍獣も、おはよう」

「お……おはようございます?」

挨拶をされたので、し返しながらやってきた女性を間近に見た私は、キツシユが入っているのにも関わらずにポカンと口を開けて驚いてしまった。

物凄い美人の登場だ。

サラサラストレートな長い銀髪の一部を緩く結び、瞳は黒色。

年は陛下と変わらないか少し下くらいに見え、ドレスは胸元が下品にならない程度に開いた、シンプルでゆったりとしたものを着ている。

その姿は何処か神秘的で、神話から抜け出した月の女神様のような。

美形度では、人類の枠を超越してしまっている陛下の方が上だけれど、しかし陛下は、神話から抜け出したような、とは感じられない種類の美形だ。

長い銀色の睫毛を瞬かせながら陛下を見ている女神様のような彼女は、超絶美形と物凄い美女、太陽と黄金の紫水晶王子様と月の女神様、金と銀で、陛下の隣に置いて、セットで目の保養にしたいタイプの女性だった。

自身と似た色合いの銀髪の侍女と黒髪の中年護衛に、彼女は合図のようなものを目線で送った。

次いで、陛下と私を交互に見る。

「一緒にしても?」

「……………」

「あ、どうぞどうぞ……って私が勝手に許可しても?」

「ありがとう」

陛下がチラリと私を睨んだ。

銀髪の美女は、気づかないはずは無いのに、それを無視して彼の対面に腰を下ろす。

「珍獣、髪に差した青薔薇が素敵ね。貴女によく似合っているわ」

「おお、ありがとうございます！ 私ってば、ようやく薔薇が似合う女になったと！」

「言葉通りに受け取るな、小娘。皮肉だ」

「え」

「違いますわ。わたくしは本当にそう思って

「それより王女、何か用か。用が無いのなら退席願いたい？」

彼女　王女様の声を遮った陛下の声音は、酷く無機質で冷たかった。

王女様はそれに一瞬だけ銀色の睫毛を震わせたけれど、小さく息を吸って、氣力を補充したみたいだ。

少しの間後、彼女は口を開く。

「陛下が彼女にリーザをお付けになるとは思いませんでした。いつかわたくしにと思っておりましたのに」

「思うのは勝手だが、何を根拠にそう考えたのか余には皆目見当もつかぬ」

「わたくしはガルダトイアの王女ですわ。側室などになるつもりはありませんが、客人に終わるつもりもありません。トリエスではリーザは王妃にだけ仕えるよう教育されていると

「黙れ。そなたには関係のない話だ」

「黙りませんわ！　ようやく貴方とお話しをする機会を得たのです！　陛下、貴方は宝物庫から

「黙れと言った。随分と立派な情報網を持っているようだ、なんの権限があつて余のする事に口を出す？　其方はそれこそ王妃でもなければ、余が寵愛する側室でもない。　ああ、ガルダトイア

神王国の王女だからか。格下と思うトリエスには当然の権限だと？」

「そのようなつもりは！　わたくしは、

「余は小娘と食事をしている最中だ。席を外してくれないか。目障りだ」

「……以前からお聞きしたいと思っていた事がございます」
王女様の黒い瞳が、心の動揺を表すかのように揺らめき出した。

取り付く島がない最高権力者である陛下にめげないはずはないのに、彼女は食いだがるように言葉を続ける。

「わたくしがトリエス王国に、貴方の王妃にと嫁す為に来て七年。

陛下はわたくしに指一本触れずに後宮へ押し込め、そ

「なにか勘違いをしているようだが、別に押し込めてなどいない。

警備の都合で仕方なく後宮に部屋を用意しただけであつて、其方が知つての通り客人扱いのはずだ。それは七年経つた今でも変わらん故、いつでも自由にガルダトイアへ帰るがよい。以前に一度言つたはずだが？」

「……ちよつと、陛下、」

「なんだか不味いよ。そんな空気だよ？ 王女様、泣きそうじゃない？」

陛下の言葉に凄くショックを受けてるみたいなんだけど？ 王女様の表情を見れば誰だつて判るよね？

少し空気読もうよ！ ね！ く・う・き！

呼吸を整えながら王女様は頑張つて涙を堪えているみたいだけど、陛下はさつきからブリザード宜しくな声で、容赦無く彼女の気力とどうか勇気を叩き落しているよね？

私つてば判つちやつた気がするんだけど、王女様、陛下のこと好きなんじゃないかと思つんだよ。

なんか切なそうな目をしているしさ。

それに、陛下の王妃様になりたいって言つてるよ？

まあね？ 陛下は超絶美形だし、王宮で大切に育てられた王女様が惚れちゃう要素満載なのは判るよ？

陛下の本質は、野菜嫌いで甘い物大好きなオコチャマなんだけどね？

「お前は黙っている。 余はな、王女。そなたを質にとつたつもりも無ければ、望んだつもりもない。ガルダトイアが、そなたの父王が婚姻をと此方の了承も得ずに一方的に送りつけてきたんだ。それが其方のはずだ。故、なにか今に不満でもあるのならば、いつ

でも、このトリエスを去るがよい。その時は喜んで手筈を整えよう」
陛下の言葉に、王女様の顔が悲しげに沈んだ。

「……………陛下はわたくしの事をどう思われておられるのですか？
ガルダトイアの王女だから憎く思われておられるのでしょうか？
いえ、思われても仕方ないとは理解しております。ですが七年、
わたくしはトリエスに、貴方の後宮に身を置いて

「どうでもよいのだ」

「いま何とおっしゃって……………」

「どうでもよいと言った。そなたには微塵の興味も無い。余にとつては居ても居なくてもどちらでも構わぬ」

「うわっ……………キツイ！ それはキツイよ、へ・い・か！

好きな人に『微塵の興味もない』とか『どうでもいい』とか、『嫌い』とか『憎い』とか言われるよりも激しくキツイよ！

おおおう、王女様の既視感を覚える黒い瞳から汗が、じゃなかつた、涙が零れてきてるけど？！

どうするの？！

ほら、王女様付きの侍女と中年護衛が、すっごい目で陛下のこと睨んでるじゃん！

視線で人を殺せるのなら、絶対、今、殺人ビームが放たれてるから！……………って、ディルクさん、なんで剣の柄に手をかけてるの？
グイドさんも剣から手を下ろそう？ ヘロルドさんってば、いつものロマンスグレーな微笑みは何処へ行ったの？ 表情が無いよ？
怖いよ！ みんな怖すぎるからね！ 頼むから、面倒な事に私を巻きこまないでね！ 私が望むのは、日本に帰るまでの平穏で安全な楽しい異世界ライフだよ？！ 忘れないでね！

仕方無い、此処は私が雰囲気を変えなければ！

もう何だつて私が気を使わないといけないのよ！

陛下の馬鹿！

「へ、ヘロルドさーん」

「なんでごいましょう、珍獣様」

「私ってば、食事の締め甘いのが食べたいなあ、なんて」
まだキツシユしか食べてないけどね！ と心の中で一人ツッコミをいれながら言ってみると、ヘロルドさんは即座に紳士な微笑みを作って、彼の近くにあるワゴンに手を伸ばした。

「そつでございませぬ、申し訳ございませぬ」

そつ言つて出されたのは、ワンホールのタルトもどきだ。

上に何かの果物がふんだんに乗せられていて、私の涎をジュルジュルに誘う。

「今、切り分けますので少々お待ち下さい」

「美味しそうですね、それ！ あのあの、ヘロルドさん、上の果物は何ですか？」

私ってば、フルーツ大好き人間だからね！

そこは絶対確認するよ！

「今朝、アツヒエンヴァル公爵家から届いたパピヨンの焼き菓子でございませぬ。珍獣様が望まれたと、カーティス伯爵様が」

おおお、ヴィルフリートさん、忘れないでいてくれたんだ！

凄いや！ あれから幾らも経つてないよね？！ 実行力ありすぎ！

私がウキウキワクワクしていると、ヘロルドさんはタルトを切り分ける為に、長めのナイフに手を伸ばした。

瞬間、ディルクさんがそのナイフを横から奪い取るように手にする。

「俺がやります。ブロンザルト様は茶の方を。」 珍獣様、どの

くらい食べますか？」

「えつと、半分くらい？」

「食べ過ぎだ。ディルク、余と小娘は四分の一ずつでよい」

陛下、王女様の分も言つてあげて！

つていうか、王女様が同じ食卓についているのにお茶すら出されないのが、さつきから私つてば気になつて仕方ないんだよね！

「ディルクさん、王女様にも同じ量で！ ヘロルドさん、お茶を王女様にも！ 皆で仲良く平和にお茶しましょうよ！ ね、へ・い・

か！」

「わたくしは八分の一でいいわ」

そう王女様に透かさず訂正を入れられながらも、陛下と私と王女様は、というか、陛下と王女様は微妙な空気を出しながら、私はその空気を感じながら、暫し、ヴィルフリートさんが用意してくれたパピヨンのタルトを無言で堪能した。

それぞれが切り分けられたタルトを一言も発しないで胃の中に粗方納めると、王女様が再び口を開いた。

「陛下、ラガリネの使者が参っていると耳にしました」

「……………」

「ラガリネ王女を迎え入れるおつもりですか」

「それも其方には関係のない話だ」

「関係が無いなんておっしゃらないで！陛下、彼女はまだ十になつたばかりですわ！」

「それが？」

「幼すぎます！」

陛下が心底嫌そうに溜め息をついた。

「いい加減にしてくれないか。仮にも王女という地位にいる者の言葉とは思えぬ愚かさを差し置いても、これはトリエスとラガリネの話だ。ガルダトイアに口を挟まれるのは不愉快だ」

「というか、陛下、十歳の王女様とか、ロリコン路線に走る予定で？」

「何？ ろりこん？ - そういえば、あられもない姿の時にも言っていたな、お前は。意味は？」

「幼女性愛者の事です！」

「どうしてそうなる！」

「まあ、権力を持ってあましちゃった男の行きつく先がロリコンとか判らなくもないですけどね？ でも、私は幼女性愛者は大嫌いです！ 最悪です！ 女の敵すぎます！ 昔々の大昔の異世界日本のお話に、源氏物語っていうものがあるんですけどね？ そのお話の登場人物に、光源氏っていうそれはもう女の敵な男が居てですね、深窓のお姫様に始まり、未亡人、人妻、義理の母、落ちぶれたお姫様に地方のお嬢様等々を片っ端からモノにした女性にモテモテな男だったんですよ！ んでね？ その男、光源氏は、現代日本なら、未成年者略取誘拐、拉致監禁、児童性的虐待、強制猥褻及び強姦で捕まっちゃうような事をしでかしたんです！ 対象にされた幼女の名前は紫の上！ 幼い彼女を拉致って、いいお兄ちゃんのフリをして信用させて、彼女を犯したんです！ そんなもって光源氏は、紫の上を幼い頃から育てて自分好みの女性にしてですね、これを世間一般に紫の上大作戦と言んですが、陛下、ラガリネ王女を育てるのなら、早いうちに胸を揉んで巨乳にした方がいいですよ？ そうしないと私みたいに貧乳になっちゃいます。挿入は適齢期になるまで待つてあげた方がいいと思いますけどね？」

そう親切心から言っただけなのに、陛下は眉を盛大に吊り上げた。「ふざけた事を！ 小娘はとにかく黙っている！ お前が口を挟むと話しが明後日の方向に飛んでいくんだ！」

陛下が忌々しげに手にしていたフォークを皿の上に置いた。

「王女もこの話はしないでもらおう！ 不快極まりない！」

話しの流れを其処でプツリと陛下に切られてしまっただけで、私達は再び無言になった。

けれどまた暫くして、王女様が口を開く。

彼女は黒い瞳の先を、陛下から私に移した。

「王の珍獣は、異世界から来たと聞いていたけれど、本当？」

「はい！ 私つてば、異世界日本から来ました！ 茨城県出身で、隣の栃木県と何かと無駄に争っている県なんですよ！ 私から言わ

せれば、どっちもどっちなんですけどね？ で、家は竜ヶ崎市にあつて、オタクの聖地秋葉原行きがある筑波エクスプレスの使い勝手が悪い辺鄙なところにあるんです！ 都内に行く時は主に常磐線で、もう我が家なんて、最寄り駅まで徒歩五十分のド田舎に建ってるんですよ！」

前にも言ったけど、家の近くにバス停は無いからね！

「よく判らないけれど、他にはどんな地名がある国なのかしら？」

「え？ 都道府県の事ですか？ えーっと、首都は東京都で、北から北海道、山梨県、岐阜県、名古屋……愛媛県？ 愛知県だったけ？ うーんと、あとは大阪府、京都府、三重県、和歌山県、奈良県、島根県、熊本県、沖縄県……あれ、ちょっと飛びすぎかな？」
日本には四十七都道府県があつたはずだけど、いま言ったのは明らかに数が足りないよね？

そう思い、うーん、と私が腕を組んで残りを思い出そうとしていたら、王女様は「そう。もういいわ」と少しだけ微笑んだ。

「お、そうですか？」

「王女、小娘に何か言いたい事があるのなら余を通せ」

「陛下のご心配には及びませんわ。何も致しませんし、いびるつもりもございません。見くびらないで下さいませ」

「あのー…、もうちょっと穏やかにいきましようよ？ 異世界日本の話なら、私、いくらだつてしますから……ってウオちゃん、出てきちゃ駄目！ こら！」

陛下の部屋から肩にずつかけっぱなしだつた鞆から、ウオちゃんが突然顔を出して這い出ようとしていた。

王女様も居る事だし、私は両手で一生懸命抑えたけれど、ウオちゃんは隙間からスルリと出てきてしまう。

もうどうにも鞆の中に閉じ込めておけなくて、王女様が両生類嫌いでない事を祈りながら、私はゴメンネ目線で陛下を見た。

「陛下、ウオちゃんを食卓に乗せますけど、怒らないで下さいね？」

「……………」

「それは？」

陛下が嫌そうに眉をひそめ、王女様は驚いたのか目を見開いた。

「これはですね、珍獣三号のウオちゃんです！ ウオちゃん、王女様に御挨拶！」

「ぴきゅ」

「……色が、」

「色？ あ、ウオちゃんはトリエスでは珍しい色みたいですね。王女様の国のガルなんとか国でも珍しい色なんですか？」

「ええ……とつても。黒いものなら居ただけれど……」

そう答える王女様の声も表情も驚きに満ちている。

まあ、ウオちゃんは、シヨッキングピンク地にライトグリーンの斑紋を持つ両生類だしね？

トリエスで珍獣認定されるくらいには珍しいみたいだから、当然の反応なのかな？

「そうですね。ウオちゃんはやっぱり珍獣なんですね！ ウオちゃん、パピヨンの焼き菓子食べる？」

美味しいよ？と言いながら、一口残っていたタルトを私がウオちゃんの口に持つていくと、ウオちゃんは嬉しそうな声を出しながら口をパカリと開けた。

パステルピンクの可愛い舌が全開に見える。

「きゅんきゅん」

「ウオちゃん、美味しい？」

「きゅんぴ！」

「貴女は寂しくないの？」

私がウオちゃんにタルトを食べさせていると、王女様がポツリと聞いてきた。

「え？ 寂しい？」

「ええ。異世界に来て、家族と離れて、家にも帰れずに」

「うーん、家には物凄く帰りたいですけど、今のところ、寂しくて仕方ないという訳ではないですね。リーザ達は優しいですし、デイ

ルクさんもヴィルフリートさんもへロルドさんも良くしてくれますし、陛下も笑えますしね。毎日が結構楽しいですよ?」

「といつてもまだ数日しか経ってないけどね?」

ウオちゃんの口についてしまったタルトを私が指で拭っていると、
「笑えるとは何だ」と陛下の眉が寄った。

「王女、小娘にそのような事を聞くとは、そなたは今を寂しく思っているのか? では、今直ぐにでもガルダトイアに帰れ」

「わたくしはそのような意味で言ったのではっ!」

「先程も言ったが、意味の無い会話を繰り返すつもりなら退席してくれ。見ての通り、余は小娘と過ごしている。邪魔だ」

「……っ」

その陛下の言葉に、王女様の黒い瞳に初めて私への嫉妬の色が浮かんだ。

まあ、それも当然と言えるよね? 王女様が嫉妬するような事は何もないんだけど、さっきからの陛下の言葉を聞いてみると、したくなくても、嫉妬心が湧き起こざるを得ないもん。

王女様が可哀想だし、なにより余計な嫉妬を煽って要らぬ害が来ないように、私はこの場をフォローする事にした。

苦勞の人だよ、私も。

原因は陛下のせいなんだけどね!

『どうでもよい』とか言いながら、陛下が王女様を嫌がっているのは判ったけど、もうちょっと上手く立ち回ってよ! 当たり前障りなくさ!

私はウオちゃんの胴体を撫でながら、陛下をキツと見遣った。

「陛下さあ、いい加減にして下さいよ。王女様は陛下の事が好きなんじゃ? 陛下だって気づいていたりするんでしょ?」

「小娘っ、余計な事を!」

「珍獣?!」

「王女様、私に嫉妬なんて要らないですよ」

「嫉妬なんて……」

嫉妬と指摘されて戸惑う王女様に、私は彼女を安心させる為の笑みを浮かべてみせた。

私の手の中に居るウオちゃんか、「ぴきゅうぴきゅう、ぴるぴると何故か唸るような声を出している。

「いい事を教えてあげます。私にとってはね？ 陛下は異世界トリップ男役失格男なんです。えっと、異世界トリップとは異世界に渡る事なんですけど、王女様、私ってば、運命の人が居るんですよ？」

「運命の人？」

「はい！ パーシヴァル様です！」

「またパーシヴァルか、お前は」

陛下が呆れの感情を澄んだ紫の瞳に滲ませた。

「またって！ 陛下は黙ってて下さいよ！ でね、王女様、パーシヴァル様は向こうの世界のとあるお話に出てくる登場人物で、私の好きな人なんです！ 王女様のようなサラサラな長い銀髪に、動脈を切って噴き出した血のような真紅の瞳の人なんですよ！ 私ってば、パーシヴァル様をもう何年も愛しているんです！ 本来なら次回作で再会間近のはずだったのに、トリエスに来たばかりに！」

「そうだよ！」

『愛と絶望の黒薔薇魔帝国物語2〜魔皇帝復活愛憎編〜』で、彼と涙の再会をして、熱く甘い想い出を、二人でラヴラヴに作る予定だったのだ！

「お前の妄想の住人も、そこまで想ってもらえれば、さぞ幸せだろうよ、小娘」

「わたくしもそう思うわ。 それは本当に運命ね。 素敵だわ」

くう、と私が悔しがっていると、陛下は馬鹿馬鹿しいといった声を出し、王女様は嬉しそうに顔を綻ばせた。

「おおおう、陛下も王女様もそう思います？ うふっ！」

「くだらん。さて、小娘、そろそろ 何だ？」

言って、遠くへと紫の瞳を凝らした陛下に、私も王女様も同じ方向に視線を向けた。

すると、爽やかな風に乗って、フワフワと白い何かが此方に向かって飛んでくるのが見える。

暫く皆で眺めていて、それが食卓まで飛んできた時、陛下は条件反射といった様子で、その白い何かを掴み取った。

「…………え？」

「あれ？ 前に陛下、こういった状況の時は、名など行き成り聞かない、とか言ってますでしたっけ？」

「確かにおっしゃってましたね、地下で」

「……………」

「まあ、そうなの？」

上から陛下、ポツチャリ女の子、私、ディルクさん、グイードさん、王女様だ。

「五月蠅い。グイードも黙れ」

言って、私達をギロリと睨むと、陛下は現れたポツチャリ女の子に澄んだ紫の瞳を向けた。

その動きで、その場に居る残りの全員が彼女を改めて見たのだけれど、ポツチャリ女の子は心底驚いてしまったのか、はたまた緊張しきってしまったのか、ピキリと固まったまま動かない。

暫く皆で眺めていたけれど、陛下の問いに返す様子は全く無かった。

仕方無いと陛下は溜め息をつくくと、いきなり極上の微笑みを超絶美形顔に浮かべた。

その様はまるで、毒蜘蛛が己の巣に蝶を追いつめ捕らえるかの如く笑みだ。

瞬間、キラキラキンキンの蜘蛛の巣に、二匹の蝶がかかってしまった。

耐性が無かった不幸な蝶は、王女様とポツチャリ女の子の二名だ。王女様は可愛らしく頬を染め、ポツチャリ女の子は熟したトマトのように顔を真っ赤にする。

それを目にして私は気づいてしまった。

陛下は自分の武器の使い方を知っている。

そう思わざるを得ない程の魅了する微笑みを浮かべながら、実に優しいな声音で彼は問い直した。

ポツチャリ女の子の驚きと緊張を手っ取り早く解す為だろう。

「お前の名だ、娘。お前の名を余は聞いている」

「あ……あの、オラ、マリリン、マリリン＝バーレと言わずら」

「おいしい！へ・い・か、そこは、『お前の可愛い声で名を聞かせておくれ。余のコ・ト・リ』って続けないとって、え?! マ、マリリン?!」

「……珍獣様、今、震えがきました、俺」

「マリリンというの。珍しい名前ね」

ポツチャリ女の子　マリリンの名前に、私は驚愕、ディルクさんも多分同様で、王女様は思ったままの感想を口にし、陛下は両肘を食卓につき、カボチャパンツを持ったまま頭を抱えた。

頭痛でもするのだろうか、彼は眉を寄せ、額に薄っすらと汗を滲ませている。

「……おら?　ずら?」

「すつ、すみませんずら!　オラ、緊張したり、驚いたりすると、村の方言が出てしまうずらよ!」

「お、おおおう、カボチャパンツにマリリンとか、地下で適当に作った話なのに!」

「方言だったんですね、珍獣様。あの時の疑問が今になって解決しました」

「トリエスに来て七年になるけれど、そのような方言があるのね。初めて知ったわ」

皆がそれぞれの反応を返している中、王女様が「そういえば」と思い出したように言葉を続けた。

「ガルダトイアの神話に、あまり知られていない話がひとつあるのだけれど、その話に出てくる少女がマリリンという名だったわ」

「ややつ、なにやら興味をそそられます!　王女様、どんな話なんですか?」

「くだらない話よ?　月夜の晩に、とある国の王が、マリリンという理想としていた名の洗濯女に出会い、後に迎えるの。なんでも王子の時に夢に見たそうよ?　話はそれだけなんだけれど、ガルダト

イア神話の殆どが意味のあるものと言われているのに、その話は無意味なものとされているわ」

今は王族の一部と神官の上層部くらいしか知らないのではないかしら、と王女様は首を傾げる。

王女様が教えてくれた神話に、マリリンが食いついた。

「オ、オラも洗濯女ずら！」

「やややややつ、私つてば、凄すぎです！」

「珍獣様、予言能力でもあるんじゃないですか？」

「やめてくれ」

マリリンと私が大興奮し、デイルクさんが感心と尊敬の眼差しで私を見て、陛下は何かを振り払うように頭を振った。

手近にあった水に陛下は手を伸ばした。

気を取り直す為だろうか、それを二、三口ほど口に含むと、彼は再びマリリンに質問する。

「ところで、マリリンとやら。お前の家名はバーレというのか？」

「はいずらー！」

「バーレ？ あれ、何処かで聞いたような？」

「あー…俺もです、珍獣様」

「あまり聞かない家名ね。庶民には多いのかしら？」

続く私達の言葉を全て無視して、陛下はマリリンに質問を続けた。

「……お前には兄が居たりなどしないか？」

「居ますずらよ！ 兄ちゃんの名前は、コーエン＝バーレと言いますずら！ お城で働いていますずらよ！」

「え」

「……世間は狭いですね、珍獣様。そう思いませんか？」

「コーエン＝バーレ？ 珍獣は知っているの？」

王女様に聞かれたので、私が「知ってますよ」と答えていると、

陛下はヘロルドさんにマリリンを私の対面に座らせるよう指示を出した。

次いで、残っていたパピヨンの焼き菓子とお茶もマリリンに出すように命じる。

大興奮中だったマリリンが、恐縮したように背中を丸めた。

「オ……オラ、」

「遠慮はいらん。座れ。まだ聞きたい事がある故、焼き菓子でも食べながら答えてくれればよい」

「マリリン、そのパピヨンの焼き菓子、美味しいよ？ 食べないと損かも！」

「 ブロンザルト様、切り分けは俺が」

「……………」

陛下の言葉とヘロルドさんが椅子を引いて促すのに、マリリンは恐る恐るといった感じで私の前に腰を下ろした。

その時、少しだけ王女様が嫌そうな顔をする。

多分、マリリン以外の誰も気づいたけれど、敢えて見なかった事にして、ヘロルドさんは彼女をきちんと座らせ、ディルクさんは焼き菓子を出し、ガイドさんは慣れない手付きでお茶を用意した。パピヨンの焼き菓子を前にして、マリリンが薄い緑の瞳を和らげる。

「パピヨンの焼き菓子……久しぶりすら」

「久しぶり？」

「久しぶりって？」

「そういえば、コーエン＝バーレの故郷は、パピヨンの産地の村だとイエルクが言っていましたね」

「パピヨンの産地の村は確か、トリエスと……サデヴァの境でしたわね」

黒い瞳を若干暗くした王女様の横で、マリリンは不安そうにパピヨンの焼き菓子にフォークを入れた。

「そうですすら。……兄ちゃんに教えてもらったはずだよ。サデヴァと戦争が始まったって。のんびりとして穏やかな村すらけど、今、どうなっているのかオラ心配で」

「その心配は不要だ、マリリン」

「そうなんですか？」

「マリリン、良かったね！」

「……………」

「ああ。此度のは一方的なもので、我が国の圧勝だ。向こうは此方に一矢報いる事すら出来ないだろう」

お前の村は通常と変わらないと思う、と陛下は続けて、ヘロルドさんが淹れ直したお茶に口をつけた。

「それはそうと、マリリン、コーエン以外の家族は？」

「父ちゃんは小さい時に事故で死んで、兄ちゃん以外の家族は母ちゃんだけです。……母ちゃんは、いま病気で、高い薬代を稼ぐ為に兄ちゃんと王城に働きに来た。村には給金の安い仕事しか無かった。……でもオラ達は運が良かったですよ！村長様の息子のミヒエル様が王都に勉強に来ていて、その伝手でオラ、お城の洗濯の仕事を得たですよ！」

「そうか」

陛下はカップを食卓の上に置き、その手で眉間をコシコシと揉みながらヘロルドさんと呼んだ。

「何でございましょう」

「ヘロルド、この者に五十レルーデを」

「畏まりました」

「へ、陛下様？！」

「五十レルーデって？」

「金貨五十枚の事です、珍獣様」

「陛下、洗濯女に五十レルーデなんて。何故ですか？」

それぞれが好き勝手に言っている中で、クルクルとした癖毛のツインテールを左右に振りながら、マリリンが勢い良く立ち上がった。

「陛下様！ オラ、そんな大金、受け取れないですよ！ 理由が無いんですよ！」

「理由は余にある。お前は気兼ねせず其れを持って故郷に帰れ。

帰郷し、存分に母を看病してやるとよい。五十レルーデでは足りぬかもしれぬが、持たなかつた者が身の丈に合わぬ金を突然手にしても碌な事が無いだろう。時期を見て追加を送金してやるから、今後は、看病も生活も不安に思う事は一切無い。故、お前は働く必要が無くなった訳だ。明日にでも城を辞するがよい」

「きゃっ、流石、へ・い・か！ 太っ腹！」

「陛下、貴方、追い出しにかかりましたね？」

「まあ、追い出しとはどういう意味なの？」

陛下は、言うべき事は終わった、といった様子で眉間から手を下ろすと、反対の手にあるカボチャパンツに視線を落とした。

気になったのか、解けかけていた太股の部分のリボンを、片手で器用に結び直しだす。

「……存在自体が不吉すぎるからな。万が一にも小娘の与太話通りに事が進んだらと考えると」

「そのお気持ちは判らないでもないですね、俺」

「陛下もデイルクさんも何を言ってるんですか？」

「陛下、いつまでその下着を手にしておられますの？」

「陛下様、オラ、言い忘れていたずらが、その下着、珍獣様の物です。風には飛ばされてしまったから、洗濯女であるオラは此処まで入ってきてはいけなかつたはずだけど、追いかけてきたはずだよ」

マリリンの言葉に、リボンを結ぶ陛下の手が止まった。

「……………」

「それ、私のカボチャパンツなの？ じゃあ、今、結んでいるリボン、私の秘密の花園を触る時に陛下が解いたやつですかね？」

「解けやすくなっちゃったのかなあ？ と彼の手の手を覗きこみながら私が言つと、何とも言えない空気を漂わせながら、シンとした沈黙が場を支配した。」

その状況に、どうしたのだろう、と私が首を傾げると、陛下は疲れたようにフツと息をつき、持っていた私のカボチャパンツをマリ

リンに向かってポイツと投げ渡した。

「小娘、部屋に戻るぞ」

「え？ あ、はい」

陛下が席を立った。

なので、私も彼に続けと椅子から腰を上げる。

私が立ち上がるのを見て、そのまま何の言葉も発する事なく、陛下はスタスタと朝食の場から離れていった。

だから私は、彼の歩く速度に合わせる為に早歩きをする破目となる。

何度も言うようだけど、コンパスが全然違うんだよね！

「もう少しゆっくり歩

「陛下、お待ち下さい！」

私の言葉を遮る形で、王女様が席を立ちながら彼を呼びとめた。

しかし、陛下は足を止めるどころか、歩く速度を緩める事すらしない。

王女様に背を向け、青薔薇庭園の出口へと向かっていく。

「まだお話したい事があるのです！」

「余には無い」

「わたくしにはありますわ！ 陛下！」

「……………」

「陛下、お待ち下さいと申しあ

「煩わしい。 ああ、そうだな」

早歩きで陛下の後をついていていた私が、ようやく彼の真横へと追いついた時だ。

面白い事を思いついたといった感じで、陛下が進めていた足を止めた。

私も立ち止まって、どうしたのかと彼の顔に視線を向けると、形の良い唇が酷薄そうに歪んでいる。

「陛下？」

黄金の髪を一度掻き揚げて、陛下は私の背に片腕をまわして引き

寄せた。

「えっ、ちよつと？」

そして、顎を取ってクイツと持ち上げて、「小娘、二千五百レル
ーデで手を打て」と言っつて、陛下は私の唇に自分のそれを重ねた。

「……………」
「……………」
「……………」

陛下と私が初めて唇を合わせて　　まあ、ぶっちゃけた言い方をすればキスなだけだね？

此方の意志を少しも確認しない陛下による一方的なキスは、色気なんて微塵も無いものだった。

なんでって、お互いの目が普通に開いているんだよ？

超至近距離に、あの澄んだ紫の瞳があるの。

こっち見てるんだよ！

目が思いつきり合ってるの！

キスするんならするで、少しはムードを出しやがれ！

陛下の馬鹿！

何が二千五百レルーデで手を打てだ！

そんな端金（はしたがね）で、女子高生な私の価値有り有りな乙女のチューを買えると思うな、って、あれ？

あれあれあれあれ、あれ？

二千五百レルーデ？

陛下、二千五百レルーデって言った？

さつき、五十レルーデは金貨五十枚だって、ディルクさんが教えてくれたよね？

じゃあ、二千五百レルーデは金貨二千五百枚？

私的レートで、金貨一枚は十万円だから……って、おおお！
異世界日本円で二億五千万円って事？！

諭吉が二億五千万人？！

日本の人口よりも多い二億五千万？！

二億五千万円という金額に驚いてしまって、私は陛下の目を思わずまじまじと見つめてしまった。

すると、彼の眉間に少しの皺が寄り、次いで、綺麗な紫の瞳がスツと横に移動する。

王女様達の方を見たのだ。

「……………」

「……………」

少し離れた所にある先程まで座っていた食卓には、誰一人欠ける事なく居て、全員が此方を見ていた。

デイルクさんは「おいおい」といったような顔で、ヘロルドさんは苦笑し、マリリンは茹でダコに、グイドさんと食卓の上のウオちゃんの表情は不明。

王女様付きの侍女さんは此方を睨み、黒髪の中年護衛は殺意とも取れる視線を。

そして王女様は、酷い衝撃を受けたような顔をしていた。

まあ、それも当然だよな？

なんてたつて、王女様は陛下の事が好きなんだから。

私は何だか居た堪らなくなってしまうって、陛下から離れる為に彼の胸に両手をあてると、長い黄金の睫毛に縁取られた紫の瞳が私を捉えた。

陛下の唇がほんの少しだけ私から離れる。

「足りぬか」

「え？」

言っている意味が判らなくて、私は陛下に疑問の視線を投げた。
すると、彼に取られている顎が、更に上へと持ち上げられる。

「追加で二千五百」

「は？ 何を言っ ふっ」

問う為に開いた僅かな隙間から、陛下の舌が強引に私の中へと押し入ってきた。

今さっきまで普通に開いていた彼の目が徐徐（じょじょ）に閉じていき、それに合わせるように、私の啞内に在る陛下の舌の動きが激しくなる。

食まれ、なぞられ、絡められて、吸われる。

中を激しく優しく、柔らかくて温かい舌に掻き混ぜられて、その上、陛下が角度を変えて深く求めてくるのに、私は耐えきれなくなつて目を閉じてしまった。

途端、視界だけでなく、「クリスティーヌ様！」という男の人の声を最後に、周囲の音の一切が聞こえなくなる。

爽やかに吹く風の様子、梢（こずえ）の音、小鳥のさえずに陛下以外の人の気配。

その全てが消え去り、今の私に感じられるのは、彼の存在と深く合わせられた互いの唇、蠢く舌に、卑猥に聞こえてしまう私達が立てる水音で。

視界を閉じてしまったことに後悔を覚えた時には既に遅くて、なんととも言えない感覚が湧き上がってくるのに、膝の力が抜け、私は自分自身を支え切れなくなった。

「……ん」

そんな私を陛下が支える。

背中にまわされている腕に力が入られ、顎から手が外された。

陛下はその手を私の後頭部に添え、絡めていた舌を一度抜くと、何度も私の唇を食む。

それが済むと、再び私に深く口付けて、舌を絡めた。

「……っ」

絡められて、吸われて、私の中のいろいろなところが舐められて、なぞられて、また食まれて。

翩られるように貪られ、深く激しく求められて。

何度も何度もそれらの行為が執拗に為され、どう表現していいのかわからない感覚に私の思考が麻痺し始めた時、ディルクさんの声が直ぐ近くから聞こえた。

「あー…こういう役回りは嫌で仕方無いんですが、とりあえず申し上げますよ？ 長いです。いつまでやっているんですか、貴方達は。王女達はとっくに去りましたが。……まあ、まださりたいとおっしゃるのなら、好きなだけ続けてもらっても構わないんですけどね、俺としては別に」

今の仕事は護衛なんで、俺は少し距離をおいて眺めているだけです、と続けるディルクさんの言葉に、私の唞内を蹂躪し続けていた陛下の動きが止まった。

そして私の体内時計で三秒ほど静止した後、ゆっくりと舌が抜かれ、合わされていた彼の唇が離れていく。

こくり、と互いに口の中にあるものを飲み込んだ。

「すまない」

「おっ、驚いちゃいましたよ！」

咄嗟にどうしていいのか判らなかつたので、私はとりあえず陛下から離れようと、彼の胸に置いていた手に力を入れた。

それに気づいた陛下が、私を支えてくれていた手を外し、解放してくれる。

改めて見上げると、いつも澄んでいる紫の瞳と目が合った。

「そうだな」

「驚いちゃいましたけど……うーん、うーんと……まあでもいいです。お金、払ってもらえるみたいだし、別に初めてでもないですし「そうなのか？」

「はい。向こうで王様ゲーム、えつと説明して無かつたですね。王様ゲームはクジで王様になった人の命令を聞くっていう遊びなんですけど、以前、それをやった時、加藤とキス、口付けをした事があるんですよ。それが初めてです。王様になった千夏ちゃんが、二番と三番がキスすることって命令して。参加者がお兄ちゃんと千夏ち

やんと加藤と私の四人しか居なかったのにですよ？ 一番が私、三番が加藤だったんです。まあ、お兄ちゃんとしろと言われるよりマシでしたけど。究極の選択ですけどね」

勿論、加藤に舌までは入れられなかったけどね？

キスって言っても、チュッて口を合わせた程度なだけでさ。

「あれ？ 陛下、何処に？」

昔の事を思い出していると、陛下がクルリと私に背を向けた。

そしてそのままお城に向かって歩きだしてしまう。

「 謁見がある」

「お、おおお、突然ですね。そういえば、ウマウマなお酒の国の人を待たせていますもんね。っていうか、お部屋に戻るのは止めたんですね。えっと、あのあの、それよりお金、忘れないで下さいね？」

二千五百レルーデ掛ける二で、五千レルーデだからね？

異世界日本円で五億円だよ？

きゃっ、五億円！

ママ、貴女の娘はキスひとつで五億円を稼げる女になったよ！

凄いやね！

トリエスに口座間の振替手数料が無料な三菱東京UFJ銀行があればいいのに！

私ってば絶対送金したよ！

そうしたら、ママがいつも頭を悩ませている住宅ローンが完済できるのにね！

ボーナス時併用返済なんかにしなれば良かったのに、ってパパに文句言ってたしさ！

ねえ、頑張つて異世界に支店を作つてよ、三菱東京UFJ銀行！

ママの為にね！

「判った」

そう言い残して、陛下は青薔薇庭園を後にして、護衛のグイードさんと共にお城へと消えて行った。

それを私と食卓の上に居るウオちゃん、ヘロルドさん、マリリン

とで見送る。

すると、同じく見送っていたディルクさんが、腕を組んで何やら唸りだした。

「うーん、なんだかなあ」

「どうしたんですか？」

「いえね、なんと言うか……うーん」

聞いても意味不明な事しか口にしないディルクさんは、暫く、ウンウンと唸り続けていた。

… 105 (後書き)

口座間の振替手数料が無料 … いろいろと制限があります。

後書きにご興味がございます方は、サイトのBlogの以下まで。

<http://memo.usankoo.com/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7539r/>

陛下と私

2011年11月2日01時53分発行